
武装召喚師 黒き矛と異世界の勇者

雷星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装召喚師 黒き矛と異世界の勇者

【Nコード】

N8313L

【作者名】

雷星

【あらすじ】

門を潜り抜けると、そこは異世界だった。

かみや・せつな
神矢刹那は、ごく普通の高校生だった。

しかし、アズマリア^{II}アルテマックスにより異世界イルス・ヴァレに召喚されたことで、武装召喚術という能力に目覚め、黒き矛の使い手となった。

異世界に解き放たれたセツナは、武装召喚師ファリア^{II}ベルファリアと出逢い、小国ガンディアの若き王レオンガンド・レイ^{II}ガンデ

イアと知り合うことになる。

バルサー要塞奪還戦で一騎当千の活躍を見せたセツナは、その力を欲したレオンガンドと君臣の契りを結ぶのだった。
そして舞台は、動乱のログナーへ。

第一部 黒き矛のセツナ「第七十三話 武装繚乱（前）」更新 2
011・10・21

プロローグ

空は、曇天。

鉛色の雲が幾層にも折り重なって、分厚い天蓋を形作っている。まるで、この地の獄の如き世界から、誰の魂も逃すまいとしているかのようなだった。

夏の熱気を帯び始めた風は、軽く、すべてを包み込むように流れていく。もつとも、そんなものはなんの慰めにもならない。

前方には果てしない大地がその無尽の広がりを見せつけるように横たわり、背後には、壮麗にして豪華な城門がその絢爛たる美しさとは裏腹に、わずかな外敵の侵入さえも怖れるように固く閉ざされていた。

無論、城門の役目としては正しい。文句のつけようがない。なにひとつとして間違っではないのだ。

彼は、背後に立ち尽くす城門を仰いだ。金剛石で作られたという門扉は、優美にして華麗な装飾が施されたその外観からは考えられないほどに堅牢にして強固であり、どのような攻城兵器の猛攻にも耐えられると信じられていた。

確かに、どんな物理的衝撃を受けても、びくともしないのだ。それは、原初より定められた絶対の約束に違いない。見るものにそう確信させるほどに、門扉の持つ威圧感は圧倒的だった。

(門扉だけは、な)

彼は微かに笑うと、改めて前方に向き直った。

どれほど激しい戦争が起ころうと、戦火に飲まれようと、城壁が破られ、城塞が砕かれようと、屍の山が築かれ、血の河が流れようと、この門扉だけは無事なのだろう。

そしてそれは、たった今から証明されるはずだ。

激しくも重厚でありながら、神経を逆撫でにするようなけたたましさを秘めた交響曲の如き騒音が、遙か前方から近づいてきていた。

幾万もの軍靴が刻む、戦の旋律。

その速度たるや慄然たるものであり、さすがの彼も、目を丸くした。

（早っ！）

だが、いくら驚いたところで、目の前の現実には覆らない。

荒野の果てに、黒々とした土煙がもうもくと立ち込めていた。夥しい数の人間が、想像を絶する速度で、こちらに接近してきているのだ。

それは、敵国の軍勢で間違いないのだが、徒歩ではあり得ないくらいに行軍速度だった。騎馬だとしても、あれだけの数の馬をどうやって用意するのだろうか。

「ま、いいわ」

彼は、口に出してつぶやくと、急速にこちらとの距離を詰めつつあるそれらに対し、不敵な笑みを浮かべた。

いつものように。

傲岸不遜。

それが彼を定義する言葉であり、まさに彼そのものだった。

彼は、駆け出した。前方へ。敵の軍勢は、その先頭をひた走る兵士の、深紅の甲冑の形状が目視で確認できるほどの距離にまで来ていた。その紅き甲冑は、一角獣の如き突起を備えた兜からユニコーン・ヘッドとも言われるらしい。ともかく、重装備とは思えないほどの速さで先陣を切るその兵士は、美々しく飾られた長槍を手にしていた。

彼は、口の端に笑みを刻んだ。頭上に右手を掲げ、告げる。

「武装召喚！」

彼の全身が眩い光に包まれたかと思うと、次の瞬間、天に捧げるかのように差し出した右手の内に、漆黒の矛が現れたのだ。歪な、そして見るからに禍々しい矛は、さながら血を求めるかのよう

に鈍い輝きを発した。

何の躊躇もなくその矛を握ると、彼は、もはや五メートルほどの距離にまで接近していた深紅の敵兵へと突っ込んでいた。間合いは、瞬く間になくなる。矛の刃が届く距離へ。

「さよならっ！」

彼は、右腕だけで、矛を一閃させた。大振りながら神速の斬撃は、敵兵に反撃の機会はおろか、後悔の暇さえ与えなかった。甲冑ごとき意図もたやすく両断してみせる。抜群の手応え。血を噴き出しながら転倒し、ただの肉塊と化したそれに一瞥をくれることもなく、彼は、凶暴な笑みを浮かべた。

雲霞の如き敵兵が、視界を埋め尽くしていた。それら敵兵のほとんどは、先陣の兵士とは異なる、角のない緑色の甲冑を纏っている。得物はそれぞれ異なっている様子だったが、彼には関係のない話だった。だれがどんな武器を持っていようが、どうでもいいのだ。

ただ、踊るだけなのだから。

地を蹴り、彼は、侵攻を開始する。そう、迎撃ではない。これは侵攻なのだ。

長槍を手にした先頭集団を、矛の一薙ぎで、事も無げに打開する。ただ、一閃。しかも片手だけで、である。それは、彼の常軌を逸した膂力だけでは考えられない力であり、彼の手にした矛に秘められた力であることは疑いようがなかった。

もちろん、彼とて、そんなことは理解していた。

(十人か)

彼が胸中つぶやいたのは、先の一薙ぎによつて死体と化した兵士の数だ。みずからの目で確認したわけではない。手応えだけで、そう判断した。必ずしも間違いはないのだろうが、だからといって確信があるわけでもない。とはいえ、すぐさま思考を切り替える。怒涛となつて押し寄せる敵軍の最中なのだ。

いや、そもそも怒涛の如く押し寄せる幾万の軍勢の中で、たったひとり矛を振り回したところで、なんになるというのか。彼と矛の

尋常ならざる力が、ただの一振りで、十人もの敵兵を殺した。だが、だからどうしたというのか。

相手は数万、こちらはひとり。

焼け石に水ですらない。

(まったく、その通りだ)

彼は、自嘲気味に笑うと。眼前の死体が崩れ落ちるのを待たなかった。なんの逡巡もなしに、跳躍する。驚異的な脚力が、彼の肉体を中空へ運んだ。軽やかな大気の中へ。眼下には、想像を絶するほどの大軍勢が犇めき合い、緑色の津波となって城門へと押し寄せていく。

が、彼には、敵軍の侵攻を阻む手段も算段もなかった。硬く閉ざされた門扉は、敵軍の侵入を許しはしないだろうが、城壁は、どうか。無論、城壁とて堅固なことこの上ない。しかし、それは敵軍も承知のはずだ。承知の上で、攻め込んできた。手段があるのだ。つきつと。

彼は、いまだ中空。敵軍の真っ只中で、空中に飛び上がるなど、冷静に考えれば正気の沙汰ではなかった。空中で自由に動き回ることなどできるはずがないのだ。敵にとっては、いい的に違いなかった。落下地点の予測など、容易い。

普通ならば。

「閃撃の」

彼は、矛を頭上に掲げ、旋回させた。高速回転する矛の切っ先に、淡い光が灯った。その輝きは、旋回する速度が増すごとに、強く、激しくなっていく。彼の肉体が地面へと落下を始めた頃には、目が眩むほどに鮮烈な光輝となっており、眼下の敵兵たちの視覚を狂わせていた。

降下の最中、彼は、視界の真ん中で、こちらを見据える兵士に気づいた。彼の落下予定地点で、長剣を構えている。どういう原理か、目くらましは通用しなかったらしい。彼は、胸中で凶悪な笑みを浮かべた。

それがどうした。
叫ぶ。

「ライトブリンガー！」

着地より速く 敵兵が反応すら暇すら与えず、彼の矛の純白に輝く切っ先が、敵兵の緑の兜を貫いていた。頭蓋を破り、脳髓を破壊し、脳漿と血液を撒き散らしていた。瞬間、矛の穂先に灯つていた光が、急速に膨張した。

爆発的な勢いで拡散する光は、兵士の肉体を甲冑もろとも爆裂四散させた。目に痛いばかりにあざやかな爆発光の中で、甲冑の破片が彼の右頬を切り裂いたが、言うなれば、目に見える彼自身の被害はそれだけだった。

着地して、彼は、周囲に一定の空間があることに気づいた。彼を中心とする一定の範囲が、緑の津波の中にあつて、一種の空白地帯になつていた。その範囲とは、もちろん、矛の届く距離に違いなく、なんとか矛の切っ先が到達するであろう間合いには、だれひとりとして立ち入ってこなくなつていた。

ただし、地面は見えない。

先ほどの爆発に巻き込まれた数十名の兵士の亡骸が、地を塗り潰すように横たわつていたからだ。血の赤と、鎧の緑で。

敵兵たちが、彼の攻撃範囲外に包囲陣を構築したのは、迅速で精確な判断だったかもしれない。あの爆発を見て、なんの対策も取らないのは愚の極みだ。

とはいえ、彼は、笑みを消さなかった。

一步、進む。

「！」

と、包囲陣もまた、一步、進んだ。だが、津波のような大攻勢の最中だ。陣形を崩さずに一步進むだけで、相当な苦勞が見て取れた。その様子が、彼の嗜虐心に火をつけようとするのだが、頭を振って、煩惱を振り払う。

いまは、眼前の敵陣に集中しよう。

そして、彼は、地を蹴った。

「!？」

前方の敵兵が驚愕に目を見開いたのが、彼の網膜に焼きついた。なんの予兆もなく、一足飛びに間合いを詰められれば、だれでも驚くのもかもしれない。彼だって、敵軍の行軍速度には驚いたものだ。

「瞬撃の」

彼は、敵兵の眼前で、囁くように告げた。

「デスプリンガー」

突き出した矛が、敵兵の胴体を突き破り、さらに、その後方の兵士の腹に突き刺さったのを手応えとして認識する。そのまま、矛を右へ薙ぎ払い、周囲の敵兵を纏めて吹き飛ばす。悲鳴やら罵声が聞こえた気がしたが、彼は、幻聴と決め付けた。

ふたたび、侵略に乗り出す。

眼前に生まれたわずかな空隙は、瞬く間に緑の甲冑に埋め尽くされたが、彼は、特に気にも留めなかった。矛を旋回させながら頭上に掲げ、さらに回転速度を上げていく。周囲の敵兵がどよめいたのは、先ほどの爆発を想起したからに違いない。

彼は、笑った。

敵兵が、我先にと飛び掛ってきたからだ。それは、間違いなく、矛の回転を止めるためだろう。広範囲の兵士を殺傷する力だ。そんなものの完成を見守る馬鹿がどこにいるというのだろう。だが、彼が、そんなものを完成させるつもりもなかったという事実には気づいたものが、どれほどいたのだろうか。

背後からの兵士の槍による突きを見事な体捌きでかわすと、彼は、透かさず矛を振り下ろした。敵兵の肉体を鎧もろとも両断する。血潮を浴びながら、さらに右前方からの突撃に対応するように矛を突き出し、兵士の頭を粉碎する。すぐさま頭部から穂先を抜くと、頭上を仰ぐ。槍を手にした敵兵が三人、一斉に飛び掛ってきていた。無茶だ。

微笑だけを投げ返す。

彼は、後方に飛び退くと、背後から迫ってきていた殺気に反応した。振り向きざまに矛を薙ぎ払い、敵兵五人の胴体を斬り裂いた。鮮血とともに倒れ伏す五人の後方から、その亡骸を飛び越えてきたのは、両手剣を手にした大男。野獣の唸り声のようなものを上げながら、襲い掛かってくる。

(ツヴァイハンダーかあ)

大男が振り被った、刀身が身の丈ほどもある大剣には、ある種の憧憬を抱かざるを得ないだろう。彼は、鍛え上げられた両手剣の、剛毅で野生的な面構えにただ見とれた。

「おおおおおおおおお！」

野獣の咆哮の如き雄叫びで、彼は、我に返った。両手で握られた大剣が、全力で振り下ろされた。物凄まじい破壊力を秘めた一撃は、しかし、彼の肉体を肉塊にするようなことはなかった。大男に比べれば、子供同然の彼の体躯は、既に上空にあった。

両手剣に心奪われても、肉体は、歴戦の記憶が支配していた。いつの間にか回転させていた矛の切っ先に、強大な力が渦巻いている。

「嵐撃の」

彼は、大男を見据えた。空振りした両手剣は、大男の前方の地面に大穴を空けていた。それだけではない。どうやら、数名の兵が巻き込まれてたらしい。三人の死体が見えた。全員、槍を手にしていく。さきほど、空中から躍りかかってきた連中だろう。

彼は、矛の旋回を止めると、眼下に向かって投げつけた。

「ストームブリンガー！」

矛は、両手剣を掲げようとした大男の足元に突き刺さった。

瞬間、嵐が生まれた。穂先に蓄積された力が解放されたのだ。嵐の力。暴虐極まりない風の力は、多重螺旋を描きながら拡大し、大地を掘削し、死体を吹き飛ばし、大男を切り刻んで薙ぎ倒し、周囲の何百という敵兵を巻き込んで、さらに成長していった。

暴走する旋風がもたらすのは、破壊。圧倒的な破壊の力が、周辺に徹底的な破滅を叩き付けていく。暴風の前では敵兵の鎧など意味

をなさず、もろともに吹き飛ばされ、どこから飛んできた仲間とぶつかって、命を落とす。

幾多の死が、嵐の中で生まれた。

彼は、嵐の中心に着地すると、もはやすべての力を解き放って抜け殻のようになった矛を、地面から引き抜いた。破壊の嵐は、じきに止むだろう。なにより、矛の周囲が無風状態になっていたことが、その証明だった。

嵐が止み、雨が降り出した。

おびただしい死の雨が。

嵐に飲まれ、天高く運ばれた数百の兵士が、死体となって降ってきたのだ。まさに死の雨であろう。そして、その死の雨に打たれ、命を落とすものたちもいた。暴風圏外にいた兵士たちである。

彼の力で、どれだけ敵兵が死んだのだろう。五百はくだらないはずだ。だが、それでは、足りない。数万の軍勢を突き崩すには、足りない。このままでは、城壁が打ち破られ、城砦が落とされてしまう。

(それはそれでいいんだが……)

彼は、矛を軽く振り回すと、前方に向かって駆け出した。城砦が落ちたところで、なにも構いはしないのだ。むしろすつきりしているのかもしれない。だが、なにかが釈然としなかった。

(要するに、気に食わないのか?)

自問とともに、眼前の敵兵を縦一文字に両断する。死体を押し退け、つぎつぎと敵兵を殺戮しながら突き進む。どこからともなく飛来した矢を、矛の石突きで破壊し、そのまま矛を旋回させて周囲の兵士を一網打尽に薙ぎ払う。ふたたび、矢。

「！」

彼は、左手を眼前に翳した。刹那、激痛が掌に生じた。矢が掌に突き刺さり、鏃が、手の甲を突き抜けていた。目の前、血が流れた。「そこまでだよ、セツナ」

聞き知った少年の聲が高らかに響き渡ったのは、なんの冗談だっ

たのдарろう。

彼は、激痛に顔を歪ませたまま、左手を視界から退けた。前方、緑の津波が真つ二つに割れていた。そう、まるで聖者の通り道のよう。

幾万の兵士たちは、整然と隊伍を組み、身じろぎひとつせず、その聖者の到来を待ちかねているかのようだった。

彼は、絶望しかけていた。なぜかはわからないが、圧倒的な敗北感が、彼の胸中に到来していた。

神聖な光輝だったのだ。前方、緑の津波の彼方から歩み寄ってきたのは。

「君の夢は、ここで終わる」

「かみや・くおん守家久遠……！」

かみや・せつな神矢刹那の目覚めの一言は、絶叫とも慟哭とも取れた。黒髪の、野生的な顔立ちの少年である。世にも珍しい深紅の瞳は、血のように紅いなどといわれることもあるが、本人は気に入っていた。太っているわけでもなければ、やせているわけでもない。極めて、平均的な体型だった。

彼は、天井の木目を睨み据えた。ひどい悪夢だった。半年前に失踪した友人に、活躍を阻まれる夢。そんなものが、いい夢であるはずがない。

彼は、嘆息とともにベッドから飛び降りた。今日は平日だ。悪夢に氣をとられている場合ではなかった。早く用意して、学校に行かなくてはならない。気が重い、それが子供の数少ない義務なのだ。それくらいは果たさなければならぬ。

ゆっくりと伸びをして、セツナは、壁にかかった時計を見遣った。

デジタル時計は、午前八時を表示していた。

「!？」

彼は、愕然とした。悲鳴を上げる。

「遅刻じゃねーか!？」

それは、絶望に似ていた。

セツナが悪夢を見るようになって、どれくらいたつのだろう。少なくとも、クオン失踪以前にあのようなくだらない夢は見たことがなかった。むしろ現実のほうが悪夢のようであり、夢は、楽園のようなものだった。どんな悪夢であれ、当時の現実には比べればマシだったのだ。

セツナにとっては、だ。他人からしてみれば、どうでもいいことには違いない。そんなことは彼にだってわかっていたし、故に、だれにも言わないのだ。小さな拘りに過ぎない。だが、それが、それだけが。セツナがセツナ足りうる所以のような気がしてならなかった。

ともかく、悪夢。

初めて見たのは、守屋クオンが失踪して、しばらくしてからだったはずだ。

悪夢の筋書きは大体決まっている。セツナが、どこもしれない場所で、大量の敵と戦うといものである。数多の敵との戦闘は気分爽快そのものであり、そこだけを切り取って見ることができれば、彼は歓喜でむせび泣くかもしれない。

だが、夢の終わりは、いつだって最悪だった。

守屋クオンの妨害によって、目が覚めるのだから。

(クオン……おまえがなんで)

セツナは、自転車を全力でこぎながら、胸中でうめいていた。自問したところで、答えが沸いてくることなどありえないのだが、それでも、疑問を浮かべるしかなかった。何度も、何度も、同じよう

な夢を見ている、

さすがに苦痛になりつつあった。
と。

「え？」

それは、彼が、赤信号に阻まれる格好で停車し、ふと頭上を仰いだときだった。

空は、晴天。気持ちいいくらいに晴れ渡った蒼穹には、雲ひとつ見当たらず、朝の爽やかな日差しが、どうしようもないくらいに素敵だった。

問題は、だ。

「門……？」

蒼空に浮かぶそれは、夢に見た城門に良く似ていた。金剛石の門扉を持ち、絢爛豪華にして堅牢強固たるあの城門に。

そしてそれは、急降下してきたのだ。

「えええっ!？」

さすがの彼も、素つ頓狂な声を上げるしかなかった。高校へといたる通学路の、交差点である。幸い、通学中の学生の姿はないが、だからといって通行者がいかにわけではない。あからさまに白いまなざしを注がれて、彼は、赤面した。

だが、驚愕するしかなかった。

巨大な城門が、空から降ってきたのだ。

それは、セツナが驚きの余り硬直しているうちに、彼の前方に降り立ったのだった。周りの建物よりも遥かに大きな城門は、しかし、音もなく、その美々しく飾り立てられた門扉を見せ付けるように着地した。

彼は、想像を絶する事態に思考停止に陥りかけた。頭の中が、一瞬、真っ白になったのだ。だが、すぐに自分を取り戻す。と同時に、彼は、周囲が異様な空気に包まれていることを感覚だけで理解した。当然だろう、と思う。

門が降ってきたのだ。

恐慌状態にならないほうがどうかしている。

(つまり、俺はどうかしているんだな)

自嘲とともに、認める。どうかしているから、あの夢を悪夢と結論付けるのだろう。

セツナは、周りを見回して、ふたたび驚愕した。

「なっ!?!」

だれもいなかったのだ。

ひとつこひとり、見当たらなくなっていたのだ。さっきまで、だれかしら存在していたのに。彼に白い視線を送った人物がいたはずなのに。

見慣れた通学路の風景に、突如として生まれた違和感　その原

因は、空から降ってきた城門に違いなかった。

彼は、改めて城門を仰いだ。夢で見た、あの城砦を難攻不落たらしめたはずの城門そのものであり、寸分の違いも見つけられなかった。記憶に齟齬がなければ、のはなしだ。

セツナは、自転車をその場に留め置くと、門へと歩み寄った。それは、交差点の横断歩道　車道の真ん中に降り立っていた。

(こりゃあ、夢だな)

夢から覚めたと思ったらまだ夢を見ていた、という話はよくある。セツナは、決め付けると、荘厳にして流麗な門扉に手を触れてみた。ひんやりした感触が、掌から全身に伝わっていく。どこか、鮮烈な刺激だった。いままで感じたこともない類の感覚。

セツナは、目を細めた。

これは、夢ではないのかもしれない。

漠然と、考えを改める。

だが、夢であろうがなかろうが、やることは決まっているのだ。

セツナは、門扉を押した。門扉は、その重厚な見た目とは裏腹に、極めて軽く、セツナがほとんど力を込めずとも、開いた。

「!?!」

その瞬間、光の洪水が、セツナの網膜を塗り潰し、意識を染め上

げ、感覚を遮断していった。

第一話 おいでませ異世界

それは、光の螺旋だった。

網膜を塗り潰し、意識を染め上げ、感覚を断絶したものの。

なにもかもが真っ白になった直後に訪れたのは、無音の暗黒であり、どうしようもない孤独や抗いようのない恐怖が、彼の胸中に生まれては消えた。

ただ、絶望はしない。希望など抱きようもないが、それでも、望みは失われてはいなかった。

断絶され、散り散りになっていたものが、ゆっくりとだが確実に集まり、繋がっていく。

復活するのは感覚。

想像を絶するほどの凄まじい痛みが、意識の内外で暴れ回った。なにが起きたのかなど、彼に理解できるはずもない。すべて、彼の理解の外の出来事だった。

彼は、とにかく、絶叫していた。全身を切り刻まれたような痛みの中で、大口を開けて、叫び続けていた。そうでもしなければ、頭がどうにかなりそうだったのだ。泣いてすらいたのかもしれない。

そして、突如として、視界が開いた。

「……………」

セツナは、眼前に広がった景色よりも、激痛が消え去ったことに、半ば呆然としていた。直前まで全身を苛んでいたはずの激痛が、嘘のように消えたのだ。実に爽快な気分だった。いますぐにでも走り出したいくなるような衝動を、辛うじて抑える。

いまは状況を確認しなければならぬ。

彼は、改めて、前方を見た。いや、さっきから見ているのだが、どうも釈然としないものがあつた。なんともいえない、微妙な気持ち。それは、セツナひとりでは処理できそうになかった。

森、であろう。

眼前に並び立つのは無数の木々であり、名前も知らない歪な樹木たちは、陰鬱な表情でも浮かべているかのようですらあった。鬱蒼たる森に陽光の差し込む隙など見当たらず、枝葉の天蓋が作り出した陰は、この森になにも知らない人間が立ち入ることを警告しているかのようだった。

とはいえ、それはどうでもいい。いまさら警告されたところで、対処のしようがないのだ。そもそも、セツナは直前まで、学校の通学路にいたはずなのだ。大いなる清流を抱く宇津川市の、見慣れた町並みの中にいたのだ。

「なんだ？」

セツナが、怪訝な表情になるのも無理はなかった。前方にひとつだけ、抜きん出て大きな木がある。その太くたくましい枝に、垂れ幕のようなものがかけられていたのだ。その華々しく飾り立てられた垂れ幕には、やたらに難解な文字が書き知るされている。

セツナは、目を凝らした。影の中、文字の形を把握することはかなり難しい。しかし。

「……！」

垂れ幕と睨みあっていると、セツナの脳裏になにかが閃いたのだ。それは、セツナに垂れ幕に記された文字を、瞬く間に把握させた。難解なものと思われた文字は、よく考えれば、極めて平易な文字であり、簡素な言葉だった。

「おいでませ異世界……？」

読み上げて、セツナは、苦笑した。意味がわからない。無論、それは現状のすべてに対して言えることだ。空から門が降ってきて、扉に触れた瞬間意識が飛び、激痛の後に森の中で目を覚ます。そんなことが理解できるはずがなかった。

夢ならば、この状況にも納得はできる。

が、夢ではないような気もしていた。

「夢だよ、夢、夢」

セツナは、乱暴に決め付けると、周囲を見回した。木々は、周囲

三六〇度を囲うように並び立っており、セツナの周囲だけが、広場のような空間になっていた。とはいえ、頭上から木漏れ日ひとつ落ちてこないのは、木々の枝葉が絡み合って、強固な屋根を形成しているからかもしれない。

森の中はひっそりとしていて、動物の鳴き声や物音はまったく聞こえなかった。ひんやりとした空気のみが、重く沈んでいくかのよう流れている。

「夢ならば」

「!?!」

唐突に響いた声に、セツナは、脊椎反射で振り返った。圧倒的な沈黙が、突然破られたのだ。セツナとて、肝を冷やさないとはいえなかった。

「夢ならばよかったか？ 少年」

それは、女の声のようだった。妖艶な、とでもいうべき低く美しい調べ。その声音は、どこか淫靡ですらあった。聞くものに性的興奮を覚えさせるような、そんな音色。

それは、セツナの認識であり、彼は、みずからの認識通りに反応しかけた肉体に頭を抱えなくなっていた。が、もはやどうすることもできない。彼は、苦虫を噛み潰したような表情になりながら、その声の主と対面した。

「どっちでもいいや」

適当な返事を浮かべながら、観察する。

それは、女だろう。長身の女。深紅の衣で全身を覆ってはいるものの、その肉感的な肢体を隠すには不十分すぎた。いや、そもそも顔からして女そのものではあった。しかし、悲しいかな、セツナは男だ。最初に胸に目が行くのは仕方がないだろう。豊満なバスト、腰から臀部、太腿に至るラインは、どうしようもなく刺激的だった。

（俺の馬鹿……）

胸中でみずからを唾棄することくらいしかできず、セツナは、途方にくれかけた。これでは、目の前の女の話に集中することもでき

ない。

「ほう？」

女の双眸が、妖しく輝いた。それは、とても美しい瞳だった。黄金の虹彩。森の闇の中でも、夜空を切り裂く月のように光って見えた。長い睫がその両目を縁取り、形のいい眉と鼻、白い肌が、彼女の美貌を引き立てていた。肉厚の唇は見るからに柔らかそうであり、だれであれ吸い付きたくなるのではないかと思うほどだった。

その女神の如き容貌を彩るのは、真紅の頭髪だった。燃え盛る紅蓮の炎のようであり、流れ落ちる数多の血潮のようでもある。

「夢であるうと現であるうと構わない、と？」

セツナは、女に問いかけられても、すぐには返答できなかった。

彼女の扇情的な肢体から視線を移したものの、今度は、そのあまりの美貌に見惚れてしまったのだ。頭がぼーっとしていた。まるで熱に浮かされたかのように。

それは、恋、という感情に似てはいたが。

「ん……？ どうした？」

こちらの様子のおかしさに気づいたのだろう。

女が、歩み寄ってきた。言うなれば美女である。間違いなく、セツナがいままで出逢った女性の中で、あるいはテレビや雑誌のグラビアなどで見た女性たちの中で、もっとも美しい女性だろう。確信する。が、だからといって、どうしようもないこともわかっていた。この感情は、恋などではない。

セツナは、断言とともに、頭を振った。幾分冷静さを取り戻すと、思考が急速に鮮明になっていくのがわかる。

「いや、なんでもない」

セツナは、右手を掲げて、女の接近を拒んだ。美女と間近でおしゃべりするのは実に幸福なこともかもしれない。だが、なにかがおかしい。どこかが奇妙だ。拒絶しなければならぬ、そんな気がした。さっきまでとは違う感覚の中で、セツナは、女が軽く微笑を浮かべるのを見ていた。

「よかった」

言葉の意味はわからなかったが、セツナは、絶世の美女の笑顔に自分の心がときめかないことに気づいた。さっきまでの自分なら、一撃で落とされていたかもしれない。それほどの破壊力を秘めた微笑だった。さながら、天使のような。

「なんなんだ？ いったい」

セツナは、改めて女を見遣った。確かに肉感的で扇情的な肢体であることは、その紅の衣の上からでも把握できるのだが、それだけだった。セツナの体は反応しなかったし、なにより、冷静でいられることができた。さっきまでが異常すぎたのだ。

「勝手ながら、試させてもらったのだ」

事も無げに、女。既に微笑は消えているものの、その美しさにはなんの遜色もない。美貌自体は最初から変わらないのだ。ただ、美貌以外の何かが、セツナの思考力を奪ったと考えるのが妥当だろう。それは、女の「試した」という言葉と関係があるのかもしれない。

「なに？」

セツナは、言い知れぬ不安を抱き始めていた。重圧を感じていた。さっきまでの女とはまったく異なる人物と対峙しているような感覚さえあった。漠然とした違和感は、急速に膨れ上がっていく。

「召喚した人間が使えるものなのかどうか調べるのは、当然といえは当然だろう？」

女は、笑いもしない。彼女にとっては当たり前のことを話しているだけなのだろう。それは構わない。だが、セツナには理解しきれない言葉だった。

「召喚……？」

無論、言葉の意味はわかる。彼女がなにをいいたいのかわからなくはない。しかし、即座にすべてを鵜呑みにできるはずもない。納得などできるわけがない。

「そつだ。わたしがおまえを召喚したのだ。この幻想領域へ。イルス・ヴァレへ」

女の断言に、セツナは、はつと目を見開いた。視界が急速に狭く
なっていく。なにが起きたのか、まったくわからなかった。ともか
く、狭い視野に映るのは、真紅の女ただひとりだけだった。

「わたしは、アズマリア^{II}アルテマックス。おまえは？」

彼女　アズマリア^{II}アルテマックスの問いには、抗しきれない
なにかがあつた。例えばそれは魔力とでもいうべきものなのかもし
れず、あるいは単純に迫力や威圧感といつてもいいものなのかもし
れない。

セツナは、我知らず口を開いていた。

「俺は……セツナ」

答えなければならぬ　そんな確信が、彼を支配していた。

「^{かみや・せつな}神矢剎那だ」

それは、産声なのかもしれなかった。

第二話 勇者・英雄・豪傑の類

理不尽な としか言いようのない状況の中で、セツナは、アズマリア「アルテマックスの言葉を待っていた。見知らぬ森の中。陰鬱な冷気が、ただただ密やかに流れている。生き物の気配や息遣いはまるでなく、息苦しいほどの沈黙が、その森を支配していた。

乱立する木々もまた、風に揺れてざわめくようなことすらしない。奇妙なまでの静寂は、やはり、この森の異常性を訴えているのかもしれない。言うなれば、危険信号。

（馬鹿馬鹿しい）

セツナは、頭を振ると、くだらない考えを頭の中からかき消した。森が、いったい誰に向かって危険信号を発するというのだろう。迷い込んだ人間に対してか？ 森が 森を形成する木々や植物が、人間に対してそこまでするいわれはない。人間がどうなろうと、知ったことではないはずだ。

「さて、セツナ「カミヤ。おまえはわたしの召喚に応じ、この世界に現れた。それは理解しているな？」

「いや、全然」

セツナの即答には、さすがの美女も表情を歪めてきた。しかしながら、絶世の美貌は、多少崩れたところで絶世の美貌に変わりなかった。完璧、というのとは少し違いかもしれないが、彼女の容貌は、非の打ち所のないものであり、だれが見ても、美女だと答えるだろう。それは、セツナにも否定できないし、元より、否定するつもりもない。

「そもそも召喚ってなんだよ？ 俺はあんたに召喚されたのか？ 魔法か何かで」

問い詰めるような口調になりながら、セツナは、それはあまりにも馬鹿げた話だと思った。アニメやゲームにありがちな話ではあるし、ファンタジーは嫌いではない。そういったものにはまりかけた

こともある。

現実逃避の手段として。

しかし、現実にそんな事態が我が身に起きるなど、だれが考えよう。そして、起きたとして、だれがすぐに受け入れよう。やはり、夢であってくれたほうがいいのかもしれない。少なくとも、わけのわからない異世界にいるよりは、つまらない現実でどうしようもない毎日を送るほうが、ましなような気がした。

「そうだ。わたしの召喚武装の力によって、な」

特に誇るでもなく、彼女。声音が極めて事務的に聞こえるのは、どうということなのだろう。まるで、何回も何回も同じような対応をしてきたかのようにだった。そしてその考えは、あながち間違えてもないのかもしれない。

「召喚武装……？ またまたわけのわからんことを」

つぶやきながら、セツナは、夢の一場面を脳裏に思い描いていた。敵の大軍勢を前にした彼は、なにか重要な言葉を叫んでいた気がした。その言葉ののち、武器を手にし、数多の敵を相手に大立ち回りが、それが、悪夢の前半部である。つまり、まだしも良い夢と呼べる部分だ。

もつとも、なんの逡巡もなければ呵責ひとつなく数多の命を薙ぎ払うのは、ある種快感ではあるものの、冷静に考えれば恐ろしいことこの上ないのだが。

それは、セツナにだってわかつている。

「おまえは《門》を知覚し、視認したはずだ。《門》に触れ、開いたはずだ」

「あの城門のことか？ 金剛石の……」

「材質や形状は知らん。どうやらわたしの《門》は見るものによって形を変えるらしいからな。ともかく、おまえはその《門》を潜った。そうだな？」

「そう……なるのか？」

アズマリアの言葉を肯定しながらも、セツナは少しばかり首を傾

げた。あの空から降ってきた城門を潜る寸前、意識を失ったのだ。記憶の中では、門扉を開いただけなのだが。しかし、現状を鑑みれば、門を潜り抜けたことに間違いないようではある。

「つまりおまえはわたしの召喚に応じたのだ」

「そんなつもりはなかったんだが」

実を言えば、好奇心に駆られただけなのだ。眼前で繰り広げられた夢か幻のような出来事に対し、黙殺するなどという勿体無いことは彼にはできそうになかった。

「いまさらなにを言っている。応じるつもりがなければ、《門》など無視すればよかったのだ。そうすれば、おまえはおまえの世界で、いつも通りの生活を続けることができた」

「警告もなにもなかったじゃねえか。ただ、降ってきただけだぜ？」

あんたの《門》ってやつ」

セツナの脳裏には、あざやかな青空から降ってきた巨大な城門が浮かび上がっていた。金剛石で作られた絢爛豪華な門扉は、見るものを圧倒した。とはいえ、その門を見ていたのはセツナだけらしかったが。

「存在そのものが警告だろう？ それに、突然どこからともなく得体の知れぬ《門》が現れて、透かさず押し開くようなものに対し、どのような警告ができる？」

「むう。確かに」

ぐうの音も出ない。もし、あの城門がなんらかの警告を発していたとしても、彼は、躊躇すらずに門扉を押し開いたかもしれない。少なくとも、無視するようなことはないだろう。退屈極まりない日常に訪れた変化を見逃すようなことだけはしたくなかった。

そして、激変は訪れた。平穏な日常は過去のものとなり、なにがあるのかわからない、異世界などという領域に足を踏み入れてしまった。

無論、後悔はなかった。いまのところは、だが。

「よし。俺はあんたの召喚に応じた。それは理解したし、認めるぜ。」

で、あんたはなんで俺を召喚したんだ？ なにかしら理由があるんだろう？」

セツナは、ある種の期待とともに、アズマリアの返答を待った。他人への期待はいつだって裏切られるもの。それは彼の人生哲学のようなものに違いなかったが、しかし、この場合は期待を抱かすにはいらなかった。

ありふれたファンタジーの中に身を置いているのだ。

「理由……か。考えてもみなかったな。召喚するのに理由がいるか？」

彼女の残念すぎる反応に、セツナはその場でこげかけた。失意と絶望のどん底に落ちそうになりながらも、辛くもその場に踏み止まる。絶望するのは、いくらなんでも早すぎるだろう。それでも軽い眩暈と深い後悔を覚えずにはいられないのは、セツナが、まだしも夢見がちな少年だったからかもしれない。

一応、突っ込んでおく。

「いや、いるだろ」

「ふむ……話相手がほしかったから、では駄目か？」

小首を傾げて、彼女。その仕草や表情は、なんとも言えない愛らしさに満ちており、その瞬間は美女というよりも美少女といったほうが正しいように想えた。可憐な美少女。上目遣いで見つめられれば、だれだって胸の高鳴りを覚えるに違いない。

しかし、いまのセツナには通用しなかった。にべもなく告げる。「絶対違うし」

それほどまでに、彼の胸中に去来した失望感は大きかったのだ。

それは、彼自身驚くほどのものであり、アズマリアの口から語られた《異世界》や《召喚》という単語にどれほどの幻想を抱いていたのか、考えるまでもない。

だが、それでも。

それほど状況にあっても。

「年下の恋人がほしいの？」

胸の前で手を組んで、あまつさえ瞳をきらめかせてきた美女に対し、セツナは、危うくノックアウトされるところだった。とろけるような甘い声は刺激的にもほどがあつたし、なにより、その媚態である。圧倒的な破壊力を秘めたそれは、世界から争いを根絶する最終兵器のようであり、あるいは、世界の終焉を告げる最終戦争の引き金のようにすらあつた。

その威力は、きっと老若男女問わず発揮されるだろう。

そんな確信とともに、セツナは、齒噛みした。強烈に反応する自身の肉体を侮蔑することなどできない。若さゆえ、と吐き捨てる必要もない。最初と同じだ。なんらかの力が働いているのだ。そう仮定して、彼は、なんとか言葉を搾り出した。

「そんな顔をしても駄目だぜ」

「冗談はここまでとして」

気がつくと、アズマリアは、さっきの媚態が嘘のように冷ややかな表情を浮かべていた。氷の仮面でも纏ったかのような無表情。セツナは、冷や水を浴びせられたような感覚の中で、急速に興奮が収まっていくのを認めた。

「実のところ、本当に理由と呼べるものはない」

「なっ!?!」

それには、さすがのセツナも間の抜けた反応をするしかなかった。愕然と、頭をたれる。ついさきほど失望したばかりだというのに、やはり、希望は捨てきれいなかつたらしい。諦め切れなかつたらしい。しかし、ついに折れたセツナの心は、ぼろ雑巾のようにぼろぼろに朽ちかけていた。

「わたしは《門》の理解を深めるために力を行使したに過ぎない。つまり、おまえの召喚は偶然の産物なのだ」

断言されて、セツナは、呆然とした。もはや、夢と幻想はもの見事に打ち砕かれた。残るは、異世界などというわけのわからない現実だけが横たわっている。

「まじっすか……」

「なにを意気消沈している？ まさかおまえ、わたしに選ばれて召喚されたとも思ったか？」

笑うでもなく、アズマリア。

「いやいやいやいや！ そんなことあるわけないじゃないっすか！ これでもかというばかりに全力で否定しながら、セツナは、胸中で自嘲していた。いまさら否定したところでどうなる。相手は、すべてを見透かしているに違いない。その証拠に、アズマリアの黄金の瞳が、微笑した。

「ふふ。だが、案ずるな。わたしの《門》を知覚し、視認したということは、おまえにそれなりの資質があるということに他ならない」それは、光明のように見えた。

「資質？」

反芻しながらも、セツナは、表情ひとつ変えなかった。用心しなければならぬ。彼女の言葉に期待は禁物。それが、この数分で彼が学んだことのすべてだった。しかし。

「言うなれば勇者。あるいは英雄豪傑の類」

失意の間を切り裂くのは、一条の光。

「！」

セツナは、我知らず喜悦の笑みを浮かべていた。彼がずっと聞き取ったのは、そんな言葉だったのだ。それこそ、男子の本懐というべきか。いや、違いかもしれないが、異世界に召喚されたことに理由がなかったとしても、その言葉だけで救われた気がした。

光明が見えたのだ。

視野が、広がったのだ。

セツナは、ぐっと拳を握った。力が湧いてきたのは、気のせいではないはずだった。かすかな希望は活力となり、心の奥底からあふれ出して肉体を巡る。

と。

「わかりやすくいいな、おまえは」

アズマリアが、こちらを見て、微笑んでいた。それは、彼女と出逢ってからこれまでに見たこともないような笑顔だった。透明なそうとしか言いようのない、極上の笑み。それこそ絵になりそうな、しかし、額縁に収めてしまえばきつとその魅力は消えてしまうのだ。それは確信に等しかった。

そして、セツナは、その微笑にただ見惚れていた。邪心もなく、惚けていた。

「さて、勇者。あるいは英雄豪傑よ」

アズマリアの低い声音に、セツナは、現実には舞い戻った。夢でも見ていたような錯覚とともに、アズマリアの凍てついたような無表情と対面する。困惑する。どの表情が、彼女の正体なのだろう。彼女は何者で、本当はどういう理由で自分を召喚したのだろう。

(本当の理由……?)

セツナは、脳裏を過ぎった考えに愕然とする思いだった。アズマリアは確かに理由などないといったが、果たして、それは事実なのだろうか。セツナには言えない理由があるのではないか。そしてそれは、当然のことのように想えた。

なにも、当事者にすべてを明らかにする必要はないのだから。

セツナは、表情を消した。故に、彼女のすべてを鵜呑みにする必要は無い。

「おまえはこの事態にどう対処する?」

とはいえ、予想だにしていなかったアズマリアの言葉には、救いがたいくらいに間抜けな反応をせざるを得なかったが。

「へ?」

「どうやら気づいていなかったらしいな」

ため息交じりに、彼女。

「な、なんのことデスカ?」

セツナは、なぜか片言になりながら、アズマリアの冷ややかなまなざしから逃れようとした。その視線はあまりに鋭く、そして、痛い。

「周りを見よ」

彼女に言われるがままに、セツナは、周囲に視線を巡らせた。
瞬間、彼は、言葉を失った。

「!？」

異形の化け物が、森の闇に蠢いていた。

第三話 武装召喚

予期していたことでは、ある。

いや、そんなことも起こるかもしれないという、曖昧な可能性を考えていたというべきか。取り留めなく巡る思考の片隅で。

それは、きわめてありがちな存在だと言えた。セツナの知りうる限りのファンタジーにおいては、それらは往々にして、人間に敵対し、人間を襲い、人間を殺した。

有体に言えば、

「モンスター!？」

セツナは、周囲に蠢く異形の存在に対し、驚愕の声を上げていた。木々の枝葉が織り成す天蓋の下、横たわる闇は重く、深い。その闇の中で、ぎらぎらと輝く無数の紅い光点がある。それらは化け物どもの眼であり、その数え切れないほどの視線は、研ぎ澄まされた刃のような鋭さを以て、セツナの意識に突き刺さってきていた。

セツナは、いままでの人生で感じたこともない重圧の中で、呼吸を求めて、あえいでいた。意識が、朦朧とする。数多の殺意は、まるで抜き身の刃そのものであり、ただの高校生に過ぎないセツナにとっては、やはりどうすることもできない代物だった。

ただ、圧倒され、後退りする。

「皇魔、とひとは呼ぶ」

「!」

アズマリアの声が聞こえて、セツナは、幾分化け物どもの殺気が和らいだように感じた。それは気のせいなのかかもしれないが、なんいせよ、求めていた空気が、ゆっくりと気管を通り、肺を満たしていったのは事実だった。冷ややかで、どこか歪な空気。しかし、なくてはならない。人間は空気がなくては、生きられない。

「かつて、大陸をその圧倒的な武力によって統一支配した男は、み
ずから聖皇と名乗った。聖皇ミエンディア 彼がもたらしたのは、

安寧や平和とは程遠いものだった。彼は、異世界の神々を召喚したのだ」

多少の冷静さを取り戻したセツナは、改めて、前方のそれらを直視した。まさしくモンスターという言葉そのものの存在だった。異形の四足獣とも言おうべきか。しかし、獣というのは憚られるような姿ではあつた。

流線型の頭部は奇怪であり、のっぺりとした顔面には四つの眼孔だけがあつた。口も鼻も見当たらなければ、耳の穴などあるはずもない。眼孔から漏れる赤い光が、時より明滅しているように見えた。群青の表皮に包まれた体を持ち、長い手足には鉈のような爪がある。背中には一对の突起物があり、尾は、螺旋を描くように伸びていた。それと同じ姿の化け物たちが、セツナとアズマリアを取り囲んでいた。数にして、五十は下らないのではないだろうか。正確に数えたわけではないが。

「異世界の神々の力を用いてまで、彼がなにを為そうとしたのかなど、いまの我々には知る由もない。ただ、ひとつだけ確かなことがある。それは、召喚された神々に引き摺られて、異世界の魔物どもがこの大陸に流れ着いてしまったということだ」

「それが聖皇の魔 皇魔だ」

奇怪な金きり音のようなものが森の空気を激しく震わせたのは、アズマリアがそのせりふを言い終わった直後だった。

不愉快極まりない不協和音が、津波となつてセツナの意識に押し寄せてくる。耳を防ぐ暇もない。いや、たとえ耳元を覆つたとしても、その破壊的な雑音の乱舞は、わずかな間隙を縫つてでも鼓膜に到達し、セツナの脳を揺らしただろう。

「！？」

不意にセツナは、世界が歪んでいくような感覚に襲われた。乱暴な破壊音の羅列の中で、視界がひずみ、割れていく。手の感覚が失われた。それが最初だったのかもしれない。つぎに足の感覚がなくなり、全身が揺れた。立っていられなくなる。

(なんだ……！？)

理解しがたいセツナは事態に陥ったセツナは、しかし、どうすることもできないまま、前のめりに倒れていった。眼前に迫り来る地面に、彼は胸中で悲鳴を上げた。手が動かないのだ。顔面を庇うことすら許されず、おもむろに強打する。

顔面の激痛は、わずかばかりに彼の聴覚を復活させた。雑音が消え、アズマリアの声が聞こえてくる。

「さあ、どうする？」

なにを迫っているのか皆目見当もつかず、セツナは、無性に腹が立ってきた。いつまでそんなに超然としているつもりなのだろう。無事ならば、助け起こしてくれても良さそうなものだが。

しかし　　というべきか、やはりというべきか、アズマリアは、こちらの想いなど汲み取ってくれる様子もなく、続けてきた。

「そのまま皇魔に殺されるのを待つか、それとも、武器でも手に取って戦うか。無論、選択肢はふたつではない。この場から逃げ出すことだって　　いや、無理か」

彼女の実にどうでもよさげな口調に、セツナは、

「だああああああああ！　　うっせえええ！」

顔面を地面から引き剥がすと、怒号とともに跳ね起きた。不協和音の中で失われたはずの感覚は、いつの間にか元に戻っており、正常化した視界には、こちらに向かって近づいてくる数体の皇魔の姿があった。まるで地を這うような歩行方法は化け物に相応しいだろう。地味に、速い。

「ぐお！？」

セツナが悲鳴ともつかないなんとも奇妙な声を発したのは、化け物の一体が、既に眼前にまで接近していたことに気づいたからだ。紅く輝く四つの眼が、こちらを見据えていた。眼孔から発せられる光は、殺意そのものなのかもしれない。

セツナは、皇魔の視線に震えるような刺激を感じた。体が、思うように動かなかった。すぐさま後ろにでも逃げなければ、目の前の

皇魔の餌食になるだろう。そんなことはセツナにだって理解できたし、なんとかしたいのは当然の話だった。だが、全身言うことを聞かないのだ。

金縛りにでも遭ったかのように、動かない。

皇魔は、まさにあと半歩という距離にまで到達していた。皇魔の前足の爪が、鈍く光ったような気がした。

それは錯覚などではない。

皇魔が、上体を掲げ、前足を振り上げてきた。鉈のような爪は、いまこの瞬間、セツナにとっては死神の鎌に等しくなった。

(動けよ……俺!)

セツナの悲痛な心の叫びは、虚しく胸中に反響するだけだ。肉体は恐怖に縛り付けられたまま、死の宣告を待っている。破滅の足音が聞こえた。

そのとき。

「まあ、戦うのなら《武装召喚》とでも、言ってみたらどうだ？」

それは天使か悪魔の囁きか。

「武装召喚!!!!!」

セツナは、我知らず、生涯出したこともないような大音声で、その言葉を叫んでいた。全身全霊の絶叫に他ならない。魂の咆哮そのものなのかもしれない。とにかく、セツナは、なにも考えていなかった。死を目前に、抵抗は愚か、逃げることにすら適わない状況で、差し伸べられたのは救いの手などではなかったが、それでも、彼女の言葉に縋る他なかったのだ。

死。

それは、彼女にとってはいままできわめて非現実的なものに過ぎなかった。死にたいと想ったことなどないのだ。辛いこと、泣きたいことは、人並み以上に経験しているはずだったが、死を口にしたことはなかった。

死にたくなかった。

生きたい。

ただ、それだけだった。

「それでいい」

セツナの全身　黒と白を基調とした学生服ではなく、手や顔面などの露になった部分に、無数の光線が走った。それは複雑で幾何学的な紋様を、彼の肉体に描き出すと、次の瞬間、爆発的な光を発散した。鮮烈で圧倒的な閃光の拡散は、森の闇を一時的に払い除け、セツナを凝視していた化け物たちの視覚を狂わせるほどのものだった。

心地よい開放感の中で、セツナは、なにものかの声を聞いたような気がした。それは幻聴ではないのだ。きっと。いつの間にか閉じていた目を開き、両手を頭上に掲げる。そうしなければならなかった。それだけは理解する。

両手に、かなりの重量が生まれた。

セツナは、それを握り締めると、おもむろに振り下ろした。気合を込める必要もなかった。意志の、赴くままに。

セツナの眼前で片足を掲げたまま硬直していた化け物が、極あっさりとして、真つ二つに両断された。手応えひとつなかった。豆腐を斬るような感覚に近いかもしれない。

断ち切られた群青の体から噴き出すのは、どす黒い血液と体液。しかし、セツナは返り血ひとつ浴びなかった。

彼の肉体は、既に空中にあったのだ。手には、漆黒の矛が握られていた。全長はセツナの身の丈を軽く超しており、その剣状の穂先だけで十分な長さがあるように思えた。長大な柄には、これといった特徴は見受けられない。石突に埋め込まれた宝石は、透明な光を湛えていた。

セツナの体から溢れていた光は消え、森は、再び闇に包まれた。

皇魔どもの金切り声が、静寂を破壊してはいたが。

彼は、枝葉の天蓋の間で、闇に蠢く皇魔どもの位置取りを把握した。それぞれ四つの紅い眼光を放つ化け物たちは、それだけで、闇の中では不利に違いなかった。地面へと降下する最中に、セツナは、

ふと想った。

（俺、強え！）

初の実戦にして、既に一体の化け物を血祭りにあげているのだ。恐怖が身をすくませることもなければ、興奮に取り込まれることもない。ある程度の冷静さと、溢れんばかりの熱情が、いい具合にセツナの中で混ざり合っていた。

そして、身体能力、である。

着地したセツナは、透かさず前方に向かって跳んだ。低い弾道。木の根元でこちらを索敵でもしていたらしい化け物を、矛の一突きで絶命させる。良心の呵責はなかった。相手は化け物なのだ。どうやら、この世界の住人にとっても忌むべき存在らしい上、牙を向いたのは化け物のほうである。

殺さなければ、逆に殺されてしまうかもしれない。現に、殺されかけたのだ。

「どりゃあー！！」

セツナは、背後からの殺気に、即座に対応した。振り向き様の一闪で、こちらに殺到してきていた皇魔を一網打尽にしたのだ。その数、五体。薙ぎ払うような斬撃が、皇魔どもの表皮を斬り、筋肉を裂き、骨を断ち、臓腑を破棄した。

一方的な殺戮は、皇魔どもが諦めて逃げ出すまで続いた。

第四話 咆哮

「おおおおおおおお！」

雄叫びを上げながら、セツナは、意識が高揚していくのを認めた。魂の奥底に眠っていた闘争本能とでも言うべきものが目覚めたのかもしれない。それは喜ぶべきことなのか、悲しむべきことなのか。どちらにせよ、この世界にとっては寄る辺なき異邦人ではないセツナにとっては、必要不可欠なものには違いなかった。

でなければ、化け物と戦うことなどできるはずがない。

彼の世界における一般的な通念や常識を凌駕する？なにか？がなければ、殺意を剥き出しにして襲い掛かってくるものに立ち向かい、戦い続けることなどできるわけがなかった。ましてやセツナは、ついさっきまでのほほんと平和を謳歌していた学生に過ぎない。純然たる殺気を向けられたこともなければ、武器を手にとったこともない。

喧嘩は、何度もした。だが、喧嘩は喧嘩だ。殺すことを目的とはしていない。そもそも、本気で殺し合いをする学生が彼の世にどれだけいるのだろう。

他人を傷つけてはいけない。

他人と争ってはいけない。

他人を殺してはいけない。

そんな言葉が脳裏を過ぎって、セツナは、小さく笑った。全周囲から放たれる剥き出しの殺意の中では、彼の地の道徳など風の前の塵に等しい。

地を蹴って、前方に飛ぶ。それはちょうど、化け物が一体、こちらに飛び掛ってきたところだった。皇魔は、両方の前足を思い切り振り上げていた。鉈のような爪で、セツナの体を断ち切るつもりだったのだろう。しかし、それは適わない。両腕を掲げたがために露になった胸元に、漆黒の矛が突き刺さったのだ。

断末魔の悲鳴を聞きながら着地して、セツナは、矛を化け物から引き抜いた。皇魔の亡骸の傍らで、穂先に付着した血液を飛ばす。

森の中。乱立する木々を考慮するほどの精神的ゆとりはない。そもそも、初の実戦なのだ。なにをどうやって立ち回ればいいのかなど、わかるはずもない。いまはただ、手の中の得物を信じて、本能の赴くままに戦うしかなかった。

青き皇魔の正確な数は把握しきれない。とにかく、セツナの全周囲で、うんざりするほどの金切り声をあげていた。仲間が数体殺されたことへの恨みか、その不協和音の大合唱は次第にひどくなってきたおり、セツナは我慢の限界を覚え始めていた。叫ぶ。

「うるせえええええええ！」

怒鳴り散らすように声を張り上げ、駆け出す。左前方に、皇魔が固まっているのが見えたのだ。皇魔の集団は、こちらの接近を認識してか、一斉に身構えた。その数、十体。セツナは口の端に笑みを刻んだ。頭上から、殺気。

「うりゃあ！」

彼は、叫びとともに、矛を思い切り突き上げた。手応えはほとんど感じられなかったが、頭上を見上げずとも、皇魔の絶命を認識する。ずっしりとした重量はあつたし、なにより、矛を握る手に生暖かい液体が流れ落ちてきたのだ。血だろ。矛を振るい、穂先に刺さったままの亡骸を放り捨てる。血まみれの手を拭う暇はなかった。十体の皇魔が、既に眼前にまで迫ってきていたのだ。

だが、笑う。

「行くぜ！」

狂暴という言葉が相応しい笑みを浮かべたセツナは、大きく一歩踏み込んだ。扇状に展開する皇魔の布陣、その中心に飛び込むように。

キシャアツッ！！！！

文字にすればそのような奇声を発したのは当然、青き皇魔である。扇状の布陣の中心の皇魔は、セツナを迎え撃つためか、両方の前足

を大きく掲げていた。同様に身構えたのは、左右と後方の三体。残りの六体は、傍観しているように見えたが。

(なんでもいいさ)

胸中つぶやくと、セツナは、こちらを待ち構える化け物の頭目掛けて矛を突き出した。化け物が、機敏に反応する。両方の鉦で顔を庇ったのだ。だが、漆黒の矛は、幾重にも展開する鉦の盾を事も無げに突き破り、皇魔の頭蓋を貫いた。甲高い絶叫が、鼓膜に響く。「うっせえ！」

苛立ちとともに、セツナは、矛を右に振り抜いた。矛の刃は、化け物の頭蓋をたやすく切り裂き、そのまま右の皇魔の前足を切り飛ばした。皇魔の武器たる前足は、血を噴き出しながら飛んでいった。当の皇魔は悲鳴を上げながら、その四つの眼を強く瞬かせた。眩いばかりの憎悪が、セツナに注がれる。が、セツナは、切り返すように繰り出した斬撃によって、その皇魔を沈黙させたのだ。死者は語る口を持たない。

ふと、疑問が生じる。

(ん……?)

左からの殺気には、体が反応した。鉦の連続攻撃を柄で受け止める。金属同士がぶつかったような音が響いた。しかし、それだけだ。皇魔の爪が弱いのか、矛が硬いのか、柄には傷ひとつつかなかった。セツナと皇魔は、互いの武器を重ねたまま睨み合う格好になった。凝視する。

のっぺりとした顔面には、四つの眼孔だけがあり、そこから赤い光が漏れているのだ。もしかすると、それは眼孔ではないのかもしれない。異世界の生物である。人間やその他の生き物とは、根本的に異なる存在なのかもしれないのだ。うかつには判断できない。ただ、

(口なんてないよなあ)

それは最初に確認したことではあった。人間などにおける口と思わしきものが見当たらず、同時に耳や鼻も見つからなかった。なら

ばどうやって、皇魔は悲鳴を発し、不協和音を奏でているのだろう。音を聞き分け、呼吸をしているのだろう。そこまで考えて、彼は、頭を振った。

（止めだ止めだ！）

生物としての原理が根本から異なるのなら、考えるだけ無駄なのだ。そのことに気づくと、セツナは、思考を切り替えた。矛を、旋回させる。受け止めたままだった爪を振り払うと、透かさず、から空きの頭部に切っ先を突き入れた。悲鳴。矛は、なんの抵抗を覚えることもなく、皇魔の頭蓋を貫通していた。

不意に、ざわめきがセツナの全身を駆け抜けた。

「！？」

見ると、後方に布陣していた皇魔どもが、前傾姿勢のまま臀部を持ち上げるような体勢を取っていた。威嚇するような姿ではあったが、しかし、いまさらそんなことをするはずもない。背中にある一対の突起、その中間の虚空に、電光が集まっていた。球状の電光は、既に六つ。原理など知る由もない。皇魔の力なのだ。

セツナは、危険を察知したが、即座には動けなかった。激痛が、左の太腿に走ったのだ。

「ぐっ」

皇魔の爪によるものだろう。傷は、必ずしも浅くはないが、重傷と呼ぶほどのものでもないようだった。しかし、体勢は崩れた。セツナが地に膝をつくとき、目の前には皇魔の亡骸があった。眼孔からは赤い光の代わりに、紅い液体が流れている。

セツナは、胸中で舌打ちした。一瞬、気を取られたのがまずかったのだ。なにかを仕掛けようとする皇魔どもに、注意を向けてしまった。ほんの刹那、すべての意識がそちらに向いてしまったのだ。明らかな失態だった。斬られたのが太腿ではなく、首だったなら、間違いなく死んでいた。

（死……？）

太腿を一瞥する。重傷ではない。膝をついたのは、激痛に耐えら

れなかつただけだ。いまも齒噛みして痛みを堪えてはいるものの、激痛は一向に収まる気配を見せなかつた。当然だろう。ただの人間に過ぎないセツナに、傷を癒す手段などあるはずもなければ、痛みを打ち消す方法もなかつた。

ただ、我慢するしかない。

「死……か」

セツナがぼつりとつぶやいたときだつた。

前方で、六体の皇魔の背中から、六つの電光球が解き放たれた。瞬間、森全体が真っ白に染まつた。それらは、物凄まじい殺気の塊だつた。セツナの意識が震える。そしてそれらは一瞬にしてセツナの眼前に到達する。網膜が、純白で塗り潰される。

それは、死、という。

「死ねるかあああああああ！」

咆哮とともに、セツナは、矛を振り上げた。ただがむしやりに振るつた矛は、なぜか金色の光を帯びた。セツナに殺到した電光球は、黄金に光る矛に触れた瞬間、強烈な閃光とともに膨張、爆発した。猛烈な爆光が、轟音を撒き散らしながら渦を巻く。破壊の奔流は、木々を薙ぎ倒し、草花を焼き払っていく。

その荒れ狂う光の中心で、セツナは、網膜に投影されるものではなく、脳裏に描き出されるものを見ていた。爆光の渦の中、木々は倒壊し、森は崩壊の一途を辿る。いままで隠れていた動物たちが一斉に逃げ始めたものの、それはあまりにも遅すぎたのだ。

破壊の力は、罪なき動物たちにもその魔手を伸ばし、圧倒的な力で多数の命を捻り潰していった。

セツナには、なにもできない。ただ、破壊の嵐を免れた皇魔どもが、こちらに背を向け、逃走を開始したのを認識しただけだ。そして、それだけでよかつたのかもしれない。大地を蹴る。力強く、大地を踏み抜くほどに。

破壊的な光の中を飛躍する。

セツナは、十数の皇魔の背中を視認した瞬間、喜悅の笑みを浮か

べた。矛を握る手に、力が籠もった。金色の光は既に失せ、漆黒の矛に戻ってはいたが。殲滅するには、十分だろう。

しかし。

「もう、十分だ」

真紅の女が、セツナの前方に立ち塞がり、その進軍を妨げた。が、こちらは飛んでいるのだ。空中で急停止など、できるはずがなかった。このままでは、間違いなく激突するだろう。悲鳴を上げる。

「ちよっ!?!」

アズマリアは、わずかに微笑を浮かべたらしい。光の嵐の中、その美貌は際立っていた。

「案ずるな」

彼女が、右手をこちらに向かって掲げてきた。彼女の唇の動きは、美しく滑らかだった。

「武装召喚」

セツナの視界が歪み、つぎの瞬間、どう見ても鋼鉄製であろう門が、アズマリアの右手の先に出現した。セツナの進路上だった。飾り気のない扉は硬く閉ざされ、開く気配などあるうはずがなかった。

セツナは、絶望した。

第五話 さらば愛しき日々

「初めてにしては上出来だ」

アズマリア「アルテマックスがこちらを見下ろし気味に紡いだ言葉を、セツナは、半ば聞き流していた。反発ゆえに聞き流しているわけではない。激痛が、彼女の賞賛さえ聞くことを拒んでいた。物凄く痛みだった。頭が割れるような痛み。実際、割れていないのが不思議なほどの激痛に、セツナは、目から涙を滲ませていた。

直撃だったのだ。

アズマリアが召喚した門に、セツナは、顔面から突っ込んでいったのだ。空中で急停止などできるはずもない。激突、である。その激痛たるや、セツナの鼻の骨が折れるかと思われるほどのものであり、実際、折れなかったのが不思議なくらいの衝撃が、鼻骨から顔面、そして全身に駆け抜けたのだ。

故に、彼は、その場にあぐらを掻いて、いまだに痛みの疼く鼻を摩っていた。アズマリアの音が、右の耳から左の耳を通り抜けていったとしても仕方がないだろう。

依然として、森の中だった。とはいえ、陰鬱な沈黙に支配されていた頃とは、明らかに異なる様相だった。当然だろう。皇魔の電光球をセツナが跳ね返したことで生じた破壊の嵐によって、周囲一帯の木々が根こそぎ吹き飛ばされたのだ。景色は一変し、地形もまた、大きく変化していた。

緑の天蓋は取り払われ、眩いばかりの蒼穹が頭上に広がっている。セツナの知っているものとよく似た、しかし、なにかが決定的に違う空は、どこか儚げに見えた。太陽と思しき発光体と、たなびく雲が、やはり彼の地の空を想起させる。

爆心地から半径数十メートルに渡って、大きなクレーターになっていた。それを認識したとき、セツナは、肝を冷やす思いだったのだ。破壊の嵐の中で、よく無事でいられたものである。巻き込まれ

れば、ただではすまなかつたはずだ。

「雑魚とはいえ、多数の皇魔を相手にあれだけ立ち回れたのだ。おまえの資質は本物と見て、まず間違いないだろう」

セツナは、ようやく顔を上げた。アズマリアの美貌を仰ぎ見る。クレーターの中心に、ふたりはいた。セツナは地べたにあぐらを掻き、アズマリアは、悠然と佇んでいた。

セツナは、彼女の仏頂面を認めて、半眼になった。心にもないことを言っているのではないか。

「俺を褒めたってなんにもでねーぞ」

すると、彼女は苦笑したらしかった。セツナはすぐに目を逸らしたため、その表情の変化を見届けることはかなわなかったが。

「わたしこそ、おまえを褒めてもどうにもならんだろう？」

「いや、褒めて褒めて褒め殺して、思想的洗脳を完了させるとか」

「褒めるだけで人間を洗脳できるなら、それほどたやすいことはないな」

「むう。じゃあ、褒めて透かして宥めて扱き下ろすとか」

「なにが、じゃあ、だ。それに扱き下ろしては台無しじゃないのか？」

「……確かに」

セツナは、頷かざるを得なかった。そもそも、口論をするつもりはないのだ。ただの言葉遊びに過ぎない。

ゆっくりと、伸びをする。

疲労は、いまのところ感じられなかった。皇魔につけられた太腿の傷は、アズマリアの手で応急処置が施されていた。どうやら大した傷ではなかったらしい。こんなもので体勢を崩したのか、などと呆れられるほどのものだった。セツナにしても、反論のしようがない。戦闘中、冷静な判断を下すことができなくなっていた証拠だ。

とはいえ、初めての実戦なのだ。

いままで戦闘などとは無縁の人生を送ってきたものが、理性を保っていられるほうがどうかしているのだ。

「もつとも、先の戦闘の勝敗を決めたのは、おまえの召喚武装だな」

口調の割りにアズマリアのまなざしが柔らかいことに、セツナはある種の衝撃を受けた。だが、そんなことはどうでもいいのもまた、事実である。いま知るべきは、目の前の地面に突き立てた漆黒の矛のことだった。

セツナは、数多の皇魔を屠ったその矛に手を伸ばすと、柄に触れた。ひんやりとした感触が、指先から掌、腕を伝って、全神経に行き渡るような錯覚を覚える。意識は研ぎ澄まされ、視界が広がっていく。

そんな幻想の中で、セツナは、ゆっくりと腰を上げた。立ち上がるのとともに、柄を握り締め、矛を地面から引き抜く。

「シヨウカンブソウ？」

聴きなれない言葉を反芻しながら、彼は、矛を軽く掲げてみた。

漆黒の矛。剣状の穂先を持ち、特徴のない柄と、石突には宝石が埋め込まれている。全長二メートル以上はあるだろう。その光沢のある美しい穂先は、皇魔の鉈のような爪も、肉体も、骨も、容易く斬り裂き、あるいは貫いて見せた。

一見、ただの黒い矛に過ぎないのだが、改めて観察すると、簡素な外見とは裏腹に、内奥には凄絶なまでの凶暴性を秘めているように、セツナには思えた。それは、さきの戦闘の実感がまだ残っているからかもしれない。

「そうだ。その矛は、おまえが異世界より召喚した、おまえの武装なのだ。おまえにしか召喚できない、おまえだけの武装」

「俺が召喚した……俺だけの」

アズマリアの言葉に、セツナは、矛を握る手に力を込めた。武器は、どこからともなく現れたのだ。あるとき、セツナが武装召喚という言葉を叫んだ瞬間に。それは確かに、ファンタジーにありがちな、召喚魔法に似ていた。もつとも、異世界の生物を呼び出し、その力を行使するのが召喚魔法の主流ではあるが。

「それにしても、驚いたぞ」

「ん……？」

声音の甘さに違和感を覚えたセツナがアズマリアに目を向けると、彼女は、彼が掲げた漆黒の矛をうっとりとして仰いでいた。恍惚とした表情は、もの凄まじい色気を放っており、男女問わず垂涎の的になること必死であろう。かくいうセツナも、アズマリアの、紅潮した美貌に見とれてしまった。

「これほどの靈性を宿した武装は、そうそう召喚できるものではないのだよ……」

「……そう、なのか？」

「武装召喚術　おまえの矛のように武装を召喚する技能の総称だには、知識も技術も必要だが、それだけでは決して埋めようのないものがある。それがなんだかわかるか？」

視線を矛からこちらに移して、彼女。熱に浮かされたような表情のまま、声音だけは冷静に戻っていた。器用な真似ができるものとセツナは感心するしかなかった。もちろん、彼女の問いに答えられるはずもない。言っていることがよくわからない、というよりは、頭の中に入ってこなかったのだ。

アズマリアの金色の瞳に魅入っていた。

「才能だよ」

彼女の一言に、セツナは、はっと我に返った。アズマリアの言葉をしっかりと聴くために、耳を澄ます。森の中のクレーター。雑音はないに等しい。

「資質と呼び変えてもいい。そればかりは、どれだけ努力を重ね、修練を積み、知識を集めても、手に入れようがない。生まれ持ったものだからな。路傍の石が金剛石になることなどありえまい？ それと同じだ。無論、才能にあぐらを掻いたものが、努力を積み重ねたものに追い抜かれるのは当然のことだがな」

「つまり？」

「おまえは、勇者や英雄になれるだろう。おまえがそれを望むのなら、」

ら、な」

彼女がもたらした結論に、セツナは、体の奥底から、なにか猛烈な熱量を持ったものが湧き上がってくるのを認めた。それは、興奮そのものだったのかもしれない。強烈な熱波は、セツナの全身を駆け抜けると、血を沸き立たせ、肉体を躍動させた。

勇者。英雄。あるいは、豪傑。

夢見がちな少年の心を震わせるには十分な威力を秘めた言葉だった。

「ふふ。望むか？ 此の地の勇者となることを。此の地の英雄、此の地の豪傑になることを」

「目指してもいい、かな。けど、その前にひとつ聞きたいことがある」

セツナは、いまずぐにでも走り出したい衝動に駆られながら、辛くもそれを抑えると、アズマリアに目を向けた。彼女は、こちらの反応が面白いのか、微笑を浮かべていた。笑われても、悪い気はしない。それはきつと、彼女の笑みに悪意がないからだ。

「なんだ？」

「帰れないのか？ 俺」

セツナが口にしたそれは、彼が最初から抱いていた疑問だった。そもそも、アズマリアの話の展開に違和感を覚える。セツナがこの異世界で生きていくことを前提にしているような、そんな話の進め方だった。

「生憎、わたしの《門》は一方通行でな。おまえを元の世界に送り返すことはできないのだ。いや、移動手段に使えないこともないのだが……」

「なら、元の世界に帰れるんじゃない……？」

「イルス・ヴァレと異なる世界が、どれだけあると思っっているんだ？ 百万世界といわれ久しい。《門》を潜ると別の異世界でした、では、おまえも嫌だろう？」

「むっ」

セツナは、顔をしかめた。確かに、それは嫌過ぎるだろう。《門》の先に広がる世界が、天国のような世界ならまだしも、地獄のような世界に入り込んでしまう可能性も捨てきれない。

「元はといえば、わたしの《門》などという怪しいものを潜ったおまえが悪いのだ。諦めて、ここでどうやって生きていくかを考える」「あ、それって責任転嫁じゃね？」

「なんでもいいさ。とにかく、おまえはみずからの意志で《門》を潜り抜け、このイルス・ヴァレに辿り着いたのだ。召喚を求めたのはわたしだが、応じたのは、おまえの意志であるはずだ」

アズマリアの強い力を秘めた言葉を聞きながら、セツナは、脳裏にあの瞬間のことを思い浮かべた。夢に見た城門の出現に度肝を抜かれ、周囲に起きた異変に戸惑いながらも、セツナは、確かに、みずからの意志で門扉を押し開いたのだ。

なぜ、《門》を開こうとしたのだろう。無視してもいいはずだった。アズマリアの言った通り、《門》など無視していれば、いつもの、どうしようもない日常が続いていたのだろう。救いがたいほどにくだらなくて、同じ形の明日さえ見えない、そんな毎日。そのくせ、今にして思えば、平穏と安寧に満ちた日々だったのだ。

もはや、取り戻せない。

漠然とした確信とともに、彼は、視界が滲みかけたのを認めた。慌てて、袖で拭う。彼の通う学校の制服は、先ほどの戦いで既にぼろぼろになっていた。黒と白を基調とした制服は、きわめて先鋭的な意匠であり、学生服にはとても見えなかった。

「そうでなければならぬ。おまえがここにいるのは、おまえ自身の意志の結果でなくてはならない。原因はわたしが紡いだのだとしても、結果は、おまえ自身の手で描き出されなければならない！」

アズマリアが言葉に込めた力の激しさに、セツナは、圧倒された。目をぱちくりしながら、彼女の、どこか憂いを帯びたまなざしを見つめる。黄金の瞳に、一瞬、影のようなものが過ぎったかに見えたが、それはセツナの気のせいかもしれない。

彼女の瞳が、鋭く輝いた。

「さあ、行け！ セツナ！カミヤ！ 空を渡りしものよ！ 矛の召喚者よ！ おまえは世に放たれた魔獣！ 戦禍渦巻く大地を駆け、立ち塞がるものを打ち破れ！」

「おおおおおおおおお！」

膨大な熱量を秘めたアズマリアの檄（？）に突き動かされるまま、セツナは、喉が潰れるくらいの大音声を上げた。自分でもなにがなんだかよくわからなかったが、いまは咆哮でも上げておくべきだろうと判断したのだが、それにしても思った以上に声を張り上げてしまっていた。もはやどうしようもない。叫び続けるしかなかった。

その場のノリだけで行動するのはよくないという教訓だろう。しかし。

（あれ……？）

セツナは、天を仰いで咆哮を上げながら、不意に空が揺らめいたのを認めた。いや、それは空の異変などではなかった。セツナの視界そのものが滲んでいたのだ。頬を、熱いものが伝っていく。

瞳から零れ落ちたそれは、紛うことなき涙だった。

勢いに任せて叫んだことで、想いを抑えきれなくなったのかもしれない。箍たがが外れたのだろう。

涙は、とめどなく溢れ、彼の頬を濡らした。

（さよなら）

セツナは、ありったけの咆哮の中で、別れを告げた。

あのどうしようもなくくだらないくせに愛しくてたまらない日々と。

平穏と安寧に満ちた日常と。

生まれ育った世界と。

第六話 放置プレイ、あるいは放任主義者の戯れ

「さて、俺はこれからどうしたらいいんだ？」

セツナが、背後のアズマリアに尋ねたのは、一頻り叫び続けたあとだった。涙は流し尽くしたはずだ。枯れ果てた心に、涙などというものが溢れるほどに溜まるまでは、相当の時間を要するだろう。そして枯れは、もう、故郷を想って泣くような真似はしないつもりでいた。いつまでも、過去を引き摺っている場合ではない。

目の前には、異世界という現実が広がっているのだ。泣き叫んで駄々をこねたところで、なにも変わりはないのだ。石ころ一つと動かない。

前へ。

一歩でも前に進むしかない。

セツナは、アズマリアの返答を待つ間に、ゆっくりと空気を吸い込んでいた。快晴の空の下、流れる空気は軽い。鬱蒼とした森の中では考えられなかったほどの開放感があった。

「……？」

セツナは、ふと、アズマリアからの返答が遅いことに気づき、疑問とともに、彼女がいるはずの背後を振り返った。そして、愕然と目を瞬かせた。

「つて、いねえ!？」

眼前には、ついさっきまでいたはずの美女の姿はなく、爆発による破壊の爪痕の光景が広がっているだけだった。真紅の女はどこにも見当たらない。何度瞼を閉じて開こうが、網膜に映る景色にこれといった変化は見受けられなかった。

セツナは、呆気にとられながらもすぐさま思い返した。見捨てられた、というわけでもないのだろう。彼女には彼女なりの考えがあり、故に、セツナが泣き叫んでいる間にどこかへ行ってしまったのだ。とはいえ。

「確かに「行け！」だのなんだの言ってたけどさあ」

「ぼやいても仕方がないことはわかってはいたが、この仕打ちは愚痴らざるを得ないだろう。自己弁護とともに、彼は、ただため息を浮かべた。」

「なにも知らぬ異世界の、どことも知れぬ森の中。召喚されたのは、まだ、いい。アズマリアの言葉通り、応じたのはみずからの意志に違いない。己が手で扉を開いたのだ。そこは既に納得しているのだ。問題は、この世界に関する情報を毛ほども与えず、あまつさえ皇魔蠢く森の中に放り出す、などというアズマリアの所業である。いくらなんでもこれはないだろう。少なくとも、この森の周辺に関する情報なり、森を抜けるまで同行してくれるなりしてもいいはずだ。それを甘えと言われたとしても、セツナにはどうしようもない。反論する気にもなれないし、そもそも、それくらいの甘えは許されてもいいはずだった。」

（放任主義？ それとも、放置プレイ？）

「っだあああああああ！」

「くだらない考えを即座に振り払うように雄叫びを上げて、セツナは、とにかくその場から動き出すことにした。なにも告げずにいなくなつたものを待ち続けることほど愚かなことはない。怒鳴り散らしても構わないが、それもまた、結局は時間の無駄だろう。」

「諦観というよりは圧倒的な敗北感とともに、セツナは、周囲を見回した。皇魔との戦いによって爆砕された森の中。巨大なクレーターのほぼ中心には、彼ひとりしかない。鳥獣の姿は愚か、皇魔の気配すら感じられない。」

「当然だろう。静寂が戻つたとはいえ、地形を覚えるほどの爆発があったのだ。多くの動物が巻き込まれたのを、セツナだって知っている。そんな破壊の中心部に好き好んで近づくようなものはいない。セツナは、クレーターの円周部を囲むように広がる森を見渡して、またしても嘆息を浮かべた。」

「どこへ行けばいいんだ？」

森、森、森、森　どこを見ても、同じような景色だった。この森がどれほどの規模のものかもわからないし、どこをどう進めば森から抜けられるのかなど、皆目見当もつかなかった。

暗澹たる気持ちになりかけて、彼はかぶりを振った。ふつつつとなにかがこみ上げてくる。

「つたく、なんでこんなことで悩まにやなんのだ！」

心の深奥から噴き出してきた怒りに突き動かされるようにして、セツナは、歩き出したのだった。腹立たしいにもほどがある。なぜ、異世界に召喚されてまで、くだらないことでうじうじと悩まなければならぬのだらう。考えている暇があつたら、さつさと歩き出せばいいのだ。

憤然と、彼は、クレーターの外へ向かった。目指すは、森からの脱出である。森さえ抜ければ、あとはどうにでもなるだらう。勤めて楽観的に考える。

なにせよ、いまはとにかく前進するしかないのだ。

それだけが、セツナに許された行動に違いないのだから。

爆心地を離れ、本当の意味での森の中に一歩足を踏み入れると、そこはやはり陰鬱な沈黙に支配されていた。この森のなにかがそうさせるのかはわからないし、別に知りたいとも思わないのだが、それでもセツナは、なんとなくやりきれない気持ちになりつつあった。

鬱蒼とした木々に覆われた領域。道という道はなく、辛うじて獣道らしきものが見受けられる程度だった。

動物の気配はなく、皇魔が襲ってくる様子もない。先の戦いの影響なのかもしれない。どうであれ、セツナにとってそれは幸運そのものだった。無駄に体力を消耗せずに済むのだ。

これから先、なにがあるかわからない上、どれくらい歩くのかもわからないのだ。体力は温存しておくに限る。

矛は、いつの間にか消えていた。アズマリアがどこかへ持ち去ったということはない。セツナが咆哮を上げている間、しっかりと握り締めていたのだ。そして、彼が泣き止み、すべてを振り切ったあと、気がついたら消えていたのだ。

影も形もなくなっていた。

もしかしてら、元の世界に帰ったのかもしれない。

異世界から召喚したものが役目を果たした後に帰還するのは、セツナにとっては当然のことのように想えた。極めてゲーム的な考えではあるのだが、そうとしか考えられない。手放したつもりもなければ、あの場所に置き忘れたはずもない。

忽然と消えたのだ。

ならば、矛がみずからの意志で、元の世界に帰ったと考えるべきか。

「ん……？」

セツナは、足を止めた。森の中。無数の枝葉は、複雑に折り重なって緑の屋根を構築している。わずかな木漏れ日は、森の闇に光の雨の如く降り注いでいた。

（俺は……？）

矛が、もしみずからの意志で元の世界に帰還を果たしたとした場合、セツナは、どうなるのだろう。

アズマリア曰く、彼女の《門》は一方通行であり、数多ある異世界からセツナのいた世界を特定することは難しく、帰還は不可能に近いという。

しかし、セツナが召喚した矛は、難なく帰還してしまった。なんの障害もなく、なんの制限もなく、容易く元の世界に戻ってしまった。それ以外の結論が導き出せないのだ。

ならば、セツナは？

（帰れるのか……？）

可能性はあるのだろう。

矛は、恐らく、本来あるべき世界に帰ったのだ。なんらかの方法

で、みずからの世界に辿り着いたのだ。セツナも、元の世界に帰れるのかもしれない。

しかし、つぎに持ち上がってくる問題は、その方法である。

矛が、どうやって元の世界を特定し、あまつさえ世界間移動させも成し遂げたのか。そもそも、矛に、意志というものがあつたのかどうか。

もしかすると

(世界が呼び戻したのか?)

矛が属する世界(とでも言うべき概念)が、召喚の役目を果たした矛を呼び戻したのだとしたら、すべてに合点が行くような気がした。

だとすれば、セツナが帰れないのも納得できる気がする。

役目を果たしていないのだ。

そして。

「俺の役目ってなんだよ!？」

果たして、セツナは、途方に暮れた。

第七話 紅蓮と燃えるは我が魂

「なんとというか、ご愁傷様で……」

セツナが、いかにも焼け出されてきたばかりだとも言いたげな人々に、なんとも言いようのない沈痛な面持ちになったのは、中天にあつたはずの日がわずかに傾きかけた頃合だった。

散々迷ったものの、皇魔に遭遇するようなこともなく、無事に、陰鬱な森から抜け出すことに成功したのだ。時間はかかったが、体力自体は特に消耗せずに済んでいた。

森の外には、広大な天地がその眩いばかりの輝きを見せつけるかのように広がっており、澄んだ空気と、たおやかな風は、森の中では考えられないほどに清清しかった。そして、地平の果てまで続く大地、遙か頭上を埋め尽くすあざやかな群青　それは、まさに夢に描いたファンタジーの世界だった。

セツナの気持ち異常なまでに盛り上がったのは、無理もなかったのかもしれない。

奇声を上げながらとてつもない勢いで駆け出したセツナが、いくつもの冷やかな視線を浴びたのもまた、当然の帰結であろう。

それは、森の脇を通る街道での出来事だった。街道とはいうものの、平原との違いなどほんの些細なものであり、注意していなければそれと気づかないほどの変化だった。

それは、決して狭くはない街道の両脇に、奇妙な形状の石柱が点在する、という程度のものだ。道路そのものも、一応は整備されているのだろう。剥き出しの地面は、雑草を刈り取った証明に他ならない。

その街道の石柱の前に、彼らはいた。数十人の老若男女。焼け焦げた人たち、という表現はあながち間違っていなかったし、セツナのわずかばかりの語彙では、それ以外に彼らを表現する方法はなかった。

この世界の人間と対面するのは、アズマリア「アルテマックス以外では初めてだった。しかし、緊張は覚えなかった。白い目で見られたのだ。もはや、セツナには、開き直るしかなかった。

そして、あの言葉である。なぜ、そんな言葉で話しかけたのか、セツナにもわからなかった。しかし、口をついて出たセリフを後になって取り消すことなどできないのだ。時計の針は、進んでいく。

「いや、まあ、あんたのほうこそだいたいじょうぶか？」

むしろこちら以上に痛々しそうに言葉を返してきたのは、初老の男性だった。中肉中背、これといった特徴のない老人の全身を包む衣服は焼け焦げ、なにか火災にでも遭った直後のように見えた。それは、その老人だけではない。老人の背後に隠れた男の子も、こちらを興味深げにこちらを見る女性も、疲れきったようにうなだれる青年も、ひとりを除いて、だれもが火災現場から逃げ出してきたかのようだった。

(わかってたことだけどさ)

セツナは、老人に対して引き攣った笑みで応えながら、内心、愚かな過ちを犯した己のうかつさを呪っていた。この失態は、もう取り戻せないだろう。彼らの記憶には、奇声を上げて走り回っていた危ない男として刻まれるのだ。永遠に。

元はといえば、森を抜けた先に広がっていた光景に浮かれすぎた自分の青さが悪いのだ。だれかに怒りをぶつけることなど許されない。

こうなれば、自棄である。

「ええ、ダイジョウブデス」

セツナは、ぐっと親指を突きだすと、勤めて爽やかに笑った。あまつさえ、磨き抜かれた歯を輝かせて見せる。無論、みずからの意志でそこまではできない。要は、気の持ち様なのだ。歯が輝くと思えば輝いているはずであり、爽やかさを意識すれば爽やかになるはずなのだ。

「うわ。きもっ」

要は、気の持ち様なのだ。少女の正直な感想も聞こえなかったと思えば聞こえなかったことになるはずであり、ただ痛々しいまでの白眼視など、存在しないも同然なのだ。

「なにあのお兄ちゃん、怖いよ。」

幼女の泣き声もまた、小鳥の囀りと同義であり、

「最近の若者の考えることはわからん。さっぱりわからん。」

老人の呆れたつぶやきさえも、耳鳴りの如き幻聴に過ぎない。目の前の現実はたゆたう幻想であり　つまりここは幻想郷なのだ。そう、確かアズマリアも言っていたはずだ。ここは幻想領域だと。よって、すべては一時の夢に過ぎないのだ。

「よし、勝った！」

だれとはなしに宣言して、セツナは、空を仰いだ。吹き抜ける風が、どこか寒々しいのはきつと気のせいだろう。

沈黙。

だれもが、啞然としていたのだろう。気配だけで把握する。

セツナは、圧倒的な敗北感に打ちのめされながら、こほん、と軽く咳をした。そんなもので失われたものの半分も取り戻せるなどとは思ってもいないのだが、それでも、仕切りなおすにはなんらかのアクションが必要だろう。

「あんた、本当にだいじょうぶか？　医者にも見てもらったほうがいいんじゃないのか？」

「いやいやいやいや！　それを言うならあんたの方じゃないか」心の底から心配そうに尋ねてきた心優しい老人の言葉に、セツナは、全力で首を横に振った。見回す。ついさつき焼きだされてきたのだ、と全身で主張する人々には外傷らしい外傷は見受けられない。しかし、心配にはなるものだ。

セツナは、自分に他人を気遣う余裕があることに驚きながら、目の前の老人に視線を戻した。

「なにかあつたんデスか？」

敬語、などという使い慣れない言葉遣いを、それでもなんとか搾

り出す。実生活で敬語で話すことなんてほとんどなかったのだ。そして、あの世界に於いてはそれでよかった。なにかに気を使う必要などなかった。

「街が燃えたの！」

叫ぶように言ってきたのは、見た目十歳足らずの少女だった。さつきまでは母親らしき女性の背後から恐る恐るといった様子でこちらを覗いていたのだが、いつの間にかセツナの足元にまで近づいてきていた。

「突然ね、真っ赤に燃えちゃったの！」

セツナは、みずからの視線を少女のものと合わせるために屈みながら、彼女の恐怖に引き攣りながらも懸命に堪えている表情に胸を打たれていた。燃える街の光景でも、思い出しているのだろう。子供じゃなくても恐ろしい光景に違いない。それでもなおセツナに伝えてくれたのは、なぜなのか。

そればかりは少女ならざるセツナにわかるはずもなかった。

「街が燃えた……？」

セツナは、反芻するようにつぶやきながら、いまにも泣き出しそうな少女の瞳を見ていた。透き通る淡い青の瞳には、そのときの恐怖が渦巻いているように感じられた。

「この子の言う通り、俺たちの街が燃やされたんだ。理由なんて知らないが、ともかく、街が焼かれたんだよ……！」

「男よ。ひとりだったのかしら……？ あれは武装召喚師に違いないわ……」

「ぼくのおうちも燃やされちゃった……」

口々に紡がれるひとびとの悲嘆を聞いて、セツナは、静かに立ち上がった。嗚咽を漏らし始めた少女の頭を撫でようとして、やめる見ず知らずの人間に触れられたら、余計に恐怖を与えるかもしれない。

そうするうち、母親らしい女性が、少女の元までやってきた。優しい抱擁。母性など、セツナには持ち得ないものだ。当たり前のこと

とだが。

セツナは、視線を目の前の老人に戻した。

「身一つで逃げ出してきたんだ。あのままカランにとどまっ
ていても仕方がないので、クレブールにでも行こうかと」

「カラン？　クレブール？」

「あんだ、クレブールから来たんじゃないのか？　南から来たんだ
らう？」

「ええ、まあ、その、その通りデス！」

どう答えればいいのかわからず、セツナは適当に相槌を打った。
本当のことは話せないだろう。話しても信じてもらえないか、頭が
おかしいひと扱いされるのが落ちだ。それだけはなんとしても避け
なければならぬ気がした。

頭の中で、彼らの話を総合する。この街道の南にクレブールとい
う街があり、北に進めばカランという街があるらしい。そして、カ
ランは武装召喚師らしき男によって焼かれた。

セツナは、母親の腕の中で泣きじゃくる少女の姿を認めた。血の
味が、口の中に広がっていく。いつの間にか、唇を噛んでいたらし
い。

それは、どういう感情なのだろう。怒りか？　それとも、義憤と
でも言うべきものなのか。そんなものが自分の中に存在しているこ
とに驚くものの、だれもが持つ感情には違いないのだ。

いたいけな少女の心に恐怖を植えつけたものへの言い知れぬ激情
が、セツナの心の中で、紅蓮の炎となって荒れ狂った。

目的地は、決まった。

「どうかしたのか？　本当に、だいじょうぶか？　あんだ……」

こちらの異変に気づいたのか、目の前の老人が気遣うように言っ
てきた言葉に、セツナは、一瞥も返せなかった。燃え盛る怒りは、
瞳の中にも赤々と揺れているはずであり、そんな状態で目を合わせ
でもしたら誤解を招くに決まっている。

目を合わせないように視線を巡らせ、ふと、気づく。焼かれた街

から逃げ出してきた一団の中で、ひとりだけ、違和感を放つ女性がいたのだ。石柱の元に隠れるように座り込んだその女性は、ただひとり、炎に巻かれた様子もなければ、悲壮感もなかった。艶やかな黒髪が、美しい。

拍子に、その女性が、こちらを見た。視線が交錯する。灰色の瞳には、感情らしい感情も見受けられなかったが。

「!？」

一瞬、女性が愕然としたように見えたが、しかし、それは幻視だったのかもしれない。つぎの瞬間には、女性は、にこやかな微笑を湛えていた。絵になるような微笑だった。

セツナは、疑問を抱きながらも、軽く会釈をすると、ふたたび老人に視線を戻した。

「いろいろ聞かせてくれて、ありがとうございました」

「ん……？」

老人の要領を得ない、という表情に、セツナは、胸中苦笑を浮かべた。仕方がないだろう。こちらのことはなにも話していないのだ。そして、それでいいと思う。告げる。

「では、さようなら」

「は？ おい、どこへ」

老人の呼び止める声は、背中で聞いた。

既に街道を歩き始めたセツナは、振り返ることもなかった。

「カランに！」

ただ、叫ぶように答えた。カラン。街を焼いた男を見つけ出してとつちめなければならぬ。そうしなければ、この怒りは収まりそうになかった。幸い、こちらにも召喚武装がある。あの皇魔の集団を撃退した漆黒の矛がある。街を焼いた武装にも引けを取らないはずだ。

と。

「カランなら逆方向だぞ〜！」

セツナは、こけた。

第八話 竜と炎の口付けを

カランらしき街が見えてきたのは、クレブルルに向かっていた人々と別れてほどなくだった。いや、街が見えてきた、というようなものではない。赤々と燃え上がる炎と、濛々と立ち上る黒煙がその所在を教えてくれたのだ。

石柱の街道、その遙か先

「マジかよ、おいっ！」

叫びながらセツナは、駆け足に全力を注いだ。無論、先の人達の話をもったく信じなかったわけではない。むしろ、信じたからこそ、燃え滾る激情の赴くままに駆け出したのだ。

しかし、カランを覆う真紅の猛火は、セツナの脳裏に描き出されたそれよりも遙かに強烈であり、激烈だった。決して、ただの火災などではなかった。放火、などという言葉すら生ぬるく感じられた。遠目に見れば、それは、紅蓮の炎の塊だった。

「いくらなんでもやりすぎだ……！」

セツナは、ふたたび心に火がつくのを認めた。それはやはり、怒りだった。理不尽な暴力に対する、本能的な反動。

地面を蹴る足に全力を込め、飛ぶように疾駆する。

街道を疾走するうちに、たくさんの人々が街道の脇に避難しているのが見えた。カランの住民なのだろう。炎に巻かれた跡が痛々しい人々の姿は、街道で出逢った人々を想起させた。人々の恐れを抱いた瞳が、街道を突っ走るセツナに集中するのは当然の道理だろう。とはいえ、セツナは、人々の相手をしている暇もなかった。

街道を突き抜け、燃え盛る炎の中へ。

そう、それは正に煉獄の業火の中へ突っ込むようなものだった。

燃え盛る紅蓮の炎は、まるで狂ったように舞い踊るかのようであり、その小さな街の建物という建物を燃え上がらせていた。

なにもかもが真っ赤に塗り潰されており、猛烈な熱気は、正常な

感覚を失わせていく。呼吸すらおぼつかない。

だが、セツナに躊躇はなかった。みずからの身を顧みることすらなかった。ただ、前進だけがあつたのだ。

カラン。小さな街だ。中世ヨーロッパを思わせるような、しかし、どこかが根本的に違うような町並み。轟然と燃え盛る火炎の所為で、その全容を正確に把握することは困難だった。いや、そもそも街の入り口に足を踏み入れたばかりである。全容など、わかるはずもないのだ。

「こっつ、こらっつ、君っ！」

突然呼び止められて、セツナは、そちらを振り返った。急いでいるのだ。険悪に睨まざるを得ない。

「なんだよ？ こっちは急いでんだ！」

「ここは危険だ！ すぐ引き返しなさい！」

セツナの叫びを掻き消すほどの大音声を上げてきたのは、若い男だった。二十代そこそこだろうか。全体的に赤みがかって見えるのは、炎に包まれた街の中にいるからに他ならない。ぴっちりと横わけにされた頭髪は、金髪なのだろう。炎に照り輝いていた。その大きな双眸に浮かぶのは、力強い瞳だった。その眼力は、セツナの意気をわずかばかりに押さえ込んでいた。

「それは……無理だ」

声を絞り出すように告げて、セツナは、その男の後方に立ち並ぶものたちを一瞥した。男の部下なのかなんなのか、全員が全員、同じ服装をしていた。制服というよりは軍服に近い格好だった。腰に帯びたのは、いわゆるサーベルという代物なのかもしれない。

「なぜだ！ ここはもう危険なんだ！ 我々の誘導に従い、さっさと避難するんだ！」

男の言葉は、もつともだろう。だれが聞いても正しいと言っただろうし、だれだって、その判断に従うはずだ。

逆巻く猛火は、街の入り口付近一帯をほとんど焼き尽くしていた。こんなところに留まっただけでは、命に危険が及ぶこと間違いない。

しかし、セツナは、頭を振った。だから、なんだというのだろう。「避難したら、それでいいのよ」

「なに？」

男が怪訝な表情をするのは当然だったが。

セツナは、荒ぶる魂そのままに叫んだ。

「この街を焼いた奴がいるんだろ？ そいつは、どうなる！」

「安心しなさい。協会に武装召喚師の出動を要請した。すぐに駆けつけてくれるはずだ！」

なんだ、そんなことか、とでもいいたげな男の表情は、悠長そのものであり、セツナの怒りを加速させるのは十分すぎた。告げる。

「待てねえよ」

「なぜだ！」

「あの子が泣いてた」

セツナは、進路に向き直ると同時に駆け出していた。理由なら、それだけでいいだろう。セツナはそう信じた。少女が泣いていたのだ。命を張る価値は、十二分にあるはずだ。

「おい、君はなにを言って　！？」

制止の声など、途中で聞こえなくなっていた。轟然たる炎の渦が、あらゆる音を遮断したからだ。

炎に飲まれた街の中を、ひた走る。

炎の勢いは留まることを知らず、その猛火の中を進むセツナは、次第に体力が奪われていくのを感じていた。猛烈な熱気の中だ。空気も薄ければ、体力の奪われ方も尋常ではなかった。

見知らぬ街を走り回るだけで、体力を浪費している。

空気を求めて天を仰げば、空の青さもほとんど失われていた。半ばまで紅く染め上げられているのだ。

それでも、セツナは、カランを焼いた男を捜して、必死になって走り続けた。

なぜ、とは思わなかった。理由なら、あの男に告げたのだ。それ以上のものは不要に違いない。

燃え盛る街を、進む。

入り組んだ街ではない。ただ、立ち上る炎の壁や、火柱の所為で、道を見失いがちだった。その上、目的の男が、この街に留まっている保障もなかった。

(よく考えりゃ、いないほうが自然だよな……)

逆を言えば、街をここまで徹底的に焼き尽くした犯人が、いまだに炎が燃え盛る現場に残っている理由がなかった。普通ならば、すぐにでも立ち去るだろう。もし、まだこの町にいるのなら、その男はよほどの狂人に違いない。

それでも、セツナは、諦める気になれなかった。なにか、異様な感覚が、セツナを突き動かしていた。それは、ほんのわずかばかりの違和感だった。いつものセツナなら気にも留めないほど些細なもの。

そしてそれは、セツナの前方に形となって現れた。

「燃える燃えるもつと燃える！ 世界の果てまで焼き尽くせ！」

狂ったような男の大声は、高笑いのようにありながらも、絶望そのものようですらあった。なにに対する絶望なのかは知る由もなければ、知りたくもなかったが。

それは、街の中心辺りだろうか。広い公園らしい空間だった。真ん中に噴水があり、猛然たる業火に彩られた世界で、紅く染まった水の柱が吹き上がる様は、場違いであり異様な光景だった。

その噴水の近くに、その男は立っていた。長身痩躯、長すぎる頭髪は、真紅の猛火に照らされて、明々と燃え上がっているように見えた。実際の色は、よくわからない。そのつり上がった両目に浮かぶ狂気染みた瞳の色彩もまた、正確には判別できなかった。

それほどまでに、カランの街は、炎の赤に塗り潰されていたのだ。痩せ細った長躯に纏うのは、わかり辛いが青みがかつた制服に見えた。あの男たちの身に付けていた軍服に近い意匠ではあったが、全体で見れば明らかに異なる印象を与えていた。その長く細い腕の先、右手には、杖のようなものが握られている。その先端には、

竜の頭部を模した飾り付けがしてあった。

「もつと！ もつとだ！ 世界の果てまで！」

セツナは、男の絶望的な笑い声に対して、怒るよりもむしろ急激に冷えていく自分に驚きを覚えていた。冷静さが取り戻され、すべての感覚を研ぎ澄まされていく。物凄まじい熱気の中で、それは極めて異常な状態だったのかもしれない。

冷やかに、告げる。

「街ひとつ燃やして、世界の果てかよ」

セツナは、一步一步踏みしめるように、男へと近づいていた。公園の中には、住民の憩いのためなのか、いくつものベンチが整然と並べられていた。が、そのどれもが炎に焼かれ、いまにも崩壊寸前の有様だった。公園のそこかしこに植樹された木々も同様である。木々は、火柱の如くそそり立ち、地獄の風景を作り出すのに一役買っていた。

公園の四方を覆う建築物もすべて、紅蓮と燃え上がっていた。

いまさらなにをしても、焼け石に水にもならないだろう。なにもかも、灰と化すのかもしれない。

「なに……？」

男が、セツナを睨んだときには、ふたりの間合いは五メートルもなかった。

セツナは、男の顔が歪んでいくのを見ていた。怒り、なのだろうか。男の表情は、瞬く間に変貌し、悪鬼を連想させるようなものになつていった。しかし、セツナは動じなかった。いや、動じようもなかったというべきだったかもしれない。

吐き捨てる。

「くだらねえ」

「ガキになにがわかる！」

男が、目を見開くと同時に、その右手の杖を振り翳してきた。先端の竜の顎に、火の粉が集まっていくようなイメージ。

セツナは、即座に後ろに飛び退いた。

「わかんねえよ」

男が、杖をこちらに突き出してきた。竜の頭が、こちらに向く。開かれた顎には、拳大の炎の塊が生まれていた。火球でも発射してくるつもりなのだろう。

予感が、セツナの肉体を躍動させた。

「てめえがどうしようもないくらい愚かで救えねえってことくらいしかな」

着地と同時に、セツナの体は、右前方に向かって跳んでいた。

男の声が聞こえた。

ブレイズ・キッツ
「桃色接吻」

男の杖が、咆哮した。竜の口に閃光が生じ、拳大の火球が瞬時に膨張　半径一メートル以上の炎の塊となったそれは、解き放たれた瞬間には、さっきまでセツナが立っていた場所に着弾していた。炸裂し、轟音とともに爆炎となって拡散する。

もし、セツナがあのまま相手の様子を見ていたら、間違いなく直撃を受け、見事に蒸発していただろう。

「それはねえよ!？」

セツナは、絶叫するしかなかった。

第九話 燃えて尽きるは汝か我が

「ほう。中々やるじゃないか、少年」

男の中で自分を示す言葉がガキから少年に変わったことに多少の驚きを覚えながらも、セツナは、一切の油断も抱かなかつた。

わずかな隙や気の緩みは、即ち、死そのものに違いないのだ。

相手は、こちらの隙を見逃すほど甘くはないだろう。先の攻撃の威力を見ればわかる。最初からセツナを殺すつもりだった。

「火竜娘の桃色接吻を避けたのはおまえが初めて」

男が、竜の頭部を模した装飾があるその杖を、頭上高くに掲げた。杖全体は赤一色に見えるのだが、いかんせん炎の中である。正確には認識できずにいた。無論、形状や攻撃手段さえ理解できれば、それで構わないのだが。

「でもないな」

「違うのかよ！」

「三十八人目くらいか」

「結構居るし！ 中途半端だし！」

セツナが全力で以て突っ込みを入れたのは、脊椎反射のようなものだった。彼は元来そういう性格ではない。だが、なぜかその時、その瞬間は、全力で突っ込まざるを得ない有無を言わせぬ空気が、セツナがこれまで地道な努力で築き上げてきた人格、人間性を完膚なきまでに破壊し、一瞬、冷徹なまでの沈黙が、その場を支配した。轟々と燃え盛る炎の音さえも聞こえなくなったような記憶すらある。

「……」

セツナは、召喚されてからこのかた、自分というものを見失いかけていることに気づいた。異世界に飛び出してからの怒涛のような展開に、自己を保ったままで居られるほうもどうかと思うのだが。

セツナは、苦い顔になった。どのような状況であれ、自分を見失

うような男に育った覚えもなければ、そのような情弱な人間に育てられた記憶もない。あるのは、ただ強くあれ、と願った祖父の言葉くらいか。

それもまたさびしいものだど理解しながら、セツナは、ゆっくりと呼吸を整えた。意識を切り替え、感覚を研ぎ澄ます。もちろん、そんなものは形だけであり、戦闘の素人である彼になにができるわけもなかった。

しかし、セツナには、必殺の武器が有るのだ。
「くくくくく」

不意に聞こえてきたのは、男の笑い声だった。それは、心底愉快そうではあったが、セツナにとっては耳障りな音色だった。ひとの神経を逆撫でにするような旋律。不愉快極まりないが、反応は、男を睨むだけに留めておく。いまは、無駄に刺激を与えるべきではないような気がした。

「さて、問おう。少年、君はなにものだ？ なぜ俺の前に現れた？ なぜ俺に殺されにきた？」

男の問いは、当然、だれしもが抱く疑問だっただろう。セツナだって、そう自問しないでもない。なぜ、みずからの命を、圧倒的な死に曝すことができるのだろう。

勝算もなければ、男に勝ったとして、なんらかの見返りが保障されているわけでもない。あったとして、そんなものが自分の命と釣り合はずもない。だれにとっても、自分の命ほど尊いものはないだろう。

当然、例外だってあるにはある。

セツナの場合は、そう。

あの少女の涙は、泣きじゃくる少女の姿は、命を賭けるに値した。セツナは、そう思った。それがすべてだったし、それだけでいいように思える。

「ただの通りすがりの正義の味方さ」

セツナは、思い切り格好つけながら告げて、軽くポーズなども取

つて見せた。紅蓮の炎の渦の中、緊張感は皆無に等しい。自分でも理解できないほどの自信がそうさせるのかもしれない。とはいえ、胸の内では、怒りの炎が渦巻いていることに変わりはない。いまずぐにでも噴き出して、男を焼き尽くさんとしていた。

「その正義感で、俺を止めに来たか？ 狂ってるな」

男が、笑った。その瞳には、寒気を覚えるほどの狂気が揺らめいていた。男が、掲げていた杖をこちらに向けてくる。

「てめえに言われたかねえよ！」

セツナは、地を蹴るようにして駆け出した。前方に腕を掲げ、告げる。

「武装召喚！」

セツナの全身に複雑で不可解な紋様が浮かび上がり、強烈な光が発散した。周囲を覆う獰猛な熱気を吹き飛ばすほどの鮮烈な閃光の中に、どこからともなくなにかが染み出すように出現する。

漆黒の矛。

セツナの召喚武装。

「なるほど。君も武装召喚師か」

男の声音は、驚きに満ちていた。見開かれた双暴は、しかし、すぐさま細められた。

「しかし、術式もなしに召喚するなど、人間の所業ではないな！」

「術式？ なんだそりゃ？」

矛の柄を掴んだセツナは、男の叫び声など一蹴するかのようになり、猛然たる勢いそのままに敵へと殺到した。だが、男の長身が左へ跳んだ。目標を見失ったセツナは、勢いあまって噴水に飛びこみそうになったが、間一髪のところまで急停止して難を逃れたのだった。

「素人か！」

嘲笑うでもない叫びにセツナが振り返ると、男が杖の先端 竜の口をこちらに向けているのが見えた。竜の口腔に、火の粉が集まっていくのが確認できる。目測にしておよそ十メートル。

「悪いか！」

叫び返して、セツナは、矛の柄を握る手に力を込めた。ふたたび、男に向かって突進する。武装召喚のみならず、戦闘に関して素人に過ぎない彼にとつて、敵を倒すには素早く接近して得物を叩きつける以外になかったのだ。

全身全霊の力で、駆ける。その速度は、ただの素人が発揮できるようなものでは当然ありえないほどのものだったが、当のセツナに理解できるはずもない。

彼は、眼前の敵にすべてを集中していた。

「くくく、構わんよ！ 死人に玄人も素人もあるものか」

男が、高らかに謳う。

フェイス・キッス
「桃色接吻！」

杖の竜が咆哮し、巨大な火球が解き放たれた。それは、一瞬にして、セツナの視界を深紅で塗り潰した。膨大な熱量がもたらす圧倒的な痛みの中で、セツナは、魂の命じるままに雄叫びを上げていた。「おおおおおおおおお！」

絶叫とともに、矛を振り下ろす。

網膜を焼き尽くした紅蓮が、真つ二つに両断された。いや、火球を縦一文字に切り裂いたのは、セツナの意志だ。セツナが振り下ろした矛の切っ先が、極至近距離にまで迫っていた超高温の火球をあざやかに断ち切ったのだ。ふたつに切り裂かれた火球は、セツナの両側へと流れていく。

無論、無傷で済むはずがない。炎の塊が放つ熱気によって、制服は愚か皮膚や頭髮さえも焼け焦げていた。強烈な痛みが、前進を苛んでいた。

だが、それだけだ。

（行ける！）

セツナは、口の端に笑みを刻むと、一瞬の躊躇もなく前進を再開した。前方では、男の細面が驚愕に歪んでいるのがはっきりと見えていた。この場合、街を彩る地獄の業火に感謝すべきなのだろうか。間の抜けた顔が、セツナの脳裏にはっきりと刻み付けられた。

「ただの力技ではないか……！」

取り乱したような男の反応は、逆ギレに他ならない。

「だったらなんだよ！」

セツナは叫び返すのと同時に、脚に力を込めた。思い切り地面を蹴りつけ、その反動によって肉体を加速させた。間合いはもはや五メートルもなかった。一足飛びに、敵との距離を縮める。ゼロにする必要はない。矛の切っ先は、セツナが思った以上に遠くまで届くのだ。

「くくく。確かにどうでもいいことだ」

眼前、男の双眸に狂気がきらめいた。男が竜の杖を、豪快に振り回す。杖の先端　竜の口からは、無数の火の粉のようなものが拡散されていく。紅く輝く数多の粒子が、男の周囲を、セツナの視界をきらびやかに彩った。

セツナは、嫌な予感を覚えながらも、その紅い光の中を突っ切ろうとした。跳躍中である。瞬時に方向転換することなど不可能だった。そうである以上、火の粉の群れをもとめせずに進むしかない。矛が届く距離まで。

男が、振り終えた杖を頭上で回転させた。そして、石突を足元の地面に叩きつける。

「バッキング・クック紅蓮抱擁！」

その一々名称を叫ぶというのはどうなのか？　などと考える余裕が、セツナにあるはずもなかった。

全周囲に浮遊していたすべての火の粉が、一斉に、爆発的に膨張したのだ。それは、さながら爆炎の壁であり、男の周囲四方に構築された炎の防壁のようですらあった。火の粉の狭間に飛び込んでいたセツナは、膨れ上がる爆炎に全身を焼かれ、凄まじいまでの高熱の痛みに苦悶の叫びを上げていた。

「ぐあああああああああ！？」

それでも、セツナの視界は、いまにも勝ち誇らんとする男の表情を捉えていた。一挙手一投足に注視していた。全身大火傷を負った

に違いないと確信するほどの激痛の中で、いまにも崩れ落ちそうな意識をどうにかして食い止める。

(持て！ 持つてくれ、俺の意識……！)

それはもはや懇願に近かった。自分自身に懇願することの愚かさ
は重々承知していたが、しかし、セツナはなりふり構っていられな
かった。消し飛びそうな意識を保たせる方法など、ほかに思いつく
はずもない。

すべてを諦めてしまえば、楽になるのも知ってはいたが。

セツナは、男が狂気 of 笑みを浮かべるのを認めた。揺らめく視界
の真ん中、痩せ細った男の顔は、まるで幽鬼のそれのように見えな
くもなかった。

「燃え尽きる」

男が、杖の先端をこちらに掲げてきた。竜の口腔に、赤い光が収
束していく。桃色接吻。プレイズ・キッス 放たれたとき、セツナの命は終わる。

「！」

セツナは、双眸を見開いた。紅蓮と燃える世界の中心で、セツナ
の壊れいく意識は、それでも生への執着を手離さない。ただ、右腕
を振り下ろす。袈裟斬りの要領だった。漆黒の矛の切っ先は、爆炎
の層を断ち切りながら、黒い軌跡を虚空に刻み、そして、火球を撃
ち放とうとする竜の首を切り裂いた。

竜の頭部を模した装飾が壊れるのと同時に、口内に蓄積された炎
が霧散し、魔法の杖は、どこにでもありそうな代物に成り果ててし
まった。

男の顔が、驚愕に歪む。

その瞬間だけ、セツナは、全身の痛みをも忘れた。踏み込み、囁
く。

「てめえがな」

セツナが、男の額を撃ち抜くほどの勢いで叩きつけたのは、矛の
石突だった。

「なぜだ……！？」

男は、愕然とした表情のまま、地面に倒れていった。最後の一撃は、セツナが残りの力を振り絞って繰り出したものなのだ。脳震盪は間違いないし、打ち所が悪ければ、死んでいてもおかしくはないだろう。

とはいえ。

「なぜかな……」

セツナは、男の疑問を反芻しながら、頭上を仰いだ。赤々と焼かれた空は、世界の終焉を告げているかのようですらあった。

第十話 遅れてきた女

焦熱の中で。

轟然と燃え盛る紅蓮の炎に抱かれた小さな街の片隅で。

セツナは、いまにも散り散りになりそうな意識を辛くも繋ぎ止めていた。彼の全身を焼いた炎は、強烈な痛みとなって、未だに体の内外で狂ったようにのた打ち回り、体中の神経をかきむしりたくなるほどだった。

それでも、彼は、立っている。

(なんでだろうな)

自問とともに、セツナは、視線を下ろした。周囲には、煉獄の一風景とでも言うべき惨状が広がっている。カランという小さな街の公園。園内の器物はもろろんのこと、四方に乱立する建物もまた、真紅の猛火に包まれていた。

その公園の中央付近。

彼の眼前には、男が倒れていた。長身瘦躯。至近距離で見れば、黒髪だということがよくわかった。制服のような着衣は、薄めの青色らしい。もはや竜の頭の装飾が失われた杖を、意識を失ったいまもしっかりと握り締めていた。

かりゅうじょう
火竜娘。

男の召喚武装なのだろうか。召喚武装と一般的な武器の違いがよくわからないセツナには、やはり判断のしようがない。とはいえ、その杖の力は身を以て知っていた。火を吹き、爆炎を生み出し、破壊を撒き散らす 恐るべき代物だった。

杖の炎はまた、街を焼き、セツナの全身を焦がした。

そして、いまもお、その勢いは衰えるところを知らず、明日にはカランは灰燼と化しているだろう。

そのときには、セツナの命もまた、燃え尽きているのかもしれない。

(ちつ……)

胸中の舌打ちは、己のうかつさに対するものではない。炎の領域に飛び込み、愚かにも戦いを挑んだのは他ならぬ自分自身の意志なのだ。誰を恨むこともなければ、みずからの行動に後悔はなかった。ただひとつだけ、無念に想うのだ。

(俺じゃあ、無理なのかよ)

朦朧とする意識の狭間、セツナは、周囲を見回した。公園の周辺に立ち並ぶ建築物は、さながら炎の塔のようであり、セツナの無力さを嘲笑うでもなく、ただ無慈悲なまでに猛り狂っていた。

その炎を消すことはできないのだろうか。

この街を地獄に変えた炎を消し去ることは、自分には無理なのだろうか。

セツナは、矛の柄を握る手に力を込めた。不意に、気づく。

(矛が……ある！)

セツナは、矛を両手で握ると、穂先を足元に突き立てた。役目を終えれば消えるというセツナの仮説において、黒き矛は既に役目を終えているはずだった。目の前で気絶している男を叩きのめすためだけに召喚したのだ。その目的は達成している。

それでも消えないのだ。

(やり残したことがあるんだな……！)

それは、セツナの思い込みなのかもしれない。最初から、召喚武装に対する認識が間違っているのかもしれない。召喚と帰還の原理など知るはずもないのだ。間違っついても仕方がない。

しかし、セツナは、このときばかりは、自分の想いが見当外れではないと確信していた。柄を握る両手に、さらなる力を込めた。叫ぶ。

「消し去れ！」

瞬間、石突に埋め込まれた宝玉が、まばゆい光を発した。紺青の閃光は、セツナの網膜をあざやかに染め上げ、意識を突き抜けていく。

なにか、声が聞こえたような気がした。

(……なんだ?)

疑問を上げたものの、違和感は一瞬にして消滅し、セツナの意識に残留したのはある種の爽快感だった。しかし、それもまた、全身の激痛によって掻き消されたが。

矛の宝玉が発した碧い光は、瞬く間に公園中を包み込むと、さらにその勢力を増した。あつという間に、カラン全域へと至る。

セツナは、矛の光がカラン中に行き渡ったことを意識のどこかで把握した。そして、無意識のうちに理解する。矛の光が為そうとすること、そのすべてを。

セツナは、命じた。

「やれ」

その一言とともに、カラン全域に拡散していた光が、一斉に、宝玉へと逆流し出した。堰を切ったように。

それはまさに光の洪水だった。怒涛の如くセツナへと押し寄せ、紺青の奔流は、しかし、光だけではない。莫大な熱気を引き連れてきていた。

カラン全域を炎上させていた紅蓮の業火、そのすべてが、光の洪水の圧倒的な力に押し流されてきたのだ。抗う術も持たない炎は、光とともに、矛の宝玉へと吸い込まれていく。

紺青の光と真紅の炎が描き出す多重螺旋の中心で、セツナは、ただただ呆気にとられていた。理解はしていたのだ。矛が、なにをなそうとしたのかは、わかっていたつもりだったのだ。しかし、想像を遥かに超える事象を目の当たりにして、セツナは、あんどりと口を開けるしかなかった。

そして、青き光に抱かれた猛火は、もはやその熱気を持つ破壊力を発揮することもかなわず、矛を持つセツナに傷ひとつけぬまま、矛の宝玉に完全に吸い込まれていった。すべて、ものの数秒の出来事だった。

呆然とするセツナの全周囲からは、炎という炎が消え失せ、耳に

こびりついたはずの轟然たる猛火の旋律もどこかにいつてしまっていた。頭上には青空が取り戻され、わずか数秒前まで広がっていた地獄の光景が、嘘のようだった。

無論、業火に焼かれていた建物が無事であるはずがない。炎が消えただけで、すべてが元通りになるはずもなかった。

セツナの視界に映るのは、焼き尽くされ、廃墟と化した町並みだった。その虚脱感のみをもたらすような世界に横たわるのは、無常なまでの沈黙であり、セツナの為したことがなんの意味もないと告げてくるかのようですらあった。

確かに無意味だったのかもしれない。

セツナは、矛に寄りかかるようになりながら、自嘲気味に笑った。もはや彼の体力は、肉体支えるほども残っていなかった。あとは地面に崩れ落ち、意識を失うだけだろう。そして、それは彼の人生の最後なのかもしれない。

火竜娘なる杖の炎が焼いたのはセツナの全身であり、刻まれた傷痕は、他人からすれば目を背けたくなるほどの有様だったのだ。大火傷、などというものですらない。もつと極めて重大な傷だった。致命傷といって差し支えないのかもしれない。

しかし。

(いいさ。これで)

なぜか、そんな気持ちだった。

とても清しい風が、セツナの心の中を吹き抜けていった。こんな感情を抱くのは、生まれてこの方、初めてに違いなかった。

悔いは、ない。

もつと生きたいとは思うのだ。死にたくなどない。こんなところで死んでも、無駄死に以外のなものでもなかった。

だが、それでも、心の中を吹き抜ける涼風は、セツナの意識から生死を取り払っていく。生への執着が薄れ、死への恐怖がなくなっていく。

(こんなもんだろ、俺の人生なんて)

それは諦観なのかもしれない。

セツナは、ふと笑いたくなくなった。なぜか、この現状のすべてを笑い飛ばしたくなってしまった。しかし、笑い声など出るはずもなかった。そんな気力も体力も、彼には残されていなかったのだ。

朦朧とした意識の片隅で、いくつもの靴音が聞こえた。物音ひとつなかった街中に、その足音は異様なほどに反響していた。

「おい君!？」

セツナは、男の驚きに満ちた声に、そちらを振り返ろうとして、そのまま転倒した。流転する視界の端っこに、若い金髪の男が見えた。心底驚いた青年の表情は、間抜けそのものではあったが、いまはどうでもいいことに違いない。

睡魔の足音が聞こえていた。

フェアリア＝ベルフェアリアにとって、取り返しのつかない失態などはなかった。彼女の二十二年の人生を振り返っても、そのような失敗は一度たりともなかった。断じて。覆しようのない過ちを犯したことなくないのだ。

もちろん、そんなものが誇りになどなるはずもないし、その程度のことを自信の拠り所とするほど、彼女は脆弱でも無力でもなかった。

しかし、と、彼女は頭を振った。

「なんてことなの……」

呆然と、つぶやく。

カランの街、その東門の残骸を見上げながら、フェアリアは、みずからの過失について考えざるを得なかった。見た目にも若い女だ。やや青みがかった黒髪はやや短め、視力が弱いのか、赤い縁の眼鏡

をかけていた。眉は細く、切れ長な眼の虹彩は緑柱玉のようだった。整った顔立ちと言えるだろう。本来ならどこか冷やややかな印象を与える顔つきも、いまは落胆一色に染まっていた。

細身で引き締まった肢体でありながら、そのしなやかな体のライオンは女性であることを主張してやまなかった。それは、身に付けている衣服が原因でもあるのだろう。黒と赤を基調としたその装束は、彼女の肢体にぴったりとフィットしているらしく、胸部や臀部の凹凸を強調していた。

「間に合わなかった……」

彼女は、ただ愕然と東門を仰いでいた。もはやそれは門の体すらなしていない。焼け落ちた二本の柱があり、その周囲に門扉が崩れ落ちていた。

今やその名残すら見つからないが、昔日の栄光そのものたるカランの東門の雄姿は、国内では有名だったのだ。その東門が失われたそれは、カランにとって、このガンディアにとって大きな損失に違いなかった。

いや、それだけではない。

ファリアは、東門の亡骸を越えて、カランの市街に進んだ。東門から西門へと至る通りへと入る。そこでまた、彼女はすぐに足を止めそうになったが、ぐっと堪えた。前進を止めることは許されない。焼け野原だった。絶望的なまでの惨状だった。それは、戦禍が過ぎ去った跡といって差し支えないだろう。

ファリアは、通りの中ほどで、ようやく足を止めた。周囲には、彼女と同様に呆然とした表情の人々が、なにかに取り付かれたかのようにさまよっている。その姿は魂を失った亡者のようであり、絶望そのもののように見えなくもなかった。

「これは……こんな……!？」

彼女の胸に、さまざまな思いが去来し、無数の記憶が脳裏を駆け巡った。通りの脇に立ち並ぶ家々、点在する商店や雑居ビル、大小さまざまな建物が、このカランという街に創り上げた小さな混沌は、

たった半日足らずで失われたのだ。

この住み難く、歩き辛い上に覚え難い街が大好きだった。生まれ育った町ではないし、こちらにきて何年も経っていないのだが。なにかを気に入るのに、じかんはそれほど関係ないだろう。

彼女は、震える胸に手を当てた。沸きあがるのは怒りであり悲しみであり、なにもできなかつた己への敵意だった。自己を呪ったところで、現実には覆らない。そんなことは彼女だって理解していた。しかし、行き場のない怒りは、内へ向かう。

「ファリア！」

「なにかしら？」

ファリアは、背後からの聞き知った男の大声に、幾分不機嫌なまなざしを向けた。それは彼女にとってとても珍しいことではあつた。自身への怒りを他者にぶつけることなど、あつてはならないのだ。

振り返つた彼女の視線の先には、思つた通りサリス＝エリオンの姿があつた。金髪碧眼の好青年という言葉が良く似合う若者だった。規定通りにぴつちりと横わけにされた髪型からして堅物そのものように見られがちな彼の本性を知っているのは、ファリアだけ、ということもない。色白の肌も、軍服染みた制服も、黒々と煤けていた。

「遅い到着、ご苦労様」

「相変わらず嫌みつたらしいわね」

軽く手を上げてきたサリスに対して、ファリアもまた、軽く手を上げて返答した。サリスの爽やかな笑顔は、いつも以上に嫌味に感じ取れて、彼女はそんな自分に嫌気が差した。

「そんなことはないさ。君たちの迅速な対応のおかげで、最悪の事態だけは免れたんだ」

「へ？」

生返事を浮かべて、即座にファリアは後悔した。きつととてつもなく間抜けな表情になつていたに違いない。ほかの相手ならともかく、サリスの前で曝すべき表情ではない。きつと、つまらないネタ

にされるのが落ちだ。

「街を焼いた武装召喚師を倒したのって、君たちのお仲間だろう？
違うのかい？」

サリスの言葉の意味は、寸分の間違いもなく理解できたはずだっ
た。しかし、ファリアには、なんのことだかさっぱり理解できず、
またしても間の抜けた声を上げるしかなかったのだった。

「はあ？」

第十一話 駄目っばい

気づくと、セツナの眼前には荒涼たる大地が広がっていた。

草木一本生えておらず、生き物の気配は微塵も感じられなかった。吹き抜ける風は寒々しく、青ざめた空が頭上を覆い尽くしている。流れる雲はまばらで、太陽は見当たらない。

「世界の果てか？」

彼はぽつりとつぶやいて、すぐさま苦笑した。荒野は、地平の果てまで続いているようだった。つまり、ここは果てではない。

「死んだのかな？ 俺……」

あまり実感はなかった。無論、瀕死の重傷を負ったのは確かである。記憶に間違いがなければ、全身に大火傷を負ったはずだった。

それは、生物にとって致命的なダメージに違いなく、死の宣告に等しいように思われた。

とはいえ、それもまた素人考えに過ぎない。浅はかな、医療の心得も持たない子供の戯言だった。しかし、全身を焼かれたセツナの実感としては、死んだとしても、なんらおかしくはないのだ。

「だとしたら、地獄だよな？」

つぶやいて、セツナは、軽く肩を竦めた。ため息をつく。悪人の末路は地獄に決まっているが、果たして、本当に地獄や天国といったものが存在するのだろうか。もし実在するのだとしても、異世界に召喚されたものの魂は、どうやって地獄や天国に辿り着くのだろう。

命を終えたものは、召喚の役目を果たしたということになるのだろうか。

「異世界……か」

セツナは、みずからの両手を見下ろした。紅蓮の爆炎に焼かれたはずの素肌に傷痕ひとつ見当たらないのは、ここが現実とは乖離した世界であることの証明に他ならない。現実の続きならば、両手は

醜く焼け爛れているはずだ。目を背けたくなるほどに。

手を握り、拳を作る。その感覚は、極めて現実感を伴うものだったが。

「……？」

ふと、妙な気配を感じて、セツナは顔を上げた。視線の先、荒れ果て、死に絶えたような大地に、なにか黒々としたものが突き立っていた。絶望的なまでの禍々しさを秘めた漆黒の物体は、長柄の武器のように見えた。長い穂先を持ち、その刃は鈍い光を放っている。長大な柄の先、石突には宝石が埋め込まれており、それもまた、淡い輝きを発していた。

黒き矛。

セツナの召喚武装。

「おまえは、どうして俺の召喚に応じたんだ？」

しかし、セツナの問いは、突然の暴風に掻き消された。強烈な突風は、彼の視界を激しく揺さぶり、歪めていく。それはもはや強風などというものではなかった。ただただ猛烈な大気の奔流。

セツナは、抗うことも許されなかった。

意識が、消し飛ぶ。

「！？」

激痛とともに瞼を抉じ開けざるを得なかったセツナの視界に飛び込んできたのは、くりっとした愛らしい双眸だった。とても心配そうな少女の顔が、すぐ目の前にあったのだ。透き通るような青い瞳には、セツナのひどくやつれた顔が映りこんでいた。

「あ！」

不意に、少女が、表情を綻ばせた。その喜びに満ちた顔は、まるで天使の微笑のように思えた。どう考えても自分に向けられるべき表情ではないとセツナは考えたが、しかし、そんな思索は即座に打

ち消してしまうよりほかなかった。意識を覚醒させた激痛と同種の痛みが、全身に悲鳴を上げさせていた。

激流のように押し寄せる痛みは、情け容赦なく、セツナの体中を駆け巡っていた。

「気がついたの！ お兄ちゃん、気がついた！」

少女が、セツナの頭に響くほどの大声をあげたのは、接近しすぎていた顔を離してからではあった。しかしながら、彼女の声がセツナの頭の中できんきんと反響するのは、少女が叫ぶことに全身全霊を注いだからに違いない。

物凄い大声だった。

「ぐうぐうぐう」

セツナは、体中を走り回る激痛と、頭の中を反響する高音のふたつに挟撃されて、悶絶しそうになっていた。目には涙さえ浮かべながらも、一方で、この物凄まじい痛みが生きている実感だという事実気づいて、セツナは、はっとした。

（生きてる……？）

視野一杯に広がるのは、白い天井だった。いや、それは天井と言いつつ切れるほど確かな代物には見えなかった。見るからに強度のなさそうな布地の天蓋。テントのようなものなのだろう。ともかくもセツナは、自分の置かれている状況が、なんとなくわかりかけてきていた。

（助かったのか、俺）

どうやら、その通りらしかった。

全身を掻き毟るような痛みの中では、首を動かさず、視線を巡らせるだけで一苦労だった。苦痛にうめきながら、それでもなんとかして、天井に向けて固定されていた視線を動かしていく。

セツナの思った通りテントの中らしかった。張り巡らされた天幕の中の空間は、決して狭くはない。もちろん、広いと言えるほどの空間もなかったが。セツナひとりに宛がわれたのだとしたら、十分すぎるほどだった。

特に、なにがあるわけでもない。剥き出しの地面に置かれたベッドの上に、セツナは寝かされているらしい。四方は布製の覆いで囲われており、四つ角には簡素な柱が立てられていた。覆いは、地面に固定されてもいないのだろう。時より吹き抜ける風に捲れて、外の様子が垣間見えた。

もつとも、風に揺れる覆いの隙間に覗いたのは、別の天幕の覆いでしかなかったが。

(そうか。そうだな)

セツナは、ひとり納得して、暗澹たる気分になった。とはいえ、激痛が、沈んでいく心を強引にでも引き上げてしまおうのだが。

(なにもかも、燃え尽きたんだ……)

ひとも街も、なにもかも。

あの男ひとりの手にかかり、カランは地獄と化した。男の杖が放った炎によつて、紅蓮の炎に包まれ、焼き尽くされたのだ。

セツナが到着したのは、ほとんどのものが燃やされた後だった。遅すぎたのだ。

なにもかもが、遅すぎた。

(……)

セツナは、口惜しさに歯噛みしたものの、つぎの瞬間、自嘲とともに笑うしかなかった。もっと早く辿り着いたところで、どうだというのだろう。あの男の放火のすべてを防げたとしても考えているのだろうか。

そんなことはありえない。

断定とともに、セツナは、目を細めた。あの男の炎を完全に防ぐことなど、できるはずがなかった。そもそも、街が燃えていなければ、男の存在を認知することもなかったはずだ。あんな場所で、高笑いでもしていなければ、見過ごしていたとしてもおかしくはなかった。

そして、男が街に火を放っていないければ、セツナが矛を向けることはなかった。

(……?)

セツナは、いくつかの足音がこのテントに近づいてくるのを認めて、首をそちらに向けた。そして彼は、全身の激痛が静まる気配もなければ、わずかでも和らぐような兆候すら感じられないことに、軽く絶望すら抱きかけていた。それはどうやら、火傷の痛みではないようにも思えるのだが、果たして。

不意に、布の幕が開けられたかと思うと、さっきの少女が勢いよく飛び込んできた。

「お兄ちゃん、もうだいじょうぶなの！」

少女が、満面の笑顔で告げてきた言葉の意味が理解できず、セツナは、首を捻ろうとしてやめた。体をちよつとでも動かすと、痛みが、激しさを増すのだ。それは、だれもがよく知る痛みに似ていた。「ここは一応病室ということになっているはずよ、エリナ。大声を出しちゃ駄目じゃない」

春風のような声とともにテントの中に入ってきたのは、若い女性だった。少女の無作法にあきれたような、それでいて慈しみが感じられる声音は、セツナの耳朶にも心地よい。

やや青みを帯びた黒髪に、エメラルドグリーンの瞳を持っていた。どこか理知的に見えるのは、赤い縁の眼鏡のおかげというわけでもない。彼女自身の持つ空気なのだろう。

華奢な肢体を包むのは、女性特有の凹凸を強調するような衣服だった。黒と赤を基調とした、どこか暗い印象を与える装束。

「ごめんなさい！」

「ふふ」

彼女が笑ったのは、少女が結局、大声を抑えることができないからだろう。なにか興奮でもしているのだろうか。かくいうセツナは、その女性のスタイルに目を奪われてはいたが。

セツナが女の肢体に見とれていると、

「？」

少女が小首を傾げる仕草もまた、大層可愛らしいものではあった。

しかし、セツナの心を射止めるようなものでもない。そしてそれは致し方ないことなのだ。セツナは、年下に興味を持てなかった。

(いや、そういうことではなくて、だな)

心の中で状況を整理するようにつばやいて、セツナは、少しばかり深呼吸した。女の登場に取り乱しすぎた己を恥じたのだ。冷静さを取り戻すために、空気を吸い、吐く。

女性の不思議そうなまなざしが、そこはかとなく痛い。

「だいじょうぶですか？」

「え、ああ、うん。だ、だいじょうぶですとも！」

こちらの様子がおかしかったからだろう。幾分心配そうな彼女の表情に、セツナは、無理やり笑顔を作って見せた。引き攣った表情を笑顔というのなら、やはりそれは立派な笑顔だったはずだ。自分に言い聞かせて、セツナは、胸中で拳を握った。だいじょうぶ、いける。

とは、いえ。

「ぐ、ぎあああああああああああああ」

セツナは、絶叫した。

無理に笑顔を作ったことが原因なのか、想像を絶するほどの痛みとなつてセツナの全身を駆け抜けたのだ。

「駄目っばいの！」

ベッドの上で突っ伏したセツナに追い討ちをかけたのは、エリナという少女の一言だった。

第十二話 ファリア＝ベルファリア

「わたしは、大陸召喚師協会ガンディア支部カラン地区担当官ファリア＝ベルファリア。彼女は、エリナ＝カローヌ」

「よろしくなの！」

「はあ」

セツナが、生返事を浮かべてしまったのも無理はなかっただろう。彼女 ファリア＝ベルファリアの自己紹介があまりにも唐突でありすぎたのだ。エリナの元気一杯な挨拶はともかくとして、だ。

セツナが全身を苛む激痛にひとしきり悶えまくった直後、である。セツナは、痛みとの格闘をなんとか引き分けに持ち込めたことに安堵していたのだ。そんなとき、突然に自己紹介をされれば、反応が疎かになってしまうのも仕方がない。とはいえ、ほかにどのタイミングで彼女が自分の存在について語りだすべきか、セツナには想像もできなかったが。

「えーと」

セツナは、とりあえず、言葉を搜して視線をさまよわせた。ベッドの上、上体を起こすことさえもはや諦めている。体を動かすだけで激痛が生じるのだ。それならいっそのこと、動かないほうが賢明な判断に違いない。視界が横向きに固定されるのは不便に他ならぬいし、行儀も悪いのだが、見栄を張って体中の痛みと戦い続けるなど、考えるだけで恐ろしい。

ファリアは、ベッドで横向きに寝ているセツナのすぐ目の前にいた。天幕内にあったらしいパイプ椅子に腰かけている。膝の上に乗せた書類らしきものに手を置き、こちらを見ていた。

エリナはというと、ベッドの縁に腰掛け、セツナに向かって笑いかけてきたり、ファリナに笑顔を見せたりしていた。愛らしい少女だ。

セツナは、できる限り体に力を入れないようにして、嘆息した。

「なにがなんだかよくわからん」

「でしょうね。わたしにも、よくわからないのです」

と、即座に同意してきたフェアリアではあったが、彼女の「よくわからない」とセツナの「よくわからない」では意味がまるで違うのだろう。セツナが理解できないのは、フェアリアのことを含めたほとんどすべてのことである。この世界に関する事柄は無論のこと、武装召喚の知識さえも持っていないのだ。

なにも知らないのとほとんど同じだろう。セツナは、その事実を愕然としながらも、認めた。しかし、必要であろう知識ひとつ教えられなかったアズマリアへの悪態は、不思議と湧いてこなかった。尋ねる。

「なにが？」

「まず、あなたがなにものなのか。ざつと書類に目を通し、支部に問い合わせても見ましたが、あなたのような武装召喚師の情報はありませんでした。つまり、未登録の武装召喚師ということになります。そして、未登録の武装召喚師であるあなたが、なにゆえ、命の危険を冒してまでランス＝ブレインの暴走を止めてくださったのか。それは、本来ならば、要請を受けた協会の仕事であり、協会に所属する武装召喚師たるわたしの役目だったので」

澁みなく言葉をまくし立ててきたフェアリアに、セツナは少なからず呆気に取られてしまった。

「あ、いや、まあ、なんだ。少し、落ち着こう」

「わたしは落ち着いています。ではまず、あなたはなにものなのですか？ 見たところ、この国の方ではないようですが……」

「ああ、そうだな。俺はこの国の人間じゃない」

（そもそもこの世界の人間ですらないんだけどな）

それは、ここで言うべきことではないような気がした。見知らぬ世界。無用な混乱を起こすような真似はできる限り避けるべきだろう。もつとも、セツナ自身、自分のその考えを守りきれるかどうか自信はなかったが。

なにせ、猛火に包まれた街に突っ込んでしまったという前科がある。結果的に生きているからいいものの、命を落とすことも十分にありえたのだ。セツナは、今更ながら背筋に寒いものを感じていた。「俺は神矢……セツナカミヤ。見ての通り、ぴっちぴちの十七歳！」

セツナは、体が自由に動くのならば、全力で跳ね起きて、あまつさえ指でピースサインを作るほどの勢いで叫んでいた。そして、激痛にうめく。大声を上げすぎたのだろう。

エリナがくすくすと笑っているのは、セツナが、元気よく声を張り上げた瞬間に苦痛に悶えたからだろう。とはいえ、恨めしげに彼女を見遣ることはない。すべて、己の責任である。

「セツナカミヤ……カミヤ……？」

「いや、引つかかるところはそこじゃないから！」

怪訝な表情で彼の名を反芻するファリアに対し、セツナは、恥ずかしさのあまり顔面を真っ赤に燃え上がらせた。それは、軽くボケたつもりが、まったく気づいてもらえなかったときの恥ずかしさに似ていた。もちろん、セツナはボケたつもりはない。ただ、全力で空回りしただけだ。

「いえ、すいません。どこかで聞いたことがあるような気がしてものですから。それでは、セツナカミヤさん」

「ちよつと、待ってくれ」

セツナは、ファリアのせりふに割り込むようにして言った。彼女の言葉には多少の引掛かりを覚えたものの、セツナには、そんなことよりも気になることがあったのだ。

「はい？」

「さつきからすっごく気になってたんだが、なんでそんな口調なんだ？」

「変ですか？」

ファリアが小首を傾げる。その仕草は、彼女を必要以上に幼く見せた。その瞬間だけ、美人というよりは可憐な少女そのものであり、

セツナは、目を瞬かせた。それは、一瞬の幻視だったのかもしれない。答える。

「……いや、変じゃないんだけど、さ。なんか歯痒いというか、こそばゆいような、なんというか、その、ざつくばらんに行こう！」
要するに、セツナは、堅苦しいのが苦手だったのだ。硬い口調で長々と会話するなど、拷問以外のなにものでもないと思っていた。敬語ひとつまともに使えないのだ。それは学生の身分としてもどうなのだろうと、彼自身思わなくてもなかったが、社会に出るまでに否が応でも身につくだろうと高をくくっていたのだ。

そうしたら、異世界に召喚されてしまった。

「セツナさんがそう望まれるのでしたら」

「セツナでいいよ。どう見ても俺のほうが年下だし」

セツナは、言うてから、女性に年齢の話題は禁句だったかとも考えたが、一方で、二十代前半にしか見えない相手になら構わないのかもしれないと思いついた。ただしも、年齢を気にするような年頃ではないだろう。もっとも、それはセツナの浅慮かもしれないのだが、この際、彼は深くは考えないことにしていた。

「そう？　じゃあ、セツナ。もう少し、質問してもいいかしら？」

「ああ。俺もいろいろ聞いておきたいことがあるし」

セツナは、ファリアの様子に特別な変化が見受けられないことに安堵した。

そして、寝たままというのは、どうにも辛いものだと思いついてもいた。第一に、無作法極まりない。こちらが動けないのは彼女も知っているのだろうが、それにしただって、行儀が悪いことに変わりはないのだ。それはよくない。

作法にうるさい家庭に育ったわけではないし、堅苦しさとか敬語は苦手なのだが、なぜかセツナは、ひと前での行儀だけは気になった。なぜなのかは、本人にもよくわからない。親の影響なのか、どうか。

セツナは、思索した。なんとかかして、全身の痛みを抑えられない

ものだろうか。

痛み。

全身を焼いた猛火の残り火の如き、大火傷の痛みではないような気がする。そういう外傷を起因とする痛みとは、なにかが根本的に違うのだ。

（体が動く痛い……か）

胸中つぶやいて、はっとセツナは気づいた。それは世紀の発見のようでもあり、灯台下暗しのようなものでもあり、そうかと思えば、どうでもいい答えのような気がしなくてもなかった。全身から力が抜けるのを止める気力すら湧かない。

（筋肉痛かよ）

セツナは、ただただ、胸中で突っ込むしかなかった。

第十三話 ありがとう

ガンディア。

小さな国だという。

イルス・ヴァレの海に浮かぶワーグラーン大陸の南部に、密集するように存在する小国家群があり、そのうちの一国がこのガンディアという王国らしい。

王都ガンディオンを中心とする狭い領土には、王都のほかにもマルダールという都市と、カラン、メル、クレブルといった小さな街がある。総人口は、二十万人にも届かないそうだ。

本当に小さな国であり、建国から今日に至るまで、領土の死守で手一杯だったのだとか。領土の拡大など夢のまた夢であり、偉大な先王の死去に伴い、その夢はもはや妄想に等しくなってしまった、という。

そんな話まで聞かされてようやく解放されたセツナは、テントの真っ白な天井をぼんやりと眺めていた。ファリアとの会話　　というよりは事情聴取に等しいそれは、セツナに精神的な疲労を強いたのだ。身じろぎひとつする気力もなかった。

しかし、想像を絶するほどの筋肉痛に悩まされているセツナにとっては、小指ひとつ動かすこと自体が苦痛なのだ。動きたくもない（ありがとう……か）

セツナが胸中で反芻したその言葉は、ファリアの口から紡がれた言葉であり、そのどこかこそばゆい音の響きは、彼女が去ったいまも彼の耳朵をくすぐり続けていた。

「ありがとう」

「へ？」

唐突としか言いようのないファリアの感謝の言葉に、セツナは、奇妙な表情にならざるを得なかった。当然だろう。セツナが彼女のためになにかをしたことはないのだ。感謝をされる謂れはない。

それは、ファリアによるセツナへの事情聴取とも尋問とも取れる、質問の嵐が止んでからのことだ。

セツナは、もの凄まじいまでの疑問や質問の嵐によって、心身ともはずたずたに切り裂かれたかのような心境であり、疲労困憊といった有様だったのだ。

そんな状況で、突然、感謝されたとしても、生返事を浮かべるしかなかった。

「あなたのおかげでエリナが笑顔を取り戻したって、イサリナさん

エリナの母親よ から聞かされたのよ」

そう続けるファリアは、微笑を浮かべていた。恐るべき質問の嵐を巻き起こした張本人とは、とても同一人物には見えないほどの微笑みだった。

一瞬、見とれてしまいそうになるのをなんとか振り払って、セツナは、疑問を口にした。

「俺のおかげ？」

「エリナがそう言っているわ」

ファリナが、優しげなまなざしをベッドの縁に腰掛ける少女に向ける。

「うん！ お兄ちゃんのおかげなの！」

エリナの屈託のない笑顔は、セツナには眩しすぎた。真夏の太陽ほどの激しさはないにせよ、日の光に似た輝きを発していた。見つめていることもかなわない。

「俺は、なにも……」

セツナは、エリナの笑顔から目を逸らすと、視線をベッドの上に這わせた。真っ白なシートには汚れひとつ見当たらない。テントの

中は、ファリアの言った通り病室そのものだった。

「いいえ！」

力強い声音に驚いて、セツナは、ファリアに目を向けるしかなかった。彼女の顔から笑みは消えており、真摯なまなざしがセツナを見据えていた。

息を呑むほどに真剣な彼女の表情は、束の間、セツナから痛みを忘れさせた。

「セツナ、あなたは大変なことをしたのよ？ カランを焼き、多くの人命を奪った武装召喚師を打倒する。そんなこと、どこのだれができるというの？ わたしは間に合わず、警備隊の連中なんて当てにはならない。騎士団の出動を待っているなんて、とても無理な状況だったわ」

ファリアが、まるで自嘲するように言った。声音に秘められた激情は、彼女の嘆きであるのかもしれない。

「あなたは、それをたったひとりで為したのよ。身を焼かれ、命を落としそうになりながら、それでも、あなたはランス・ビレインを打ち倒した。これは賞賛されるべきことよ。あなたが彼を打倒しなければ、今頃、マルダールがクレブル、あるいは王都ガンディオンが、この街の二の舞になっていたわ。それは間違いない」

確かに、彼女の考え通りなのかもしれない。あのとき、セツナがあの男　ランス・ビレインを昏倒させなければ、彼は、カランが灰になる前に姿を消していただろう。逃げ果せたランス・ビレインが、別の街に火を放つのは想像に難くない。

彼が狂人であるうとなかろうと、そうするだろう。

世界の果てまで焼き尽くすには、小さな街ひとつでは足りないはずだ。もっとも、ランス・ビレインにとっては満ち足りないはずの小さな街は、彼の業火に飲まれ、灰燼と帰ってしまったが。

「……でも、燃えちまったぜ？ なにかもな」

セツナは、脳裏に描き出された光景に、絶望すら抱いていた。紅蓮と燃える町並み。その炎をすべて消し去ったとしても、残るのは

廃墟に過ぎない。なにもかも燃え尽き、多くのものが失われた。

取り返しがつかない。

無論、セツナのせいではない。そんなことはわかっている。しかし、どうにかならなかったのか、と思ってしまうのが人間なのだ。もっと早く、迅速に行動していれば、いや、アズマリアによる召喚がもっと早く行われていれば。

「そうね。カランは全焼、死者の数は五百人以上だといわれているわ」

（ほらな。俺は、なにひとつできなかつたんだ……）

セツナは、愕然と、天井を見遣った。死者の数という現実を突きつけられて、無力感に打ちのめされそうになる。もちろん、その原因にセツナは関係ないのだろう。なにひとつ、セツナのせいではない。

頭では理解しているのだ。

セツナが到着したときには、カランは、もはや手の施しようがないくらいに炎上していた。なにをしたところで、焼け石に水にならなかつたに違いない。

それも、わかつていた。

セツナは、唇を噛んだ。血の味が口の中を満たしていく。

「でも、セツナは、ひとりの少女の笑顔を取り戻したわ」

「気休めは止してくれ」

セツナは、天井を見据えたまま告げた。天幕はしつかりと固定されているものの、時折、強い風に揺れてしまうのは仕方がないだろう。白い布の天井が風に波立つ様は、セツナの心模様を映し出しているかのようだった。

怒り、悲しみ、嘆き　いくつもの感情が渦を巻き、セツナの心を掻き乱していた。目つきも険しくなっていく。

「じゃあ聞くけど、あなたは、なんのためにカランに飛び込んだりしたの？」

「それは……」

問われて、セツナは、あのとこのことを思い出した。森を抜けた直後のことだ。街道での出逢いは、終生、忘れ得ないものなのかもしれない。

「許せなかったんだ。あの子を泣かせるような」

そう、セツナを突き動かしたのは、少女の涙だった。それ以外の理由など要らなかった。後付ならいくらでもできるだろうが、そんなものは必要ない。街道で出逢った女の子が泣いていたのだ。

命を張る理由など、それだけでよかった。

そこで、はたと気づく。

「もしかして、エリナがあのとこの？」

セツナは、半ば呆然としながら、少女に目を向けていた。透き通った青を湛えた少女の瞳が、驚愕に染まった。

「ええーっ!? お兄ちゃん、気づいてなかったの!？」

「いや、本当、ごめんなさい」

平身低頭とは正にこのことだったが、しかし、体を自由に動かせないセツナは、言葉で謝ることしかできなかった。ただ、全身全霊で謝罪する。

エリナの瞳に、顔に見覚えがあったのだ。だがなぜか、母親の腕の中で泣きじゃくっていた少女と、いま、ベッドの上で驚いたまま硬直している少女が結びつかなかったのだ。顔の形が変わっているわけでもない。無論、身に付けている衣服は替わっていたし、身なりも整えられている。しかし、それだけが原因ではないだろう。

(脳の配線でもおかしいんじゃないか? 俺……)

セツナは、未だに凍り付いている少女の瞳を見つめながら、己の記憶力について考えるしかなかった。悪いほうではない。そう断言できるだけの自信はあった。とはいえ、その根拠もなければどこから生まれたのかわからない自信は、いまや急速に失われつつあった。ふと、セツナは、ファリアの視線に気づいた。

「ふふ。もう一度言うわね」

彼女は、穏やかに笑っていた。

「エリナを救ってくれて、本当にありがとう」

第十四話 大いなる誓い

黎明。

空はまだ薄暗く、気温は極めて低いように感じられた。風はない。まるで、嵐の前のような静けさが、夜明け前の街を包み込んでいる。街、といえるのだろうか。

それはまさに廃墟という言葉が相応しい光景だった。

焼き尽くされた建物の数々は今にも倒壊しそうな危なっかしい姿を曝しているか、崩れ落ち、かつての面影すらも失っているかのどちらかしかなかった。軽く焦げた程度の半端なものは見当たらない。なにもかもが、焼き尽くされた。

たったひとりの狂気によって。

セツナは、カランの街の大通りに、たったひとりで立ち尽くしていた。言葉などあるはずがない。風さえも吹かない薄明の通りで、ただ呆然と、現実を受け止めるしかなかった。

セツナが意識を取り戻してから、数日が過ぎた。ファリア＝ベルファリアの事情聴取から。エリナとの再会から。

全身の筋肉痛は、わずかながらも癒え、普通に歩いたり動いたりするくらいでは激痛が生じるようなこともなくなっていた。それは彼にとっては何から喜ぶべきことであり、歓喜にむせび泣くほどの出来事だった。もちろん、現実に号泣したりはしないのだが。

それはそれとして、セツナの身体を焼き尽くしたはずの炎の痕が、綺麗さっぱり消えていたのは、他ならぬファリアのおかげだった。彼女の召喚武装の力によって、セツナ自身の自然治癒力を飛躍的に向上させることで、大火傷をほぼ完治させたのだという。それならば、全身の筋肉痛もなくなっていていいようなものの、物事はここまですましくないらしい。

ほかにもなにかいろいろと言っていたような気がするものの、怒涛のような質問攻撃が、セツナの頭の中をこんがらがらせてしまったのだ。彼女の言葉など、ほとんど記憶に残っていない。

それは重要なことではないからだ、とひとり勝手に納得して、セツナは、この数日を過ごしていた。

病室代わりのテントの中で動くこともままならない日々は、セツナにとって退屈極まりないものではあったが、しかし、この異世界の毎日が現実なのだということを改めて確認するという上では重要な数日だった。

寝ても覚めても変わらない景色が、冷ややかに告げるのだ。

これが現世だ、と。

異世界などといっている場合ではないのだ。すべて現実であり、アズマリアによる召喚も、皇魔との戦いも、武装召喚も、カランの大火も、あの男も、全部が全部、セツナ自身が経験した出来事なのだ。

覚悟を決めろ、ということだろう。

(覚悟……か)

セツナは、人気のない大通りの広くも寂しい空間を歩いていった。セツナが過ごしたテントは、カランの南側にある。そこはテントによる仮説住宅街となっており、先の大火によって焼け出された人々や、家を失い、住む場所を失った人々が、テント住まいを強いられていた。

セツナのテントが、病室代わりというのは建前であるらしい。ランス＝ビレインを倒すという快挙を果たしたセツナをそつとしておこうという、警備隊とファリアの計らいによるものだとか。

確かに、全身筋肉痛の状態で、たくさんの人間に出入りされても迷惑極まりないし、そもそも、セツナはカランの住人ではない。知り合いひとりいないのだ。セツナのテントに訪れるような物好きなどいないように思えたが、それをいうとファリアは、「念のため」だといってきたのである。返す言葉はなかった。

とはいえ、静かなのは嫌いではない。むしろ彼女らの計らいに感謝こそすれ、憤るいわれはないのだ。

そして、ついさきほど、テントを抜け出てきたのは、歩行に支障がないことを確認したからであり、ここ数日まともに体を動かしていなかったからだ。このままでは、なまりになまってしまふ。

焼け野原と化した一角に急造された仮説住宅街から、北へ。

大通りに辿り着くまでに何度、セツナは立ち止まったのだろうか。

すべてが黒く焦げ付いた世界で、あざやかな色彩を帯びたものなどひとつとして存在しなかった。呼吸すら忘れて、あの狂人がもたらした破壊の爪痕を、進む。

大火から数日。

カランの街は、現在、復興の目処も立っていない。

大通りを進んでいく。

カランの北と南を貫くメイン・ストリートなのだと、エリナから聞いていた。その中心に慰霊碑があるという。エリナは、毎日そこでお祈りをしてから、セツナのテントに遊びに来るのだそうだ。

慰霊碑。

セツナは、いつの間にかそちらに向かって歩いている自分に気づいた。テントを抜け出した当初は、そんなつもりはなかったのだ。ただ、なまっただ体を動かして、気分を変えようとしていただけだ。

テントに籠もり続けるなど、気が滅入るだけだ。

カランはかつて、街の外周に強固な城壁に囲まれていた。城壁には城門が必要不可欠である。東西南北の四方に設けられた門は、街の規模からは考えられないほど壮麗にして堅固であり、この国の栄華の象徴として有名だったという。

四方の門から延びた通りは、やがて、街の中心でぶつかることになる。ちょうど、十字を描くように。

カランの十字通り（クロス・ロード）もまた、ガンディア国内では知らないものはいないくらいに著名なのだとか。

それらはフェアリアの情報であり、彼女もまた、たびたびセツナのテントに訪れては、話し相手になってくれていた。フェアリアとエリナの存在がなければ、セツナは、ひとり鬱々と日々を過ごしたかもしれない。

そのクロス・ロードの真ん中　つまり、カランの中心に、慰霊碑はあった。いや、それは慰霊碑などというようなものではなかったかもしれない。ただ、なににせよ、生き残った人々の、死んでしまった人々への哀悼と鎮魂の想いは、強く深く感じられた。

「……」

セツナは、声を発することもできなかった。たったの一言すら、憚られた。どのような想いも、その目の前で吐いていいようなものではない、そんな確信さえ覚えた。

それは、ただの石だった。拳大の石ころ。どこから拾ってきたとも知れない石ころが、通りの交差点に何百、何千と積み上げられていたのだ。焦土の如き町並みに突如として表れる石ころの山は、ただそれだけで異様であり、奇妙な光景だった。

しかし、その石ころのひとつひとつに込められた人々の想いが、その石の山をどこか神聖なものにしているように見えた。

見ているだけでセツナの心が震えてくるのは、きつと、なにもできなかつたという想いが未だに心の奥底で燻っているからだろう。火が点けば、瞬間に身も心も焼き尽くしてしまうかもしれない。自責の念、なのだろうか。

「ひとりの少女が、亡くなった父親の名を刻んだ石を置いたことが、始まりだったらしい」

不意に聞こえてきた若い男の声に、セツナは、そっとそちらに目を向けた。慰霊碑の手前、仰々しく反応するような気分にはなれなかつた。

「名を刻んだだけの石ころなんて、だれも見向きもしないはずだった。君だってそうだろう？　街の大通りの真ん中に石ころひとつ落ちていたとして、誰が気に留める？」

多分に冷気を含んだ声音は、なんとも言いようのない香気を放ち、耳を傾けるものにある種の快感を与える。それは、同性であるはずのセツナであっても同様だった。

耳朶に疼く快さに、セツナは、軽い困惑を覚えていた。男の声に聞き惚れるなど、そうそうあることではない。美声、とは違う。声そのものよりも、声を発している人物の持つ魅力のようなものなのかもしれない。

「だが、それは現実に起こったことだよ。だれかが、少女の石ころの隣に石を置いたんだ。少女の真似をして、ね」

彼は、セツナのすぐ右隣に立っていた。セツナが慰霊碑に気を取られている間に近づいてきたのだらう。とはいえ、セツナに用事があるわけでもなさそうだった。語りかけてきたのは、ただの暇潰しに違いない。

そんな直感とともに、セツナは、彼の容貌に目を見開いた。

「そして、それはすぐさまラン中に広まった。なぜかはわからない。だれかの話では、生き残ったひとたちが、亡くなった人々への惜別と哀悼を示す手段を欲していたということなんだけど、俺は違うように想う。うまくは言えないけどね」

美しい青年だった。同性のセツナがはっとするほどに整った容姿は、間違はなく天からの授かりものであり、そこらの宝石などより価値があるだらう。黄金に輝く頭髮、透けるように白い肌を持ち、やや鋭角的な双眸は、深い睫で縁取られ、碧玉の如き瞳が浮かんでいた。

美貌、だらう。だれが彼と対面したとしても、それ以外にその容貌を評する言葉を持たないだらう。美醜の判定基準が決定的に異なるのなら、話は別だが。それは例外に過ぎない。

セツナは、彼の美貌からすぐさま目を逸らすと、慰霊碑に再び注目した。圧倒的な敗北感の中で、しかし、そんなことは慣れっこなのだと己を慰めるしかないことにも、愕然とする。

そう、慣れていた。

セツナは、彼のような美貌の男の存在を知っていた。そして、何度とない敗北が、セツナの中で、人間とは容姿ではないのだと確信させるに至った。無論、自分自身の容姿を卑下することはない。格付けすると、中の上よりは上ではないか、と自負したりもするくらいには自信もあるのだ。

故に、物凄まじい美男子に遭遇するたび、思い知るのだ。

上には上がいる、と。

彼らとは住むべき世界が違うのだ、と。

だが、それは絶望ではない。希望でもなかったが。

「ともかく、ひとりの少女から始まった石積みの話は、いまやカランのみならず、クレブルやメル、マルダールに及び、王都ガンディオンにまで届いているよ」

ふと、セツナが彼に目を向けると、青年の手にもまた、小さな石ころが握られていた。彼は、最後に挙げただけあつて王都から来たのだろう。王都からカランまでどれほどの距離があるのかはわからないが、それにしても物好きではある。

もちろん、セツナは、彼の気持を馬鹿にするつもりはない。むしろ、尊敬すら覚えていた。遙か王都から、石ころを積むためだけにカランへとやってきたのだ。そんなこと、そう簡単にできるものではない。

よく見ると、彼の身に纏う質の良さそうな衣服は、旅塵に汚れていた。

青年が、石の山に近づいた。手にした小石を、石の山の中ほどに置く。つぶやくような、それでいて厳然とした声が、セツナの耳にまで届いた。

「ガンディア国王レオンガンド・レイ・ガンディアは、あなたがたの冥福を祈り、カランの復興、およびガンディアの再興を、ここに誓います」

夜明けの曙光に包まれたその光景は、まるで一枚の宗教画のように神秘的かつ荘厳だった。

セツナは、驚愕することも忘れて、ただ、その幻想的な情景を網膜に焼き付けるように見入っていた。

それが、セツナとレオンガンドの出逢いであり、新たな始まりであった。

第十五話 レオンガンド・レイ＝ガンディア

「君のことは聞いているよ、セツナ＝カミヤ」
「えっ!？」

ガンディア国王と名乗った青年がセツナに向かって話しかけてきたのは、彼が静かな決意表明を終えた直後のことだ。知っているものなど数えるほどしかないはずの自分の名を告げられて、セツナには、驚くよりほかほかであったのだ。

朝日を浴びる石の山の墓標を背後にしたレオンガンド・レイ＝ガンディアの姿は、まるで後光でも差しているかのようであり、持ち前の端正な容姿や溢れんばかりの気品と相俟って、極めて幻想的な光景を作り出していた。

「もぐりの武装召喚師ということも、ランカイン＝ビューネルを打ちのめしたという話も、ね」

彼は、微笑を浮かべていた。親しげな、あるいは、警戒心を抱かせまいとする配慮の如きその表情は、慈愛に満ちた聖人君子の顔つきに違いなかった。もつとも、表情ひとつで聖人が悪人かなどわかるはずもなければ、初対面の男が微笑んでくることほど警戒すべき事象はないだろう。

セツナは、レオンガンドのみならず、周囲にも注意を払うことにした。カランの中心を意味する交差点には、いまのところ、セツナとレオンガンドふたりだけだった。しかし、必ずしも安堵はできないだろう。

レオンガンドが、どこかに人数を配しているかもしれない。もつとも、そんなことまでするような状況とも思えないのだが、最悪の事態を考えておくのも悪くはないはずだ。

ひとり得心して、セツナは、彼の言葉を反芻した。

「ランカイン＝ビューネル? ランスなんとかじゃなかったっけ?」
「偽名だよ。ランス＝ブレインというのはね。本当の名は、ランカ

イン・ビューネル。その家名が示す通り、ザルワーンの五竜氏族に連なる男だ」

「いや、当然のように言われても困るんだけど……まったくわからんです」

セツナが困惑の表情を浮かべると、レオンガンドは、思い出したように言ってきた。

「ああ、そういえば、君はガンディアの人間じゃあなかったんだっただね」

「ええ、そうっすけど……それが、なにか？」

微妙な言葉を返しながら、セツナは、彼の目を見た。碧玉の如き瞳は、あまりにも美しく、しかしながら凍てついた湖面のようでもあった。

「ベルの報告書を見た限りでは、要領を得ないことが多くてね。だから、直接逢いに来たんだよ」

「はあ？」

「君は、ザルワーンの鬼子ランカインを打倒するほどの人材だよ？これを放って置くなんてのは、職務怠慢といわれても仕方がないんじゃない？」

問いかけられて、セツナは、ただ疑問符を浮かべるだけだった。レオンガンドの言葉が、一々、要領を得ないのだ。言わんとしていることはわかる。それは理解できるのだが、しかし。

「えーと、あんたは確か、ガンディアの王様、だったよな？」

「うん。そうだよ。半年前に急逝された先王に代わり、このガンディアの国主を務めている。うつけとの評判だがね」

「王様がスカウトなんてするのか？」

セツナは、素直に思ったことをぶつけてみた。すると、レオンガンドは、目をぱちくりとさせた。予想外の質問だったのかもしれない。セツナにしてみれば、当然の疑問を口にしたに過ぎない。驚かれるようなことを尋ねた覚えはない。

「しないよ」

それは、そうだろう。

セツナは、レオンガンドのあっさりとした返答に満足した。至極当然の、納得のいく答えだった。一国の主たるものが、おいそれと動けるはずがない。しかも、相手はどここの馬の骨ともわからない人間なのだ。国王みずから逢いに行こうとすれば、周りの者たちが全力で制するはずである。

「あれ？　じゃあ、なんで？」

セツナは、突如として歩き始めたレオンガンドを目で追いながら、小首を傾げた。自由の利かない身分であるはずの王様が、どうして目の前に居るのだろう。カランの大火で命を落とした人々への慰霊に訪れるにしても、国主ならば、それ相応のやり方なり何なりがあるはずである。

お忍びで来る必要がない。

「この国は」

レオンガンドが、セツナの目の前を横切った。冷やかな言葉が、セツナの耳朵に飛び込んでくる。

「ガンディアは、あまりにも弱い。脆弱な兵士、懦弱な将、虚弱な文官、無能なものたち　英傑たる先王の存在がなければ、この国の領土は、片っ端から蹂躪され、食い尽くされていだろうね。歴史には、ガンディアという小国が存在した事実さえも残らなかったかもしれない」

深い愁いを帯びた声音は、朝焼けの空の下、滔々と流れるように紡がれていく。

「先王は、その類まれなる叡智と驚くほどの行動力、有り余る豊富な資金を最大限に駆使して、国土を守り抜いた。わずかな領土を護り切ったんだ。けれど、それだけだ。領土を護るだけで、精一杯だった。王ひとりが死に物狂いで働いたところで、ごく少数の有能な部下たちが血と汗を流したところで、できることなど高が知れている」

通りに沿って南へと進み出したレオンガンドの後を追いながら、

セツナは、軽く頭痛を覚え始めていた。この頭の痛みが本格的なものになる前になんとかしなければ、大変なことになりそうだった。

セツナの頭の中が、だ。

「そして、この弱小国家を率いた英傑が病に倒れたとき、ガンディアの未来は閉ざされた。偉大なる指導者が倒れたのだ。国土を維持することさえかなわなくなってしまった。ガンディアが未だに国家としての体裁を保っていられるのは、同盟を結ぶミオン、ルシオン両国のおかげなんだよ」

セツナは、レオンガンドの語る言葉の内容をある程度は理解しながらも、すべてを把握することなど、最初から諦めていた。半ば寝惚けたままの頭では、彼の長たらしい台詞の意味を完全に理解することは、土台無理な話だったのだ。

「……いや、まあ、話は大体わかった」

セツナは適当に告げると、レオンガンドの目の前に飛び出した。進行を妨げられて驚く青年王に、問う。

「で、本題は？」

「言っただろう？ ベルの報告書じゃ要領を得なかったって。直接逢って、確かめたかったんだ。君が、どこからきたのか。なんのためにガンディアを訪れたのか。アズマリア＝アルテマックスとはどのような関わりがあるのか」

さっきまでとは一転、青年王の瞳には怜悯な光が灯り、そのまなざしは、さながら獲物を逃すまいとする獵師のように鋭く、セツナは、一瞬射竦められかけた。そして、悟る。レオンガンドは、ただの王様などではないということに、だ。

無論、それはセツナの貧困な発想から来る王様像に比較しての話に他ならない。セツナの脳裏に描かれた王というのは、有体に言えば、ありがちなファンタジーそのものであり、現実の国主に対して失礼極まりない想像に違いなかった。

「だから、記憶喪失なんだって！」

と、セツナは叫びながら、我ながらなんと情けない言い訳をして

いるのだろうと胸中口惜しさで一杯になっていた。本当のことを話すことはできない。異世界から召喚されました、といって、だれが信じてくれるというのだろう、奇異の目で見られるだけならまだしも、時と場合によっては、拘束される可能性だってありうるのだ。

セツナの豊かな想像力の導き出す結論は、いつだってどこかが狂っているのだが、そんなことは本人にはわからない。

「そうなのかい？ 記憶喪失の割には、ちゃんと答えてくれたみたいだけど」

「ああ、それは、その……」

国王を前に、あの質問の答えが適当だとは、さすがに言えなかった。

セツナは、ファリアⅡベルファリアの度重なる執拗なまでの質問の嵐に対して、当初こそ真面目に答えていたものの、そのうち嫌気が差して、極めて適当かつ曖昧な答えを返すようになっていたのだ。

姓名、年齢、性別……数え切れない質問のうち、正確に答えられたのは数えるほどしかない。出身地や国籍についても散々質問されたが、それもなんとかはぐらかしていた。日本だの宇津川市だの言えるはずがない。適当な答えも思いつかなかった。当然だ。この世界に関する知識などないのだ。国名や地域など、出任せで言えるようなものではないだろう。

武装召喚術をだれに学んだのか、という問いには、なんとなくアズマリアⅡアルテマックスと答えたのだが、それはどうやら大いなる過ちだったらしい。

「まあ、君の出自についてはおいおい聞くとしよう。いま一番興味深いのは、君とアズマリアⅡアルテマックスとの関係についてだからね」

（やっぱり……）

セツナは、至極当然の成り行きに肩を落としかけた。しかし、がっかりしている場合ではない。国王がセツナ如きに逢いに来るなど、あるはずがなかった。そんなことは百も承知である。なにか、目的

があるのだ。

一国の王ともあるうものが、護衛もつけず、単身力ランにまでやってくるなど、常識外れにもほどがある。それほどまでに重大な目的を秘めて、青年王は、この焼け落ちた街まで来たのだらう。表向きには、死者への慰霊であり遺族への弔問とでも言うつもりなのかも知れない。

だが、本当のところ、彼の用件は、だ。

「君は、アズマリア・アルテマックスに武装召喚術を学んだそうだね？ どこで彼女と知り合ったんだい？ いや、それよりも、いま彼女はどこにいるんだ？」

アズマリア・アルテマックス セツナをこの世界に召喚した張本人たる彼女の名は、口に出すべきではなかったのだ。と、セツナが激しく後悔したのは、ファリアによる質問攻めに遭っている最中のことである。

アズマリアの名を出した途端、ファリアの態度が豹変したのには驚いたものだ。その変化は、結果的に、彼女の中のセツナの印象を少なからず良いものに変えたようではあったのだが、それにしても、その直後の彼女の興奮振りは、いま思い出しても泣きたくなくなるほどの凄まじさだったのだ。

「えーと……」

セツナは、答えを探すようにして視線を虚空にさ迷わせた。視界を埋め尽くす こともなく広がるのは、猛火に焼かれ、黒く焦がされた町並みであり、そのどこを探しても、青年王の満足すべき答えなど見つかるはずもなかった。

もちろん、セツナが、彼の期待に応える必要はない。知らない、と正直に返答すればいいだけだった。

実際問題、アズマリアの居場所などわかるはずもない。いつの間にか消えていたのだ。探そうとしたところで、その手がかりさえもない。そして、探す気力もない。

「アズマリア・アルテマックス。大陸召喚師協会創設者のひとりに

して、竜殺し、空を渡るもの、紅き魔人、降魔の魔女、災禍の化身
数多の二つ名で畏れられる伝説の武装召喚師。そんな人物がこ
の国に来ているというのなら、是非とも逢わなければならぬ。た
ったひとり、一国の命運を変えうるのは、彼女か戦鬼グレフくら
いのものだろうか？」

「は、はあ」

レオンガンドに同意を求められて、セツナは、生返事を浮かべる
しかなかった。間の抜けた表情にだけはなるまいと無駄な努力を試
みつつ、きらきらと輝く青年王の少年染みたまなざしから逃れるよ
うにして、顔を背けた。

人っ子ひとりいない通りには、顔を出し始めたばかりの朝日が差
し込み、ささやかに輝き始めていた。続いて空を仰ぐと、これまた
朝焼けに燃え上がる天からは夜の闇が一掃されていた。

アズマリア「アルテマックスの数多の異名については、セツナは、
ファリアから耳に蛸ができるほど聞かされていた。嫌になるくらい
に。青年王が口にした以上の二つ名。一度聞いただけでは覚えられ
そうもない複雑なものから簡単なものまで、ファリア曰く、覚えて
いるだけで百以上の異名があるという。

それほどの人物なのだ。アズマリア「アルテマックスという女は、
セツナにとつては、まさに災厄以外のなにものでもないのだが、
といって心の底から憎むような相手でもなかった。彼女の言に従え
ば、召喚に応じたのはセツナ自身の意志であり、彼女を恨むのはお
門違いも甚だしい。とはいえ、アズマリアこそがセツナがここにい
ることの元凶には違いなく、そういう意味では、彼女に逢いたいの
はセツナも同じだった。

セツナは、空を流れる雲の一群を呆然と眺めていた。風に流れる
雲のようなものだ、と想ったのだ。無論、アズマリアのことである。
彼女は、風に吹かれて飛んでいく雲のように取り留めのない存在に
違いない。

ふと、セツナは、耳をそばだてた。どたどたと、物凄い足音がこ

こちらに向かって近づいてくるのがわかったのだ。静まり返った廃墟の如き街の中では、ひとひとりの靴音さえも大きく響いていた。

(なんだ?)

セツナは、視線を前方に戻して、はっとなった。

「セツナ！」

鬼のような形相のフェアリア＝ベルフェアリアが、セツナ目掛けて、想像を絶するほどの速度で接近してくるのが見えたのだ。土煙を上げながら走り来るその姿に、恐怖を抱かないものなどないだろう。実際、セツナは、彼女のあまりの剣幕に腰を抜かしかけたのだ。

「勝手に抜け出しちゃ駄目だってあれほど……って!？」

そして、セツナに詰め寄ってきたフェアリアもまた、腰を抜かしかけたに違いなかった。セツナの眼前に生まれた驚愕に満ちた表情から、それと知れる。

彼女にそれほどの衝撃と驚きをもたらしたのは、他ならぬ、

「やあ、ベル。元気そうだなによりだね」

ガンディア国王レオンガンド・レイ＝ガンディア、そのひとだった。

第十六話 可愛そうなベアトリーチェ

「陛下……ひとつお伺いしたいことがあるのですが」

ファリア「ベルファリアが、おずおずと口を開いたのは、彼女が驚愕のあまり硬直してからどれくらい経ってからだだったのだろう。少なくとも一分以上は経過していたように思うのだが、いかんせんセツナ自身もまた多少の驚きをもって現状に対応しなければならなかったのだ。経過時間を計っているほどの精神的余裕もなければ、元より、そんなくたらないことに力を注ぐ趣味もなかった。

セツナが驚いたのは、レオンガンド・レイ「ガンディアが口にしていた「ベル」という人物が、ファリアだったという事実、である。つまり、彼が目を通したという報告書は、ファリアがセツナに行った事情聴取を基に作成されたものであり、それがどういった経緯を辿ったのか、国王の目に触れたということに違いない。

彼女の所属する大陸召喚師協会なる組織が、ガンディアとどのような関係を構築しているかなど、部外者。それも異世界のただの学生。に過ぎないセツナにわかるはずもないのだが、どうやらただならぬ間柄にあるのだろうということは想像に難くなかった。

もちろん、セツナの考えが見当外れという可能性も大いにあるのだが。

「なにかな？」

対するレオンガンドは悠然としたものであり、気品に満ちた微笑で、思考停止から復帰したばかりのファリアを見つめていた。そのまなざしは、赤の他人を見るようなものではなく、臣民に向けられる類のものとも違うようにセツナには感じられた。言うなれば、そう、愛しい妹にでも注ぐべきまなざしだった。

しかし、どう見てもふたりは似ても似つかず、血縁関係がないのは明白だった。無論、レオンガンドがファリアのことを妹のように可愛がっているという可能性については否定し切れないし、セツナ

の目まぐるしく回転する頭は、その考えを支持していた。

「マルダールでの演習に参加されているはずの陛下が、どうしてこちらに？」

徐々に冷静さを取り戻していくファリアの口から聞かされた情報は、セツナにとっては当然初耳のものだった。国王が参加するほどの演習が、マルダールで行われているということだが、それはいつたいなにを示すのだろうか。

マルダールとは、セツナがファリアやエリナから聞いた話では、ガンディアにおいて王都ガンディオンに次ぐ規模の都市であり、この国の中で都市と呼べるのはガンディオンとマルダールだけ、というのがガンディア国民の共通認識だという。

城塞都市とも言われているらしいのだが、それ以上の詳しい話は聞けず仕舞いだった。

そもそも、マルダールが、ガンディオンが、といわれても、激痛と戦い続けなければならなかったセツナには、いまいちピンと来ない話だった。

無論、この世界についてなにも知らないセツナにとっては、国や街の情報ほど重要なものもないのだが、それにしただって、そのころは筋肉痛との死闘こそがすべてだったのだ。仕方がないといえば仕方がないだろう。

「ガンディオンを発つ直前、カラン大火の報せを受けてね。居ても立ってもいられなくなっただってわけさ」

と、レオンガンド。悪びれる様子もなければ、まるで当然の対応であるかのような態度だった。

「そんな身勝手な！」

ファリアの反応はもつともだろう。一国の主たるものが、綿密に取り決められた予定を個人的な感情で覆すことなど、あつてはならないことだ。そんな簡単なものではないはずなのだ。

国王とは、もはやひとりの人間などではない。一個の機関であるとは、だれの受け売りだったのか思い出すこともかなわず、セ

ツナは、ふたりの顔を見比べていた。

「まあ、演習のほうはアレがうまくやってくれてるだろうから問題はないよ。兵たちの士気が下がることもないさ。でも、こっちはそうもいかないだろう?」

青年王の横顔は美しく、いつ見ても絵になった。その立ち姿からして高貴さに満ちており、セツナは、いまさらのように緊張と興奮を覚える自分の鈍感さにあきれ返るほどだった。

一方、ファリアの表情は、多少の憤りと困惑の間で揺れ動いているというようなものだった。レオンガンドの笑みの前に、彼女の激情が、脆くも消え去ろうとしている。

「しかし……!」

「一国王ともあるうものが、一時の感傷に任せて行動するのは如何なものなんだろうね。本当にそう思うよ。俺は、国王なんて柄じゃあないのさ」

どこか他人事のようなレオンガンドの言い様に、ファリアが突如として半眼になった。その表情に、感情らしい感情は見受けられない。ひどく冷ややかな声音が、朝焼けの通りに響いた。

「それで……本当の目的は?」

なぜかファリアのその言葉には、抜き身の短刀を喉元に突きつけたかのような迫力があつた。傍で聞いているだけのセツナが背筋に悪寒を覚えるほどに。

しかし、レオンガンドにとっては慣れたものなのかも知れない。

彼は、涼しい顔で、ファリアの視線を受け流しているようだった。

「なんのことかな?」

「陛下がそのようなことだけで、大事な演習をすっばかすはずがないでしょう?」

カランの大火を「そのようなこと」の一言で済ませるのもどうかと思うのだが、この際は仕方のないことだろう。カランの被害の小がどうこうの話ではないのだ。

「いやだなあ、俺をいっただいどんな奴だと」

「どこをどう見ても、陰険で腹黒で極悪で非道なお方じゃないですか」

セツナは、今度こそ身震いしたのは、彼女のその凍てついた口調ではない。ファリアの紡いだ言葉の内容について、だ。およそ一般市民　大陸召喚師協会の地区担当官という肩書きにどれほどの権威があるかは知らないが、恐らく市民と同等だろう　が国王に向かつて言っているものではないだろう。限度というものを越えている。

「よくもまあ国王陛下相手にそんな暴言が吐けるもんだね。不敬罪にしても構わないんだけど……？」

レオンガンドが、不敵に笑った。

セツナは、無論、口を挟むことなどできるわけがなかった。ただ、蚊帳の外に置かれた状況のまま、推移を見守ることしかできない。

もつとも、セツナの心配は、青年王の一言で霧散したが。

「まあいい。でも、これだけは信じて欲しいんだけどね……：力ランに向かうことにしたのは、大火の報を受けたからだよ。武装召喚師の少年の話しや、その少年の師がアズマリア＝アルテマックスだと知ったのは、君の報告書に目を通してからだ」

そして、その報告書を見たことで、目的が変わったのだろう。セツナは、ため息混じりにレオンガンドの横顔を見た。再び嘆息する。欠点ひとつ見出せない美しさというのは、時として、ひとの感情を逆撫でにするだけだ。

「!？」

ファリアが愕然と目を丸くしたのは、本日二度目だった。ひとの驚きに満ちた表情というものは面白いものである。無防備極まりないその表情にこそ、当人の素顔というものが表れるのだ。

(多分ね)

胸中つぶやきながら、セツナは、ファリアの驚いた表情の中に一輪の花のような可憐さを見出したのだった。それは質問の嵐を巻き起こした人物とも、鬼のような形相で迫ってきた人物とも思えない

ものであり、それが彼女の本質なのだとしたら、それはそれでありかもしれないとセツナはひとり納得した。

「そこまで驚くことかなあ」

「そりゃあ驚きますよ！ わたしの報告書なんて、いったいどこで見られたんですか!？」

ファリアの大声は、早朝の街に思った以上に大きく反響していたが、本人は気づいていないのかもしれない。レオンガンドに意識を集中しているからだろう。

それは青年王とて同じだ。ファリアの反応に全神経を集中しているように感じられた。

そんな次第、セツナは、孤独と戦わなければならなかった。いや、孤独など恐ろしくはない。ただ、いまの状況は、孤独というよりも存在を黙殺されているようなものであり、それがセツナにはたまらなく辛かった。

とはいえ、自己主張するような場面でもない。むしろそれをする、と、より悲惨な目に遭わないとも限らなかつた。

「道中、伝書鳩が飛んでるのが見えたから」

あつけらかなとしたレオンガンドの台詞は、ファリアの悲鳴によって掻き消された。

「射落としたんですか!？」

ファリアのその早とちりというにはあまりにもぶつ飛んだ発想には、さすがのレオンガンドも驚かざるを得なかつたようだった。呆気にとられすぎて、まともに反応すらできないでいるのがセツナにもわかるくらいだった。

「なんてことを……!」

一方、ファリアはファリアでなにやら盛り上がっている様子だったが。

「可愛そうなベアトリーチエ……!」

『いやいや……いやいやいや』

セツナとレオンガンドが、まったく同じように頭を振つたのも無

理からぬことだった。

第十七話 青年王の切り札

マルダールは、王都ガンディオン北東に位置する都市である。

その規模はガンディオンに次ぐほどのものであり、かつてはガンディアの中核を成す都市として活気に満ち溢れていたというのだが、昨今の情勢は、王都に次ぐ大都市から殷賑と喧騒を消し去っていった。

英傑たる先王の死が、ガンディアという小さな国にもたらした衝撃は並大抵のものではなかったらしい。

それには、第一王子であり正当なる王位継承者であったレオンガンドの人望の無さにも一因があり、レオンガンドが王位を継げば国が滅びると公言して憚らないものも多かったという。

そして、そういった連中の吹聴する噂というものも馬鹿にできないものだ。

先王の死はレオンガンドが王位を継ぐために毒殺したからだという根も葉もないものから、レオンガンドは酒色を好み、夜な夜な宴を開いては大騒ぎをしているといった、ある程度の真実味を帯びたものまで様々な流言が、ガンディア国内のみならず、周辺諸国にまで飛び交っていた。

元より声望のなかったレオンガンドの人気は、これにより地の底まで落ちていったのだとか。

そんな次第。

セツナは、果たして自分の選択が正しかったのかどうか、不安を抱き始めていた。もっとも、いまさらだということもわかっている。いまさらなにを言ったところで、どうしようもない。決めてしまったのだ。マルダールに来てしまったのだ。

そう、セツナは現在、城塞都市の異名を持つマルダールの巨大な正門の前にいた。すぐ目の前にはレオンガンド・レイ「ガンディアの気品に満ちた姿があり、セツナの右隣には、旅装に身を包んだフ

アリア＝ベルファリアがいた。

カランを出発し、馬車に揺られ続けること数日。決して快適とは言えない道中ではあったが、セツナには得るものも多かった。レオンガンドとファリアの口から語られた数多の情報は、完全に記憶できたとは言いい切れないものの、間違いなくセツナにとっては大きな収穫だろう。

この世界については愚か、この国についてもなにひとつ知らないセツナには、ほんのちよつとした情報でも有り難かったのだ。

中でも、ガンディアの現状と、その周囲を取り巻く情勢の悪化に関する話は、レオンガンドの微笑を多少でも曇らせるほどのものであり、それはセツナが乗ってしまった船が如何にも沈みかけた泥舟であるかのような印象を与えた。

故にセツナは、高く聳え立つ堅牢な城壁にも、どこか脆そうな心象を抱かざるを得なかった。

そんなセツナの心境を察したのが、レオンガンドがさり気なく尋ねてきた。

「不安かい？」

「そりゃあまあ、ね」

「あつはつは。君は正直でいいね」

本心かどうかもわからない青年王の言葉に、セツナは、ファリアに目を向けた。深緑の外套を纏った彼女は、こちらの視線に気づくと、軽く微笑を返してきた。ファリアの微笑みは、セツナの不安がある程度は払拭してくれる。

寄る辺なきセツナには、なにかと親身になってくれるファリアだけが頼りだった。

話は、数日前にまで遡らなくてはならない。

早朝のカランの大通りでの立ち話を早々に切り上げた三人は、なんとはなしにセツナが寝室同然に使用していたテントへと脚を運んだのだ。

そこでレオンガンドが提案してきたのが、彼のマルダール行きにセツナが同行するという話だった。

「俺も？ どうして？」

セツナは、簡素な寝台にまるで玉座に腰掛けるかの如く厳かに座る青年王の提案に、驚きと興奮を覚えながらも、それとなく問い返した。それは、願ってもない申し出に違いない。目的も目標もなければ、当てとなるものすらなく、異世界の大地を放浪するなど、考えただけで眩暈がする。

なんの予備知識もなしに未知の世界を歩き回るなど、正気の沙汰ではない。セツナは、未開の大陸を探索する冒険家などではないのだ。フェアリアたちには武装召喚師と認識されてはいるものの、彼個人としては未だにただの学生に過ぎない。

「君は記憶喪失なんだろう？ 自分がなぜガンディアにいるのか、なにを目的としているのかさえ忘れてしまったんだろう？」

青年王のまなざしに、いたずらっぽい輝きが潜んでいるのが、セツナにもわかった。こちらの意図などお見通しだとも言いたげなその表情に、セツナは、曖昧にうなずくしかなかった。

「そうデスケド……」

（ばれるよなあ……そりゃ）

セツナは、後ろめたい気持ちになりながら、ちらりとフェアリアの様子を伺った。彼女は、やれやれとでも思ったのか、肩を竦めていた。無論、フェアリアにも嘘の証言であることなど見破られていたに違いない。精度の低い嘘だ。見破られないほうがおかしいとさえいえる。

そもそも、セツナが記憶喪失を騙る必要があったのか、どうか。

セツナは、単純に、自分が異世界から召喚された存在であるという事実が露見するのはよくないと考えたのだ。いや、そんなことを

言っても、記憶喪失という証言同様、信じられなかったかもしれない。

なににせよ、セツナとしては、その場をやり過ごすためだけの嘘であり、他意も悪意もなかった。

とはいえ、セツナには、自分がなぜガンディアにいるのか、なにを目的としているのかなど、皆目見当もつかないのは事実であった。「だったら、俺の元に来ればいい。記憶が戻るまでの間で良い。目的を思い出すまでの間で良いんだ。俺の元で、ランカインを倒したその力を振るってくれないかな？」

レオンガンドの口から紡がれたその言葉は、セツナの耳朶に心地よく響き、そして、瞬く間に心に浸透していった。それは、つぎの瞬間、爆発的な衝動となってセツナという少年の魂を打ち震わせ、鮮烈な光が、彼の意識を染め上げていった。

(なんだ……！？)

湧き上がる感情の奔流に戸惑いながらも、セツナは、目の前の青年王の瞳から目を逸らせない自分に気づいていた。力強いまなざしだった。決して口からでまかせで言っているのではない、そう確信させるほどに純粋な視線。

セツナは、はたと、理解した。

(そうか。そうだよな)

自分が何故ここまでの感動を覚えているのか、その原因を認識しながらも、しかし、体を震わせる激情の波を止める手立てばかりは思いつきもしない。レオンガンドと目と目を合わせたまま、歓喜の濁流に身を委ねるしかないのだ。

歓喜。

そう、それは間違いなく、彼にとって大いなる喜びだった。

「ガンディアの新生に、君の力を貸してほしい」

「ああ……！」

レオンガンドの申し出に、セツナは、感極まって上ずった声を発したのだった。

さて、マルダール。

三人が正門前で馬車から降りたのには、わけがある。

普段ならば馬車ごと正門から入れるというのだが、マルダールはこのところ、常軌を逸した厳戒態勢を取っており、荷物検査やらなにやらで、馬車から降りざるを得なかったのだ。もっとも、乗車しているのが国王陛下だと気づいた門番の兵士たちは、見ているこつちが気の毒なほど恐縮しまくっていたが。

そして、馬車の検査に時間を取られるのを嫌ったレオンガンドの提案で、マルダール市内を歩いていくことになったのだ。

厳戒態勢極まりない正門を通り抜け、城塞都市マルダールへと足を踏み入れたセツナは、城壁内に満ちた緊迫した空気に息をするのも忘れるくらいだった。

マルダールは、カランとは比べものにならないほど大きな都市だった。分厚く巨大な城壁に四方を囲まれ、内側には、やはり城砦を想起させる堅固な建物が立ち並んでいる。通りを行き交うのは、ほとんどが武装した兵士であり、どこか殺気立っているように見受けられるのは、決して気のせいではないだろう。

いまにも戦争が始まりそうな雰囲気だった。

「ここは最前線だから、ねえ」

レオンガンドの言葉の意味を理解して、セツナは、息が詰まりそうなのこの空気にも納得する思いだった。馬車の中で聞かされた話でもある。このマルダールを城塞に作り変えらざるを得なかったのも、それが原因なのだ。

マルダールのさらに北には、かつて、ガンディアの鉄壁といわれ、北からの侵攻を長年に渡って防いできたバルセー要塞があった。その要塞がある限り、ガンディアは、北に隣接するログナー、そしてその背後に控えるザルワーンの脅威から、辛くも国土を護り続ける

ことができた。

その要塞がログナー軍の猛攻に曝されて陥落したのは、先王の死からわずか十日後のことだったという。

「その要塞を奪還する、と？」

「でなければ、この国は終わりよ」

セツナの問いに答えたのは、ファリアではなかった。鋭く研ぎ澄まされた刃物のような声音は、すぐ頭上から降ってきたものだった。正門から続く大きな通りの脇に立ち並ぶ石造りの建物、その屋根の上にその女は立っていた。毅然と、こちらを見下ろしている。

「ガンディアのうつけはうつけのまま生涯を終え、ルシオンに売られたうら若き姫君は、哀れ、衆愚の物笑いに曝される」

若い女だった。年のころは、ファリアと変わらないか、彼女よりも一つ二つ年下だろうか。黄金の頭髪は風に揺れてきらきらと輝き、透明感のある白い肌は、女性にとっては嫉妬か憧憬を抱かざるを得ないだろう。やや鋭角的な双眸を縁取る深い瞳も、碧玉と見紛うような瞳も、彼女の美貌を形作る一要素に過ぎない。

言うなれば、美女である。欠点を上げる必要も無いほどに美女である。とにかく、美女なのだ。

彼女は、細身の長軀を白銀の軽装鎧で包み込んでおり、腰には剣を帯びていた。

「こういう筋書きは嫌です」

きつぱりと、彼女。その気の強そうなまなざしは、レオンガンドに向けられていた。

ふと、セツナは、彼女の美貌としか言い表せない面影がだれかと似ているような気がして、眉根を寄せた。もっとも、答えはすぐに明示されたのだが。

「だから、勝つのさ」

レオンガンドの声音に込められた決意は固く、傍で聞いているだけのセツナでさえも、その想いを新たにするほどだった。

しかし、屋根上の女には、まったくもって効果が無かったようだ

った。

「どうやって？　いまのままでは勝ち目が薄いことは兄上もご存知のはず。我らルシオン白聖騎士隊が参戦しただけでは、到底埋めようのない戦力差ですよ？　ログナーの背後にはザルワーンがいることをお忘れですか？」

冷ややかな、それでいて理路整然とした彼女の言葉に含まれた違和感に、セツナは、なぜか慄然とした。

(兄……上！？)

それはつまり、屋根上の女が、レオンガンドの妹ということだろう。その事実になぜ衝撃を覚えたのかは自分でも理解できなかったが、ともかく、セツナは、彼女と青年王の顔を何度も見比べて、胸中で納得したのだった。

瓜二つ、というのは言い過ぎではないだろう。それくらいにそっくりであり、まるで一卵性双生児のようですらあったが、しかしながら年が離れているのは見た目にも明白である。

「此度の戦、ザルワーンが出てくるとは思えないな」

「なぜです？」

「……リノン」

レオンガンドがため息混じりにつぶやく姿を見るのは、セツナは初めてだった。リノンというらしい気の強い妹を、持て余しているのかもしれない。

彼女は、射るようなまなざしでレオンガンドだけを見据えていた。「なんです？」

「立ち話もなんだし、中で話そう。セツナもベルも困ってる」

セツナたちを指し示したレオンガンドの様子に、リノンの視線がわずかに動いた。拍子に、どこか凍てついていた表情が和らぐ。

「あら、フェアリアじゃない」

「お久しぶりです。リノン様」

「ほんと、久しぶりよね。でも、元気そうで安心したわ」

リノンがフェアリアのことを心底喜んでいるのが、傍目にもよくわ

かった、さつきまでの刺々しさが消えてなくなり、柔らかい雰囲気
が生まれている。その喜びを湛えた瞳が、セツナに向けられた。

「あなたは？」

当然の疑問に答えたのは、セツナではなかった。

「彼はセツナ」カミヤ。武装召喚師にして、我らが切り札だ」

レオンガンドの大声は、リノンを驚かせただけではなく、マルダ
ールの正門付近を行き交う兵士たちの注目を集めるに至った。

なにより、セツナは、驚愕のあまり、情けなくも叫び声を上げる
しかなかったのだ。

「ええーっ!？」

第十八話 兄と妹

「本当のところはどうなんです？」

リノンクレア・レーヴェ「ルシオンの問いは唐突ではあったものの、レオンガンドにとってはもちろん予想通りのタイミングであり、特に驚くこともなかった。

貴族のために特別に設えられた執務室は広く、手入れも行き届いていた。高級そうな調度品の数々は、かつてこの部屋を己が領地としていたものの趣味なのだろう。決して悪いものではないのだが、いかんせん、レオンガンドの趣向に合うものではなかった。

壁に飾られた絵画もそうだ。微笑を湛える少年の肖像画は、確かに芸術的で素晴らしいものには違いない。しかし、レオンガンドは部屋に入るなり、その肖像画を取り外して窓の外に投げ捨てたい衝動に駆られたのだ。

それは間違いなく、悪寒である。

その少年は、レオンガンド・レウス「ガンディア　レオンガンドが十歳のころであり、彼の叔母ミランディアが、売り出し中の画家に書かせたものだったのだ。紅顔の美少年そのものの笑顔を浮かべた王子は、未来に対しなんの憂いも抱いていないかのようであり、光に満ちた希望の将来を当然のように想っているのかも知れなかった。

歯痒いが、仕方のないことだ。変わらざるを得なくなったのは、それから数年後の話なのだから。

レオンガンドは、己の肖像画から視線を外すと、大きな窓に向かった。磨き抜かれた窓ガラスに映る自分の面影は、あの肖像画の十数年後の未来そのものと言えるのだろうか。

「セツナのことかい？」

「彼は本当に兄上の切り札なのですか？」

妹の言葉が、鋭い刃のような切れ味を持つようになったのはいっ

ごろからだろう　レオンガンドは、背後からのリノンの問いかけにも、即座には返答できなかった。

窓の外に広がるのは、曇天だった。マルダールの頭上に蓋をした鉛色の雲の群れは、今にもとめどない涙を流しそうな表情をしており、執務室から見下ろす町並みを進むのは、訓練中の兵士たちくらしいものだった。

現在レオンガンドとリノンクレアのふたりがいる執務室は、市内全域を見渡せるほどの高さを誇る円塔を中心に構築された建造物、通称マルダール・タワーの五階にあった。窓から見えるのはマルダールの北側であり、ここ半年で急速に城塞化を遂げた町並みは、平穩からは程遠い印象があった。

それもそのはずであろう。

戦が、始まるうとしている。

「まさか」

レオンガンドは、リノンを振り返りながら、小さく笑った。いくらなんでも、そんな質問をぶつけてくるとは思わなかったのだ。彼が勝手に、妹ならばわかると思いついていたのかもしれないが、それにしても、低質な疑問だと言わざるを得ない。

「あれはただの思い付きだよ。どこの馬の骨ともわからないもぐりの武装召喚師が、切り札になんてなるわけがないだろう？　ザルワーンの鬼子ランカイン「ビューネルを倒したとはいえ、その実力は未知数。彼を誘ったのは、彼の師がアズマリア「アルテマックスだから、というのが大きいのだ」

そう言いながらレオンガンドは、あの少年の顔つきを思い出していた。ひとを見かけて判断するなど以ての他だということは重々承知しているものの、かの少年は、どう見ても武装召喚師とは思えなかった。

武装召喚術とは、人並みはずれた知識と血反吐を吐くほどの修練を積み重ねること、ようやく行使できる技術である。才能だけで扱えるはずもなければ、並大抵の努力では、術式の構築などままた

らないものだ。

そう、武装召喚師たるもの、その容貌から知性や修練の成果というべきものを感じさせるはずである。

あの少年には、そういったものがまるでなかったのだ。もちろん、知性を感じさせない武装召喚師もいるだろうし、彼がそのような人間である可能性も捨てきれない。しかし、レオンガンドの直感には、セツナを極めて一般人に近い存在だと捉えていた。

とはいえ。

「アズマリアって、あの竜殺しですか？」

リノンの鉄面皮に多少の驚きが刻まれたことに、レオンガンドは、少なからず満足感を覚えた。しかし、それも一瞬のことに過ぎない。リノンの表情は、すぐさま、いつもの伶俐さを取り戻し、一見するとどこか不満そうな顔つきに変わっていた。

「そ。伝説に謳われる最強の武装召喚師と繋がりを持つことができれば、僥倖以外のなにものでもないだろう？ まあ、それも記憶喪失中の人間の証言だから、とても怪しいものなんだけどね」

「記憶……喪失？」

リノンが怪訝な表情を浮かべるのも無理はなかっただろう。レオンガンドも、最初報告書に目を通したとき、首を捻ったものだ。記憶喪失というわりには、アズマリアの弟子だのなんだのと色々詳しく書かれていたのだ。もっとも、その報告書に記されたことのすべてが事実であるなどと、端から思ってもいなかったが。

「十中八九、嘘だろうね。なんのためにそんなくだらしない嘘をついたのは知らないし、彼にその嘘を貫き通すほどの度胸があるとは到底思えないんだけどさ」

「そんな怪しい人物を、どうして！」

「いや、でもね。セツナが、ランカインを倒し、被害の拡大を防いだのは事実なんだ。あのままランカインを野放しにしておけば、克蘭だけではなく、クレブルやメレル、あるいはガンディオンまで焦土と化したかもしれない」

レオンガンドはそう言ったものの、実際は、そこまではいかないということもわかってはいた。ファリアⅡベルファリアがカランへ向かっていたのだ。彼女が到着したのは、すべてが終わってからだったようだが、セツナⅡカミヤがランカインⅡビューネルを倒さなければ、彼女がカランに辿り着いた時分も、カランは大火に包まれていたはずである。

ランカインとの戦いで瀕死の重傷を負ったセツナが一命を取り留めたのは、ファリアの到着が、戦いの直後だったからに他ならないのだ。もし、彼女の到着が、ランカインの逃走を許すほどに遅れていたとすれば、セツナは死んでいただろう。それくらいのタイミン
グだった。

そして、ファリアなら、ランカインとも十二分に渡り合うことができるはずなのだ。彼女が本気を出すことができれば、の話だが。

「そう、セツナは、我がガンディアを滅亡から救ってくれたんだよ」それは言い過ぎなのは間違いなかったが、しかしながら、ひとつの事実でもあった。セツナが現れず、ファリアがランカインに敗れるという可能性も、ないわけではなかったのだ。

もしも、などと考える必要もないのだが、

「……兄上がそう想うのは結構です。しかし、素性の知れないものを軍に加えるというのには反対します。そのうかつで不用意な決断が、ランカインⅡビューネルの潜入を許し、カランの大火を招いたのです」

リノンの厳しいまなざしと冷ややかな口調は、当然、この国のことを心から想っているからに他ならないのだろう。レオンガンドは彼女の抑えがたい気持ちを受け止めて、静かにうなずいた。

「そう。その通りだ。でも、彼については大丈夫だと想うよ？」

「兄上のその楽観的な考えはどこから出てくるのですか？」

彼女のなじるような口調には、さすがのレオンガンドも苦笑せざるを得なかった。いくら実兄とはいえ、国王に対する態度ではないだろう。無論、その程度のことと権威を振り翳すような真似はしな

いが。

「直接逢ったからかな？」

「そんなことで！」

「それに、彼には監視もついている」

激するリノンに対して、レオンガンドはいたって冷静に告げた。

相手の感情が昂ぶれば昂ぶるほど冷静になっていくのは、よくある話ではある。

「監視？」

「彼は、カミヤと名乗ったんだ。協会も彼を監視せざるを得ないだろう？」

レオンガンドは、マルダールへの同行を願い出てきたフェアリアのなんとも言いがたい表情を思い出していた。彼女には彼女の理由があるのだろう。譲れない理由が。

でなければ、彼女が勝手にカランを離れていいはずがない。フェアリアは、大陸召喚師協会カラン支部の役員なのだ。しかし、彼女はカランを後にした。

カランでの仕事よりも重要な何かを、フェアリアは背負っているに違いない。

「カミヤ……まさか!？」

はっと、リノン。彼女の表情が一瞬にして驚愕に満ちたのは、ある意味当然ではあるのだが、少し遅すぎる反応とも言えた。

「可能性の話さ。アズマリアの弟子っていうことだけでも、監視する価値はあるしね」

レオンガンドは、再び、執務室の窓へと向き直った。磨き抜かれた窓ガラスの遙か彼方に聳えるであろうバルセー要塞の威容を脳裏に思い浮かべ、頭を振る。バルセー要塞を思い浮かべるたびに、同時に想起されるのは、たったひとつの名前だった。

(クオンⅡカミヤ……か)

半年前、突如現れた武装召喚師であり、バルセー要塞陥落の最大の要因であった。

第十九話 クオン＝カミヤ

「リノン様は、レオンガンド陛下の妹君よ」

ま、わかっているとは思うけど、とファリアが付け足してきたのを、セツナは上の空で聞いていた。

そこは、古めかしいものから真新しいものまで、書物という書物が目一杯に収められたいくつもの書棚によって支配された空間だった。小さな図書室とでも言うべきなのかもしれない。ともかく、見回す限り、本、本、本　本だけしかなかった。

もちろん、机と椅子もある。あるにはあるが、書物が支配的な空間の中では、その存在感はあまりにも希薄であり、ともすれば申し訳なさそうに体を縮めているかのようにも見えなくなかった。

広い部屋ではあったが、前述の通り、書物が過重気味に詰め込まれたいくつもの書棚のせいで、かなり狭く感じられた。圧迫感を覚えるのだ。それも仕方のないことではあった。

室内が暗いのは、天候が原因だった。開け放たれた採光窓から差し込むべき日の光は、幾重にも折り重なって頭上を覆う鉛色の雲の向こう側なのだ。届くはずもない。そんな薄暗い室内を多少なりとも明るくするのは、ファリアが念のためにと持ってきた携帯用の魔^{まし}晶灯^{ようつぐ}のおかげだった。

それは、一見すると拳大の水晶玉としか言いようのないそれは、ある種の力を加えると光を発する性質を持つているのだという。セツナは実際、水晶玉が突如として発光しだした瞬間を見ており、その点では疑うべくもない。

いや、そもそも、ファリアを疑う必要はないだろう。彼女からは、敵意や悪意は微塵も感じられなかった。

「リノンクレア・レーヴェ＝ルシオン様が、ガンディアの同盟国ルシオンの王子ハルベルク・レウス＝ルシオン殿下の元に嫁がれたのは三年前。以来、リノン様は、ルシオンとガンディアの絆の象徴以

上に活躍されてきたわ」

連日、どこか長たらしい名前ばかり聞かされて、セツナは、頭を抱えかけた。眼前の机の上に視線を落とす。半透明の容器に入れられた魔晶灯の明かりは、神秘的ではあるものの、どこか違和感を覚えずにはいられなかった。それがどのような類の感覚なのか説明しようもないのだが、得体の知れない不気味さをその輝きに見出して、セツナは、すぐさま魔晶灯から視線を逸らした。

目の前には、紅茶の注がれたティーカップがあり、その隣の小皿にはパンケーキのようなものが盛られていた。そして、なにやらびつしりと文字が記された一枚の紙と、分厚い書物が、テーブルをひどく味気ないものにしていった。

「山賊退治に野盗の駆逐、皇魔の殲滅　いろいろあるけれど、一番有名なものが、ワラルの侵攻を撃退したことかしら。知らない……わよね？」

「え、ああ、うん……」
「まあ、いいのよ。そんな話はね」

と、彼女は気を取り直すように言ってきたものの、セツナとしては最初からリノンクレアの話を聞くつもりもなかったし、なんならファリアの用事をとつと済ませて、マルダール市内を見学にでも行きたかった。

そうなのだ。

セツナが現在、この書庫のような一室でファリアとふたりきりなのは、彼女の用事が理由だったのだ。

当初は、レオンガンドとともにマルダール・タワーと呼ばれているらしい中心の塔に向かう予定だったらしいのだが、突然、ファリアが大事なことを思い出したといって、セツナの手を引っ張り、ここまで連れてきたのだ。

大陸召喚師協会ガンディア支部マルダール地区の拠点である。外観は、どこか古めかしい印象を与える四階建ての木造建築物だった。その二階の一室に、ふたりはいた。

「話を戻すわね。さつきも言った通り、セツナには、是非ともここに署名して欲しいのよ」

と行って、ファリアが指し示してきたのは、机の上にある一枚の紙だった。その紙面に書き連ねられた無数の文字は、どうやらこの世界 あるいはこの国 の言語であるらしく、異世界から召喚されたものには到底理解しがたいものであるはずなのだが、しかし、セツナはその複雑な文字の群れが意味するところをほとんど完全に把握できていた。

生まれてこの方一度だって目にしたこともないはずの言語に対して、なんの違和感すらも覚えず、むしろそれが生来親しんできた言葉であるかのような感覚さえも抱くのだ。

ふと、セツナは、思い返す。

(そういや、最初からだよな。それって……)

アズマリリア「アルテマックスとの初対面の時からなのだ。

言語を始めとしてありとあらゆるものが異なるはずの世界に召喚されたにも拘らず、そういった面でなにかしらのトラブルが起きたことはなかった。アズマリリアと言葉を交わし、それ以外の人々とも会話し、コミュニケーションを取ることができたのだ。

改めてその事実を認識したセツナは、召喚に際し、自分の身になにかが起こったのではないかという憶測を立てるに至ったものの、その思索を長々と続けるわけにも行かなかった。

ファリアのまなざしが、そこはかとなく痛い。

「ねえ、聞いている?」

「聞いているよ」

セツナは、慌てて答えた。用紙を手に取り、視線を走らせる。黙読は一瞬。書き記された文字がすべて頭に入ったかどうかは怪しいものの、内容は理解する。そもそも、その用紙の内容については、さつきファリアから説明されていたのだ。

ことさら用紙に目を通して見せたのは、ファリアの視線を遮るためだった。

「要するに、協会に入れたことだろ？」

セツナは、用紙を再び机の上に戻すと、ファリアの眼を見た。眼鏡のレンズの向こう、エメラルドグリーンの瞳は、真摯にこちらを見据えていた。綺麗な瞳だった。思わず見惚れかけてしまうほどに「強制しているわけでもないし、あなたが望むのなら入らなくても構わないわ。でも、わたし個人の意見としては、セツナには是非とも協会に入って欲しいのよ」

静かで、それでいて力強いファリアの声音は、セツナの耳朶に心地よく染み入るようではあるのだが。

尋ねる。

「どうして？」

「協会に加入しておいて損はないわ。この大陸において現在活動中の武装召喚師の約九割が協会員なの。これが、あなたに加入を勧める理由のひとつ」

セツナは、その約九割という数字はどうやって算出したのかは聞かないでおくことにした。実際、目の前のファリア自身、その数字を真実だと言い張っているという風もなく、むしろその誇張表現に呆れている様子が見て取れた。もっとも、その表情の変化はきわめて些細なものであり、セツナが見逃さなかったのは偶然に過ぎない。「つぎに、加入し協会員となった武装召喚師は、無償で各都市の協会施設を利用できる。これは大きいわよ。路銀が尽きても、宿の心配が要らないもの。まあ、何日も何日もってわけにはいかないけどね。そして、会員は協会を通して、さまざまな仕事の依頼を受けることができるわ。商隊の護衛や、皇魔の討伐、盗賊退治などなど。外部からもたらされる依頼をこなせば、懐が潤うだけでなく、武装召喚師としての名声も上がっていくでしょうね」

ファリアの丁寧な説明をありがたく拝聴しながら、セツナの脳裏を過ぎったのは、ありふれたロールプレイングゲームのシステムだった。ギルドで依頼を受け、その達成によって報酬を受け取る。実にありがちでわかりやすいシステムだといえるだろう。

それが、現実にあるのだという。

セツナは、多少なりとも心をくすぐられたものの、それでもまだ乗り気にはなれなかった。いや、大陸召喚師協会に入るという選択肢も悪くはないとも思うのだ。

それは、ファリアが所属している組織だからというのも大きいがこの見知らぬ大陸で、なにかしら大きな団体に身を置いておくのは決して良くない判断ではないだろう。

しかし、なにかが引っかかる。

なんとも言いようのない違和感が、セツナを困惑させるのだ。別にファリアを疑っているわけではない。むしろ、彼女を全面的に信用することになんら躊躇はなかった。ファリアには、感謝しているのだ。そう、心から。

だが、それとこれとは別　　というほど単純な話でもないのが、困ったところだった。

「それに、あなた自身の目的も叶えやすくなるんじゃないかしら？」
こちらの心中を詩ってか知らずか、ファリアは、微笑むように言ってきた。

「俺の目的……？」

「あなたの目的がなにかは知らないし、そもそも、記憶喪失じゃあ思い出せないのかもしれないけどね。でも、目的がなければ、こんな小さな国には訪れないでしょう？」

（目的……）

セツナは、茫然とその言葉を反芻した。目的など、あるはずがなかった。アズマリアに意味もなく召喚され、そして、なんの目的や役目も与えられぬまま放置されたのだ。当初こそ英傑だの勇者だと燃え上がってはいたものの、そういった子供染みた熱情は、いまや完全に下火になっていた。

ならば、どうするのか。

セツナは、自分が置かれている状況を考えて、嘆息しなくなった。なにも思いつかない。レオンガンドにほだされてマルダールにやつ

てきたのはいいだろう。バルサー要塞の奪還に力を貸すのも、いい。

だが、その後はどうする？

このままガンディアに留まり続けるのか、それとも
。「思い出せねーっす」

適当に返答して、セツナは、頭を掻いた。なんにせよ、いまは目の前の現実をどうにかしなくてはならない。ファリアの誘いへの返答。それを先延ばしにすることはできないだろう。

彼女に失礼だ。

「そっか」

とは、ファリア。こちらの嘘を見抜いてはいるものの、特に気にしてもいないのかもしれない。それとも、セツナの嘘など、取るに足らないことだとも思っているのだろうか。

それからしばらく、ふたりの間には沈黙が横たわっていた。

セツナが黙考する傍らで、ファリアはというと、書棚から取り出した本を片手に、優雅に紅茶やパンケーキを口にしていた。

そして、室内に満ちた静寂を破ったのは、やはりファリアの言葉だった。

「……ところで、前々からひとつ気になってたことがあるんだけど、聞いていいかしら？」

「ん？ ああ、いいけど？」

そういうと、セツナは、顔を上げた。ちょうど、頭を抱えて悩むのにも馬鹿馬鹿しくなってきたところだった。まったく、どうして協会に入る入らない程度の事で、ここまで苦悩しなければならぬのだろう。入ろうが入るまいが、どちらであろうとも、現状が即座に変わるわけでもないのだ。

なのにどうして、こんなにも考え込んでしまうのだろう。

堂々巡りの思索は、セツナが予期しなかったファリアの言葉によって断ち切られた。

「クオン＝カミヤって名前に聞き覚えはある？」

それはまさに青天の霹靂といえた。

「!?!」

意識が飛ぶほどの驚きの中で、セツナは、懐かしい少年の声を思い出していた。

『ぼくは守屋久遠^{かみやくおん}。君は……?』

るおあああああああ!

耳障りで不愉快極まりないその咆哮は、皇魔特有のものに違いなかった。人間の神経を逆撫でにするそれが、戦闘の幕開けを飾るに相応しいかどうかはともかくとして、彼らの戦意を著しく高めたのは間違いないだろう。

見渡す限りの平原。周囲に遮蔽物となりそうなものはなく、頭上から降り注ぐ燦然たる陽光の下、だれもがその姿を曝け出すしかなかった。

男がふたりに女がふたり　合計四人の若者たちである。

「リヨットはわたしがやる」

と、一番に名乗り出たのは、若い女だった。

決して長身ではない。均整の取れたしなやかな肢体は、彼女がただものではないことを示しているかのようにであった。その肉体を包むのは、背中に天使の翼のような模様のある黒い装束であり、その上に灰色の外套を纏っていた。旅塵を避けるために違いない。

風に揺れる黒髪は美しく、敵を見据える灰色の瞳は刃のように鋭い。

敵とは、無論皇魔である。彼らを包囲するように展開した皇魔の

数は、軽く三十を超えるだろう。

真紅の体毛に覆われた大型の四足獣型皇魔 識別名リヨット。

隆々たる四肢から繰り出される一撃は、鍛え上げられた人間の肉体すら苦もなく粉碎するだろう。猟犬のような頭部に穿たれた二つの眼孔からは、赤い光が漏れていた。

その数、十体。

「そつちは任せた」

女は、腰に帯びた二本の剣を同時に抜き放った。ショート・ソードの二刀流。ひとつは刀身に古代神聖文字が刻まれており、儀式用の剣に見えなくもない。もう一振りは、波形の刀身を持つ剣だった。その二本の剣を振り翳すなり、彼女は、地を蹴った。

「では、ベスレアの相手はわたくし、ということですね」

そう言つて、口早になにかしらを唱え始めたのは、もうひとりの女である。リヨットに向かつて飛び出した女よりは上背があるものの、その体は特別鍛えられたものではなかった。しかしながら肉付きのいい肢体は、男にとつては垂涎的の的に違いなかった。

その肉感的な体を包み込むのは、二刀流の女と同じ黒装束であり、灰色の外套もまた、同じデザインであるらしかった。腰まで伸びた栗色の髪を後ろで束ねている。柔和な笑みを湛えた容貌は、慈母のそれと違って差し支えない。

彼女は、視界の端で両手の剣を振り回して、真紅の化け物を圧倒する仲間を捉えながら、みずからは術式の構築に専念していた。無論、前方及び左右の皇魔への注意も怠らない。

ベスレアという識別名をつけられた皇魔は、一見するとただの黒猫に他ならない。しかし、背から生えた一对の翼と、眼孔から漏れる紅い光が、それらがただの猫などではないことを如実に表していた。

不愉快な鳴き声で威嚇してくるそれらを一瞥しながらも、彼女は、微笑を崩さなかった。

術式が、完成した。

「武装召喚！」

閃光とともに掌に生まれた重量感は、彼女の意識をあざやかに変化させた。彼女が召喚した武器は、メイス 柄頭を持つ棍棒である。球形の柄頭からは、無数の刺が放射状に突き出していた。重量は、彼女の細腕にも耐えられるほどのものではあったが、それでも、その冷やかな重みは彼女の緩やかな思考を尖鋭化させるには十分だった。

「行きます！」

言うが早いか飛び出した女の後姿を見遣りながら、大男は、ひとりやれやれと肩を竦めていた。

「はしゃいでるねえ」

年のころにして二十代後半くらいか。外套を脱ぎ捨てて日の下に曝した赤銅色の肉体は、筋骨隆々という言葉が相応しいくらいに鍛え上げられており、その重量感たるや凄まじいものがあった。黒髪黒目。野生的な容貌は、しかし、血に餓えた獣というよりは、惰眠を貪る怠け者といった風情があった。

皇魔の群れの中で暴れ回るふたりの女と同じ、漆黒の装束を身に纏ってはいるものの、どう見ても似つかわしくないのは本人も認めるところだろう。大男が天使の翼を背負うなど、不気味以外のなにものではない。

「ま、それもこれもあなたのせいなんですがね」

彼は、無数の皇魔を事も無げに薙ぎ倒していくふたりの女傑から視線を外すと、すぐ後ろを振り返った。

「だとすれば、ぼくは罪深い生き物だね」

男がはっとするほどに眩い笑みを浮かべたのは、ひとりの少年だった。

十代後半の少年。

明らかにひとりだけ場違いな空気を纏うその少年は、しかし、間違はなくその男や女たちにとっては必要不可欠な存在であった。

中性的、という言葉がこれほど似合う人間も珍しいだろう。艶や

かな黒髪を持ち、白い肌は透明感に溢れ、完璧とは言い切れないにせよ、極めて整った容貌は、美貌といってもなんら遜色はなかった。深い青を湛えた瞳に見つめられたものは、男であろうと女であろうと、ときめきを覚えざるを得ないのではないか。それは、彼に魅了されたものたちの共通認識だった。

やや細身ではあるものの、それはむしろ彼の中世的な容姿を引き立たせるのに役立つていた。三人と同様に漆黒の装束を纏っており、この四人の中で、彼が一番その服を着こなせているのは錯覚などではないだろう。

彼は、男に向かつてもう一度微笑すると、周囲を見回した。

さつきまで不気味な咆哮を上げていた皇魔たちは、いまや無残な亡骸となって大地に横たわっていた。あつという間の出来事だった。もつとも、そんなことで驚く少年でもなかったが。

当然の結果に過ぎない。

「イリスもマナもお疲れ様」

そういって、彼は、返り血ひとつ浴びていない二刀流の女剣士と、棍棒を片手に暴れ狂った武装召喚師の労をねぎらった。

「いえ、大したことはないの……」

イリスは、照れたように視線を逸らしながら剣を鞘に収め、マナは、微笑を浮かべたままメイスを手離れた。彼女の細い手を離れた棍棒は、地面に到達する前に消失した。元の世界に帰還したのだから。

「ウォルド、君もね」

「俺はなにもしてませんよ」

少年に声をかけられて、男は、軽く肩を竦めて見せた。実際、なにもしていないのだ。それなのにそんなことを言われると、背中がむず痒くなる。

しかし、少年は取り合わない。

「ぼくを護ってくれていたじゃないか」

「その必要はなかったみたいですがね」

「心遣いが嬉しいのさ」

少年は、そつと告げると、頭上を仰いだ。特に意味がある行動ではなかった。頂点に到達しようとする太陽の動きを確認するつもりもなければ、風に流れる雲の群れに想いを馳せることもない。

そうして、どれくらいの間がたったのだろう。

「行きましようか。クオン様」

マナの言葉に促されたことで現実に帰還を果たしたような気持ちになって、彼は、苦笑とともに仲間たちを振り返った。

「そうだね。行こうか」

その少年は、クオン「カミヤ」といった。

第二十話 ガンディアのうつけ

クオンⅡカミヤ。

その名がワーグラーン大陸全土に轟いたのは、およそ半年前。

ガンディアとログナーの間で起きたバルサー要塞攻防戦の最中、その少年は現れたのだ。なんの武器も持たず、防具も身に付けずに戦場に出現したその少年が、劣勢だったログナー軍に手を貸したことで戦況は一変した。召喚した白き盾を掲げた少年の前に、ガンディア軍はなす術もなかったのだという。

ログナー軍の猛攻の前にバルサー要塞は陥落し、ガンディアは北部防衛の要とその周辺の国土をログナーによって奪われたのだとは、ファリアの言葉であった。

「その戦いにおけるログナーの勝利の立役者が、クオンⅡカミヤという無名の少年だった事実は、戦後間もなくログナーの人間によって広く流布されたわ。長年果たせなかったバルサー要塞陥落を実現できたことが、よほど嬉しかったんでしょね。それによって、クオンⅡカミヤの名は大陸中に知れ渡ったのよ」

ファリアのわかりやすい説明を聞きながら、セツナは、茫然と頭上を仰いでいた。分厚い鉛色の雲が視界一面を覆っている。今にも降り出しそうな、そんな空の表情ではあるものの、マルダールについてから数時間、雨が降ってきたことはなかった。

考えるのは、そう、すべては半年前の出来事だという事実だ。

奇しくもそれは、現実世界において守屋クオンが失踪した時期と重なるのだ。名前だけではなく、その時期まで一緒となると、その可能性を考えるしかないだろう。

(本当に、クオンなのか……?)

セツナは、胸中でうめいた。

確信があるわけではない。本人をこの眼で見たわけではないし、同姓同名の別人である可能性も十分にあるはずだった。しかし、そ

れでも、セツナは、クオン「カミヤが半年前に姿を消した守屋クオンであると思わざるを得ないのだ。

直感のようなものだ。頼りにはならないが、こういう場合、直感のほうが良いような気がする。

そして、その直感が正しかったのなら、セツナは、運命というものを呪いたくなるのだろう。そんな未来を垣間見た気がして、彼は、うなだれるよりほかなかった。

「ま、ログナーも当てが外れるなんて思ってもなかったんでしょうけれど」

ファリアの視線を感じて、セツナは、顔を上げた。人気のない公園の殺風景な景色が視界に入ってくる。

広い公園ではあったが、さりとて、特に目に付くようなものがあるわけもなく。植樹されたのであろう木々と色とりどりの花々が咲き誇る花壇だけが、この公園を公園たらしめているのかもしれない。

セツナは、そのただ広いだけの公園の片隅に置かれたベンチに腰掛けて、ファリアの話を聞いていたのだ。無論、あの書庫からこの公園に連れ出したのはファリアであり、セツナが特別望んだわけではない。

セツナが隣のファリアを見遣ると、彼女は満足したように続てきた。聞いているのかどうか不安だったに違いない。

「クオン」カミヤは、バルサー要塞の戦いの後、ログナーから仕官の話を持ちかけられたけれど、それを蹴り、ログナーを去ったのよ破格の待遇だったらしいけれど、彼には興味がなかったんでしょうね」

セツナは、彼女の言葉を聴いて脳裏に浮かんだ少年の美麗な横顔を打ち消すように、かぶりを振った。彼ならば、そうするかもしれない。目先の利益に目が眩むようなことがないのだ、あの少年には目的に不要とあらば、どのような財宝が目の前に転がっていても黙殺するのだろう。いや、そういったものが目に入らない性質なのかもしれない。

目標までの道程しか視界に映っていない　　というのはいきすぎだろうが。

「自由を得たクオン」カミヤは、それ以降さまさまな戦いに顔を出し、数々の戦果を搔っ攫っていったそうよ。そして現在の彼は、傭兵集団《白き盾》のリーダーとして知られているわね」

セツナは、はっとフアリアに目を向けた。今回ばかりは、彼女の横顔に意識を囚われるということはない。彼女の口にした言葉にこそ、セツナの意識は傾いていた。

「《白き盾》……」

その言葉を反芻して、セツナは、大きく納得していた。なるほど、クオンには良く似合う名称ではある。穢れなき純白は、彼にこそ相応しいといえるだろう。しかし、その眩いばかりの輝きが、セツナの心を掻き乱すのだ。

鮮烈で、目を背けることさえ許されない、圧倒的な光輝。

その光の前では、セツナは、自分など塵芥も同然ではないかと錯覚するほどだった。理由などないのかもしれない。その覆しようのない敗北感とでも言うべき感情を抱いたのは、クオンと出逢ったその瞬間だった。

『ぼくは守屋久遠。君は？』

いつだって、彼の開口一番のその言葉が、セツナの意識を苛んだ。異彩を放つ瞳がこちらを見ている、その情景が脳裏に浮かぶだけで、セツナは、肺腑を抉るような痛みと格闘しなければならなかった。

その痛みに比べれば、ランカインの炎のなんと生易しいことか！セツナは、齒噛みすると、なんとかかしてクオンのことを頭の中から排除しようとした。だが、心に深く刻まれた嫌な想い出ほど、容易に離れないものはない。どれだけ強くほかのことを考えようとしても、あの少年の屈託のない微笑が、セツナの意識を捉えて離さなかった。

だからこそセツナは、その男の出現に心の奥底から感謝したのかもしれない。

「なんだなんだ？ 雑兵どもがカミヤだなんだと騒いでるから来てみれば、全然別人じゃねーか」

もつとも、暴言とも受け取れるぶっきらぼうな言葉とともに割り込んできたその男には、セツナの落ち込んでいく意識を救うつもりなど、あるうはずがなかったが。

「ザルワーンは動かない　というより、現状、動くに動けにといったほうが正しい」

レオンガンド・レイ＝ガンディアは、囁くように言った。広い部屋とはいえ、現状ふたりきりなのだ。大声を出す必要などはないし、無駄にエネルギーを使うのは彼の主義に反している。

「なぜです？」

リノクレア＝レーヴェ・ルシオンの眼が冷ややかに輝いたのを、レオンガンドは見逃さなかった。レオンガンドの考えにわずかな隙でも見つければ、即座に攻撃しようともいうのだから。抜き身の刃のように鋭いまなざしは、兄をして肝を冷やさせるほどのものではあったが、一方で、哀れだとも想うのだ。

（不出来な兄のせいで苦勞をかけるね）

もつとも、レオンガンドがそんなことを口走りでもしたら、彼女は激怒のあまり兵を率いて国に帰ってしまうだろう。いや、あるいは、刃を突きつけてくるかもしれない。

みずからの死すらも厭わず。

「簡単なことさ。ザルワーンは、昔から大きな病を抱えていたんだよ。とても深刻な病をね」

「病？」

「そう、病。五竜氏族というのは知っているよね？」

「当たり前です。ザルワーンを支配する、竜の眷属の末裔を名乗る五つの家系のことですよ。ライバーン、リバイエン、グリディア、ファルブネリア、ビユーネル　つまりは、彼らの権力争いかなにかですか？」

うんざりとしたようなりノンクレアの表情には、レオンガンドは曖昧に微笑を返すしかなかった。先王が病に倒れた後、王位継承者として担ぎ出されかけた経験のある彼女にとって、国のトップを巡る醜悪な争いほど嫌いなものはないのだろう。

「御明答。権力闘争なんて、どこの国でも日常茶飯事ももしれないけれどね、ザルワーンはほかの国とは少々趣が異なるんだよ。五竜氏族に連なるものはその末端に至るまで、幼少の頃より武装召喚術を徹底的に教え込まれるらしい。そうして作り上げられたものたちの人格など、押して知るべし、だね」

「人格をとやかく言う権利が兄上にありますか？」
「否定はしないさ。武装召喚術に重きを置きすぎた者たちの権力争いは、血が流れないほうがおかしいだろう？　武装召喚師同士の戦いほど派手で凶悪なものはないからね」

実際、武装召喚師同士の言い争いから発展した喧嘩が、武装召喚術の応酬となり、無差別な破壊と甚大な被害を撒き散らしたという事例が、いくつもあるのだ。故に、武装召喚師同士の召喚武装を用いた私闘を禁じている国は多い。

そもそも、未だに武装召喚術そのものを認めない国だってあるのだ。そういった時代遅れともいえる国は、遅かれ早かれ滅び去る運命にあるに違いない。だからといって武装召喚師に頼りすぎるのも考え物である。便利なものがあると、ついついそればかりに頼ってしまうのが人間の悪い癖なのだ。

(そう。なにものにも頼りすぎてはならない)

レオンガンドは、みずからへの戒めを胸中に押し込めると、話を続けた。

「それでも、いままではうまくやって来てたみたいだ。三十年前、

あまりにも血を流しすぎたことに戦慄した五竜氏族の当主たちが、話し合いの場を設けてね。ザルワーンの太守を五氏族で持ち回りにしよう、ということになったらしい」

「なるほど。それで、ザルワーンのトップはころころと変わっていったんですね」

「そ。そのめんどくさいシステムは、ここ最近まではうまく機能していたようだね。もちろん、見えないところでは相当遣り合っていたらしいけど、表面上、歯車は噛み合っていたんだ」

いや、それはもはや噛み合っていたとは言わないのかもしれないが、ともかく、システムとしての太守の持ち回りは、ザルワーンを強くこすすれ、弱くすることがなかったのは確かなようである。なししろ、内部抗争で血を流す必要がなくなり、武装召喚師という重要な戦力を外に向けることができるようになったのだ。

そこから、小国に過ぎなかったザルワーンの躍進が始まるのだが、それはまったく別の話である。

「三十年、歯車が狂うには十分すぎる年月が流れた。半年前、バルサー要塞が陥落してからさ。すべてが始まったのはね。いや、ザルワーンにとっては、すべての終わりかもしれないけれど」

そこまで言って、レオンガンドは、リノンの不思議そうなまなざしに気づいた。それはまるで、とてつもなく奇妙な、あるいは理解できないようなものでも見ているような表情だった。少なくとも、兄を見るような眼ではないだろう。

とはいえ、レオンガンドは、怒る気にもならなかった。彼女がそんな顔をする理由も、わからないではないからだ。

「……兄上は、どうしてそう、すべてを知っているような口振りなんですか？」

意を決したように問いかけてきたリノンに対し、レオンガンドは、軽くウインクを飛ばして見せた。

「う・つ・け、だからね」

第二十一話 蒼き風

「クオン」カミヤつてのはよ、もっところ、なんつーか、きらきらした女みたいな奴だったぜ？」

粗暴な言い様ではあったものの、男が、別段こちらに悪意や敵意を持っていないことは、その野太い声音だけでセツナにも理解できた。そして、その男の出現は、セツナの沈みゆく心を押し止め、なおかつ浮揚へのきっかけとなった。

「その辺、どうなんだ？」

尋ねられて、セツナは、いつの間にか俯けていた顔を上げた。眼前には、三人の男がいた。

まず眼が行くのは、こちらを見据える大男だろう。その立ち位置から、彼が話しかけてきたに違いなかった。

二メートル以上はある巨躯を覆うのは、鍛え上げられた鋼の如き筋肉であり、その上から身に付けた簡素な衣服は、今にもはち切れんばかりに見えた。

野生的な顔立ちは、筋肉質な体に見合うものだといえるだろう。だが、決して悪い顔ではなかった。むしろワイルドなハンサムといえた。適当に伸びた黒髪も、野獣の如きまなざしも、獯猛な笑みも、彼を彼たらしめている要因のように思えた。

セツナは、しかし、返答に困った。なんと答えればいいのかわからなかった。確かに、彼の言う通り、自分はクオンではない。その上、クオンがきらきらした女みたいな奴、という言葉にも納得できる。かといって、この場合、どういう返事が望ましいのだろう。

「そもそも、だれもクオン」カミヤ本人とは言っていないかったような気がするんですが？」

と、まるでセツナへの助け舟を出すかのように言ったのは、大男の後ろのひとりだった。

彼に眼を向けると、まず、細長いという印象を抱くのは仕方な

いことだったのかもしれない。別にセツナに悪気があるはずもなく、それはごく当然の第一印象である。

長身であり、細身なのだ。肉体は鍛えながらも、不要な筋肉はつけていないのだろう。故に、どこか頼りなさ気に見えるのだが、実際のところはわからない。しかし、長身とはいっても、大男に比べると、多少なりとも低く見えてしまうのは仕方がないことかもしれない。

大男とは打って変わって、知的、という言葉がよく似合う秀麗な容貌をしていた。黒縁の眼鏡も、彼の知性的なイメージを形成するのに一役買っているに違いない。黒髪黒目は、この世界では一般的なのだろうか。

「団長得意の壮大な勘違いって奴だよ」

呆れたように告げたのは、もうひとりの男である。どことなく幼さを残した面影からは、少年、という言葉が思い浮かぶのだが、実年齢は間違いなくセツナより上だろう。青年という表現のほうが正しい。

背丈は、ほかのふたりと比べれば低いと感じるのだが、冷静に比較すればセツナと同じか、少し高いくらいはあった。体つきは、両極端なふたりの男の間の中間のようであり、中肉中背といって差し支えないだろう。とはいえ、鍛えられた体からは、無駄な贅肉は認められなかったが。

彼の中で一際目を引くのが、その銀色の頭髪だろう。プラチナブロンドではなく、紛れもない白銀であり、その透明な美しさは、彼の容貌を際立ったものにしていった。ブルーの瞳も、整った顔立ちの中であざやかな光彩を放っている。

青を基調とした装束は、軍服というよりは制服のように見えなくもなかった。背に帯びた剣は、ただひたすらに長く、抜くことすら容易ではないだろう。無論、扱えないような代物を身に付けているはずはない。

と、大男が、背後に向き直って声を荒げた。

「なんだよ！ それじゃまるで俺が悪いみてーじゃねーか！」

「その通りだから仕方がないじゃないですか」

「そうそう。団長は団長なんだから、そこんところよく考えてから行動するべきだと、俺は思うな」

ふたりの間髪入れない反撃に大男が息を呑む様子を、セツナは、ただ啞然とするしかできなかった。それは隣のフアリアも同様らしかったが、確認をすることはかなわなかった。なにしろ、目の前で繰り広げられる馬鹿げた光景に意識を囚われていたのだ。

「団長は団長つて、当たり前じゃねえか！ それつてつまりなにが言いたいんだ？ ええ？」

団長といわれた大男が、怒声を張り上げる。その大音声には、ひたすらに傍観に徹していたセツナさえもびくつとなるほどだったが、対するふたりの男はまったく意にも介していない様子だった。

「つまり、おつむが少々足りないってこと」

などといって悪びれもしない青年に、団長は、朗らかな笑い声を返した。

「はっはっはっ。ルクス君、つまらない冗談で場の空気を和ませようとする君の涙ぐましい努力にはいつも感心するのだが、そういうのは時と場所と、相手、を考えてからにしたほうがいい、と、わたしは常々想っているのだが、ね？」

不気味なまでの朗らかさの中に潜む凄みに気づき、セツナは、団長という男の実力の一端を垣間見た気がした。もともと、何事も経験不足のセツナが、正確に人の力量を推し量ることなどできるはずもなく、ただの思い過ごしである可能性もなくはないのだが。

(でも、強い……！)

セツナは、団長の大きな背中を見つめながら、自分がいつの間にか拳を握り締めていたことに気づいた。団長の声音に潜む凶悪なまでの気配に、体が反応してしまったのかもしれない。

「時は今しかないし、場所も公園だけど、構わんでしょー。そして、相手が団長なら、なおさらだ！」

やはり、青年は、まったくといっていいほど動じていなかったが。

「……てめえ、沈めるぞ？」

「ふふん、できるならやってみたら？」

「なら今すぐ血の海に沈みやがれ！」

「やなことだ！」

「 団長もルクスも、いい加減にしてください」

団長と青年の子供染みた、それでいて手に汗握るような殺気の飛び交うやり取りは、沈黙していた細身の男が口を開いたことによつて、ひとまずの終結を迎えることになった。

眼鏡のレンズが、なぜか輝いたように見えた。

「さもないと」

『さもないと……？』

異口同音に、ふたり。

「ふふふ。どうなるかは、身に染みてわかっていると想っています。だが、どうやらおふたりの小さくて救いようのない頭の中からは、とつくに消えてなくなっていたようです。あの夏の日のこと」

男の語り口は慇懃無礼そのものであり、聞いているだけで背筋がぞくつとするほどのものだった。彼にも、凄みがあったのだ。ただものではない。まだまだ初心者に過ぎないセツナにそう感じさせるのだ。余程の実力者なのだろう。

訪れたのは、一時の静寂。

団長と青年が顔を見合わせ、そして。

『ぎゃあああああああああああああ！』

異口同音の悲鳴とともに、ふたりは、いずこかへと走り去っていった。それはもう、もの凄まじい速度だった。全身全霊で駆け出したに違いない。ふたりの姿は、あっという間にセツナの視界から消え失せてしまった。

呆気にとられるしかない。

「なんなんだ？」

「失礼。まだ名乗っていませんでしたね」

男が透かさず声をかけてきたのは、状況に取り残されたこちらの様子を不憫に思ったからかもしれない。とはいえ、さきほどは打って変わって穏やかな口調で話しかけてくれたので、セツナも安心して彼に眼を向けることができた。

実際、レンズの向こうの黒い瞳は、どことなく優しげだった。

「わたしたちは、傭兵団《蒼き風》の一員です。どこかに行ったふたりのうち、大きほうが団長のシングルドゥフォリアー。ああ見えて凄い方なんですよ。小さいのが突撃隊長のルクスゥヴェイン。あれもそれなりにやるほうです。で、わたしは副団長のジンゥクレールです。以降、お見知りおきを」

「あ、はい」

一度に三名も名前が出てきたが、今回はどうやら努力せずとも覚えられそうなことに、セツナは軽く安堵を覚えていた。あまりにも衝撃的な出会いは、彼らの印象と名前を脳裏に強く焼き付けるだろう。

続いて、セツナは、みずからの名を告げた。

「俺は、セツナゥカミヤ。一応、武装召喚師です」

「もぐりだけどね」

ファリアが、ほとんど間を置かずに補足してくれたのは、彼女なりの気遣いの表れなのだろう。未登録召喚師もぐりと協会所属の召喚師にどれほどの違いがあるのかは、少し前に聞かされたとはいえ、初対面の人間に言う必要があるのだろうか。

セツナには知らない事情があつたとしても、気分のいいものでもない。

もっとも、大陸召喚師協会に加入していないセツナが悪いといえはそれまでの話なのだが。

「協会に入っていないんですか？」

「え、まあ、なんとというか、その……」

驚いたようなジンゥクレールの言葉に、セツナは、しどろもどろにならざるを得なかった。入会を決断しなかったことに、特に深い

理由などはなかったのだ。ただなんとなく、まだ早いような気がしただけである。

しかし、そんな理由でも、ファリアは微笑して納得してくれたのだ。

「まあ、セツナにもいろいろ事情があるんです。わたしとしては協会に入ることを進めてるんですけどね。本人の意思を尊重したいので」

そう言い放つファリアの優しさが、寄る辺なき異世界においては極めて大事なものだと思つた。

第二十二話 進軍

バルサー要塞は、ガンディア北部に広がるバルサー平原に建造されたガンディア王国最大の城塞である。当時、隆盛を誇ったログナーの侵攻から領土を防衛するための要であり、また、将来北へ進出する際の拠点として建造された。

実際、百年近くもの間ログナーの侵攻を許さなかったバルサー要塞は、難攻不落の代名詞として周辺諸国に知られ、何度となく進軍しては敗走するログナー軍の有様はあまりにも有名だった。

それは、英傑の誉れ高き先王シウスクラウド・レイⅡガンディアが即位し、その力を存分に発揮していた頃は元より、病の床に臥せてからもなんら変わらず続いた。やがて、ログナーの軍勢が、ガンディアにとつてもはや脅威ではなくなったのだと過信したとしても、仕方のないことだったのかもしれない。

その結果として、バルサー要塞は陥落した。

ログナーが主力を結集したことや、ザルワーンが強力な援軍を差し向けたこと、そしてクオンⅡカミヤの出現 様々な要因が組み合わさった結果とはいえ、最大の原因はガンディア側の慢心にあったのだ。

ログナーがバルサー要塞に向けて軍を発したときに全力で迎え撃ち、早急に撃退していたのなら、いかにザルワーンの精兵が援軍に来ようとも、クオンⅡカミヤなる不確定要因が現れようとも、要塞は落ちなかったはずだ。敵主力はもはや潰走しているのだから、落ちようがない。

もっとも、それもやはり机上の空論に過ぎないこともわかっていた。起きてしまったことを変えることはできない。過去は厳然としてそこに存在し、故に彼は、剣を手取るしかなかったのだ。

頭上には、眩いばかりの青空が広がっていた。雲ひとつ見当たらない。数日前の曇天が嘘のような天候に、軽く眩暈すら覚えかけて、

彼は苦笑した。ただの晴天如きで眩暈を覚えてどうするのだろうか。

眼下に広がるのは、マルダールのほぼ城塞化された町並みであり、マルダール・タワーと呼ばれるこの塔の五階に設けられたバルコニーからは、市内に満ち満ちた数千の兵士と、彼らを見送るために集まった数多の市民の姿を見ることができた。

彼　レオンガンド・レイ＝ガンディアは、ガンディアの象徴でもある白銀の獅子を模した甲冑を身に纏っていた。兜を被っていないのは、その素顔を臣民に曝すためだった。もつとも、地上五階のバルコニーに立つ彼の顔を肉眼で確認できるものなど、そうそういないのだろうか。

レオンガンドは、腰に帯びた剣を抜くと、前方に向かって突きつけるように掲げた。その美々しく飾り立てられた長剣は、宝剣グラスオリオンといった。ガンディア王家に代々伝わる剣であり、王位の継承とともに先王から新王へと受け継がれてきたものであった。そして、新王がグラスオリオンを抜くのは、初陣のときだけだった。

「全軍、出撃」

レオンガンドの号令は、兵士たちの怒号のような歓声の波を引き起こした。

マルダールを発したガンディア王国軍は、総勢五千に及ぶ大軍だった。そのうち三千五百がガンディア王国の正規軍である。人口二十万の国家が動員するには少ないのかもしれないが、それがガンディアの実態なのだという。

もちろん、ガンディアの全兵力ではない。バルサー要塞奪還のた

めにすべての兵力を投入することなど、できるはずがないのだ。領土拡大を望む周辺諸国が、その隙を逃さないはずがない。

南は、いい。ルシオン、ミオン両国との同盟のおかげで、南に兵力を裂く必要はなかった。

しかし、東にはベレル、西にはアザークがあり、どちらもガンディアと大差ない小国とはいえ、侮つていては領土を掠め取られてしまうに違いなかった。油断は禁物なのだ。

それでも、バルサー要塞に投入できる限りの兵士を集めてはいた。それが三千五百人の兵士たちであり、弱兵で知られる彼らガンディアの正規兵が隊伍を組み、乱れひとつなく行軍する様は中々どうして、頼もしく感じられたのだった。

残る千五百のうち、八百がルシオンからの援軍だった。白聖騎士隊百名では心許ないと思つたのか、ルシオンの第一王子ハルベルク・レウスルシオンが、精兵七百とともにマルダールを訪れたのが三日前のことだった。合計八百名に及ぶルシオンの援軍は、それだけでガンディア正規軍を圧倒するという。

同盟国ミオンからの援軍も、もちろん合流していた。突撃將軍の異名で知られるミオン三將のひとり、ギルバート・ハーディを筆頭とする五百名である。群青の武具に身を固めた彼らもまた、ガンディアの正規軍など比べるまでもなく精強なのだろう。

「結局、同盟国の力に頼らなきゃならないつてのが、ガンディアの辛いところだな」

とは、傭兵集団《蒼き風》団長シグルド・フォリアー。彼の支配下には約百名の傭兵があり、また、それ以外から集まった百人ほどの傭兵も、その指揮下に置いていた。

それが、正規兵以外の千五百のうちの二百である。要するに、金を目当てに集まった傭兵たちが、《蒼き風》を筆頭に二百人もいたということだ。

《蒼き風》の団員以外の傭兵たちがシグルドの指揮下に入ったのは、単純に、そのほうが生存率が高いかららしい。

《蒼き風》は、半年前のバルサー要塞攻防戦において多くの団員を失ったものの、それ以外の戦いではほとんど死者を出さないことで有名なのだとか。

傭兵は、褒賞金目当てで命を張る。しかし、だからといって、死んでしまつては意味がないのだ。生き残ることがもつとも肝要であり、そのためには、どのような手段を講じてでも生存率を高める必要がある。

その手段のひとつが、《蒼き風》の指揮下に入ることだったのだ。「ま、今回の戦いに勝つて要塞を取り戻せば、多少は風向きも変わりますよ」

「そうならたらいいけどね」
ジン・クレールの言葉に笑みを浮かべたのは、ルクス・ヴェインだ。彼の銀髪は、とにかく目立った。陽光を浴びてきらきらと輝く白銀の頭髪は、隊列のどこからでも見つけることができるのではないだろうか。

「そうならないと、ガンディアはおしまいなんだけど」
隣を歩くファリア・ベルファリアの小さなつぶやきを、セツナは聞き逃さなかった。とはいえ、別段気にするようなものでもない。当然の結論なのだろう。先王の死の直後に落とされた重要拠点を即座に取り戻さないどころか、半年以上に渡って放置してきたのだ。此度の戦いで奪還できなければ、ただでさえ人望のないレオンガンドの権威は失墜することは、想像に難くない。
だからこそ、勝たねばならないのだ。

マルダールを北へ。

約五千の大軍が列を成して、進んでいく。

街道を通り、脇目も振らず進軍する。

正規軍を先頭に、ルシオン、ミオンの同盟国が続き、傭兵たちは最後尾であった。

セツナは、その最後尾の一群の中にあつた。《蒼き風》の団長、副団長、突撃隊長とともに、初陣の地へと一歩一歩近づいていた。当然、徒歩である。騎馬を許された身分であるはずもなければ、そもそも馬も持っていない。それ以前に、セツナは馬には乗れなかつた。

出陣に当たつて、セツナも、格好だけはそれらしく整えられていた。ファリアが手配してくれた戦闘用装束は、極めて動きやすい代物であり、しかも素晴らしいデザインだった。セツナはその衣服を一目で気に入り、ファリアに何度も感謝を述べたものである。

その上に、鎧を身に付ける予定だったのだが、これが事のほか重く、セツナは、その鎧を装着したまま戦うのは無理だと判断し、身に付けるのを諦めたのだ。とはいえ、鎧もなしに戦場に出るなど、正気の沙汰ではない。いやそもそも、セツナは自身がとうに正気を失っていることに気づいていた。

狂気だ。

狂気に飲まれなければ、戦争に参加しようなどと思わないだろう。つい最近まで、ただの学生に過ぎなかつたのだ。しかし、あまりにも現実離れした世界の中では、かつての常識は脆くも崩れ去るしかない。狂気こそが正気となり、いつかの正気は昔日の幻想と成り果てた。

もはや、後戻りはできないのだ。

その狂気の渦中へと進軍する軍勢の中にあつて、セツナは、マルダール中を探し回つてようやく手に入れた軽金属の鎧を身に付けていた。その鎧は、ファリアが用意していたものよりは遥かに軽いものの、性能面においてはやはり圧倒的に劣っていた。

（仕方がないよな）

セツナは、胸中でひとりごちると、前方に目を向けた。いまはどうしようもないことだろう。体力がないのだ。その根本的な問題をどうにかするには、今後時間をかけてしっかりと体力をつけるしかなかった。

それにはまず、目の前の戦に勝利しなければならないのだが。

(そもそも戦えるのか？ 俺)

もちろん、戦ったことはある。皇魔の群れを撃退し、ランカイン
「ビューネルを打ち倒したのは事実だ。しかし、戦争とは根本的に
違うものだろう。」

とはいえ。

(やるしかない……か)

緊張感と昂揚感がない交ぜになった不思議な感覚の中で、セツナ
は、ただ前に進んでいくのだった。

第二十三話 オーロラストーム

「そうか」

ジョー・ギルバースは、部下からもたらされた報告に眉ひとつ動かさなかった。ガンディアがバルサー要塞を奪還するために動き出したという報告である。しかし、それは彼にとって想定範囲内の出来事であり、驚くには値しないものだった。

ジョー・ギルバース。見た目には三十代半ばの男である。しかし、これまで散々苦勞を重ねてきたのだろうか、その頭髪には白髪が混じり始めており、顔にはいくつもの皺が刻まれていた。もともと、彼の茶褐色の瞳からは生気は一切失われておらず、ガンディア進軍の報に触れ、むしろ光を放ち出していた。

待ちに待った時が来たのだ。

彼がログナーの将となつて、早五年の歳月が流れていた。二十代で將軍に任命されたことで当初こそ国の内外から脚光を浴びたものの、戦場を飛び回つたにも拘らず碌な戦果も上げることができなかった彼は、やがて、ログナーの将士や民にも愛想を尽かされ、拳銃の果てには黙殺されるようになってしまった。

どこで道を違えたのだろうか、と想わないこともない。二十代で一軍の将となつた彼には、本来ならば薔薇色の未来が待っているはずだった。大きな失敗さえしなければ、身の程を弁えてさえいれば、栄光に満ちた日々が約束されていたのだ。

だが、彼は、道を踏み外してしまった。光り輝く将来への架け橋を渡ることさえできず、急転直下。彼はいまや、ログナーの無能將軍の名をほしいままにしていた。

(それも今日までだ……！)

ジオは、強く拳を握つた。これまでの様々な苦勞が、閃光のように脳裏を駆け巡っていく。

今日のこの日のために地を這い、泥をすすするような真似をしてき

たのだ。どのような陰口を叩かれようと、薔薇色の将来に返り咲くためののだ。辛くはあったが、我慢はできた。それよりも、無能將軍のままにいることのほうがよっぽど苦痛だったのだ。

そう、ジオは、バルサー要塞の指揮官となるためにあらゆる手段を講じたのだ。王侯貴族に取り入り、軍内部での発言権を高め……ようやく、このバルサー要塞の指揮官としての任命を受けることができた。

バルサー要塞は、半年前、ログナーがザルワーンの協力を得て、やっとの想いで落とすことのできたガンディアの要塞であり、領土防衛とガンディア侵攻の要である。ジオはギルバースのこれまでの功績からしてみれば、どう考えても分不相応な役目には違いなかった。そのことで、彼への誹謗中傷が増大していることも、ジオ自身理解していた。

しかし、それも結果次第で変わり得るものだと、彼は信じていた。つまり、いずれ要塞の奪還に来るであろうガンディアの軍勢を打ち破り、その勢いそのままマルダールを押し潰し、さらに王都ガンディアオンをも制圧する。それほどの戦果を見せ付ければ、だれもかれも口を閉ざすしかないだろう。そして、賞賛するのだ。

(ログナーの英雄……と)

ジオは、即座に命令を発した。バルサー要塞に駐屯する全軍を以て、ガンディア王国軍を迎え撃ち、撃滅するために。

バルサー平原は、ガンディアの北部に広がっている。マルダールからは、徒歩で二日といったところか。

かつてガンディアの領土であったはずのこの平原一帯は、その名を冠する要塞が陥落したことで、一瞬にしてログナーの支配下に置

かれるようになった。とはいえ、支配する国が変わったところで、地形に変化が訪れるわけもない。

遮蔽物の見当たらない、ただっ広い大地が、悠然と横たわっているのみだ。

その大地に打ち込まれた楔が、バルサー要塞である。巨大で分厚い城壁は五角形の星を象っており、その外観の見事さは、見るものに呼吸を忘れさせるほどだという。幾度となくログナーの侵攻を退け、ザルワーンに加勢さえももしなかったバルサー要塞は、いつごろからか難攻不落の代名詞となっていた。そしてそれは、要塞がログナーの手に落ちてからも、失われることは無かった。

その強烈なイメージを払拭できないのは、なにも敵国だけではない。ガンディアの兵士たちも同じである。むしろ、ガンディア国民にとってバルサー要塞の存在は、大きくなりすぎていたのかもしれない。それは、度重なるログナーの侵攻をことごとく阻んできたという事実と、ガンディア軍の誇大な宣伝によって植えつけられたものに違いない。

もっとも、セツナにはそのバルサー要塞とやらがどれだけ凄いのかなど、わかるはずもなかった。

行軍中、要塞に関する話なら散々聞かされてはいたのだ。耳に蛸ができるくらいというのは言い過ぎにしても、うんざりするほどには聞かされただろう。シグルド、ジン、ルクスを始め、《蒼き風》に所属する傭兵の皆様方から、懇切丁寧に教えてもらったわけだが、しかし、セツナの頭には、ほとんど残っていなかった。

たったひとつの出来事を除いて。

(クオン……)

セツナは、胸中であの少年の名をつぶやいてから、慌てて頭を振った。くだらないことを考えている場合ではない。あの少年が、バルサー要塞においてどれほどのことをしたとしても、いまのセツナには関係のない話だった。

いまは、目の前のことに全力を注がなければならない。

でなければ、死ぬだけだ。

「さあて！ 張り切っていいこうか？」

シグルドの大声が青空の下に響き渡ったのは、ちょうど太陽が中天に至る頃合だった。日差しは極めて強く、鎧を着込んだセツナには辛いものがあった。もちろん、それはほかの連中も同じだろう。

《蒼き風》の傭兵やそれ以外の傭兵は、それぞれ思い思いの鎧を身に付けていた。各国の正規軍とは違い、揃える必要がないのだ。全身鋼鉄の甲冑で覆いつくしたものもいれば、胸当てだけといった軽装のものもいる。余程腕に自信があるのか、単純に着込むのが嫌なのか、どうか。

ともかくも、なにやら曲者揃いといった感のある傭兵たちの中で、一際異彩を放つのが、セツナとファリアのふたりなのかもしれない。紅一点のファリアが浮くのは当たり前であり、素人同然のセツナが目立つのもまた、当然である。

仕方のないことには違いない。

ふたりが《蒼き風》と行動をともにしているのは、レオンガンド直々の命令であったのだ。そもそも、ふたりはガンディア王国に仕えているわけではない。よって、正規軍として行動するのは難しいということなのだ。故にふたりは傭兵部隊に配属され、結果として傭兵部隊の指揮権を握った《蒼き風》団長シグルド＝フォリアアの支配下に入ったのだ。

そのことに関して、セツナは特に不満を抱くこともなかった。そういうものか、と想っただけである。レオンガンドの頼みに応じて参戦したものの、だからといって、特別待遇を期待したわけではない。最初からすべてが都合よく進むわけもない。

（傭兵……傭兵か）

響きとしては、悪くない。その実態はよくわからないものの、無名の傭兵が大活躍するのも、いいかもしれない。もつとも、それにはまず、活躍するだけの実力を身に付けなければならぬのだが。

セツナは、ふと、右隣に立つファリアを一瞥した。彼女は、女性

用に作られた軽装の鎧を身に付けており、スタイルの良さがまったく損なわれていないことには驚くしかないだろう。

ファリアは、瞑目し、なにかをぼそぼそつぶやいているようだった。

セツナは、彼女がなにをしているのかはわからなかったが、そつとしておくことにした。声をかけたかったが、邪魔をするのはよくない。

「セツナはちゃんと覚えてるかい？」

「え？」

いきなりセツナに声をかけてきたのは、ルクスⅡヴェインである。突然の呼びかけに、セツナは目を丸くしてしまった。

「戦術について、さ」

ルクスは、この軍勢の中でただひとり、私服そのままといっても差し支えない出で立ちだった。胸当てひとつ身に付けていないのだ。簡素な衣服に革のジャケットを羽織り、とてつもなく長い剣を背負っている。

「いや、まあ、それなりに……」

セツナは、返答に窮して、しどろもどろになった。行軍中、ジンⅡクレールから聞かされてはいた。バルサー要塞周辺の地形を始め、ガンディア軍の編成及び各軍の陣形、その進攻経路など、この戦いに関する必要最低限の情報をある程度噛み砕いて教えてもらったのだが、やはり、セツナの頭には入りきらなかった。

地形を頭の中に思い浮かべることが不可能だった。編成を脳裏に描くなどもつてのほかであり、陣形についてはもはや言うべき言葉すら見当たらない。おぼろげな輪郭のみが、セツナの脳裏に浮遊しているといった有様だった。

（我ながら頭が悪すぎる……）

失意の底に落ちかけたセツナを救ったのは、ルクスの明るい言葉だった。

「それなり、か。それでいいと想うよ。目の前の敵を蹴散らすのが、

俺や君の役目だろう？ 頭を使うのは副長に任せとけばいいよ」

それを当然のことのように告げてきたルクスに対し、セツナは、ただひたすらに感謝しなくなった。彼の一言で、心が救われてしまったのだ。難しいことを考えなくていいということほど、セツナにとってありがたいことはなかった。

と。

「武装召喚」

涼風のような声とともに、眩い光がセツナの視界に差し込んだ。ファリアが、みずからの武器を召喚したのだろう。ということは、さきほど口にしていたのはなにかしらの呪文だったのかもしれない。セツナは、ファリアのほうに目を向けた。

召喚を終えた彼女は、どこか、恍惚としたような表情を浮かべていた。そのとろんとした瞳には、ぞくつとするほどの色気があった。

「オーロラストーム わたしの召喚武装よ」

ファリアの左手に握られたそれはまるで、大空を羽ばたく怪鳥のような異形の弓だった。

第二十四話 一線飛躍

バルサー平原の南方に展開したガンディア軍五千に対して、バルサー要塞を後方に布陣したログナー軍の総数は、報告によれば六千から七千といったところであった。

ログナー軍は鳥が翼を広げたかのような陣形を取っており、数で劣るガンディア軍を包囲殲滅するつもりらしい。

対するガンディア軍は、部隊を大きく四つに分けて布陣していた。レオンガンドが直接指揮を取るのには、近衛兵を筆頭とする精鋭部隊であり、これが先頭集団であった。続いて、ルシオンの第一王子ハルベルク・レウスルシオンを指揮官にした部隊は、精鋭部隊の右後方に位置している。ミオンの突撃將軍ギルバート「ハーディ」指揮下の部隊は、先頭集団のすぐ後方につけている。最後に、セツナとフアリアを含めた二百名あまりの傭兵集団が、レオンガンドの左後方にあつた。

「敵軍は数で我が方を圧倒しておりますなあ。どうなされるおつもりですか？」

アルガザード「バルガザールのどこか飄々とした声が、レオンガンドの耳朵には心地良く響いた。

アルガザードは、ガンディアを代表する将のひとりであり、守戦においては右に出るものがないと言われる名将である。その好々爺然とした風貌は、レオンガンドが幼少の頃からまったく変わっておらず、レオンガンドでさえも驚嘆を覚えるほどだった。見事なまでの白髪と、常に微笑を湛えた顔に刻まれたいくつもの皺、長く蓄えられた顎髭も真っ白であり、彼が《白翁》と呼ばれるのもうなずけるだろう。

レオンガンドは、戦場においても常と変わらぬ笑みを浮かべる老将に心強さを感じながら、視線を前方に戻した。かく言うレオンガンドの表情とて、平常と変わらないものに違いない。その事実を自

覚して、彼は胸中で苦笑した。

(浮ついてるんだけどね)

それもそのはずである。

此度の戦が、レオンガンドの初陣だった。ガンディア王家を継ぐものとして生れ落ちて二十六年余り、彼は、戦場に立つ機会を奪われ続けてきた。いや、禁じられたといったほうが正しいだろう。

それは、彼の父にして偉大なる先王シウスクラウドの厳命であった。

『王位を継ぐまで戦ってはならない』

今になっても理解のしがたい教えではあったが、レオンガンドは、英傑には英傑の考えがあるのだろうと結論付け、深くは考えないようにしていた。いくら悩んでも、答えは出ないのだ。考える時間もつたいなかった。

ともかくも、戦いを禁じられた彼に代わって、妹であるリノンクレアが戦場に立つことになったのは、運命の皮肉なのかもしれない。十代半ばに初陣を終え、以来数え切れないほどの戦場を経験したリノンクレアは、ガンディアの戦姫として謳われ、一方で、戦場に立つことも許されなかったレオンガンドは、ガンディアのうつけと罵られた。

もつとも、レオンガンドは、ただの罵詈雑言如きで傷つくような繊細な精神構造をしていなかった。そもそも彼は、やるべきことをやっていただけなのだ。為すべき使命を果たすために、ガンディアを駆け回っていただけなのだ。

遊び呆けていると想われようと構いはしなかった。しかしながら、その結果として人心が離れ、即位とともに多くの国民が絶望してしまったという事実には、さすがの彼も閉口せざるを得なかったが。

「どうするもこうするも、予定通り行こうじゃないか」

レオンガンドは、軽く返答すると、宝剣グラスオリオンを頭上に掲げた。実戦では使い物にはならないくらいに装飾された長剣の刀

身が、陽光を反射して眩い輝きを発する。

馬上で掲げられた彼の剣の輝きは、ガンディア軍先頭集団のどれもが目にするのができただろう。

「進め！」

レオンガンドは、号令とともに、剣の切っ先を敵軍に突きつけるかのように振り下ろした。

「行くぜ、てめえら！」

シグルドの咆哮が傭兵集団の中に轟いたのは、レオンガンド率いる先頭集団が、敵陣目掛けて進軍を開始した直後だった。傭兵たちの間に走ったのは、どよめきなどではない。戦功を上げ、少しでも褒賞金を頂こうとする猛者たちの、本能的な雄叫びであった。

(す、凄い……！)

セツナは、地を揺るがすかのような雄叫びに包まれて、驚きと感動を覚えていた。魂が震えるとは、このことかもしれない。生まれも育ちも違うはずのものたちが、たったいま、ひとつの目標に向かってひとつになっただけだ。

「セツナ、気を抜かないようにね」

ファリアの言葉に、セツナは、はっと我に返った。感動している場合ではなかった。傭兵部隊は、既に動き出している。なぜか部隊の先頭に紛れ込んでいたセツナも、前進しなければならぬ。もっとも、体はとつくに反応して、無意識のうちに動き出してはいた。しかし、意識をしなければ、傭兵たちの進軍速度についていけず、取り残されてしまいかねなかった。

先頭の男が、全速力ではないにしても、物凄い速度を出していたのだ。全軍、それに引っ張られるしかない。陣形を崩すわけには行

かないし、戦功を独り占めにされるわけにもいかない。もちろん、先頭を走るのものが、褒章に目が眩んだただの愚か者ならば、それに追従する必要はなかったのだろう。

しかし、傭兵部隊の先陣を駆けるのは、《蒼き風》の突撃隊長ルクスⅡヴェインそのひとであり、彼のいくつかの逸話を聞かされたセツナは、傭兵たちがルクスに追いつこうとするのもわからなくなかった。

（けど、俺は……）

焦る必要はない。初めての实战であり、強烈な緊張と鮮烈な昂揚が渦巻く中では、焦るなどもつてのほかに違いない。冷静に、周りの空気に吞まれて我を見失ってはいけない。

戦果は、期待されているのだろう。そのために、王直々にスカウトされたのだ。戦果を上げるために。召喚武装を振るい、敵を打ち倒して。

セツナは、もはや遙か前方のルクスのことを目で追うのは諦めて、周囲を見回した。右後方にはファリアの姿がある。異形の弓を携えたまま走っているにも拘らず、息ひとつ切らさない。セツナなんて集団の速度についていくのがやっとだというのに。

左前方に、シグルドⅡフォリアーとジンⅡクレールの姿があり、彼らの部下である《蒼き風》の面々が続く。《蒼き風》以外の傭兵たちも、彼らに負けじと走っていた。

前方に視線を戻すと、長大な壁のように並び立つ重装歩兵の群れの中に、ルクスⅡヴェインが飛び込んだところだった。長剣が閃き、血煙があがるのが見えた。悲鳴が聞こえた。怒声がそれを掻き消した。敵兵がルクスに殺到した。いくつもの剣閃が、ログナーの重装歩兵をその厚い鎧ごと両断した。鮮血が大量に噴き出し、戦場に紅い花を狂い咲かせた。

数多の命が、瞬間に散ったのを認めて、セツナは、驚きを禁じえなかった。

（あれが剣鬼ルクスⅡヴェイン……！！）

驚嘆とともに、セツナは、右手を前方に突き出した。叫ぶ。

「武装召喚！」

セツナの肉体の表面に、複雑で幾何学的な光の紋様が浮かび上がった。その紋様の中から光の奔流が、爆発的な勢いで溢れ出す。圧倒的な開放感の中で、セツナは、体の紋様が発散した光が、右の掌の中に収斂していく様を見ていた。棒状に収束していく光は、やがて、その歪で禍々しい正体を明らかにしていく。

光が消え失せ、セツナの視界に出現したのは、化け物染みた漆黒の矛であった。かつて、あの森で皇魔を撃退した武器であり、ランカインを打ちのめした矛であり、セツナだけの召喚武装であった。

（行くぜ……俺の矛！）

その柄を握り締めた瞬間、セツナは、電流でも浴びたかのような衝撃を受けた。衝撃は、一瞬にしてセツナの意識に到達し、彼のすべてをあざやかに染め上げた。視野が広がり、感覚が冴え渡る。力が湧き、肉体は躍動した。

「！？」

背後から、誰かの悲鳴ともなんとも言いようのない声が聞こえた気がする。しかし、セツナは、もはやそんなことを気に留めている場合ではないと理解していた。

前方ではルクスの独り舞台が続いており、敵陣中央では、レオンガンド率いる精鋭部隊とログナー軍の戦闘が始まっていた。その後方から、ミオンの部隊が続こうとしているのが見え、ルシオンの白聖騎士隊が、大きく迂回するのがわかった。敵陣の左翼が突出しているところから見るに、その横腹を突くのかもしれない。

セツナは、目まぐるしく動き出した戦場を把握している自分の頭に驚きつつも、それも当然だと冷静に判断していた。矛を手にしたのだ。そうなるのは当たり前といえる。

そして、セツナは、速度を上げた。先頭のシグルドを追い抜くと、それだけで敵陣は眼前に迫った。矛を召喚する頃には、既にかなり距離を詰めていたのだろう。

十数の兵士の亡骸に囲まれたルクスが、なにやら攻めあぐねているのが見えた。敵兵が、ルクスを危険とみなしたのか、距離を置いて包囲陣を形成したのだらう。重装備に身を固めた上に、大盾を構えた兵士たちに攻めかかるには、どうやらルクスといえど一筋縄ではいかないらしい。

最初のあれは強襲だったから成功したのだらう。危険性を認知された以上、うかつには動けないのかもしれない。

もっとも、いまのセツナには、関係のないことだった。矛が、暴れたがっていた。ならば、その力を振るわなければならぬだらう。逡巡はなかった。大地を蹴って、前方の敵陣へと飛躍する。

無数の敵兵とルクスの視線が、一斉にセツナに注がれた。一種の快感が、セツナの意識を突き抜けた。

「セツナか!？」

着地と同時に聞こえたルクスの声は、驚愕に上擦っていた。しかしセツナは、振り返ることもしなかった。

そう、セツナは、ルクスの前方に着地したのだ。眼前には、無数の敵兵。甲冑の奥の無数の目が、愕然としているのがなんとなくわかった。それはそうだらう。敵陣に単身飛び込んでくる馬鹿が、ふたりもいたのだから。

セツナは、口の端に笑みを浮かべた。それがどれほど凶悪なものなのかは、自分ではわからない。そして、本能の命ずるままに、矛を振るう。不意に。

『ひとを殺したことは?』

セツナの脳裏に閃いたのは、ファリアの質問だった。なぜ、このときになってそんな質問を思い出してしまったのだらう。

(どうして?)

その意味を理解したのは、直後だった。

突如、矛の切っ先から、紅蓮の猛火が噴き出したのだ。

第二十五話 焼殺する漆黒の魔矛

「なんだ……あれは!？」

ジオ「ギルバー」スは、右翼に展開した軍勢が、突如として紅蓮の猛火に飲み込まれるのを目撃して、意識が吹き飛ぶほどの衝撃を受けていた。地獄の業火の如き真紅の奔流は、まるで大蛇のようになりながら無数の兵士たちを喰らっていく。兵士たちは、悲鳴を上げる暇さえも与えられず、爆炎に飲み込まれてしまった。

あつという間であった。

大きく翼を広げた鳥のような陣形を展開したログナー軍の最右翼が、一瞬にして崩壊してしまったのだ。前線がガンディア軍との戦闘に入って、ほんのわずかしが時間がたっていないのにもかかわらず、である。

考えられない事態だった。

圧倒的な数の有利は瞬く間に水泡に帰し、ガンディア軍を包囲して押し潰すという当初の目論見は呆気なく潰え去った。

「あれはいつたいなんなのだ!？」

ジオの叫びは、どこからともなく上がった兵士たちの悲鳴によって掻き消された。想像を絶する事態だった。だれもが、悪夢のような現実を目の当たりにして、恐怖に飲み込まれていった。恐怖は連鎖し、やがて嵐の如き恐慌となつて戦線を崩し始める。

「くっ……!」

ジオは、齒噛みして内心の恐怖を押さえ込むと、動揺する周囲の兵士たちを叱咤した。

「なにをしている! 前線を立て直せ!」

だが、戦陣の崩壊は止まらない。

「あれは……セツナか！」

レオンガンド・レイ＝ガンディアは、敵陣の右翼を襲った紅蓮の猛火の物凄まじい勢いに、ただ驚くばかりだった。燃え滾る分厚い炎の帯が、ログナーの兵士たちを薙ぎ払ったのだ。その炎がもたらしたログナー側への衝撃たるや、想像を超えるものがあるだろう。

それは、ガンディア側とて同じかもしれない。

レオンガンド自身、手にした長槍を危うく落としてしまうところだったのだ。それほどの驚きが、電流のようにレオンガンドの全身を揺さぶっていた。

(予想以上なんてものじゃない……!)

レオンガンド率いるガンディア軍精鋭部隊と、ログナー軍の正面衝突によって生じた戦闘は、小競り合いといっても過言ではなかった。重装備に身を固めた歩兵たちが一進一退の攻防を繰り返す傍らで、レオンガンドは白馬を駆っては敵陣への突入と離脱を繰り返すことで戦線の崩壊を目論んだものの、そう容易く崩せるようなものでもなかった。

そここうするうちに左翼の敵軍が動き出し、右翼の軍勢もそれに呼応するようにして、こちらを包囲殲滅するための布陣を取ろうとした。左翼の突出には、ルシオンの白聖騎士隊が当たってくれらるう。

右翼には、傭兵たちがいる　そんなときだったのだ。

真紅の業火が右翼の一軍を薙ぎ払い、ログナーの優勢に傾きかけた戦場に狂乱の嵐を巻き起こしたのは。

(ベル！　君のおかげだ！)

レオンガンドは、感極まって叫びだしたい衝動を辛くも抑えると、動きの鈍くなった敵兵の喉下に手にした長槍の切っ先を突き入れた。

「あれはなんだと思う？」

ハルベルク・レウス＝ルシオンに問いかけられながらも、リノンクレア・レーヴェ＝ルシオンは、真紅の猛火が敵陣の右翼を焼き払う光景から目を逸らすこともできなかった。

それは、リノンクレアの愛馬エバーホワイトの駿足が、彼女をログナー軍の左翼へと連れて行く最中の出来事だった。戦線が動き出したのを確認した彼女は、予定通り、白聖騎士隊を率いてログナー軍の陣形の横腹を突くつもりであった。その突撃軍にハルベルクが参加することになるのは想定外ではあったものの、彼の愛馬ムーンドレッドもまた、エバーホワイトに比肩する駿馬である。問題はなかった。

白銀の甲冑に身を包んだ女性騎士の集団に、王子とはいえ、ひとりだけ男が混じっているのは違和感を禁じえなかったが。

なにせよ、リノンクレアたちルシオン白聖騎士団は、予定通りの進路を辿り、敵陣への突撃を試みようとしていた。レオンガンド率いるガンディアの主力部隊を包囲しようとしたがために、ログナーの左翼の戦線が伸びきっていたのだ。

ただ、突撃あるのみだった。

そんなときである。

遙か前方、敵陣の右翼が、突如として爆炎とでも言うべき業火に飲み込まれたのだ。圧倒的な光景だった。一瞬にして、ログナー軍が形成した陣形が崩壊したのだ。

そう、それは間違いなく崩壊である。

陣形の一翼が消滅したのだから。

「武装召喚師に違いありません」

リノンクレアは、やっとのことでそれだけを口にした。敵陣はもはや眼前にまで迫ってきているのだが、意識は、炎のほうへ向かっ

てしまう。

「それ以外には考えられないな。だが、あれほどの力を持った武装召喚師が、ガンディアにいたか？」

ハルベルクを一瞥すると、いつもは穏やかな彼の表情が、いつになく引き締まっているように見えた。ハルベルクは、決して優男ではないし、むしろワイルドといったほうが近いのだが。なにしろいつもにこにここと笑みを絶やさない男なのだ。故に、時折見せる冷やかな表情が、リノンクレアの情動を刺激するのだ。

とはいえ、ここは戦場。みずからの感情に流されるわけにもいかず、リノンクレアは、視線を前方に戻した。夫に言葉を返す。

「いえ……」

ガンディア王国に仕える武装召喚師の能力など、高が知れているのだ。未来の暗い弱小国家に仕官しようとするものが実力者であるほうがおかしい。実力があるのなら、もっと将来有望な国へ赴くべきだし、リノンクレアが当事者でもそうするだろう。

ガンディアの武装召喚師よりも遙かに強力な武装の使い手であるフアリア＝ベルフアリアは、此度の戦に参加しているとはいえ、国王の支配下にあるわけではない。彼女は大陸召喚師協会に仕える身であり、そもそもその素性を知れば、どうあがいても支配できないことも理解できるといふものだ。

そんなフアリアの召喚武装^{オーロラストーム}とて、あれほどの被害をもたらすとはとても考えられない。戦争向きの武装ではない、というのは彼女の弁である。実際その通りなのだろうが。

だとすれば、考えられるのは。

「セツナ＝カミヤカ！」

リノンクレアのつぶやきは、エバーホワイトの跳躍によって風に乘った。

「ひ、引くな！ 陣形を立て直せっ！」

それは、だれの怒号だったのだろうか。いや、むしろ悲鳴だったのかもしれない。絶叫だったのかもしれない。そしてそれは、断末魔に等しい。

セツナは、眼前に広がる地獄のような光景に愕然としながらも、頭の中に入り込んでくる数多の情報を冷静に分析し、把握していた。死屍累々という言葉ほど相応しいものはなかった。何百という焼死体が、鎧に抱かれたまま、大地に横たわっていた。燃え盛る紅蓮の猛火に吞まれ、為す術もなく焼き尽くされた兵士たちの亡骸である。

武器による攻撃を寄せ付けないだけの重装備など、すべてを焼き尽くすべく荒れ狂った業火の前では、まったくもって意味を成さなかった。

ログナーの兵士たちは、逃げることも、立ち向かうことも許されなかった。

すべてが、あっという間に燃え尽きた。

「まったく、やってらんねー」

本心からやる気のない声音は、背後のルクスⅡヴェインからだった。確かに、彼としてはやってられないだろう。一振りの剣で以てやっとの思いで十数人を斬り倒した彼にとって、一瞬にしてその数十倍の戦果を上げられれば、やる気が激減しても仕方がない。

だが、それはセツナとて似たようなものだった。

予期せぬ事態だった。

望外の結果だった。

そもそも、黒き矛にこんな力が秘められていると、だれが思うものか。

(いや……)

セツナは、頭を振ると、もはや炎の出なくなった黒き矛を見つめ

た。禍々しくも美しい漆黒の矛は、セツナの手によく馴染んでいた。手に触れるだけで意識は研ぎ澄まされ、感覚が冴え渡るのだ。まるで、矛がセツナ自身に力を与えているようだった。

（これは……違う）

セツナは、漠然とした確信とともに、矛の石突に埋め込まれた宝玉に目を向けた。かつてカランの大火のすべてを取り込んだ宝玉は、いつかのように透明な輝きを湛えていた。

第二十六話 矢のように

「なにをしている！ まだだ！ まだなにも終わっちゃいない！」
ログナーの部隊長らしき男の怒号は、恐慌状態に陥っていた兵士たちの理性をいくらかは取り戻すことに成功したようだった。しかし、崩壊した戦線を立て直すまでには至らない。当然だろう。

セツナの矛が噴き出した業火は、ログナー軍の右翼に布陣した多くの兵士の命を焼き払ったのだ。炎に飲まれ命を落とした兵士の数はおよそ五百人以上だというのが、ルクスの目算だったが、炎の威力は、死者の数以上の打撃をログナー軍に与えていた。

数百名に及ぶ仲間が、一瞬にして灰燼と帰したのだ。抗うことも逃れることもできずに、炎と消えたのだ。炎が届かないぎりぎりの距離にいたものたちとて、安堵に胸を撫で下ろすことはできなかっただろう。左翼に展開中の兵士たちも同様の思いを抱いたに違いない。

再び、炎が荒れ狂えば、つぎは自分が死ぬかもしれない。

「いや、終わったんだなーこれが」

ルクスⅡヴェインは、自慢の銀髪をかき上げると、長剣を軽く構えなおした。全長一七〇センチを越えるほどに長い剣は、普通に考えれば片手で扱うことなどできるはずがないだろう。その上、ルクスは見た目には中肉中背なのだ。特別膂力があるようには見えないし、実際、ない。が、青みを帯びた刀身が、澄んだ湖面のように美しいその長剣は、彼にとつては右腕そのものようだった。重みはなく、無意識のままに無限の軌跡を虚空に描く。

前方は、死屍累々といった有様である。むせ返るような熱気とともに、肉の焦げ付いた臭いが立ち上ってきていた。

その向こう側で、態勢を立て直そうともがいている者たちの姿があった。ログナーの歩兵たちである。全身を覆う分厚い甲冑は、武器による攻撃などものもしないのだろう。しかし、それは並大抵

の武器の話だ。

鉄の鎧など、一定のランク以上の召喚武装の前では、紙くずも同然である。

「奴だ！ あの黒き矛を手にした奴を狙え！」

部隊長の怒声にも似た叫びは、遠く離れたルクスの耳にも突き刺さるほどには強く、しかし、崩れ行く戦陣を立て直させるほどの影響力はなかった。もっとも、その馬上の男にとっては、戦線を持ち直すつもりもなかったのだらう。自身も弓を構えた騎兵の周囲で、彼の配下の兵士たちが整然と弓を並べ、矢を番えようとするのが見えた。

狙うは、セツナただひとり。

「セツナ君は大事な大事な客人なのだよ」

ルクスは、告げるのと同時に地面を蹴りつけた。前方へ飛ぶ。まったく動く気配のないセツナの横を擦り抜けて、さらに加速する。敵兵までの距離は、およそ百メートルといったところか。剣を手にしたルクスならば、その程度の距離を埋めるのものの数秒もいらなかった。

それでも、矢を放つためにかかる時間のほうが、わずかに短い。

（だが、行く！）

ルクスは、全身全霊を込めて、敵兵の死体の山を踏み越えた。脳裏に、閃光が走る。

「セツナは初めての实战だそうだ」

「へえ、それはまた厄介な」

「厄介言うな」

「だって、厄介そのものじゃないっすか。どこの馬の骨とも知れない上に実戦経験がないなんて」

「どこの馬の骨とも知れないのは、わたしたちも同じですよ。ルクス」

「そりゃあ否定はしませんかね」

『一つことで、ひとつ頼むわ』

『はあ。厄介ごとはいつだって俺なんだよなあ……』

『そう言いながらも、団長の頼みごとは引き受けずにはいられないルクス君なのでした』

『副長』

果たして、ルクスは、セツナの面倒を見なければならなくなった。渋々ではあったが、引き受けた以上は全力でやるのが彼の流儀である。故に常にセツナの同行に気を配ってはいたのだ。

もつとも、セツナには、心配せずともおつかないお姉さんがついているのだし、戦況や彼の召喚武装次第では、構う必要もないかもしれないなかった。

が、やはりそれはかなり甘い考えであり、幼稚な願望そのものだったことを、ルクスは苦笑とともに思い知っていた。セツナは、多大な戦果を上げながらもその事実には強い衝撃を受けたのか、放心したかのようなだった。矢を避けることは愚か、その場から動くことすらもできそうになかった。

状況は、最悪といってもいいかもしれない。

護衛対象（というのはいすぎだが）は我を忘れており、敵はその護衛対象だけに狙いを定めている。唯一、敵に対抗できるのはルクスのみであるものの、敵への距離が遠すぎた。

セツナの後方からは、シグルドを筆頭とする傭兵の軍勢が接近してきているのだが、彼らがセツナを身を挺してまで庇う道理はなかった。それ以前に間に合わない。

「放てえっ！」

敵兵の号令がルクスの意識を刺激したのは、彼が弓兵に到達するまでもう一息というところだった。つぎの跳躍で届くくらいの距離だった。飛べば、長剣の一閃で撫で斬りに斬り殺せたはずだった。それは過信などではない。ルクスと長剣ならば、それが可能であった。

しかし、それもはや幻想になった。

十数の矢が、一斉に放たれた。

「っ！」

大気を切り裂いて飛翔するいくつもの矢は、一瞬にしてルクスの脇を通過した。視覚で捕捉できるものでもない。そもそも、剣によつて拡張された感覚で捉えることができたところで、それだけではなんの意味もないのだ。

矢は、セツナに殺到したのだろうか、ルクスにはそれを確認する暇はなかった。悔しさを噛み殺し、最後の跳躍によって騎兵と弓兵の部隊の下に辿り着く。

「遅い到着だなあ！」

馬上の男が、勝利を確信した言葉を吐いてきたが、ルクスは、なにひとつ感情を揺さぶられるようなことはなかった。周囲の弓兵が恐怖に引き攣つたような声を上げたのも、どうでもよかった。ただあるのは、己への怒りだけだった。武装召喚師の護衛ひとつ満足に果たせない、無能な己への絶望的な怒り。

ルクスは、剣を振るおうとした。瞬間、

「ドーレス隊長!？」

弓兵のひとりが、慌てふためいたように馬上の兵士を振り仰いだ。騎兵は、なにやら自らの采配にでも酔っているのか、鷹揚にそちらに顔を向けた。兜のバイザーから覗く目が、きらきらと輝いていた。「なんだ?」

「目標に向かった矢が、すべて撃ち落されました!」

「!」

兵士の報告には、ルクスさえも驚いていた。もちろん、馬上の隊長もまた、驚愕に体を震わせる。

「な、馬鹿な!? ありえん! そんなことがあつてたま」

「あゝ、そういえばそうだよ。あのひとがいるんだつた」

ルクスは、その場で飛び上がるのと同時にドーレス隊長とやらを重厚な甲冑もろとも切り捨てると、着地の瞬間に眼前にいた弓兵を

透かさず袈裟懸けに斬り倒した。絶命である。悲鳴を上げさせることもなかった。もつとも、次の瞬間、背に乗せている男が斬られたことを把握した馬が、甲高い悲鳴を上げていたが。

「なんだよ、馬鹿馬鹿しい。最初から俺らが余計な気を回す必要なんてなかったってことじゃん」

隊長の亡骸を乗せたまま駆け出した馬を見送りながら、ルクスは長剣を軽く振った。刀身に付着した血液が、焼け焦げた地面に飛び散る。焼死体がないところを見ると、この辺りには兵士がいなかったらしい。

「ぐ……。この怒りはどこへ向ければいいのだ……？」

ルクスは、その怒りは己の失態から来たものであることなどすっかりと忘れて、苦虫を噛み潰したような表情になっていた。周囲の弓兵は、いつの間にか消えていた。彼らの理性を辛くも繋ぎとめていた隊長が、目の前で斬り殺されたのだ。逃げ出したくなるのも無理はないだろう。

とはいえ、兵士ならば、眼前の敵に矢を射掛けるか、近接戦闘を仕掛けるべきだとは想うのだが。

「ま、どうでもいいさ」

ルクスは、そのときになってようやく後方を振り返った。焼き殺された兵士の亡骸の山の向こう側に、無傷のセツナと、それを取り囲む傭兵達の姿があった。そのさらに後方には、翼を広げた怪鳥とでも言うべき異形の弓を構えたままのフェアリア、ベルフェアリアの姿があった。

彼女の弓から放たれた矢が、敵兵の十数の矢をすべて射落としたのだ。

「オーロラストーム……か」

それが彼女の召喚武装であり、その力はガンディアの先王も一目置くほどだったというのだが。

「それなら、おまえも負けないさ」

ルクスは、長剣を目の前に掲げると、慈しむようにその美しい刀

身を見つめた。澄み切った湖面を想起させる青の刀身は、いまや《蒼き風》の象徴として語られることも多くなっていた。それはもちろん、ルクスが活躍するからであり、その活躍は偏に、この碧い長剣のおかげであった。

「そうだろうか？ グレイブストーン」

第二十七話 卑怯者と呼ばれて

(俺は……)

セツナは、眼前に広がる地獄の如き光景を見据えたまま、矛の柄を握る手に力を込めるだけだった。矛が噴き出した炎に吞まれ、焼き殺された数百人に及ぶ敵兵の亡骸が、大地を埋め尽くしていた。為す術もなく焼き尽くされたものたちは、無念と想う暇もなかったのかもしれない。重厚な鎧さえも半ば融解させるほどの炎に包まれたのだ。痛みは、あつたのだろうか？

(殺した)

セツナは、いまさらのように恐怖に慄いていた。そう、いまさらだ。なにもかもいまさらなのだ。セツナはみずからの意志で武器を手に取り、戦場に臨んだのだ。なにを言っても、無様な言い訳にしかない。

しかし、そういった冷やややかな理性とは裏腹に、セツナの感情は、己の取った行動が生んだ結果に衝撃を覚えざるを得ないのだ。手が震える。その手の震えはやがて全身を揺らし、心へと至る。

(人を殺したんだ！)

それも、数え切れないくらいの人間を、一瞬にして焼き払ったのだ。いとも容易く、思いがけなくらいにあっさりと。逡巡する暇もなければ、殺すという意志さえなかった。気がついたときには、目の前の無数の敵兵が、無残な亡骸に変わり果てていたのだ。

あまりにも恐ろしい力だった。
想像すらできない結果だった。

冷静でいられたのは、それがあまりにも常軌を逸した事態だったからに他ならない。

一線を越えたのだ。

武装召喚師とはいえ、まだしもただの少年であったころには、もはや戻りようがなかった。この手は、見えない血によって赤黒く染

まっってしまった。無数の命を理不尽なまでの暴力で破壊してしまっただ。

セツナは、齒噛みした。心の奥底から湧き上がる数多の感情の奔流が、セツナ自身を責め、苛むのだ。生まれてこの方、散々言い聞かされてきた他人の命を奪ってはならないという道德観が、鋭い刃となつて襲い掛かつてくるのだ。

黒き矛を握つていても、その激情の嵐を収めることはできなかつた。むしろ、矛を認識すればするほど、感情は昂ぶり、セツナを責め立てた。

「セツナ！」

危機感に満ちたファリアの叫び声は、遙か後方からだった。

「！」

セツナは、いつの間にか俯けていた顔を上げた。はっとする。地獄のような戦場の片隅を映し出す視界を、切り裂くように飛来するいくつもの物体が、その尖端に込められた強烈な殺意をセツナに叩きつけようとしていた。しかしもはや到達する直前、避けることなどできるはずもなかった。

（死ぬ！？）

セツナは、胸中で悲鳴を上げた。眼前に迫る十五本の矢は、矛の力を以てしても防ぎようがなかった。といて、絶望することもできなかつた。すべては一瞬の出来事であり、それはさながら、セツナが矛を振るい、数多の兵士を死に至らしめたときのようなものであつたのかもしれない。

しかし、敵兵の放つた無数の矢は、セツナの眼前で、突如として撃ち落された。すべての矢が、ほぼ同時に、である。なにが起きたのかなど、セツナにわかるはずもなかつたし、そもそも、セツナが自分の無事を理解したのは大きな手で背中を叩かれてからだつた。矢が撃ち落されたという事実は、認識の外であつた。

「無事か？ セツナよお」

シグルド「フォリアーの大声は、セツナの耳には痛いくらいだつ

だが、その痛みは我を忘れかけたセツナにとっては救いに近い響きを持っていた。

「え、あ、ああ……なんとか」

セツナは、鎧が覆っているはずの背中に激痛が走ったことに驚きながら背後を振り返った。軽い鎧だ。装甲が薄いのはわかりきっていたが、手で叩かれただけでこれほどの痛みを感じるものなのだろうか。視界を覆うほどの巨躯は、シグルドのものであるう。その巨体が生み出す力は相当なものに違いないが。

「どうやら、大丈夫そうですね。安心しましたよ」

シグルドの隣に立つジン・クレールの微笑に、セツナは、やっと安堵というものを覚えたのだった。そして、自分が助かったという事実を思い知る。眼前にまで迫っていた矢は、どうなったのだろうか。無数の矢は、間違いなくセツナに到達する軌道を辿っており、避けようともしない標的に当たらないはずはないのだが。

セツナは、怪訝な表情で矢の飛んできた方向に目を向けたが、どうなったのかなど、まるでわからなかった。兵士の死体の向こうにルクス・ヴェインの姿があり、さらにその向こう側は主戦場であった。

恐慌状態に陥ったらしいログナーの軍勢と、ガンディア軍の主力が衝突していた。王の姿は見えないが、どこかにいるはずだ。

レオンガンドにも、セツナの矛の炎は見えたのだろうか。

「しかし、すげえな、おまえの武器」

シグルドが黒き矛をまじまじと眺める様子に照れ臭さを感じてしまふのは、セツナ自身が、矛に対して多少なりとも愛着を感じ始めている証拠なのかもしれない。セツナが黒き矛を召喚したのは今回で三回目であり、まだまだわからないところも多い。それでも、セツナがここにいるのは、矛のおかげに違いなく、感謝こそすれ忌避する理由もなかった。

「先の一撃は、右翼に展開していた部隊に壊滅的な打撃を与えただけでは留まりません。あの力に対する動揺が、ログナー全軍に広が

っています。動揺は士気の低下を招き、士気の低下は、戦意を奪い去ること确实ですね」

ジンの分析と明確な説明に、セツナは、素直に驚きを覚えていた。確かに、矛の力には凄まじいものがあつた。その事實は、だれもが認めるところだろう。数え切れなくらいの兵士が、一瞬にして殺し尽くされたのだ。

しかし、だからといって、それだけのことで戦局が大きく動くなどとは、セツナには到底信じられなかつた。それほどの働きをしたのだという実感がないのだ。ただ矛を召喚し、有り余る力を解放しただけに過ぎない。燃え盛るカランの街で吸い尽くした炎の力を、思うがままに解き放つただけなのだ。

戦局を変えようとしたわけではない。勝利を導こうとも想っていない。戦いの始まる直前、ルクスが言っていた通りにしようとしただけだ。目の前の敵を蹴散らそうとしただけなのだ。

その結果が、これである。

眼前 いや、周囲には無数の死体が転がっており、そのほとんどが、セツナの矛の炎に巻かれて絶命した兵士である。彼らは、突如として襲い掛かってきた紅蓮の猛火に為す術もなかつただろう。炎を放つた張本人の存在さえ認識できなかったのかもしれない。

セツナは、次第に落ち込んでいく己の不甲斐なさに、情けなくなっていた。といって、自分の心を叱咤しようにも、そんなことができる状態でもない。

「それでも兵力的に見れば向こうが上なんだが……もう立て直すことは不可能だな」

「あちらの指揮官はあの無能將軍ですから、なおさらです」

「まったくだ。王の運が良いのか、ログナーが馬鹿のか。ま、俺らとしちゃどつちでもいいことだけだよ。いや、運が良いことに越したことはないな」

「間違いなくログナー側の失策ですが、それを見逃さなかつたのは王であり、戦局を現在の状況へと導いた立役者は、セツナ君ですね」

不意に話を振られて、セツナは、ジンの知的な顔を仰いだ。彼はやはり微笑を浮かべていて、セツナは戸惑いを禁じえないのだ。それは、周囲からの無数の視線に対してもいえることだった。敵意や悪意のない、好奇に満ちた数多のまなざしは、セツナにはとてつもなくこそばゆい。

それらは、いつの間にか集まってきた傭兵たちのものだった。「俺が……立役者？」

セツナは、自問とともにその言葉を反芻した。実感はない。が、ジンがセツナを持ち上げるようなことを言っても思えない。そのまま受け取ってもいいのだろうか。

セツナが答えを求めるようにシングルにまなざしを向けると、彼は、獰猛な笑みを返してきた。

「ああ！ おまえが立役者だぜ。これを見りゃ、だれだって納得するだろ」

シングルが指し示したのは、平原に横たわる無数の焼死体であり、セツナは、それらに目を向けるたびに、少しずつではあるが

自分が彼らを殺したのだという実感を覚えるのだった。

「君が敵でなくて本当に良かった」

ジンがつぶやくようにいったその一言は、セツナに対する最大の賛辞なのかもしれない。

「その通りだ。さて、そろそろ俺たちも活躍しねえとな」

「最低でも金額分は働きましょうか」

「おう」

セツナの前に出たシングルが、傭兵一同を見回す。次の瞬間、間近にいたセツナの鼓膜が破れるのではないかというほどの大音声が、シングルDの喉から迸った。

「野郎ども！ セツナぐらい活躍すりゃあ、金も女も望みのままだ！」

「団長！ それはさすがに無茶だ！」

「あんたは俺らをなんだと思ってるんすか？」

「ルクス隊長でも無理っすよ！」

傭兵達の間から次々と発せられる笑い声に、シグルドが、怒鳴り声を被せた。

「はっ！ やってもねえ内にそんなこと言ってんじゃねえ！ やるんだよ！」

それもまた、セツナの聴覚を狂わせるほどの大声だったが。

シグルドは、セツナが文句を言おうとするより速く、まさに風のように敵陣に向かって走って行ってしまっていた。ジンや傭兵たちもそれに続いている。総勢二百名近くの傭兵たちが我先にと疾駆する様は、餓えた獣の群れのようにですらあった。

「……騒がしいひとたちね。でも、あれくらいじゃないと、戦場で生き抜くのは無理かもしれないわね」

ファリア「ベルファリアの声は、やはり涼風のようにだと想いながら、セツナは後方を振り返った。異形の弓を携えた彼女は、どこかいつもと違う感じがした。

「どう？ 人を殺した感想は」

セツナは、開口一番のファリアの問いかけに、どきりとした。そうだった。人を殺したのだ。立役者などといわれて浮かれている場合ではない。とはいえ、答えるべき言葉が見当たらないのも事実なのだ。

「……」

セツナは、矛を握る手を見下ろした。返り血ひとつ浴びていない。矛を振るい、その切っ先で敵の肉体を切り裂いたわけでもなく、頭蓋と貫き、脳漿を飛散させたわけでもない。炎を噴射しただけだ。そこに、セツナの意志は一切介在しておらず、だからこそ、実感が湧くはずもないのだ。もっとも、それを言い訳にってしまうほどセツナも愚かではなかった。

殺戮したという事実から、目を背けようとも想わなかった。

手が血に濡れなくとも、命を奪うことはできるのだ。

「君は、一線を越えたわ。常人と戦士の一線を、ね。いえ、飛躍し

たというべきかしら。あの一闪で数百人も命が失われたんだもの」
ファリアの冷やかな言葉のひとつひとつに、セツナは、改めて、自分のしたことを理解し、把握するのだった。

一線飛躍　それがすべてなのかもしれない。

「それとも、今からでも以前の自分に戻れると思ってる？　無理よ。君は数え切れないくらいの人間を殺したのよ。この戦いが終われば、ログナーの憎悪は君に集中するでしょうね。戦争とはいえ、同国人を大量に殺戮した人間を憎まないはずがないもの。もう、昨日には戻れないのよ」

「俺は別に！」

セツナは、我知らず大声を上げていた。急激な感情の昂ぶりを抑える手段など、端から持ち合わせていなかったのだ。

しかし、ファリアのまなざしに、セツナは、声を静めるしかなかった。レンズ越しに見た彼女の瞳には、セツナに対するなんの悪感情もなく、純粹にこちらを心配しているように感じられたからだ。

「昨日に戻りたいなんて言っていないだろ……」

「そうね。わたしの邪推ね。ごめんなさい」

ファリアの謝罪は心からのものであり、透かさず自分の非を認め、謝ってくる彼女に、セツナは、あざやかなまでの好意を抱くのだ。それは些細なことかもしれない。しかし、そういった対応の心地良さは、人間関係において重要なものに違いない。

「いや……俺こそごめん」

「ううん、いいのよ。セツナが無事なら、それでいいの。ただ……」
「ただ？」

反芻するように尋ねながら、セツナは、彼女の言葉に癒されている自分に気づいた。

（俺が無事ならそれでいい、か）

それはきつと、セツナの心情を労わる彼女の優しさであり、本心というわけではないのかもしれない。それでも、言葉だけでも、嬉しいことだった。セツナの頬がわずかでも緩んだのは、仕方のない

ことだったのかもしれない。

「術式も無しに召喚するなんて卑怯よ！ 卑怯者よ！」

ファリアのあまりの剣幕とその豹変振りに、セツナは、啞然とす
るしかなかった。

第二十八話 青と赤

終局が近い。

当初、ログナー側の優勢で始まったはずのこの戦いは、蓋を開ければ、ガンディア軍の優勢に終始していた。

ログナーとしては、開戦早々右翼を失ったのが大きな痛手となっていた。いや、それだけではない。その失い方が、尋常ではなかったのだ。

蒸発した、とでも言うべきかも知れない。

突如として噴き出した紅蓮の猛火が、右翼に展開中の軍勢を薙ぎ払ったのだ。

それは、一瞬の出来事だった。ガンディアに所属する武装召喚師の仕業には違いなかったが、だからなんだというのか。相手がなにものであるのかわかったところで、失われた兵力が戻るわけでも、広がってしまった動揺を抑えられるわけでもなかった。

動揺は、幾重もの波紋のように。

瞬く間にログナー全軍に浸透し、もとより高くはなかった士気をさらに低下させた。そして、それを抑えるべき存在であるはずのジオ・ギルバース將軍の愚かな振る舞いは、戦意の低下を助長するだけだった。

恐慌が起きてしまった。

「あーあ……もう駄目だこれ」

ウェイン・ベルセイイン・テウロスは、軽く嘆息を浮かべた。鍛えられた長身を群青の武具で包みこんだ、ログナーの騎士である。馬上、槍を手にした彼は、冷め切ったまなざしで混沌に飲まれていく戦場を眺めていた。

戦意を失った兵士たちをさらなる恐怖に陥れたのは、ガンディア軍本隊の正面からの突撃と、左翼からの強襲という波状攻撃であり、右翼を壊滅させた部隊の主戦場への乱入だった。

とりわけ、銀獅子の鎧に身を包み、前線を蹂躪するレオンガンド・レイ＝ガンディアの姿は、敵軍であるにも関わらず、惚れ惚れとしてしまうほどに勇ましいものであり、恐怖を煽るには十分過ぎた。「諦めるのか？」

と、すぐ隣から声を潜めて言ってきたのは、ウエインの同僚にして尊敬すべき大先輩であるグラード＝クライドだった。真紅の甲冑を纏う巨漢であり、彼の愛馬スカーレットもまた、炎のように真っ赤な甲冑を身に付けていた。グラードがログナーの《赤騎士》と呼ばれる所以であり、彼の性質そのものを表しているとも言えた。

そして、ウエインは、ログナーの《青騎士》と呼ばれており、それもまたグラードと同じく甲冑の色に由来するものだった。気に入っていないわけではない。ウエインは、むしろ好んで自称するほどだった。

「もう無理でしょ。見てくださいよ、あれ」

ウエインは、槍の穂先をレオンガンドの左後方に向けた。陽光を受けて輝く槍の指し示す先には、ガンディアの守護者と謳われて久しい名将アルガザード＝バルガザールの姿がある。既に老境に入っているはずの敵将は、周りの精兵よりも若々しく動き回っているように見えた。

「あれは……《白翁》か」

「あの爺さん、すんごく活き活きしてますよ？」

「だからどうした？」

熟練の戦士たるグラードのまなざしは、気の置けない仲であるはずのウエインですら時折恐ろしくなるほどに研ぎ澄まされるのだ。他意があるわけではない。どうやら若い頃からの癖らしく、そのせいで反感を買いことも多かったのだという。

「いや、だからね、将兵ひとりひとりの戦意が違つんですよ。今度はあつちを御覧なさい」

気を取り直すようにして、ウエインは、ゆっくりと槍を旋回させた。切っ先は、混乱の最中にありながらも逃げ出すことも許されず、

命の火花を散らす兵士たちの頭上を通り抜け、前線から見れば遙か後方に至る。

そこにはジオ・ギルバース將軍と、彼の手勢として配置された精兵が固まっていた。得物を振り翳し、怒声を張り上げているのが、遠目からでも滑稽だった。

グラードの嘆息が聞こえた。

「……ああ、無能將軍」

彼に対してその蔑称が用いられるようになったのは、いつからだったのだろう。二十代最後の年に一軍の將に抜擢された彼は、ログナーに再び隆盛をもたらす希望の象徴であった。多くのものが彼を誉めそやし、彼こそが、ログナーの未来を切り開くと信じて疑わなかった。

なぜかはわからない。

格段の功もなければ、取り立てて優秀な人材とも言えなかった。

そんな人物が、小国ではあるもののログナーという国の一軍を率いる将となってしまったのだ。

栄える可能性をログナーみずから握り潰してしまったというのは、言い過ぎだろうか。

ともかくにも、ジオ・ギルバースは失脚しなかったのが不思議なほどの失敗を積み重ね、遂には將士にも民草にも愛想を尽かされてしまったのだ。自業自得には違いないし、憐れみを覚える必要はない。が、この数年に渡る数多の失敗は、ログナーにとって大きな痛手であり、そのほとんどにジオ・ギルバースが関わっているという事実は、ウェインに常ならざる感情を抱かさせるのだ。

それは即ち、殺意という。

「ほらね」

今すぐにでも飛び出したいくなる衝動をなんとかして飲み下したウェインは、すぐさまグラードに目を向けた。炎の如き中年騎士の姿を視界に納めるだけで冷静さを取り戻すことができるというのは、なんともおかしい話ではあるのだが。

「おまえの言いたいことはよくわかるが……」

「將軍の言った通りでしょう？」

「……その通りだ。ジオ＝ギルバースでは、流れを変えることはできん」

グラードの苦々しい言葉は、この戦場にいるだれもが抱いている確信かもしれない。それは、ウェインも同じであり、もしかせずともガンディアの将兵も同様の感想を持ったに違いなかった。それほどまでにジオ＝ギルバースの采配は、悪いものだった。

最悪とまでは言わない。しかし、この最悪の戦況にあつて、將軍が己が身の安全のみに重点を置いて全軍を指揮するなど、以ての外ではないのだろうか。無論、將軍の命は重いものだ。その役目を考えれば、当然といえる。しかし、いま現在、全然で命を曝している兵士たちからすれば、どうだろうか？

將軍が保身に走つたとあれば、士気を上げようにも上がるはずがない。戦意は下がるのみであり、全力を出すこともままならないのではないのか。

これが、例えば飛翔將軍アスタル＝ラナデースならば、異なる結果になつていたに違いない。前線を飛び回る指揮官の姿に将士一同勇奮し、戦況は持ち直したのではないか。

とはいえ、それらはやはりただの妄想に過ぎないことをウェインは知っていたし、いまさらそんなありもしない空想に思いを馳せたところで現状が変わるはずがないことも理解していた。

「あゝあ。將軍に逢いたいなあ」

「この戦いが終われば、直に逢えるさ」

「生き残ることができたら、ですけど」

「こんなところで死ねはしまいか？」

「そりゃあね」

ウェインは、もはや崩壊してしまつた前線を見遣りながら、目を細めた。こんな馬鹿げた戦いで死ねないのは、自分たちだけではない。だれひとり、死にたくなどないのだ。それが国のため、仲間の

ため、家族のためならばまだしも、ジオ＝ギルバースなどという人間のためになど、真つ平御免だろう。

だからこそ、彼らは、急行せねばならない。これ以上、無駄に血を流させるわけにはいかない。これ以上、戦いを長引かせるわけにはいかない。

「では、行きますか」

「ああ」

グラードの心強い返事に、ウェインは、覚悟を決めたのだった。

「勝つたな」

ハルベルク・レウス＝ルシオンのつまらそうなつぶやきを、リノンクレア・レーヴェ＝ルシオンは、馬上にありながらも聞き逃しはしなかった。とって、別段気にすることもない。いつものことである。

ハルベルクは、圧倒的な勝ち戦というものを好まないのだ。むしろ、追い詰められているほうが好みに合うらしい。無論、将来国を率いる立場にあるものが好き嫌いで戦いを構築できるはずもなく、彼の戦は大体において圧倒的優勢のまま勝利を飾ることが多かった。その華々しい勝利を飾る彼の隣には、いつだってリノンクレアの姿があり、ハルベルクの思い描いた通りに戦うことは、彼女にとって最大の喜びでもあった。

リノンクレアを先頭とする白聖騎士隊の騎馬の群れは、ログナー軍の左翼を蹂躪している最中だった。セツナの大火によって生じた恐怖と混乱は、彼女らの突撃にとって大きな助けとなっていた。

横腹を突くまでもない。

崩れかけた戦陣は、もはや元に戻りようがなかったのだ。

騎兵の圧倒的な機動力によって戦陣を駆け抜けるだけで、数多の敵兵が薙ぎ倒されていった。残った兵もまた、遅れて左翼に辿り着いたルシオン本隊によってひとり残らず討ち果たされた。

これにより、ログナー軍の左翼は壊滅したといってもいいだろう。残るは本隊であり、ログナーの兵力のほとんどは、そこに集中していた。

リノンクレアたちは本隊に合流後、速やかに中央の主戦場へと突入するつもりだった。

「さて。義兄上あにじょうの傍で、義兄上の初勝利に酔いしれるとしようか」
リノンクレアは、ハルベルクの本心とも建前とも取れない言い様に、ただひとり笑いを噛み殺していた。要するに本音を言うのが恥ずかしいのだろう。

リノンクレアは、ハルベルクのそういうところも好きであった。

「どりゃああああ！」

シグルド・フォリアーの豪快な一撃は、彼の眼前にいた三人の敵兵を一度に吹き飛ばしていた。長大なウォー・ハンマーによる強烈な打撃の前では、頑丈な鎧も意味を為さない。

敵陣の右翼から中央へと至る進路、である。

レオンガンド率いるガンディア本隊は既に前線を突破し、中央において敵主力と交戦に入っていた。左翼では、ルシオンの騎兵が大活躍しているらしい。そして、右翼から進出したシグルドたち傭兵部隊は、いままさに主戦場へとなだれ込もうとしていた。

「なんといいですか、呆気ないですね」

「ま、そういうな。仕方ねえさ」

シグルドが、シン・クレールを振り返ると、彼のショート・ソー

ドが軽装歩兵の首を切り落としたところだった。返り血ひとつ浴びないのは、彼の巧みな剣技と身のこなしによるものだろう。

かくいうシグルドも返り血など浴びてはいないが、これはそもそも打撃武器を振り回しているからに他ならない。もちろん、ハンマーをぶつける部位によっては、血も浴びるのだろうが。

「セツナのおかげでずいぶんと楽をさせてもらってたぜ。ありがたがっておけよ」

「武装召喚師の炎に怯え続けなければならぬ戦場なんて、わたしは嫌ですね」

「俺もだ」

シグルドは笑いもせず告げるなり、背後からの殺気に即座に対応した。前へ跳び、振り返り様、敵を視認すると同時にその側頭部に戦鎚を叩きつける。兜に覆われたはずの敵兵の頭は、しかし、ウオー・ハンマーの強打に耐えることはできなかった。無残なまでに潰れ、絶命する。

「で、その武装召喚師殿はどこだ？」

シグルドは、なんととはなしにセツナの姿を探して、戦場に視線をさ迷わせた。無数の敵兵は、炎の恐怖に囚われながらも、それでもなんとか戦場に踏み止まるようとしているようであり、必死に戦い抜こうとしているようでもあった。もっとも、シグルドは、彼らを哀れなどと想わなかった。

それならば、最初から剣など手に取らなければいいのだ。兵士になどならなければよかったのだ。栄達を望まなければよかった。

(ま、すべての人間が望み通り生きているはずもねえけどよ)

それは、これからの彼を見ていればよくわかることだ。

セツナ「カミヤ」

彼は、この戦いにおけるガンディア軍の立役者となったことで、ガンディア中は愚か、周辺諸国にもその名が知られることになるだろう。ログナーにおいては悪名となって知れ渡り、憎悪の的となるだろう。

彼が望もうと望まないと、過酷な運命が待ち受けているに違いない。

そう、彼は力を振るったのだ。
みずからの意志で。

「団長、俺はここですよ」

こちらに向けて手を振っている突撃隊長の姿に、シグルドは、深く深くため息を浮かべたのだった。

「おまえなんか探してねえ」

第二十九話 飛翔將軍の魔剣

「おおお！」

雄叫びとともに振り回した漆黒の矛があざやかな弧を描き、眼前の敵兵を、その全身を覆う分厚い鎧ごと真つ二つに断ち切った。黒き矛の前では鋼鉄の鎧も意味はなく、肉も骨ももるともに両断される。

その瞬間、セツナは、今度こそみずからの手で殺戮を行ったのだと認識した。肉体を突き動かしたのは純然たる殺意であり、敵を討ち果たさんとする純粹な衝動だった。

そこに一切の雑念は存在せず、故に、言い訳などまったくもって存在し得なかった。

黒き矛の切っ先が眼前の敵兵を肩口から斜めに断ち切っていく様は、大量の血液が飛散するのと相俟って、とてつもなく鮮烈で強烈な光景だった。だが、もはやセツナの心を苛むものはなかった。先の炎による大量虐殺で、感覚が麻痺してしまったのかもしれない。

断末魔の叫びの中で絶命した敵対者の既に肉の塊と化した体が、わけもなく崩れ落ちていく様子を見届ける暇もない。

ここは戦場なのだ。

生と死が交錯し、正気と狂気が輪舞する。

剣が踊り、槍が舞い、弓が歌い、血が跳ねる。

その狂乱の淵では、立ち止まることなど許されなかった。考えている余裕もない。ガンディア軍の優勢が決定的になったとはいえ、セツナの周囲には敵兵が満ちていた。雲霞の如くというのは言い過ぎにせよ、数え切れないほどの敵兵と、二百人そこらのガンディアの傭兵たちが入り乱れ、血で血を洗う闘争を繰り広げていた。

《蒼き風》の面々も、猛り狂っているかのような戦いぶりを見せていた。中でも、《剣鬼》ルクス・ヴェインの活躍には目を見張るものがあり、セツナは、ルクスの姿を視界の端にでも見出すと、つい

つい彼に意識を向けてしまう自分に気づいていた。

彼の《剣鬼》と呼ばれる所以を垣間見れば、そうなるのも仕方ないのだろう。美しくも碧き長剣を自由自在に振り回し、数多の敵兵を容易く斬り殺していく様はまさに剣の鬼であり、素人が見ても彼の凄さは際立っていた。

と違って、シグルド・フォリアーやジン・クレールが負けているかというところではない。彼ら《蒼き風》の中心メンバーだけで百人以上のログナー兵を殺しており、それはもはや規格外の強さといっても過言ではないのかもしれない。

もっとも、強さの基準などわかるはずもなかったが。

「おまえが！」

「！」

突如としてセツナの鼓膜を突き抜けたのは、怒りに駆られた激情だった。同時に、セツナの後方から鋭利な殺気が飛来する。猛々しい敵意。ただ目の前の敵を殺したくて仕方がないという意志の塊。セツナは、瞬時に背後へと向き直ると、ひとりの兵士が飛び掛ってくるのを目の当たりにした。

「おまえがやったのか！」

矢の如く飛来したのは、軽装の若い男だった。年のころは二十歳かそこらに見える。こちらを見据える瞳には狂気が宿り、全身からは凄まじいまでの怒りが迸っていた。

「同胞を！ 友を！ みんなを！」

セツナは、そのあまりの形相と剣幕に気圧されはしたものの、しかし、青年兵の勢い任せの突撃を受けるような真似はしなかった。セツナの頭が意識するよりも速く、肉体が反応したのだ。

青年兵の取った行動は、直線的な突進だった。その勢いに乗り、手にした剣でセツナを突き殺そうとしたのだろう。しかし、それはもはや無理な話だった。

「！？」

青年兵がセツナの立っていた場所に到達したときには、既に、セ

ツナの肉体は中空にあったのだ。

セツナは、冷やかに告げた。

「だったらなんだよ」

敵兵の頭上で、セツナの上体が旋回する。漆黒の矛はうなりを上げながら、目標を見失った青年兵の頭を胴体から切り離して見せた。首から血が噴き出す瞬間を見届けられなかったのは、セツナが、地面に落下しなければならなかったからに他ならない。着地に失敗するのは、空中でありえないような動作をした代償だろう。

「っ！」

地面に右肩から落ちたセツナは、その衝撃と痛みにならぬ悲鳴を発した。直後に聞こえた物音は、青年兵の死体がくずおれたことによるものに違いない。なんであれ、支える力を失えば、倒れるしかないのだ。

支える力もなく落下したのは、セツナも同様であろう。そもそも空中から落ちていく体を支えるものなどあるはずもないが。

「だったら、なんなんだよ……」

セツナは、右肩を抑えながら立ち上がると、青年兵の亡骸を見下ろした。地面に転がる頭部と、胴体。彼だけのものではない大量の血が、焼けた地面を赤黒く染めていた。感慨はない。激情もない。衝動など生まれるはずもなく、あるのは、ひとを殺したという実感だけだった。

いや。

「そうさ。俺がやった。俺が、この手で！ この黒き矛で！ 俺が

！ 俺が……！」

セツナは、心の奥底からふつつつと湧きあがってきた感情を抑えることもできず、ただ、叫び声を上げた。そうすることしかできなかった。なぜかはわからない。どうしようもない感情の奔流が、彼から冷静さを失わせていた。

矛を掲げ、視線が集まるうとも気にせず、絶叫する。

「おおおおおおおおおおお……」

それは、魂の咆哮だったのかも知れない。

「!？」

レオンガンドは、右翼の敵陣から聞こえてきた雄叫びに、目を丸くした。それは勇猛な咆哮のようでありながら、実際のところは慟哭のようだったのだ。

(慟哭?)

レオンガンドは、みずからの考えに首を捻ったものの、その勇ましくも物悲しい叫び声に込められた想いからは、慟哭という結論しか導き出せなかった。しかし、だれが戦場で慟哭を上げるといっただろう。

敗勢へと追い込まれるログナー陣営のどれかか？

いや、それはありえないことのように想える。敗色が濃いとはいえ、すべての将兵が絶望しているわけでもなく、絶望したところで、慟哭など発するだろうか。

では、いまや勢いに乗って勝ちを得ようとしているガンディア陣営なのだろうか。勝利を目前に控えているとはいえ、歓喜にむせび泣くようなこともなければ、慟哭することなどありえない。

ならば。

(セツナか?)

レオンガンドの脳裏を過ぎったのは、あの武装召喚師の少年のことなく危うい表情だった。

彼もまた、レオンガンドと同じく、戦場に立つのは初めてだといっ。

とはいえ、彼も武装召喚師なのだ。レオンガンドは、セツナが戦場に出ることにいささかも心配していなかった。そして、予想を遥

かに超えた活躍をして見せたのだ。戦局を変えるほどの大活躍。その結果、ガンディア軍は優勢に立ち、いままさに、勝利を目前のものとしていた。

勝利。

それは、レオンガンドが待ちに待った約束のときであり、それこそが、すべての始まりだった。

(セツナ、君のおかげだ。ようやく、すべてが始まる……！)

それが起きたは、レオンガンドがせつなへの感謝を心の中で紡いだときだった。

「まだまだあつ！」

呆れるほどの大声とともに、レオンガンドの前方で敵兵と交戦していたガンディアの精兵十数人が、一齐に、空高く舞い上げられた絵に書いたような光景だった。何の前触れもなく、レオンガンドの前を護る精兵中の精兵たちが、ものの見事に吹き飛ばされたのだ。怪力とも強力とも言えない、正体不明の力によって。

レオンガンドは、呆気にとられるしかなかった。

「あなたを殺せば、うちの勝利ってことだろう？」

冷やかかで明確な言葉は、レオンガンドの足元からだった。吹き飛ばされた兵士たちに気を取られた隙に、忍び寄ってきたのだ。

「！」

レオンガンドは、馬の足元に視線を落とした。歪な剣を携えた群青の騎士がいた。即座にレオンガンドの脳裏を巡るのは、その青き騎士に関するいくつもの情報だった。

ログナーの《青騎士》ウェイン・ベルセインⅡテウロス。ログナーの名将セインⅡテウロスの孫にして、ログナーでも数少ない武装召喚師であり、そして、

(飛翔將軍の魔剣！)

レオンガンドの胸中のそれは、もはや絶叫に近かった。

第三十話 聲が聞こえる

聲が聞こえる。

忘れがたくも懐かしい少年の声が、聞こえる。

叫んでいる。

彼の魂が。

「クオン様！」

「！」

瞼を開けるなり、彼の視界に飛び込んできたのは、マナ「エリクシアの心配そうな表情であり、そのいつも穏やかさを湛えた美しい瞳に涙すら浮かんでいることに、クオンは驚きを禁じえなかった。

呼吸さえも忘れる。

自分の身の置かれている状況が理解できなかった。その上、いまのいままでなにをしていたのかすら判然としないのだ。現状を把握するために体を動かそうにも、力が入らなかった。

熱に浮かされたような、そんな感覚だけがある。

「マナ……どうしたんだい？」

クオンは、静かに尋ねながら、右手を伸ばし、指先で彼女の涙を拭いた。彼女の泣き顔も絵にはなるのだが、それ以上に、笑顔のマナのほうが素敵だと彼は思っていた。実際、その通りに違いない。文句を言うようなものもないだろう。

「良かった……！ 気がつかれたのですね……！」

マナの表情が一瞬にして笑顔に変わるのを認めて、クオンは、微笑を浮かべた。やはり、ひとの笑顔というものは素晴らしいものだと再認識する。見つめているだけで、活力や希望が湧いてくるのだ。「うん。どうやら気を失っていたみたいだね」

マナの言葉から察するに、そういうことなのだろう。気絶した理由は思い出せないし、その前後のことともまったく記憶になかった。

そもそも、自分が何故、こんなところにいるのかも皆目見当がつかない。

微風がクオンの頬を撫で、こちらを見下ろすマナの髪をわずかに揺らした。家屋の中ではないことは確かだった。空気の匂いそのものが違う。

「はい。突然のことだったので、わたくしも皆さんも、大変だったんですよ？」

マナの返答に、クオンは苦笑を隠さなかった。その光景が脳裏に浮かんだのだ。彼らにとっては所属する傭兵団の団長であるクオンが、突然倒れてしまったのだから、慌てふためくのも無理はない。とはいえ、その場にスウィール・エルガウデイでもいれば、話は別だったのだろうが。

そこで、ふと、クオンの頭の中に疑問が過ぎった。

「あれ？」

「どうされました？」

「スウィールさんってお留守番だったけ？」

クオンの脳裏に浮かび上がったのは、いかにも質実剛健といった老人の風貌である。スウィール・ラナガウデイ。クオンが率いる《白き盾》の実質的なナンバー2であり、《白き盾》が軽快になんの憂いもなく行動できるのは、すべてスウィールの力があつたればこそ。

とはいえ、前線に出て戦うような血気盛んな老人ではないし、そもそも剣を握ったことすらないような人物である。《白き盾》の結成当初こそクオンの傍にいたものだが、ここ最近は拠点に籠もることが多くなっていた。

「じーさん、今回は遠慮するって言ってたじゃないですか。忘れたんですか？」

ぶつきらばうに口を挟んできたのは、ウォルド・マスティアだった。クオンからは見えないが、近くにいることは間違いない。透かさず続けてくる。

「それと、いつまで俺の指定席で寝てるんです？ さっさと退かないと、俺のブラックファントムが火を噴きますぜ？」

彼の言うブラックファントムとは、彼の愛用する召喚武装なのだが、現状、すぐさま振り回せるような状態なのだろうか。だとすればそれは、現在なにかしらの戦闘中か、あるいは戦闘が終わった直後だと示していることに他ならない。

召喚武装が武器である以上、主な使用目的は戦闘に限られてくるからだ。それに武装召喚師は、基本的に、戦闘や特定の状況以外での武装召喚を好まない。大陸召喚師協会の規約にもあるが、それ以前の道徳的な問題なのかもしれない。暗黙の了解とも言うだろう。無論、例外はあるし、武装召喚術を行使することを己の存在意義とするものには、この一般的な論理は通用しない。

少なくとも、ウォルド・マステリアは、戦場以外においては一般的な感性の持ち主であり、むやみやたらに己の力を誇示するような男でもない。よって、ここは戦場だと結論付けるのが打倒だろう。そして、空気の軽さが、戦っている最中ではないことを知らしめていた。

と、その軽妙な空気の中に、不穏な気配が混じる。

「どこがあなたの指定席なのか、一から説明してくださいさらないかしら？ さもないと、わたくしのスターダストが火を噴きますよ？」

マナが、笑顔のままわなわなと拳を震わせる様は、さすがのクオンでも笑い飛ばせるようなものではなかった。もちろん、本気でないことなどわかりきっている。彼女たちが、ちょっとした喧嘩ぐらいで召喚武装を用いるような常識知らずでないことは、この数ヶ月の付き合いでよくわかっていた。

規格外の実力者であることも。

「い、いや、ただの冗談だ、冗談。本気にすんなよ……」

「うふふ。こちらも冗談ですよ。冗談」

「全然冗談に聞こえねえ……おまえもそう思うだろ？」

「どっちでもいい。クオンが無事なら」

ワールドが話を振ったのは、イリスのようだった。彼女のいつも通りの受け答えから、クオンの脳裏には記憶に刻まれたイリスの仏頂面が投影された。すべての感情を失ってしまったような少女の表情は、いつもクオンの胸を締め付けた。邂逅のあの日から、根本的にはなにも変わっていないことなど、だれの目にも明らかなのだ。

だからこそ、クオンは、常に彼女を身辺に置いた。それは彼女の實力からすれば当然の判断であり、だれも反論する余地のない選択なのだ。

「愛想ねえなあ、相変わらず」

「愛想のひとつやふたつでクオンを護れるのなら努力するが？」

「……」

ぐうの音も出ないといったワールドの様子に、クオンは、おかしさを堪えきれなくなっていた。自然、笑みがこぼれる。

「ふふふ。まったく、面白いなあ、みんな」

クオンは、ゆっくりと上体を起こした。こちらを覗きこんでいたマナと頭をぶつけないように注意を払い、そして、起き上がると周囲の状況を確認するために視線を巡らせた。

どうやら、森の中にもいるらしい。鬱蒼たる緑に包囲されているが、頭上には、突き抜けるような青空が広がっていた。太陽は眩しく、風は穏やかだ。とても戦場といった感じはないが、地上に目を向ければ、すぐにそれが勘違いであることを知る。

森の中の少し開けた空間には、無数の皇魔おひまの屍骸が転がっていた。すべて、青い皮に覆われた四足獣型皇魔　ブリークの死体だった。そのほとんどが、強烈な一撃によって絶命しており、マナたちの実力の一端が垣間見れるだろう。

化け物の亡骸が発するなんとも言いようのない死臭が、ようやく、クオンの意識を揺さぶった。さつきまで臭いもしなかったのは、きっと、マナの膝枕が心地よかったせいに違いない。

「そうだったね」

クオンは、その一言で、仲間たちの視線が自分に集まったことを

認めた。

「皇魔の巣を探していたんだ」

その途中で、ブリークの群れと遭遇し、戦闘になったのだ。ブリークなど敵ではないし、クオンが武装召喚術を使うまでもなかった。それは油断でも慢心でもなく、余裕と呼ぶようなものでもない。作業というほうが近いのかもしれない。

とにかく、クオンは、仲間たちが皇魔を殺戮するのを、ただ座して待ってればよかったのだ。それだけが、その戦いにおけるクオンの役目だといえた。声援を送る必要すらない。それは、彼らへの侮辱なのだから。

信じ、結果を待てばよかったのだ。

そして、彼らは予定通りに皇魔を殲滅した。

だが、そのときクオンの意識は、まったく別のものを捉えてしまっていた。

（声が聞こえたんだよ……）

クオンは、仲間たちの真摯なまなざしの中心で、みずからの胸に手を当てた。鼓動の高鳴りを感じる。予想だにできなかった事態に、興奮すらしているのかもしれない。

（君の聲が）

クオンは、ただ、空を仰いだ。

「セツナ……」

第三十一話 忌まわしき黒

ウェイン・ベルセイーン・テウロスには、確信があつた。敵軍の指揮官であり、敵国の王であるレオンガンド・レイ・ガンディアさえ討ち取ることができれば、戦線は持ち直すだろう。いや、それどころではない。レオンガンドに跡継ぎはおらず、彼が死ねば、ガンディア国内が荒れるのは必然。となれば、ガンディアはログナーにとって、懸念すべき存在ではなくなる。

つまり、ログナーは、ザルワーンの後ろ盾を必要としなくなるのだ。もちろん、即座に同盟を解消するような状況にはならないし、それにはまだまだ国力が足りない。しかし、現在の属国染みた境遇からは抜け出せるのではないか。

それは、アスタル・ラナディース将軍の望みであり、ひいてはログナー国民の願いであつた。

ならば、前線に立つ騎士も、勇奮せざるを得ない。

ログナーの置かれている状況を少しでも改善するためには、目の前の勝利をあらゆる手段を使ってでももぎ取るしかないのだ。

(それがつまり、これだ)

単騎での特攻など、部隊を任された騎士の取るべき戦術ではないだろう。部隊の指揮を放棄しているのだ。しかし、彼には彼にしかできないことがあり、故に、やむを得ず敵陣に特攻するしかなかった。

すべては、眼前の敗北を大いなる勝利に塗り替えるために。

(まったく、皮肉なもんだね)

猪突猛進を信条とする勇猛果敢な騎士が後方に回り、根が臆病で近接戦闘をもつとも苦手とする騎士が前線に突貫するなど、皮肉以外のなにものでもないだろう。が、性格と資質が異なるというのはよくあることだ。

たまたま、ウェインの能力が、強襲に向いていただけに過ぎない。

ウェインの一閃によって敵の精兵たちが宙を舞い、馬上の王への進路が生まれた。それは、大逆転へ至る勝利の道程に違いなかった。その直線には、あざやかなまでに障害物がなかった。障害物さえなければ、彼のものだった。空中高く打ち上げた兵士たちの真下を潜るように飛んで、瞬く間に、レオンガンドの足元に到達する。

「あなたを殺せば、うちの勝利ってことだろう？」

格好をつけたわけではない。当然のことを口走ったに過ぎない。

そして、その程度、隙にはならない。ただ、レオンガンドの馬鹿馬鹿しいくらいの美貌が、こちらを認識しただけだ。銀獅子の兜を被っていてもそれとわかるくらいの美貌には、ウェインも呆れるしかなかった。

だが、ウェインが、レオンガンドの隙を逃す真似などするはずがなかった。右手の剣を、敵国の王に向かって突きつけるように掲げる。刀身が歪に折れ曲がった剣は、一見、殺傷能力などまったく存在しないように見えた。しかし、見た目がすべてではないのは、ほとんどの召喚武装に当てはまる事実である。

でなければ、だれが好き好んでこんな使い勝手の悪そうな剣を召喚するというのか。

「往け！」

ウェインの命令に、彼の剣が呼応する。その歪んだ刀身が、青白い光を放ちながら、一直線に伸びたのだ。爆発的な速度だった。矢の如くといっても過言ではなかった。剣先が向かうのは、レオンガンドの心臓。どれほど銀獅子の甲冑の装甲が厚かろうと、彼の剣の前では意味をなさない。

「！」

レオンガンドは、瞬時に反応したものの、それはあまりに遅すぎたのだ。身を振るには場所が悪く、防ぐべき盾はない。槍で剣先を逸らそうにも、刀身の伸長速度のほうが遙かに速く、レオンガンド程度の技量では届かせることもできなかった。

そして、切っ先が、レオンガンドの鎧の胸甲に突き刺さった。

(やった)

胸中、勝利の雄叫びを上げようとした瞬間、ウェインは、上空からの衝撃によって吹き飛ばされた。

「!?!」

凄まじいまでの激痛が、ウェインの思考を停止させる。圧倒的な衝撃。予想だにしない事態。視界は目まぐるしく移り変わる。無傷のレオンガンドを認め、その足元に黒い物体の着地を見届ける。視界を彩るのは無数の碎片。彼の剣の破片たち。スネークラインが破壊されたのだ。

なにものかによって。

(なんだ!?!)

彼は愕然とした。

実際、なにが起こったというのだろう。

剣は折られ、肉体は宙を舞っていた。

ガンディア兵とログナー兵が入り乱れる戦場の光景が、ウェインの視野一杯に広がっていた。その景色も、すぐに変わるだろう。

全身を打ちのめした衝撃の正体も把握できぬまま、彼は、この作戦が失敗に終わったことを悟った。

なにものかの横槍が、レオンガンドを護ったのだ。

流転するウェインの視界は、遂に地面を捉えた。兵士たちの甲冑で埋め尽くされた大地の中へ、吸い込まれるように落ちていく。

(それは駄目だ!)

ウェインは、心の中で叫んだ。このまま地面に激突して、気を失うような事態だけは、なんとしても避けなければならなかった。命令する。

「風と踊れ……!」

彼の全身を覆う群青の甲冑が、淡くも華やかな光を発した。周囲の大气が渦巻いて、ウェインの全身を押し包む。緩やかな浮遊感が、彼の意識を覆った。そのまま空中で態勢を整えると、ウェインは、難なくその場に降り立った。周囲の兵士たちが驚くのは、当然であ

ろっ。

(よくやってくれた、アークブルー)

みずからの象徴とも言うべき青の甲冑に感謝を述べると、彼は、改めてレオンガンドを見遣った。剣は折られ、別の武器を召喚するほどの時間的猶予もない。そして、この開きすぎた距離を埋めることはできないだろう。目測にして凡そ十メートル。先の方法が何度も通用するはずがなかった。

しかしそれでも、敵の正体を知っておく必要はある。

「あれか……？」

事態の変転に驚愕するあまり硬直したままのレオンガンドの足元で、それは、息づいていた。

漆黒のなにか。

「あれが……」

ウエインは、怪訝そうに目を細めた。それはとても人間には見えなかった。いや、人間には違いなのだ。その姿かたちは人間そのものだった。そもそもこの戦場に人間以外の存在が入り込んでくる余地などないはずだった。

それは一見、少年の姿をしていた。簡素な鎧と兜を身に付けながらも、とても戦いなれているようには見受けられない。少年というのは背格好からの判断に過ぎない。実際はうえいんと大差ない年齢なのかもしれないが、この際どうでもいい。

武装召喚師であろう。彼の手にした長大な矛は、見るからに禍々しく、いかにも召喚武装であることを主張してやまない形状をしていた。実用的ではないのだ。とてもひとの手によって作り出されたものには見えなかった。そしてその矛は、おぞましく、戦慄さえ覚えるほどだった。

(怖い……？ 俺が？)

ウエインは、自分の手が震えていることに気づいた。さっきの痛みで震えているのではない。敵の少年を見据えているが故に、震えるのだ。

恐怖に。

それは、通常では決してありえないことのように思えた。あつてはならないことだ。たかが召喚武装を手にした少年に戦慄するなどありえない。こちらは歴戦の騎士なのだ。《青騎士》と呼ばれて久しく、《飛翔將軍の魔劍》と恐れられる自分が、武装召喚師ひとりを相手に怖じ気づくなど。

(あつてはならない……！)

歯噛みして、ウェインは、頭を振った。恐怖に沈みかけた心を奮い立たせるために、敵を睨み据える。しかし、レオンガンドの足元に黒き矛の少年の姿はなく、直後、兵士の断末魔が前方で上がった。その声も、なにものかの雄叫びによって掻き消されたが。

「おおおおおおおおおおお！」

獣以上に獯猛な咆哮は、少年が発しているに違いない。その叫びに込められたのは、見境なき殺意であり、どす黒いともいえるほどの敵意だった。それは、ウェインがついさつき感じた恐怖と根源を同じくするものであり、彼は、前方から血を巻き上げ、死を撒き散らしながら迫り来る敵に、絶望を見た。

「なんだ……これは!？」

理解するのも馬鹿馬鹿しいくらいの力だった。

ウェインとレオンガンドの間に横たわる凡そ十メートルという間合いを埋め尽くしていた歩兵のうち、ログナー側の兵が、急速に減少していく。少年が、その身に余るほどに長大な矛を振るうたびに、前方の兵士たちが命を絶たれていったのだ。一方的な殺戮だった。対抗手段を持たない兵士たちでは、どうすることもできないのだ。ただ、殺されるのを順番待ちしているようなものだ。

ウェインは、己の判断が遅きを失したことを把握した。右腕を、前方に掲げる。

「歌え、風よ！」

アイクフル

ウェインの言葉に、青き甲冑の力が発動した。甲冑が淡い光を発するとともに、大気がざわめいた。

「撤退だ」

ウェインは、周囲の兵士たちに告げると、黒き矛の少年が分厚い大気の壁に押し包まれるのを見た。大気の障壁は視認できるようなものではないが、鎧を纏うウェインには、感覚で理解できた。幾重にも取り巻く大気の層が、しばらくは彼の動きを制限するに違いない。

その間にレオンガンドに再び特攻するというのも考えないではなかったが、もはや無理だった。レオンガンドは、いつの間にかかなり後方に下がっていたのだ。この場は武装召喚師の少年に任せたと考えるのが妥当だろう。もちろん、こちらの先の作戦があつたればこそその判断なのだろうが。

と、ひとりの歩兵が、ウェインに問いかけてきた。

「撤退……ですか？」

「そう、全軍撤退。バルサー要塞で態勢を立て直すんだよ」

ウェインは即答すると、前方に視線を戻した。黒き矛の少年は、大気の壁に包まれて、なにもできないでいるようだった。彼を抑えれば、追撃も多少はましになるだろう。しかし、それがいつまで持つか。

ウェインは、冷や汗をかいている自分に気づいた。黒き矛の力は、あれがすべてではないはずだ。その予感、いまや確信に近かった。歴戦の戦士であるはずのウェインが恐怖を覚えるほどの召喚武装なのだ。並大抵のものではない。

不意に、ウェインの脳裏を、紅蓮の猛火が焼き払った。

「まさか……！？」

直後、化け物染みた咆哮とともに、少年を拘束していた大気の障壁が四散したのだった。

第三十二話 鬼神の如く

「セツ……ナ？」

その少年の名を口にしたとき、ファリアの胸を締め付けていたのは恐怖だった。慟哭の如き咆哮とともに何処かへと飛び去った少年が発散した圧倒的な力が、彼女の心に鋭い刃のように突き刺さっていた。

一体、なんとという力なのだろう。

人ならざる異形の力。

それは、セツナ本人の力ではないのだろう。矛の力に違いない。彼の召喚武装たる黒き矛の力なのだ。しかし、それにしても、尋常な力ではなかった。常識を遙かに超えた力が、波動となって拡散したのだ。それ自体に物理的な破壊力はなかったものの、力を感じ取ることができるものにとっては、絶望的なまでの苦痛だったに違いない。

ファリア自身がそうだったのだ。セツナの矛から放出された力の波動が彼女の肉体を突き抜けた瞬間、想像を絶する痛みが生まれた。意識を失い兼ねないほどの力。恐怖であり、脅威。

それはさながら、人外の化け物と対峙したときに似ていた。無論、化け物と対峙しただけで意識を失うことなどそうあることではない。だがもし、対峙した化け物が規格外の力を融資、それを認識できるのならどうだろう。恐怖のあまり卒倒したとしても不思議ではない。そういうことなのだ。

しかし、セツナの矛の力は、人外の化け物たる皇魔みまなどとは根本的に違うものに違いなく、だからこそ、彼女は不安を抱いていた。

（セツナ……君はいつたい何者なの？）

ファリアは、自身の震える体を抱きしめるようにして、その場に立ち尽くしていた。周囲に敵兵の姿はない。後方にいるのだ。当然だろう。そして、彼女の得物は弓である。肉体の鍛錬を第一の義務

とする武装召喚師とはいえ、武装の運用方法にあった立ち回りをするのは当たり前なのだ。でなければ、命がいくつあっても足りない。後方からの狙撃や援護射撃こそが彼女の本来の戦い方であり、セツナという要素がなければ前線に出ることなどなかったのだ。もっとも、セツナが戦いへの参加を望まなければ、彼女とてこの戦いに身を投じる必要も道理もなかったが。

「ありや？ セツナはどこいったんだ？」

と、ファリアの思考を妨げたのは、シグルドの野放図なまでの大声だった。といって、不快な音色ではない。むしろ、落ち込みかけた心を救うのは、いつだってそのような豪快な声なのかもしれない。ファリアが目を向けると、シグルドは副長、突撃隊長のふたりを連れてきていた。前線で戦うのにも飽きたのだろうか。

「さっき飛んでいったの見ましたけど？」

ルクスが、さわやかに言った。凄まじい戦果を上げながら、返り血ひとつ浴びていないその姿は、剣鬼と呼ぶにはどうも似つかわしくないのだが、しかし幾多の命を吸った長剣を事も無げに扱う様は、やはり剣の鬼と言う以外に表現のしようがないのかもしれない。

もっとも、彼の人懐っこそうな表情を見ると、どうしてもそのようなには思えないのだが。

「どこに？」

「それはやはり、陛下の元に、ではないかと」

とは、ジン・クレール。簡素な兜は、彼の知的な容貌を隠しはしなかった。彼もそうだが、シグルドにせよルクスにせよ、《蒼き風》の幹部連中は基本的に軽装を好むようだった。重装備では動き難いというのもあるだろうが、いくら重厚な甲冑に身を包んだところで、高位の召喚武装の前では意味をなさなくなるのかわかっているからだろう。それは彼らが歴戦の兵だつわものということの証明であるのとともに、武装召喚師の存在が如何に重大な影響力を持っているのかわかるだろう。

武装召喚師さえいなければ、この戦いはもっと長引いたはずであ

り、そもそも、ガンディア軍が優位に立つことも難しかったのではないかとさえいえる。無論、このガンディア軍有利の戦況は、セツナの存在が極めて大きく、並大抵の武装召喚師では彼と同様の活躍などできるわけもないのだが。

それはファリアとて例外ではない。彼女がすべての力を出し切ったところで、セツナの上げた戦果には到底及ぶべくもないだろう。それはごく当然の帰結であり、そしてだからこそ、彼の力が尋常のものではないからこそ、ファリアは、不安を覚えるしかないのだ。その不安が杞憂に終わればいいと願うことが、彼女にできる精一杯だった。

それがなんであるかなど、もはやだれにも理解できなかったのかもしれない。

それは脅威であったのかもかもしれない。

それは驚異であったのかもかもしれない。

それは狂気でもあったのだろう。

そして、狂喜ですらあったのだ。

その場にいただれもが、その噎せ返るような殺意と敵意の奔流の中で、絶望と失意を抱いていた。だれもが。

そう、だれもが。

後方に退いたレオンガンドですらも、恐怖を感じずにはいられなかった。

「あれがセツナか……!？」

敵陣の最前線において、まるでありつただけの力をぶつけるかの如く暴威を振るう少年を目の当たりにして、レオンガンドは、正気を保っていられる自分の神経の凶太さに感嘆するほどだった。

「ば、化け物だ……！」

とは、だれの言葉だったのだろう。敵兵の断末魔のようでもあつたし、近場にいた精兵の発した言葉のようにも想われた。ましてや、レオンガンドの心の声なのかもしれない。なかつた。

それほどまでに、セツナの活躍は凄まじかつた。いや、活躍などという生易しいものではなかつた。

殺戮、虐殺といつてもいい。

黒き矛を手にした彼の前に敵はなく、重装歩兵も軽装歩兵も平等に斬殺し、大盾を構えていようと諸共に貫き殺し、一斉に飛び掛つてこようと、意にも介さず切り刻んだ。その速度たるや、レオンガンドの目に追いきれるものではなく、戦場を飛び交う漆黒の矛は、さながら命を刈り取る悪魔の象徴の如き様相を帯び始めていた。悲鳴はまるで合唱のように。

しかし、悲鳴は、敵陣からのみではなかつた。たつたひとりで前線を崩壊させていくセツナの所業には、ガンディアの兵士たちも腰を抜かしたらしい。

「弱兵と誇られるだけのことはありませんな」

やれやれとでも言いたげなアルガザード「バルガザールの言葉に同意しようとしたものの、レオンガンドは、自分もまた、セツナの変貌振りに及び腰になっていることを再度認識して、頭を振った。

今回ばかりは、兵士たちを叱責することはできない。

「仕方ないんじゃないかな」

「アレは……鬼神かなにかですかね？」

「少なくとも、ごく普通の少年だったはずなんだけどね」

アルガザードの問いに対して、レオンガンドは、自信無げに答えるだけだつた。なにかを隠していたとはいえ、あときのセツナはやはりただの少年にしか見えなかつたのは事実だつた。そんな少年に多少の期待を抱いたのも事実のだが、ここまでの戦果を上げるなど考えてもいなかつたし、戦局を左右するほどの実力を秘めているなど、想像する余地もなかつた。

レオンガンドが前方に視線を戻すと、崩壊した戦線を立て直すところとするログナー軍の努力を、セツナが一蹴したところだった。矛の一闪が、十数人の兵士を吹き飛ばしたのだ。

圧倒的な力だった。

ログナー軍は、もはや戦線を立て直すことなど諦めるしかなかっただろう。眼前に化け物が立ち塞がっているのだ。いや、進軍を妨げているのではなく、むしろ全力で襲い掛かってくるという。どれだけの戦力を投入しても一向に埒のあかないような化け物が、である。

ならば、立ち向かうなど愚策も愚策。そして包囲殲滅もかなわないのならば、最初から相手にしなければいいのだ。

とはいえ、セツナを無視してまでレオンガンドに接近したところで、こちらの有り余るほどの兵力がそれらを駆逐してくれるだろうし、そもそも、セツナが迂回を許すとも思えなかった。

故に、ログナー軍が撤退を始めたとしても、レオンガンドはなんら不思議なものは感じなかった。無能な指揮官に掌握された集団の末路など、そのようなものだろう。しかし、引き際は見事なものだといえたかもしれない。

さながら、潮が引いていくよう。

殿として残された兵士たちの死に物狂いの奮起が、功を奏したのだろう。彼らのまさしく全身全霊の戦いによって、セツナはその動きを封じられたのだ。

セツナは、撤退するログナー軍を追撃するよりもまず、みずからを包囲する死兵を殺し尽くさなければならなかったのだ。

そしてそれは、レオンガンドたちの追撃をも封じる結果となった。鬼神の如く矛を振るうセツナへの接近を、人間だけでなく、馬たちも拒絶していた。

しかしながら、だ。

「勝敗は決した……か」

レオンガンドは、多少の感慨とともに、撤退する敵軍の向かう先

にまなざしを向けた。厳然と聳え立つバルサー要塞の威容は、レオンガンドを新たな王として国民に認めてもらうためには、最低限必要なものである。先王の死後のどさくさにまぎれて奪われたとはいえ、元々、ガンディアのものなのだ。奪還しなければならぬ。（それも、いま取り返した……な）

レオンガンドの視線の先で、バルサー要塞の頂点に掲げられた口グナーの旗が、赤々と燃えていた。

それは、バルサー要塞が陥落したことを示していた。

第三十三話 ジオ〃ギルバース

(なんだこれは……)

ジオ〃ギルバースは、左右に目もくれず、馬を走らせていた。ただ、一直線にバルサー要塞に向かう。一心不乱。一刻も早くこの救いがたい戦場から離脱しなければならぬ。

バルサー要塞に辿り着きさえすれば、追撃を恐れることもないのだ。ログナーが難攻不落と恐れたバルサー要塞の堅牢な城壁ならば、ガンディアの猛攻にもびくともしないはずだ。

例え、戦局を覆すほどの武装召喚師であっても、要塞を破壊することはできないだろう。

しかし。

(なんだこの状況は……。この有様は)

焦燥感が、ジオの意識を掻き乱していた。心拍数が上がり、呼吸すらもままならない。周りが見えなくなっていた。

ただ、前方だけを見ている。

嘘みたいに晴れやかなバルサー平原を越えた先に、要塞の威容があった。ガンディアの北の門とでも言うべき強大な要塞は、いまはログナーの支配下にあるのだ。その門の中に飛び込めば、彼の心も落ち着きを取り戻すだろう。

だから、いまは焦っていても構わないはずだ。

(なぜこうなった……!)

ジオは、歯噛みした。馬上、視界は狭くなる一方だった。頭の中がぐるぐると旋回しているような感覚が、彼の意識を狂わせていく。敗走。

完膚なきまでの敗北だった。

会戦当初、数ではこちらが上回っていたはずなのだ。バルサー要塞に駐留していたすべての兵をもって組織した大軍勢であり、ジオの力量からすれば到底采配しきれないような人数ではあったが、今

回ばかりはそんなことを心配する必要はなかったのだ。

力押しでよかったからだ。

兵力が上回っているだけではない。

ガンディア軍を指揮するは、此度が初陣となる国王レオンガンド・レイⅡガンディアという事実は、ジオにとって吉報以外のなにものでもなかった。戦場に立ったこともなければ、指揮を取ったことなどあるはずもないものに、負けるいわれはなかったのだ。

なにより、レオンガンドは《うつけ》と呼ばれ、ガンディア国内での人気も芳しくない。となれば、兵の士気も俄然低いはずだろうと、彼は踏んだのだ。そもそも、ガンディア軍は弱兵だというの周知の事実であり、あちらの戦意が高かろうと低かろうと、ログナー軍の相手にならないのはいつものことなのだ。

無論、ガンディアの同盟国であるルシオン、ミオン両国からの援軍だけには注意しなければならなかった。二国の援軍の動き次第では、手痛い打撃を受けるかもしれないのだ。

しかし、それらは結局のところ、ジオⅡギルバースの頭の中で造り上げた絵空事に過ぎず、現実はずっと凶悪で鮮烈な一撃を叩き込んできたのだが。

(俺がどこで間違えたというんだ……！なにを……)

武装召喚師の存在を考慮しなかったわけではない。軍に武装召喚師を編入するのは、今やこの大陸においてありふれた常識なのだ。だからといって、すべての国が優れた武装召喚師を満足いくほど数を揃えられるかというと、そうではない。

武装召喚師にも限りがあるし、だれもが戦争を好むわけでもない。その上、仕官先を求めるにせよ、将来性のなさそうな小国よりも、安定感のある大国に足が向くのは当然のことだ。

故に、小国同士の戦争で前線に出てくるような武装召喚師は、大抵が程度の低い術師であり、それらが召喚する武装も期待はずれの性能を見せることが多い。それならばむしろ、普通の傭兵を雇うほうがいいのではないか、というのが小国の取りがちな結論である。

もつとも、ジオはログナーにいる以上、用兵次第では戦局を左右しかねない武装召喚師の恐ろしさを身を以て知っていたし、だからこそ、ウェイン・ベルセイン⇨テウロスなどという厄介な男を飛翔將軍から引き離してきたのだ。多少強引な手段ではあったが、その判断は間違いではなかっただろう。

ウェインの力がなければ、今頃、ログナー軍は瓦解していたかもしれない。

たったひとりの武装召喚師の手によって。

不意に。

「 將軍？」

ジオの脳裏を過ぎったのは、ひどく穏やかな青年の声だった。青年はいつだって温和であり、常に微笑を湛えているような、そんな風情があった。

「ジオ⇨ギルバース將軍？ どうなされました？」

「いや、大したことじゃない。続けてくれ」

「……では、話を続けましょうか」

彼がその青年と出逢ったのは、いつのことだったか。

ログナーがバルサー要塞を攻略した後だというのは覚えている。少なくとも、ここ半年の出来事に違いない。青年に関する記憶が定かでないのは、その当時のジオが荒れていたからに他ならない。

難攻不落の要塞を落としたということで、ログナー国内はあきれ返るほどに沸き立っていた。まるでおとぎ話のような逆転劇と、それを演出した謎の少年の存在、そして、飛翔將軍アスタル⇨ラナデイスのその異名に恥じめ絢爛たる活躍は、国民の鬱屈した感情を解き放つには十分すぎたのだ。

ザルワーンに屈して以来、どれほどの間、かの国の暴慢に耐え忍んできたのか。いや、そもそも、現国王の振る舞いそのものからして、国民にとっては耐え難いものだったに違いない。

政務を怠り遊興に耽る現王キリル・レイ⇨ログナーの存在そのものが、国民にとって頭痛の種であり、絶望の影であった。それは考

えようによつては、《うつけ》が即位したガンディアよりもひどい状況だったのかもしれない。

しかし、そういった暗く澱んだ空気を吹き飛ばすような情報が、ログナー全土を踊った。それが、バルサー要塞攻略のニュースであり、飛翔將軍及び《青騎士》、《赤騎士》の活躍の報であった。

それらは国民の溜飲を下げるものだったが、ジオとしてはなにとつ面白いものではなかった。当然だろう。仇敵の如く忌み嫌っていたアスタル・ラナディースが、かつて彼が何度となく挑んでは敗走を繰り返してきた要塞を、事も無げに攻略してしまったのだ。

これではまるで道化ではないか。

彼が、アスタルへの憎悪を深めたのは言うまでもないだろう。

そんな頃だったはずである。

その青年　ヒース・レルガと出逢ったのは。

『將軍は、御自分のこと卑下しすぎですよ。二十代で將軍にまで上り詰めたのです。もっと胸を張っていいんじゃないですか？』

ヒース・レルガの言葉は、非常に心地が良く、失態に次ぐ失態で落ち込んでいた当時のジオには、さながら救い主の声のように聞こえたのだ。

『ザルワーン本国でも有名ですよ』

『ザルワーン……？　君はザルワーンの人間なのか？』

『はい。ミレルバス・ライバーン様の下で働いています』

『はっ……どうせ、《無能將軍》なんだろう？』

『まさか。ジオ・ギルバースは将来ログナーを背負う人材になるだろうというのが、我が主の評ですよ』

それはきくと、こちらの機嫌を損ねまいとする青年なりの気遣いだったのだろうが、当時のジオにとっては、その気遣いだけで涙が出そうなほどに嬉しかったのだ。だれもが《無能將軍》と陰口を叩き、彼を見る目にはあらゆる感情が存在しなかった。

だれもが、彼を黙殺した。

『將軍、ひとつ、お話しがあるのですが』

『なんだ？ ヒース』

彼が、こちらのことを心から氣遣うような青年に気を許したとしても、仕方がなかったのかもしれない。

『將軍はこの現状に満足していますか？』

『現状？』

『バルサー要塞攻略という手柄を奪ったアスタル＝ラナデイスは、今や時のひとです。ガンディア侵攻時の総大将ではないかとさえ噂されています。しかし、本来ならば、將軍こそがその位置にいるべきなのです』

『なにを……俺は、何度も失敗した男だぞ……？』

彼は、青年の言葉に困惑した。実際、言っている意味がわからなかった。気が狂ったとしか思えないような論理だった。だが。

『將軍こそ、なにを言っているのですか？ アスタルが要塞を落とせたのは、ただの偶然ではないのですか？ もし、あのとき、クオン＝カミヤが手を貸さなければ、アスタルの敗走は必死だったはずですよ。逆に言えば、あのとき軍を率いていたのが將軍であっても、同様の いえ、それ以上の勝利を掴んでいたのではないですか？ 將軍、立ち上がりましょう。でなければ、だれがログナーの将来を背負うというんです！』

ヒース＝レルガの全身全霊の訴えは、ジオ＝ギルバースの閉じかけていた眼を開かせ、屈折した感情を爆発させるに至った。

そうして、ジオ＝ギルバースとヒース＝レルガの暗躍が始まったのだ。

（そうだ……ヒース。ヒース＝レルガ。あの男だ。あいつが俺に囁いたんだ……！）

ジオは我に返ると、ふと違和感を覚えた。兵士たちの気配は愚か、馬の足音ひとつ聞こえなかったのだ。

『將軍、此度の戦、必ず勝ちますよ』

背後を振り返ったジオの視界には、自軍の兵士などひとりも映らなかつた。遙か後方から、ガンディア軍からのわずかばかりの追撃

部隊が追走してくるのが見えただけだった。まるでどこかへと消え去ったかのようであり、彼は、一瞬混乱した。なにが起こったのかまったくわからなかったのだ。

『相手はガンディアのうつけ。取るに足らぬ相手です』

彼は、頭を振った。大敗を喫したとはいえ、数にして五千以上の兵士は生き残っていたはずである。そのすべてが敵軍の追撃にあつて敗れ去るなどということは、あつてはならない。というより、ありえないだろう。

敵軍にとつておきの切り札でもない限りは。

『統率も取れていない様子でした。兵の数も練度もこちらが上。恐れる必要はありません』

彼は、前方に視線を戻した。もはや兵士のことなど考えている場合ではなかった。要塞が目と鼻の先のところにまで来ていた。要塞の中に飛び込むしかなかった。そこにさえ辿り着けば、状況を挽回しうるものだと、信じていた。

『全兵力を以てガンディア軍をもみ潰し、その勢いでマルダールを落とす、ガンディオンをも飲み込みましょう』

ジオは、そこで、はたと気づいた。

要塞に駐留していた全兵力を放出した以上、いま、たったひとりて要塞に駆け込んだところでいったいなにができるというのだろう。もちろん、要塞を機能させるのに最低限必要な人員は残してある。しかし、それだけではどうしようもないのではないか。

『將軍こそがログナーの英雄なのだと、知らしめてやるのです』

(夢みたいなことを……)

なぜ、そんな言葉に心が躍ったのだろう。

そんな疑問とともに彼は天を仰ぎ、そのとき、バルサー要塞に掲げられたログナーの旗が紅蓮と燃え上がっていることを認めた。

要塞は、とうに陥落していたのだ。

全兵力を放出したがために。

「くくく……ははは、あっはっはっはっはっは」

ジオゥギルバースは、ここ数年来の大笑いをした。笑うしかなかった。

前方　バルサー要塞の開かれた正門の前には、群青の鎧に身を固めた兵士たちが弓を構えており、ジオゥギルバースの到着を今か今かと待ち焦がれている様子だった。

第三十四話 あるいは悪鬼か死神か

血塗られた漆黒の矛が旋回し、禍々しいばかりの切っ先が敵兵の頭部を切り飛ばした。その尋常ならざる速度の前では、避けることもかなわなかったのだらう。頭部を失った兵士の体が、鮮血を噴き出しながら、地に沈むように倒れていった。

それが、ログナー軍の殿を務めた兵士のうちの最後のひとりだった。

ガンディア軍の追撃を防ぐために戦場に残されたものたちは、文字通り決死の覚悟でセツナに挑みかかったに違いない。

実際、凡そ三百名の兵士は、正に死兵と化して、セツナの進攻を押し留めることには成功したのだ。それは結果的に、セツナの後方に控えるガンディア軍の本隊の行動をも制することになり、ログナー軍の本隊は、つつがなく戦場を離脱することができたに違いなかった。

もっとも、此の度の戦いは、ログナー軍の殲滅が目的ではないのだ。バルサー要塞の奪還こそが目的であり、敵軍など追い散らすだけでよかった。もちろん、有力なログナーの将兵を討ち取れることができるのならそれに越したことはないし、ログナーの戦力を削げるだけ削り取っておくのもいいだろう。

とはいえ。

「あ、あいつひとりでやりやがった……」

「あんなの、鬼か悪魔じゃないか」

「て、敵じゃなくてよかった……」

周囲から聞こえる兵士たちの囁きは、レオンガンド・レイ＝ガンディアの想いの一部を代弁しているものでもあった。

呆気にとられるしかないのだ。

恐怖に震えている場合ではなかった。

セツナの圧倒的な力は、ログナー軍の撤退を命を賭してでも遂行

させようとした兵士たちを、無造作に斬り殺し、事も無げに殲滅してしまった。まさに鬼神の如き活躍であり、レオンガンドの予想を遥かに凌駕する戦い振りだった。

兵士たちが恐れ戦くのも無理はない。むしろ、畏怖すべき存在である。それはログナーにとっても同じ。いや、それ以上の存在として報告されるはずだ。

ガンディアの黒き矛こそが最大の敵である、と。

(セツナ……)

レオンガンドは、戦いが終わったというのに一向に動き出そうともしない周囲の兵士たちにもどかしさを感じながら、そのままざしを前方の少年に注いでいた。

漆黒の矛を手にし、大量の血を浴びた少年の姿は、兵士たちの言うように鬼や悪魔を想起させるものであり、彼の周りに積み上げられた無数の死体が、地獄の一風景を演出しているかのようだった。

「終わったのか？」

「そのようです」

「呆気ない戦だったな」

「はい」

「……さつさと義兄上と合流しよう」

ハルベルクの声音がひどく冷ややかだったのは、彼にとっては拍子抜けのする戦いだったからに違いない。

たったひとりの武装召喚師の圧倒的な火力が、戦の勝敗を決めてしまった。練りに練った戦術で思い描いた通りの勝利を演出することを好むハルベルクにとって、これほどつまらない戦いはないだろう。

まるで蚊帳の外だ。

それには、彼女も無然とするしかなかった。すべてが想像の範囲外で行われているような戦いだっただ。

セツナ「カミヤ。彼という武装召喚師の存在が、彼女たちの価値を奪い去ったのだ。

無論、白聖騎士隊を筆頭とするルシオン軍も戦うには戦ったのだ。恐慌状態に陥った敵陣の横腹を突き、さらなる混乱を生み出し、数多の敵兵を屠ったのだ。しかし、それは活躍と呼べるようなものだったのだろうか。

もちろん、ルシオン軍に死傷者がほとんど出なかったのは喜ぶべきことなのだが。

(援軍の必要はあったのかしら?)

リノンクレアは首を傾げたが、すぐに頭を振った。ハルベルクが馬首を返し、ガンディア軍の本隊への移動を始めたのだ。思索している場合ではない。多少の遅れも許されない。

ガンディア本隊は、敵兵ひとりいない戦場の中央で立ち往生していた。ログナー軍は撤退に成功したのだろうか、別働隊によって陥落したバルサー要塞に逃げ込むこともできず、本国へとその進路を取ったはずである。

長い道程を追撃の影に怯えながら進むのは、想像以上に辛いものがあるだろう。もっとも、ガンディア軍が追撃部隊を編成したという報告は聞いておらず、そのままログナーに返すつもりに違いない。危険を犯して敗走中の敵を狩るよりも、初陣の勝利を確実なものとするのがその理由なのかもしれない。

「うつけ陛下の初陣は、呆れるほどの大勝利か。これで周辺諸国は慌てるだろうな。特にアザークとベルルは、ガンディアを警戒せざるを得なくなっただ」

「今までは警戒にも値しなかった、と?」

「それはそうだろう。先王が病に倒れられてからというもの、ガンディアからどれほどの人材が流出して行ったんだ? ナーレス「ラ

グナホルン、クリストク、スレイクス、 balan デイアラン……名だたる将がガンディアを見放した。驚くほどあっさりだね」

「……その通りです」

リノンクレアは口惜しさに顔を背けた。実に悔しいことだった。名将と呼ばれるほどの人材の流出。それは、彼らがこの国の未来に絶望したという事実には他ならない。それと同時に、英傑と謳われた先王シウスクラウドがどれほどの尊敬と人望を集めていたのかわかるだろう。

先王が病に倒れたのは、二十年前のことだ。それが原因不明の病であり、治療する手段が見つからないと判明したとき、ガンディア全土が暗澹たる絶望に包まれた。王位を継ぐべき王子が幼かったこともあるが、それよりなにより、ガンディアをガンディアたらしめていたのはシウスクラウド・レイ、ガンディアという稀代の英傑だというのが、国民の総意だったのだ。

それは無論、将士も同じであり、ガンディアの未来を憂うだけでなく、絶望してしまっただとしても仕方なかったことなのかもしれない。

「まあ、彼らには先見の明がなかったと言わざるを得ないな。そして、父の判断は正しかったというわけだ」

不意に、ハルベルクの声の調子が変わったことに気づいて、リノンクレアは顔を上げた。ハルベルクに目を向けると、彼は、どこか気恥ずかしそうに笑っていた。

「こうして、おまえと轡くわを並べていられるのだから」

ファリアは、シグルドたち傭兵隊とともに、ガンディア軍本隊への合流を急いでいた。

戦いが終わったのだ。

ログナー軍は撤退し、バルサー平原には、敵味方の兵士たちの亡骸が無数に横たわっていた。蔓延するのは血と死の臭いであり、嘔せ返るようなそれは、さながら地獄の如き光景を描き出しているかのようだった。

この戦で命を落とした兵士の数はどれくらいなのだろう。想像すらできない。少なくとも両軍合わせて千人はくだらないだろう。

セツナの最初の一撃で、五百人以上のログナー兵が焼き殺されたのだ。そして、それによってログナーの全軍が動揺してしまったのが、勝敗の分かれ目になったといえるだろう。もつとも、それは仕方のないことには違いない。

一瞬にして、五百人以上の兵士が焼き尽くされたのだ。恐怖を覚えてしまうのは無理もないし、ひととして当然の反応といえるだろう。しかし、指揮官までもが戦場に満ちた感情に流されてはいけなはずである。どのような状況に陥ろうとも、冷静沈着に指示を飛ばし、恐慌状態の兵士たちに叱咤激励し、戦線を立て直すのが有能な将のあるべき姿ではないのか。

とはいえ、それは有能な指揮官の話であり、無能將軍と呼ばれるものには関係のない話だったのだろうが。

「急ぐのはいいが、気をつけるよ？」

「ええ！」

背後からのシグルドの声に、ファリアは、振り返る余裕もなかった。兵士たちの亡骸を尻目に、速度を上げる。息が切れても構わない。今は、一刻も早く、彼の無事を確認しなければならなかった。

気が気ではなかった。

セツナの戦闘能力についてはなんら心配はしていない。あれほどの力を持った武装など、そうそう召喚できるものではない。それに、例えばセツナが実戦経験皆無の素人だとしても、武装召喚師である以上、ある程度の鍛錬は受けているはずなのだ。

その上、あれほどの召喚武装である。きっと、あの矛の力によつ

て、セツナの身体能力は飛躍的に向上しているに違いない。

そういった点を踏まえれば、彼の身の安全を心配する余地などないのだが。

(セツナ……無事でいて)

しかし、ファリアの胸中を埋め尽くすのはある種の不安であり、恐れであった。

戦場では、なにが起こるかわからない。

ちょっとした油断や安易な失敗が、あっさり死を招くのだ。彼がそういった失態を犯すことだつてありえなし、実際、セツナは、矛の猛火によつて敵兵を一掃した直後、放心してしまったことがある。そのときは、ファリアが敵の矢をすべて射落とすことでなんとかなったものの、次はどうなるかわからない。

だれが、あの危なっかしい少年を助けてくれるのか。

圧倒的な力を持つ、恐怖の権化の如き武装召喚師を。

(わたしが……いる)

それは傲慢な考えかもしれない。彼にとっては、不要なおせっかいなかもしれない。手助けもなにも要らないのかもしれない。

彼女だつて、そんなことはわかつている。

だが、それでも、ファリアは、あの少年を見ていると、どうしようもないくらいに放っておけない気持ちになるのだ。それがなぜかはわからない。彼女自身の使命とはまったく別のところから生じた感情に違いないのだが、どこから生まれたのか、皆目見当もつかなかった。

ともかくもファリアは、みずからの使命と正体不明の感情の向かう先が、いまのところ一致していることだけには感謝していた。

と、前方にガンディア軍の本隊が見えてきた。戦場の中央あたりだろうか。ガンディア軍の中でも精鋭と呼ぶべき屈強な兵士たちを前衛に配置した集団は、しかし、戦闘が終わつたにも拘らず、まったく動き出す気配がなかった。それは、本隊の中ほどに見えるレオンガンドも同様であり、彼の後方のアルガザード将軍も動くに動け

ないといった有様だった。

まるで、兵士ひとりひとりが、なにかを恐れているかのようにだった。

「……？」

ファリアは、本隊の動きに怪訝な表情を浮かべた。レオンガンドに尋ねようにも、近づきようがないのは明白だった。数え切れないほどの兵士が、分厚い壁となって、王を護っているのだ。それが彼らの使命なのだ。責めることはできない。

「つたく、なにやってんだあ？」

やっとファリアに追いついたシングルドが、素っ頓狂な声を上げたのは、当然だったといえるだろう。

「さあ、なんですかね？」

とは、ジン＝クレール。知性的な容貌は崩してすらいないのであるが。

「ま、動けるわけじゃないでしょ」

ルクス＝ヴェインのあっけらかんとした口調に、ファリアは彼を振り返った。尋ねる。

「どうして？」

「だって、皆さん、セツナが怖いんでしょ？」

それはそうかもしれない。戦局を変えうる力をもった人間を恐れないものなどいないだろう。圧倒的な力。殺意と敵意の塊。言うなれば脅威そのものだ。あの力を目の当たりにすれば、だれであれ、多少なりとも恐れを抱くのは当たり前なのだ。

ファリアも、恐怖を覚えたのだ。しかし、その恐怖よりも強いにかが、彼女を突き動かしている。

「あんな風に殺意を剥き出しにしてたら、だれだって動けないよね」といって彼が示した方向に目を向けたファリアは、ガンディア本隊と対峙するように突っ立つセツナの姿を発見して愕然とした。口グナー兵の死体に取り囲まれたまま黒き矛を構えるその姿は、さながら、悪鬼か死神のようですらあったのだ。

「セツナ」

「ファリアは、わき目も振らず駆け出していた。」

第三十五話 戦う理由

『あ、悪魔だ……』

気づくと、こちらを見ていたのは、恐怖に染まったまなざしだった。

セツナは当初、その視線の意味するものがなにかわからず、ただ茫然と目線を追ってみたのだ。しかし、彼が背後を振り返ったところで、敵の集団がいるわけでも、凶悪な化け物とその脅威的な姿を見せているわけでもなかった。

あきれるほどに晴れやかな青空の下、悠然と広がる平原を埋め尽くすのは無数の死体であり、それらの多くは、彼がその手にした矛の一閃、一打、一撃によって殺した敵の亡骸であった。あるものは身に纏う重装甲もろともに断ち切られ、あるものは心臓を貫かれて絶命し、あるものは首を切り飛ばされて死んでいる。

だれが見てもあざやかな手際だといえるのではないか。無論、力任せに打ち倒したものもいるにはいるが、文句の付けようもないはずだ。自画自賛などではない。こんな状況でうぬぼられるほど、セツナの心は強くもなかった。

ただ、敵を殺したただけだ。

仲間の撤退を速やかに遂行させるため、命を賭して立ちほだかった兵士たち。彼らは、絶対の死が約束されたその役目にも絶望などしていなかった。むしろ、歓喜の中へと勇躍するかの如く、手に手を取って挑んできたのだ。

そこには純然たる殺意のみが瞬き、それ以外のあらゆる感情が入り込む余地などなかったように想われた。瞬間瞬間に死んでいく。セツナの矛が黒き軌跡を描くたびに、兵士の命がひとつ、またひとつと消えていったのだ。

命の重みなど、考える余裕はなかった。

矛を振るわなければ、セツナが殺される。いや、それだけではな

い。死を覚悟したものたちには恐れるものなどはやなく、本隊へと突撃してガンディア軍に打撃を与え、あまつさえレオンガンドの首さえも狙っただろう。

だが。

『まるで死神じゃないか』

心底なにかを脅えるような声が、どこからともなく聞こえてくる。遠く離れた兵士たちの囁きなのだろうか。本来ならば聞こえるはずのないほど小さな言葉の群れ。しかしなぜか、セツナの耳に届いていた。原因はわからない。

しかし、研ぎ澄まされた無数の刃のような言葉の意味など、理解する必要もなかったのかもしれない。

『なんだよ、あれ』

卑屈な視線。

『あんなのが陛下の切り札なのか？』

悪意に満ちた声音。

『カミヤがどうか言っていたのは本当だったのか』
恐れている。

『あんな化け物がガンディアにいたのか……』
畏れている。

『怖えよ………どんだけ殺せば気が済むんだよ………あいつ』
拒絶している。

(なんで……?)

それは、彼と兵士たちの間に横たわる距離となつて現れていた。優に二十メートルはあるだろうか。先頭の邪魔にならないように間合いを取るにすれば、十分すぎるほどの距離だった。しかも、その間合いは、わずかずつではあるものの、確実に広がっているようだった。

本隊が、後退しているのだ。

(なんでだよ!)

彼は、思い切り叫びたかった。しかし、慟哭が声になることはな

く、喉から微かな空気が漏れただけだった。体力は尽き果て、立っていることがやっとの状態だった。叫ぶことすらままならない。

戦場を飛び回り、何百人という敵を殺し尽くしたのだ。疲弊しないほうがおかしいといえる。もつとも、それにしたって十分におかしいのだが。

ただの学生が、これほどまでの力を発揮するなど、あつてはならない。

（俺はただ敵を殺しただけじゃねえか！ なにもできないあんたらの代わりに、斬って斬って斬りまくって！ 殺して、殺して、殺し尽くしただけじゃないか！ そののなにがいけない！ それが間違いだっただつてのによ！）

セツナは、遠巻きにこちらを見遣る兵士たちを一瞥して、その瞬間、彼らの顔色が変わったのを認めた。通常ではありえないほどの視力が、兜の隙間の表情の変化を認識していた。目が合ったわけですらないのに、その表情は一瞬にして青ざめ、あるいは凍りついた。一言で言うなれば、それは、恐怖そのものだった。

人外の化け物と遭遇したかのような反応だった。

（俺は化け物じゃねえ……！）

セツナは、頭を振ることもできないことに気づき、失望した。血を浴びすぎた体は想うように動かず、呼吸さえも自由にならなかつた。残りわずかな体力さえも、刻々と奪われていく。

無数の視線が、こちらを注視していた。しかしそれは、セツナの様子を心配するのではなく、ただこちらの動向を伺っているようなものであり、願わくばこの場から消え去って欲しいというものであつたとしても、なんら不思議ではなかつた。

恐怖と脅威と嫌悪。

負の感情だけが渦巻いている。

セツナは、絶望するしかなかった。

これでは、なんのために戦ったのかわからなくなる。

（なんのため……？）

セツナは、ふと自問した。不意に湧き上がった疑問こそが、すべてを解決する糸口のように思えた。

賞賛が欲しかったわけではない。それは断じて違うといえる。だれかに自分の存在を認めて欲しいから、武器を手に取ったわけではない。否。

（本当にそうか？ 俺は、ただ自分を認識して欲しかっただけじゃないのか？）

寄る辺なきこの世界で、自分の存在を他人に認知してもらいたかっただけではないのか。自己の存在を主張し、だれかに助けて欲しかっただけではないのか。救いを求めてあえいでいるだけではないのか。

だからこそ、この黒き矛を手にしたのではなかったか。

わけもわからぬまま放り出された異世界で、頼りにできるものなどなにひとつなく、孤独だけが心を埋め尽くしていく。

（孤独……？ 俺が？）

セツナは、軽い眩暈を覚えた。立ちくらみとは違う。目の奥で瞬いた光は目まぐるしい螺旋を描きながら、混乱をより深めていくのだ。意識は混濁し、なにもわからなくなっていく。視界が暗くなつた。音も聞こえなくなる。

その直前、だれかの泣き声を聞いた気がする。

だれが、こんな愚かな自分のために泣いてくれるのだろう。

そんなことを想って、セツナは、苦笑するしかなかった。

漠たる闇が、意識を覆う。

「馬鹿ね、本当に馬鹿よ」

フアリア＝ベルフアリアの慈しみに満ちた声が、どこか涙ぐんで

いるように聞こえたのは、きつと聴き間違いないのだろう。彼女の細い腕が、崩れ落ちようとするセツナ「カミヤの体をタイミングよく抱きとめることができたのは、偶然にしてもできすぎだったが。

もつとも、そのまま一緒になつて死体の山の中に倒れなかったのは、彼女が日頃から鍛錬を怠らない武装召喚師であるからに他ならない。彼女の膂力は、ガンディア軍が誇る弱兵などとは比べ物にはならないはずだ。見た目にはわからないが、皮膚の下には筋肉が詰まっているに違いない。

「無茶ばかりして」

優しい彼女の口振りからして、セツナが無理をするのは日常茶飯事なのかもしれない。ファリアとセツナがどれほど長い間行動をともにしているのかはわからないし、興味もないのだが、セツナの無茶振りについては好奇心が刺激されるところではある。

「なんといいですか、身の程知らずここに極まれりって、このことつすよね」

ルクスは、後ろのふたりに話しかけながらも、そのまなざしだけはファリアに向けていた。彼女は、血みどろの少年の体を抱え、こちらに向かつてくるところだった。さすがに死体に囲まれた場所では介抱もできないと踏んだのだろう。それにはルクスとて同意ではあるが、遠目に見た限りでは、セツナ自身に目立った外傷はないようだった。もつとも、セツナは全身血まみれである。遠目には見えなくとも、近寄れば傷口の一つや二つくらい見つかるかもしれない。不意に、ルクスの後頭部に衝撃が走った。

「おまえがいうな」

団長ことシグルド「フォリアーの拳骨が飛んできたのだろう。じんじんと響く痛みは、懐かしくはあるものの、喜ばしいものではなかった。ルクスとて人の子である。痛いのは嫌いなのだ。

「彼は彼の本分を全うしただけでしょ」

というのはジン「クレール。副長である。いつものように眼鏡の

レンズでも光らせているのだろうか。なにせよ、ルクスは、彼の考えには同調できなかった。

「そうかな？　ただ武器に振り回されてただけだと想うなあ。武装のこと、まったく理解していないみたいだし。あ、でもでも、セツナの戦功にけちをつける気なんてさらさらありませんからね。そこだけは勘違いしないでくださいませ」

ルクスはおどけたように言ったものの、それは本心であった。例え召喚武装に引っ張られた結果であろうとも、初陣であれほどの戦果を上げたのだ。心から賞賛するべきであろう。だからこそ、ルクスは、ガンディアの弱兵たちを一喝したい衝動に駆られるのだ。

恐れるのではなく感謝するべきだ、と。

もつとも、一傭兵に過ぎぬ分際で、そのような差し出がましい真似をする気はない。傭兵には傭兵のやり方があり、彼らには彼らのやり方があるのだ。無駄に関係をこじらせることもないだろう。と
「だって、《蒼き風》とガンディア軍の関係が良好かといえは、必ずしもそうともいえないのが現状ではあるのだが。」

「ぼん、と頭の上に大きな掌を置いてきたシグルドに、ルクスは、どこことなく照れ臭ささえ覚えた。後ろを振り仰ぐと、シグルドは、ガンディア軍に目を向けている様子だった。いつまでたっても及び腰のまま、セツナの動向を伺う兵士たちの姿はあまりにも滑稽であり、救いがたいほどの哀れさを醸し出しているのだろう。」

シグルドの表情は、極めて厳しい。

「おまえよりもこの国の将来が心配だね、俺は」

その飄々とした言葉にどれほどの本心が混じっているのかなど、本人ならざるルクスにわかるはずもなかった。そして、それでいいと想っている。他人の心のすべてを理解できるわけもなければ、したいとも想わなかった。

第一、他人の心を覗き込むなど、悪趣味以外のなにものでもない。
(ま、それとこれとは別だけだね)

ルクスは、適当につぶやくと、視線を前方に戻した。セツナを抱えて歩くファリアの姿はどことなく眩しく感じられ、彼は目を細めた。少なくとも彼女のあり方は、遠巻きに傍観を続けるだけの兵士たちよりも遥かに素晴らしいもののように思えてならなかった。

第三十六話 王都の朝に

「えーと……」

セツナは、意識の覚醒に促されるようにして瞼を抉じ開けたとき、ファリアの安らかな寝顔が網膜に飛び込んできたことに驚きを禁じえなかったものの、精神的疲労によるものなのか、大袈裟な反応を取ることはなかった。むしろ、冷静に困惑する。

どうやらセツナは寝台の上に寝かされているようだった。いつかのことが脳裏に浮かぶ。カランでのテント生活のことである。あのときはとても質が良いとはいえないながらも、清潔感が保たれた寝具のおかげでそれなりに快適であったのだ。

そして、今回のベッドは、なにやら高級感の漂うものであり、上質なシートとスプリングの利いた寝台は、カランのものとは比べるまでも無かった。さながら高級ホテルに泊まっているかのような錯覚を抱くのは、なにも寝台や寝具だけのせいではない。

室内全体を覆う雰囲気そのものが、高級感に溢れていた。もっとも、セツナの視線は、ファリア「ベルファリア」の寝顔に注がれたままであり、室内を確認することは叶わなかったが。

彼女は、無論、セツナの隣に寝ているわけではない。角度からしてそうである。どうやら、ベッドの横に置いた椅子に座ったまま眠りに落ちたらしい。そしてベッドに突っ伏したのだろう。

優しい寝顔だった。青黒い頭髪に健康的な白さを持つ素肌、細い眉の形は綺麗に整えられている。閉じられた瞼の縁を彩る睫毛も薄くは無い。鼻筋は通り、目鼻立ちは整っているといえるだろう。眼鏡は外されていた。ふと考えると、セツナが眼鏡を外したファリアの素顔を見るのは初めてだったかもしれない。

不意に彼の胸が高鳴ったのは、彼の視線がファリアの唇を捉えたからかもしれない。一見してその柔らかさが伺える唇の女性的な形状は、セツナの意識を刺激してやまなかった。すぐさま吸い付きた

いとか、そういうことではない。単純に、色恋に関する経験の浅いセツナにとつては刺激的に過ぎたのだ。

(なにを考へてるんだ……俺は！)

煩悩が鎌首をもたげてきたのを否定することはできないものの、彼は、頭を振ることで脳内から邪念を消し去ろうとした。が、それが仇となったのか。

(おうふう)

セツナが視線を移した先にあつたのは、さらに刺激的な光景だつた。つまりは、彼女の衣服の胸元から覗く谷間である。ファリアがラフな格好をしているせいなのか、その女性的なふたつの隆起はいつにも増して強調されていた。

凝視せざるを得ない。

それは、青少年としての当然の反応だろう。

(だれに対して言い訳してんだ、俺は)

と、セツナが自嘲気味につぶやいて理性を取り戻したのは、その肉感的で悩ましげな物体を認識してから数分後のことであつた。

(しかし……)

セツナは、改めてファリアの寝姿を見つめた。あまりに無防備なその姿は、一介の青少年からすれば極めて刺激的であり、並の男ならば自制心さえも失いかねないかもしれない。谷間を凝視するだけに踏み止まることができたのは、セツナにしては上出来だつた。

嘆息する。

(なんだよ、この状況)

ため息ついでに視線を移したセツナは、そこでようやく、室内を見回すことにした。そのとき、不意に鼻腔をくすぐつた花の香りは、ファリアからのものなのかどうか。柔らかく包み込むような香りは、彼女に良く似合つてはいたが。

広い部屋だつた。そして、豪華な部屋であつた。ベッドの感触から抱いた高級ホテルという感想は、あながち的外れというわけでもないのかもしれない。

上質そうな調度品が並び、壁にかけられた絵画にも気品があった。わずかに開けられた窓から入り込む風に揺れるカーテンさえも、庶民には手の出しようがないほどのものなかもしれないという妄想が働く。床一面を銀獅子の絨毯が覆っており、セツナの寝ているベッドはその上に置かれていた。

ベッドは、部屋の片隅に位置している。窓際。微風に揺れる淡い青のカーテンが、窓の向こうに広がる空の青さを助長するようであり、さっきまでの懊悩が嘘のように消えてなくなっていった。それはまるで、遙か彼方の青空が、セツナの意気を吸い上げてしまったかのようにだった。

「ここ、どこだろ」

セツナは、茫然とした。記憶が判然としない。いや、戦いの細部まで覚えてはいるのだ。いつ戦いが始まり、どうやって終わったのか。その間の出来事も、セツナの知りうる限りのことは記憶の中にあつた。

しかし、そのあとのことがまったく思い出せなかった。

具体的に言えば、ログナー軍の殿を殲滅してからのことだが。

「ここはガンディオン。ガンディア最大の都市にして王都よ」

ファリアの台詞に、セツナははっとした。そちらを振り返ると、ファリアが、寝台のシートからみずからの顔を引き剥がすかのようにして起き上がるところだった。

「おはよう。目覚めの気分はいかが？」

ファリアの upper body を起こすなりの一言に、セツナは、即答で応じた。彼女の胸が大袈裟に揺れたのは、なんとかして黙殺する。

「おはよう。悪くはないよ。ガンディオン？」

upper body を起こす。ベッドの上と椅子の上。視線の高さはそれほど変わらないだろう。

「うん、悪くないならよろしい。そ、ガンディオン」

ファリアはにこやかな表情だった。彼女は寝起きが良いほうなのだろうか。だとしても、起きて早々、奇妙なテンションだと思わず

るを得ない。ふと、セツナにひとつの疑念が過ぎった。それは、口に出すだけでとても恐ろしいことだった。しかし、彼女の愉快な正確から考えれば、可能性のない話ではない。

「ひとつ聞いていいか？」

「なにによ？ 改まって」

不思議そうな顔をするファリアに、セツナは、おずおずと尋ねた。「もしかして、ずっと起きてたのか？」

「さっきまで寝てたわよ」

ファリアが慥然としたのは、あまりにくだらない質問だったからかもしれない。セツナは、ほっと胸を撫で下ろす傍ら、自分の愚かさを少しだけ恥じた。そんなこと、尋ねるまでもなかったのだ。

「そっか」

「なんか胸元に熱量を感じたけど、あれは夢よね」

(うつ……)

こちらの心理状態を見透かしたかのような追い討ちに、セツナは胸中でうめくしかなかった。彼女は彼女で、意味ありげな表情をするでもなく、ただことさらに不思議そうに自分の胸元を見下ろしていたのだが。

「それだけ？」

「いやいや、ガンディオンって？ バルサー要塞は？」

「要塞は奪還したじゃない。覚えてないの？」

「そうじゃなくて、放っておいていいの？」

問い返しつつも、セツナは、脳裏で首を捻った。バルサー要塞は奪還できたのか、どうか。少なくとも、ログナー軍を撤退にまで追い込んだことは確かだった。そのために数百人の兵士が殿 といふよりは、スケープゴートとでもいうべきかもしれない として戦場に残り、セツナと黒き矛によってその命を蹂躪されたのだ。

彼女の言い様から察するに、要塞は奪還したのだろう。では、ログナー軍はどこへ逃げたのだろう。要塞に逃げ込む前にガンディア軍に蹴散らされたのだろうか。

(それはない……か)

ログナーの殿を殲滅したあとのガンディアの兵士たちを思い返せば、一目瞭然である。遠巻きにこちらを見ていることしかできない連中が、撤退中とはいえ、実力で勝るログナー軍を攻め滅ぼせるとは到底思えなかった。

ならば、要塞を捨てて本国に帰ったのだろうか。理由はわからないが、それが一番しつくりくるかもしれない。

「まさか。アルガザード將軍と千五百名の兵が要塞に残ったのよ。ま、牽制よね。今回の戦いで、ログナーはかなりの痛手を負ったもの。即座に軍を再編して打って出てくる、なんてことはないでしょうし」

「ふうん。で、陛下は？ それと団長たちのことも教えてくれ」

「質問多すぎ。ま、君は寝てたから仕方ないか。陛下は、わたしたちと一緒にガンディオンに戻られたわ。まあ、そのときの歓迎っぷりたら物凄かったのよ？ セツナも起きてたら、きっと感動したわね」

「そ、そうなのか……」

セツナは、ファリアの嬉々とした様子に落胆を禁じえなかった。パレードのようなものがあつたのかもしれない。紙吹雪も舞っていただろう。歓声や嬌声が飛び交つてもいたかもしれない。道という道を、ガンディオンの人々が埋め尽くしていたのだろう。レオンガンドの優美な姿は、とてつもなく絵になつたに違いない。音楽隊の奏でる旋律が、兵士たちの心に勝利の歓喜を植えつけたのなら、それはきつと素晴らしいことだが。

脳内妄想から帰還したセツナは、目の前の女性が、結構うらやましくなつたのだった。そして、気を失つた自分がとてつもなく恨めしい。悔やんでも悔やみきれない。王都への凱旋など、そうそうあるものでもないような気がしたのだ。

「それはそうよ。ガンディアのうつけという汚名を返上した上に、バルサー要塞を取り戻したことでガンディオンの護りは磐石になっ

たもの。バルサー要塞のみならず、マルダールさえもログナーの手に落ちたとしたら、喉元に牙を突き立てられたようなものでしょ？」

「まあ、そうかな」

「ガンディオンの人々は不安が払拭されたことで、陛下を歓迎する気になったんでしょうね。だからといって、すぐさま支持が得られるわけでも、人望が集まるわけでもないけど」

「やれやれ、とでも言いたげなフェアリアの様子に、セツナは、腕を組んだ。眉根を寄せる。

「なんつーか……よくわからん」

「君には関係のない話だもの。わたしにも関係のないことだけど」

「いや、そもそも、なんで陛下はそんなに嫌われてるんだ？」

「それは……本人に聞くのが一番じゃないかしら？」

「そう言っただけで微笑するフェアリアに、セツナは、ただ茫然とした。

「えっ……？」

そして、素顔の彼女の微笑が、いつも以上に素敵だという事実に気づき、愕然とする。気づくのが遅すぎたのだとすれば、それは、セツナが話に夢中だったからに他ならない。知りたいこと、知るべきことがあるれば、そちらに意識が集中するのは当然だろう。

その集中力が常に発揮されるわけでもないのが、悲しいところだが。

「陛下がご自身の置かれている状況を一番理解しているでしょうし、ね。陛下も君に会いたがっていたもの」

「俺なんか王様と会うなんて、簡単にできるものかよ」

とはいったものの、セツナは、つい最近まで平然と王様と会話していたことを思い出していた。しかし、あれはたまたま偶然街中で出逢ったからであり、普通ならば考えられないことだった。事実、マルダールから戦場へと出発してから、一言たりとも言葉を交わす機会などなかった。

それが普通なのだ。

「ま、それもそうね。でも、機会はすぐに訪れそうだけど」

「……？」

意味ありげに笑うファリアに、セツナは怪訝な表情を返すのみだった。

こちらの反応を知ってか知らずか、ファリアは、淡々と続けてきた。

「《蒼き風》の人たちは、しばらくバルサー要塞に留まるって言うてたわね。契約の延長がどうか」

「そうなのか……」

「あら、気に入ったの？ あの人たち」

「そりゃあ、一緒に戦った仲間だし……」

肩を落とすセツナの脳裏に浮かんだのは、豪快に笑うシグルド。フォリアアの野生的な面構えであり、ジン・クレールの理知的な横顔、ルクス・ヴェインの剣鬼としての姿であった。彼らは強く、そして、どこことなく朗らかだった。とても歴戦の猛者には見えない。いや、シグルドは見た目からして豪傑そのものだったか。

「仲間……ね」

ファリアの憂いを帯びた一言に、セツナはきよとんとした。

「なに？」

「彼らは傭兵よ？」

「それは知ってる」

当たり前のことを言われて、セツナは慥然とした。そんなことは言われなくてもわかっていることだ。だが、だからなんだというのだろうか。

「つまり、君の敵になる可能性も十分にあるってことよ。仲良くないすぎると、後々辛いわよ」

冷やかな声音だった。しかし、こちらのことを心配しての忠告だということ、そのまなざしから痛いほどわかった。だからこそ、セツナは、不意に彼女が椅子から立ち上がったことに驚いたのだ。

「先生、呼んでくるわ。君の意識が戻ったら呼ぶように言われているのよ」

そう言って部屋を後にしようとするファリアの背中が、なぜかとてもなく寂しげに見えた。

セツナは、いますぐベッドから飛び降りて、彼女を抱きしめてやりたくなった。しかし、それをすれば、なにもかもすべてが崩れ落ちてしまうような気もした。だから、口を開いたのだ。

「ファリアも？」

「ん？」

こちらを振り返ったファリアの横顔が、息を飲むほど美しかった。声が詰まる。言うべき言葉を一瞬見失って、セツナは狼狽した。彼女が再び歩き出すとするのを見て、彼は慌てて言葉を捜した。空中ではらばらになった言葉を元に戻すのは、思った以上に難解だった。

空気を求めて、喘ぐ。

微風に揺れるカーテンの音だけが、その間を埋めた。

「ファリアもいつか、俺の敵になったりするのかな？」

セツナの問いが空中に浮かび、静かな波紋となって広がっていく。今尋ねるようなことではなかったのかもしれない。しかし、それ以外の言葉でファリアの意識に触れることなどできないような気がした。

いや、そもそも彼女の意識に触れようなどと考えるのがおこがましいのだ。だが、それでも、セツナは問いかけずにはいられなかったのだ。

もはや衝動に過ぎない。

そして。

「……なに言ってるの？ セツナって、馬鹿？ ひよっとして馬鹿？」

ファリアが、あきれたような半眼をこちらに注いできたことに、セツナは、歓喜さえ覚えたのだった。自嘲とともに、告げる。

「ひよっとしなくても馬鹿だよ、俺は」

第三十七話 残り火も消えて

ガンディオン。

ガンディア王国最大の都市であり、王の住む都である。

超然と聳える獅子王宮を中心として築き上げられた大都市は、同心円を描く城壁によって、三つの区画に分かたれていることで知られている。

ひとつは、単純に《王宮》と呼ばれる区画である。獯猛な獣のような荒々しさと硝子細工のような繊細さを併せ持つという白亜の宮殿と、その周囲を覆う《王家の森》を含めて、そう呼ばれているらしい。そこには王家とそれに連なるもの、つまりは王侯貴族のみが生活することを許されており、森の外周に聳え立つ堅固な城壁と、厳重な警備は、ねずみ一匹の侵入すら見逃さないとされている。

もっとも、《王家の森》にはさまざまな動植物が生息しているため、《王宮》にねずみ一匹くらい増えようがなにも変わりはないだろうとも言われているが。

つぎに、《王宮》の外周を囲う城壁の向こう側にあるのは、《群臣街》と一般に呼ばれる区画である。將軍や大臣、騎士や兵士、《王宮》の厨房を預かる料理人などなど、王家に仕える人々が住居を構える区画だ。高官ほど《王宮》に近い敷地を与えられるため、住所である程度の地位がわかってしまうという。

もっとも、地位が高いからといって豪華な屋敷を構えるものはなぜか少なく、むしろ奇異な家を建ててはそれを自慢しあうというのが一部高官たちの間で流行っていたらしい。そのせいか、《群臣街》の《王宮》側には奇抜な屋敷が乱立しており、一種の観光名所として知られているほどだった。

そのつぎ、《群臣街》の周縁を走る城壁の反対側には、それこそガンディア最大の都市の面目躍如たる活気に満ちた町並みであり、二十万とも言われる人口の大半が暮らしているといっても過言では

ない都市の姿であった。

その区画は、単に《市街》と呼ばれている。ガンディオン市民の暮らす街、である。広すぎる区画は、さらに八つに区分けされており、それぞれガンディア王国の黎明期に活躍した八騎士の名を付けられている。クレード、ベルム、ワナルウ、ノア、マルス、ジীগ、ミレイナ、イルファリス　偉大なる騎士の名を冠した八つの地区は、それら黎明の騎士の石像を地区の中心に抱いているのだとか。

ともかくも想像を遙かに凌駕する大都市であった。

その大都市を、もの凄まじいまでの活気と熱気が包み込んでいた。

（お祭り騒ぎだな……）

セツナは、なにやら楽しそうに通りを行き交う人々を遠目に見遣っていた。中世ヨーロッパ的といっているのか、どうか。舗装された道路。立ち並ぶ無数の家屋、商店。雑貨屋もあれば、衣類を扱う店もある。当然のように書店もあり、武器や防具を商う店も見受けられた。

それは、マルダールでも見たような光景かもしれない。しかし、印象がまるで異なるのは、何故だろう。

（ひとが多いからかな？）

それとも、セツナの心理状態が良いからかもしれない。マルダールでは、戦前ということもあり、浮き足立っていたのだ。落ち着いて街を観察している場合ではなかった。

手にした地図に視線を落とす。ファリアから与えられたものだ。

地図さえあれば迷子にはならないだろう、というのが、彼女の言葉だったが。

（うーむ……）

セツナは、地図とにらみ合ったまま、小さくうめいた。紙面には、三重の同心円が描かれており、その中心が王都の真ん中であり、獅子王宮だということはセツナにも理解できた。その《王宮》から放射線状に伸びたいくつもの大通りが《群臣街》を抜けて《市街》に至ると、無数に枝分かれした。無数の路が幾重にも交錯し、地図の

上に複雑怪奇な迷宮を誕生させていた。

まったく、わけがわからない。

宿の場所だけは把握している。それは、ファリアが宿から出発するときに地図に印を入れてくれたからに他ならない。

「どうしたの？」

「い、いや、別に……」

セツナは、不思議そうにこちらの顔を覗きこんできたファリアに向かつて曖昧な笑みを返すと、透かさず地図を畳んでズボンのポケットに入れた。街を把握するために地図と睨んでいるうちに混乱しかけたなど、そんな恥ずかしいこと、言えるはずもなかった。

「そう。それならいいけど。でもやっぱり、いくら先生が大丈夫だっていつても、いまはまだ安静にしておくほうがいいと思うわ」

ファリアの心配も、もつともだとは思うのだ。しかし、セツナは、彼女のエメラルドグリーン瞳をレンズ越しに見つめながら、別のことと言った。

「あの先生、この街じゃあ名の知れたひとなんだから。だったらいいじゃん。お墨付きだぜ？」

それは今朝方、ファリアが連れてきた医者の話である。朴訥として高潔そうな老人だった。その手際も素人から見ても素晴らしいものがあつた。なにひとつ無駄がなかったのだ。診察はすぐに終わり、肉体的には問題がないと判断された。その折に外出の許可も得ていた。

その診察結果を聞いてなにより安堵したのは、セツナ自身だったということは言うまでもない。目覚めた当初から体調に異変は感じなかったものの、多少の不安はあつたのだ。それはそうだろう。あれだけ戦つたのだ。体が変調をきたさないほうがおかしいといえるが、どうやらそれは、セツナが寝ている間に起き、そして目覚める頃には静まっていたらしい。セツナの回復が早いのか、症状が軽かったのか。

「そうは言っても、ずっと寝てたのよ？ 君」

「だから大丈夫なんだろう？　そんだけ寝たから、体力も回復したんだよ」

「そうかしら。とてもそうは思えないわ」
フアリアの心配そうなまなざしをいつまでも見つめていられるほど、自分の体調に自信があるわけもなく、セツナは、天を仰いだ。突き抜けるような蒼さは、見ているものの意識を吸い上げていくようですらある。

茫然と、つぶやく。

「なんでそんなに心配するかな……」

セツナがふと漏らした言葉は、かねてからの疑問でもあった。フアリアには役職上の義務や使命感があるのだろう。しかしそれにしても、ここまで親身になってくれる必然はないはずなのだ。正体もわからない武装召喚師如きに、これほどまでに労力を払う必要はない。

ありえないことだが　セツナが逆の立場ならば、きっと冷ややかに対応するはずだ。

だが、セツナがフアリアの反応が遅いことに気づいて目を向けると、彼女は、きよとんとしていた。そして、当然のように言ってきたのだ。

「わたしが心配しなきゃ、だれが君を心配するのよ？」

「！？」

セツナは、絶句した。

それは確かにその通りだった。真理であるとさえ考えた。それ以外に最適な答えなど見つからないくらいに完全なもの。

寄る辺さえ存在しないこの世界で、彼女以外のだれが、セツナという矮小な存在を心配してくれるというのだろう。だれが、ここまです親切にしてくれるというのだろう。寝る間も惜しんで付きっ切りで看病してくれるというのだろう。

フアリア以外のだれが。

(だれが……！)

セツナは、叫びだしたいくらいだった。この世で、これほどの感動を覚えたことがあっただろうか。生まれてこの方、これ以上の喜びを覚えたことがあっただろうか。これほどまでにだれかに感謝したことはあっただろうか。

それほどまでの衝撃と興奮が、セツナの全身を駆け巡り、脳細胞を震わせ、心を揺り動かしていた。

戦場で聞きたいいくつもの声が、耳朶にこびりついた数多の叫びが、脳裏に刻まれた無数の言霊が、あざやかなまでに消えていく。肉体から遊離し、風に流されて消えていく。

悪魔、死神、悪鬼、化け物 幾多の悪意や敵意を孕んだ言葉が、セツナの意識の外へと流出していく。

(なんだよ……これ……！)

セツナは、突如として視界が揺れたことに驚いて、ファリアから顔を背けようとした。しかし、体は言うことを聞かなかった。涙が流れた。

「どうしたのセツナ？」

ファリアが驚くのは理解できたが、セツナにはどうすることもできなかった。涙は止まらない。

そして、脳裏を席卷するのは戦場の景色。

何千という敵兵の眼前で、矛を振るう。漆黑にして異形の矛は、紅蓮の猛火を解き放つ。目の前に地獄が生まれた。何百という人間の命が、業火の中で燃え尽きた。立った一振り。そこに迷いも躊躇いもなければ、思想も主張もない。ただ、武器を召喚し、意志の命ずるままに振るっただけだ。そこに正義も邪悪もない。あるのは強きものは生き、弱きものは死ぬという絶対的な摂理のみだった。そう、彼らは弱いから死んだ。みずから弱者であるという事実に思い至ることさえなく、炎と消えた。

覚悟はしていただろう。戦争に出るとは、そういうことであるはずだ。命を賭しているのだ。眼前の死を恐れ、それでも前へ進んでいくために、武器を手を取ったはずなのだ。でなければ、戦場に立

つべきではない。

炎が消え去れば、残るのは焼け野原であり、地獄の如き光景だった。死屍累々。それらの中で、どれほどのものが、みずからの死を理解していたのか。殺意も敵意もなく、見境さえもない猛火に抱かれて、どれだけの兵士が、己の死を見つめることができたのか。

だれひとりとして、黒き矛を脅威と見ていなかった。召喚武装だと認識してはいたものの、多勢に無勢。数を頼みに、油断していたのかもしれない。

そして、その油断が間違いだったと思い知らされることもなく、彼らは死んだ。造作もなく。虫けらのように。

戦場は激変した。自軍の優勢。勝利が近づく。敵の動きに変化があった。王の元へ、飛ぶ。敵との遭遇。倒し損ねる。敵軍の撤退。殿として残った兵士たちこそ、強敵。死兵と化したものたちに油断も余裕もあるはずがない。だれもが、死を覚悟していた。どうせ死ぬならば華々しく、あるいは潔く、美しく。

死を抱いたものたちの攻勢は凄まじい。容赦なく殺到する刃の群れと戯れる。一閃、また一閃と矛を振るうたびに命が散った。そして、命が真紅の花となって咲くたびに、矛先は鋭く冴え渡った。断ち切り、突き通し、叩き潰し、斬り刻む。矛は踊る。さながら死の舞踏。あるいは殺戮演舞。一撃一打が鎧を砕き、兜を割った。肉を引き裂き、骨を砕いた。血が雨のように降り注ぎ、真っ赤な花が咲き乱れた。

それでも、息ひとつ乱れない。

もはや敵は残りわずか。だからといって遊びはしない。ただ、あるがままに矛を振るう。

「うあああああああああああああああああああ！」

セツナは、すべての想いを吐き出すように絶叫した。脳裏を目まぐるしく旋回するのは戦場の光景。戦争の景色。戦いの色彩。

赤く、紅く、朱く、緋く。

紅蓮と燃え、鮮血と舞う。

無数の命。

咲いては散った。

「セツナ……？」

セツナは、いつの間にかファリアの肩を抱きしめていたことに気づいたが、もはやどうしようもなかった。涙がとめどなく流れていた。

生きている。

その事実が嬉しかった。

第三十八話 君の名

「ログナーが敗れ、バルサー要塞が陥落したというのは真か？」

ミレルバス「ライバーンは、冷ややかに眼前の男を見据えた。ログナーからの報告を疑うわけではない。ただ、どうしても信頼の置けるものに確認しておきたかったのだ。」

ミレルバス「ライバーン。決して若くはない。壮齡といつても過言ではないだろう。しかし、白髪ひとつ見当たらない黒髪には艶さえ見出せるほどであり、全体として肌の血色も良かった。長い眉と鋭めしい双眸、そしてどことなく沈痛そうな表情が、近寄りがたいという彼の第一印象を決定付けているに違いない。長身であり、ゆったりとした衣服の上からは鍛え上げられた肉体の様子は窺い知ることができない。」

ミレルバスが立っているのは、彼の広い執務室の中だった。内装が全体的に古めかしいのは、彼の趣味ではなく前任者の嗜好の問題だった。ミレルバスが執務室の内装を変えようと思わないのは、そんなことに貴重な時間と労力を割くのはくだらないという、彼個人の見解からだ。

開け放たれた窓から入り込む日差しが室内に明るさをもたらしてはいるものの、どことなく空気が重いのは、情報が情報だからだろう。彼の元にもたらされたその報告が確かならば、ザルワーンを取り巻く状況に大きな変化が訪れるかもしれない。

「ヒースからの報告です。間違いありません。」

と返答をしたのは、ミレルバスと対峙する男だった。腰あたりまで伸ばした髪はやや赤みがかっており、肌は病的なまでに白い。典型的な才子とでも言うべきか。鼻筋の通った秀麗な顔立ちをしていた。切れ長の目には褐色の光彩が浮かんでいる。華奢である。年のころは、どう高く見ても三十代半ばなのだが、実際は四十代も後半であり、ミレルバスとさほど変わらなかった。

「詳細な報告によると、ジオ＝ギルバースを大将とする六千強の軍勢が、レオンガンド王率いるガンディア軍約五千と、バルサー平原にて激突。開戦早々、ログナー軍は右翼に甚大な被害を蒙り、戦線は崩壊。ログナー側は持ち直すこともなく撤退を余儀なくされ、その上、バルサー要塞さえも手離す結果となったようですね」

男の声は低く、それでいて涼やかな響きがあった。透明感のある声音とでも言えはいいのだろうか。ミレルバスは、その心地よい声音は嫌いではなく、むしろ毎日のように書物の朗読でもさせたいくらいだった。もちろん、そんなことで彼の時間を無駄に費やすのは、宝の持ち腐れに違いない。

ミレルバスが、ガンディアの中心人物であったその男を登用するに至ったのは、声の響きを気に入ったからではないのだ。

彼の実力を買ったに過ぎない。

男の名は、ナーレス＝ラグナホルン。五年前、仕えていたガンディアの未来に絶望した彼は、紆余曲折を経てザルワーンに辿り着くと、当時、一介の武装召喚師ほどの権力しかなかったミレルバスと出逢ったのだ。ミレルバスが彼をみずからの軍師として登用することになった直接のきっかけは、ナーレスとその従者が、身を挺してミレルバスの命を護ったからである。

「解せん。なぜ、ジオ＝ギルバースなどという能無しが指揮を任されたのだ？」

ミレルバスは、単純な疑問を口にした。ジオ＝ギルバースといえば、数年前に鳴り物入りで將軍となった人物であり、かつ、将来を囑望された人材だった。人材不足を嘆いて久しいログナーにとって、当時既に人気の高かったアスタル＝ラナデースとともに、軍の二本の柱として成長することを期待していたはずである。

だが、現実には、ジオ＝ギルバースを奈落の底に叩き落した。連戦連敗。無能將軍の烙印は、彼から人望と名声と希望に満ちた未来を奪うには十分だったろう。もっとも、本人の能力と分不相応な地位が招いた結果なのだとしたら、彼が將軍となるべきだと判断した軍

の上層部に、見る眼が無かったと結論付けるのが妥当なのかもしれない。

「そもそも、対ガンディアに関してはアスタル＝ラナディースに任ずるよう伝えただけではないのか？」

ミレルバスは、眉を顰めた。

アスタル＝ラナディースは、飛翔將軍の二つ名の通り、自由自在に戦場を駆け巡り、数多の戦功を積み重ねてきたという、真に実力のあるログナーでも指折りの将である。年齢的にはまだまだ若いのだが、その采配には老練の将を想起させるものがあるのだといわれている。

青き魔剣と赤き鉄壁を備え、あらゆる外敵を駆逐する彼女をログナーの軍神と呼ぶものさえいるという。

アスタル＝ラナディースならば、バルサー要塞を奪還されるといふ失態を犯すことはなかったのではないか。もちろん、物事において絶対ということはないのだが、なんにしても、ジオ＝ギルバース如きに任せるよりは良かったはずだ。

「キリル王がこちらの言に耳を貸さなかったのでしょうか。あの方も、人並みならぬ気概の持ち主と聞いております」

「その結果がジオ＝ギルバースの戦線復帰とはな。あまつさえガンディアに打ち込んだ楔さえも失うとは。……愚物もそこまで極まればといっそ清清しいものだな」

ミレルバスは、キリル・レイ＝ログナーの血色の悪い、常に熱に浮かされているかのような顔を思い出して、苦虫を噛み潰したような顔になった。一国の王でありながら、ザルワーンの大規模な侵攻を目前に腰を抜かしたという話は有名であろう。その後、あらゆる外交手段を用いて、当時のザルワーン首脳にログナー侵攻を思い止まらせたものの、結果として、ログナーはザルワーンの属国となったのだ。ザルワーンの軍勢に国土を荒らされるよりはまし、というのがログナー側の言い分だろう。

以来、キリル・レイ＝ログナーに関しては、悪評しかミレルバス

の耳には届いておらず、故に悪感情を抱くしかないのだ。稀代の愚物。それがミレルバスのキリル評であり、その評価が覆るようなことはありえないことのように思えた。

ミレルバスは、頭を振った。

「……しかし、それもこれも、我が国の現状のせいなのだろうな」

「その通りです。この状況を打開しない限り、ログナーは愚か、ガンディアに手を出す余裕は持てないでしょうね」

ナーレスの冷ややかな、それでいて美しい声に耳を傾けながら、ミレルバスは、ふと彼の故郷のことを想った。

ガンディア。先王シウスクラウドの時代こそ小国ながらも栄華を誇りえたその国は、ひとりの英雄が病の床に伏せたことにより、急速にその輝きを失っていった。ナーレスⅡラグナホルン、クリストクⅡスレイクス、バランⅡディアラン　王の威光に惹かれ集ったはずの将士たちが、相次いでガンディアから離れていったのだ。

その理由のひとつにして最大のものが、王位継承者たるレオンガンドの存在だったのだろう。

ひとは、彼のことをガンディアの？うつけ？と呼んだ。

彼が王となることを望まず、むしろ王女リノンクレアこそが王位を継ぐべきだと主張したもののたちも数多くいたといわれている。国内を遊び回る王子よりも、若干十三歳で戦場に立った王女こそが、ガンディアを率いるに相応しい。

確かに、それは一理あるのかもしれない。

しかし、シウスクラウドの意志は固かった。その事実には失望した、というのが、ナーレスがガンディアを辞した理由だと、ミレルバスは聞いていた。心の底から尊敬し、信仰していたはずの英雄王の衰えに絶望したのだと。

「……おまえはどう見る？」

「初陣を勝利で飾ったところで、レオンガンドが？うつけ？であることは疑いようの無い事実です。彼を補佐する将や、兵が優秀だっただけでしょう。それにログナーの無能將軍にこそ、ガンディアの

勝因があります。銀の獅子が眠りから目覚めた、などということはありません」

口早にまくし立てるように言ってきたナーレスに、ミレルバスは、心地よいほどの満足感を得ていた。彼が、あの一言でこちらの聞きたいことを把握し、即座に返答してきたのもそうだが、ナーレスのいつもと変わらぬ反応が面白かったのだ。

どのような状況になろうとも眉ひとつ動かさない歴戦の軍師といえど、故郷たるガンディアのこととなると感情的にならざるを得ないのだろう。特に、彼が国を去る原因とも言うべきレオンガンドに関する話題ならば猶更。

「ならば、我らは我らのすべきことをしよう」

ミレルバスは、笑みを消した。それこそが大変なのだ。この半年で荒れに荒れた国土に、厳然たる安定をもたらさなければならぬ。これまでの仮初の平穏ではなく、絶対的で疑いようのない安寧を導くのだ。

ログナーもガンディアも、それからでも遅くはないはずなのだ。

漆黒。

それはさながら貪欲な悪魔のように。

暗黒。

それはまるで獰猛な戦鬼の如く。

死神、悪魔、化け物　戦場を数多の屍で埋め尽くし、幾多の血潮で塗り潰す。

研ぎ澄まされた刃のような敵意と、触れただけで気が狂いそうなまでの殺意　その奔流そのものだった。

黒き矛を携えた魔物。

少年の姿をした化生。

それが大地を蹴るたびに、死は宣告された。それが空中に躍るたびに、命は散った。それが黒き矛を振るうたびに、鎧は紙切れ同然となった。肉体は肉塊となった。鮮血が天地を彩り、戦場を赤黒く染め上げていった。

死が呼んでいる。

次はおまえの番だと。

死が叫んでいる。

次はおまえなのだ。

おまえの命を捧げるのだと。

「ウェイン・ベルセイーン!! テウロス!!」

彼の意識に触れたのは、怒声だった。女の声。少なくとも、彼の恐れた存在の発しうる声ではないように想われた。第一、かの死神は男だった。信じられないことではあるのだが、人間の男に違いなかった。

(なんだ……夢か)

多少の安堵とともに、夢の淵に舞い戻ろうとする。しかし。

「さつさと起きなさい! ウェイン・ベルセイーン!! テウロス!!」

再びの大声は、彼の眠りを妨げ、急速な覚醒を促していった。深い眠りに沈んでいた意識は、悪夢のかけらさえも忘却の彼方に追いやりながら、現実へと浮上していく。しかし、目覚めの瞬間の心地よさを満喫することもできず、ウェインは、ゆっくりと瞼を開いた。狭い部屋だった。真四角の空間には、調度品の類も必要最低限のものしか置かれていない。部屋にひとつしかない窓にはカーテンさえかかっていないが、別に必要はないだろう。外から覗かれても困るようなこともない。寝台は窓際に置かれており、彼は、朝日が差し込まないことだけには感謝していた。

その狭苦しい空間が、いまの彼の立場を表していた。

ウェインは、上体を起こすと、ドア付近から注がれるきつい視線

を認識しながらもゆっくりと伸びをした。寝起きである。思考は判然としないし、あくびが漏れるのも仕方がないだろう。

「……あなたは、自分の置かれている状況というものがわかってい
るのかしら？」

「そりやあもう、毎晩ぐっすり眠れるくらいには」

軽口を叩きながら、彼は、女を一瞥した。閉じた扉の前に立ち、あきれたような表情でこちらを見ているのは、見るからに凜々しい女だった。エレニアⅡデيفون。ログナーの騎士のひとりであり、ウェインの同僚である。付き合いも長く、気の置けない間柄といって良いだろう。

ウェーブのかかった栗色の髪を後ろで結わえており、きりっとした容貌は、騎士然としているといっても過言ではないだろう。その容姿から、異性に持てるのは当然として、同性からの人気もまた凄まじいのだ。深い緑を基調とした制服を身に纏っている。

「……いいわ。さっさと着替えなさい。アスタル將軍を待たせたくはないでしょう？」

「將軍が？」

ウェインは、素直に驚いた。ウェインたちへの処分など、ほかのものに通達させれば良いのではないか。わざわざ將軍の手を煩わせる必要はないだろう。特にログナーの現状を考えれば、アスタルⅡラナデイスという稀代の人物から、わずかな時間さえも掠め取りたくはなかった。その時間をログナーのために費やしてもらいたいのだ。

もつとも、既に決まってしまったことにどうこういったところで、覆せるはずもないし、そんなことを言っている時間こそが無駄になる。

「グラード殿とあなたの処分を決めたのは、ほかでもないアスタル將軍ですもの。直接伝えたいのでしょうか」

「……いじめたいだけじゃないかな」

「いじめられたいくせに」

エレニアの一言がウェインの耳朶に深々と突き刺さったのは、凶星だからなのかどうか。本人としてはそんな趣味はまったくくないといえるのだが、しかし、アスタル將軍にならなぶられるのも案外悪くないとも思えるのだ。もっともそんなことを口にすれば、変態の烙印を押されるのは目に見えている。

ウェインは、静かに寝間着を脱ぎ始めた。

「……さて、着替えようかな」

「ログナーは大敗を喫し、ガンディアはバルサー要塞を奪還……かあ」

クオンは、多少の感慨を込めて、その要塞の名を口にした。すべての始まりのあの日、彼が偶然足を踏み入れた戦場こそが半年前のバルサー要塞であり、クオンがひよんなきっかけてログナー軍に加勢したことで、勝敗が決したのだ。そのときは、ログナー軍の圧勝に終わり、ガンディア軍はバルサー要塞を手離さざるを得なくなつた。

「ま、それもこれもログナーという国のおかしさですな」

小さなテーブルを挟んで対座するスウィール「ラナガウデイの声音は、何事かと思えるほどに柔らかかった。質実剛健という言葉が似合うその厳めしい容姿からは及びもつかないだろうが、それが彼の彼たる所以とも言えた。一言で言えば好々爺であろう。人当たりが良く、だれに対しても温和に接するスウィールの人柄は、傭兵団《白き盾》の交渉役として打ってつけであった。

「そうだね」

半年前、ガンディアの当時の王の死に乗じてバルサー要塞を陥落させたログナーは、その勢いのままにガンディア本土へ攻め込むか

と想われたのだ。しかし、ログナーは長年の望みであったバルサー要塞奪取を果たすと、それに満足したかのように沈黙してしまった。その間、ガンディアが行動を起こさないはずがないのだ。新王レオンガンドの下、新たな体制で動き出したという話も、クオンの耳に届いていた。ログナーが知らないはずもないし、当然、予想する範囲の出来事だ。

そして、ガンディアがバルサー要塞を取り戻そうとするのも。

「無能將軍に要塞を任せた時点でガンディアへの侵攻など諦めたと見るべきだったのでしょうか？」

「どうだろう？ 彼らはジオ將軍にまだ期待していたのかもしれないし、優秀な人間が補佐すれば、なんとかなると踏んだのかもしれない」

だとしても、それはあまりにも希望的観測に過ぎる判断には違いなかった。無能將軍と陰口を叩かれるだけの人物に、どれほどの期待を寄せることができるのだろうか。無能將軍などと呼ばれるにはそれなりの理由があるのだ。彼の無能將軍という不名誉な二つ名が、ログナー国外に広く浸透していることからよくわかるだろう。

「ですが、結果は……」

「そうだね。結果がすべてということに異論はないよ。ログナーは判断を誤り、ガンディアは最善の手を打った。それだけのことなんだよ」

そう言って、クオンは、室内を見回した。慎ましやかな昼食の後のだらけきった空気が、広い室内を支配している。だれもが食後の幸福感に身も心も任せている、そんな感じだった。

部屋の中央に配置された食卓を囲むのは、ウォルド、イリス、マナといった《白き盾》の中心メンバーであり、幹部などとも言われるクオンの仲間たちだ。

その彼らが満腹感に浸って動けないのも、致し方のないことだろう。ここ数日、休む暇もなかったのだ。肉体的にも精神的にも疲れきっていても不思議ではなかった。

皇魔おうまの巢を調査し、巢を消滅させるには、並大抵の労力では足りない。第一、皇魔の巢の位置を特定するだけで時間がかかるのだ。皇魔は大抵人気のない場所に巢を作り、そこで繁殖しているのだが、人気のない場所などいくらでもあるのが現状である。人里を少し離れば、それだけで皇魔が巢を作る条件を満たしうるのだ。

巢を探し出すことができたとしても、次は皇魔の集団との戦闘が待っている。皇魔が巢を護るのは当然であり、戦闘が熾烈を極めるのもまた、当然の成り行きであろう。もっとも、戦闘に関しては心配する必要はない。

クオンには信頼できる仲間がおり、なにより、クオンの力があれば皇魔といえど恐れるものではなかった。しかし、クオンにとつては恐怖の対象にならなくとも、街や村で暮らす力なき人々からすれば、大いなる脅威に違いなく、故にこそ、クオンは皇魔の巢を根絶すべく戦うのだが。

ちなみに、クオンとスウィールが部屋の片隅に置かれたテーブルを挟んで対座しているのは、いち早く食事を終えたからである。

クオンは、スウィールの口から話を聞くのが好きだった。

「ところで、お聞きになられましたかな？ ガンディアの武装召喚師の噂」

スウィールが神妙な顔つきになった理由は、クオンにはわからなかった。しかし、改められた彼の態度に、多少の緊張を禁じえないもつとも、武装召喚師の噂など、聞いたこともなかったが。

「ガンディアの武装召喚師……？ 知らないな」

「どうもガンディア国内では、ひとりの武装召喚師が先の戦いの勝敗を決したのだという話で持ちきりだそうでした」

「たったひとりの武装召喚師が戦局を決定付ける……それって、まるで半年前のクオン様のようにですね」

と、微笑を浮かべてきたのはマナだった。いつの間にか食卓を離れていた彼女は、クオンたちのテーブルにティーセットを運んできてくれたのだ。クオンは彼女の微笑みに笑顔で答えると、スウィー

ルに視線を戻した。カップに注がれた紅茶から立ち上る湯気が、芳しい香りを鼻腔に運んでくれる。

「気になりますかな？」

「ちよつと、気になるかな」

とクオンは言ったものの、それはスウィールの勿体ぶつた言い方が気になったというのが本音だった。彼がそういう言い方をするかには、なにか意味があるのだろう。という程度の考えだった。武装召喚師など掃いて捨てるほどいるのだ。もちろん、強大な力を誇るものほどその数は少なく、ガンディアといった弱小国が雇えるものでもない。が、物事には例外がつきものであり、クオンの存在自体が例外そのものといえた。

「武装召喚師の名は、セツナ「カミヤ」」

その名を聞いて、クオンの意識が飛びかけのは仕方のないことだった。まさか、ここで彼の名を耳にするなどは到底考えられないことだったし、なにより、彼が武装召喚師として戦っていることに大きな衝撃を覚えたのだ。

いや、彼がこの世界にいるということはわかっていたのだ。確証もないのにわかっているというのも変な話ではあるのだが、しかし、クオンは確信を抱いていたのだ。セツナがこのイルス「ヴァレ」のどこかにいるのだと。

それは妄想かもしれない。

ただの思い込みだというべきなのだろう。

だが、クオンはあのとき、確かに聞いたのだ。

(やっぱり君の聲こえだったんだね、セツナ)

それは胸に迫るような慟哭であり、絶望的なまでの咆哮だった。セツナの魂の叫び。

思い出すだけで、クオンの心は哀しみで満たされ、次の瞬間には慈しみが溢れた。それは涙となって両目から零れ落ち、頬を伝っていく。スウィールやマナが驚くのも無理はない。だが、クオン自身には涙を止めることができなかった。

見知らぬ世界にただひとりで放り出されておよそ半年、これほどまでに嬉しい出来事はなかったのではないのか。無論、スウィールを始め、《白き盾》の仲間たちとの出逢いは特別なものであり、比べようもない。

だとしても、クオンは、セツナのことを思わずにはいらなかったのだった。

第三十九話 流れ、緩やかに

快晴の空の下、王都の《市街》がことさらに賑わっているのは、レオンガンド・レイ「ガンディアが初陣を疑いようのない完全な勝利で飾り、市民にとって懸念材料であったバルサー要塞を無事に取り戻すことに成功したからに他ならないのだという。

それは、ガンディアの現王が以前から流布されていたような？うつけ？ではなかったという事実であり、その圧倒的な現実とともに王都を凱旋したレオンガンドの姿に、市民のほとんどが自分の考えが間違いだっただのかもしれないからでもある。

白銀の獅子の甲冑を纏い、王都を巡るその雄姿は、？うつけ？などと呼ばれるべき暗愚な王の姿などではなく、むしろ英傑の誉れ高い先王シウスクラウドの再来というものもいたほどだった。

王都市民、いや、ガンディア国民にとってこれほどまでに喜ばしい事態はないのだろう。絶望は歓喜へと変わり、歓喜は瞬く間に王都中に広がっていった。

「以来、ずっとお祭り騒ぎなのよ」

「へえ」

「あら？ あんまり興味なかった？」

「いや、なんつーか、随分と都合のいい話だなーって想ってさ」

セツナは、ファリアに返答すると、通りを行く人々の能天気そうな様子に慥然とした。

王都ガンディオンの《市街》マルス区の真ん中を走る大通りは、呆れるほどの人出でこった返していた。人目を惹くのは通りの両脇に立ち並ぶ商店だけではない。様々な屋台や露店が所狭しとその即席の店舗を展開しており、様々な格好の店員たちが大声を上げて客寄せをしていた。

まさにお祭りそのものだった。

ある子供は屋台でお菓子を買い、あるカップルは露店を冷やかす

ように巡り、ある家族はひとの多さに辟易している。そんな光景は、セツナの故郷でも年に一度は見る事ができた。夏の花火大会のときだけは、彼の生まれ育った街にも数え切れないほどのひとが集まったのだ。

その夏の夜の景色が既に懐かしいものになりつつある事実にも多少の驚きを覚えながら、セツナは、この通りを埋め尽くす人々の多くが、レオンガンドの王位継承に絶望していたということを考えていた。

うつけ、と呼ばれていたのだという。暗愚な王子として人々から忌避されていたのだと。しかし一方で、ファリアはレオンガンドが王位を継承する以前から知っており、聡明な人物だと認識していたともいう。無論、この場合信頼に値するのは直接逢ったことのあるファリアの言葉なのだろうが、真実と事実は必ずしも一致しないのだ。ガンディア全土に広く流布された？うつけ？という事実が受け入れられ、何年にも渡って熟成されてきた以上、聡明な王子という真実は、到底人々の心に響き得ない。

ガンディアの国民にとってはレオンガンドは愚者の象徴となり、彼の王位継承は、人々を奈落の底に突き落とした。が、現実はどうだろう。陥落から半年も経ったものの、結果としてガンディアはバルサー要塞を奪還し、国土を元の状態に戻したのだ。

無論、そんなものは当然だというものもあるだろう。王の力ではないと。しかし、レオンガンドが絶望的なまでに暗愚な王ならば、要塞を取り戻すこともできなからうと考えていたのが、国民の大半だというのだ。

故に、要塞奪還の報は、国民の心に刻まれた事実が反転するほどではないにせよ、強烈な衝撃を与えたと見ていいだろう。少なくとも、絶望からは回復したと見るべきである。

それが、この連日のお祭り騒ぎという状況に表れているのだ。

「人間なんて自分勝手なものよ。わたしだって、君だって。そうでしょう？」

「う……そりゃそうだけどさ。でも、なんか納得できないな」

セツナは、ファリアから目を逸らすように視線を移した。視界を彩るのは見慣れない町並みであり、その町並みを構築する建築物のひとつひとつが、目新しい驚きで満ちている。マルダールよりも古い歴史を持つのである。市街は、それでいてかの城塞都市よりも洗練されたものを感じさせる。

もっとも、それは王都である以上当然なのかもしれない。マルダールもガンディアにとっては重要な都市には違いないのだが、王の住まう都市とは設計の段階からその思想が異なるのではないだろうか。

王都ほど見栄えを気にする都市もないだろう。もちろん、都市の外観以上に防衛能力や機能性を重視してはいるのだろうが。

ふと、セツナは、ため息を浮かべた。祭りを満喫しているのである。人々の姿が、彼に、平穩というものを思い出させようとしていることに気づいたのだ。平穩な日常。安息に満ちた時間。どれもこれも、この世界に来てからというもの忘れざるを得なかったものだ。いや、考えれば、平穩な時間もあったのも確かだ。例えば、カランの日々の日々は安らぎに満ちていたし、マルダールでの数日も緊張感があつたとはいえ、戦場に比べればどれほど安全で平和だったのか。

しかし、そういった感覚はあの平原に立った瞬間、セツナの頭から滑り落ち、戦場に渦巻く狂気と熱気が彼の意識を支配した。そして、戦うことだけがすべてとなった。だが、日常に回帰した今、それもまた遠い日の幻想のように想えるのだ。

意識を失う前に見た戦場の有様は、このお祭り染みた喧騒の中で、音もなく消えていってしまうものなのかもしれない。

「まあ、無理に納得する必要はないわね。でも、これだけはわかって欲しいの。君が変えたんだって事」

「俺が変えた……って、なにを？」

「皆のことよ。だって、セツナ一人で勝ったようなものでしょ？」
そんなこともわからないの？ とでも言いたげなファリアの態度

に、セツナは、軽く首を横に振った。

「言い過ぎだよ」

それは彼としては本心であった。確かに活躍はしただろう。それは自他共に認める事実であるはずだ。しかし、だからといって、セツナひとりですべてを決したわけではない。なにより、セツナは最後まで意識を保ってはいらなかったのだ。

セツナが気を失っている間に、戦争は終わった。

バルサー要塞の奪還と、ガンディオンへの帰還。

それらはセツナが眠っている間の出来事だった。

「そんなことないわよ。わたしはもちろん、《蒼き風》モルシオンの白聖騎士隊も、ガンディアの精兵も、セツナに比べればまったく大したことなかったじゃない。ほんと、泣けるくらいにね。かなり卑怯よね、セツナって」

フアリアのあきれたような半眼は、むしろ可愛らしいと言えた。

不意に、彼女の細い指先がセツナの頬を掴む。

「普段はこんなに弱そうなのに」

不思議そうな、それでいて決して不愉快ではない表情で両頬を引っ張る彼女に、セツナは、反論することもできなかった。実際、その通りだ。屈強な戦士に比べれば、セツナの肉体など雑兵にも劣るだろう。戦場に立とうということ自体おこがましいのだ。だが、セツナは戦場に立ち、獅子奮迅の活躍をして見せた。

卑怯なまでに強大な力を用いることができたがために。

「だから胸を張って、ね？　俺がセツナだー！　って叫んだっていいのよ？」

「よくねーっす……」

にこやかに微笑するフアリアに対して、セツナは、微かに悲鳴を上げる頬を撫でただけだった。彼女がセツナのことを思い遣ってくれていることは十分に理解しているのだが、だからといって街中で大声を上げられるはずもない。

周囲には、露店や屋台巡りを楽しんでいる人々がたくさんいるの

だ。そんな中で、自分の名を大声で叫ぶほど恥ずかしいこともないだろう。それをいったら、街中で女性に泣きながら抱きつくのはどうなのか、という話もあるにはあるのだが。

(それは……いいよな。うん)

セツナがひとり強引に納得していると、周りからひそひそと囁き合う声が聞こえてきた。

「セツナ……？」

「さっきあの女のひとがセツナって……」

「セツナってあのセツナかよ！」

それとともに無数の視線が全身に直撃したのを認めて、セツナは、ファリアの顔を見た。彼女はどこか楽しそうなまなざしでこちらを見ていた。

周囲をそつと見回すと、人々の流れが緩やかになっていた。こちらを注視するために、歩く速度が落ちているのだろう。

注目を集めたのは、さっきのファリアの大声に違いなかった。

「ね？ 君は王都じゃあ、もう知らないひとはいないくらいの有名な人のよ」

ファリアの口調がどことなく誇らしげなのは、なぜだろう。いつて、不快ではない。むしろ、聞いているセツナまで嬉しくなってくる声の響きだった。

だが、疑問は生まれる。

「なんで？」

「そりゃあ、陛下が言い触らしたものだ。此度の戦いの立役者はセツナ⇨カミヤだー！ って。黒き矛のセツナこそが勝利の担い手だー！ ってね」

「！」

セツナは、愕然とした。レオンガンド・レイ⇨ガンディアの美貌が、脳裏を過ぎる。戦場においても最前線で采配を振るい続けた青年王は、言つまでもなく？うつけ？などではないと断言できる。少なくとも、暗愚な王にはこのような振る舞いはできないはずだ。

いや、愚かであろう賢しかろうと、レオンガンドが、セツナの名を出す必要はなかったのだ。セツナの存在を黙殺すれば、ガンディア軍の功績にすることもできたのだ。

セツナは、驚きと喜びに胸が一杯になっていた。レオンガンドという人物にほだされ、戦場に立ったのは間違いではなかったと、確信さえも抱く。そして、耳朶に飛び込む人々の囁きが、その感動を助長するのだ。

「セツナだって!？」

「要塞奪還の立役者が!？」

「陛下の切り札か!」

切り札　それは確か、レオンガンドがリノンクレアに対して、セツナを指していった言葉だったか。実際のところ、あれは口からでまかせのようなものだったに違いない。彼はセツナの実力など知らなかったのだ。そもそも、セツナ自身、戦争の切り札になれるなど考えてもいなかった。

だが、レオンガンドの思惑がどうであれ、セツナは、彼の言葉相応の働きはしたはずだ。切り札という言葉に秘められた意図に遜色のない戦い振りだったと、自負することくらい許されるだろう。

あれだけの敵を殺したのだから。

もつとも、だからといって、自分ひとりで勝ったなどとは思えないのがセツナだった。

「一騎当千なんだろう？」

「たったひとりで七千の敵を蹴散らしたって!」

「すげー!」

「まじかよ!」

興奮してか、どんどんとエスカレートしていく話の内容に、セツナは冷や汗を浮かべるのだった。

(なんなんだ、これは)

セツナには、理解のできない状況だった。

完全に人の流れが止まった通りには、老若男女問わず様々な人が、

セツナの周囲を大きく取り囲んで黒山の人だかりを作っていた。セツナたちと市民の間に数メートルの距離が開いているのは、近寄り難い空気でも漂っているからなのか、どうか。

ともかく、口々に囁かれる言葉と、臆面もなく注がれる好奇のまなざしが、セツナの思考を機能不全に陥らせていた。伝え聞くセツナの活躍をまるで自分のことのように語るものもいれば、疑わしげに論争する老人、《蒼き風》の剣鬼とどちらが強いかで盛り上がる子供たち。きらきらと瞳を輝かせる少年がいれば、嬌声を上げる女性もいたりする。

そんな次第、セツナは、凍りついたように動けなかった。

俗にいう、緊張という奴なのかもしれない。

そして。

「握手してくれー！」

ひとりの青年が、セツナに向かって飛び出してきた。それがきつかけとなったのだろう。どっ、とセツナを包囲していた人々が一斉に動いたのだ。それはさながら意志を持つ怒涛であり、本能に忠実な濁流であった。

「矛見せて！」

「取材、取材をさせてください！」

「セ、セツナ様の趣味は！」

「セツナ〜！」

物凄い勢いで殺到する人波を目前に、セツナは、ファリアと目を合わせた。が、即座に解決策など思いつくはずもなく、互いに引き攀ったように笑っただけだった。

情け容赦ない津波が、セツナたちを飲み込んでいった。

「ぎゃーー！」

第四十話 王の決意

「悲鳴？」

情けない少年の叫び声が、それよりもさらに巨大な喧騒の中に飲み込まれていくのを耳にして、彼は、怪訝な表情になった。若い男だ。年のころは二十代前半といったところだろう。金髪碧眼　目鼻立ちも整い、貴公子然とした容貌でありながら、どこか憂鬱そうな印象を与えるのは彼の性格によるところが大きいのかもしれない。背丈は平均的なものではあるものの、鍛えられた肉体は彼がただの貴公子などではないことを表していた。

ルウファールバルガザール。白翁將軍アルガザードバルガザールの三人の息子のうちのひとりであり、次男に当たる人物である。

王都ガンディオンの《群臣街》で生活している彼が《市街》を出歩くのは、なにも特別なことではない。《群臣街》などと大層に言っているものの、要するに将士文官などの住宅街に過ぎず、娯楽や暇潰しを求めるのなら、《市街》へ繰り出すしかないのだ。一介の兵士であれ、有能な騎士であれ、退屈な住宅街で日がな一日過ごしたくはないものだ。

もつとも、今のルウファに遊びに現を抜かしている余裕などはなかったが。

ガンディオン《市街》マルス区大通りを歩いていく。

レオンガンド王の帰還と勝利の報は、ガンディオンを数日に渡って熱狂で包み込んでいた。臣民の騒ぎ方が尋常ではないのは、何年にも及んで溜まりに溜まった鬱憤や不満、不安を一気に解放してしまっただからだろう。

それも致し方のないことだと、ルウファは想っていた。

レオンガンドが？うつけ？だという出所不明の情報を信じ込み、ガンディアの未来に絶望していた人々が、やっとの想いで、その悪夢から抜け出すことができたのだ。何年も何年も抱き続けた不安や

恐怖が取り除けられたのだ。少なくともレオンガンド王は暗愚ではないのだろう、と思えたのだ。

確信するにはまだ早い。

だが、絶望から解き放たれるには十分な現実には違いなかった。希望が生まれたのだ。それだけで、世界は薔薇色に変わる。

(希望さえあれば、ね)

ルウファは、自分の手を見下ろした。厳しくも激しい鍛錬の中、彼の手は傷だらけになっていた。それは、かつての己の未熟さを証明するものではあるが、現在の彼の実力を示すものにはなりえないだろう。第一、なにひとつ成果を出していない。戦場に立つこともままならないのだ。

「ねえねえ」

不意に彼の袖を引いたのは、弟のロナン。バルガザールだった。ルウファと六歳も離れたロナンは、一言で言えば童顔である。大きな眼と、朱が差したような唇など、十六歳という年齢以上に幼く見える顔立ちをしており、精神的にもかなり幼稚と評している。それは、少なくともロナン本人というより甘やかしすぎた周りに原因があったと見るべきだろう。

とはいえ、必ずしもロナン自身に責任がないとも言いきれないのが困ったところなのだが。

ルウファは、ロナンに目を向けた。彼よりも身の丈の低い少年は、なにやら通りのほうを熱心に見つめている様子だった。

「どうしたんだ？」

「見てよ、あれ」

促されるままに前方に視線を向けると、大通りの左側を埋め尽くす集団に目が留まった。凄まじい人だかりだった。まるで局所的なお祭りでも開催しているかのような有様であり、実際、その場に集まった人々はなにかしら騒いでいるようだった。

奇声、悲鳴、嬌声、歓声　さまざまな声が入り乱れ、だれがなにを言っているのかまったくわからない状況だった。例え至近距離

まで近づいたとしても、正確に把握することは困難に違いない。

老若男女入り乱れての喧騒は、このお祭り騒ぎの中にあっても、いったい何事か？ と首を傾げざるを得ないだろう。事実、遠巻きにその光景を見ている人々は、ルウファと同様に不思議そうな表情を浮かべていた。

「えーと……なんなんだ？」

要領を得ないまま、ルウファは、ロナンを再び見た。答えを期待したのではない。ほかに取るべき行動も考えられなかったのだ。

と、ロナンはこちらに向かつて満面の笑みを浮かべてきた。その曇りひとつない笑顔がいつも以上に幼く見えたのは、ある意味当然なのかもしれない。

「あの中にセツナ・カミヤがいるんだってさ」

「黒き矛のセツナが？」

ルウファの声が若干上擦ってしまったのは、あまりにも驚いたからに過ぎない。しかし、それが事実ならば合点のいく話ではあった。彼が実際あの中にいるのならば、市民が暴走気味になるのもうなずけるのだ。あの絶望の日々を打ち破った戦いの勝利の立役者として、レオンガンド王が直々に名を上げた人物なのだから。

（セツナ・カミヤが！）

それは、ルウファとて同様だった。王が絶賛するだけではない。兵士たちの口々から漏れる言葉のほとんどが、彼への賞賛であり、畏敬であり、恐怖であったのだ。それほどまでの人物が、眼前にいるというのだ。これに興奮を覚えずして、なにに興奮するということだろう。

セツナ・カミヤ。公表された情報によれば、《大陸召喚師協会》に未登録の武装召喚師。年齢は十七歳。ということは、ロナンよりひとつ年上である。が、それでも少年と違って差し支えない年齢であり、にも関わらず全軍を上げて賞賛するほどの戦果を残したのだとしたら、彼がどれほどまでに凄まじい武装を召喚したのか想像するだに恐ろしいものがある。

今回の戦いでは、傭兵としての参加であったという。名高い《蒼き風》と行動をともし、戦局を一変させる戦いぶりによってガンディア軍に圧倒的な勝利をもたらしたのだ。

セツナ「カミヤの象徴として語られるのは、黒き矛であった。彼の召喚武装なのだろう。禍々しい異形の矛らしいのだが、実物を見ていない以上、どう判断していいのはわからない表現ではある。

ともかくも、その矛を手にしたセツナは、天魔鬼神の如く敵軍を蹴散らしたのだとか。

「サイン欲しいなあ」

ロナンの何気ない一言に、ルウファの意識は現実に舞い戻った。勤めて冷静な顔で、彼はロナンを見つめた。

「さつき白聖騎士隊の副長からもらったばかりじゃないか」

さつきとは、ほんの半時間くらい前のことだ。白聖騎士隊。同盟国ルシオンが誇るハルベルク王子直属の騎兵部隊であり、リノンクレアが隊長を務めているということもあって、ガンディア国民にとっても馴染み深い組織だ。そして、喧伝されるその強さと見た目にもわかる華やかさから、人気もあった。

ルウファたちが出会ったのは、その副長リーザ「スウエンディを始めとする一団であり、彼女らは臨時休暇を楽しむためガンディオンを散策していたらしい。

「いいじゃん、別に」

「なんでおまえは有名人を見るとそうなるかなあ」

「だって！ 欲しいんだもん」

ロナンの実に子供っぽい受け答えに、ルウファは笑いを押し殺すのに必死だった。存在自体に愛嬌が満ちており、彼の前ではどんな堅物であれ、相好を崩さざるを得ない。

「理由になってないなあ。ということ、減点」

「なにが!？」

愕然とする弟を尻目に、ルウファは、視線を人だかりへと戻した。未だに騒ぎ続けているということは、その中に、本当にセツナ「カ

ミヤがいるのだろう。が、それにしても騒ぎすぎている。

浮かれているのだ。

だれも彼も。

王侯貴族は言うに及ばず、群臣の多くも此度の勝利の美酒をあまり、酩酊しているのではないかと疑うほどだ。市民が熱狂に飲まれるのも無理はない。

もっとも、実際にバルサー平原での戦いを経験した兵士のほとんどは、無事生還できたことを大袈裟なまでに喜んでいたとはいえ、王都凱旋以降、驚くほど冷静な様子だった。それは、彼らの存在が戦局を左右したわけではなく（無論、不要だったわけではないだろう）、どここの馬の骨ともわからない武装召喚師ひとりの活躍によって、勝利が転がり込んできただけなのだ。

もちろん、最前線に立つ兵士たちは命がけだったのだろうし、死傷者もいないわけではない。不幸にも命を落としたものもいる。しかしだからといって、彼らが弱兵の誇りを免れ得ない働きぶりだったのは、自他共に認めるしかないはずだった。そして、その事実には納得できないというものたちがいてもおかしくはない。

（ま、そう考えるだけましだな）

ガンディアの兵士が、弱兵の烙印を押されて久しい。にも関わらず、半年前まで国土を維持できていたのは奇跡的な事実であり、考えれば、バルサー要塞の陥落は予想の範疇の出来事に違いなかったとはいえ、難攻不落という神話を敵も味方も信じていた当時、バルサー要塞が落ちたという報が王都にもたらされたとき、天地がひっくり返るほどの衝撃がガンディオンを震わせた。

市民は愚か、兵士たちも、いつか来るであろうログナーの王都侵攻に恐れ戦いたという。

それから半年あまり。

脆弱な兵士たちとともに王都を発ったレオンガンド王は、セツナ「カミヤという切り札を用いて要塞を奪還、見事なまでの勝利とともに帰還を果たした。従軍した兵士たちの意識に多少の変化があっ

たのだとしたら、それは予想外の出来事ではあれ、悪い兆候ではないだろう。少なくとも、弱兵という評価から脱却しようという気概が、若い兵士たちからはひしひしと感じられるのだ。

(アレンにマイス、ゲイルも頑張ってる)

ルウファの脳裏に浮かんだのは、アルガザード・バルガザールの元で働く若い兵士たちの姿だった。今日も早朝訓練に精を出していた彼らの意気は高く、その向上心の澄み切った輝きは、彼にとって好ましいものだった。

だからこそ、ルウファは、いまこうして《市街》を歩いているのだ。ロナンからの提案には当初から気が乗らなかつたのだが、兵士たちの今朝の訓練の様子を見て、考えを改めたのだ。気が向かない、億劫だ、などといって逃げるのがもっとも恥ずべきなのだと、理解したので。

「行こうか」

「うん」

「サインはいいのか？」

「だって、あの状態だし」

ロナンの返答に、ルウファは苦笑を隠さなかつた。勝利の立役者を中心とする人ばかりは、時とともに膨大化していつていた。何百人という人間が押し寄せ、もみくちゃになっていた。ひとびとの怒号や罵声が飛び交い、子供の泣き声や、悲鳴も聞こえる。

大惨事、とでもいうべきかもしれない。

(ん……?)

ルウファは、その人ごみの中からひとりの少年がこっそりと抜け出していくのを見逃さなかつた。十代後半のどこにでもいそうな、それでいてどこにもいなさそうな少年だった。黒髪と赤い瞳が特徴といえは特徴だろうか。中肉中背ではあるものの、多少は引き締まっただけだ。

少年は、だれかを探すかのように周囲を見回したものの、探し相

手が見当たらないことに落胆すると、人だかりを一瞥し、嘆息した。そのとき、ルウファの脳裏に電流のようなものが走った。

(セツナ「カミヤ!」)

直感は即座に確信となり、彼は、喜悦に震える体をどうすることもできなかつた。そして、弟を一瞥する。

「兄さんの件はおまえに任せた!」

「へ?」

呆気にとられるロナンを背後に、ルウファの足は地を蹴っていた。

「幸運だったのでしょうか? それとも、必然ですか?」

リノンクレア・レーヴェ「ルシオンの問いに、レオンガンド・レイ「ガンディアは、眼前に広げた書類から視線を外した。静かに彼女を見遣る。リノンクレアは、部屋の片隅でくつろいでいる様子だった。

「勝利は必然だよ。そのための戦いなんだからね」

告げて、レオンガンドは、手に取ったティーカップに口をつけた。冷め切った紅茶の喉越しは、決して悪いものではない。

《森の蔵》は、獅子王宮を囲うように広がる《王家の森》の南側、その奥深くに存在していた。鬱蒼たる静寂に包まれたその建物は、その名の通り、王宮で不要となった物品を保管しておくための場所であり、本来の用途を考えれば、ガンディアの王や他国の王子の妃がくつろぐような空間ではなかつた。

しかし、レオンガンドもリノンクレアも、倉庫だという事実を特に気にした様子もなく、乱雑とした空間の中で、それぞれが想うままに時を過ごしていた。ここは、ふたりにとつて子供の頃からの隠れ家であり、数少ない安息の場所であつた。レオンガンドが、子供

の頃に戻ったような錯覚を抱いたとしても、不思議ではないのだ。

倉庫として使われるだけあって、広い空間である。王宮で使われなくなった食器などが整理されているのである。木箱が、所狭しと積み上げられている。ふたりは、その木箱を適当に見繕って並べ、机と椅子に見立てて使用しているのだ。室内は暗闇に覆われているが、ふたりとも携行用の魔晶灯ましようとうを手元に置いていたため、光源は十分にあった。

「必然？」

「そ、必然。でも、そうでなきゃ戦争なんて仕掛けるものじゃないだろう？ 必ず勝てるような状況を整え、さらに吟味に吟味を重ねた上で、ようやく戦いに赴くものさ。戦場で奇跡を期待してはいけない」

それはレオンガンドの持論というよりは、アルガザード「バルガザールからの受け売りだった。もっとも、いまではレオンガンドの行動原理になりつつあるのだ。勝ち目のない戦いは起こしてはいけない、ということだ。

「セツナは？」

「保険みたいなものだよ」

臆面もなく答える。実際、その通りなのだから仕方がない。多少の期待はしていたものの、それにしただって、敵の戦力を多少なりとも削ってくればいいという程度のもだった。

「ま、彼に関しては俺も驚くばかりさ。彼のおかげで、犠牲は最小限に抑えられたんだ。そればかりは、奇跡といってもいいんじゃないかな」

「セツナがいなければ危うかったように思いますが」

魔晶灯の光を反射するリノクレアの瞳の冷やかさに、レオンガンドは、ふつと笑った。確かに、セツナのいなかった場合を考えれば、ガンディア軍は窮地に立たされたはずだと想うだろう。

「そうでもないさ。バルサー要塞が空になるのはわかっていたし、ミオンの突撃將軍の機動力なら、空の要塞を手に入れることなんて

造作もないだろう?」

「空になるのがわかっていた……?」

「ジオ將軍に吐き出させたんだよ、全兵力をね」

軽く告げて、レオンガンドは、妹にウイंकを飛ばした。リノンクレアが鼻白む様子はつきりと見えなかったのは、残念で他ならなかったが。

「どうやって……!」

「秘密。ま、そのおかげでこちらもかなりの覚悟を強いられたんだけど……それはセツナがひとりですべてくれたからね。本当に、驚嘆に値するよね、彼」

レオンガンドは瞼を閉じた。不意に訪れた暗闇の中に浮かび上がるのは、死兵と化したログナーの殿しんがりと死闘を演じる少年の鬼気迫る姿だった。悪魔、鬼神、化け物。そのときの彼を言い表すならば、なにが相応しいのだろう。あれはもはや人間ではなかった。人間業ではなかったのだ。

恐ろしくもあり、頼もしくもある。

「……兄上は、彼をどうなさるおつもりですか? セツナは現在、ガンディアの兵士ではないのでしょうか?」

リノンクレアの疑問はもつともだと、レオンガンドは思った。セツナは今回、傭兵として参戦したに過ぎない。それは金銭による契約であり、契約金については戦功を加味した上で、褒賞とともに授与する予定であった。

彼はそこまで考えて、困ったように笑った。

「そう……なんだよね。そこなんだよ、悩んでいるのは」

「悩む? なにをです?」

「彼には彼の道がある。彼の生き方がある。未来がある。強制はできないだろう?」

それは優しすぎる考えかもしれない。甘いのだろう。しかし、レオンガンドはセツナのことを考えるたびに、そのように想ってしまうのだ。彼には別の未来があるのでないかと、考え込んでしまう

のだ。自分からこの戦いに引つ張り出しておいて、だ。

リノンクレアが、冷笑する。

「いまさらなにを言っているんです？」

彼女は、いつになく冷ややかなまなざしだった。研ぎ澄まされた刃のように鋭利な視線は、たやすくレオンガンドの意識を切り裂いていく。その瞳は、わずかな失望を抱いていた。

レオンガンドは、自分の愚かさに気づいたものの、即座には口を開かなかった。彼女の言葉を聴いていたと想った。

「兄上は、彼に戦場に立つことを望み、彼はそれを受諾した。彼は兄上の望みに応えるために存分に力を振るい、屍の山を築いた。それがすべてでしょう？」

リノンクレアの言葉のひとつひとつがレオンガンドの耳朵に突き刺さるたびに、彼の意識は冴え渡っていくように感じられた。酔いから醒めていくような感覚とでもいうべきか。初めての勝利に酔ったつもりなどはなかったが、もしかすると、勝利という未知の美酒に酩酊していたのかもしれないと想う。

狂気こそ戦場に置いてきたものの、圧倒的勝利という感覚だけは引き摺り続けていたとしても、おかしくはなかった。レオンガンドとて、完璧ではない。それは昔からわかっていたことでもある。

「彼は、ログナーの敵になったはずです。憎悪の対象となったはずです。数多の兵士を殺戮した悪魔として認識されたでしょう。兄上が彼の存在を公にしたがために、その名も彼の国に知れ渡っていることでしょうね」

「……ああ」

「セツナのことを想うのなら、最初から、軽い気持ちで戦いになど誘うべきではなかった。勝てるかと決まっているのなら、なおさら。違いますか？」

「……その通りだ」

レオンガンドは、リノンクレアの凍てついたように輝く瞳を見つめ返して、肯定した。反論する意味もない。すべて事実なのだ。

セツナは、ログナーにとって恐るべき怨敵となったのだ。そうなった以上、彼が望む望まぬに関わらず、ログナーの刃がセツナに襲い掛かるだろう。無論、ログナーから遠く離れればその限りではない。しかし、多かれ少なかれ、彼はこれから先、みずからの名がもたらす災禍と戦っていかなければならなくなった。

ログナーとの戦いで、一騎当千の活躍をした武装召喚師の名は、瞬く間に周辺諸国を駆け巡ったはずだ。

レオンガンドが、セツナの名を口にしたがために。

「どうやら、俺は決意が足りなかったらしい。彼を巻き込んだのは俺だ。彼の意志など関係ない。彼に武器を振るわせ、その手を血で染め上げたのは俺の意志だ。俺の望みに他ならない。確固たる勝利を欲した俺の想いに、彼が持てる力の限りを尽くして応えてくれたんだ」

慟哭が、耳朶に残っている。

セツナの魂の咆哮。

「ならば俺も、彼の力に応えよう」

第四十一話 平穩なりし要塞の日々

「ふう……やっと抜け出せたわね」

洪水のような人だかりから、もみくちやにされながらもなんとか脱出することに成功したファリアは、その静まりそうもない喧騒から離れた。物凄まじい人だかりであり、騒ぎだった。彼女にも想像がつかないくらいの状況だったが、それもこれも、レオンガンドの不用意な　それでいて真摯な　言動のせいに違いない。

先の戦いの勝利を軍の手柄にすることもできたのだ。そうすれば、ガンディアの弱兵という評判は覆されたはずである。が、レオンガンドは、それをしなかった。元より誠実な人柄だということもあるのだろうが、意識を失うほどに戦い抜いたセツナへのせめてもの報いなのかもしれない。

もちろん、それだけではない。戦後速やかに行われた論功行賞の際、セツナには多額の褒賞が約束されているのだ。当然の結果だ。セツナの働きによって完勝したといってもいいくらいの活躍である。だれも文句は言いようがないし、そのことについて批判が出たとしても、お門違いも甚だしい。

彼は、与えられた役割を全身全霊でこなしただけなのだ。そのせいで数日に渡って意識を取り戻さないという事態に陥り、ファリアを含め、周囲の人間を大いに騒がせたが。

ともかくも、レオンガンドの喧伝によって、セツナ＝カミヤの名はガンディオン中に知れ渡り、一躍有名人となってしまったのだ。いや、それだけではない。ガンディア国内のみならず、周辺諸国にも、その名前は知られたに違いない。

ガンディア国内ならば、大きくても今回のような騒ぎになるだけで済むのだろうが、これが国外であった場合どうだろう。ログナーならば　。

（駄目駄目。馬鹿なこと考えてる場合じゃないわ）

ファリアは、胸中でひとりごちると、頭を振って思考を切り替えた。いまは、セツナとともにここから立ち去ることを第一に考えるべきだろう。人だかりを一瞥する。恐ろしいまでの騒ぎへと発展してしまっただのは、やはり威厳をある程度は取り戻すことに成功した国王の言動に原因があるのだが、それが大袈裟な誇張ではないために、彼女ではどうすることもできなかった。

市民がセツナのことと盛り上がるのはいいのだ。むしろ、セツナの活躍で活気を取り戻せたのなら、それに越したことはない。しかし、セツナの日常に支障が出ては、本末転倒の上ないと思うのだが、どうだろう。とはいえ、こんな騒ぎも、しばらくすれば起きなくなるに違いない。ここまで過剰に盛り上がっているのは、熱しやすく冷めやすいというガンディア国民の性格を大きく反映しているからに過ぎない。

ファリアは、嘆息を浮かべて、セツナを探した。彼はまだ人だかりの中にいるのだろうか？

(なんか、とてつもなく疲れたぞ)

セツナは、ぐったりと、その場に座り込んだ。疲労感がどつと押し寄せてくる。

山のような人だかりからなんとか抜け出すことに成功した彼は、人目を避けるようにして大通りを外れ、人通りの少ない路地に身を隠したのだ。そうでもしなければ、またあの騒ぎに巻き込まれそうな予感がして、セツナは気が気ではなかった。

もちろん、数え切れないほどの人たちに誉めそやされ、持ち上げられるのは、悪い気分ではない。むしろ、あまりの気恥ずかしさに卒倒してしまいそうなほどだった。それは心地よさとへ別の感情な

のかもしれないが、ともかく、彼はあの人だからの中でもみくちやにされるのには辟易した。

なんとか脱出することはできたものの、フェアリアを見失ってしまったのは痛恨の失敗だった。抜け出した後、その場に留まっていればいつかは合流できたのだろうが、その前に、あのひとの山がこちらを発見しそうで怖かった。

（なんだかな〜）

セツナは、嘆息交じりにレオンガンドの顔を思い浮かべた。いつになく晴れやかな笑みをした美貌の男が、大観衆の前でセツナの名を喧伝するといった光景を幻視して、彼はため息をさらに深めた。

もちろん、レオンガンドに対してどうこういうつもりはない。彼には彼のやり方があり、その結果としてセツナは人々の注目の的になってしまっただけのことなのだ。レオンガンド自身、ここまでの事態になるとは予想だにしていなかっただろう。

人だかりが未だに収束していないことは、大通りのほうから聞こえる喧騒のおかげで簡単に把握できた。いや、収束どころか拡大の一途を辿っているように思うのだが、それは勘違いでもないのかもしれない。

数え切れないほどのひとが集まっているところを見れば、気になるのが人情というものだ。そして、その渦中にいる人物が、巷で噂の武装召喚師となれば、放っておかない手はないだろう。ひとりひとりの思惑は違う。

ひとつは好奇であったり、興味であったり、皆がそうしているから参加したものもいるだろうし、わけもわからず巻き込まれたという人もいるかもしれない。ともかくも、老若男女が見せる数多の表情が、セツナの網膜に焼き付いて離れなかった。

「はあ……」

興奮して見境のなくなった集団の恐ろしさを身に染みて感じるこ
とになった先の出来事は、セツナにとって、忘れがたい出来事にな
ったのだった。

頭上を仰ぐと、さつきから代わり映えのしない青空が、その雄大さを誇示することもなく、ただただ漠然と広がっていた。死六輝く天体は、やはり太陽であるらしく、夜空を照らすのもまた、月といった。そういう意味では、セツナの生まれ育った世界 というよりは地球 と、このイルス・ヴァレに目に見えた違いはないように思える。もちろん、武装召喚術という技術などと呼ぶには強大すぎる力もあるにはあるし、皇魔おじまという化け物もいるのだが。

(それを除けば……なあ)

無論、彼の住んでいた街とは随分と勝手が違う。中世の町並みとはいうものの、それは見た目だけの話であり、実際のところはどうかかなど、ほとんどまったくわかっていないのが現状だった。そもそも、この世界の時代区分とセツナの世界の時代区分が同一であるという前提で考えること自体、無理があるのかもしれない。

ゆっくりと伸びをして、あくびを漏らす。フアリア曰く、五日目の間眠りっぱなしだったというのだが、セツナにはそのような実感はまるでなかった。よく寝た、という感覚さえもない。夢は。

(見たのかな?)

おぼろげな記憶を辿れば、見たような気もするのだが。

(ま、どっちでもいいさ)

セツナは、静かに立ち上がると、辺りを見回した。大通りを少し逸れた路地に人気がないのは、露天や屋台の集中する大通りにこそ人足が集中するからだろう。それにしても、大通りから少し外れただけで、人影ひとつ見当たらないのは異様な感じがした。

「？」

ふと、セツナは違和感を覚えた。とてつもなく奇妙な感覚だった。寒気とともに全身の皮膚が粟立ち、意識が尖鋭化されていく。

それは、なにかが発散している波動のように感じられた。

(どこだ……?)

セツナは、違和感の発信源を探して、視線を廻らせた。決して広くはない路地の隅から隅まで行き渡らせ、異常の有無を確認する。

見知らぬ町並みから異常を見出すことなど不可能かもしれないが、あれこれ考えている暇はなかった。そうする間にも、違和感は酷くなる一方だった。

まるで戦場に立っているような感覚に近い。しかし、違うのだ。戦場ではない。血の臭いもなければ、死の影も見えない。狂ったような熱気などあるはずもなく、故に、昂揚することもない。

ただ虚しい意識が、違和感の移動を捕捉していた。

「！」

セツナは、路地の先、大通りとの合流地点に目を向けたとき、緩慢な人波の中を悠然と進む女の姿を発見して、息を止めた。燃えるような真紅の髪は、さながら煉獄の業火のようであり、人波に埋没することなくその存在を主張している。

（あれは……！）

セツナは、我知らず、その場から飛び出していた。地面を蹴る足に力が籠もる。見失うわけにはいかない。会って、問い質さなければならぬのだ。

炎の如き髪の女など、セツナはひとりしか知らなかった。

（アズマリア＝アルテマックス！）

「まったく、だらしないなあ。そんなんだから、手柄を全部持っていられるのさ」

などと口にしながらも、ルクス＝ヴェインは、だらしくくずおれた男たちの姿に呆れ果てたわけではなかった。木剣を右手に持ったまま、周囲を見遣る。

彼の周りでは、屈強な肉体を持つ男たちが、息も絶え絶えといった様子で這い蹲っていた。人数にして三十人以上はいるだろう。年

齡はまちまちだった。二十代前半の青年が中心だったが、三十代半ばの男も少なくはない。男たちの全身から噴き出した大量の汗が、乾いた地面を黒く塗り潰すかのようなだった。

晴れやかな青空の下、吹き抜ける風が、軽い運動をしたばかりの体に心地いい。

そこは、バルサー要塞の堅固な城壁の内部だった。中心に聳え立つ壮麗というよりは剛毅な印象を与える天守、その少し南に運動をするのに適した広場がある。元々、要塞に常駐していたガンディアの兵士たちが訓練に使っていた場所らしいのだが、ルクスは、バルサー要塞に留まることになって以来、毎日のようにこの場所で訓練に精を出していた。

そうでもしなければ、気が狂いそうなほどに退屈だったのだ。

ガンディアとの契約期間の延長によってバルサー要塞に留まることになった《蒼き風》の面々だったが、実際のところ、彼らがすべきことなどほとんどないといってもよかった。いわば、ログナーへの牽制である。

戦後、取り戻したばかりの要塞を再び奪い返されないために、ある程度の戦力を残す必要に迫られたレオンガンドが下した結論でもあった。つまり、ガンディアの正規兵は頼りにならないということであり、傭兵たちこそ信頼できるということに違いなかった。それは当然の結論だった。

ガンディア軍の戦場でのあの腰の引け具合を見たならば、そういった決断を下さざるを得ないだろう。無論、兵士たちとて全員が全員、懦弱ではない。一部には、みずからの命も顧みずに果敢な攻撃を行ったものもいる。数で上回る敵軍に物怖じせず、勇敢に戦い抜いたものもいる。

しかし、ガンディア兵の大多数が、最後の最後で醜態を曝したのだ。

(いや……それも仕方ないか)

彼は頭を振って、みずからの考えを打ち消した。思い返す。ルク

又たち歴戦の猛者ならばこそ、彼の在り様を受け入れることができたのかもしれない。

荒れ狂う暴風の如く戦場を駆け抜けたひとりの少年、その脅威を、その力は、あまりにも強大すぎたのだ。あまりにも苛烈であり、あまりにも凶悪だったのだ。

だからこそ、兵士たちは、セツナに恐怖を抱いたのだろう。畏れ、慄いたのだろう。身動きひとつ取れないものもいただろうし、なにより、彼の凄まじさに卒倒してしまったものもいるのだとか。

ともかくも酷い有様だった。

ルクスの記憶にもないくらいの惨状だった。

(惨状……か。ひどいな)

ルクスは、自分の言葉に苦笑した。セツナの凶悪なまでの活躍振りを惨状と評するのは、あまりにも失礼だろう。彼は彼なりに力を尽くしただけなのだ。だれよりも純粹に、役割を果たしただけに過ぎない。その様子がいかに悪魔的であろうとも、悲惨なものではないはずだ。

もっとも、気高く清らかなものでもないのだろうが。

「手柄、ですか……？」

と、ルクスの意識を現世に呼び戻したのは、若い男だった。黒髪の青年は、手にした木剣を杖代わりに立ち上がると、一呼吸置いてからこちらに向き直った。《蒼き風》の傭兵ではない。ガンディアの正規兵であり、アルガザード將軍とともにバルサー要塞に駐留することになったひとりだ。それは彼以外の倒れている全員にも言えることではあるが。

そうなのだ。

ルクスが、今もなお地面に倒れ伏し、立ち上がることさえままならない男たちに呆れないのは、彼らから多少の向上心を感じ取ることができからだ。それは、彼ら約三十名の兵士がみずからの意志で、ルクスの鍛錬に付き合っていることからわかるだろう。

彼らが、訓練を付けてくれと、志願してきたのだ。

一介の傭兵風情に過ぎないルクスに、である。

これにはさすがのルクスも目を丸くしたし、同時に、ガンディアもまだまだ捨てたものでもないかもしれないと想ったのだ。彼らも彼らなりに考えていたのだろう。

あの戦いにおいて、自分たちの果たした役割とはなんだったのか。そもそも役割を果たせたのか、なにかできたのか、ただその場においてだけではないのか。弱兵の諷りを受け続けることに納得できるのか。

「そ。手柄。君らがもつとしっかりしていれば、セツナなんか手柄を奪われずに済んだってこと」

「そんな無茶な!？」

大袈裟なまでの悲鳴を上げたのは、立ち上がったひとりだけではなかった。倒れたままの兵士たちも、ルクスの言動に打ちのめされたかのような声を発していた。

ルクスは、予想以上の反応に満足した。微笑する。

「ま、冗談はこれくらいにして、続きをやるかい？」

「じよ、冗談……って」

たかがそれくらいのことですぐ崩れ落ちそうな青年の様子に、ルクスは、木剣を構えるのをやめた。彼は立っているのがやっとなのだ。全身から疲労感が滲み出ている。これでは木剣を振るうこともままならない。訓練にもならないだろう。

それはやはりほかの兵士たちも同様であり、地に伏す彼らを見回して、ルクスは、ひとまず訓練を切り上げようとした。時間にして約二時間ほどではあったが、ルクスにとっては良い運動といった程度のものであった。彼らを訓練をしてもみずから鍛えることにはならない。それもわかってはいたことだが。

「おお、やってるな。相変わらず死屍累々じゃねえか！」

野太い男の声に、ルクスは、全力でそちらを振り返った。《蒼き風》団長シグルド・フォリアーの巨躯が、威圧感たつぷりに近づいてくるのが見えた。無論、彼とて周囲を威圧しながら歩いているつ

もりはないはずだ。しかし、鍛え上げられた肉体と野生の猛獣を想起させる風貌は、他者を圧倒せざるを得ないだろう。

もっとも、いまはその顔には、似つかわしくなくらいに清々しい笑みが湛えられていたが。

ルクスは、勤めて冷静に告げた。

「団長、怖いよ。顔、怖いよ」

「！」

ルクスがシグルドに追い掛け回される羽目になったのは、言うまでもない。

第四十二話 紅き魔人の誘い

セツナは、アズマリア＝アルテマックスと思しき真紅の女を追いかけていた。相手に気づかれようとも構わない。いや、むしろ気づかれたほうがいいのかもしれない。さすがに、みずから召喚した人間を認識して、黙殺することはないだろう。

（本当にそうか？）

セツナの頭の中に生まれた疑念は、振り払いようのないものだった。なにしろ、アズマリア＝アルテマックスといえば、セツナをこの世界に召喚した張本人であり、にも関わらず、この世界に関する知識、常識を教えてくれることもないままに何処かへと消え去った人物なのだ。

酷いと言いたいようがない。しかし、彼女への憤りや不満を抱いている暇もなく、セツナを取り巻く状況は激変していった。

激変。

カランでの戦い、ファリアとの出会い、そしてレオンガンドとの邂逅。なにもかもが変わっていく。

未知の世界。寄る辺もなければ、右も左も分からない。それでも、前に進むことに必死だった。死に瀕したこともあった。

ガンディアの傭兵として、武装召喚師として力を振るった。戦果を上げたのだ。だれもが考えられないほどの結果を残したのだ。だれも文句が言えないほどの戦功だったはずなのだ。……。

それは、いい。

それはそれで、結構なことだとは思うのだ。どこかで野たれ死んでいても不思議ではない境遇にありながら、様々な人との出会い、繋がりのおかげでこうして生きていられるのだから、幸運といっても差し支えないだろう。

それには、矛の力も十二分に役立つ。矛のおかげといってもいい。いや、矛がなければ、とつくに死んでいたはずだ。カランの街

で、炎に巻かれて命を落としていただろう。矛がなければ、炎の中に飛び込んでいなかった、とも言い切れないのだから。

だから、そこはいいのだ。

セツナは、密やかに肯定した。アズマリアに放り出されたおかげで、いまの自分がいるという事実を認めた。

だがそれでも、セツナは、アズマリアを追わなければならなかった。色々と聞きたいこともある。なにが本当で、なにが嘘なのか。数多の二つ名で謳われる彼女とは、一体なにものなのか。

いくつもの疑問が、セツナの脳裏に浮かんで消えた。

マルス区大通り。

セツナ目当ての人だからからは離れていく。方角としては南つまりは、王都の中央へと向かっている。とはいえ、目的地はわからない。

ふと、疑問が生まれる。人ごみの中を悠然と進んでいく紅蓮の女にだれも気に止めないのは、なぜだろう。アズマリア＝アルテマックスは、だれもが息を呑むほどの美女である。絶世の美女といってもいい。

にも拘らず、アズマリアの姿に注目するものはいなかった。通り過ぎる人々の視界に入っているはずなのに、だ。もちろん、街中で大仰に反応するような人間もいないのだろうが、それにしても、反応がなさ過ぎるのだ。だれもが彼女の存在そのものを認識していないかのようであり、まるでセツナだけがアズマリアの姿を捉えているかのようだった。

(なんでだ?)

疑問は尽きないが、考えにふけっている暇もない。

そうこうするうちに、アズマリアが大通りを右に折れ、路地へと入っていくのが見えた。セツナは、彼女の姿を見失わないように急いで後を追った。通りを埋め尽くす人波の中を強行突破するのは気が引けたが、悩んでいる場合ではなかった。

いま彼女を見失えば、つぎにいつ会えるのかわかったものではない。

い。

大通りから狭い路地へ。迷宮のように入り組んだ《市街》の全容など把握しているわけもなく、セツナは、ただ彼女の後を追いかけるしかなかった。例えわずかに姿を見失っても、彼女から発振される違和感を辿ることで辛うじて追跡することができた。

人気がない路地から路地へと進んでいく。

アズマリアの足取りは悠然としたものであり、迷いひとつ見受けられなかった。

「……？」

セツナが足を止めたのは、前方を進んでいたアズマリアが不意に立ち止まったからだ。セツナは、即座に建物の影に身を潜ませた。息を殺す。

「なぜ隠れる？」

「……なんとなく」

アズマリアの呆れたような言葉に対して、セツナは、彼女の前に姿を見せると悪びれることもなく告げた。それは本心から出た言葉だった。実際、セツナが彼女に見つかってはならない理由はないのだ。会って、話を聞くために追いかけたのだから。

「おまえは変わらないな」

「あんだこそ」

言い返して、セツナは、自分の愚かさに苦笑した。アズマリアに出鼻を挫かれて、山ほどあったはずの言いたいことや聞きたいことが、頭の中から吹き飛んでしまったのだ。もはやこの失敗は、当然取り戻せそうもない。

閑散とした路地の真ん中に、アズマリア「アルテマックス」の姿はある。燃えるような真紅の髪と黄金の瞳は、以前見たときと変わらない。眩暈を覚えるほどの美貌も同じだった。ただひとつ違う点を上げるとすれば、その肉感的な肢体に纏う衣装だろう。血の如き深紅の衣ではなく、夜の闇よりも深い漆黒の外套である。それは、彼女の匂い立つほどの妖艶さを十二分に引き立てているように思えた。

もつとも、その外套をほかの人間が身に付けたところで、アズマリアと同じような結果を得ることもできないに違いない。彼女自身の色香が凄まじいだけなのだ。

セツナは、今度こそアズマリアの色気に惑わされないように気を引き締めなおした。

アズマリアが、値踏みするようなまなざしでこちらを見ていた。

「なんだよ？」

「ふむ……面構えは多少なりともよくなったようだな」

「……褒めてんのか？ それ」

「戦士の顔になりつつあるといっているのだ。素直に喜べ」

「喜べるかよ」

やれやれとでも言いたげなアズマリアの態度に、セツナは、憮然とした表情を浮かべざるを得なかった。そんな投げやりな褒め言葉で浮かれられるほど、軽い人間ではない。いや、そもそも、戦士の顔に近づいているからといって、どうだというのだろう。

もちろん、戦士として戦場に立ったのは事実であり、並み居る兵士よりも遥かに優れた結果を残したのもまた、事実だ。

だが、戦士になりたくて、戦いに赴いたわけではない。

「おまえは武器を手に取ったのだ。戦士として、剣の原野に臨んだのだ。破壊と殺戮の意志が吹き荒ぶ闘争の在処へ。大河の如き赤き血と大地を覆う黒き死の狭隘へ。もはや戻れぬ。もはや帰れぬ。おまえの手は血にまみれた。おまえの足は死を踏みしだいた。おまえは矛を振るい、幾多の人間を殺した」

アズマリアのきらびやかな声音が紡ぐ数多の言葉が、セツナの耳朶に染み入るとともにその意識に溶け込み、瞬く間に彼の周囲に幾重もの幻想を生み出した。

眼前に展開したのは、平原だった。

そのどこまでも続くような平原に描き出されるは、戦場の景色。

あざやかなまでの青空の下、ガンディアとログナー、両軍合わせ一万人以上の人間が青々とした大地を埋め尽くしていた。睨み合

う双方の前線に列を成す重装歩兵たちが、大盾を構え、長槍を携えたまま、時が来るのを息を潜めて待っている。その後方には無数の歩兵、騎兵、弓兵たちが、整然と隊伍を組んでいる。ガンディア軍を率いるのはレオンガンド王であり、ログナー軍は確かジオギルバースという將軍だった。

沈黙に包まれた緊張を破ったのは、どちらの軍だったのか。

ともかくも、平原の中心で衝突は起きた。何千人もの兵士たちが、死に物狂いで戦っていた。命を賭して、勝利を掴み取ろうとしていた。生き残りたい　だれもがそう願っている。だれもが。

だが、次の瞬間には、無数の兵士達が無残な亡骸となって大地に横たわっていた。大量の死体が山のように積み上げられ、流れ落ちた血が大河のように流れていく。地の底から噴き出した業火が、渦を巻いて立ち上り、焼け焦げた死体の臭いを蔓延させた。

地獄。

「とはいえ。悪魔、化け物、鬼神、死神……おまえをそう言い表すものもいるようだが、おまえはそれほど上等なものではないよ。力の使い方もわからない、未熟な戦士に過ぎない。だが、いつまでも未熟なままではいられない？　でなければ、おまえに殺されたものたちが浮かばれないし、おまえ自身納得できないのではないか？」

突如としてセツナの耳に飛び込んできたアズマリアの声は、天上からの救いの言葉のように想えた。希望などありはしない地獄に差し伸べられた、救いの手。そう確信させるほどの強い力を持った言葉だった。

しかし、セツナは、頭を振った。この地獄の景色だって、きつとアズマリアの術か何かに違いないのだ。でなければ、こんな幻覚など見ることもないはずだ。

うずたかく積み上げられた死体の山と、どこまでも流れていく血の河、燃え盛る紅蓮の炎の狭間で、セツナは、激しい怒りを覚えた。どこからともなく亡者の声が聞こえる。怨嗟が。憎悪に満ちた数多の叫びがこだましている。生への執着が。

「俺にどうしろってんだ！」

セツナは、すべてを振り払うように叫んでいた。悪意に満ちた幻聴は収まらないが、収まらないのはセツナの感情も同様だった。叫びが引き金となったのかもしれない。激情が、彼の意識とは無関係に溢れ出した。

意識が、目まぐるしく変転する。

「力の使い方なんてわかるわけねえだろ！ 何も知らないんだ！

教えてくれる人もいねえ！ そんなこと、話せる相手もいなかった

！ だから、自分でなんとかしてきたんだろ！ それのどこが悪い

！ なにがいけないんだ！ なにが ！」

迸る激情は、確かな言葉になどならなかった。ただの感情の羅列に過ぎない。思いの丈をぶちまけただけなのだ。しかし、それで十分だった。いや、それしかできなかったというべきか。だが、結果的にセツナは、地獄のような幻想から解き放たれたのだ。

周囲には、絶望的な光景ではなく、殺風景な路地の風景があった。死体もなければ、平原ですらない。血の臭いも、死臭が立ち込めているということもない、あきれるほどの快晴の空の下、世界は、平穏そのものを表現していた。

セツナは、安堵とともにとてもない疲労感を覚えていた。アズマリアにぶつけるべき言葉さえも思いつかないくらいだった。

アズマリアが、囁くように言ってくる。

「悪いなどとはいってないよ。ただ、教えてやろうというのだ」

「え……？」

セツナがきょとんとしたのは、アズマリアの態度があまりにも優しげだったからだ。その声音には、信じられないほどの暖かさがあつた。とはいえ、油断などできるはずもない。

セツナは、警戒感を露にしたが、彼女に一笑に付されただけだった。相手にもされていないのだろう。もっとも、その反応は不快ではなかった。予想通りだったからというのもあるのだろうが、アズマリアのまなざしが柔らかかったからかもしれない。

「わたしがなんの目的もなくガンディオンを訪れるとでも、考えていたか？」

そして、満足げな表情を浮かべた女は、静かにこう告げてきたのだった。

「わたしの目的のひとつはおまえに逢うことだよ、セツナ」

第四十三話 ゲート・オブ・ヴァーミリオン

眩しいくらいの青空は、正午過ぎの王都の穏やかな喧騒を優しく包み込んでいた。爽やかな風が、通りを流れる人ごみの狭間を悠然と擦り抜けていく。とはいえ、正午。お昼時である。お祭り騒ぎも一時休憩といった状態であり、《市街》を歩く人々は、どこで昼食を取るのか、どんなお昼にするのかを考えている様子だった。

もっとも、ファリアにとっては通りを行き交う市民の昼食などどうでもいいことには違いない。

彼女は、見失ったセツナを探して、マルス区の通りを走り回っていた。体力は有り余っているとはいえ、市民でこった返した通りを駆け回るのは、それだけで一苦労だった。

（まったく、どこに行ったのよ！）

ファリアは、セツナの勝手な行動に憤慨していた。あの人だからを抜け出したあと、どこか分かりやすい場所にいてくれればよかったのだ。更なる混乱を避けるならば、どこかに隠れてくれていてもよかったが、それならばそれで、こちらの状況を把握しておいて欲しいものである。

これでは、セツナを監督する立場の人間として立つ瀬がないではないか。

（それは……わたしが悪いのよね）

胸中でつぶやいて、ファリアは、うなだれた。目を離れた自分も同罪なのだ。彼だけを責めることもできない。嘆息して、顔を上げる。マルス区の中央を南北に走る大通りの、ちょうど中ほどくらいだろうか。人波はそれほど多くはない。

セツナの姿は、一向に見当たらない。

（本当、どこにいるの？）

ファリアは、足を止めると、後方を振り返った。ガンディオンの北門へと至る通りを埋めるのは、見知らぬ人々の顔であり、気配で

あり、雑音だった。幾重にも織り成す多種多様な音色が、彼女の意識を取り巻いていく。

(セツナ……)

ファリアは、みずからの手を胸に押し当てた。不意に去来したのは、言い知れぬ不安だった。いままであったはずのものがどこかへ消え去ってしまう、そんな漠然とした不安。胸が締め付けられるのは、その不安が現実になったとき、彼女にはどうしようもないからかもしれない。

離れていくものを止める手立てなど、彼女にはない。

(でも)

ファリアは、胸に当てた手を離した。震えている。握り締め、拳を作る。

セツナを放っておくことはできない。

彼を独りにはできない。

それは、彼女の使命とは別の感情だった。同情とも違うような気がする。確信は持てない。その感情の正体は、ファリアにもわからなかった。

ただひとつわかっているのは、セツナのこれからを少しでも長く見ていたいと想っている自分がいるという事実だった。

それは、ファリアが彼の命に触れてしまったことに大きな原因があるのかもしれない。

(命……)

アズマリヤ「アルテマックス。

セツナがその名を口にしたことも一因ではあるのだ。彼女の弟子などと名乗ったことも、ファリアが彼から目を話せなくなった理由のひとつなのだ。

しかし、最大の要因は、ファリアがセツナをその死の淵から掬い上げる際に、彼の命に一瞬とはいえ触れてしまったからだと考えることもできた。

あのとき、彼は死に瀕していた。ランカイン「ビューネルの召喚

武装による炎が、彼の命を焼き尽くそうとしていた。もはや助からない。だれもがそう想っていた。ファリアをその場に呼んだサリス
「エリオンでさえ、そう判断していたのだ。」

彼は死ぬ、と。

事実、その通りだった。あのとき、あの場所に、偶然にもファリアが現れなければ、セツナは息を引き取っていただろう。想像を接する苦痛の果てに、命を落としていたはずだ。それほどの重傷だった。いや、重傷などという生易しいものではなかった。大火傷の一言では済まないほどの傷を負い、辛うじて生きている、という状態だったのだ。

彼女以外のだれも、彼の命を救うことはできなかつたかもしれない。
い。

もつとも、ファリアの取った方法もそれ以外にはないという最後の手段であり、結果としてセツナは一命を取り留めたものの、彼のその未来のいくらかを失うことになったのだ。

永久に。

(だからなのかしら?)

彼女は自問したが、明確な答えが導き出せるとは到底思えなかつた。いや、答えを得ることができたとしても、それは大方歪な形をしたものであるかもしれず、それにしたってそこに辿り着くまでに結構な時間がかかるだろうと判断したのだ。自分の心ほどわかりにくいものはない。

ファリアは頭を振ると、来た道を戻ろうとした。セツナもそれほど遠くまでは離れないだろう。彼とて、こちらを必要としてくれているはずだ。少なくとも、ガンディアにいる間くらいは。

と、そのとき、ファリアは、強烈な違和感を覚えた。

「これは……！」

いや、違和感とは言いがたいかもしれない。むしろ彼女にとっては慣れ親しんだ感覚であり、彼女のすべてに等しいものだった。ファリアがファリアである所以とさえ言えた。

この世ならざる気配の発現。
つまりは、武装召喚術。

その違和感が一体なんであるかなど、ルウファにはわかりきったことだった。

(武装召喚? 《市街》のど真ん中で?)

驚きながらも、前方に感じる気配は武装召喚術特有のものである。事実は疑いようがなく、彼は、怪訝な表情になった。彼の向かう先にはセツナ「カミヤがいるはずなのだが、彼がむやみやたらに武装召喚術を行使するとは考えにくい。もちろん、それはルウファの憶測に過ぎないのだが、そもそも武装召喚師が街中で召喚武装を振り回すこと自体がありえないのだ。《大陸召喚師協会》に加入しているよ」といまいと、そんなことで無数の敵を生み出すような馬鹿げた真似は、だれであれ、しようとも想わないものだ。

武装召喚術を身に付けるまでに費やしたであろう膨大な時間と多大な苦勞が、水泡と化すことになりかねない。

ましてやここはガンディアの王都である。眠れる獅子の都である。ガンディアの中心である以上、その軍事力も相当なものなのだ。くだらない理由で武装召喚術を行使し、ガンディアの精鋭と一線交えるなど。

(それも武装によるな……)

ルウファは、ガンディアの実情を思い出して、脱力感を禁じえなかった。力不足極まりない兵士たちなど、強大な力を秘めた召喚武装の前では塵芥に等しくならざるを得ない。とはいえ、それほどの力を持つ召喚武装もそうそうあるはずもなく、杞憂には違いなかったが。

そこまで考えて、彼は、走る速度を上げた。

(これは……)

彼が感じたのは、全身の肌が粟立つほどの寒気だった。神経を逆撫でにするかのような波長。それは、疑いようもなく、本来この世界に在らざるものの気配だった。彼がその半生で幾度となく戦うことになった異形の存在。まさしく化け物というに相應しい人外の生物。人類の天敵にして、忌むべき種族。

(皇魔^{おしま}!?)

驚きとともに、ルウファは、術式の構築を始めた。口早に呪文を紡ぐ。それは古代言語の羅列である。複雑怪奇な無数の言葉を特定の式に則って口ずさむことにより、自身の生命力を音に乗せて体外に放出するのだ。体の内側、その遙か深奥から不可思議な言葉によって放出された生命の力は、古代言語の意味する通りに虚空へ散らばり、普通の人間には見えない凶形を構成していく。神秘的な紋様だった。幾重もの円と線、無数の文字が織り成すのは精緻な魔方陣である。

(なにが起きてるんだ……?)

彼は、術式の構築に集中する一方で、周囲への注意も怠らなかつた。狭い路地だ。人影などほとんどなく、静寂に包まれた風景は、大通りの喧騒からは考えられないほどのものだった。しかし、歩みを進めるたびに、彼の中の核心は大きくなっていった。

皇魔の放つ敵意が、強く感じられるのだ。そしてそれは、彼に危機感を抱かせるには十分だった。

王都ガンディオンに皇魔が現れるなど、前代未聞の出来事だった。それが事実であれば、間違いなくガンディア始まって以来のスキヤンダルとして知れ渡り、国民の失望を買うだろう。王都である。ガンディアの象徴であり、中心なのだ。何万もの民が平穏と安逸を貪るための都であり、そのために堅固な城壁が築かれているのだ。皇魔を始めとする外敵が、王都の土を踏まないように。

(どうやって、この中に?)

ルウファは、疑問を解決させるには、この先の現場に急行するしかないことを認めた。

《門》の召喚。

それは、セツナにも予期できた事態には違いなかった。だからといって、アズマリアルテムックスが武装召喚術を行使するのを止めることはできなかった。ファリアの言っていた術式とやらを編んでいる様子さえなかったのだ。

《門》。

セツナがこの世界に来るきっかけとなったあの荘厳な《門》とは、形状からして異なる代物だった。全長五、六メートルくらいはあるだろうか。全体に髑髏や骨をあしらった禍々しい形状であり、煮え滾るマグマのような門扉が、それ自体恐るべき波動を放っていた。猛烈な寒気が、セツナの意識を急激に冷やしていく。

「なんの真似だ？」

やっこの思いで口を開いたセツナは、たったそれだけを問うのに精一杯だった。なにもかも唐突だったのだ。セツナに逢うことが目的のひとつだと言って、すぐの出来事だった。肉体は無論、意識の反応も遅れていた。なによりも驚きが、彼の思考を鈍らせた。

《門》を召喚した女は、いつになく穏やかなまなざしをこちらに向けていた。それが、ことさらに理解できないのだ。威圧するでもなく、ただ平然とこちらを見遣るアズマリヤのことがまったくもってわからず、故にセツナは、不安と猜疑のまなざしを向けるしかないのだ。

「試練だよ」

彼女の手が、その背後の門扉へと伸ばされる。漆黒の外套から伸

びた腕は透けるほどに白かった。やがて、細くしなやかな指先が、紅蓮の門扉に触れた。

「おまえがこの世界で生きていくに値するかどうか。おまえが力を振るうに値するかどうか。おまえのためにわたしが時間を割くだけの価値があるのかどうか　それらを見極めるための」

「ふざけるな！」

セツナの怒声は、アズマリアの表情を変えることさえかなわなかった。涼しげなまなざしには、ささやかな変化すら生まれない。こちらの意見など端から聞いてはいないのだ。彼女にとっては当然のことなのかもしれないが、その余裕に満ちた態度が、セツナの感情をことさらに刺激していた。といって激情に身を任せられる状況ではない現実を認識してもいて、セツナは、苛立ちを隠せなかった。

アズマリアの黄金の瞳が、妖しく輝いている。

「さあ、始めよう。百鬼演武の儀　見事生還した暁には、おまえにわたしの目的を教えてあげるよ。おまえを召喚した本当の理由も、クオン＝カミヤのことも」

彼女の一方的な台詞の中にあの少年の名前があったことに、そして、彼と自分の関係を知っているかのような口振りに、セツナは、驚愕せざるを得なかった。それはセツナの召喚が仕組まれたものであるという可能性を示唆するとともに、やはり《白き盾の》クオン＝カミヤは紛れもなく彼の知人であるあの少年のことだという事実だった。

この世界に召喚されて以来最大の衝撃の中で、セツナは、アズマリアの手が紅蓮の門扉を押し開くのを見ていた。燃え盛る黒い炎の如き扉が、音も立てずにゆっくりと開いていく。門の向こう側に覗いたのは漆黒の闇であり、無数の光点だった。どす黒い殺意を孕む、暗く濁った紅い光。それらは、セツナが最初に森の中で見た化け物どもの眼光に似ていた。皇魔。幾多の囁きが聞こえた。ざわめいている。化け物どもが、獲物を前にして舌なめずりでもしているのかもしれない。

門が、完全に開いた。
汚濁の如き殺気の奔流が、セツナの意識を包み込んだ。

第四十四話 鬼と踊れ黒き獣

「武装召喚！」

その異形の存在が、紅蓮の闇の向こうから飛び出してくるのを察知したセツナが取った行動は、当然、それだった。武装召喚。それ以外に、狂おしいほどの殺意を放つ化け物に対抗する手段などなかった。体力が回復したばかりだという不安はあったが、ほかにどうしようもない。逃げるといふ選択肢はなかったのだ。立ち向かうしかない。

召喚までに要する時間はほんの数秒足らず。セツナがその意志を明確な言葉として発した瞬間、彼の全身に無数の光線が走り、幾何学的で複雑な紋様が描き出された。直後、目も眩むほどのまばゆい閃光が、セツナの体から発散された。

不快極まりない化け物の奇声が聞こえた。その威嚇めいた叫び声は、セツナが突然発光したことに驚いた証明かもしれない。だが、それも一瞬に過ぎない。光自体になんの力も無いことを皇魔が理解したのだ。化け物たちが、次々と門の外へと飛び出し、その人外異形の姿を白日の下へと曝していく。それも十や二十ではなかった。一目では把握しきれないほどの数の化け物が、セツナの眼前のみならず、四方八方に展開した。

しかし、もはやセツナに恐れるものなどなかった。一切の不安は消え去り、意識は冴え渡った。鋭敏化した感覚が、周囲の地形を隅々まで把握していく。視界が広がっただけではない。すべての感覚が、肥大しているのが分かる。いや、肥大しただけではない。研ぎ澄まされ、より繊細になっていく。

彼は、黒き矛の召喚に成功したのだ。

漆黒の矛。形容しがたいほどの禍々しさを放つ悪魔的な矛は、その穂先からして異様であり、化け物と相対するにこれ以上になくらい相応しい得物だった。その切れ味は、これまでの戦いで十二分

に証明されてはいるものの、未知の力もあつた。不安というほどのものではなかったが。

セツナは、矛を構えると、透かさず周囲を一瞥した。眩しいくらいの日差しの下、セツナを包囲した無数の化け物たちが、狂気染みた敵対心を露にしている。人外の存在ではあるようだったが、セツナがああ森で戦った皇魔とはまったく異なる姿だった。

それらは四肢を持ち、人間のように二本の足で地に立っていた。巨軀である。目測では、二メートルかそれ以上はあつた。真紅の肉体は燃えているかのようにであり、奇妙な骨格と異様に発達した筋肉が鎧のようであつた。獰猛な獣の如き顔つきも、どこか人間とは違つて見えた。双眸からは赤い光が漏れており、それは、森の中で遭遇した皇魔と同じ輝きだった。遠目から見れば人間と見まごうほどの姿にも拘らず、セツナが一目見て化け物だと判断した理由はそこにあつたのかもしれない。いや、気配からして人間とは程遠いものではあつたのだが。

さらにそれらには人間と決定的に異なる要素があつた。

それが、頭部に生えた角である。皇魔の頭部には、人間と同様に髪の毛が生えていたのだが、その側頭部　耳の少し上辺りから頭部後方に向かつて、一対の角が伸びているのだ。その角の存在が、彼らと人間をまったく異なる種族だと主張してやまなかつた。

そして、その極めて印象的な姿は、セツナにある伝説的な化け物を想起させた。

（まるで鬼だな）

その鬼たちがセツナを包囲したのは、矛の出現を予期したからなのかもしれず、矛の顕現を確認してからだったかもしれない。前者であれ後者であれ、セツナの召喚武装を警戒していないわけがなかった。

ともかくも、赤い肌の鬼の数は尋常ではなく、前方だけで二十体はいた。得物は見えない。その強靱な肉体こそが武器だとも言いただけであり、事実、その通りなのだろう。見るからに凶悪な拳は岩

石すら打ち砕きそうだった。

前方　アズマリアの《門》はその役目を果たしたからなのか、
跡形もなく消え失せていた。それだけではない。アズマリアの姿
のものも見当たらなかった。もつとも、彼女のことだ。どこかから
こちらの様子を窺っているに違いない。

セツナが数多の皇魔を相手にどう立ち回るのが試しているつもり
なのかもしれない。

「高みの見物かよ」

毒づくくと、セツナは、地を蹴って前に飛んだ。対多数の戦いは経
験済みだったし、なにより、あのとときの兵士たちのほうが遙かに恐
ろしかった。ログナーの殿軍。彼らは死兵と化し、意地でもセツナ
をあの場に留めようとしたのだ。仲間のため、友のために。みずか
らの命を顧みない彼らの戦いぶりは凄まじかった。しかし、だから
といってセツナは引くこともできなかった。結果、黒き矛はうなり
を上げて、彼らを一人残らず殺し尽くした。
（だったらなんだよ！）

胸中に芽生えかけた疑問を一蹴したセツナの眼前には、赤鬼の凶
悪な面構えがあった。赤い光を漏らす眼孔が、大きくなったような
気がした。セツナの速度に驚愕したのかもしれない。同時に聞こえ
た化け物めいた奇声は、やはり不愉快に他ならなかった。セツナは、
矛を振り下ろした。袈裟懸けの一閃が、皇魔の胴体を容易く両断し
ていく。鎧のような肉体さえも、黒き矛の前では紙切れ同然だった。
だが、肉塊と化した物体からどす黒い鮮血が吹き上がるのを見届け
ることはできなかった。

殺気が、頭上から降り注いできたのだ。咄嗟にセツナは後方へ飛
んだ。揺れる視界の中央　殺到した数体の皇魔によって、赤鬼の
死体がでたらめなまでに粉碎された。飛散する体液や臓物を全身に
浴びた皇魔たちは、正に悪鬼というに相応しい。

鬼の赤い眼光がこちらを捕捉するより早く、セツナの背中に激痛
が走った。呼吸が止まる。

「っ……！」

強烈な打撃。後方から接近してきていたらしい皇魔が、機を逃さずにセツナの無防備な背中にも打撃を叩き込んできたのだ。しかし、その一撃がなんとか堪えられるくらいに激痛で済んだのは不幸中の幸いだ。直撃ではなかったのだらう。会心の当たりならば、セツナの背骨は粉々になっていたのかもしれない。

(いや)

前へとつんのめるようにして地面を転がりながら、セツナは、致命傷にならなかったことへの疑問を禁じえなかった。皇魔には、死体とはいえ硬い筋肉に覆われた物体を無残に破壊するだけの力があるのだ。その鬼の一撃を受けてなお意識を保っていられるのは、常識的に考えればありえないことのように思われた。意識が消し飛んでもおかしくはない。

(なら、これはなんだ?)

とはいえ、考えている余裕はない。

背後からの追撃を嫌ったセツナは、数度そのまま転がると勢いよく飛び起きた。それと同時に、前方の鬼たちが一斉に地を蹴るのを目撃する。それだけではない。左右の建物の屋根上に居並ぶ化け物たちも、後方から追いつめる皇魔たちも、苛烈なまでの殺気を隠そうともしなかった。

獰猛な獣たちの合唱にも似た大音声、セツナの鼓膜を激しく震わせた。そのあまりにもけたたましい咆哮は、《市街》の喧騒を容易く塗り替えるほどのものだった。聴覚が狂うほどの絶叫。それは威嚇などではない。それそのものが攻撃だったとしても、なんらおかしくはなかった。

セツナには、耳を塞ぐこともできないのだ。両手は、矛を持っために必要である。片手で片方の耳を塞ぐこともできたが、それでは大差がないだらうと判断した。それに、皇魔の攻撃手段は大声だけではない。むしろ、その強靱な肉体から繰り出される打撃にこそ注意を払うべきだらう。その身軽さにも目を見張るものがあったが。

眼前に、鬼の顔があつた。

真紅の眼光が視界を染める。

「！」

セツナは咄嗟に矛を振り上げようとしたが、それより速く、皇魔の拳が彼の腹部を抉っていた。重い一撃だった。内臓がいかれるだけではすまないほどの衝撃と激痛が、セツナの全身を揺らす。胃の内容物が逆流し、胃液が喉を焼いた。しかし、それだけでは終わらない。セツナの目の前が真っ黒になった。鬼の掌がセツナの頭を鷲？みにしたのだろう。皇魔の凶悪な握力に頭蓋が悲鳴を上げるのがセツナの狂った聴覚でも認識できた。恐怖が、セツナの肉体を強烈に突き動かす。

「だりゃあっ！」

強引に状態を捻って繰り出した矛の一閃は、空を切ったかのような手応えのなさをセツナにもたらしたが、彼は不安を抱きもしなかった。いまさら、矛の力を疑う必要もない。化け物の怨嗟に満ちた断末魔が、セツナの確信を後押しする。皇魔は絶命したはずだ。が、結果を見届ける余裕はなかった。殺気は全周囲から迫ってきてるのだ。

セツナは、鬼の手を引き剥がすと、矛を持ち直しながら左前方に向かって跳躍した。瞬間、視界の片隅で鬼の亡骸がくずおれようとしたが、その後方にいたのであろう化け物たちが、なんの躊躇もなくその死体を吹き飛ばした。こちらへの牽制だったのかもしれないが、そのとき、セツナの肉体は既に中空にあつた。

（よく見える！）

セツナは、眼下の光景に目を細めた。数え切れないほどの化け物が、狭い路地に犇めき合っているのがわかった。数にしてどれほどなのだろう。五十以上はいるに違いないのだが、それらがある程度の統率の元に動いているのが見て取れるのが厄介だった。しかも、同胞の死体を損壊するくらいなんとも思わないのは、これまでの行動で理解できるだろう。仲間意識はあるが、邪魔になれば容赦なく

切り捨てることができるのかもれない。

皇魔は、なにも路地だけにいるあけではない。家屋の屋根の上に居並ぶその姿は、自分の出番を待っているかのようだった。こちらが疲弊するのを待っているのか、それとも、付け入る隙を窺っているのか。どちらにせよ、すべての鬼を相手にするのは一苦勞だった。もつとも、先の戦いでセツナが殺した人数に比べれば、遥かに少ないに違いなかった。

(なら、大したことねーよな！)

自分に言い聞かせるようにつぶやいて、セツナは、皇魔たちが、追い続けるように飛び掛ってくるのを気配だけで認識した。音は聞こえない。聴覚は狂ったままだった。どこか感覚がおかしいのはそのせいだろう。しかし、その遊離したような意識の中で、セツナは、口の端に獰猛な笑みを刻んだ。

「行くぜ！」

心の奥底に眠っていた野性が目覚めたのか、どうか。

セツナは、鬼が待ち構える路上へと落下する最中、黒き矛を旋回させた、後方から迫り来る気配へと、切っ先を突きつける。今度は、十分な手応えがセツナの意識を昂揚させるほどに感じ取れた。化物の敵意に満ちた悲鳴は、セツナがその皇魔を殺し損ねたことを示していた。もつとも、セツナとしては十分な成果だった。今の一撃は、追い続ける連中への牽制に過ぎない。

着地へと至る数瞬、セツナは、再び矛を旋回させるように前方に向けた。眼前は、セツナを迎撃しようとするものと、こちらに飛びかかるうとするものでごった返していた。その数多の殺気たるや、幾重にも交じり合ってもものむせ返るくらいだった。

「鬱陶しいんだよ！」

怒号一閃。

セツナの視界を切り開いた漆黒の軌跡は、こちらへと殺到する皇魔たちの手や腕を切り払い、接近を阻むのとともに着地を容易にし、同時に鬼たちから大量の血を噴き出させた。どす黒くもあざやかな

液体が、セツナの目の前を殊更に紅く彩る。その血液の狭間を塗って伸びてくるのは、やはり、鬼の大きな手であった。しかし、その手がセツナに触れることはなかった。次の一閃が、その鬼の本体を真一文字に斬り裂いたからだ。

だが、それで止むような皇魔の攻勢ではなかった。

正に怒涛のような勢いで四方八方から襲い掛かってくる敵に対して、セツナは、当然のように恐怖を忘れた。冷やかな狂気が、セツナの間を研ぎ澄ませていた。鬼どもの一挙手一投足が、セツナの矛を旋回させた。漆黒の軌跡が虚空に刻まれるたびに、真紅の肉体は千切れ、体液や臓物を飛散させた。

「……？」

セツナが動きを止めたのは、どれほどの時間が経過してからだろう。十数体の皇魔が死体と化したのだ。一分や二分は過ぎ去ったのかも知れない。数十秒ということもありえるが、確信はなかった。

「なんだ……？」

セツナは、皇魔たちがいつの間にかこちらを遠巻きに包囲するよきな布陣を取っていることに気づき、怪訝な表情になったのだ。さつきまでの怒涛の攻勢はどこへやら、円を描くように居並んだ鬼たちは、まるでこちらの出方を窺っているかのように静まり返っていた。セツナの周囲には、十数の死体が転がっているだけだった。

鬼どもは、一様にこちらを注視しているだけだ。眼孔から漏れる紅い光に宿る殺意だけは、以前にも増して強くなってはいたが。

不意に、鬼の角が発光した。

「まさか……」

セツナの脳裏を過ぎったのは、いつかの森での戦いだった。皇魔の背の突起物から放たれた電光球。その破壊力を思い出して、セツナは、内心悲鳴を上げたくなった。

この場にいるすべての皇魔の角が、青白い光を帯びていた。そして、鬼たちが一斉にその大きな口を開く。

圧倒的な咆哮と爆発的な閃光が、セツナの視界を青白く染め上げ

た。

第四十五話 空を泳ぐもの

紅き戦鬼たちの口腔から放たれた蒼白の光は、路地裏の狭い空間を瞬く間に青白く塗り潰していった。数多の光の奔流が一点に集中、衝突した。閃光とともに盛大な爆発音が鳴り響き、凄まじい衝撃が大気を震わせ、建物や地面をも激しく揺さぶった。その爆発の光は、周囲の建物をいくらか破壊し、破片や粉塵を撒き散らした。

しかし、目に見える被害といえばそれくらいのもので、だれかが巻き込まれたとか、市民に被害が及んだとか言うことはまったくなかった。もつとも、先の爆音を聞きつけた人々が、野次馬根性を丸出しにこの場に来たならば、死傷者が出ないとも限らない。

皇魔おひまの数は未だに多い。アズマリアの《門》は、どれほどの鬼を召喚したのだろうか。少なくとも二十体近くの皇魔を殺したのだが、遠めに見ても減ったようには感じられなかった。

ふと。

「……？」

セツナは、怪訝な表情になった。セツナは一瞬前まで、鬼たちの攻撃の最中にいたはずだった。あの圧倒的な砲撃の渦中にいたのだ。どこにも逃げ場などは見当たらず、見つけたところで逃げ出す暇さえなかった。矛の力を信じることにくらいしか、セツナには許されなかったのだ。

なにが起きたのか、セツナには見当がつかなかった。覚えていることといえば、皇魔が光を発した瞬間、なにかによつて視界が遮られたことくらいだった。聴覚を始め、様々な感覚が狂っていた以上、自分の身に起きたことすべてを正確に把握できたわけではないのだ。そして、気づいたときには、彼は鬼の布陣を見下ろすほどの高所にいた。高層建築物の屋根の上である。さっきまでセツナがいた路地を見渡すにはちょうど良い高さであり、皇魔の様子を確認することも容易だった。

爆光は既に収まり、視界は正常化している。聴覚は未だに異常事態を訴えてきてはいるが、構ってもいられなかった。

見ると、爆発の起きた地点は半球状に陥没しており、周囲の建物も見事なまでに粉碎されていた。それは、皇魔の攻撃力の凄まじさを物語ると同時に、その凶悪な力を秘めた化け物が野放しにされているという現状を伝えていた。

「いやあ、間に合ってよかった。少しでも遅れていたら、大変な目に遭ってしまいましたね？」 セツナ「カミヤ殿」
「へ？」

セツナは、背後からの声に変な顔になった。聞いたことのない男の声だった。軽さと慎重さを併せ持つ、なんとも形容しようのない声。セツナは、すぐさま理解した。その男が、セツナを窮地から救ってくれたのだらう。それ以外には考えようがなかった。

セツナは、声の主を振り返った。
「どうも、はじめまして。ルウファです」

セツナが振り向くなり挨拶してきたのは、若い男だった。金髪碧眼の貴公子とでも言うべき容貌の青年。簡素で動きやすそうな衣服を身に付けている。一際目立つのは、純白のマントだろうか。風に靡くそれは、中ほどで二つに分かれており、翼のように見えなくもなかった。

彼は、他意のない笑みを浮かべていた。

「助けてくれて、ありがとうございます」

「いやいや、大したことじゃないですよ」

セツナが素直に感謝を述べると、ルウファは多少なりとも驚いたようだった。その理由はセツナには想像もつかないし、どうでもいいことには違いなかった。相手に悪意が微塵も感じられない以上、不用意な詮索は避けるべきだろう。

いまは、そんなことよりも大事なことがある。

咆哮が、眼下から聞こえてきていた。

「じゃあ、これで」

「え？」

相手の間の抜けた反応には構わず、セツナは、背後に向き直るなり屋根を蹴るようにして飛び出していた。化け物どもによる被害をこれ以上拡大させるわけにはいかなかった。皇魔の咆哮と先の爆音が、人々の興味を惹かないとも限らないのだ。目標を見失った化け物たちが、そんな市民を目にしたらどうなるか、さすがのセツナにも理解できた。

（んなこと、させるかよ！）

アズマリアの思惑など、いまは関係がなかった。理由はどうあれ、化け物が放たれてしまったのだ、人間の天敵とも呼べる異形の存在が。皇魔が。いまさら見て見ぬ振りはできないし、そもそもそんなつもりもなかった。鬼が《門》から飛び出してきた瞬間から、彼には、戦う以外の選択肢は存在しなくなつた。

故に、ルウファという青年がどうやってセツナのことを助けたのか考えもしなかつたし、高層建築物の屋根から飛び降りることにまったく躊躇しなかつた。

矛の力を信じたのだ。

「無茶だ！」

背後からルウファが叫んできたが、そのときには既にセツナの肉体は空中に躍り上がっていた。わずかばかりの滞空時間。眼下に広がるのは、王都ガンディアの《市街》マルス区の町並みであり、その活気に満ちた空気をぶち壊しにする破壊の爪痕だった。そして、皇魔の群れ。赤鬼たち。

セツナは、矛を握る両手に力を込めた。彼の体は重力に引つ張られるようにして、地面へと落下していった。止める術はない。

「おおおおお〜！？」

セツナは、落下による加速に悲鳴をあげた。十数メートルの高さから飛び降りるなど、やはり正気の沙汰ではなかつたのだ。が、後悔している暇はない。そうこうするうちに地面は目の前にまで近づいてきていた。化け物の姿は見えない。大通りにでも移動し始めて

いるのかもしれない。人間を襲うために。

セツナは、矛の切っ先を地面に向けた。

「矛よ　！」

セツナの願いが届いたのか。

突然、矛の石突に埋め込まれた宝玉が眩い光を発した。宝玉から生じた光は、幾筋もの光条となつて柄の上を走り、穂先へと到達する。切っ先に集中した光は、セツナの目に痛いくらいの輝きを発すると、次の瞬間、爆発的に膨れ上がった。

「え？」

矛の切っ先が放出した光芒は、セツナの視界を真っ白に染め上げた直後、落下予定地点の地面に激突した。破壊的な閃光とともに、爆音が乱舞する。粉塵と爆煙が怒涛のように押し寄せてきた。

地面は破壊されたのだろう。矛に秘められた圧倒的な力によって一瞬にして蹂躪されたのだ。周囲の建物に被害が及んでいてもおかしくはない。

落下は、収まらない。

(い、意味ねええええええええ！)

セツナは、愕然とするしかなかった。彼が矛に願ったのは、破壊の力などではなかった。なんらかの方法で落下を制御することだけであり、無差別な破壊などこればっちも望まなかった。しかし、もはやどうしようもない。

濛々たる黒煙の先には、破壊された地面が待っている。

「本当、無茶苦茶だな」

涼風のような　　といえは言い過ぎかもしれないが　　男の声は、セツナのすぐ背後から聞こえた。間違はなく、あのルウファという青年の声だ。あとを追って飛び降りてきたのだろうか？　だとすれば、とんでもない人間に違いない。

「？」

「ま、それくらいじゃなきゃ、あれだけの活躍はできないか」

そのとき、だれかの手がセツナの腕を掴んだ。強い力だった。そ

してなぜか、落下速度が急激に減速していった。セツナにはなにが起こったのかわからなかったが、少なくとも地面に激突して死ぬという最悪の事態だけは免れたらしいということは分かった。セツナがそちらを見遣ると、苦笑とも微笑ともつかない表情を浮かべたルウファの姿があった。

セツナの腕を掴んだ彼は、どういう原理かは分からないが空中に浮かんでいるらしかった。そう、原理は分からない。ただ、彼が空に浮かんでいることに対しては疑問を覚えることはなかった。むしろ、セツナは一目見て納得した。せざるを得なかったというべきかも知れない。

なぜなら、ルウファの背には、一對の白き翼が生えていたのだ。

第四十六話 召喚師たち

「シルフィードフェザーと名づけたのは、若気の至りという奴ですがね」

粉塵渦巻く地上に降り立つなり、ルウファがセツナに向かってそんなことを言ってきた。もっとも、セツナは、彼の立ち姿に見惚れかけて、生返事を浮かべることができなかったのだが。

一対の翼に、である。

その純白の翼は、ルウファの背中から生えているように見えたが、実際にはそうではなかった。よく見ればすぐにわかることだったが、ルウファの纏う外套から一対の翼が伸びているのだ。いや、マントそのものが、翼を形成しているようだった。最初に見たときに比べて形状が大きく変わっているのは、そのマントが変形したということに違いない。原理は不明だが、それ以外には考えられなかった。そして、汚れ無き白さを誇る一対の翼は、想像上の天使のそのように美しく、見るものを圧倒する輝きを帯びていた。粉塵さえも、翼を汚すことを恐れるかのように逸れていく。

セツナは、そこでようやく、五体満足のまま地上へと辿り着けたことに思い至った。黒き矛から放たれた光によって破壊された地面の上、状態は万全とはいえないが、それでも十分に過ぎるだろう。

「ありがとうございます……二度も、助けてもらって」

感謝を述べながら、セツナは、言いようのない気恥ずかしさに顔を赤らめるしかなかった。あの屋上から威勢よく飛び出したものの、結局それは無謀な勇み足に過ぎなかったのだ。愚行だ。もし、ルウファが助けてくれなければ、セツナの肉体は地面に激突し、粉々に砕け散っていただろう。

矛の力を過信したのだ。

それは偏に、理解していないからに違いない。

(矛の力を)

セツナは、矛のことを想った。手の内にある黒き矛は、その禍々しい形状のままに驚異的な破壊力を秘めている。それは先の戦いで実証済みだった。鉄の鎧すら紙くず同然に斬り裂くほどの力。多勢に無勢をもものもしない力。しかし、いまのところそれくらいしかわかっていないのが実情だった。

できることとできないこと。

それを知らなければならぬ。

(力の使い方……か)

セツナは、いけ好かないがアズマリアの言うことももつともだと思った。力の遣い方も知らない、未熟な戦士。このままでは、矛の強大すぎる力に振り回されるのが落ちだろう。実際、先の戦いがそうだった。セツナの実力などでは決してなかった。あの瞬間、矛の力が、セツナの肉体を突き動かしていた。

そもそもセツナは、戦いにおいては素人以下に等しいはずだった。特別腕っ節が強いわけでもなく、類まれな身体能力があるわけでもない。学生の平均より多少は上といった程度の体力しか持ち得なかった。にも拘らず、皇魔おんまやランカインとの戦いを潜り抜け、初陣において多大な戦果を上げることができたのは、黒き矛のとてつもなく強大な力のおかげだった。

すべて、それである。

黒き矛を召喚したがために、セツナはいま、こんな場所で戦う破目になっている。

「いやいや。ガンディアの人間としては、こんなところでセツナ殿に死なれては困りますからね」

ルウファの声に、セツナは、とめどない思索の旅から帰還を果たすことができた。彼が話しかけてくれなければ、延々と答えの見つかりそうもない考えに耽っていたかもしれないという事実に愕然として、セツナは、苦い表情になった。

もつとも、ルウファはこちらのことなど気にも留めていない様子だったが。

「ま、セツナ殿の考えもわからなくはない」

周囲に視線を巡らせるルウファに倣い、セツナも周りを見遣った。粉塵は既に風に流されてしまっており、セツナの矛による破壊の爪痕の有様が、晴れ渡った空の下に曝されていた。矛の切っ先から放出された光は、地面に穴を開けるだけでは飽き足らず、周辺の家屋の壁にもその威力を刻み付けていた。

(なんてこった……)

セツナは目を覆いたくなかったが、しかし、現実から逃避している場合でもないのは理解できていた。数十の皇魔が、こちらに向かつて接近してくるのが目に飛び込んできたのだ。さきほどの嵐のような攻撃から逃がられたことに憤っているのか、物凄まじいまでの殺気を放ちながら、正に鬼気迫る勢いでこちらに向かってくる。

だが、すべての鬼が距離を埋めようとしているわけではなかった。後方には、半数ほどの皇魔が残っていた。

「これほどの数のレスベルがなぜこの王都にいるのかはこの際置いておくとして、奴らをなんとしてでも排除しない限りは、市民の安全もないわけだ」

「レスベル？」

「あの皇魔の識別名ですが、知らなかったんですか？ 武装召喚師なら常識でしょうに」

「え、えーと……」

驚いたようなルウファの声に、セツナは返す言葉もなかった。取り繕うことさえもできない。皇魔のことなどほとんど知らないといつても過言ではなかった。古の聖皇が召喚してしまった異世界の魔物ということくらいしか知らなかったし、識別名が必要なほど多様な存在だということなど考えてもいなかった。だが、森で戦った皇魔とアズマリアの《門》から現れた皇魔の姿形が違うことから考えれば、納得のいく話でもある。

皇魔というのは大枠と考えればいいのだ。その中に、レスベルという鬼のような種族があり、森で出遭った皇魔の種族もあると。

察するに皇魔とは、異世界から召喚され、この世界の人間に危害を加える異形の存在の総称なのかもしれない。

「ま、いいですよ。奴らを蹴散らすことが先決なんでね」

「ルウファさんも、武装召喚師なんですか？」

「見てわかりませんか？ あ、俺のことはルウファでいいですから」

「だったら、俺もセツナでいいです」

「それならセツナには前衛を任せます。後方は、俺がやるんで！」

言うが早いか、ルウファは地を蹴るようにして飛んだ。まさに飛翔だつと。中空を滑るような飛躍。純白の翼が羽ばたくたびに彼の飛翔は加速した。止まらない。地を進む鬼の頭上を容易く越え、あつという間に後方に陣取るレスベルの群れへと到達した。

「わ、わかったよ……」

セツナが呆気にとられたのも無理はなかったかもしれない。彼が呆然とする間にも皇魔の先陣はこちらとの距離を詰めてくるのだが、セツナの意識はルウファの姿を捉えて離さなかった。

陽光を反射する白き一對の翼は、さながら光の粒子を撒き散らすかのようにあり、赤き異形の者共へ立ち向かう様は、悪魔の群れを討ち滅ぼさんとする気高き天使の姿を想起させるほどに幻想的だつた。

その背の翼こそが彼の召喚武装なのだろうが、それにしてもそのある種神々しいとさえ想えるほどの造形は、セツナの矛とは極めて対照的だと言わざるを得なかった。ルウファが天使の翼ならば、セツナは悪魔の矛であろう。

とはいえ、その形状の違いがもたらすのは、一目見た印象に過ぎず、召喚武装の持つ力とは関係はないはずだった。

と、ルウファが、中空から地上へと降り立とうとしたまさにその時、レスベルの醜くもおぞましい咆哮とともに、彼らの口腔から青白い光が迸った。

「あんたも無茶苦茶じゃないか……!!」

ルウファへの直撃による閃光と爆音が轟く中、セツナは、舌打ち

とともに矛を構えた。皇魔の群れは、既に目の前だった。距離にして十メートルもあるだろうか。素人の目測ほどあてにならないものもないだろうと思いつつも、セツナは、矛を手に行っている以上、そういうことで不安を抱く必要がない事実を認めていた。

流れに任せるように、跳ぶ。レスベルたちの熱視線を浴びながら、その怨嗟と憎悪の渦中へ。間合いは、瞬く間にしてゼロになる。

化け物たちが大口を開けた。口腔内に青白くも不気味な輝きが生まれる。破壊衝動の塊。

(それが狙いか！)

セツナは、胸中吐き捨てた。皇魔は、最初からそのつもりだったに違いない。遠距離の砲撃は、先ほどと同様に回避されると認識したのだろう。極至近ならば、だれであれ、避けようがない。

セツナの着地は、皇魔の砲撃よりわずかに速い。数十体のレスベルの眼前。近接戦闘の間合いだった。

「はあっ」

セツナは、気合とともに矛を真一文字に振るい、目の前の鬼の腹を斬り裂いた。あざやかな一閃だったが、それだけだ。斬られた鬼は、苦悶の表情を浮かべたものの、口の中の光を散らそうともしなかった。殺し損ねたのだ。

「ちっ！」

失態を嘆いている暇はなかった。レスベルたちの殺気が、急激に増大した。

「セツナ、飛んで！」

それは天からの救いの声のように、セツナには聞こえた。肉体が劇的な速度で反応する。全身のバネを利用した頭上への跳躍。だが、皇魔たちがセツナから目を離すはずもない。赤く輝く無数の視線が、こちらを捕捉し続けているのは明白だった。

皇魔の殺気が爆発する、その瞬間。

一条の雷光が、セツナの眼下、今にも咆哮を上げようとした皇魔の眉間を貫くと同時にその頭部を爆散させた。飛散するのは肉片や

脳漿だけではない。口腔に溜め込んだ光も拡散し、周囲のレスベルを襲った。それだけでは終わらない。立て続けに飛来した幾つもの紫電の帯が、皇魔の頭や胸、腹に次々と突き刺さり、炸裂していった。

化け物どもの悲鳴と怒号が、セツナの耳朵を震わせた。中空へと至ったセツナの直下は、阿鼻叫喚の地獄絵図に見えなくもなかった。地を埋める皇魔の亡骸と、半身を失いながらもなお怨嗟の叫びを発する鬼の姿、そして、こちらに向かって青白い光を放出する化け物たち。

「！」

セツナは、目を見開いた。視界が、青白い光に覆われていく。今の攻撃で倒れなかった皇魔たちは、セツナからまったく注意を逸らさなかったのだ。こちらは中空。体勢を変えることは愚か、その場から移動することなど不可能だった。

(今度こそ)

「とってもいい感じだ」

覚悟を決めようとしたセツナの耳に飛び込んできたのは、ルウファの軽妙極まりないせりふだった。同時に、視界が急激に変転する。その瞬間、セツナの全身にかかった圧力は想像だにしない類のものであり、彼は、なにが起こったのか理解もできなかった。

前方で、地上から放たれた青白い光の奔流がぶつかり合い、大きな爆発を起こした。閃光と轟音が世界を染め上げ、爆風がセツナの頬を撫でた。

「到着」

あっけらかんとしたルウファの声に、セツナは、目を瞬かせた。そうこうする間に、地上が近づいてくるのがわかる。

そこは、皇魔の群れからは、かなり離れた位置だった。

セツナが頭上を仰ぐと、白き翼を広げたルウファが黒き矛の柄を掴んでいることがわかった。つまるところ彼は、中空に跳んでいたセツナの窮地を察知し、一瞬の機転でここまで運んでくれたのだろ

う。それにしたって凄まじい速度と判断である。

とはいえ。

「あれ？ 無傷……？」

着地するなりセツナが言ったことといえばそれであったが。

実際、セツナの目の前に降り立ったルウファには、掠り傷ひとつ見当たらなかった。レスベルの砲撃の直撃を受けたはずにも関わらず、だ。

「我が翼は飛翔するのみにあ

「セツナ！ 無事なのね！」

びしつと言いつ放とうとしたのであろうルウファの台詞をぶつた切ったのは、ファリアの悲鳴にも似た声だった。焦燥感に満ちた声音には、どうしようもない不安が現れていた。

セツナは、瞬時に慄然としたルウファを気の毒に思いながらも、彼女を振り返らずにはいられなかった。救いの声を聞いたあの瞬間から、彼は、その名前を口に出したくて仕方がなかったのかもしれない。

「ファリア！」

振り返った先に、異形の弓を携えたファリア＝ベルファリアの姿があった。

安堵が、セツナの胸を満たした。

第四十七話 彼の運命、彼女の使命

「すっごく心配したのよ？ あの人だからをなんとか抜け出せたかと思ったら、あなたの姿が見当たらないんだもの」

詰め寄ってくる風でもなく告げてきたファリア「ベルファリアの言葉に、微塵の嘘もわずかばかりの欺瞞も含まれているはずがなかった。彼女は真剣そのものなのだ。眼鏡のレンズの向こう側から緑柱玉のような瞳が、こちらをじつと見つめていた。

セツナには謝る以外の選択肢はなかっただろう。実際問題、あの場から飛び出したのはほかでもない、セツナの自分勝手な判断であり、彼にとつて保護者に等しいファリアから離れすぎるのは良くなかったのかもしれない。

「ご、ごめん。ファリアを探したかったけど、あの場には居られなかったし……」

言い訳に過ぎなかったが、あの場に留まっていたことができそうになかったのも事実である。市民が騒ぎすぎている。混乱が混乱を呼び、喧騒が喧騒を生んでいた、もはやセツナ一人の力ではどうすることもできない事態にまで発展していたのだ。異常事態といつてもいいかもしれない。たかがセツナ一人であそこまでの騒ぎになるなど、だれが想像できるのだろうか。それはファリアにも予想できなかったに違いない。

「それはわかるわよ。でも、でもね」

「あゝ、もしもし？」

ふたりの会話に割って入ってきたのは、ルウファだった。黙殺され続けて痺れを切らしたのかもしれない。

「ん？」

「はい？」

セツナは、ファリアとともに彼を振り返った。ルウファは微妙な苦笑を浮かべていたが、背の翼は、いつだって眩い輝きを帯びてい

るように見えた。光を発しているというわけでもないようである。頭上から燦燦と降り注ぐ太陽光線を反射しているだけなのかもしれないが、それにしてもあざやかだった。

「感動の再会は後にしてくれるかな？　まずはレスベルを殲滅しないと、熱い抱擁も涙の口づけもできやしませんぜ」

ルウファが軽妙な調子で紡いだ言葉に、セツナは、心が軽くなつていく自分に気づいた。といって、必ずしも軽くはなり過ぎない。心の重さが体の反応を鈍くしないほどのちょうど良い軽さ。

もっとも、ファリアは彼の言葉に愕然としたようだったが。

「な………!?!」

「そうだな」

「なにを言ってるのよ？　それにセツナも同意しない！　熱い抱擁はともかく、涙の口づけってなによ？　確かに涙無しには語れないけれども！」

「そこなのか？」

しかし、セツナの疑問は軽く流された。

「……ところで当然のように居るけど、あなたはどこのどちら様？

セツナを助けてくれたことには感謝していますが」

物腰も慇懃に尋ねるファリアの横顔を、セツナはいつになく冷静に見つめていた。いつ見ても素敵な横顔だと思っただが、いまは見とれている場合でもないだろう。

「ああ、自己紹介くらいはしておきますか。その方がなにかと便利だ。俺はルウファ。見ての通りの武装召喚師です。どうぞよろしく、ファリアⅡベルファリア殿」

ルウファの改まった自己紹介に、セツナは、彼の姿をまじまじと見つめた。金髪碧眼の貴公子とでも言うべき彼の姿は、背中の翼も相俟って、やはり地上に舞い降りた天使に見えなくもなかった。

ファリアが、驚愕の声を上げた。が、自分の名を知られていることに対してではなかった。

「ルウファって、バルガザール將軍の………!?!」

「え?……え?」

セツナは、驚きのあまりルウファを二度見してしまった。彼女の反応に感化されたわけではない。純粹に驚いたのだ。

アルガザードⅡバルガザール將軍と言えば、先の戦いにおいてレオンガンド王とともに采配を振るつた人物であり、セツナの知る限りでは王に次ぐ実力者と言えた。それは無論、セツナの知識の拙さからくるものであり、ガンディアの有力者など掃いて捨てるほどいるのかもしれない。

「出来の悪い次男坊で」

彼は自嘲気味に笑ったが、皇魔の怒号がその軽すぎる声音を掻き消したのは当然の結果というのは言い過ぎだろうか。

「なんて空気の読めない連中なんだ?」

嘆息するルウファに、セツナは、頭を振った。

「や、あんな化け物が空気を読んだら、それはそれで不気味だろ」

「一理ある」

ルウファは、セツナの言葉にうんうんと頷いたかに見えたが。

「けど、納得できないね!」

皇魔の方向に向き直るなり、彼は、地を蹴った。彼の肉体が中空に躍り上がった瞬間、翼が閃き、大気を叩いた。加速は一瞬。気づいたときには彼の姿は、こちらに迫り来るレスベルたちの後方にあつた。

圧倒されたのか呆気に取られたのか、自分でもよくわからない感覚の中で、セツナはぽつりとつぶやいた。

「なんなんだ?」

「人生に不満でもあるのかしら」

セツナが、そんな風に小首を傾げるフェアリアを横目で見てみると、化け物どもの悲鳴と怒号が聞こえてきた。前方十数メートル先数え切れないレスベルの集団の後方から、血飛沫が上がっていた。ルウファだろう。

「攻撃にも使えるのね、あの翼」

「凄いな」

「セツナほどじゃないわよ」

「そうかな？」

「あなたのそれは規格外なもの」

セツナは、ファリアがそれと言ったものを見下ろした。悪魔的な印象を拭えない黒き矛は、確かに尋常ではない力を秘めている。

切れ味だけではない。

思い返せば、森の中で皇魔の雷球を弾いたことが最初だったか。

カランを焼く大量の炎を吸収したこともそうだ。そして、蓄積した炎の開放による大量殺戮。脅威的な力は、それだけに止まらない。

先もそうだ。望んだ結果にはならなかったものの、切っ先から放出された光の奔流は、想像以上の破壊力を見せつけた。

「さあ、わたしたちも行きましょう。レスベルを殲滅するのよ。《市街》が混乱に陥る前に」

「おう！」

ファリアの言葉に、セツナは力強く頷いた。前方に向き直り、同時に地を蹴った。駆け出しながら、矛の柄を強く握った。

その瞬間、セツナは、指先のみならず掌のすべてで、黒き柄の確かな脈動を感じた。

どくん。

なにかがセツナの意識を震わせた。感覚が肥大する。ついさっきまで鳴りを潜めていた痛みの増大とともに視野が広がり、周囲の地形を感覚だけで把握する。《市街》の路地の迷宮めいた複雑な作りは、大都市ならではのものには違いなかったが。

(なんだこれ……?)

肥大した感覚が急速に尖鋭化していく中で、セツナは、躍動する肉体を抑えられなかった。いや、抑える必要などはない。敵を滅ぼさなければならぬ。

レスベルの群れは、前方　矛の光線による破壊跡の近辺にいた。鬼の集団は、頭上を飛び越え、背後を突いたルウファにその注意を

向けていた。無論、こちらを注視するものもいるにはいる。しかし、ルウファの攻撃の苛烈さは、皇魔の注意を引きつけるには十分だった。

セツナの拡大した知覚は、ルウファの戦う様を脳裏に投影していた。

華麗で鮮烈な戦いだった。

怒号とともに押し寄せたレスベルたちの猛攻を舞うようにながら、その瞬間に手痛い反撃を叩き込んでいた。翼によるカウンター。それは打撃ではない。斬撃といって差し支えなかった。一対の白翼を形成する無数の羽の一枚一枚が、研ぎ澄まされた鋼鉄の刃そのものであり、彼が適当に羽ばたかせるだけで周囲の敵を切り刻んだ。夥しい返り血がその白き翼を赤黒く染めていく。

(俺も……！)

触発されたのかどうか。

セツナは、跳躍した。敵陣までの距離は凡そ五メートル。いまのセツナなら十分に到達可能な距離だった。黒き矛が彼の飛躍を助長していた。

セツナが中空へ躍り上がる最中、彼の眼下を三本の雷の帯が走り抜けた。ファリアの弓オーロラストームによるものだろう。

三条の雷光がレスベルに直撃し、炸裂したのは、セツナが鬼の群れの直上に至るよりわずかに速い。狂おしいまでの悲鳴が上がったが、さらなる怒号によってあっけなく掻き消された。そこへファリアの第二射が撃ち込まれ、半狂乱状態のレスベルたちは永遠の沈黙に沈んだ。

皇魔たちの頭上、セツナは、矛を天高く掲げた。意識を集中する。肥大し、研ぎ澄まされた感覚が、地上の皇魔たちの動作の一つ一つを正確に把握していた。化け物の息づかいさえ、耳に届いていた。

レスベルたちはこちらの居場所を認識してもいないようだった。後方のルウファと前方のファリアによる挟撃が混乱を呼び、皇魔たちの思考力を奪っていたのかもしれない。

そしてセツナは、皇魔の群れの真ん中目掛けて黒き矛を投げつけた。叫ぶ。

「行っけええええっ！」

この投擲でなにが起こるのかなどわからなかった。ただ、矛の力を信じていた。過信でも、妄信でもない。ましてや狂信などでは断じてなかった。矛に秘められた絶大な力が万能ではないということ、さつきっ把握したばかりだった。だが、今回は違う。セツナが求めるのは破壊であり、それは矛の力の方向と合致するはずだった。矛のことを完全に理解したわけではないが、それでも、その黒き器に渦巻く膨大な力の形、その片鱗くらいは感じられた。

破壊。

それこそが矛の意志ならば、セツナもまた、破壊を望むだけだった。

その考え方が正しかったのか。

黒き矛は、セツナの手を離れた瞬間、その石突の宝玉から光を發した。目映い黄金色の光は、黒き矛を瞬く間に金色に染め上げると、大気の中でうなりを上げた。轟音とともに放射された熱風が、セツナの全身を包み込み、大量の汗が彼の体から噴き出した。が、それも一瞬の出来事に過ぎない。

熱源は、既に地上に向かって落下していた。

いや、それはもはや落下などと呼べるようなものではなかった。

投擲したのだから当然ではあったが、それだけではない。轟音と光熱を發しながら目標地点へと加速するそれは、さながら、ミサイルのようだった。

そのとき、皇魔たちがセツナを振り仰いできた。彼の叫び声か矛の轟音に反応したのだろうか、それにしてもあまりに遅過ぎた。

金色の矛は、既に地上に到達していた。熱風と爆音を轟かせながら、地面に突き刺さる。

瞬間、矛が發散した黄金の閃光が、セツナの視界さえも金色に染め上げた。無論、それで終わりではない。始まりだった。目に痛い

ほどの光輝が地面を覆った直後、破壊の音が、セツナの拡張された聴覚が捉えた。なにかが破壊される決定的な音。

光が、地中から噴き出した。地を割き、天を衝くほどの奔流となつて立ち上つていく。圧倒的な力の暴走が、レスベルの群れを纏めて上空に打ち上げ、斬り裂き、貫く。乱立する光の柱のひとつが、セツナの眼前を通過した。熱が、セツナの前髪をわずかに焦がした。破壊は、止まらない。

連続的な爆砕が引き起こす破滅的な旋律と、化け物の悲鳴とも怒号ともつかない断末魔の絶叫が、この世の終わりを彩るかのようであり、物凄まじい衝撃と振動が大地と大気をあらん限りの力で揺さぶつた。渦巻く熱気が、破壊の連鎖が、地を引き裂き、周辺の建物を倒壊させ、《市街》の一角に強烈な破壊の爪痕を刻んでいく。

(やりすぎだ……！)

セツナは、絶句したが、もはやどうすることもできないという事実も理解していた。彼の手を離れた矛は、セツナの望むがままに破壊の力を発揮したに過ぎない。

圧倒的な力だった。

セツナが地上へと落下する最中も、その猛威は吹き荒れていた。想像を絶するというに相応しいだけの被害が、王都の《市街》にもたらされた。

破壊の奔流は、レスベルの群れを事も無げに飲み込み、圧倒的な力を見せ付けるわけもなく粉碎した。

殲滅。

破壊音が止んだ後、濛々たる爆煙と大量の粉塵が世界を覆っていた。

皇魔の気配は消えてなくなり、その点で言えば、セツナは安心して着地することができた。もっとも、でたらめに破壊された地面に綺麗な着地を決めることはできなかったが。

「えーと……これはなんの真似かな？」

あきれたような口振りではあったが、ルウファの声音からはさっ

きまでの軽妙さが鳴りを潜めていた。恐怖の影が揺らめいている。仕方のないことだろう。セツナは、諦めに似た感情とともに体を起こした。着地に失敗した拳句転倒してしまったのだ。幸いにも怪我はなかった。全身汗まみれなのは、矛が放射した熱波のせいにはならない。

セツナは立ち上がると、周囲の状況を把握するべく辺りを見回した。

「凄い有様だな……」

ルウファの言葉を軽く聞き流したものの、セツナも同種の感想を抱かずにはいられなかった。粉塵が風に流されたあと、周囲に広がったのは、壊滅的な光景だった。惨状とでもいべきかもしれない。閑静な路地裏の町並みには、徹底的な破壊が加えられ、原形をとどめるものはほとんどなかった。地面は引き裂かれ、家屋は崩壊し、破片や残骸が散乱していた。数多くの皇魔の死体は、破壊の奔流の中で打ち碎かるか、切り裂かれるかしており、その上で熱波に焼かれているため、見るも無残な状態だった。

普通なら目を背けてしまいうくらいに惨憺たる情景の中で、セツナは、額の汗を拭いた。不意に込み上げてきたおかしさに苦笑する。こんな地獄のような有様を演出しておいて、なぜこうまで冷静でいられるのだろう。焦りも緊張もない。極めて平静な感覚は、思考の透明性を保つのに一役買っているのだろうか。

「セツナー！ 大丈夫なのー？」

あらん限りの大声に顔を向けると、ファリアがこちらに向かって駆け寄ってくるのが見えた。反対方向にはルウファの姿があるに違いない。近づいてくるのかはともかく。

セツナは、すぐ手前の地中に半ばまで突き刺さったままの黒き矛に手を伸ばした。矛は、セツナの望み通りに力を振るい、想像以上の結果をこの世界にもたらした。言うべき言葉ではなく、嘆息さえも浮かばない。

すべて、終わってしまった。

と、どこからともなく、拍手が聞こえてくる。

「わたしの予想以上の結果だよ、セツナ。実に素晴らしい」

彼女は、倒壊した建物の残骸に腰掛けるようにしていた。アズマリア「アルテマックス。まごう事なき絶世の美女であり、非の打ち所がないとは彼女のためにある言葉だといっても過言ではないのかもしれない。

彼女の背後には、壮麗な門が立ち尽くしていた。全長五メートル以上はあるであろう門は、金、銀、宝石の類で飾り立てられてはいるものの、その飾り付けの妙なのか、嫌らしさみたいなものは感じられなかった。アズマリアの召喚武装には違いないのだろうが、いつの間に召喚したというのだろう。セツナは、戦闘中そんな気配をまったく感じなかったことを不思議に思った。

「これが試練かよ」

セツナは、吐き捨てるように言った。この世界に召喚した張本人である彼女のことは、いまやなにひとつ信用ならなかった。この状況で信用しろというほうが無理があるだろう。もっとも、アズマリア自身が信用しろと言ってきているわけではないが。

「そうだ。そして、見事試練を乗り越えたおまえの運命は、決まった」

アズマリアが、瓦礫から飛び降りた。黒衣が揺れる。

セツナは、怪訝な顔をした。意味が分からない。

「運命？ なにを言ってるんだよ、力の使い方がなんなのって言うてたじゃないか」

「もう決まってしまったことなのだ。おまえは、わたしとともに地獄へ行くのだ」

「地獄？ なにを言って……」

もはや理解不能の域に到達した彼女の言い分に、セツナは、頭を抱えたくなった。しかし、アズマリアは、こちらの様子などお構い無しに話を続ける。

「《門》は開いた」

事実、アズマリアの背後で壮麗な門がその扉を開いていた。扉の先には暗闇が広がっており、門の後ろにあるはずの景色は見えなかった。

「あとは、おまえが潜り抜けるだけだ。この先には阿鼻叫喚の地獄が待っている。おまえのための地獄だ。おまえが、その矛に秘められた途方もない力を制御するためにはどうしても必要なことなのだよ」

「制御……」

いまのセツナには、その言葉はとても魅力的に聞こえた。皇魔を殲滅するためとはいえ、街の一角に壊滅的な打撃を与えてしまったのだ。それは偏に、セツナが矛の力を制御できてなかったからにほかならない。被害が及んでいるのは、地面だけではないのだ。周囲の家屋も徹底的に破壊してしまっている。死傷者が出ていないとは言いいられない。そうなれば、力が制御できませんでした、すみません、では済まないのだ。

セツナは、黒き矛に触れようとして伸ばした手が、虚空をさまよっていることに気づき、愕然とした。無意識のうちに矛を拒絶しているのか、掴むかどうか逡巡しているのか。

「どうした？ このままではおまえは、力を制御することなどかわない。それがどういった事態を引き起こすのかわからないほど、愚かではあるまい」

「……《門》を潜れば、身に付けることができるのか？ 矛を制御する力」

「わたしは嘘は言わない」

アズマリアは断言したが、セツナには彼女の言葉が信じられなかった。とはいえ、思い返してみれば、アズマリアが積極的に嘘や偽りを言ってきたことがなかったのも事実だった。思惑を隠されたり、放り出されたりはしたものの、騙されたという記憶はセツナにはなかったのだ。

セツナは、矛の石突に埋め込まれた宝玉に触れた。冷やかな感

触が、指先から全身にまで浸透する。黒き矛の膨大にして破壊的な力を制御できないというのならば、この矛を召喚して戦うことはできないだろう。ましてや、数多くの味方とともに戦場に立つなど、とてもじゃないが考えられなかった。

確実に、傷つけてしまう。いや、それならまだしも、死者がでてもおかしくはない。それほど力だった。実際、フェアリアやルウフアが巻き込まれなかったのは、ただの幸運だったのかもしれないのだ。

「俺は……」

迷いは、セツナの思考を鈍らせていた。

「さあ、セツナ。こちらへ」

甘美な言葉だった。その誘惑に応じれば、セツナは武装召喚師として新たな段階へと至ることができるのだろう。地獄などという得ても知れない場所で、黒き矛を制御する術を学ぶことができるのだろう。それは、いまのセツナにとってもっとも優先すべき事項のようには想えてならなかった。

が。

「アズマリア＝アルテマックス！」

セツナの弛緩しかけた意識に緊張をもたらしたのは、フェアリアの鋭い叫び声だった。緊迫感に満ちた攻撃的な声は、大気を引き裂き、響き渡る。

いや、大気を引き裂いたのは、一条の雷光であった。

「フェアリア!？」

セツナは、雷光を帯びた一本の矢がアズマリアへと飛来するのを見て、驚きのあまり声を上擦らせた。

雷光を帯びた矢は、しかし、アズマリアに突き刺さることはなかった。アズマリアが、黒衣の袖で矢を払ったのだ。流れるような動作だった。一部の隙も見当たらない完璧な動きは、フェアリアの矢のみならず、セツナの矛ですらも捉えきれないかもしれないかもしれない。……あの顔、どこかで見ることがあるな」

面白くもなさそうに、アズマリア。興を殺がれたとでも言いたげなまなざしだった。

「我が名はフェアリア！ 使命に従い、あなたを討つ！」

フェアリアの叫び声は勇ましく、普段の彼女からは考えられない力強さがあった。おいつて、彼女は戦場に立つ武装召喚師である。勇ましいのは当然なのかもしれない。

それでも、セツナは驚かざるを得なかった。カランの街で出逢った当初のことを思い出せば、当たり前なことではある。あの事情聴取のとき、彼女はセツナの口から出たその名に心の底から喜んでいく様子だったのだ。

アズマリア「アルテマックスの弟子。」

今でもなぜそんな嘘をついたのかは分からないが、アズマリアの雷名は、セツナに想像以上の幸運を運んでくれた。フェアリアと行動を共にするようになったのもそうだし、レオンガンドと出逢うことになったきっかけも、フェアリアが報告書に記載したアズマリアの弟子という一文からだった。

人間、どうなるのかわかったものではない。

その場しのぎのでまかせが、セツナに数多の人々との出逢いを演出してくれたのだ。

それだけは、アズマリア「アルテマックスという伝説的な人物に感謝していいのかもしれない。」

「フェアリア……懐かしい名だ。彼女の娘　いや、孫か」

アズマリアは、値踏みするような目で、フェアリアを見遣っているようだった。距離は遠い。十メートルほどはあるだろう。フェアリアは接近するつもりはないのだろう。射程距離内の目標に向かって、異形の弓を構えていた。翼を広げた怪鳥が、その歪な嘴を開いているかのようだった。

「それにしても、わたしを討つ？　おまえたちはいつも面白いことを言うな。おまえたち武装召喚師にとってもっとも偉大な存在であるこのわたしに刃を向けるというのか。実に面白い」

「わたしは本気よ！」

ファリアが叫び、オーロラストームが咆哮した。弓から放たれた幾筋もの雷光は、大気を切り裂きながらセツナの眼前を飛翔し、アズマリアへと至る。

「そうか。ならば致し方ない」

アズマリアは、目の前に迫った十数の矢を事も無げに払い落とすと、こちらに背を向けた。その後姿すら妖艶なのは、どういうことだろう。

「逃げるのか！」

ファリアが、さらに矢を放った。無数の雷光の帯が、虚空にあざやかな軌跡を浮かべていく。だが、それだけだった。

すべて、アズマリアに打ち払われるのだ。

ふたりの実力の差は、素人目にもわかった。これでは、どれだけ大量の矢を射ようと、アズマリアには掠りもしないのではないか。それは予想ではなく、確信に近かった。

「ああ、そういうことにしておいてくれ。いまここで戦うのは本意ではないのでな。セツナ、おまえの身柄はしばらくその娘に預けておくことにするよ」

言い捨てて、アズマリアは、地獄へと通じるといふ《門》へと向かっていく。

セツナは、返す言葉も思いつかなかった。アズマリアが一体なにを考えているのか想像もつかなかったし、王都に皇魔の群れを放つておいて、戦うのは本意ではないなどというのはどういっす見なのだろう。彼女に常識が通用しないのはうすうす感じていたことではあったのだが、ここまで傍若無人だと、セツナでは対処の仕様が
ない。

「アズマリア！」

それは、激情だった。どういっす類の感情かはわからない。単純な怒りか。使命感からくるなんらかの想いなのか。それとも、まったく違う感情なのか。ともかくも、ファリアの弓から放たれた光の奔

流は、螺旋を描きながらアズマリアへと殺到した。膨大な白が、セツナの視界を塗り潰す。爆音が轟いた。直撃しただろうか。しかし。

「ファリアの孫娘よ、これだけは言っておく」

アズマリアの声は、極めて冷ややかだった。

見遣ると、ぼやけた視界の真ん中で、アズマリアの黒衣は傷ひとつついていなかった。

彼女は、嘲笑うでもなく告げてきた。

「セツナは、わたしがこのイルス＝ヴァレとは異なる世界から召喚した存在」

「な……!？」

それはだれの驚きの声だったのか。

ファリアか、ルウファか。

あるいは、セツナ自身だったのかもしれない。

「つまり彼は、皇魔と大差のない化け物ということだ」

第四十八話 獅子の住処へ

雨が降っていた。

王都の上空を覆い隠す幾重もの鉛色の雲が、まるで彼女の想いを投影するかのように、静かに雨を降り注がせていた。彼女の感情を移す鏡であったとしても、それは涙などではない。彼女は悲しみを感じているわけではなかった。

レオンガンド王の凱旋以来、だれもが想像しなかったほどの喧騒に包まれていた《市街》も、連日のお祭り騒ぎが一夜の夢か白昼の幻だったかのように静まり返っていた。雨の中、露店や屋台が通りを賑わすこともない。出歩くひと希だろつ。

しかし、《市街》が沈黙したのは、この静かな雨が原因ではなかった。

皇魔まじまがマルス区に現れ、武装召喚師たちによって殲滅されたという話は、様々な尾ひれをつけながら急速に広まっていったのだ。情報の拡散を抑え切れなかった理由のひとつに、皇魔の死体が多く、処理するために人員を大量に動かさなければならなかったこともあるが、なにより、破壊の爪痕があまりにも大きく、隠すにも隠し切れなかったのもあるのだ。

ただの人間には作りえない破壊跡は、武装召喚師か化け物、あるいはその両方によるものと考えるしかないだろう。そうして導き出された結論が、皇魔と武装召喚師の戦闘であり、王都が安全ではないかもしれないという不安だった。

かくして、ガンディオンは静寂に包まれていた。
「嫌な雨ね」

ファリア＝ベルファリアの今日の第一声が、それだった。別段、なにかを想ったわけではない。ただ窓の向こう側に広がる庭園のどこか寂しげな印象が、この沈黙を強いるような雨にあるのだとしたら、嫌なものだと考えただけに過ぎなかった。

手入れの行き届いた庭園には、小さな噴水や多彩な花壇があり、職人技を発揮された彫像などが、この屋敷の主を権威付けるかのようだった。

もつとも、王都でも有数の権力の持ち主の邸宅なのだから、当然といえば当然だったが。

「雨はお嫌いですか？」

「そうね。眺める分には構わないけれど、雨の中を歩くのは嫌いなよ。傘を差していても濡れてしまうもの」

背後からの問いかけに淡々と返答を浮かべると、彼女は、窓の外から室内に視線を戻した。

応接室の広い空間、そのちょうど中心に設けられた向かい合わせのソファに、ルウファ・バルガザールが所在無げに腰かけていた。テーブルには高級そうなティーセットが置かれている。

「雨は雑音を消してくれますよ」

ルウファの何気ない一言に、彼女は、目を細めた。温室育ちの貴公子にしか見えない青年の瞳に揺らめく影を認めたのだ。もつともその淡い影はふとした瞬間に消え失せ、碧眼には軽やかな光が宿るのだが。

「……あなたも苦労しているのね」

「あなたほどじゃないですよ。リヨハンの戦女神の名を継ぐなんて俺には耐えられません」

ルウファが苦笑する。

「実際、俺はバルガザールの家名の重圧から逃げ出しましたから」

「それで武装召喚師に？」

「ええ。それでも結局この家に戻ってきてしまうんですよ。武装召喚師として独立したにも関わらず、ね」

自嘲気味に微笑する青年に、ファリアは、軽く笑い返した。彼の言いたいことは理解できる。血の縁。逃れようのない宿業なのかもしれない。どれだけ忌避しようと、その重圧の渦の中に飛び込んでしまっしかないのだ。

そついう世界だ。

みずからの生まれや身分によって、辿るべき人生を決定付けられてしまうのだ。平民には平民の、貴族には貴族の、王には王の役目がある。

フアリアであれ、ルウファであれ、同じことだ。それぞれに生まれ持った使命があり、そのさだめを拒絶することなどできない。みずからの想う通りに生き、想い通りに死ぬことができるものが、この世界にどれだけいるのだろうか。稀有な才能を持っていようと、秀でた能力があろうとも、自由には振舞えない。いや、むしろそついった突出した部分に引き摺られてしまう。

では、セツナは？

(セツナは……どうなのかしら?)

フアリアは、脳裏に浮かんだ少年のことを想った。

アズマリア「アルテマックスにより異世界から召喚されたという少年。一見するとどこにでもいそうな少年に過ぎないのだが、しかし彼は、黒き矛を召喚することにより一騎当千の猛者となった。その戦いの凄まじさたるや、異世界の化け物と比べても遜色はなく、味方であるはずの兵士の間からも、彼のことを恐れるものが現れるほどだった。

皇魔と同じ化け物 といったのは、彼を召喚した張本人だが。

確かに、化け物染みた強さではある。その強さのひとつが彼の召喚武装の黒き矛であり、セツナが術式を用いずに武装を召喚することが、彼の強さを助長していた。どのような窮地に陥っても、即座に黒き矛を召喚してしまえば、たちまち形勢は逆転するだろう。フアリアではそうはいかない。

それだけの力を持つセツナは、これからどうなるというのか。

彼ならば、みずからの意志の赴くままに進むという生き方もできるかもしれない。黒き矛の圧倒的な力に物を言わせれば、自由を勝ち取ることも夢ではない。

もつとも、いまはまだ萌芽に過ぎない。すべてにおいて経験が足

りないし、なにより、力を使いこなせてすらいないのだ。現状のセツナならば、戦いようによってはファリアでも勝つことができるだろう。だが、いずれその才能が大輪の花と咲いた暁には、だれひとりとして彼を止めることはできなくなる。そんな予感が、ファリアの中にあつた。

それは不安とは違う。むしろ、期待しているのだろう。彼の中にある無限に等しい可能性に。

「あなたには帰るべき場所があつた。そういうことでしょう?」

「ええ。そうなりますね。そして、それでよかつたと思っています」「わたしもよ。帰るべき場所があるということは素晴らしいことなのよ。きつとね。でも、彼には、ないのよ」

ルウファと会話しながらも、ファリアの頭の中を渦巻くのは、セツナのことだけだつた。いまはそれ以外に考えられないのだ。自分の置かれている立場や状況など、二の次にならざるを得ない。なぜならば、ファリアには彼女を護ってくれるものがいくらかもあるのだ。それは《大陸召喚師協会》という組織であり、彼女の名もまた、彼女をあらゆる権力から護ってくれるだろう。

しかし、彼にはそれがなかつた。セツナには後ろ盾がないのだ。アズマリアという名は、ファリアやレオンガンドの興味を惹くという点に関しては相当な威力を発揮したものの、彼の立場を確固たるものにするという代物ではなかつた。そして、彼がアズマリアの關係者ではあるものの、弟子ではないとわかつた以上、その価値はさらに下がつたと見るべきだろう。

もつとも、いまの彼になんの価値もないわけがない。

黒き矛の存在がある限り、彼の命は保障されるはずだ。少なくとも、命だけは。

「セツナにですか?」

「あるとしても、みずから望んで帰ることなんてできないでしょう? 世界は隔絶されているもの。自由に行き来なんてできるはずがない」

それを可能にするのが、アズマリアの《門》なのであろう。ゲート・オブ・ヴァーミリオン。その忌まわしき名は、彼女の耳朵に深く刻み込まれていた。彼女にとって忘れがたい召喚武装だった。それはもはや武装などと呼べる代物ではないのかもしれないが。

ファリアは、嘆息した。

「セツナは、どうなると想う？」

「異世界から召喚された存在を丁重に扱う法なんてありませんよ」ルウファは、にべもなく告げてきた。それは事実だ。どうしようもない常識だった。覆す必要もない。そんな悪法が施行されていた場合、人間という種は危機に瀕していたに違いない。異世界の住人である皇魔を積極的に駆逐できないということに直結するからだ。それは化け物の増殖と繁栄を許すことに他ならない。そしてその結果は考えずとも分かるだろう。

「が、それでもファリアは、彼に冷やかな視線を送らざるを得なかった。」

「彼は人間よ」

「わかってますよ。ただの冗談です」

慌てたように言ってきた青年に対し、彼女は、窓の外に視線を向けることでみずからの意志を示した。

「彼が化け物なら、わたしも半分は化け物だわ」

ファリアのつぶやきが彼に聞こえたのかどうか。

窓の向こうで、雨脚は強くなる一方だった。

時を遡る。

王都ガンディオンの《市街》マルス区の路地。皇魔レスベルとの戦いの跡が生々しく残るその場所に、セツナとファリア、そしてル

ウファの三人だけが取り残されていた。アズマリア・アルテマックスは、いつの間にか、地獄へ至るといふ《門》とともに消え失せいたのだ。

黒衣の魔女の言い残した言葉が、セツナの思考を硬直させていた。「えーと……つまり、どういうこと？」

話についていけないのだろう　ルウファが、だれとはなしに尋ねてきた。

セツナは、返答に窮した。なんと答えるべきなのだろう。アズマリアの言ったことを事実だとも言えいいのだろうか。異世界から召喚されたのだと。だが、その正しい答えが自分になにをもたらすのか、セツナは考えあぐねていた。

必ずしも正しい答えが幸運をもたらすとは考えられない。人間、正直が一番だとは思う。だが、その結果痛い目を見るのは自分である。カランの街で焼き殺されかけたのも、正直に生き過ぎた結果に過ぎない。と、この状況で誤魔化せられるほど頭がいいわけでもない。都合よく天啓が閃くわけもない。頭の中は目まぐるしく回転しているが、それは堂々巡りに他ならず、現状を打開するような奇策が思いつくはずもなかった。

いつかは。

(そうだよ。いつかは話そうって想ってたんだ……)

いつか必ず、ファリアには、話さなければならぬと考えてはいたのだ。自分の命を掬い上げてくれ、なおかつ、今まで行動をともにしてくれた大恩人なのだ。自分の真実を伝えなければならぬのは当然だと想っていた。だが、それはもっと後のことだと考えていた。もっと、もう少し、セツナの身の回りの状況が整ってから、と。落ち着いてから、と。

しかし、魔女の言葉は、それを許さなかった。

セツナは、ふと顔を上げた。いつの間にか、ファリアの姿が目の前にあつた。彼女のエメラルドグリーンの瞳が、こちらを見据えている。

唇が、開く。

「セツナ……君はいつたい、なにものなの？」

セツナは、絶句し、己の浅はかな考えを恥じた。

ファリアのまなざしがあまりにも澄み切っていたのだ。そこにセツナへの疑念や敵意は見当たらなかった。と行ってこちらを氣遣っている風でもない。ちよつと氣になることでも訊ねるような、そんな様子があった。

ファリアは、セツナが考えている以上にこちらのことを考えてくれているのかもしれない。

だからこそ、セツナは、卑屈に笑わずに済んだのだろう。

「アズマリアの言った通りさ。俺は異世界の住人で、あいつに召喚されたんだ」

そして、セツナは、ファリアの想いに答えるべく、この世界に来た経緯を丁寧に話そうとした。だが、それはすぐには叶わなかったのだ。

「……それはつまり、君は皇魔と同種の存在ということか？ セツナ「カミヤ」」

口を挟むようにしてセツナに投げかけられたのは、低い男の声だった。決して聞きにくい声音ではない。むしろよく通る声であり、しっかりとした口調だった。冷ややかで、厳しさのある声色は、セツナにはつとさせた。

セツナは、即座に声のした方向に目をやった。それはファリアやルウファも同じだっただろう。気づいていなかったのだ。第三者の存在に。

それは集団だった。

先頭に立つのは、長身の男である。彼が声をかけてきたのは明白だった。金髪碧眼。どこかルウファに似た容姿でありながら、受ける印象はまるで違う。ルウファが軽妙ならば、男は重厚というべきか。黒っぽい装束を身に纏っているが、それらは旅塵で汚れている

ように見えた。

男の隣には、幼げな少年がいた。集団の中でひとりだけ浮いている少年もまた、金髪碧眼だった。利発そうな少年ではあったが、いまはこちらのことに興味津々といった様子だった。

そのふたりの背後に控えるのは、数十人の男たちである。だれもかれもが屈強な戦士を想起させるような連中であり、旅装に身を包んではいるものの、その強靱な肉体を隠しきれてはいなかった。無論、隠す必要もないのだが。

「ラクサス兄さん……！」

ルウファの愕然としたような言葉は、セツナが男の容姿に対して抱いた感想が間違いではなかったことを告げていた。が、そんなことはどうでもいいくらいの驚きを覚えて、セツナは、ルウファと男を見比べた。瓜二つというほどではないにせよ、顔のよく似た兄弟だった。

「ルウファ、おまえにも聞きたいことは山ほどあるが、それは後だ。まずはセツナカミヤ、君の話の聞かなくてはならない。この状況、この有様、そして君の正体について、洗いざらい話してもらおうか」
冷徹な声音だった。反論する余地は愚か、声を発することすら許されないような響きがあった。それはきつと、彼が言葉を続けるつもりだったからだろう。

「わたしはラクサスバルガザール。ガンディア王家に仕える騎士のひとりだ」

男は、そう名乗った。

彼は、ガンディアの將軍アルガザードバルガザールの長男であり、ルウファバルガザールの実の兄だった。そして、彼の隣にいた少年はロナンバルガザール。三兄弟の末弟であり、年齢的には一番セツナに近いという話だったが。

それらは、すべてを終えてから聞いた話である。

いや、まだなにも終わってはいなかったのだが。

雨音が、天蓋を叩いている。

セツナは、ひどく落ち着きのないまなざしで、外を眺めていた。そもそも落ち着いてなどいられるはずがなかった。王宮へと向かう馬車の中なのだ。昨日ラクサスたちに話したことをレオンガンド王に直接伝えなければならなくなった、というのだ。

それは、さながら死刑囚が断頭台へと向かうのに似ていた。

(いや、たぶん全然違うけど……)

セツナは胸中で頭を振ったが、ため息を打ち消すことはできなかった。どうしようもない不安と、押し退けようのない重圧が彼の胸を締め付けていた。これから数時間後の自分のことを考えるだけで、目の前が真っ暗になった。未来のことなど、考えるだけ無駄なのはわかりきっているのだが、考えてしまうのが人情だろう。

もちろん、セツナはレオンガンドのことを信用している。彼の実績を知っているわけではないし、本当のことなどにもわからないが、人となりはそれなりに理解しているつもりだった。気さくな、とても一国の王とは思えないほどに優しい人物だった。

そんな青年王のことだ。セツナのことを理解してくれるだろう。少なくとも、理解しようとして努力してくれるはずだ。しかし、国を運営し、国民の上に立つものが、個人的な見解で動いていいはずがない。独裁者ではないのだ。

もし、レオンガンドの周りのものが、セツナの存在を異世界の化け物だと判断したとき、レオンガンドはどうするつもりなのだろうか。

セツナの不安は、そこにあった。もつとも、セツナの考えがそこに至ったのは、「気をつけてね」というフェアリアの言葉と、そのときの彼女の強いまなざしのせいではあったのだが。

決然たる表情で見つめられた拳句、気をつける、などといわれれば、深く考えざるを得ない。浅慮だとわかっていても、必要以上に

考えてしまるのがセツナという人間だった。

馬車には、セツナのほかにラクサスが乗っているだけだった。ラクサスは、昨夜のうちに仕上げたという報告書に目を通している。その報告書には、昨日セツナが語ったことが列挙されているのだから。

セツナが生まれ育った世界のこと。この世界に召喚された経緯。召喚されてからのこと。その他諸々。

もっとも、セツナへの事情聴取は、拍子抜けするほど穏やかな雰囲気の中で行われていた。本当に笑ってしまうほどに。

その後、セツナたちは、バルガザール家の住む屋敷に連れて行かれたのだが、それから事情聴取を始めるまでに一時間ほどの休憩が挟まれたのは、セツナたちがレスベル退治に力を注ぎ、疲れているのが目に見えていたからだという。

ラクサスの立場を考えれば、セツナへの事情聴取などすぐにでも始めてもいいはずなのだが、それができない人物なのだろう。最初の印象とはまったく異なる性格らしかった。

そうして、セツナへの事情聴取は終わった。なにを話したのか思い出せないほどに話し倒したセツナは、その日は疲れ切つてそのまま寝てしまった。そう、セツナは人間として眠ることが許されたのだ。異世界の化け物として扱われることはなく、惰眠を貪ることができたのだ。それはきつと、フェアリアの助力があったからに違いない。セツナは、睡魔の中でも彼女への感謝だけは忘れなかった。

そして翌朝　つまり今朝だ　、セツナはラクサスとともに王宮へと向かうことになったのだ。

王都ガンディオンの中心にしてガンディア王国の中枢、獅子王宮へ。

第四十九話 矛の向かう先

獅子王宮は、王都ガンディオンの中心部に聳えていた。《群臣街》の北側に位置するバルガザール邸から馬車で南下し、王都の三つある城壁の最後のひとつを越えた先、鬱蒼たる《王家の森》の向こう側に存在していた。その《王家の森》といえは、通行用の道幅は広く取られており、馬車で往来も十分に可能だった。それは当然だろう。森の木々が邪魔をして自由に行き来ができなくなるなど、本末転倒も甚だしい。

森の真ん中に聳え立つ王宮は、豪奢にして壮麗であり、見るものの度肝を抜くほどだった。なにもかもが圧倒的なのだ。王宮だけ見れば、ガンディアが小国などとは到底信じられないだろう。セツナだってそうだった。馬車の窓から王宮を覗いた瞬間、眩暈を覚えたほどだった。

それは、これから向かうその宮殿の中に渦巻いてるのである。様々な思惑に対して、多少うんざりしてしまっただけというのもあるかもしれない。それが考えすぎかどうかはすぐにはわからないだろうが、これだけの宮殿に権謀術数が蠢いていないはずがない、というのはセツナの思い込みなのだろうか。

やがて、馬車は王宮の遙か手前で止まった。《群臣街》を抜け、城門を潜り、森を通り、ようやくのことと辿り着いたのだ。

セツナは、馬車を降りるなり、獅子王宮の威容に圧倒されて言葉を発することもかなわなかった。啞然としたまま、ラクサスに付き従った。

それから、王宮のどこをどう通って来たのか、セツナは、まるで記憶していなかった。ただ、前を進む男の背中を追ってきただけに過ぎない。王宮は、彼がこの世界に召喚されて以来、見てきた建物とは明らかに質の異なる存在だった。マルダールやバルサー要塞などとは、設計思想からして違うのかもしれない。

王の住まう御殿なのだ。

戦争のために築かれた要塞や、半ば城塞化した都市とは根本から異なるのだろう。

王とその家族　つまりは王家と、それに連なる貴族のみが住むことを許された御殿は、想像以上にきらびやかで、俗世とは隔絶された楽園の中にさ迷い込んだかのような感覚が、セツナにはあった。しかし、そのきらびやかさの中にも気品というべきものが見え隠れしており、優雅とか流麗という言葉がよく似合っていた。飾り立てられた世界だ。気品がなければ、ただの成金趣味になりかねないのかもしれない。

さて現在、セツナが歩いている一角は、どことなく浮世離れた王宮の中でありながら、辛うじて現実味を帯びた空間と言えた。目的地へと続くのである。長い廻廊の壁際には、数々の甲冑が整列している。セツナが戦場で目にしたタイプのものもあれば、竜や一角獣など異形の生物を模したものも並んでいる。整然と立ち並ぶそれらは、進軍の号令を待つ兵士たちのように見えなくもなかった。

飾られているのは、鎧兜だけではない。剣や槍、斧などの様々な武器が、壁に固定されており、壁に武器を飾り立てているかのようだった。

その廻廊に漂うのは、鉄の匂いであり、戦場の空気だった。王宮の中にあつてことさらに異質な雰囲気にも包まれているのも当然だろう。しかし、それでも現実感が薄いのは、きっとそれらの武装が一度も使われていないのが、セツナにもわかるからだろう。

手入れは行き届いている。埃ひとつ見当たらないほどだ。だが、振るわれない刀槍にどれほどの価値があるというのか。武器は、戦場でこそその意味を謳うのだ。観賞用の美術品ではない。

もっとも、ルクス・ヴェインの長剣グレイブストーンのように芸術的な美しさを誇る武器が存在するのも事実だが。

「この廻廊は、今は亡きシウスクラウド陛下が、その晩年夢に見た情景を元に考案されたのだ」

セツナの思索を断ち切ったのは、ラクサスの凍てついたような声音だった。その冷やかな声を耳にするたびにセツナは、ぎよっとするのだが、同時に思い返して安堵するのだ。

(このひとは、悪いひとじゃない)

善人がどうかはともかく、悪人ではない　それがセツナの実感だった。

でなければ、セツナへの事情聴取があんなに穏やかに進行するはずがなかったし、そもそも、休憩する暇すら与えられなかったに違いない。ラクサスが、これから事情聴取する対象であるセツナを労る理由はないのだ。たとえ、レスベルの殲滅に力を費やしたのだとしても、恐るべき存在かもしれないものに対して、緩やかな対応を取ることはないだろう。

「シウスクラウド陛下は、最後の最期まで、生を諦めておられなかった。生きて、再び戦場に立つ　それが陛下の夢であつたのだ」

ラクサスの声音に微かな熱を感じて、セツナは、顔を上げた。正装を纏った男の背中には、なんの感情も見当たらない。しかし、虚空に拡散する彼の言葉は、時として異常な熱量を帯びているように感じられた。

「そしてそれは、わたしの夢でもあつた……」

セツナは、ラクサスの言葉に込められた深い悲しみを感じ取った。彼にとつて先王シウスクラウドがどれほど偉大な存在であつたのか理解する。先王の考案した回廊に至るだけで感情を昂ぶらせてしまふほどののだ。余程のことに違いなかつた。

それと同時に、セツナのラクサス評に一文が加えられた。

(情の深いひとなんだ)

故に、普段は感情を表に現さないのだろうか。表面的には冷徹に見えて、その奥底では激情がのた打ち回っている　そんな人物なのかもしれない。

「残念ながら、その夢が果たされることはなかったがな」

ラクサスはそう告げると、不意に脚を止めた。甲冑の回廊のちよ

うど真ん中あたりだろうか。左手に硬く閉ざされた両開きの扉があった。ラクサスがその目の前に立ち止まったということは、この扉の奥にレオンガンドがいるに違いない。利便性の悪さから考えるに、謁見などをするための場所とは到底思えなかった。

「ラクサス」バルガザール、セツナ「カミヤを伴い、参りました」
ラクサスの声は、多分に緊張しているように感じられた。さすがにラクサスと言えど、君主に対しては緊張感を抱かざるを得ないのだろう。

セツナはセツナで耐え難い不安に苛まれながらも、なんとか冷静さを保とうとしていた。レオンガンドには久しく会っていない気がするのだが、それは気のせいである。バルサー平原での戦いは数日前であり、当日の朝に言葉を交わしているのだ。もともと、戦後、数日間眠り続けていたセツナにとっては、それもつい昨日のことのように思えるのだが。

「入りたまえ」

室内からの返答は、レオンガンドのものではなかったが、緊張感が増大するには十分な厳粛さと威圧感を備えていた。もちろん、こちらを威圧するつもりもないのだろうか。

「はっ」

ラクサスが扉を開いた瞬間、重苦しい冷気が、ラクサスの背後のセツナにまで伝わってきた。冷厳な空気。呼吸さえも憚れるようなそんな感覚があった。

セツナは、室内に入っていくラクサスの背中を見詰めながら、静かに覚悟を決めた。ラクサスの後に続く。扉の向こう側へ。

(う……)

セツナが足を止めたのは、室内に足を踏み入れた途端、いくつもの視線が突き刺さってきたからだ。好奇、猜疑、冷徹。セツナへの視線は様々な感情を伴ったものであり、彼をなんとしてでも見定めようとしているのがわかる。

「ラクサス、ご苦労様。王都に帰ってきたばかりだというのに、わ

「わざわざすまなかつたね」

「気さくな青年王というセツナの印象そのままに、レオンガンドが、ラクサスの労をねぎらうようにいった。」

王は、ふたりの前方にいた。部屋の中央には大きな長方形のテーブルが配置されており、無数の椅子が並べられている。そのうち、扉側の椅子にはだれも腰かけておらず、反対側　つまりセツナたちの正面　に、レオンガンドと四人の男が座っていた。

レオンガンドは、微笑を浮かべていたが、ほかの四人は、セツナを値踏みするように見ていた。その視線の鋭さに胸中で悲鳴を上げかけたが、セツナは、レオンガンドの存在を感じることでなんとか堪えていた。

四人の男は、王の側近なのだろうか。どの男も、ただ者ではない面構えをしていた。

「いえ。元より帰還報告に参上する予定でしたので」

「そうだったね」

頑ななラクサスの言いようが面白かったのか、レオンガンドは、につこりと笑った。その笑顔は、同性のセツナが見ても惚れ惚れするくらいに素敵なものであり、レオンガンドがこちらに視線を投げかけてこなければ、しばらくは呆けていたかもしれない。

碧玉の如き美しい瞳が、セツナを見つめていた。

「さて、セツナ「カミヤ。早速で悪いけど、君の話聞かせてくれないか？」

「なぜ、今になって現れたんです？」

クオンは、勤めて穏やかに問いかけた。内心では激情が螺旋を描

き、嵐の如き叫びを上げようと、彼は柔らかな笑みを浮かべて見せた。どれだけ感情が昂ぶろうと、荒れ狂おうと、微笑する。そうするうちに心の海は凪いでしまうものだ。嵐は、過ぎ去っていくのだから。

それでもクオンは、その相手に対してだけは自分の感情を抑えきれないのかもしれないという恐怖があった。感情の暴発ほど恐ろしいものはない。みずからの心を支配しなければ安息など訪れないように、激情に身を任せるとき訪れるのは破滅的な未来に違いないのだ。

「おまえに聞きたいことができたのだよ」

事も無げにそういったのは、美女である。燃えるような赤毛が象徴的ではあるが、彼女の特徴といえばそれだけではないだろう。絶世の美女という言葉が彼女以上に相応しい人間がいるのかと思えるほどの美貌は、異性はもちろん、同性であろうと虜にするに違いなかった。その肉感的な姿態に悩殺されるにせよ、蠱惑的な声音に耽溺するにせよ、彼女に樂園を幻視するものは後を絶たない。

もっとも、クオンはそうはならなかった。理由はわからない。少なくとも、彼の自制心の強さが原因ではなかった。

女の名は、アズマリア＝アルテマックスといった。この大陸でもっとも高名な武装召喚師であり、数多の二つ名で恐れられる伝説的な人物である。

そして、クオンをこの世界イルス＝ヴァレに召喚した張本人でもあった。

「ぼくに？」

クオンは、彼女との距離感を意識しながら問いかけた。

太陽は、中天に至ろうとしている。風は無いに等しく、気温は静かに上昇を続けていた。クオンの額に汗が浮かぶ。が、彼はそれを拭いてもせずに、アズマリアの黄金の瞳を見据えていた。妖しい光を湛えたふたつの瞳もまた、クオンを見つめている。

ベレル王国の南西、マジリアの町外れの屋敷の裏庭にふたりはい

た。その屋敷は、クオンが率いる傭兵集団《白き盾》の拠点として借りているのだが、いまは、ほかのメンバーはほとんど出払っていた。買出しに出かけたのだ。

「セツナという少年を知っているか？ セツナはカミヤ。おまえと同じ家名の少年だよ」

「やはりあなたか！ あなたがセツナを召喚したんだな！」

クオンは、自分でも驚くほどに声を荒げていた。激する感情を抑える手立てが無い。今の今までぼんやりとしていたものが、一瞬にして鮮明な光を発したのだ。幾重もの渦を巻き、明確な答えの得られなかった疑問に、納得のいく回答が得られたのだ。そして、その答えは、決して許せるようなものではなかった。

「セツナまで、この世界に召喚したのか……！」

アズマリアへの鬱積した想いが、激情となつて迸るのも無理はなかった。クオンの脳裏を閃光のように駆け抜けた数多の記憶が、彼女への敵意を増幅させた。クオンは、この世界に召喚されてからというもの、アズマリアのおかげで、絶望というものを何度となく味わわされた。それが自分自身のみに降りかかるものだったからこそ、彼は、今日まで我慢することができたのだ。しかし、セツナがアズマリアによつて召喚されると判明した以上、セツナがクオンと同様の地獄に落とされるのは火を見るより明らかだった。

それは、クオンにとつてもつとも耐え難いことだった。

「なにを怒っている？ 家族か友人か知らないが、この世界で再会を望むこともできるのだぞ。喜んで欲しいものだ」

アズマリアがいつものように冷笑する様を認めて、クオンは、自分の中でなにかが弾ける音を聞いた。

室内は、広い。

天井から吊るされた複雑な形の魔晶灯が、室内全体を照らすように冷やかな光を降り注がせている。磨き抜かれた石の床の上に敷かれていたのは、獅子が描かれた絨毯だった。獅子は、ガンディアの象徴なのだという。絨毯の上には長方形のテーブルと無数の椅子が並んでいた。どれもこれも高級品には違いないのだが、使い古されているようにも見受けられた。

目を引くのは、壁に貼り付けられた三つの地図だろうか。三方の壁にそれぞれ一枚ずつ貼られており、左は、王都ガンディオンを中心に描いているところから、ガンディア国内の詳細な地図だと想われた。右は、ガンディアとその周辺諸国、真ん中の地図は、その規模から考えるにこの大陸の全体図なのかもしれない。しかし、その地図からガンディアの位置を探し出すのは一苦労だった。あまりにも小さいのだ。もっとも、それはログナーやザルワーンも大差ないのだが。

「アズマリア＝アルテマックスがすべての元凶……か」

レオンガンドの口調が少しばかり残念そうだったのは、彼が最初にセツナに会おうとした目的が、彼女の存在だからだろう。フアリアとの会話において、アズマリアの弟子を名乗ったセツナと接触することで、あの伝説的な武装召喚師との繋がりを持とうとしたのだ。バルサー要塞奪還戦を控えたレオンガンドにとって、魔人とも呼ばれる彼女の力は、喉から手が出るほど欲しかったに違いない。

セツナは、静かに呼吸を整えながら、レオンガンドの様子を見ていた。魔晶灯の照明の下で、青年王の容貌はあいも変わらず美しいままだった。

話は、終わった。

セツナは知りうる限りのすべてを、レオンガンドとその四人の側近に話したのだ。イルス＝ヴァレとは異なる世界に生まれ育ったこと。突如として空から降ってきた門を潜り抜けた先が、カラン近くの森の中だったこと。そこでアズマリア＝アルテマックスと初めて

出会い、武装召喚術の使い方を知ったということ。黒き矛の召喚、皇魔との戦い、カランにおけるランカイン・ビューネルとの戦闘、そして昨日の出来事について、洗いざらい話し尽くした。

当然、疑問の声も上がった。

なぜ、いままで黙っていたのか。

なぜ、アズマリアの弟子などと虚偽の申告をしたのか。

なぜ、アズマリアがセツナに対して皇魔を放つような真似をしたのか。

セツナは、それらの問いに対して、誠心誠意わかる限りのことは答えたつもりだった。

異世界の住人だということに黙っていたのは、無用の混乱や誤解を招かないために他ならない。異世界に召喚されたはいいがなんの予備知識も与えられなかったセツナには、そうすることでしかあの状況を切り抜けられそうになかった。

もっとも、初対面のフェアリアに異世界から召喚されたということ話を話しても、まともに取り合ってもらえなかったか、昨日のように受け入れてくれたかもしれないが。それはそれ、である。あのときのセツナには、嘘をつくくらいしか選択肢は存在しなかったのだ。

それは、アズマリアの弟子という申告に対しても同様だと言える。なぜアズマリアの名が出てきたのかを考えると、この世界の住人で知っているのが彼女しかいなかったからなのだが、弟子とした理由は、フェアリアに武装召喚師としての師はだれか？ と聞かれたからだった。

そして、それらの選択は、あながち間違いではなかった。

結果として、フェアリアはセツナをなにかと目にかけてくれるようになったし、レオンガンドと出逢うきっかけになったのだ。レオンガンドとの出逢いは、セツナをマルダールへと運び、《蒼き風》の傭兵たちとともにバルサー平原の戦場を駆け抜けることになった。

そう、順風満帆だった。

問題はなにひとつなく、なにもかもすべてがうまく行き過ぎてい

た。

だからこそ、アズマリヤは現れたのだろうか。

「君も皇魔も同じではないのか？　今なら、兵たちの言っていたことも理解できる。悪鬼、死神、化け物とな」

そう言ってきたのは、レオンガンドの側近のひとりだった。黒髪の男だ。彫りの深い顔立ちは、男の厳めしさを引き立てている。年齢は、三十代半ばくらいだろうか。どこか超然とした茶褐色の瞳は、なにもかも見透かされるかのような錯覚を覚えた。

「言葉が過ぎるぞ。先の戦いは、彼の活躍のおかげで大勝を収めることができたのだ。手柄をあげることすらできなかった兵士たちの戯言よりも、彼の戦果のほうが余程雄弁だ」

セツナが答えるより先に反論を述べたのは、貴族然とした男だった。金髪碧眼。痩せぎすで、頬がこけており、不健康そうに見えた。しかし、眼光は鋭く、生氣に満ちている。肉体はともかく、精神的には充実しているのかもしれない。

黒髪の男が、皮肉げに笑う。

「実に雄弁だな。とても人間の　それこそ、ただの少年の成せる業ではない」

「彼は武装召喚師だ。ただの少年というのは誤った認識だな」

「それも奇妙な話だと想わないか？　異世界から召喚されたばかりのものが、なぜ武装召喚術を行使できるのだ？　召喚術を習得するためには、気の遠くなるほど膨大な時間と労力を要する。それほどまでに高度な技術なのだ。聞けば、彼の世界にはそのような技術はないというぞ？　これはどういうことなのだ？」

「それは……」

言葉に詰まる男に対して、黒髪の男はここぞとばかりに声の調子を上げた。

「つまり彼は人間ではないのだ。少なくとも、この世界にいるべき存在ではない。いまは良い。陛下の言葉に従い、ガンディアのため力を振るってくれた、その事実には感謝している。だが、いつそ

の力の矛先が我らに向けられるかわかったものではない。」「
セツナは、ふたりの側近の口論を見守ることしかできなかった。
歯痒くても、口を挟むことはできない。一方的な暴論とも取れる男
の結論も、必ずしも横暴な判断ではないのだ。納得できる部分もあ
る。

確かに、おかしな話だった。

（俺は何で、武装召喚術が使えるんだ？）

もっとも、それは術などではないのかもしれない。ただ、武装召
喚と告げるだけでいいのだから。それだけで術は発動し、異世界か
ら武器が現れた。フアリアが卑怯者と罵ってきたのもわからなくは
ない。彼女たちが費やした時間や努力を嘲笑うかのようなものな
だ。だからといって行使しないわけにはいかないのだが。

ふと、セツナは、レオンガンドがこちらを見つめていることに気
づいて、正面に顔を向けた。青年王は、心配しなくていいよ、とで
も語りかけてくるかのような表情を浮かべており、そのあざやかな
まなざしを見た瞬間、セツナは、自分の中からあらゆる不安が取り
除かれていくのを感じた。

（あ……）

張り詰めた空気の中では涙を流すことなど有り得ないが、それで
もセツナは、涙腺が緩みそうなことに焦りを覚えた。いくら心が救
われたからといって、こんな場所で泣くわけにはいかない。

レオンガンドが、黒髪の男に向かって口を開いた。

「貴重な意見をありがとう、ケリウス。マグナート。君の懸念もも
つともだ。この国は、セツナの力に対抗する手段を持ち合わせてい
ないといっても過言ではない。矛先がこちらに向けられた場合、平
身低頭で許しを請う以外に生き延びる術はないだろう。それで彼が
矛を収めてくれたなら、の話ではあるけれどね」

自嘲気味に微笑するレオンガンドに、側近たちは愚かセツナまで
もはっとなつた。彼の言葉が意味するところを理解して、だれもが
愕然としたのだ。それはつまり、国家が、たったひとりの少年に降

伏するということに他ならない。

小国とはいえ、ガンディアは、何千という人間を兵士として動員できるはずであり、強固な要塞や城塞都市を持ち、なおかつ同盟国との関係も良好だったはずだ。その総兵力を以ってすれば、たかが武装召喚師のひとりなど容易く滅ぼせるものと考えるのが、常識だろう。

セツナ本人でさえ、そう想っている。何千人もの人間と戦えるはずがなかった。バルサー平原での戦いの時も、結局は体力が尽き果て、気を失ってしまったのだ。意識を失ってしまえば、黒き矛を持つていようと雑兵以下の存在に成り果てる。

過大評価にもほどがある。

側近のひとりが、レオンガンドに叫ぶように言った。

「陛下！ そのような世迷言は口になさいますな！」

「ただの冗談だよ」

悪戯を叱られた子供のようになり、レオンガンド。茶目つ気たつぷりの彼の様子に、セツナは、啞然としながらも親しみを覚えていた。一国の王ともあるうものが、どうしてそこまで軽いのだろう。いや、軽いというのとは違うかもしれない。どちらにせよ、セツナにとつて、レオンガンドが心地良い響きの持ち主だということに変わりはない。なかった。

「さて、セツナ。ケリウスはああ言っているが、君はどう想う？」

不意打ちのような質問に、セツナは、目をぱちくりさせた。

「え……？」

レオンガンドは、優しくも穏やかな笑みを浮かべていた。

「君はいつか、このガンディアに矛先を向けるかい？」

「そんなこと」

あるわけがない！

セツナは、叫ぼうとしたが、レオンガンドに制された。

「ははは、安心した。君のその反応で、ケリウスの懸念が杞憂に終わると確信したよ」

レオンガンドはそう言ってきたが、セツナは、彼の言うことがとてもではないが信じられなかった。もちろん、疑っているのではない。彼の言葉に裏があるとしても、悪意があるとは思ってもしない。ただ、こちらの反応を見て結論付けたわけではないのだろう、ということだ。セツナの驚き慌てる様子を面白がるために問いかけてきたのではないか、そんな憶測すらも浮かんでしまう。

「わたしは、セツナ、カミヤの存在をここに認めると宣言しよう」
その一言とともにレオンガンドの纏う空気が一変した。いままでの和やかで穏やかな気配から、威厳に満ちた国王のそれへと。それとともに、室内の空気が一瞬にして緊張した。セツナも同じだった。緊迫感に圧倒される。王の言葉の意味を理解し、感動に震えたのは、それからだった。

「彼がどこから来ようとも、我が王国のために命をかけてくれた事実を覆すことはできない。先の戦いで、我が軍の被害を最小に抑えることができたのは、彼が想像を遥かに上回る活躍をしてくれたからに他ならない。彼が力を貸してくれなければ、数多くの兵士が命を落としていたはずだ」

レオンガンドの熱弁に対し、口を挟もうとするものなど当然、皆無だった。だれもが耳を傾け、王の言葉に込められた想いを感じ取るうとしている様子だった。

セツナは、レオンガンドの新たな一面を目にしたような気がして、半ば呆然としていた。軽やかさだけが彼の持ち味ではなかったのだ。「元より無茶な戦術ではあったのだ。それでもバルサー要塞を奪還しなければ、ガンディアに安寧は訪れない。国民の心から平穏は遠ざかり、先王の夢は幻と消えてしまうところだった。だからこそ、無理にでも取り戻す必要があった。どれだけの血が流れ、どれほどの兵が倒れようとも、要塞を奪還しなければならなかった。結果は、さっき言った通りだ。セツナのおかげで、こちらの損害は極めて少ないまま勝利を得ることができた。これは何事にも変え難い事実だ。セツナがいなければ、今頃、悠長に会議を重ねている場合ではなく

なっていたらろう。その点でも感謝するべきではないかな？ 諸君」
レオンガンドが側近たちを一瞥すると、彼らは一様に苦笑したようだった。

「彼が異世界の住人であるという真実は、彼と皇魔が同質の存在であるという可能性を肯定もしなければ、否定もしていない。しかし、彼が寄る辺なき異邦の少年という厳然たる事実に対し、わたしたちにできることといえば、ひとつしかあるまい」

レオンガンドの碧い瞳が、セツナを見ていた。透き通るように美しい瞳に吸い込まれそうになったセツナは、それはそれでいいのかもしれない、とも思った。自分のことをこれほどまでに考えてくれているのだ。すべてを委ねても、いいのかもしれない。

それが最善の道なのかもしれない そんな気がした。

「セツナ」カミヤ、俺に仕える気はないか？」

第五十話 セツナの選択

王都上空を覆う鉛色の雲の群れの切れ間から射し込む陽光は、風に流されていく雨雲の暗さと反比例するかのように鮮やかだった。まるで絶望的な暗黒の淵に差し出された救いの手のようだ、というのは言い過ぎにしてもそれほど間違ではないのかもしれない。

昨夜から降り続けていた雨が、上がるうとしていいる。王都を包んだ夢のような喧騒はもはや戻らないのだろうか、多少の活気が《市街》を賑わすのは当然の成り行きだろう。

もつとも、《群臣街》のバルガザール邸へと進む馬車の中からは《市街》の様子を伺い知ることができない。《市街》にせよ、王宮にせよ、壁の向こう側なのだ。隔絶されているわけではないにしても、そのような感覚を抱かざるを得ない。

セツナは、胸の内に渦巻く多大な不安に押し潰されそうになりながら、一方で新たな状況に興奮を覚えてもいた。

言うなれば、変化だ。激変と言ってもいい。彼を取り巻く環境が大きく変わろうとしているのだ。彼の望んだ通り、とはいかない。当たり前の話だ。彼に選択肢などはなかった。しかし、この寄る辺なき世界で、彼にも頼ることのできるものができたのだ。それは望んでも得られないものに違いなく、考えなくとも最良の結果なのだろう。

もちろん、今まで頼りにできる人物が居なかったと言えば嘘になる。

ファリアーベルファリア。

彼女ほど親身になってくれた人物をセツナは知らなかったし、これほどまでに彼のことを思ってくれる人物は、後にも先にもファリアくらいなのではないか。そういう確信にも似た想いを、セツナは、彼女に対して抱いていた。

ともかくも、セツナは、馬車に揺られながら、一番の恩人である

ファリアの反応が気になって仕方がなかった。彼女は、この話をどう受け取ってくれるのだろう。喜んでくれるだろうか。それとも、怒るのだろうか。

（それはないか）

セツナは、ファリアの顔を脳裏に思い浮かべてみた。一言で言えば、明るい女性である。理知的で思慮深さを伺わせるのは、見た目だけではない。言動の端々に、知性を感じずにはいられなかった。他方ではぎつくばらんであり、軽口を叩くことも多い。時として厳しいことも口にするが、それはこちらを思いやってのことに違いない。

セツナは、ファリアが怒った姿をほとんど見たことがなかった。昨日、アズマリアと対峙したときくらいかもしれない。それにしても、理由があつてのことだと推察できる。彼女とアズマリアにどのような因縁があるのかは知らないし、知ろうともしなかった。もちろん、知りたいとは思っている。しかし、無理に問い質すようなことではないと考えていたし、なにより、話す必要があると判断したならば、ファリア自身が話してくれると信じてもいた。

セツナだつて、ファリアにはそういう対応を取られていたのだ。彼女としては、セツナからアズマリアのことを少しでも多く聞き出したかったはずである。本当に弟子なのかどうかは当然として、アズマリアがどこにいるのか、連絡を取っているのかなどの情報は、喉から手が出るほどに欲していたに違いないのだ。だが、彼女はセツナに問い質すようなことはしなかった。そこにどのような打算や計算が働いていたのかは知る由もないが、少なくとも、彼女がこちらが話す気になるのを待っていたのは確かだろう。

それならば、セツナも待っていよう、と想つたのだ。

やがて、セツナとラクサスを乗せた馬車が、バルガザール邸の必要以上に威めしい門へと辿り着いたころ、空には晴れ間が広がるうとしていた。

「ちょっとそれってどういうことよ!? ガンディアを離れることになった? 意味がわからないわ! いや、わかるけど。でもおかしくない? 陛下の考えにけちをつけるつもりもないけど、それにしたってあまりにもあまりな仕打ちじゃない?」

あらゆる意味で予想を上回るファリアの剣幕に、セツナは、ただただ圧倒されるしかなかった。たとえ彼女が普段見せることのない怒りの表情に新たな魅力を発見できたとしても、見惚れる余裕など生まれるはずもない。

バルガザール邸の応接室である。その空間には当然、ルウファとラクサスもいるのだが、ファリアの反応の凄まじさに閉口してしまったのか、存在感すら消え失せてしまったような感すらあった。

セツナは、テーブルを挟んで向かい合わせに置かれたふたつのソファの片方に腰掛け、もう一方のソファに座るファリアと対座していた。テーブルにはティーセットのほかに、シュークリームのようなお菓子が、やはりどうしようもなく高級感の漂う小皿に盛られている。

「あ、いや、だから、話は最後まで聞いてほしいんだけど……」

「聞いてるじゃない!」

だから怒っているのよ、とでも言いたげな口振りの彼女に、セツナは、困ったように微笑した。自分のために怒ってくれるのは素直に嬉しいのだが、その怒りの源が彼女の勘違いならば、心の底から喜んでいる場合ではないだろう。訂正しなければならぬ。

「えーと……」

セツナは、自分の話の仕方が拙かったのだと理解して、仕切りなおすために言葉を搜した。結論から言ったのが良くなかったに違いない。

だとすれば、答えはひとつだ。

「ファリア」

「なに？」

セツナが真面目な顔つきになると、ファリアは、怒気の孕んだ表情を一変させた。こちらの様子に驚いたのだろう。少し間の抜けた顔になっていた。

「最初から話すよ」

セツナは、眼鏡のレンズ越しに見えるファリアの瞳を見つめながら、静かに語り始めた。

「セツナ、俺に仕える気はないか？」

レオンガンド・レイ「ガンディアの望みは、セツナの人生にとって、とてつもなく重大な意味を持っていた。

その要望に応じるということは、武装召喚師としてガンディアの王に仕え、彼の下で働くということに他ならない。ただ強力な後ろ盾を得るということだけではない。職を得るということ すなわちこの世界で生きていく上での基盤ができるということだ。それは、未だ《大陸召喚師協会》に入っただけでなく、あらゆる国、組織、団体に所属していないものにとって、眩い閃光を放つものだった。

そもそも、《大陸召喚師協会》に入ったからといって、即座に仕事が見つかるわけでもないだろう。先の戦いでガンディア軍の一員として働いたのは、偶然が重なってファリア、レオンガンドと知り合えたからなのだ。もしふたりと出逢うことがなければ、どこかで野垂れ死んでいたとしてもおかしくはなかった。

ここは、異世界なのだ。

セツナの生まれ育った世界とは大きく異なるのだ。なにが具体的にどう異なるのか、というのは、セツナは口で説明できる自信はなかったが。

ともかくも、今日まで生きてこれたのは、偶然の出逢いと、それによって知り合ったひとたちのおかげなのだ。それが、これから先も続くとは到底考えられなかった。そんな都合の良い話があるわけがない。

すべての人間が善良な性質をもっているわけではない。だれもが物分りがいいのなら、そもそも戦いや争いが起きるはずもない。命をなげうってでも、性善説を信じようなどとは想えなかった。

戦いに関しては、そう簡単に後れを取るようなことはないだろう。そんな自負を抱くくらいは許されるだろうと、セツナはひとりで納得していた。多少は場数も踏んだつもりである。歴戦の猛者には、まだまだ圧倒的に足りないのかもしれないが、少なくともそこらの兵士などよりは苛烈な戦いの中に身を置いてきたはずだ。

命を磨り減らすような戦いの中で、黒き矛の強さを身に染みて理解してきたのだ。

黒き矛さえ手離さなければ、負けることはない。
が、それは戦闘に関してのみの話なのだ。

戦うだけでは、人は生きていくこともままならない。
生きていくためには、食べ物がある。睡眠もとらなければならぬ。そのための場所も必要だろう。この化け物が生息する世界で、野宿など考えられるはずもない。宿を取るにせよ、食事をするにせよ、金がいる。当たり前前の話だ。

矛を振っているだけで、金が増えるわけがない。
それも至極当然の話である。

それらの問題を解決しうるのが、王に仕えるということだ。レオンガンドに付き従い、彼のために力を振るえばいい。それだけで、生活面の安全は保障されるに違いない。たとえどのように酷使されようとも、数え切れないくらいの戦場に借り出されることになるうとも、路頭に迷うようなことはないに違いない。

迷う理由はどこにもなかった。

もっとも、それらの考えが、セツナの意志を決定付けたわけでは

ない。打算や計算は、彼の得意とする分野ではなかった。セツナの行動を決めるもつとも大きな要因は、ほとんどの場合は感情なのだ。その瞬間瞬間に生じた想いが、一時の感情が、彼の言動を左右した。そう、この人生においてもつとも重大かもしれない問題に対しても、セツナは、変に考えて混乱するよりもみずからの感情を優先した。

「俺なんかでいいのなら……！」

セツナは、上手く言葉にできないことに歯痒さを覚えながら、レオンガンドの碧い眼を見つめた。その碧玉のような瞳に、歓喜の光が生まれた。そのあざやかな光は、セツナの出した答えが間違いではなかったことを示しているかのようにだった。ただの喜悦ではない。心の底から、セツナの答えを歓迎する輝き。

「セツナ！ 俺の願いを聞いてくれるのか！」

「は、はい。俺には戦うことしか出来ないですけど……」

「そんな謙遜しなくていいんだ、セツナ！ 君は、途方もない力を持っているんだからね。自信を持っていい。だからこそ、俺は君を必要としているんだ。君と黒き矛の力が！」

レオンガンドの迫力に気圧されながらも、セツナは、彼の言葉に込められた強い想いに心が打ち震えるのを認めた。感動だった。これほどまでに自分を必要としてくれるのならば、力の振るい甲斐もあるというものだろう。未だに明らかになっていない黒き矛の力、そのすべてを出し切ることでその想いに応えたい、と、セツナは強く想った。

だれかのために力を尽くす かつての自分からは考えられないようなことではあったが、それはこの世界に召喚されて以来、様々なひとたちと出逢い、色々なことを経験してきた結果なのだろう。死の気配を感じるような戦いや、人々との触れ合い、数多のまなざし、無数の言葉。そして、ファリア＝ベルファリア。セツナの中ではやはり彼女の存在は大きく、彼にもつとも影響を与えたといっても過言ではないのかもしれない。

「さて、セツナ。君はたった今、わたしの臣下に入ったわけだが、君ほどの人材をただの兵士として処遇するのはいささか不条理だと思わないか？」

王として、ということなのだろう　口調も新たにセツナに言葉をかけてきたレオンガンドだったが、そんな彼に水を差すかのよう
に、側近の一人が口を開いた。

「陛下、それではほかのものに示しがつかないかと……」

「君には聞いていない。わたしはセツナと話している」

レオンガンドは、にべもなく告げたが、その側近に一瞥をくれることもなかった。口髭を綺麗に整えた紳士然としたその男は、懽然とした様子だったが、周囲の視線を気にしたのか、即座に表情を消した。

「はっ。失礼しました」

「セツナ、君には君に相応しいものを用意しようと考えている。それには少々時間がかかりそうなんだ。我が国はいままで武装召喚師を抱えたことがなかったからね。特に君ほど武装召喚師を、ほかの兵士と同様に扱うのは失礼というものだ」

「陛下……！」

セツナが言葉に詰まってしまったのも無理がなかったのかもしれない。レオンガンドの思惑がどうあれ、彼の唇が紡いだ言葉は、セツナの心に響くには十分すぎる力があつたのだ。耳朶から心の奥底まで、電光の速さで浸透していく。感情が激しく揺さぶられるのを止めようがなかった。止める必要もない。

レオンガンドは、戸惑いながらも微笑を浮かべていた。セツナの反応に驚いたのかもしれない。

「それだけ君のことを評価しているということだ。先の戦いで働
きはもとより、カランでランカイン＝ビューネルを倒したことも、アズマリアが放った皇魔を殲滅したということも、すべて評価に値する。いや、評価しなければならぬ。でなければ、職務怠慢といわれても仕方がない。それこそ、他のものに示しがつかないという

ものだ」

と、レオンガンドが口髭の男を一瞥した。男に緊張が走ったようだったが、レオンガンドがそれ以上追求することはなかった。彼のまなざしは、再びセツナに注がれた。厳しさと優しさが同居した王者のまなざし。主君たるものこころあるべし、と、セツナに思わせるなにかが、その瞳には宿っていた。とても？うつけ？には見えない風格があった。

「先にも言った通り、君のための役職を用意するためには時間がかかる。ラクサス＝バルガザール」

レオンガンドの視線がラクサスに注がれると、その場にいる全員を意識が貴公子然とした騎士に集中した。当然、セツナもラクサスに目を向ける。金髪碧眼の騎士の横顔は、いかにも凜々しく、王と側近たちの注視さえも涼風を受けているかの如くだった。

セツナではそうはいかないだろう。いまだに緊張と感動の振幅に、どうにかなりそうな状態なのだ。とても真似のできる芸当ではない。「君は、軍の再編の話を知っているな？」

「我が隊一同、そのために王都に帰還した次第です」

「ああ、そうだ。君の隊だけではない。各地に派遣している騎士のうち、主立ったものたちには帰還を命じている。アルガザード将軍にはバルサー要塞の指揮に専念してもらわざるを得ないのが残念でならないのだが……それもこれも人材が不足していることが原因なのだ。奪還したばかりの要塞で指揮を取れるような器の持ち主は、アルガザード将軍くらいしかいない」

レオンガンドの視線に、側近たちはぐうの音も出ないといった有様だった。彼の結論に理論的な反論をぶつけることもできないのだろう。セツナは、王に対してはなにも言えない側近たちに多少の失望を覚えたものの、それも仕方のないことなのかもしれないと考え直した。人材がいらないのならば、どうすることもできないだろう。

国内から発掘するにしても、そう簡単に事が運ぶとも思えない。

「それも深刻な問題ではあるのだが……。我が国が弱小国の誇り

を免れないことは諸君も知つての通りだ。実際、先の戦いにおいて勝利を決定付けたのはセツナの活躍だ。ただの勝利ではない。圧倒的な勝利だった。要塞を奪還しただけではない。将を討ち取り、兵力を消耗させ、ログナーに大打撃を与えることができたのだ。文句のつけようがない大勝利だった。しかし、その勝利の内容を鑑みるに、我が軍の兵卒一人一人の質の悪さは想像を絶するほどに酷いものだと言わざるを得まい。このままでは同盟国を頼るしかなくなるだろうな。かといって、ルシオンやミオンがいつでも手を貸してくれるわけがない」

「陛下のお考えは理解できます。しかし、軍を再編したところで、なにが変わるといふのです？」

と、尋ねたのは、口髭紳士だった。もっともな疑問ではある。現状、編成を変えたところで、数少ないという人材が増えるわけもない。それぞれの能力に見合った部署に配置し直す事で効率化を図ることはできるかもしれないが、それにしただって限度があるだろう。話を聞く限りでは、レオンガンドの思い描いているものと、現実に行えるであろうこととの乖離が甚だしいと思わざるを得なかった。

といって、セツナは、レオンガンドの手腕を疑ったわけではない。半ば麻痺した思考で、そのような疑いを持つことができるはずもなかった。

「その通りだ。だがな。なにも手を打たず、ただ時の流れの過ぎ行くのを良しとは想わない。わたしはまず、皆の意識を変えねばならないと考えているのだ」

「意識？」

「そうだ。いつまでも、弱いままでもいい、などと思われている場合ではないのだ。意識の改革を。そのために、軍を再編する。これは再生ではない。新生なのだ」

「軍の新生……！」

側近たちの目に宿ったのは、希望の光だったのか。

ともかくも、目に見えて現れた側近たちの変化は、セツナの中の

彼らの印象にも良い変化をもたらしていた。どうやら側近たちはそれなりにレオンガンドに心服しているらしい。それは、これから彼らと関わることになるのである。セツナにとってもいい傾向だった。「そういうことだ。そして、これにこそ相当な時間がかかるだろう。時間をかける必要があるのだ。セツナの件も含めて、問題が山積みだからな。そこで、だ。セツナ、ラクサス。その間に君たちにやってほしいことがある」

改めてこちらに視線を送ってきたレオンガンドに対し、ようやく平静さを取り戻しかけていたセツナは、声を上擦らせた。

「俺に!？」

「わたしもですか？」

「セツナひとりでは心許ないのでな。君にも同行してもらおうことにした。もちろん、ふたりだけというのも安心できないだろう。もうひとり、後で合流する手筈になっている」

レオンガンドの口振りからして、ついさっき決まったというわけでもないのだろう。しかし、セツナにとっては突然の話だった。なにより、今し方、王に仕えると決まったばかりなのだ。もしセツナがレオンガンドの望みを拒絶していたのなら、その手筈通りには行かなかったに違いなかったが、その場合はその場合でなにか手を打っていたとしてもおかしくはなかった。

突然なのは、なにもセツナだけではない。

ラクサスにとっても寝耳に水の話だろう。なにより、彼は軍の再編のために王都に帰ってきたのであり、別の任務を待っていたわけではない。もちろん、王の命に反するようなものが、騎士になどなれるはずもなかったが。

「それでもたった三人ですが？」

「少数精鋭と考えてくれたまえ」

とは、黒髪の側近。名は確か、ケリウス＝マグナートといったか。口髭の男が、彼に続く。

「諜報活動を大人数で行うことほど愚かなことはなかるう？」

「諜報活動？ わたしたちが？」

それにはさすがのラクサスも驚いたらしく、素っ頓狂な声を上げていた。

セツナは、話の内容にほとんどついていけなかったが。

次に口を開いたのは、貴族風の男だ。ケリウスからセツナを庇ったあの男である。

「いま、ログナーに不穏な動きがあるらしいのだが、それがどうにも要領を得ない。その上、ログナーに忍ばせていた諜報員と連絡がつかなくなってしまったのだ。このままでは、ログナーの内情を探るところか、諜報員の無事を確認することもできない」

「もし、諜報員が捕らえられたとなると、これは我が国にとって大きな痛手だ。こちらの情報が敵の手に渡ってしまう可能性がある」
そう続けたのは、四人の側近の最後のひとりだった。側近の中でもっとも若く見える彼は、風貌からして優男であり、声音もまた、とてつもなく柔らかいものだった。

「それをわたしたちで調べろ、と？」

「そういうことだ。君たちなら腕は確かだ。どのような事態に陥ろうとも、生き延びてくれると信頼している」

「剣の腕ならばご期待に応えることもできましょう。しかし、ログナーに潜入するとなると話は別です。それこそ、わたしたち以外に適任のものがいるはず」

「そこをなんとかするのが、君の役目だろう。騎士ラクサス＝バルガザール」

「……」

有無を言わさぬレオンガンドの迫力に、ラクサスは押し黙るしかなかったのだろう。内心頭を抱えなくなったに違いない。セツナがそうだった。レオンガンドの誘いに乗ったのは間違いではないと胸を張っていえるものの、いきなりの任務に困惑と不安を覚えた。戦うことには慣れたといえるのだが、諜報活動となると話は違う。しかも、潜入するのはバルサー平原で戦ったログナー軍の本国なのだ。

かの戦場で、セツナは、ログナーの兵を数え切れないほど殺戮した。戦いに死はつきものだと納得はできる。しかし、それにしても殺し過ぎた。ログナーの人々の憎悪を買うには十分だろう。といって、もはや引き返せない場所に立っていることは、セツナも自覚していたし、その事実から逃れようなどとは想わないのだが。

「セツナ、しばらくガンディアを離れることになるが、これもこの国のためだ。よろしく頼む」

レオンガンドの真剣なまなざしと、こちらのことを思いやった口振りに、セツナも心を奮い立たせざるを得なかった。

「はい！」

力強く声を上げたセツナは、体の奥底から得体の知れない力が湧きあがってくるのを感じた。それは、レオンガンドの期待に応えたという想いが生んだ力だったのかもしれない。

ガンディアは、小さな国である。

ワーグラーン大陸南部に肩を寄せ合うようにして密集する無数の小国家のひとつに過ぎない。南方の護りをミオン、ルシオン両国との同盟によって安定させてはいるものの、北部に隣接するログナー、ベレル、アザークの三国とは敵対関係にあった。特に小国家群の中でも抜きん出た国力を有するザルワーンと繋がるログナーの存在は、ガンディアにとって長い間頭痛の種であった。ミオンと隣接するベレル、ルシオンの隣国であるアザークはまだいい。しかしログナーは、ザルワーンの支援を受けてガンディアへの侵攻を繰り返してきたのだ。

ガンディア国内の安定を図る上で、ログナー、そしてその背後に控えるザルワーンの脅威を取り除こうとするのは至極全うな考えだった。だが、だれしも思いつくことでありながらこれまで実現に向けて動き出せなかったのは、長きに渡る指導者の不在という国家にとって致命的な問題があったからに他ならない。

先王シウスクラウドが病に倒れたのは、約二十年前のことだ。英傑と謳われた偉大な王が、栄光に満ちた未来を失ったとき、ガンディアという小国から光という光が失われていった。当時、レオンガンドは幼い子供に過ぎず、シウスクラウドに代わって指揮を振るうなどできるはずもなければ、その幼い王子を擁して軍を率いるような器の持ち主もいなかったのだという。

もちろん、有能な將軍もいるにはいた。しかし、英邁な王の意思の下に統率された組織は、その一人の息吹が届かなくなったとき、機能不全に陥り、末端では壊死を起こしかけていた。そもそも、有能な將軍たちがガンディアを見離していったのだ。

やがて幼かった王子は成長したものの、国の内外では？うつけ？という悪評が飛び交い、人心は彼の元から離れていった。

国民が絶望するのも無理な話ではなかったのだ。

しかし、先王の死後、王位を継いだレオンガンドは、バルサー要塞の奪還によって国内にその実力の片鱗を見せ付けることに成功し、ひとまずは人気の回復に成功したのだった。もつとも、未だに？うつけ？なのか、そうでないのか、判断を付けかねているものたちも多い。すべては、今後の結果次第なのだろう。

「さて、今後の予定だが」

ラクサス・バルガザールが、セツナに向かって口を開いたのは、ふたりの長い旅路の最初だった。ガンディオンを出立してまだ半日も立っていない。いや、一時間立ったのかどうかすら不明である。

王都ガンディオンから北へと伸びる街道を、ふたりは、馬車に乗って進んでいた。晴れやかな空の下、日差しは暖かだ。風は緩やかであり、空の青さと白日のあざやかさ、雲の白さが織り成すコントラストは目に痛いくらいだった。

道幅の広い街道を行き来するのは、なにもふたりの乗る馬車だけではない。彼らと同様に王都から城塞都市に向かう人もいれば、マルダール、あるいはバルサー要塞からガンディオンに来る人々もいた。徒歩のものもいるし、馬を走らせるものもいる。乗合馬車で目的を目指すものもいるだろう。当然の話だ。

ここは街道である。

「まずはマルダールへ行く。それは聞いているな？」

「そこで合流するんですよね？」

「そうだ。その相手なんだが、わたしにも見当がつかない」

彼は、嘆息するように告げた。相手の少年が不安そうな表情になるのを意識するが、事実なのだから仕方がない。もちろん、合流相手の情報を何一つ超越さない上の連中に対して不遜なことを考えないでもなかったが、言ったところでどうにかなるものでもない。あの場では口にはできなかったことかもしれないし、説明する機会を失っただけかもしれない。

ラクサスは、内心の徒労感を圧殺して、話を続けた。王都に帰っ

てきてからというものの、心配事ばかりが増えているような気がする。それも加速度的に。

「マルダールで合流した後、西へ向かう」

「西へ？ ログナーに向かうんじゃない……？」

「それも考えたがな。こちらはたった三人だ。正面から潜入するよりは、別の方法を取るほうが安全だと判断した」

「別の方法？」

「アザーク」

「……それって、ガンディアの北西の国でしたっけ？」

「そうだ」

ラクサスは、セツナがガンディア周辺の地理を多少なりとも理解できていることに満足した。王の命を受けてから出発するまでの数日の間に懸命に覚えたに違いない。彼は、この国は愚かこの世界の住人ですらなく、その上で地理は苦手だとのたまうほどだ。地図と睨み合うセツナの姿を思い浮かべて、ラクサスは、微笑を浮かべた。アザーク。ガンディアの隣国のひとつだ。ガンディアの西にある国であり、南はルシオン、北東部はログナーと隣接している。

「まずはアザークに向かう。アザークとは敵対関係にはあるが、我が国とは現在戦闘状態にはない。比較的安全だろう」

「じゃあ、アザークからログナーに？」

「ああ。口で言うほど簡単にはいかないだろうがな」

彼は、そこで話を切った。アザークからログナーへ入る方法については、合流した後で十分だと思ったのだ。それに、彼の考え事を増やすのは良くないだろうとも想っていた。セツナの戦闘力については、一応信頼している。この目で見たわけではないにせよ、レオンガンドのお墨付きを頂いている上、実弟であるルウファからも絶賛されているほどののだ。疑う理由はない。

しかし、精神面ではどうだろう。やはり、彼は十七歳の少年に過ぎない。戦いとは無縁だった異世界から、闘争に明け暮れるこのイルス＝ヴァレに召喚されたというだけの、普通の少年なのだ。

(そうだ)

ラクサスは、セツナとの初対面のときのことを思い出した。廃墟の如く破壊し尽くされた《市街》の一角で、彼はセツナと出会った。しかし、禍々しい黒き矛を手にした少年の姿からは、何百人もの敵を殺した戦士に対して抱くような印象はなく、むしろ天敵を恐れる小動物のようなイメージを受けたのだ。

そんな少年を敵国の真っ只中に連れて行くというのは、あまりにも無謀な無体な試みだと言わざるを得ないのだが、かといって主君に反論できるような立場にはない。ただ主命を受諾し、全身全霊を尽くすのが彼の役目であった。

だからこそ、ラクサスは、セツナのことを気に掛けなければならぬと想うのだ。未知の世界に飛び込んだばかりだというのに、敵国の内部に潜入するという困難な任務を命じられた哀れな少年。不安しかないだろう。実際、ラクサスの目の前の少年は、不安そうに視線を落としていた。

「どうしたんだ？」

「大丈夫かなあって」

「なにがだ？」

「あのふたり」

「ああ……あのふたりか……」

そう言っただけでラクサスが頭を抱えなくなっただけで、セツナの心配事が彼にも関係の無いことではなかったからだ。

彼の脳裏を過ぎったのは、三日前の情景だった。

彼の実家である通称・バルガザール邸の応接室には、王宮帰りのラクサスとセツナ、彼の弟であるルウファとファリア・ベルファリアの四人だけがいた。彼のもうひとりの弟、ロナンも話に加わりたがっていたが、ラクサスは許可しなかった。部外者を入れるわけにはいかなかったのもあるが、ロナンの口の軽さを恐れたのも事実だった。情報の流出は、自分の命を脅かすことに直結する。

「理解したわ。セツナ自身が選んだ道よ。わたしが口を挟む余地はないし、それが最良の選択だったと想うわ。ガンディアは小国だけど、良い国なもの。それに、陛下なら君を悪いようにはしないでしょうね」

セツナが話し終えたとき、ファリアは、優しげなまなざしでセツナを見つめていたのをラクサスは鮮明に思い出すことができた。彼女がセツナに対して時折見せる慈母のような表情が、極めて印象的だったのだ。

「ファリア……」

彼女に対してセツナが感動している様子だったのは、彼の声が震えていることで気づかされた。ラクサスは、ソファに腰掛けたファリアの正面　つまりセツナの背後にいたのだ。

「君には君の、わたしにはわたしの道がある。君は君の想う通りに進んでゆけばいいのよ。ま、それにしたって、ログナーに潜入とはねえ……って、そんなこと、わたしに話しても良かったの？　部外者よ？」

ファリアの悪戯つぽく微笑はもう少し見ていたくもあつたが、ラクサスは、口を挟まなくてはならなかった。そろそろ彼女に説明しなければならぬ。

「いや、そうではありませんよ」

「はい？」

「あなたにも協力してもらわなければならないのです。ファリア」
ベルファリア殿」

ラクサスは、ファリアの惚けたような顔を見た。彼女ほどの人物が、こちらからなにがしかの要請があることを予想していなかったとは到底考えられないことなのだが、表情を見る限りでは普通に驚いていた。もしかすると、セツナのことと頭が一杯だったのだろうか。

故に、ラクサスに返ってきた言葉も的外れだった。

「わたしもログナーに行け、っていうことかしら？」

「いえ、あなたにはルウファと行動をともしてもらいたいのです」「はあ？」

「ルウファには、セツナの代わりをしてもらうのでね」

ラクサスの言葉に、彼のすぐ隣から驚愕と悲鳴の同居した叫び声が上がってきたのは、当然の結果だったのかもしれない。

「ええっ!？」

「ああ。言っていないかったな。そういえば」

「兄さん!？」

彼は、ただ愕然とせざるを得ないのだろう。ルウファにとっては予期せぬ事態だったのだ。自分は部外者なのだと決め付けていたのかもしれないが、だとしても、どうして関係者以外立ち入り禁止のこの空間に存在することを許されたのかを考えるべきであっただろう。弟のロナンが入室を禁じられ、彼が許された理由を。

ラクサスは、冷やかに告げた。

「王の御命令だ。ルウファ。おまえにはしばらくの間、セツナ「カミヤとして振舞ってもらうことになった。黒き矛の武装召喚師の噂は、周辺諸国にも知れ渡っているのだ。それほどの人物の姿が、突如として人々の前から消えたらどうだ？」

「それは……間違いなく噂になりますね」

「そうだ。人の口に戸は立てられん。噂は、様々な憶測を呼ぶものだ。憶測など所詮憶測に過ぎないが、確信に迫る可能性もないとは限らない。例えば、セツナは極秘の任務に携わっていると、ログナーに潜入しているとか、な。そんな話がログナーに知られてみる。潜入中の我々が窮地に陥ること請け合いだ」

「それはわかりますけど……」

そういいながらもルウファは、納得できない様子だった。不服な本心を隠すこともせず聞いてくる。

「見た目は、どうするんです？ 俺とセツナなんて似ても似つかないじゃないですか」

「髪は染めてもらう。背格好はそれほど変わらない……か？」

「いやいや、俺のほうが高いし」

「それなら、足を切ってもらおうとして」

「無理ですよ！」

「陛下の命令でもか？」

「ぐ……！」

それはさすがに暴論であったが、それでもルウファが食って掛かってこないのは、彼がガンディア王家に忠誠を誓った人間であるという自覚があるからなのだろう。王の命は絶対　幼い頃からそう教育されてきたというのも大きいのだろうが。

ラクサスは、そんな弟にたいして表情が緩みかけたものの、彼の中の冷徹な意志が微笑さえも浮かばせなかった。

「冗談だ。背丈など正確に知られているはずもない。なにより、イメージが大事なのだ。セツナカミヤは黒髪の少年だ。その条件さえ満たしていればいい」

「だったら、俺じゃなくても……」

「おまえは武装召喚師だろう」

「うう……こんなことのために武装召喚師になったわけじゃないのに」

それはそうだろう。しかし、ラクサスは、まなざしをさらに険しくして、悲嘆に暮れるルウファを見据えた。極めて冷徹に、問う。

「では、なんのためにこの家を飛び出した？　バルガザールの家名に泥を塗ったおまえをなんの咎もなしに迎え入れた父上の判断は、やはり間違いだったのか？」

ルウファがバルガザール家を飛び出した理由を、ラクサスは知らない。おおよその見当はついているものの、その事実を本人に聞き出したことはなかった。そもそも、ルウファとこれほどまでに言葉を交わしたのは、実に五年ぶりのことだったのだ。

五年である。

ルウファが、武装召喚師を志して家を飛び出し、そのまま消息を

絶ってから、五年もの歳月が流れていた。その間、ラクサスは騎士として一人前になるべく、修練に修練を重ね、バルサー要塞の防衛戦に参加し、あるいは皇魔の巢を滅ぼすために国内を走り回っていたのだ。風の噂を聞くこともあった。ルウファが無事だという噂には安堵を覚えながらも、憤りを感じずにはいらなかったし、半年前、ルウファが王都に帰ってきたという報告は、彼は神へ感謝したものだ。そして、父であり將軍であるアルガザードが、ルウファに下した一年間の謹慎処分という判断には、異論を抱きつつも胸を撫で下ろしたものだ。

家を出る前から武装召喚師としての訓練を始めていたとはいえ、わずか五年で、武装召喚師として人並み以上の腕前を身に付けたという事実は、ルウファなりの覚悟の大きさを物語っていた。並大抵の努力ではない。それこそ血の滲むような特訓の連続だったに違いない。

だからこそ、ラクサスは、ルウファが目の前にいるという事実が嬉しくもあるのだ。彼は、王家に力を尽くすために武装召喚術を身に付けようとし、そして見事会得して帰還を果たしたのだ。それは驚くべきことだった。身勝手を叱責しながらも、彼の成果を賞賛せずにはいられない。が、手放しに喜ぶこともできない。そんな相反する感情のせめぎ合いの中で、ラクサスが表情を崩すことなど許されなかった。

不意に、ルウファの瞳に光が灯った。強い、決意の輝き。

「……わかりました。やります。俺にやらせてください！」

覚悟を決めたのだらう。ルウファの声音に込められた想いを察して、ラクサスは、表情をほんの少しだけ緩めた。だが、声音を穏やかにすることはかなわない。

「ルウファ。おまえは本来謹慎中の身ではあるが、今回は特例の処置により任務に参加することが認められている。これはおまえ以外に適任者が見つからなかったからというのが理由だが、おまえがみずからの意志で武装召喚術を修めてきたということに対する、陛下

からのお答えでもあるのだ。そして、この任務を無事に成し遂げた
暁には、おまえの謹慎も解かれる手筈になっている。心して、事に
当たってくれ」

ラクサスは、その言葉を口にしてしている間、ルウファの貴公子然と
した顔に驚きが刻まれ、

次第に歓喜へと変化していく様を見つめていた。陛下の答え。それ
はつまり、ルウファの身勝手が認められたということに他ならない。
彼の独断で成したことが、この国のためになると判断されたのだ。
ルウファにとって、これほど驚いたことはなかったに違いない。

「はい……！」

感極まった弟の姿に心動かされそうになりながらも、ラクサスは、
眉ひとつ動かさなかった。

「で、わたしは？」

困惑気味に尋ねてきたフェアリアに、ラクサスは、気を取り直すよ
うに咳をすると、彼女に向き直った。最初はフェアリアへの協力要請
についての説明をするつもりだったのだが、つい話が逸れてしまっ
ていた。本筋に戻さねばならない。

「さっき言った通り、ルウファにはセツナに変装してもらおうわけ
ですが、その間、フェアリア殿はルウファの隣にいてほしいのです。セ
ツナの隣には美しい武装召喚師がいる、という話も有名ですからね」

「ええ！？ そうなの！？ 知らなかったわ……！」

「フェアリア……？」

「美しい召喚師だなんて……！」

「なんか喜んでるし」

狂喜乱舞するフェアリアの姿になにやら呆れ果てたらしいセツナが
ため息をついたところで、ラクサスは、その長い回想を終えた。も
っとも、現実の時間にしてもの一分も立っていないだろう。事実、
窓の外の風景はほとんど変わっていないかった。

一向に代わり映えのしない街道の景色は、ガンディアに訪れた一時の平穩を形にしているかのようであり、ガンディオンからマルダールへと伸びる長い道のりには、危険らしい危険がまるで見当たらなかった。無論、皇魔の姿は愚か、気配も感じられない。

（マルダールまでは、遠いな）

ラクサスは、所在無げに外の景色を見遣るセツナのことを気にしながらも、城塞都市マルダールで待つという三人目の同行者について思い巡らせていた。ログナーでの諜報活動に役に立つ人間であれば、どのようなものでも構いはしないのだが、それでも考えざるを得ないものだ。そもそも、これから決死の任務を共にする間柄であるべきはずのラクサスたちにまで、同行者の詳細を明らかにしないのはどういう見なのだろうか。何かしら問題があると見て間違いないのかもしれない。

（なににせよ、考えるだけ無駄か……）

ルウファのことを心配するのと同じことだ。

いまの彼にはどうすることもできない事象なのだ。無駄なことに頭を捻る必要は無い。無駄なことはいらないほうがいい。そんな風に考えながら、ラクサスは、瞼を閉じた。マルダールまではまだまだ距離がある。それならば、しばらく眠っていても構わないはずだ。ここ数日多忙を極めた。王都を出発するまでにいくつかの書類を提出しなければならず、また、ログナー潜入のための段取りも決めなければならかった。忙殺されたといっても過言ではない。少なくとも、ゆっくりと睡眠を取れるような時間はなかったのだ。

（たまには、な……）

ラクサスが睡魔に身を委ねるまでに時間がかからなかったのは、疲労が蓄積していたからに違いなかった。

第五十二話 王都発、敵国行 狂気との合流

マルダールは、城塞都市と呼ばれている。

城塞化が推し進められたのは、半年前のバルサー要塞陥落した直後である。それ以前は、王都ガンディオンに次ぐ第二の都市として知られ、王都に引けを取らないほどの殷賑と喧騒に包まれていたという。

半年前、先王の死とバルサー要塞の陥落という情勢の急激な変化は、マルダールから活気を奪う一方で、重い緊張をもたらしたのだ。当然だろう。ガンディア北方の守備の要であるバルサー要塞が落とされたのだ。マルダールは一夜にして最前線となり、ログナーがいつ攻め込んでくるかわからないという緊迫感の中で城塞都市として作り変えられていったのだという。

とあって、以前の面影を消し去ることなどできるはずもない。一から作り直したわけではないのだ。かつての名残はそこかしこにあるらしい。が、以前のマルダールを見たこともないセツナにはわかるはずもなかった。

セツナとラクサスのふたりを乗せた馬車が、王都の北東に位置するこの城塞都市に到着したのはつい半時間ほど前のことだ。

マルダール南側の大門を通り抜け、城壁に囲まれた都市の中へ。今回は、厳戒態勢を敷いていた前回のときとは異なり、馬車に乗ったまま通過することが許されていた。バルサー要塞を奪還できたのだ。敵軍の侵攻を恐れる必要もなければ、緊張する謂れもなくなっていた。市内には活気が戻ってきているらしく、セツナの記憶にある空気の張り詰めたマルダールとは大きく様子が違っていた。

まず、ひとが出歩いていて。一般市民が、である。セツナがマルダールと違って思い出すのは、武装した兵士たちが殺気を撒き散らしながら巡回している光景であり、街を闊歩する市民の姿など見た記憶がなかった。バルサー要塞に出陣する間際のことだ。それも

仕方がなかったのかもしれない。

当然、重装備の兵士の姿は見当たらなくなっていた。あの戦いが、ガンディア側の大勝に終わり、無事に要塞を奪還することができたのだ。戦いに動員された兵士の多くは王都に帰還し、残りは、ログナーへの牽制としてバルサー要塞に入るものと、マルダールに留まるものとで分けられたという。戦線が遠のいたことで、マルダールにはわずかな兵力を残しただけに過ぎないようではあったが。

ふと見れば、日が沈みかけていた。城壁の向こうへ。西の空は燃えるように紅く染まり、反対に東の方には闇が迫りつつあった。彼の生まれ育ったあの青い星と同じように、時は流れ、空の表情も変化している。それは以前からわかっていたことではある。きわめてよく似た世界だった。なにもかもすべてが似通っている。人も動物も空も大地も、とても異なる世界には思えなかった。

しかし、ここが地球ではないのは事実だった。大陸図を見ればわかる。数多の国の名が記された広大な大陸は、地球上には存在し得ないものだった。いや、地図を見ずともわかるものだった。感覚が、そう告げている。

ここは、セツナの本来在るべき世界ではない、と。

セツナは、頭を振った。今はそんなことを考えている場合ではないのだ。気を取り直して、彼は、すぐ目の前を歩く男に問いかけた。「どこに向かっているんですか？」

「合流地点だ」

考えればわかるだろう、とでも言いたげなにべのなさに、セツナは、苦笑するしかなかった。彼がラクサスに尋ねたのは、その合流地点のことなのだ。もちろん、場所を教えてもらったところで、セツナには把握できないのかもしれないが。

セツナは、静かにため息を浮かべると、夕闇が迫る路地を進むラクサスを追いかけた。

「遅い到着でしたね、ラクサス殿」

突如として路地の暗がりから飛んできたのは、女の声だった。低めに抑えられた感のある声音ではあったが、別段聞き取り難いわけでもなく、むしろ心地のいい音色であったのかもしれない。

夜の帳が下ろされようとする時間帯。王都ほどではないにせよ複雑に入り組んだ路地には、冷やかな影が悠然と横たわっている。閑散としているのは時間帯のせいなのか、それとも中心から離れているからなのか。しかし、周囲には人家も多い。人気がないとは言え、ひとがいないというわけでもなさそうだった。

故に、女が低い声で話しかけてきたのは正しい判断だったのかも知れない。人目につきたくないからこそ、こんな場所で落ち合うことに決めたに違いないのだ。でなければ、どこで合流しようと構わないはずだ。

「……同行者か？」

ラクサスが、声のした方へと視線を投げかけるのと同じくらいにセツナもそちらを見遣った。細い十字路の左の通り。黄昏に生まれる淡い闇が揺らめいたかと想うと、喪服のような黒装束を身に付けたいかにも妖しげな女が、進み出てきた。

「いえいえ。わたしはただの付き添いですよ。あなた方とともに死地に赴くなど、真つ平御免ですね」

低い声音で軽口を叩くのは、見た目に二十代前半の女性だった。比較的平均的な体型だろう。長身でもなければ、痩せ気味ということもない。長い黒髪は影に溶けるかのようにであり、能面のような

そんな形容詞の似合う表情を浮かべていた。軽妙な口振りとは裏腹に、眼は笑ってさえいない。肌は病的なまでに白く、身に纏う黒衣は、前述の通り喪服のようであり、そんな格好で出歩けば嫌でも目立つに違いなかった。

ひよっとすると、こんな時間にこんな場所で落ち合うことになっ

たのは、彼女の衣装のせいなのかもしれない。だとすれば、あまりにもくだらない理由であり、セツナは、もしそれが事実なら、呆れて物も言えなくなるだろうと想った。

「……」
「そう怖い顔なさらなくてもいいじゃないですか。事実、そうでしょう？ たった三人で敵国に潜入するなど、正気の沙汰とは見えません。ましてや、特別な訓練を受けたわけでもないおふたりが適任だとは到底」

おどけたように軽く笑う女に対して、ラクサスの反応は厳しいものだった。当然の対応ではあったが。

「わたしは君の与太話を聞きに来たわけではない。主命によって、ここに来た。もうひとりの同行者と合流するためにだ。これ以上くだらない話を続けるのはやめてもらいたいのだが？」

「すみませんね。久しぶりに外の空気を吸ったものですから、ついっはしゃいでしまっつて」

「……君は何者だ？」

ラクサスが、呆れたように問いかけた。実際、彼女の饒舌ぶりに呆れているのだろう。それにはセツナも全力で同意したところだった。なにより、目的を果たすのが先決であり、こんなところで長々とおしゃべりしている場合ではない。

「これは失礼。申し遅れましたが、わたくしはウル。レオンガンド陛下に付き従う影がひとり。そして彼が」

ウルが背後を振り返るのに合わせて視線を移すと、さっきまでだれも居なかったはずの空間に、いつの間にかひとりの男が突っ立っていた。気配も感じさせなければ、物音も立てなかったのだろう。空気の変化さえも認められなかった。一瞬にして、というわけでもなさそうであり、その事実がより一層、その男が只者ではないことを示していた。

「……」
「そう、只者ではなかった。」

セツナは、その長身瘦躯の男の顔を一目見た瞬間、今までにない衝撃を受けたのだ。閃光が、目まぐるしく脳裏を巡る。焼きつくような痛みとともに、むせ返るような熱気がセツナの意識を席卷した。「おふたりとともに死出の旅路につくものです。名は――」

ウルの声は、セツナの耳には届いていなかった。その男の顔だけが、セツナの瞳に映りこんでいた。夕闇の中でもはつきりと見えるのは、距離が近いからという理由だけではない。見覚えがあるからだ。一度、眼にしたことがあるからだ。網膜に焼き付けるほど印象深い相手だったからだ。

あの男だ。

「ランカイン」ビューネル！」

セツンは、我知らず怒声を張り上げていた。ウルなどという女が、驚きのあまり両手で耳を塞いだようだったが、構ってなどいられなかった。いまのセツナに、他人に気を配っていられるほどの余裕はなかった。

カランの炎の幻影が、彼の全身を焼いていた。

「は！ あの少年か！ 正義の味方の方！」

男の顔に、狂ったような笑みが刻まれた。黒髪は長く、風に揺れる様は幽鬼さながらだった。吊り上った双眸に浮かぶのは、純然たる狂気である。わずかな正気さえも見出せないほどの狂気は、むしろ清々しいほどだといえるのか。頬はこけ、以前よりも痩せて見えるのは気のせいではないのだろうか。

ランカインの狂気染みた声は、セツナにとっては耳障り以外のなものでもなく、皇魔の気配などよりも遙かに神経を逆撫でにするものだった。そして、暴走する感情を抑えられない。

「なんでだ！？ なんで、てめえがここにいるんだよ！？」

セツナには、叫び声を上げることしか、心の中で荒れ狂う感情を吐き出す術も見つからなかった。体中を駆け巡るのは、止めどない激情だけではない。全身を焼き尽くさんとした炎の記憶が、皮膚の下で疼くように揺らめいていた。

彼の脳裏を過ぎったのは、紅蓮の猛火に包まれたカランの街の光景であり、エリナの泣き顔であり、ランカインの哄笑だった。猛然と舞い上がる真紅の炎が、彼の戦いの原点だったのかもしれない。初戦ではない。それもわかっている。しかし、セツナがみずからの意志で武器を手に取ったのは、ランカインに対峙したときが最初だったのだ。

「君らの陛下の御命令以外にどんな理由があるというのだね？」

「……！」

ランカインの冷笑に対して返す言葉もなく、セツナは齒噛みした。ラクサスを振り返る。騎士は、こちらの様子に驚いていたのだろう。セツナが眼を向けると、一瞬戸惑ったようだった。

「その男が同行者なのか？」

「はい。彼は、カインⅡヴィーヴル。もぐりの武装召喚師ですが、実力は十分。なんなら、保証書でもつけましょうか？」

「カインⅡヴィーヴル……？」

セツナは、男を一瞥してから、ウルを見遣った。顔面に張り付いたような笑みは、不気味なまでに崩れていない。

「ランカインⅡビューネルなどという人物は、どうやらこの世には存在しないようなので、新しい名前を付けてあげたのですよ。いい名前でしょう？」

「どうということなんだよ！ そいつは……！」

「セツナ、少し黙ってくれないか」

「……」

セツナは、はっとラクサスを仰いだが、彼の射るような視線の前では口を閉ざさざるを得なかった。鋭利な視線だった。さつきはなかったものの、まるで刃物でも突きつけられたかのような錯覚に陥るほどのものだった。それほどまでに、ラクサスにとってはセツナの言動が煩わしかったのかもしれない。反省する。が、セツナの意識は即座にランカインへと映った。

カランを焼き尽くした男が、未だに生きていることが不思議でな

らなかった。何百人という人間を殺戮した男なのだ。極刑に処されてもおかしくはない。むしろ、死罪は妥当であり、それ以外の罰など考えられなかった。ランカインはそれほどのことをしたのだ。街ひとつ壊滅させた。

「失礼。彼は今回初めての任務ということで興奮しているらしい。大目に見てやってくれ」

「いえいえ。騎士殿が気にするほどのことでもないでしょう」

「それもそうだがな。……で、彼はランカイン＝ビューネルなのか？」

セツナは、ラクサスの言葉に耳をそばだてた。カランを焼き払った武装召喚師の存在は、ラクサスも知っていて当然だった。知らないほうがおかしいとさえいえる。未曾有の重大事件である。たったひとりの武装召喚師に、小さいとはいえ街をひとつ焼き尽くされたのだ。騎士ともあるう人物の耳に届かないはずがなかった。

「はい。彼がああのランカインで間違いありませんが、それがどうかしましたか？」

「いや、聞いたただけ」

「そうですか」

あつさりとしたラクサスの態度に呆気に取られたのは、ウルだけではない。

セツナは、茫然とした。そこは問い詰めるべきところではないのか、と思いつつも口には出せなかった。ラクサスに対して意見できるような立場にはなかったし、なにより、ラクサス自身が納得しているのなら仕方のないことなのだ。

もっとも、セツナはこれっぽっちも納得できていなかったし、ランカインの存在を認めることなど到底できそうにもなかったが。

「では、カイン＝ヴィーヴル」

「なんだ？」

「よろしくお願ひしますね。騎士ラクサス＝バルガザール殿の命令に従い、任務に取り組んでください。下らぬ問題など起こさぬよう

に」

「わかつている」

「すべては陛下のために」

「……すべては陛下のために」

と、ランカインが、ウル最後の言葉を異口同音に繰り返したとき、彼の双眸から一瞬だけ狂気が消え失せ、別のなにかが顔を覗かせたのをセツナは見逃さなかった。それは理性とでもいうべきものとはまったく異なる色彩を帯びた表情であり、ランカインの狂気とは別種の不安をセツナに抱かせるものだった。

（すべては陛下のために……か）

その言葉は理解できる。口にすることで再確認したのもなんとなくわかる。しかし、セツナには、とても信じられなかった。あれほどの殺戮を行った人間を、どうしてこのような極秘任務に同行させるのだらう。そもそもランカインは敵国の人間だ。ガンディアの国民を虐殺した大罪人であるはずなのだ。

セツナの脳裏で燃え盛る炎の記憶が、ランカインを許し難いものにしていった。

と、こちらの様子が気になったのか、ラクサスが声をかけてきた。「セツナ。今は深く考えなくていい。任務に支障をきたすわけにはいかないだらう」

声音は穏やかそのものだったが、その事実が、逆に彼の心情を理解し難いものにしていったようだった。

セツナは、ラクサスと視線を交わすと、眼力に負けそうになりながらもその青い瞳を見つめ続けた。ここで目を逸らすわけにはいかない。セツナにだって、譲れないものはある。

「でも、俺には納得できません。あいつは、ランカインは、カランの街を焼いた奴なんですよ？ 罪もないひとたちを虐殺した……！」

胸の内に燻る激情が猛火となって噴き出すのではないかという怖れが、セツナの口を閉ざさせた。これ以上、感情を言葉にすることはできない。胸中で狂おしく渦巻くのは、黒い炎だった。研ぎ澄ま

された敵意であり、すべてを焼き尽くすほどの殺意だった。そんなものに身を委ねてはならない。みずからを見失ってはならない。それは恐ろしいことなのだ。と自覚することで、セツナは、冷静さを取り戻していた。

もつとも、頭を冷やしたところで、ランカインへの敵意も殺意も消え失せたりはしなかったが。

紅蓮の炎の記憶が、セツナの眼の奥で消えることなく揺れていた。「わかっている。だが、これは陛下がお決めになったことだ。わたしたちの口出しすべきことではない」

「ラクサスさんは納得できるんですか？」

「騎士は主命に従うだけさ」

「……」

セツナは、ラクサスの答えに慥然とした。当たり障りのない、模範的な回答だろう。これ以上ないくらいの答えだったのかもしれない。そう返されれば、セツナはなにも言えなくなる。事実、騎士は主君の命令に従うしかないのだ。いや、それは騎士だけではない。いまやレオンガンドの臣下にあるセツナも同じなのだ。

レオンガンドの命令は絶対であり、拒絶することは許されない。

(だからって、なんで……おまえなんだよ)

セツナは、ウルと言葉を交わすランカインの横顔を見据えながら、胸中で唾棄するようにつぶやいた。

「結構似合っているじゃないか」

レオンガンドが、ルウファの姿を見るなり口にしたのはそんな言葉だった。しかし、その台詞とは裏腹に、笑いを堪えきれないといった表情なのは、どういふつもりなのだろう。似合っていないといっているようなものではないのか。

とは想いつつも、ファリアは、ルウファの横顔を見て、胸中ではレオンガンドの表情と同様の考えを抱かざるを得なかったが。

(確かに、似合っていないけど……ねえ?)

同意を求めるべき相手もない空間で、彼女はひとり胸中に言葉を浮かべた。

頭髪と眉毛まで真っ黒に染めたものの、ルウファの顔立ちは貴公子のそれであり、どことなく不自然なものに感じられた。そして、どこか野生的な面構えのセツナとは似ても似つかないものだ。それも当然だろう。顔立ちも違えば、背格好も違うのだ。似る要素など最初からなかった。ただ、遠目に黒髪の少年に見えればいいという理由で選ばれたに過ぎない。

そして、遠方からならば、顔立ちなどはつきりとわかるはずもない。いや、そもそも、セツナの顔なんてほとんど知られてはいないのだ。例えセツナの容姿の正確な情報が流れていたとしても、実際に見たことがないのならば、ルウファの変装を見破ることはできないだろう。もつとも、ルウファの知人には簡単に看破されるかもしれないが。

「に、似合ってますか……?」

「ああ。ばつちりだ。これで、他国にセツナの不在を悟られることはないだろう」

「はあ……」

レオンガンドの力強い言葉にも、ルウファは安心できない様子だ

った。彼の身になれば、不安に陥るのもわからなくはない。変装と
いっても、髪を黒く染め、衣服を高価なものから安物に改めたくら
いなのだ。その程度の変装では安心できないのも当然なのかもしれ
ない。といって、これ以上どうすればセツナに近づけるといのか
フアリアは、不安そうに微笑するルウファの横顔から前方に視線
を戻した。

彼女たちがいるのは、獅子王宮の中でも？ 鎧の回廊？ と呼ばれる
廊下にある戦略会議室の中だ。壁面に張られた三つの地図は、その
戦略会議の向かう先を示しているかのようであり、実際その通りな
のだろう。しかし、無数の椅子が並べられた長方形のテーブルにつ
いているのは現在、レオンガンドひとりだけだった。文官武官は愚
か、彼が重用している側近の姿もなかった。

この室内に居るのは、たった三人だけなのだ。余程重要な話なの
か、それとも、レオンガンドの側近たちが多忙のあまり顔を見せる
暇さえないのかもしれない。フアリアには、前者よりも後者の可能
性のほうが高いように想われた。

「さて、本題に入ろう。君たちに新たな任務を引き受けてもらいた
いのだ」

「これとは別に、ですか？」

至極当然のことをおすおすと尋ねたのは、ルウファである。その
挙動不審にも見える態度は、王への畏怖と緊張から来るものに違
ない。彼は、王宮に呼び立てられて以来、ずっとそんな調子だった。
それもそのはず。バルガザール家といえば、ガンディアでも名だ
たる家柄であり、彼の実兄ラクサスがそうであるように幾人もの騎
士を輩出しているのだ。そしてなにより、彼の父アルガードは將
軍であり、軍の指揮を任されるほどの人物なのだ。そんな家に生ま
れ、未来の騎士としての英才教育を施されたのだとすれば、王への
忠誠心が並外れて純粋なものとなっていたとしてもなんら不思議で
はない。

生まれてから此の方、主君を頂いたことのないフアリアにはいま

ひとつ実感しづらい事情ではあった。といって、ファリアが緊張していないというわけではないが。

「そうだ。もちろん、君には武装召喚師セツナ「カミヤ」として振舞ってもらわなくてはならない。表向きは彼の手柄になってしまおうが……」

「だ、大丈夫ですよ！」

「それならいい。任務の内容だが、ふたりにはクレブルへ向かってもらいたい」

「クレブル……ですか？」

ファリアは、レオンガンドの意図を探るようにその都市の名を反芻するとともに、脳裏にクレブルの色あざやかな町並みを思い浮かべた。彼女は一度だけ、その都市を訪れたことがあった。散策するほどの時間的余裕はなかったが、それでもクレブルの市街を塗り潰す多様な色彩は覚えていた。

クレブルといえば、ガンディア王国南部にある都市だ。規模としては城塞都市マルダールよりも小さいが、それでも活気に溢れる都市には違いなかった。クレブルはガンディアの南端に位置しているといっても過言ではなく、同盟国であるミオン、ルシオンとの国境が近かった。そのため両国との交流が盛んであり、人の出入りの多さは王都にも勝るとも劣らないといわれている。そしてルシオン、ミオンの人々との交流は、クレブルに多大な影響を与えており、三国の特色が入り乱れた都市は半ば混沌としていた。

「リノンが、ようやくルシオンに帰ることになったのでね。君たちにクレブルまでの護衛を頼むことにしたのだ」

「リノンクレア様なら、白聖騎士隊の方々とともに御帰国されるのではないのですか？」

ルウファの質問は、ファリアの疑問と同様のものだった。レオンガンドは、穏やかにうなずいて見せる。

「そうだ。本来ならば、リノンに護衛の必要はない。白聖騎士隊さえいれば、帰途、皇魔に遭遇しようが、野盗の集団に襲い掛かられ

ようが苦もなく排除してくれるだろう。が、彼女は我が妹とはいえ、同盟国の王子夫人だ。我が国が護衛もつけずに送り返したとなると、ルシオンでどんな評判が立つかわかったものではないだろう?」

「それはわかりますけど……体面のことを気になさるのでしたら、騎士の方々に任せられたほうが都合が良いのでは?」

「都合　そう、都合の問題なんだよ。騎士を同行させるよりも、君たちを行かせたほうがなにかと都合がいい」

レオンガンドの双眸に鋭利な光が宿る。その理知的な輝きは、彼がつい先日まで?うつけ?などと呼ばれていたのが信じられなくなるほどのものだった。それは一朝一夕で身につく類のものではない。以前より、レオンガンド本人が内包していた実力の一端に過ぎないのだろう。

もつとも、ガンディアに来て以来、まるで古くからの友人のように接してもらっているフェアリアには、わかりきった事実であり、驚くような出来事ではなかった。レオンガンド自身、己の能力を隠しているわけではなかったが、?うつけ?という悪評を面白がっていたところが、わざと愚鈍に振舞うこともあったのも事実である。「黒き矛のセツナが、クレブルルに向かったという事実が欲しいのだよ。理由はなんだって構わないが、リノンの帰国に付き従ったというのなら、説得力も増すというものだろう?　セツナはバルサー平原の戦いで名を上げたばかりの、少し前まではだれも知らなかった人物だ。そんな無名の召喚師が、先の活躍で王に気に入られ、愛しい妹の帰国に際しての護衛に抜擢された　中々に素敵な筋書きじゃないか?」

まさに夢物語と聞いていい。つい先日までこのだれも知らなかった少年が、厳しい戦いの勝利を決定付けたがために、一躍ガンディアの有名人の仲間入りを果たしたのだ。仕官を夢見る若者でさえ想像しないに違いない。絵空事と鼻で笑うものもいるかもしれない。しかし、事実だ。

セツナは、戦場に立ったことすらない素人であり、彼の活躍を予

想できたのはだれひとりとしていなかった。ファリアでさえ、そう
だ。彼が、戦局を左右するほどの力を見せ付けるなど、考えられる
はずがなかった。ランカインを打ち倒したという実績から、ある程
度の活躍は間違いないと見ていたが、まさかのまさかであった。
彼女が、あるとき彼の活躍に対して我を忘れずにいられたのは、
そこが戦場だったからに他ならない。戦場特有の狂ったような熱気
が、彼女に冷静で居ることをしいたのだ。いつもなら狂喜乱舞する
ところだったが。

(でも、素敵かしら?)

ファリアには、とてもそうは見えなかった。むしろ、言い知れぬ
怖れを感じる。具体的になにが恐ろしいのか、自分でもよくわから
ないのだが。

「そんな夢みたいな話だ。すぐに噂となって拡散するだろうし、な
により、諸国の諜報網が真つ先に捉えることになるだろう。ガンデ
イア軍の主力と違って差し支えない武装召喚師が、ガンディアの南
にいるという情報がね。これで、少なくともしばらくはログナーの
我が国への警戒も弱まるはずだ」

「なるほど。その間にセツナたちにログナーの様子を探ってもらお
うというわけですね」

「そういうことだ。出発は、今のところ二日後を予定している。同
行するのは、リノンと白聖騎士隊、それに選りすぐりの兵士百名だ。
事の仔細は、白聖騎士隊長に聞いておいて欲しい」

「わかりました」

ファリアは、力強くうなずいて見せた。

二日後とはまた急な話ではあるが、突然の任務を言い渡されたの
はセツナたちも同じだ。しかし、向こうは命の危険を伴う過酷な任
務だが、こちらは、行程によっては皇魔に行くわすことなど皆無に
違いなく、安全な旅行と考えることもできた。もつとも、白聖騎士
隊長ことリノンクレア・レーヴェ「ルシオン」が、街道を通ってまっ
すぐ帰国しようとするかどうか、それが問題といえれば問題だった。

(さすがに、自重してくださると想うけれど……)

リノクレアは、国のためになら自身を犠牲にできる高潔な女性ではあるが、かといって完全無欠とは程遠い人物でもあった。いや、それは当たり前のことなのだ。ファリアの知る限り、そんな人間はだれひとりとしていなかった。不完全だからこそ人間である、というのは母からの受け売りではあるが。ともかくも、凜とした騎士であり、美しい妃であり、可愛らしい女性であるリノクレアの子供染みた一面が出ないことだけを、ファリアは心の底から願った。

不意に、レオンガンドが椅子から立ち上がった。王の改まった表情に、ファリアは、緊張とともに姿勢を正した。

「君たちには苦勞を掛けることになるだろうが、よろしく頼む」

「はっ！」

「特に、君には期待しているよ。ルウファ＝バルガザール」

「！ は、はい！ 必ずや御期待に伝えて見せます！」

レオンガンドからの予期せぬ言葉に、ルウファが、驚愕のあまり声を裏返らしてしまったのは、彼としては仕方のないことだったのだろう。

ファリアは、くすりと笑った。

「上手くいきましたか？」

レオンガンド以外だれもいない静寂に包まれた戦略会議室に波紋を浮かべるように問いかけてきたのは、彼もよく知る青年だった。音も立てずに扉を開閉して室内に入ってきたかと思うと、無音のままでありながら軽やかな足取りで、彼のすぐ目の前まで歩み寄ってきた。

無表情という言葉がこれほど似合う人間もいないのではないかと

いうほど、表情に変化のない男だった。長めに伸ばされた黒髪に、どことなく妖しい輝きを帯びた灰色の瞳を持っている。名をキース
「レルガといった。」

レオンガンドは、彼の目を見遣りながら返答を浮かべた。

「その言い様では、まるでわたしが彼女らを騙すのに苦心していたかのようにやないか。まあいいさ。ふたりは了承してくれたよ。二日後には、セツナ後一行がクレブルに向かうという情報が流布されることになるだろう。ログナーがそれによってこちらへの警戒を緩めてくれるならそれでよし」

「そうならなくとも、セツナ「カミヤたちがいる、と」

「彼らなら、ログナーを掻き回してくれるはずだ」

レオンガンドは、そうは言ったものの、確たる根拠があるわけではなかった。といって希望的観測というほどでもない。

騎士ラクサス「バルガザールは、能力的にも人格的にも申し分のない人物である。剣の腕は一級品であり、騎士の中でも最高峰だといわれている。部隊長としての経験も豊富であり、今回の任務では彼の指揮能力にも期待しての抜擢であった。」

セツナ「カミヤは、戦闘能力ではまったく問題はなかった。大国でさえ持ち得ないような破壊力を秘めているのだ。だが、一方では経験の少なさが気になるところではあった。ラクサスが助けてくれれば問題にはならないが、たととしても、やはり、レオンガンドは考えざるを得ないのだ。」

（これで良かったのか？）

果断で在ろうとは、想う。

決断することが彼の役目なのだ。迷いは、ガンディアにとっての好機を逸することになりかねず、それは時として国家の致命傷になるのだ。この国をよりよくするためには、非道とも取られるような選択をしなければならぬこともあるだろう。

それが例えば、少年を敵国に放り込むことであり、大量殺人者をそれに同行させることだとしても。

レオンガンドは、瞼を閉じた。視界を覆った暗闇に浮かぶのは、ある男の虚ろなまなざしだった。

男の名は、ランカイン・ビューネルといった。その家名から、ザルワーンを支配する五竜氏族に連なるビューネル家の人間であることは明白であり、事実、彼はザルワーンからの刺客であった。ランス・ビレインと名を変え、傭兵としてこの国に潜伏していたのだが、その目的とはガンディアを混乱させることでログナーの侵攻を援護するというものだった。しかし、彼の目的は果たされなかった。ランこそ焼き尽くし、多数の死傷者を出したものの、この国に大きな混乱は起きず、ましてや即座にログナーが動き出すということもなかったのだ。

歯車が狂ったのか。

それとも単に、彼が狂っていたのか。

「カイン・ヴィーヴルのことなら、心配は要らないでしょう」
「わかつている」

レオンガンドは、まるで頭の中を覗いているかのようなキースの言葉に内心むっとしたものの、表情にも声音にも感情を乗せることはしなかった。静かに目を開く。感情の見えないキースの表情は、彫像ほどの面白みもない。

ランカインを同行させたのは、強力な武装召喚師だからというだけではなく、彼がログナーに詳しいからでもある。彼がまだザルワーンにあったころ、ログナーの地形を記憶するために何度となく脚を運んだのだという。

無論、彼の罪を赦したのではない。

赦すことはないだろう。彼がどれほどの戦果を上げ、戦功を積もうとも、国民を虐殺したという事実は消えない。極刑こそが相応しいというものもいるだろう。しかし、それでは生温いのだ。

国民感情ではなく、レオンガンドの心がそう言っている。

ランカインに相応しい罰とは、何であるのか。

それが見つかるまでは、せめて、この国のために命を磨り減らし

てもらおう。

(この国のために)

その想いは、自己欺瞞などではない。それだけははっきりとしていた。この国を愛しているのだ。

大小無数の国々に囲まれた小さな天地に過ぎない。小さな、本当に小さな国だ。今日まで歴史を刻んでこれたのは天運に恵まれていたからなのかもしれない。戦いが起きたとしても、小国家間の小競り合い程度で済んでいたのだ。しかし、停滞した大陸の情勢が動き出せば、それも言っていられなくなるのは明白だった。

レオンガンドは、立ち上がるなり背後を振り返った。壁一面に張り付けられた地図が視界を埋め尽くす。ワグラーン大陸の全体図である。まず目を引くのが、ヴァシユタリア、ザイオン帝国、ディール王国という大陸を三分する勢力だろう。

至高神ヴァシユタラによる救済を掲げ、大陸北部をその信仰の下に統治するヴァシユタリア。

初代皇帝シウエルハインが固めた地盤を着実に拡大し、大陸東部を支配下に置くザイオン帝国。

聖皇ミエンディアの血統を主張し、大陸の統一に乗り出したデュエイン＝ディールを祖とし、大陸西部を治めるディール王国。

いわゆるワグラーンの三大勢力である。

大陸図を勢力や国家の領土ごとに色分けすれば、その三つの勢力が大陸のほとんどを塗り潰してしまうだろう。ガンディアなど、それらと比べるのもおこがましいくらいに小さな存在だった。それはログナーもザルワーンも同様であり、三大勢力のいずれかが動き出せば、小国家群などたちまち吹き飛んでしまうというのは自明の理であった。

力の差は歴然。

十倍、二十倍などという生温いものではないのだ。いや、ガンディアにとっては十倍の差でさえ絶望的だと思えるのだが、三大勢力の動員しうる兵力は、その遙か上を行くであろう。圧倒的な物量差

だ。それらと相対すれば、戦いというものさえ起きずに飲み込まれてしまふに違いなかった。

(巨獣……)

ふと、そんな言葉が、レオンガンドの脳裏に浮かんだ。

ワーグラーン大陸という広大な舞台の上に君臨する三頭の巨大な獣が、肩を寄せ合う小動物たちを尻目に睨み合っている。そんなイメージ。三頭の巨獣が一度行動を開始すれば、小動物たちなど瞬く間に踏み潰されるのが落ちだろう。

睨み合いを続けている今が好機なのだ。

(形振り構ってられないのさ)

レオンガンドは、だれとはなしに告げると、大陸図の上で睨み合う巨獣たちから視線を外した。力が必要だ。巨獣の足音が聞こえるまでに力をつけなくてはならない。国家として強靱にならなくてはならない。

そのための簡単な方法は、他国を併呑するということだ。数多ある小国家に攻め込み、打ち倒し、喰らい、取り込むのだ。

ガンディアのために。

この愛すべき小国のために。

すべての人々の心の平穏のために。

「まずは、ログナーだ」

彼の決意は、もはや揺るぎようがなかった。

「つたく、どこから湧いてきたんだよ！」

セツナが、だれとはなしに罵声を浴びせたくなったのは無理からぬことだったのかもしれない。静寂を引き裂いた狂気に満ちた奇声が、彼の意識を心地良い眠りを徹底的に破壊したのだ。眠気は潰え

去ったものの、安眠を妨害されたことによる不快感が、彼の表情を険しいものにしていった。

世界を覆うのは夜の闇であり、頭上に瞬く無数の星々と膨大な月明かりが、彼の視界にわずかばかりの光明をもたらしていた。そして、周囲の闇に蠢く数多の赤い光は、間違いなく人外の化け物の眼光だった。

皇魔^{おうま}。

「大方、近くの森に巣でもあったのだろう」

背後から聞こえたラクサスの冷静な返答に、セツナは、驚愕した。

「巣!？」

「皇魔は巣を作り、繁殖する。そんなことも知らないのか？」

これ見よがしに知識を披露してきたのは、ランカインである。

「悪かったな！」

「嫌われたものだな」

「笑ってる場合かよ！」

セツナは吐き捨てるように叫ぶと、周囲の状況を確認するために視線を巡らせた。背後にはラクサス・バルガザール。いつの間にか抜いていた長剣を構えている。ランカイン・ビューネルは、セツナの右前方におり、彼は無手だった。それはセツナも同様だったが。

そこは、マルダールの西方、アザーク領へと至るベイル街道の外れである。ランカインとの合流後、一刻も早くアザークへ向かいたいというラクサスの要求に従い、マルダールでは夕食を取っただけだった。

マルダールを後にした三人は、馬車でベイル街道を急いだものの、夜の間に国境に到達することは不可能だという御者の忠告に従い、街道の外れで野営することにしたのだ。馬車の中は、男四人が寝るには狭すぎたため、御者が使うことにし、残る三人は外で眠ることになった。馬車には野営のために夜具を積んでいたため、寒さに震えるようなことはなかったのだが。

まさか、皇魔に夜襲を仕掛けられるとは、セツナには想像もでき

なかった。

不意に、甲高い悲鳴が上がった。馬が、皇魔の気配に起こされてもしたのだろう。それまで悲鳴を上げなかったところを見ると、皇魔の最初の叫び声では起きなかったらしい。神経が凶太いのかどうか。

「さつさと片付けよう。馬を傷つけられでもしたらたまったものではないからな」

「わかってる！ 武装召喚！」

セツナは、黒き矛を召喚すると、召喚の光に驚きこちらに注意を向けた皇魔の群れの中に飛び込んだのだった。

「武装召喚！」

鋭い叫び声とともに、セツナの体に光線が走り、次の瞬間、全身に複雑な紋様が描き出された。そして溢れ出したのは、夜の闇を焼き払いかねないほどの閃光。召喚の光。この世界イルス・ヴァレと数多ある異世界の何処かと繋がったことの証明。直に力の召喚が始まる。いや、既に始まっているのか。

獰猛な力の奔流が、爆発的な光となつてこの場に顕現する。目にするだけで気圧されそうなほどに強烈な光は、暴れ回るようなこともなく少年の手の内に収斂していく。化け物どもの咆哮が聞こえた。威嚇か、虚勢か。圧倒的な力の具象を目の当たりにして、人外の物どもとて気が気ではないのだろう。

収束した光の中から現れたのは、長大な矛だった。黒き異形の矛。その姿はさながら悪魔のように禍々しく、見るものに畏怖と嫌悪を抱かせるほどの威容を持つてその存在感を發揮していた。少年の手に余るかに見えるが、しかし、扱いきれないものが召喚されることはいはずだった。

通常ならば。

(術式は要らぬ……か)

かつて目撃したのと同じ現象に、ランカインは、目を細めた。セツナが行使したのは、間違いなく武装召喚術である。召喚術と同様の原理を以て、異世界から望むがままの力を召喚したのだ。しかし、原理は同じでも、その方法はランカインを含めた他の武装召喚師とはまるで異なっていた。

武装召喚術を發動するには本来、術式が必要不可欠なのだ。セツナのようにただ一言叫ぶだけで召喚できるほど簡単な技術なら、もっと広く普及しているだろう。そしてその場合、大陸の勢力図は大きく塗り変わっていたのかもしれない。

武装召喚術は、物量差を覆す可能性を秘めている。

(例えば、そう……彼のように)

ランカインは、黒き矛を構えたセツナの姿に眩暈さえ覚えた。それは恐ろしさからではない。喜悦であった。武者震いといってもいい。少年の手の内に強大な力が渦巻いている。それは明らかにランカインの望む類の力だった。傲然たる破壊の力。殺戮のための力。

召喚の光が消え去ると、周囲には再び闇が訪れる。直前よりも深く暗く感じるのは、単純に召喚によって生じた光が眩しすぎたからだろう。視覚が狂わされたのだ。だが、それでも、闇の中に蠢く化け物どもの紅い眼光を見逃すような真似はしない。

ランカインたちを包囲するのは、ブリークという識別名で呼ばれる皇魔^{おうま}だろう。一体につき四つの眼光という情報から特定できる。

青い表皮に覆われた四足獣とでもいうべき化け物は、鉈のような爪を持ち、背にある一对の突起物から電撃を発して人間を攻撃するのだ。

セツナが、地を蹴った。闇の中、なんの迷いもなく敵陣へと突っ込んでいく。それはまるで矢のようだった。大気を貫き、目標へと殺到する一条の黒き矢。だが、その矢は目標に突き刺さるだけでは終わらない。黒き矛の穂先がブリークの頭蓋を貫いた瞬間、化け物が奇異な悲鳴を上げたが、少年は当たり前のようにそれを無視した。そのまま矛を旋回させ、皇魔の頭部を破壊すると、彼は即座に別の敵へとその矛先を変えていた。

(なるほど。素晴らしい)

皇魔の群れを物ともせず^ずに得物を振るう少年の姿は、ランカインに紅蓮の猛火を想起させた。

そう、あの炎だ。

カランという小さな街を焼き尽くした真紅の炎。建物という建物を燃え上がらせ、多くの人間を焼き殺し、あまつさえ天をも赤く染め上げていた。

それは、彼の命をも飲み込むはずだった。暴走した力は、なにも

のにも制御できない。

だが、ランカインは、炎と消えることはなかった。生き残ってしまっただの。

あの少年が現れたからだ。

セツナ「カミヤ。

『ただの通りすがりの正義の味方さ』

彼は、不意にセツナの台詞を思い出した。くだらない。実にくだらない口上だった。実際、その言葉を聞いたとき、ランカインはあまりのくだらなさに笑ったのだ。笑う以外にどう反応しろというのだろうか。

燃え盛る炎の中、ともすれば命を失いかねない状況で、そんなことを口走ってきたのだ。正気の沙汰ではない。彼を駆り立てたのは狂気に違いなかった。義憤と呼んでもいいのかもしれないが、だとしても、その怒りの炎がみずからの血肉をも焼き尽くすのを理解した上での行動なのだとしたら、狂気以外のなにものでもない。

そして、戦闘。

ランカインの召喚武装・火竜娘かりゅうじょうが、その口腔から吐き出した爆炎共々に切り裂かれ、彼は、驚愕の中で意識を失った。敗れたのだ。圧倒的な敗北だった。だが、彼は死ななかった。おかしなことに。不思議なことに。

(生きて……いる?)

鈍痛を伴う緩やかな覚醒とともに思い知ったのは、自身が生きていたという混乱を招きかねない事実だった。あの少年に殺されなかったのだ。怒りに駆られ、炎に焼かれることさえ厭わなかったあの少年にだ。

(いや、殺せなかったか……?)

義憤に駆られて戦いを挑んだものの、最後の最後で非情に徹しきれなかったのか。あるいは、彼を殺しきるほどの力も残っていないのか。力尽きたのだとしても不思議ではない。少年は、ランカインの繰り出した炎の中を突っ切ることで接近してきたのだ。紅蓮の炎に全身を焼かれ、意識を保っていられるはずがない。

なににせよ、ランカインが怪訝な表情になったのは、それでもなお死んでいないという事実に対してだった。

燃え盛る炎の中、意識を失ったものが辿る末路などひとつしか考えられない。

死だ。

命の結末。天に召されるにせよ、地獄に落ちるにせよ、彼に訪れるべきは死であり、それ以外の未来など存在し得なかったはずだった。あの少年が彼を助けるはずもない。そもそも、彼が生きているとも考えられなかった。

ならば、なにがあったのか。

ランカインの疑問はそこに集約される。自分の身になにが起きたのか。あの街になにがあったのか。意識を失う寸前まで地獄のような光景が広がっていたのだ。紅蓮の炎が、天も地も焼き尽くそうとしていたのだ。

燃え盛る炎が取り除かれたとでもいうのか。

(それが答えか……)

それ以外の可能性を考慮する必要はなさそうだった。

額は未だに鈍痛を訴えてくるのだが、それはあの少年の矛を叩きつけられたからだ。頭蓋は割られなかった。意識を吹き飛ばすほどの衝撃を受けたはずだったが、大怪我を負うほどのものでもなかったらしい。痛みは、額のそれだけであり、五体満足の上なかった。呆れ返るほどの軽傷だった。

「どういうことだ……？」

そこは、白い天幕に覆われた空間だった。急遽用意されたテントなのだろう。剥き出しの地面に置かれた寝台の上に、彼は寝かされ

ていた。もちろん、手足は拘束されている。当然だろう。街を焼き、住民を殺戮した男だ。せつかく捕らえたのに逃げられたのでは溜まったものではない。

彼は、小さく笑った。

この生に何の意味があるのか。

捕縛された以上、この身に待つのには極刑以外有り得ない。

それは構わない。死は、恐ろしくはないのだ。死ほど、彼にとつて親しいものはなかった。死は隣人であり、眷属であり、同胞であった。彼の始まりとともに在り、終わりのその時まで寄り添い続けるものであった。

だからこそ、炎の中で死ねばよかったのだ。みずからの杖が生み出した炎に巻かれ、灰と消える。それでよかったのだ。

しかし、ランカインは、生き延びてしまった。紅蓮の業火は瞼の裏の夢と消え、胸の内に燻る残り火もいずれば消えてしまうだろう。死を与えられるまでには。

ランカインは、己の脳裏を錯綜したいくつかの情景を鼻で笑うと、背後から忍び寄ってきていた化け物を振り返るなり、靴の爪先を紅い光を漏らす眼孔に突き刺した。殺気を隠しもせず背後を取ったつもりでいたのかも知れないが、彼は、感傷に浸って敵の気配を見逃すほど愚かではなかった。

眼孔に靴を埋め込まれたまま蹴り上げられて、皇魔が悲鳴を上げる。奇怪な叫び声は、人間の神経を逆撫でにする類のものであり、耳を塞ぎたくなるのは当然の心理なのだろうが。

「心地良い」

ランカインは蹴り上げた体勢のまま小さく告げると、奇声を発しながらもあざやかに着地した化け物を一瞥した。彼を目標と定めた

ブリークは、それ一体だけではない。敵意に満ちた無数の視線が、ランカインの感覚を震わせていた。しかし、彼が昂揚しているのは化け物たちのおかげではなかった。

耳朶に触れる黒き矛のうなりが、鼓膜を揺らす皇魔の断末魔が、視界を掠める漆黒の軌跡が、脳裏に生まれる深紅の飛沫が、ランカインの本能を呼び覚まそうとしていた。

「実にいい夜だ」

彼は、笑った。眼前には無数の化け物が蠢いていて、頭上には満天の星空が広がっている。風は穏やかで、心地良い調べを奏でている。街道の外れ。皇魔が棲み付いていた小さな森の近く。草原。化け物の体液を撒き散らしながら闘争を踊るのは、黒き矛の少年。剣を翳した騎士は、馬車の防衛に徹している。幌馬車を引く二頭の馬は、いつの間にか落ち着きを取り戻していた。それは御者の男が、常人ならば卒倒するか恐慌を起こしてしまいそうな状況の中であつて、泰然と振舞っているからかもしれない。

ランカインは、不意に足に伸びてきたブリークの爪を前方への跳躍でかわすと、そのまま化け物たちの頭上を飛び越えてみせた。口ずさむ。

「アラク・ウルクラウム・ウエステル・ハルマリストレイア・ハルマオルクスレイア・ハルマゼムウエステル」

彼が紡ぐのは、古代言語の羅列。召喚の呪文。眠れる力を呼び起こし、天へと解き放つ魔法の言葉。

「ナキ・レーブルファイアタスマアトラクレイア・ハルマクリズムロードロウラミウン・セオンマスキス」

ランカインは、着地とともに皇魔の群れを振り返ると、化け物どもがこちらに向き直るより素早く後ろに跳んだ。距離を稼ぎながら、詠唱を続ける。彼の視線の先では、セツナに群がるブリークたちが、背中突起から雷光を発したところだった。閃光が闇夜を引き裂き、球状に集束したいくつもの雷光の塊が、中空に躍る黒き矛の使い手へと殺到していく。

直後、漆黒の矛が金色の光を帯びたのをランカインは見逃さなかった。といって詠唱を止めるわけにはいかない。彼ひとりに任せるのも手ではあるのだが、それではこの昂ぶりを静めることもかなわないのだ。

「ディオソラクシウ・セラムドウーラマナタリテス・ウゼアダルクス・アインラクシアラミウセルテス・サクラムリエドアトラクス」

前方　金色に輝く矛を手にしたセツナは、目前に迫る雷光球を次々と跳ね返して見せた。飛び散った雷光塊は皇魔の群れの中に突っ込むと、炸裂。閃光と爆音の嵐が、夜の草原に戦場の光景を浮かび上がらせていく。

悲鳴が上がった。化け物のものではない。馬だ。今にも我が身に災禍が及び兼ねないこの状況に、ついに耐え切れなくなったのだろう。空気を引き裂くような嘶きとともに、御者の慌てる顔が目につく。彼が、彼は別段反応することもなかった。彼にとってどうでもいいことだった。

ランカインは、術式の完成と敵の攻撃のみに注意を払えばよかった。

「アラク・ウルクラウム・ウエステル・ハルマフュークラン・ハルマルクスメイイル・ハルマウエステルゼイン・ザム・フィアルルティドクラーブルレイア」

彼は、口の端に笑みを刻んだ。呪文の結尾を口にしたことで、ようやく彼の内に眠る力が覚醒の咆哮を發したのだ。それは、人間だれもが持つ力だといわれている。いや、すべての生命に宿る力なのかもしれない。

それは、世界に干渉する力だという。

「ちっ！」

セツナは、弾き返した雷光球が、けたたましい爆音とともに草原を火の海へと変えていく様子を目の当たりにして舌打ちした。黒き矛を思うがままに振るった結果がこれである。彼は己の考えのなさに憤りを感じながらも、迷うことなく矛を振り下ろした。眼前に飛び込んできた皇魔を切り捨てる。皇魔の死体が体液を撒き散らしながら地に沈むと、視界が開けた。

既に爆音は止んだものの、炎の勢いは衰えていなかった。街道沿いの草原を焼き尽くすほどの勢いで、その侵略を加速させていく。馬が悲鳴を上げた。見ると、二頭の馬と馬車、それに御者とラクサスが炎と皇魔に取り囲まれ、逃げ場を失っていた。セツナの活躍もあって皇魔の数はかなり減っているとはいえ、脅威には違いない。それにラクサスひとりで馬二頭と御者を護り抜くには無理があるだろう。

「セツナ！」

ラクサスの呼び声は、化け物の奇声や馬の悲鳴に掻き消されることはなかった。

セツナは、強くうなずくと、こちらへと殺到してくる皇魔の群れへの威嚇として矛で地を薙ぎ払うと、化け物たちがたじろいだ瞬間を見逃さずに跳躍した。皇魔の群れの隙間を縫うように、火の海を渡るように跳んでいく。渦巻く熱気は、彼にランカインとの戦いを想起させたが、しかし、今のセツナはラクサスの元に急行することに全力を注いでいた。不意に、鋭い痛みが彼の右足を襲う。皇魔の攻撃を受けたのかもしれない。が、止まらない。

痛みは急速に広がるが、そんなことに構っている暇はなかった。目的地はもはや目の前。馬車を背後にした騎士は、長剣を構え、皇魔との間にある種の結界を作っていた。しかし、彼の剣気が作り得た領土も、数で勝る皇魔にじりじりと狭められている。さらに周囲は火の海である。馬は、逃げ出したくても逃げ出せない状況に発狂しかけている様子だった。

セツナは、何度目かの跳躍でラクサスの目の前に辿り着くと、彼に声をかけるわずかな時間さえも惜しんで化け物の群れへと向き直った。赤々と燃える草原に蠢く無数の皇魔を前に、微塵の恐怖も感じなかった。皇魔特有の神経を逆撫でにするような殺気を叩きつけられても、怖れを抱くということはなかった。だが、それは彼の精神が平衡を保っている証明にはならなかった。

黒き矛を握る掌から伝わる膨大な力が、セツナを昂ぶらせていた。「皇魔のことは頼めるか？」

「任せてください！」

背後からのラクサスの問いに力強く返答すると、セツナは、眼前の敵に向かって矛を振り上げた。数にして五十体は下らない皇魔が、既にその無数の視線を彼に集めていた。のっぺりとした顔面に穿たれた四つの眼孔。その奥底から漏れる紅い光は、敵意と狂気に満ちている。攻撃を仕掛けてこないのは、こちらの出方を伺っているからなのか、それともなにか策でも練っているのか。皇魔にどれほどの知能があるかはわからないが、少なくとも集団行動を取れるほどの頭はあると見るべきだろう。

実際、セツナに向かって雷光球を発射してこないのだ。それはセツナの矛に弾き返されたからだとも見てもいいだろう。その程度の思考力はあるということだ。

不意に、一体の皇魔が奇声を発した。不愉快な雑音が、紅蓮と燃える闇に響き渡る。セツナは身構えたものの、皇魔たちが襲い掛かってくることはなかった。一斉に散開したのだ。

(なにが狙いだ?)

セツナは、慎重に敵の目的を探った。彼から見て前方広範囲に散らばった皇魔たちだったが、特にこちらになにかを仕掛けてくるような素振りもなかった。その姿からは、セツナへの警戒さえも怠っている様子すらあった。

「なんだ……？」

皇魔たちの突然の変化に違和感を覚えながらも、セツナは、矛を

握る手に力を込めた。仕掛けてこないのならば、こちらから出向くしかない。皇魔が退散しない以上、なにかを企んでいるには違いないのだ。ならば、戦うしかない。ここを切り抜けなければ、任務を果たすこともままならない。

地を蹴る。同時に右足に痛みが生じるが、今はどうすることもできなかった。戦闘の最中だ。傷の手当をしている暇はない。

セツナは、前方、一足飛びで届く距離にいた皇魔を矛の一突きで絶命させると、瞬く間にその周囲に潜んでいた化け物どもを血祭りに上げた。なんの反応もなければ、反撃さえしてこなかったことに違和感を抱いたものの、彼は、周りに点在する敵意を殲滅することに優先した。全滅させれば、皇魔がなにを企んでいたとしても同じことだ。そんな安易な思考の下でも、セツナの矛は、ただひたすらに冴え渡った。

漆黒の一閃が、草原を焼く炎諸共に皇魔の肉体を斬り裂き、頭蓋を貫き、胴体を両断した。断末魔の絶叫が幾重にも響く中、彼の技は留まるところを知らない。縦横無尽。手当たり次第に敵を斬り伏せる彼は、やがて大量の返り血を浴びていた。

そのとき。

「ん……？」

セツナが動きを止めたのは、彼が斬り殺した皇魔の尾が地中に潜っていたことに気づいたからだ。

セツナは怪訝な表情になったが、ふと思いついて背後を振り返った。彼の背後には、黒き矛で殺戮した皇魔の死体が無数に転がっている。目を凝らすと、そのどれもが尾を地に突き刺したままで死んでいるのがわかった。草原を這う炎に照らされた亡骸は、軽く三十体を超えているが、それは彼の働きによるものに他ならない。

セツナは、周囲を見回した。残る皇魔の数は、それでも二十以上はあるだろう。それらが尾を地中に潜らせてなにをしようとしているのか皆目見当もつかないが、少なくともセツナたちにとってぞつとしない企みに違いない。

馬車を見遣ると、ラクサスと御者のふたりが、二頭の馬を懸命に宥めているところだった。その周囲に広がるのは火の海が広がっているが、皇魔の姿は見当たらない。散開後、馬車付近に潜んでいた皇魔はセツナが殺していた。とりあえずは、馬も人も無事であることに安堵する。

瞬間、なにかがこちらに向かつて飛来する音が、彼の耳朵をくすぐ擦った。左後方。振り向き様に矛を振り上げる。視界に飛び込んできたのは、尖端が研ぎ澄まされた帯状の物体だった。

それはまさしく、皇魔の尾だった。

「そんなもので！」

セツナは、高速で接近する尾を避けるためにその場を飛び離れようとした。しかし。

「なっ」

セツナは、足が動かせないことに驚き、愕然とした。動かないのではない。動かせないのだ。なんらかの外的要因が、彼の足を地面に縛り付けていた。尾は、眼前に迫っている。いや、高音を発しながら飛来するのは、それひとつだけではなかった。無数の尾が、セツナの周囲あらゆる方向から殺到してきていた。

（避けられない！）

絶望的だった。足がまったく言うことを聞かないのだ。避けることはおろか、態勢を整えることすらままならない。そんなことを考えている間にも、セツナと尾の距離は迫っていく。追従する無数の尾も視界に入り、危機感は増大するが、セツナにできることといえば矛を振り回すことくらいだった。それにしただって前方からの攻撃を防げるかどうかというものに過ぎない。

「つまりはそう、これが運命というものなのか？」

ランカインの自問するような声がセツナの耳に届いたのは、いつだったのだろう。今までにない窮地が彼にもたらした小さな混乱は、記憶を曖昧にさせる程度のもではあった。なにが起こったのかは、理解している。

轟音とともに大地が揺れ、次の瞬間、セツナの目の前の地面が大きく隆起したのだ。砂埃を舞い上げながら彼の視界を覆うほどに隆起した岩石は、次々と飛来する皇魔の尾のことごとくを受け止めきると、瞬く間に崩れ去った。尾の攻撃を受けなかったところを考えると、左右と背後でも同様のことがあったのだらう。

皇魔たちが追撃を諦めた理由はわからない。岩石に衝突したことで攻撃する力を失ったというわけでもないだらうが。

セツナは、状況を把握すると、頭を振った。わずかに揺れる意識の中で、前方から近づいてくる足音を認識する。悠然とした足取りだった。まるでここが彼にとって歩き慣れた場所であるかのような歩調。事実そうなのかもしれない。その男にとってしてみれば、炎に抱かれた戦場など、自分の庭に等しいのかもしれない。

ランカインは、セツナが視認できる距離にまで辿り着くと、静かに口を開いてきた。

「どう想う？ 少年」

「なにがだ！」

「怒鳴るものでもないだらう？ 君の命を救って差し上げたのだ」

ランカインの鷹揚な口調は気に障ったものの、事実事実は事実である。それは認める。が、セツナは、そっぽを向いた。顔も見たくはなかった。戦いの最中、気が立っている。彼は、相手の眼を見るだけでどうにかなくなってしまいそうな危うさを自分の中に認めていた。冷静さを見失ってはならない。

セツナは、小さく告げた。

「……感謝はしている」

「らしくないな」

ランカインが、嗤う。ひどく穏やかな嘲笑だった。つまりは狂っている。

セツナは、ランカインを見遣った。彼の右手には、斧が握られていた。片手で扱えるほどの大きさの斧だった。斧頭には竜の頭を模した装飾が施されている。どうやらそれもまた彼の召喚武装である

らしい。カランの街を焼き尽くした杖を召喚しなかった理由はわからないが、その手斧にも大きな力が秘められていることは目の当たりにしている。その力のおかげでセツナは窮地を脱することができたのだが。

「なに？」

「そこは君ならば、刃を以て報いてくれるところではないのか？」

「なにを言っているんだ？」

「俺が憎いのだろう？ 憎くて憎くてたまらないのだろう？ 殺したいのではないのか？ 殺したくてたまらないのではないのか？」

カランの街を焼き尽くし、何百人もの人間を殺戮したこの俺を、この世から消してしまいたいのだろうか？」

ランカインの瞳に浮かぶのは、狂気そのものだった。純然たる狂気が渦巻いていた。一片の正気さえも見出せないほどの狂気の中で男は、セツナを見据えていた。嗤っている。こちらの心の奥底まで見透かしているかのようなランカインの口振りに、セツナは、一瞬我を忘れそうになった。

「ああそうさ……！」

歯噛みして、自我を保つ。彼の脳裏を駆け抜けたのは、紅蓮に彩られた小さな街の光景だった。まるで地獄のような有様は、彼をして憤怒に駆り立てるほどのものだった。なにもかもを飲み喰らう真紅の猛火。いまこの草原を焼く炎とは比べ物にならなかった。そこには希望など見当たらない。絶望だけがその猛威を振るっていた。

死が、舞い踊っていた。

セツナは、きつ、とランカインを睨みつけると、矛の切っ先を相手に向けた。禍々しい悪魔的な矛は、セツナの号令を待ち侘びているかのよう。

「俺はおまえを許せない！ なにがあっても！ 陛下が許しても！

俺だけは……！」

「ならば、来い。俺はきつと、そのために今日まで生かされてきたのだ」

ランカインが、その笑みをさらに深いものにした。嘲り、侮蔑しながらも、どこか恍惚とした喜悦が入り混じっているような笑み。それはとてつもなく異様な笑みであり、地獄の鬼さえもたじろぐのではないかというのが、セツナの抱いた感想だった。

「それが運命って奴かよ……馬鹿馬鹿しい！」

セツナは、ランカインから目を背けると後方を振り返ろうとしたが、足が自由に動かないことに気づいて足元に視線を落とした。なにかが、右足に絡み付いていた。目を凝らさずとも理解する。皇魔の尾だ。セツナの身動きを封じるための作戦だったのだろう。絡め取られていたことに気づかなかつたのは、右足に生じていた痛みがせいだ。しかし、その尾も今や力を失っているらしく、セツナが軽く力を込めるだけで解けてしまった。

周囲を一瞥すると、火影の中に蠢く皇魔の姿は見当たらなかった。それどころか、皇魔特有の気配すら感じ取ることはできなくなっていた。逃走したのか、それともランカインが殲滅したのか。

「なぜだ。なぜ来ない？ 君の憎むべき敵はここにいるぞ？ 狂おしいほどに殺したい相手が、ここに」

セツナは、ランカインの言葉を聞き流そうとした。だが、夜の闇を紅く染める炎の色彩が、彼の感情を昂ぶらせるのだ。理性は残っている。冷静さを見失ってははいない。しかし、叫ばなければやりきれなかった。

「勝手なことばっか言いやがって！ おまえを殺してどうなるってんだ！ おまえを殺したって、なんにも変わらねえじゃねえか！

おまえが殺した人たちは！ 死んだ人間は……！」

思いつく限りの台詞をぶつけながら、セツナは、自分もまたどれだけの命を奪ってきたのかと考えていた。ランカインを責めるだけ責めていい気になれるような、そんな人間ではない。数多の皇魔を屠り、無数の人間を殺してきたのだ。炎を以て戦場を焼き払い、一振りの黒き矛で幾多の命を奪ってきたのだ。戦場とはいえ、戦争とはいえ、あまりにも多くの命を散らせてしまっていた。数え切れな

いほどの人生が、セツナの眼前で露と消えた。

無念だっただろう。だれも死にたくなどなかったはずだ。戦場に駆り出され、セツナと剣を交えたばかりに未来を失ってしまったのだ。永久に。

「死んだ人間は……」

セツナは、愕然としながらも、草原を見回して状況の把握に努めた。皇魔の放った雷光によって焼き払われた草原には、無数の皇魔の死体が転がっている。炎の勢いは多少衰えたとはいえ、このままでは一帯が焼け野原になってしまう可能性があった。

馬の悲鳴が聞こえないところを見ると、なんとか宥めることができたのだろう。

その点に関してだけは安堵して、彼は、黒き矛を掲げた。炎を吸うのだ。あのときのように。

「生き返ったりはしないんだ」

第五十五話 王都発、敵国行 アザーク入り

門を開いたのは、いつだったか。

クオンは、ゆっくりと瞼を開けた。いつになく体がだるいのは、夢を見ていたからなのかもしれない。救いようなない夢。だれもが絶望と言いつつような夢。そんな夢の淵で考えるのが、それだった。突如として眼前に現れた神々しいまでの光を放つ巨大な門を押し開いたのは、いつだったのか。

(半年以上、経つのかな……)

彼は胸中でつぶやいたものの、確固たる自信はなかった。実感としてはもっと以前のように想うし、つい最近だったのではないかと錯覚することもある。半年。たかが半年だ。半年の間になにが変わったというのか。

この大陸は相変わらず停滞したままだ。大国は傍観しているかのように動きを見せず、大陸の中央に聳く小さな国々だけが飽きもせず小競り合いを繰り返している。取るに足らない領土の奪い合いによって、なにが変わるといえるのだろうか。いや、それはもはや奪い合いですらなくなっているかもしれない。

国と国の衝突さえも恒常化しているのだ。国境付近での小競り合いは、もはやありふれた日常の出来事といってもいいのかもしれない。

天井を映す視界に差し込んでくるのは、窓の遙か向こうで昇りゆく朝日の光だろう。まばゆくも、暖かで優しい光。夢から覚めたばかりの目には、少々きつく感じられないでもなかったが。

クオンは伸びをすると、上体を起こした。朝の冷気は、彼の寝惚け気味の頭に覚醒を促すかのようでありながら、わずかに顔を覗かせる怠惰な心を二度寝に誘おうとするかのようでもある。このままベッドの中に潜り込んでしまうのもいいかもしれない。スウィール以外のだれも咎めはしないだろう。無論、皆に心配をかけてしまう

に決まっているし、いくら暇だからといって一日布団の中に籠もつていられるはずもない。

情眠を貪るのは今度にしよう。それがいつになるかわからないが、ともかくそう決定付けることで、彼はともすれば甘い誘惑に身を委ねかねない情弱な心を引き締めようとした。

(情弱……か)

彼は、部屋の隅に置かれたベッドの上で、軽く自嘲の笑みをこぼした。

クオンに宛がわれた部屋は、一人で過ごすには広すぎるほどの空間であり、彼の私物だけではその空白を埋めることはできそうもなかった。戦闘用の武具を含めたとしても、彼の持ち物などたかが知れているのだ。そもそも、武具を私室に飾るような趣味は彼にはなかった。

視界の片隅で、窓に掛けたカーテンが揺れている。窓を開けて夜空を眺めている間に寝てしまったのだろう。不用心極まりない。露見すれば、きっと皆に怒られるだろう。

クオンは、自分自身の心の弱さに呆れるしかなかった。瞼の裏には、昨夜見た満天の星空が鮮明に焼きついている。物思いにでも耽っていたのだろう。それは、自身の心の弱さに他ならない。心が強ければ、星空を仰いで想いを馳せることもなかったはずである。

これまでがそうだったように。

(そうだ)

イルスⅡヴァレに召喚されてから今まで、心が揺れ動くということなどほとんどなかったはずなのだ。寄る辺なき世界でも、数多の出逢いが彼の心の孤独を埋めていった。召喚とともに心の中に生じたはずの空白は、あつという間に満たされていった。となれば、揺れるはずもない。揺れない心は確信を得、弛みない前進を後押しする強大な力となっていた。

傭兵団を組織し、各地の小競り合いに顔を出し、名声を上げてきた。戦いの中で彼のできることは数少ない。指揮を振るうとあって

も、難しいことをしているわけではなかった。彼の名声の多くは、仲間の活躍によるところが大きいのだと、彼は信じていた。

揺るがぬ自信を以て、この国を訪れたのはつい最近のことだ。

ベレル。大陸小国家群の例に漏れず、小さな国だ。北にザルワーン、西にはその属国ログナーがあり、南西にはガンディア、南にミオンが位置していた。北東のジベルと友好を結ぶことでザルワーンからの侵攻に備えてはいるものの、ログナー、ガンディア、ミオンや南東のラクシャなど、周囲には敵対する国が多い。

ベレルは、疲弊しかけていた。兵も民も、疲れきっていた。戦いに次ぐ戦いが、財政を圧迫し、民心に重苦しい圧力となっていた。それはどこの国とて同じなのかもしれない。数多の小国が織り成す戦乱絵巻に輝かしい未来など見出せるはずもなかったのだ。

そして最近、ガンディアがログナーからバルサー要塞を奪還し、息を吹き返したことで、ベレル国内には新たな緊張が生まれていた。要塞を奪還した勢いに乗じて、ガンディアが攻め込んでくるという噂が、まことしやかに囁かれていたのだ。ガンディアと同盟国のミオンが力を合わせて攻め寄せてきたら、ベレルは一溜まりもない。そんな折だった。ベレル南部のマジアという街を拠点にしていた彼の元に、ベレル国王イストリア・レイ＝ベレルの使者が来たのは。そして、使者が携えてきたのは、王都ルーンベレルへの招待状に他ならなかった。

そう、あれはマジアを出発するための準備をしている最中だった。

アズマリア＝アルテマックスの来訪。そして明かされた驚くべきいや、予想してしかるべき 事實は、クオンをして激情に駆り立てるものだった。なんの目的か、彼女は、彼の友人をもこの世界に召喚していたのだ。神矢刹那^{かみやせつな}。彼の大切な友人だった。

(そうなんだ。セツナ……)

クオンは、深く静かに空気を吸い込んだ。朝の新鮮な空気が、肺を満たしていく。もはや眠気は消え失せた。情弱な化身はその姿を

隠し、確固たる自信に満ちた己を自覚する。過信などではない、己の実力を把握することで生まれる自信は、過剰な自惚れとはまったく違うものだ。だれしも得手不得手はあるのだ。それを自覚することが大切なのだろう。

ベッドから降りると、彼は、着替えを探した。さすがに寝間着のままうろつくわけにもいかないだろう。それこそ惰性そのものだ。クローゼットから衣服を物色する彼の頭の中を過ぎるのは、セツナの顔だった。いつだって卑屈に笑う少年の顔は、彼の胸を強く締め付けるのだ。薄汚れた捨て犬のような、そんな表情。

(どうして、そんな顔をするんだ？ 君は……)

胸中に問いかけたところで、だれも答えてはくれない。それどころか、せっかく脳裏に浮かべた友人の笑顔さえも掻き消えてしまう。そして、そのまましばらく浮上してこないのだ。まるで嫌われてしまったかのように。

心が、揺れる。

(やっぱり、君なんだ……)

わかっていたことではある。確信がなかったわけでもない。かといって、だれかのせいにもしたくはなかったのだ。心の中に生じた揺らぎの原因を、自分自身の懦弱以外に求めるなど、彼の信念が許さなかった。

しかし、事実は事実だ。

セツナの存在が、彼の心にわずかな空白を作ってしまった。今の今まで満たされていたはずの心に、ぽっかりと大きな穴が開いてしまったのだ。

セツナの存在を感じ取っただけで動揺したのだ。セツナが、アズマリアによってこの世界に召喚されたことが確定された以上、彼の心になんらかの影響が出るのは当然といえた。

(逢いたいよ)

逢って、どうするというのが。

彼は、嘆息した。

セツナは、ガンディアに属する武装召喚師であり、ベレルに雇われている彼とは、立场上敵対関係にあった。偶然に逢えることがあったとしても、それは戦場以外にないのではないか。

戦場で遭ったのならば、剣を交えるしかなくなるだろう。

「笑えないな」

声に出してつぶやいて、クオンは、苦笑した。くだらないことばかりが脳裏を巡る。せっかく気を引き締めなおしても、セツナのことを考えるだけで解けていく。どうしようもない。

ふと、彼は部屋の扉に目を向けた。なんの変哲もなければ飾り気のない扉。その向こう側で物音がしたような気がして、彼はくすりと笑った。イリスだ。彼が部屋で寝ている間、部屋の外で不審者がいないか見張っていたに違いない。

あの日　彼が激情の赴くままにアズマリアに挑み、完膚なきまでに敗れてからというもの、彼には常に護衛が付けられるように手配されていたのだ。どこへ出かけるにせよ、寝ている間にせよ、彼は、心配性な仲間たちによって見守られなければならなかった。それは少しだけ窮屈で、とてつもなく幸福な境遇のだと、彼は噛み締めるように想っていた。

こうやっていつも支えてくれる仲間がいたからこそ、いまの自分は存在していただけるのだ。

（ありがとう）

胸中でイリスを含めた多くの仲間への感謝を述べたときには、彼の脳裏からセツナの気配は消え失せていた。

淡い青に染まった空から降り注ぐ朝日を全身に浴びながら、ルウファは、思い切り伸びをした。食後の一時をバルガザール邸の庭園

で過ごすのが、彼の日課だった。

武装召喚師の修行を終え、この家に帰ってきた彼を待っていたのは謹慎処分であり、その間、なにをすることも許されなかったのだ。街を出歩くことくらいなら大目に見てもらえたのだが、基本的には邸内で過ごさなければならなかった。そのおかげでみずからの技術の拙さを見直ることができたのは大きかったものの、やはり、暇を持って余しがちだった。そんな日々で作られた生活習慣のひとつが朝食後に庭園で読書をするというものであり、今日に至るまでほとんど毎日続けていた。

庭園のちょうど真ん中に設けられた噴水の近くの椅子に腰掛け、心地よい水音を聞きながら書物を開く。テーブルには、給仕に運ばせたティーセットがあり、クレブルから取り寄せたバラク産の紅茶が、多分に香りを含んだ湯気を立ち上らせていた。

穏やかな朝。まるで数日前の喧騒など存在しなかったかのような静寂が、この王都を包み込んでいる。王都全域を巻き込んだお祭り騒ぎなど、もう二度と起きないような気がした。あれほどの衝撃と歓喜をもたらすような出来事など、そう簡単に起こるものでもないだろう。

あれは、ただの勝利ではなかった。半年にも渡って占拠されていた要塞を圧倒的な大勝を以て取り返したのだ。王都市民の心に蓄積した鬱憤を晴らし、なおかつ、レオンガンド王への不信を拭うほどの威力を持つていた。もちろん、すべての臣民が王の実力に信服したわけでもないだろう。未だにその能力や人格に疑問を抱くものもいたとしても不思議ではない。

あまりにも長い間、蔑まれてきたのだ。？うつけ？などという悪評を野放しにし過ぎたのだ。浸透しきったイメージ。たった一度の勝利で払拭できるものではない。ただの奇跡だと言いつ張るものもあるかもしれない。相手のおかげだというものもあるだろう。しかし、勝利は勝利だ。それが運であれなんであれ、ガンディア軍は勝利し、要塞を取り戻すことができたのだ。

それは、王都の人間にとって大きな不安が取り除かれたということにほかならず、レオンガンドの実力を疑うものでさえ、この一時の平穩を享受しているに違いなかった。そして、永続して欲しいと願っているのだろう。

それは構わないし、ルウファだってそう想ってはいた。このような穏やかな朝を迎えることこそ、至上の幸福なのだから。

「いよいよ明日ね！」

「わっ!？」

不意に背後から声をかけられたことに驚き、彼は、素っ頓狂な声を上げながら椅子から滑り落ち、地面に臀部を強く打ちつけた。拍子に手から離れた本が宙を舞い、痛みに顔を顰めるルウファの顔面に覆い被さってきた。呆れ果てたような声が、頭上から降ってくる。

「驚きすぎよ」

「すみません……つい」

反射的に謝りながら、ルウファは、顔面に覆い被さった本を手にとった。ファリア＝ベルファリアの半眼が、いつになく痛く感じられるのは決して気のせいではないだろう。

ルウファは、立ち上がると、本をテーブルに置いた。紅茶をこぼさなかったのはせめてもの幸いかもしれない。ファリアに向き直る。彼女は、《大陸召喚師協会》の制服ではなく、動きやすそうな上下を着こなしていた。彼女がここにいるのは《協会》の仕事ではなく私用であるからというのが制服を着ない理由だという。《協会》の仕事よりも優先すべき私用とはなんなのか、ある程度の推測はできるものの、取り立てて話題にすべき事柄でもないだろう。その私用とやらのおかげで、ファリアという才能に満ちた個人と任務を共にすることができただから。

「つい……って」

「本を読むのに夢中になっていたんですよ」

「ふうん。感心はしないけど、まあいいわ」

ファリアが半眼を止めたのを見て、ルウファはほっとした。彼女

にはやはり半眼は似合わないし、なにより、その冷やかな視線は少しばかり痛かった。即座に話を変える。

「ところで、なんでそんなに嬉しそうなんですか？」

「セツナは嬉しくないの？ 任務よ、任務！」

「セツナって……」

「いまの君はセツナ＝カミヤよ。それ以上でもそれ以下でもないの。それは肝に銘じておくべきね」

ファリアのにべもない台詞に、ルウファは、無然とした。彼女の言うことはもつともだし、反論の余地もない。その通り。完全無欠といってもいい。しかしそれでも、心の奥底から鎌首をもたげて主張してくるのが、自我というものなのかもしれない。

「すぐには慣れませんよ」

「ま、それもそうよね。というわけで、これ。今日中に目を通しておいてね」

あっさりとルウファの言い分を受け入れるとともに、彼女が差し出してきたのは一通の封筒だった。中には手紙か何か入っているだろう。外から内容を把握できるはずもなく、ルウファは、彼女から受け取りながら問いかけた。

「これは？」

「ラブレターよ。わたしからの」

などと、にこやかにウインクを飛ばしてきたファリアに、彼は、ただ生返事を浮かべるしかなかった。予想だにしない返答には多少の混乱を覚え、彼女の軽やかな笑顔にはわずかな眩暈を禁じえない。

「はあ……？」

「じゃあ、わたしは白聖騎士隊の皆さんに挨拶してくるから」

「あ、ファリアさん、ちよ、ま」

こちらの制止にまったく耳を貸すこともなく、颯爽と庭園を後にするファリアの背中を見遣りながら、彼は、ぼやくようにつぶやいた。

「ラブレター……って」

封筒を見下ろす。ラブレターなどといいながらも、封筒にはなんの飾り気もなかった。嘆息する。ファリアと話していると、どうも自分の調子が乱されてしまうような気がした。彼女の波動に飲み込まれてしまうような、そんな感じさえ受ける。それはさほど不快ではなく、むしろ心地良い部分もあるのだが、だからといって彼女の色を受け入れてしまえるほど、ルウファは大人ではなかった。

封筒の中を覗くと、丁寧に折り畳まれた一枚の書簡が入っていた。「これ、術式じゃないか……」

手紙に書き記されていたのは、召喚法式に則った古代文字の羅列であり、その美しい筆跡にはルウファも目を奪われるほどだった。書き記された数多の文字は、まるで艶美な舞を踊っているかのようでありながら、決して読み難いわけではなく、武装召喚師ならばだれでも理解できるような筆の運びだった。彼女の遊び心が覗く一方で、技量の高さが窺える手紙だといえるだろう。

そして、その古代文字の羅列がルウファの網膜に入り込んだとき、彼の脳裏で構築されたのは、彼がセツナ「カミヤを演じるためにも」つとも必要なものだった。

ワーラムは、アザークの代表的な都市である。

アザーク領北東部に位置するその大都市は、首都アーク・レムにも匹敵するほどの壮麗さを誇るといわれており、人口もまた首都に次ぐという。たった一代で莫大な富を築き上げた豪商ロマーク「バードの生誕の地でもあり、彼の成功にあやかりたいという商人が多く訪れるということでも知られている。

ワーラムは、ラクサスたちのとりあえずの目的地でもあった。

「国境を越え、ついにアザークに足を踏み入れたか」

ラクサスは、青空の下に広がる景色を眺めながら、だれとはなしに言った。ガンディア王国マルダールから伸びるベイル街道は、ようやくというほどのこともなく国境を越え、アザーク領に入っていた。景色にさほどの変化は見受けられない。他国に入ったとはいえ、隣国である。なにからなにもまで変わるわけでもない。幅の広い街道が通る大地が、青々とした草原からだだっ広い平原に変わったくらいのものだ。

「馬車ん中ですけどね」

どこか怒ったような少年の声は聞き流して、ラクサスは、目の前に広げた地図に視線を戻した。セツナの言う通り、馬車の中である。多少の振動が、ガンディア周辺を描いた地図を揺らしていた。ガンディアとアザークの国境を問題なく通過できたのは、双方が矛を収め、一先ず休戦したからだ。

ガンディアにとっては、アザークとの小競り合いに兵力を割くのは得策ではなく、アザークとしても、衝突を長引かせるのは本意ではなかったのだろう。敵国がガンディアのみならば兵力の集中もできるのだが、そう上手くいかないものだ。なにより、対ガンディアに全力を展開したが最後、ガンディアの同盟国ルシオンが間髪を挟まずに侵攻してくるに違いないと判断したのだろう。

「今日中にはワーラムに到着できるだろう」

「そりゃあんだけ早く出発したんですし、当然ですよ」

投げやりでぞんざいな口振りに、ラクサスは顔を上げた。視線の先には、幌馬車の側面に穿たれた大きな穴があり、その向こう側にのどかな風景が流れていくのが見える。幌は、昨夜襲来した皇魔まじまによって切り裂かれていたのだ。それに気づいたのは、セツナとランカインの活躍によって皇魔を殲滅した後だった。幸い、馬にも馬車にもそれ以上の被害は及んでおらず、彼はほっとしたものだったが。

「……セツナ？」

「なんです？」

「なにをむくれているんだ？」

「むくれてなんかありませんよ」

「いや、むくれているだろう」

「……じゃあ、ひとつ言っていていいですか？」

「なんだ？」

「なんでここまでされなきゃいけないんですか！」

セツナの悲鳴のような大声に、ラクサスは、ようやくそちらに目を向けた。馬車の奥。多少の荷物が視界に入ってくる。道中に必要なだけの衣類や食料である。それらに紛れて、異様に膨らんだ布袋だろう。そして、セツナの叫び声はその袋から聞こえてきていた。

不意に、今の今まで黙っていたランカインが、嘲笑った。

「君が血塗れだからだろう？ 拭っても拭っても拭い切れないほどに」

「うつせー！ てめえにや聞いてねえよ！」

布袋から頭だけ出していたセツナが、ランカインに噛み付くように叫ぶ様を見遣りながら、ラクサスは、彼らの間を取り持つことなどできないだろうという諦めにも似た確信を抱いた。セツナはランカインに敵意を剥き出しにしているし、ランカインはそんなセツナの敵意にむしろ嬉々とした殺意を放っているのだ。関係が悪化することはあっても、良好になることなどないだろう。それは奇跡に等しいような気がした。

「騎士殿、この小うるさい物体は外に捨てませんか？」

「あ！ てつめ！ ふざけんじゃねえ！」

「……静かにしたまえ」

ラクサスが冷ややかに一瞥すると、セツナは口を噤んだ。

嘆息する。この調子で、無事に任務を遂行できるのだろうか。能力は認める。セツナの実力は、昨夜の一戦でよく理解できた。想像以上といてもいい。多数の皇魔を相手にしてもまったく怖じる様子はなく、その戦い振りは、悪鬼なんだと噂されるほどのことではあった。

目の当たりにしたことで、実感する。セツナは、ガンディアにと

って大きな力となるだろう。レオンガンド王が欲するのも無理はない。彼が皇魔と等しい存在であろうと、それだけの力があるのなら、利用しない手はなかった。

しかし、人間的にはまだまだ成長途上だといわざるを得ない。ラoncインを許せないという感情はわかる。ラクサスとてガンディアの人間なのだ。カランの人々が無意味に虐殺されたことへの怒りと哀しみは、セツナ以上であるはずだ。だが、彼は、みずからの感情よりも任務を優先することができる。そして、任務についている間は、ガンディア王家の騎士としての人格が彼から感傷を消し去った。いずれ、セツナもそのようになるのだろうか。

(それは成長なのか?)

ふとした疑問もまた、騎士ラクサス・バルガザールの胸中で霧散した。

彼は、セツナに穏やかなまなざしを向けた。先ほどから沈黙を保ったままのセツナの顔面には、皇魔の返り血が張り付いていた。ラoncインの言った通り、何度拭いても拭い切れなかったのだ。水で洗い落とせばいいのだろうが、あいにく持ち合わせの水はわずかな量しかなく、その上セツナの傷口を消毒する際にも使っており、顔や手についた返り血を洗うために使うのは憚れた。セツナ自身ももつたいないと行ってきたのもあるが。

衣服はもちろん着替えているが、顔面や頭髮に降りかかった血量は相当なもので、衣服が綺麗なため余計に目立っていた。彼が昨夜、どれだけの皇魔を殺したのか、全身に浴びた返り血の凄まじさで十分伝わるだろう。

「夜のうちに話しただろう? 彼の言った通り、君は血塗れだ。そんな君を事情を知らない人間が見たらどう思う? 我々の任務に失敗は許されないんだ。アザーク国内にいる間は、どんな些細な問題も起こしたくない。もうしばらくの間、我慢してくれないか?」

ワールムに着けば、宿の風呂で洗い落とせる。それまでの辛抱だと付け加えると、セツナが、それでも納得できないといった様子で

言ってきた。

「でもだからって、寝ている間に袋に押し込めることないじゃないですか」

彼の言うことももっともだと、ラクサスは、胸中でうなずいたのだった。

第五十六話 王都発、敵国行 彼と彼女と名前と約束

「どうも、おかしい」

「なにがですか？」

セツナは、目の前のテーブルに並べられた料理に目を輝かせながらも、神妙な顔つきで窓の外を見遣るラクサスの調子に合わせるように、低い声音で問いかけた。

彼らが居るのは、ワーラムの一角にある小さな飲食店だった。城壁に囲われた大都市であるワーラムの中心を貫く大通りからは外れた位置にあり、周囲からはあまり目立たず、人通りもそれほど多くないということからこの店を選んだらしい。

彼らがワーラムに着いたのは、二時間ほど前のことだ。城門で自警団による簡単な荷物検査を終え、一先ず宿を目指した。セツナの全身についた血を洗い落とすためでもあり、馬車の幌を補修するためでもあった。

セツナが宿屋の風呂で全身にこびりついた血という血を洗い落としている間、ラクサスは街中を駆け回って情報収集を行っていたという話は、御者とふたりで馬車の補修を行っていたランカインから聞いていた。

「ログナーに関する情報がまったく耳に入っていない。ログナーにも近いワーラムならば、なにかしらの情報が得られるだろうと期待していたのだがな」

落胆を隠せない騎士の横顔を見つめながら、セツナは腹を押さえた。空腹のあまり、腹が鳴りそうだった。こんな状況で腹が鳴っては、空気もなにもぶち壊してしまうに違いなく、それだけはなんとかしても避けたかった。

もつとも、目の前には出来立ての料理が並んでいるのだ。色取り取りの野菜のサラダに鶏肉のソテー、香ばしい湯気を立ち上らせるコーンスープにふっくら焼き上がったパン セツナが、目を輝か

せるのも無理はなかったらう。

小さな飲食店の決して広くはない店内には、いくつかのテーブルが整然と並んでいるが、窓際に陣取るセツナたち以外に客の姿はなかった。窓の外の通りを行き交う人々は、ちょうど昼休みを終えた頃なのかもしれない。そう判断せざるを得ないほどに、店内は閑散とされていた。

単にこの店が流行っていないのではないかという考えは、セツナの頭の中には生まれなかった。

「それがどうしたんです？」

「君は馬鹿か？」

即座に口を挟んできたのは、ランカインだった。彼は、横並びに席に着いたセツナたちとはテーブルを挟んで対面の椅子に腰掛けており、セツナを見据える狂気を秘めた瞳は、薄笑いで浮かべているようだった。

「目的地の情報は少しでも多く入手しておくべきだらう？　なにがあるかわからないんだ。もっとも、そんなものは王都を発つ前に集め、精査しておくのが当然なのだがね」

「ぐっ　！」

ランカインの冷笑に対してセツナは、反射的に憤りを覚えたが、拳を握り締めることでなんとか堪えようとした。こんなことで感情を爆発させている場合ではない。ここはワーラム。アザークの一都市に過ぎず、目的地に到着してさえいないのだ。いくら相手がランカイン＝ビューネルであろうと、我を忘れてはいけない。

（冷静に。冷静に……）

胸中で自分に言い聞かせながらも、セツナの表情は険しくなる一方だった。鏡を見ずともわかるほどの変化。しかし、止められない。元より悪感情しかないのだ。しばらく行動を共にするからといって、はいそうですかと仲良くなれるはずがなかった。

といって、この場でランカインに斬りかかるだけの覚悟もない。

いや、そんなものを覚悟と呼んでいいものかどうか。

彼は、齒噛みした。確信はないが、断言する。

(そんなものは覚悟なんかじゃない……！)

ランカイン「ビューネルは、許し難い大罪人とはいえ、彼の主君レオンガンド・レイ「ガンディアが差し向けた同行者であり、ログナーでの任務を終えるまでは行動を共にしなければならぬ人物なのだ。彼がどれだけ嫌がっても、拒絶しても、その事実だけは覆しようがなかった。

ランカインとの同行を嫌って任務を降りるという選択肢は、ない。それは、セツナが足場を失うことを意味していた。

「君の言う通りだ。実際、王都を発つまでにできる限りの情報を集めてはみたが、わかったのは、ログナーが国境の警戒を厳重にしているということだけだ。ログナー国内の情勢はまったく掴めていない。だからこそ、ここに立ち寄ったのだがな」

つまり、ログナーの内情さえ掴めていれば、この街に立ち寄る必要はなかったということだろうか。その場合は血まみれのまま国境を越えることになったのだろうか、などと、セツナは愚にもつかぬ事を考えていた。が、それも終わる。

ランカインが、笑った。

「くくく。実にくだらない。馬鹿馬鹿しい。救いようがない。あのお方はやはり？うつけか？なにが起こっているのかわからない敵地に将来有望な人材を平然と送り込むなど、正気の沙汰ではない。君らが命を落とすことのほうが、かの国にとって痛手だろうに」

彼のまなざしに宿る狂気に煽られたわけではない。が、セツナは、テールに身を乗り出していた。

「てめえ……！」

吐き出したのは敵意そのものに違いなかった。レオンガンドを侮辱されたことへの怒りであり、ランカインという存在への苛立ちであった。理路整然と反論することもできない自身への罵倒でもあったのかもしれない。そして、渦巻く炎となって心を焦がす激情が、彼に囁く。

やっつけてしまえ。

「事実だろう？ それとも、俺の認識になにか間違いでもあるのか？ あるのならば教えて欲しいな」

ランカインが、嗤う。冷ややかに。

世界が揺らぐ。音が聞こえた。背後から忍び寄るだれのものともわからない足音が、セツナの耳朶に心地よく響いていた。甘美な旋律だった。その足音が鼓膜を揺さぶったときから、彼の意識は、眼前の男を斃^{たお}すべき敵と捉えていた。再び、囁きが聞こえた。

矛を手を取れ。それでおまえの前に敵はいなくなる。

「ニーウエ」

「！」

セツナは、雷光に打たれたような衝撃とともに我に返った。視界が妙に広くなった気がする。対面に腰掛けているのは、忌々しくも同行することになったランカインである。それは店に来たときからなにも変わっていない。変わっていないはずなのだが、彼は、妙な違和感を覚えていた。テーブルに身を乗り出してまで、なにをしようとしていたのだろうか。

理解できないまま、セツナは、席に腰を下ろした。ランカインの怪訝な表情がどうも癪に障るが、食って掛かるほどのことではない。気になるのは、自分の身のことだ。一体、なにを想って身を乗り出したのか。ランカインの戯言に煽られたのだとしても、なにも覚えていないのが解せなかった。

「落ち着きたまえ」

セツナは、ラクサスの台詞の意図をいまひとつ理解できていない自分に多少の苛立ちを覚えた。なにを見て落ち着けといったのだろうか。自分は十分に落ち着いているはずだが。

彼は、このテーブルについての時点から今までのことを振り返ってみたが、ランカインとの間にどのようなやり取りがあったのかすら思い出せなかった。その部分だけが淡い闇に包まれているかのようだった。

「カイン。君の考えにも一理ある。だが、こうは考えられないか？ あのお方が我々を選択したのは、我々にしかできない、我々にならできると判断したからだ。ならば、我々はおのお方の期待に応えるために全力を尽くすしかない。」

ラクサスが導き出した結論は、セツナにもうなずけるものだった。彼の言った通り、こうなつた以上はレオンガンドの期待に応えるべく、全身全霊で事に当たるしかないのだ。既に主命は下された。状況は動き出したのだ。今更任務の内容についてどうこう言うのはお門違いも甚だしい。

（考える暇がなかつたのも事実だけど……）

君臣の契りを結んだ直後に申し渡された任務である。内容について考える時間もなければ、是も非もなかつた。新参者だ。拒否権などあるはずもない。主命を受諾し、任務を遂行する以外の選択肢はなかつた。それが悪いといっているのではない。

道理だ。

一方で、セツナの頭の中を過ぎつたのは、可能性の話だ。もしあ のとき、セツナがレオンガンドへの臣従を拒んでいたらどうなつて いたのだろう。セツナの未来は閉ざされたのか。異界の存在として 抹殺されたのか、従うまでどこかに幽閉でもされていたのだろうか。そして、この任務はラクサスとランカインのふたりだけで当たる ことになつたのだろうか。その場合、戦力は減るとしても、セツナ がないだけで道中は随分と楽になるのかもしれない、と彼は、自 嘲気味に想っていた。自分の愚かな振る舞いが、ラクサスの頭痛の 種になつているかもしれないのだ。

ラクサスの表情からは、そういつたことはまったく窺えないが。 「おめでたい方だ。だが、一理ある。確かに、我々以外に適任の人 材はいなかつたと見るべきか。かの国は弱兵ばかりと聞く。将士に も頼れるものなどいないのだろうな。でなければ、俺のようなもの を使おうなどは考えまい」

「君ならば、死んだとしても痛手にはならない」

ラクサスが、冷笑する男に釘を刺すようにいった。やはりその声音にも、わずかな感情の変化も見られなかった。平温そのものだ。

セツナは、彼の平然とした様子を目の当たりにして、己の意思の薄弱さを思い知った。

「くくく。そうだな。その通りだ。俺ならば、いつでも好きなときに捨てられるな」

心の底から愉快そうに笑うランカインの瞳に揺れるのは救いようのない狂気であり、彼の眼を見たセツナは、暗い闇の深淵を覗いた気がしてならなかった。光明など見つかるはずもなかった。どのような半生を送れば、そんな闇が瞳の中に生じるといえるだろう。セツナには想像しようのないほどには苛烈な人生だったに違いない。正気を保ってられないほどには。

いや、狂気こそが彼の正常なのもかもしれず、その場合、正気を謳うセツナたちのほうこそが狂っているということになるのだろうか。「だが、あなたや彼は違う。捨て駒たる俺共々に死ぬわけにはいかないはずだ。そうだろう？ ニーウェーディアプラス」

ランカインに同意を求められて、セツナは、即座には返答できなかった。彼への反発がそうさせたのではない。セツナとて、ひとつひとつの言葉に反感を抱くほど愚かでもなかった。男が口にした言葉が、自分を指し示す名前だったのだと思いつくのに数秒を要したのだ。

偽名である。

セツナ「カミヤというこの大陸において異質な名前は、少しばかり知れ渡ってしまった。特に、これから潜入しようというログナーでは有名に違いないという。

憎悪すべき敵として。

バルサー平原での戦いで活躍しすぎたのだ。確かに彼の獅子奮迅の戦い振りはガンディアの勝利を決定的にしたが、同時に、彼はガンディア軍の中でもっとも警戒される立場になってしまっていた。どれだけの兵士を殺戮したのだろう。数え切れないくらいの人を命

が、黒き矛の吐き出した猛火に飲まれて灰燼と消え、無数の軌跡に切り裂かれ、あるいは貫かれて散華した。

憎まれて当然だった。

そして彼の名は、レオンガンドが直々に喧伝したのだ。凱旋の日、セツナが意識を失っている間に。

迷惑なものだ、とは想わない。喜ぶべきことだろう。王が、彼の活躍を認め、臣民に向かって褒め称えてくれたのだ。彼にとって、これほど嬉しいことはなかった。認められたのだ。それだけで良かった。

だが、問題が残った。

任務中の名前について、である。

任務に支障をきたさないよう偽名を考えることになったが、適当でいいというのがセツナの主張であったが、その場に居合わせたフアリアの猛反発によりあえなく却下された。

「どうせなら、少しくらい凝ったものにしたほうがいいわよ」

「なんで？」

「そのほうが面白いでしょ」

至極当然といった風に答えてきた彼女に、セツナは返す言葉もなかった。彼女のそういう遊び心は嫌いではなかったし、なにより、彼女と戯れているこの時間が愛おしかった。無論、その場にはラクサスもいたし、ルウファの姿もあった。戯れているとはいえ、場を弁えていないわけではなかった。

「まあ、君たちが納得するようにしてくれ」

ラクサスがそう言い残してセツナたちの前から立ち去ったのは、別に気分を害したというわけでもなかったはずだ。彼は、仕事に忙殺されていた。王都に帰還して早々、新たな任務を拝命したのだ。

先の任務の報告と次の任務の準備に駆け回らなければならなかった。それに比べれば楽なものだ、とセツナは他人事のように想うのだ。ガンディアやログナーの地図と睨み合い、時にはこうしてファリアと会話することで知識を吸収する。それだけだ。特別になにかをする必要はなかった。

偽名を考えることだって、大したことではない。

「ということ、なにか案はある？」

「ないって」

「ルウファは？」

「え？ 俺も？」

急に話を振られて、ルウファは、驚いたようだった。まさか自分も話の輪に入っているとは思っても見なかったのだらう。が、ファリアは容赦しない。

「当たり前じゃない」

「ええ」

「なんでそんな顔をするかな？」

「い、いや、別に深い意味は……。うーん、そうですね……。セツナイーノ「カーミヤとか」

「適當すぎる！」

「俺は嫌だぞ、それ」

あからさまに適当な名前を口にしたルウファに対して、セツナとファリアは口々に拒絶反応を示した。特にファリアの追撃は、ひどいものだった。

「それで会心の出来だとか言わないでよね」

「ひ、ひどい……」

ファリアの圧力に負けてなんとか捻り出した名前をにべもなく一蹴されて、ルウファは、ただ愕然としたようだった。同情を禁じえない。が、かといって彼の案を受け入れようと微塵も思わないのが、セツナだった。

「セツナはどう？」

「だから、ないって」

「なんでもいいから」

「なんでもいいなら、適当でいいじゃないか」

セツナは、ため息とともにファリアに言った。すると、彼女は憤然と言い返してくるのである。

「そこはこだわるのよ!」

「なんでさ?」

「どうしてもよ!」

「そこまで言うならファリアが考えたらいいだろ? 俺にはいい名前なんて思いつきそうにないし」

「あら、いいの?」

さっきまでとは打って変わってしなやかな微笑を浮かべた彼女に、セツナは呆れるほかなかった。

「じゃあ、君の名前の意味を教えてください?」

「名前の意味……?」

セツナは、改まった様子で問いかけてきたファリアの瞳を見つめた。名前の意味を尋ねられることなど、そうそうないだろう。神矢刹那。彼自身、幼い頃から大層な家名だと思っただけだ。神の矢、である。どこから興ったのだろうと興味を抱いたこともあったが、それも失せた頃、カミヤという音に適当に漢字を当てただけじゃないか? という祖父の言葉には落胆を禁じえなかったものだ。実際、その程度のことなのかもしれないのだ。

もともと、適当にしては尋常ではない字面ではあったが。

そして、刹那。

父と母が考えてくれた名前。自己を定義する大切な名前。

「一瞬一瞬を大切に、ね。素敵な名前じゃない」

「うん。気に入ってる」

「そう。良かったわね」

ファリアの慈しみに満ちた穏やかな微笑みは、セツナには眩しすぎて直視できないものと思ったものの、むしろ目を逸らすことのほ

うが難しい事実気づいた。今しばらくの間見つめていたいと思っただの。とはいえ、時は止まらない。

ファリアが微笑を消したが、思案している間の表情も決して魅力がないわけではなかった。

「そうね……ニーウェーディアブラスなんてどうかしら？」

彼女の導き出した答えがなんであれ、セツナとしては受け入れるつもりではあったが、ファリアの声が紡いだその音の響きは、彼にとって予期せぬほどにしっくりとくるものだった。反芻するようにつぶやく。

「ニーウェーディアブラス……」

「古代言語でね、ニーウェーは一瞬、ディアは神、ブラスは矢を意味するの。武装召喚師にとってこれ以上にないくらい相応しい名前でしょう？」

彼女の満足げな表情には抗しようもなく、そして先ほどから考えていた通り、セツナはファリアの提案した名前を受け入れることにしたのだった。

ニーウェーディアブラスに決まったとはいえ、耳慣れないうちはラクサスやランカインにその名を呼ばれても瞬時には反応できないのも当然ではあった。

「君は、捨て駒にはなれまい」

ランカインの声が、セツナを現実に戻した。狂気を帯びた瞳を睨み返しながら、静かに肯定する。

「当たり前だ」

死ぬためにこの場にいるのではない。生きるために、ここにいる。生きて任務を遂行するために。それがとてつもなく困難な任務であろうと、必ず成し遂げて王都に帰還を果たさなければならぬ。

セツナの脳裏をひとりの女性の幻影が過ぎつた。姿が見えるはずもない。彼女はそのとき、彼の視界に入りようのない場所にいたのだ。

「いよいよ明日ね。緊張して眠れなかったりするんじゃない？」

「そんなわけないだろ」

ファリア＝ベルファリアのからかうような口振りに、セツナは、少し怒つたように言い返した。もちろん、本気などではない。彼女の言葉には、多くの場合、優しさと慈しみが込められていることをセツナは知っていた。

「そっか」

夜中のことだった。レオンガンドの臣下になってからというもの、セツナは、バルガザール邸の客室を自分の部屋として使わせてもらっていた。広い部屋だ。大事な客を寝泊りさせるだけあって、調度品の類も高級そうなものばかりだった。

その高級品に囲まれて時を過ごすのは、セツナにとって窮屈以外のなにものでもなかったが、文句を言える立場でもない。

闇の中、開けっ放しの窓から入り込んできた夜風がカーテンを揺らした。拍子に、月明かりが彼の視界を白っぽく染めたが、それも束の間に過ぎない。淡い闇が、再び彼の世界を覆うのに時間はかからなかった。魔晶灯は点けてはいない。

ファリアは、当然、部屋の外にいた。閉じた扉の向こう側からの声も、夜の静寂は、ちゃんとセツナの耳朵にまで届けてくれていた。

「……ねえ、セツナ」

「ん……？」

「ひとつだけ、約束して欲しいことがあるの」

いつになく真剣な彼女の口調に、セツナは、咄嗟に上体を起こしていた。淡い月明かりが、またしても視界を白く染めた。それもや

はり一瞬の出来事である。カーテンが月光を遮り、この世のすべてを薄い闇で覆う。

セツナは、扉の向こうのファリアに向かって問いかけた。

「約束？」

小さな声は、夜の静けさに抱かれた世界に微かな波紋を浮かべる。彼女の耳に届くまでのわずかな いや、彼女が答えを投げ返してくるまでのほんの少しの時間が、彼にはなぜか、とてつもなく長く感じられた。実際は数秒とかがかかっていないに違いない。しかし、セツナにはそう感じられたのだ。

夜の闇と静寂が織り成す幻想だったのかもしれない。

「そう、約束。必ず、王都みやこに戻ってきてね。君のことをもつと知りたいのに、こんなところでさよならなんて、嫌よ？」

決然とした彼女の声音に、セツナは、驚きとともにあざやかな光明を見出したような感覚を抱いた。それは、自分のことを心配してくれるひとがいたという事実の再確認に過ぎなかったのだが、しかし、いまのセツナにとっては、それだけで何倍もの力が出せると想えるほどだった。

「約束する！ 必ず帰ってくるよ。だって、俺もファリアのことをなにも知らないんだ」

言いながら、彼は、その事実に愕然とした。が、当然のことだ。ファリアのことを知ろうともしなかったのだ。この世界に召喚され、すぐに知り合ったというのに。幾度となく彼女に助けられたというのに。

後悔が生まれた。

そして同時に、ファリアのことを知りたいと強く想った。

「俺は死なない。死んでたまるか」

セツナは、吐き捨てるように告げると、目の前の料理に手をつけ

た。ランカインの驚いたような呆れたような、さらにいうと好奇心に満ちた視線に曝されながらも、もはやそんなことは関係なくなっていた。

約束を思い出したのだ。

セツナは、ラクサスとランカインの会話を聞き流しながら、リアのことを考えていた。

第五十七話 王都発、敵国行 間抜けな幽鬼と戯れを

夕闇が迫っていた。

セツナたちがワールラムに到着した当初中天に輝いていた太陽は、今や西に大きく傾き、空の彼方を赤々と燃え上がらせていた。晴れ渡っていた空には分厚い雲が流れ始めており、今夜中にも頭上を覆い尽くすのではないかと想われた。風が強い。

セツナは馬車に乗っている。二頭立ての幌馬車であり、昨夜皇魔によって破損した幌は、ワールラム滞在中に補修していた。ワールラムでは、幌の補修のついでに次の目的地に着くまでの間の食料を買いこんでいる。

馬を急ぎ立てても、国境を越え、目的地に到着するまでは二日はかかるだろうというのがラクサスの意見であり、ランカインや御者もそれに同意していた。

乗り心地は、決して悪くはない。が、格別に良いというものでもない。自動車などと比べるべくもなかった。もっとも、馬に全力疾走を命じているわけではない。現在セツナが体感している振動は、極めて穏やかなものだった。

ワールラムから北東へと伸びるワール街道は、緩やかな曲線を描きながら大地を走り、やがてアザークとログナーの国境へと至る。国境付近には、ふたつの山が聳えており、街道はその間を抜けるようにしてログナー国内へと通じていた。ふたつの山のうち、クラム山はアザーク、ログナー、ガンディア三国の領土に跨るよう存在しており、さながら大地に穿たれた楔のようであるという。

目下、セツナを乗せた幌馬車は、その山の麓へと向かっている。

(ここにひとつの問題がある……)

セツナは、強張った表情で自分の直面した予期せぬ事態と相対していた。いや、冷静に考えれば、道理だった。彼がニーウエーディアアブラスである以上、直面せざるを得ない問題だったのだ。

つまりは、任務の間、なにがあっても黒き矛を召喚してはならない、ということである。

昨夜の皇魔おしまとの戦いは良かった。ガンディア国内ということもあつたし、なにより敵が人外の化け物である。黒き矛の使い手が王都を離れてどこかに向かっている、という情報が拡散される怖れはなかった。

しかし、今セツナたちがいるのはガンディアではない。他国なのだ。ガンディアとアザークは休戦状態とはいえ、黒き矛の使い手を発見すれば、どのような事態に発展しないとも限らない。アザーク国内に広がるだけならまだしも、ログナーを含む周囲の国々に情報が伝播する可能性があつた。

それは、現在のガンディアにとってはぞつとしないことだという。先の戦いで大勝を飾つた一因である武装召喚師がない隙に、隣国から攻め寄せられれば溜まつたものではないのだというのだ。無論、ガンディアとてセツナひとりを頼みにしているわけではない。実際、セツナが居ようが居まいがバルサー要塞を奪還するために軍を動かしていたのだらうし、その戦いも勝つ算段があつたから起こしたに違いなかつた。

そう考えれば、セツナひとりいなくなつたところで本来の戦力に戻るだけであり、その点では心配する必要はないはずなのだが。

「どうかな？ カインの言っていた通り、ガンディアの兵は弱い。バルサー要塞も、君や同盟国の協力がなければ取り返せなかつただろう。事実、陥落してから半年もの間放置していたのだからな」

ラクサスの嘆息は、セツナにはよくわからない。弱兵弱兵というが、それがどれほどのものなのか、実感として理解できないのだ。

あの平原でセツナが見たものといえば、雲霞の如き敵兵であり、勇敢な傭兵たちであり、ルクス^{II}ヴェインの剣技の冴えであり、フアリア^{II}ベルフアリアの弓の威力であり、そしてなにより黒き矛の持つ強大な力だつた。

その圧倒的な破壊の力の中心にあつて、彼は、すべてのものが等

しく見えた。

塵に等しく。

(なに考えてんだ俺は……！)

セツナは、かぶりを振った。塵に等しいのは己のくだらない考えのほうだろう。そう思い直すことで、胸中に溢れようとしたいくつもの感情を封殺した。

あざやかな赤が西へと沈む中、大地を駆ける幌馬車の中は静かな闇に包まれている。ランカインは荷物に背を預けるようにしており、セツナと対峙するように座っているラクサスは、なにを気にする風でもなく目を閉じていた。薄い闇の中、できることなど限られている。

それはセツナだって同じだった。

この決して広くもない馬車の中で、俄かに訓練などできるはずがなかった。剣の素振りさえできないだろう。そして、剣を振り回したところで、なにがどうなるわけでもない。剣術が身につくこともなければ、戦いの勘が養われることもなかった。付け焼刃の剣術で実戦を戦い抜けるわけもない。

(矛とは勝手が違うんだよなあ)

セツナは手元を見下ろした。彼の手には一振りの剣が握られていた。ショート・ソードと呼ばれる類の剣である。長さは七〇センチほどで、重さは一キロはあるだろうか。特に飾り気もない形状は、彼の趣味に合うものではあつたが。

彼は、その剣を、つい先ほどラクサスから手渡されたのだ。

黒き矛の代わりとして、である。

(これにあれの代わりは勤まらんでしょう?)

と、ラクサスに向かって叫びだしたい気持ちを抑えるのにも一苦労だった。

並みの武装召喚師なら、軽く扱えるのだろう。この大陸の武装召喚師たちは、召喚術を学ぶ上で、肉体の鍛錬、戦闘技術の習得は必要不可欠であり、召喚師として認められる頃には、戦士として戦場

に立つても人並み以上は働けるといふ。

それに比べて、セツナの戦闘力などたかが知れている。彼の戦果は、すべて黒き矛のおかげであり、彼個人の能力とはほとんど無関係と言えた。戦場における動作のひとつひとつが、彼の意識を超えたところから出ていた。

彼は、剣の柄を握り締めたまま、矛の柄に触れた瞬間の感覚を思い出した。急激に視野が拡がり、あらゆる感覚が膨張するイメージ。しかし、膨大化した感覚は緩慢になるでもなく、むしろ鋭敏に研ぎ澄まされていた。戦場のすべてを見渡せるような錯覚。兵士ひとりひとりの息吹が聞こえた気がした。

すべては錯覚なのか。気のせいだったのか。

だとしても、黒き矛を手にした瞬間、セツナは、身の内に在らざる力を発揮したのは事実だった。網膜に焼きついた数多の死が、それを証明している。戦いとは無縁の生活を送ってきた人間が、死を賭して立ち向かってくる何百もの男たちを相手に、平然と矛を振るえるはずがない。しかも、息ひとつ乱さず、その死兵のすべてを余す所なく殺すなど、並大抵の戦士の所業ではなかった。

それはやはり、黒き矛の力なのだ。

セツナの力など、まったくといっていいほど関与していないのだ。
(だけど、手を下したのは俺だ)

静かに認める。それだけは否定してはならない気がした。逃げたはならない。みずからの手で数多の人間を殺したという事実を否定してはならない。

剣の柄を握る手が、震える。

この剣で、同様のことができるのかどうか。

答えは、否、だろう。

剣を自在に扱えるわけもなければ、真剣を振り回したこともないのだ。一キ口ほどはありそうな代物だ。振り回すには、それなりの膂力が必要なはずであり、セツナには圧倒的に足りないものだった。つまりは、黒き矛はセツナの足りない力をも補ってくれていたとい

うことに他ならない。

その助けがなくなる。

不安が、彼の胸の内に広がっていた。

「ひとつ……」

そう言つて馬車の中の沈黙を破つたのは、ランカインだった。移動中はほとんど口を開かない彼が俄かにつぶやいたことで、セツナは、怪訝な顔をそちらに向けた。

夕闇は、深くなり始めている。

「ふたつ……」

意味深げに数字を浮かべるランカインの様子は、よくわからない闇の中だ。脚を伸ばしてくつろいでいるようにも見えるが、なにかを探っているようにも見えた。見えるといつても、男の輪郭くらいのものに過ぎない。

「みつつ……」

「なにがだ？」

ラクサスが、問う。

すると、ランカインがこちらに顔を傾けたようだった。彼の顔は、薄く笑っているようにセツナには感じられたが、きつと気のせいだろう。彼の表情までは見えなかった。

「聞こえませんか？ 足音ですよ」

「足音？」

「馬が三頭。どうやら、この馬車に用事らしい」

ランカインの台詞を聞き終えるなり、セツナは耳を澄ませた。セツナの鼓膜を震わせるのは、幌を叩く風の音であり、馬車を引く馬の蹄が大地を蹴る力強い響きであり、車輪が地面に轍を刻む音色だった。それにしただって微々たる音だ。

セツナは、耳を澄ませながら、自分の耳の良さに呆れる思いがした。それでも、ランカインのいう三頭の馬の足音は聞き取れなかったが。

「どこだよ？」

セツナは、ランカインを見遣ったが、彼はこちらの様子を嘲笑ったようだった。

「君とは耳の造りが違つのだよ、ニーウエ君。さて、どうします？
騎士殿」

「野盗か？」

ラクサスの瞳が、闇の中できらめいたように見えた。対するランカインは、セツナへの対応とは打って変わって慇懃である。

「どうでしょう？　ワーラムの自警団かもしれませんし、それとはまったく関係のない連中かもしれません」

「なににせよ、馬が三頭だけというのは考えにくいな」

「どこかに人数を伏せているのかもしれないな」

「とすれば、その三頭の目的はこの馬車を誘導することか」

「そう考えるのが妥当ですな。ニーウエ君、君の出来の悪い頭では少し難しいかもしれないが、話の内容は理解できたかい？」

ランカインのひとを馬鹿にした口調には、セツナは怒り心頭だったが、状況が状況である。咄嗟にラクサスに問いかけることで、ランカインの存在さえも黙殺した。

「で、どうするんです？」

「馬を傷つけられるのだけは避けたい。なにか案はあるか？」

「無視すりゃいいんじゃないですか？」

セツナには、それが最善の策かと想われた。野盗であろうとなんであろうと、向こうから手を出してこない間に馬車を飛ばして国境を越えてしまえばいい。さすがに国境を越えてまで追いかけてはこないだろう。

しかし、彼の考えは、ランカインの嘲笑によって一蹴された。

「だから君は愚かなのだよ」

「なんだと！」

「今馬車を飛ばせば、相手を刺激しかねない。彼らが行動を起こして馬を傷つけられでもしたら、こちらの予定に狂いが生じるだろう？　それに相手は馬だ。速度を上げて、一時的に距離を離すだけ。」

すぐに追いつかれるさ」

「そういうことだ。わかったかい？ ニーウェ君」

「く……」

セツナは、唇を噛むようにして口を閉ざした。ランカインの口振りには気に入らないが、だからといって反論できる立場にはなかった。彼の言う通りだった。浅はかな考えなど、安易に言葉にするべきではない。そんな当たり前のことを学べただけでも、よしとするべきなのか。

不意に訪れた沈黙は、風や馬車が立てる音を夕闇の中で踊らせた。そして、ラクサスが口を開く。

「いつそ、彼らの誘いに乗るか」

「え？」

ラクサスの出した意外な結論に、セツナは呆然となった。相手がどのような連中かわからないのに、その誘いに乗るというのか。セツナには理解できない判断だった。

「そのほうが馬は安全かもしれない」

「本気……ですか？」

「よし。それで行こう」

セツナの問いは、ラクサスによって聞き流された。案外、ラクサスは頑固なのかもしれない、などと悠長に考える余裕がないこともわかつてはいたが、それでも彼は叫び声を上げたい気分だった。

ひとの話聞いてくれ、と。

ランカインのなぶるような笑い声が、セツナの耳に突き刺さる。

「ではでは、君の剣技に期待しようかね。ニーウェ」ディアブラス」

「期待しているよ？」

「ええーっ!？」

セツナは、悲鳴を上げるしかなかった。

馬車が国境を目指しているはずの進路を大きく逸らしたのは、後方から迫ってきた三頭の馬が原因だった。正確には、その乗り手たちである。彼らは、馬車と横並びになると、御者を威嚇したらしかった。武器でもちらつかせたのか、突きつけたのか。

どちらにせよ、御者はラクサスとの打ち合わせ通り大仰に驚き、恐怖に顔を引き攣らせながら乗り手たちの誘導する方向に馬首を巡らせたのだろう。

街道を外れ、平原をひた進んだ。

セツナたちは、その間に装備を整えていた。セツナは軽装の鎧を着込み、武器を身に付けた。相手が野盗であれなんであれ、戦闘になるのだ。旅装のまま戦うのはあまりにも危険だった。もつとも、セツナは今までの皇魔との戦いにおいて鎧を纏ったことはなく、甲冑を着込んだのはバルサー平原での戦いにおいてのみだった。

ラクサスから渡された剣は、腰に帯びた剣帯に吊つてある。剣帯から伝わる剣の重量が、大いなる不安と緊張感を煽り立ててくるかのようにだった。初陣とはまったく異なる緊張があった。理由はわかっている。剣を握ったことがないからだ。

セツナの得物は、黒き矛だった。至極当然の話ではあるが、それ以外の武器を手にしたことなどなかった。そういう機会もない。そして、黒き矛を握ってこそ、彼は戦場を蹂躪するほどの力を発揮できた。漠たる不安も嫌な緊張も大して感じずに済んだのだ。

(だけど、やるしかない……！)

セツナは、ぐっと拳を握り締めた。

やがて、馬車が止まり、揺れが収まった。風の音は強くなる一方で、その雑音の中紡がれる召喚の呪文など、小鳥のさえずりほどにさえ聞こえなかった。ランカインである。彼の召喚は許されていた。むしろ、彼の召喚武装こそが主力なのだ。セツナが黒き矛を使えない以上、ランカインに張り切ってもらうしかない。

「さっさと荷物を降ろしてもらおうか？」

「ひっ……！」

「早くしねえと、てめえの首が飛ぶぞ！」

乗り手のひとりが上がった威嚇するような大声は、しかし、セツナの心にはなにも響かなかった。凄んでいるのだろう。怖がらせようと精一杯声を作っているのだろう。実際、普通のひとならば、恐怖に引き攣つて声も出ないのかもしれない。しかし、馬車の影の中、男の大声は虚しく響くだけだった。

馬の嘶いななきが聞こえる。馬たちは、生命の危機を感じたのかどうか。嘶きこそすれ、暴れだそうともしないあたり、これといって危険を感じてはいないのかもしれない。あるいは、御者のある種の落ち着き振りに気づいているのかもしれない。

不意に、ランカインがつぶやいた。

「出てきたな」

伏せていた人数のことだろう。乗り手たちが指定した場所だ。当然、馬車を囲むのだろう。御者への威圧もあるだろうし、もし他にも誰かが乗っていた場合のことも考えているに違いない。

呪文の詠唱は終わったらしい。

「何人だ？」

「二十五人……大所帯だな」

「嬉しそうに言うなよ」

セツナは、ランカインを睨みつけることさえ出来ず、ただうめいた。二十五人。伏せていた野盗（ラクサスたちがそう結論付けていた）の総数だろう。つまり、乗り手と合わせると二十八人にもなるのだ。想像以上の数に、セツナは、改めて不安を覚えた。

たった三人で二十八人を相手に戦うなど、セツナには絶望的過ぎた。これまでの戦いはそれとは比較にならない人数なのだが、この場合、武器の違いが彼の心境に大きく影を落としていた。黒き矛を手に使っていたのなら、なんとも思わなかったのかもしれない。むしろ率先して迎撃に当たっただろう。しかし、矛の召喚は許されず、代わりに与えられた武器は、使ったこともない代物だった。

「早くしろって言うてんだろ！ 死にたいのか！」

「い、今すぐ降ろしますから……！」

脅え切って今にも腰を抜かしそうな男の声が、幌馬車の横で聞こえた。御者の演技力は、冴え渡っていた。一見ひとの良さそうな（そして中身もひとの良い）中年の男性である。彼は日がな一日馬の世話をするのが好きらしく、バルガザール家で働くようになったのも、馬の世話が出来るところという理由らしい。

名前はオリスン・バナックといった。彼ほど馬の扱いが巧みなものは、ガンディア中を探してもそういないだろうというのがラクサスの評価だった。

ただたどしい足音が、馬車の後方に廻った。後部を閉じていた幌が、御者の手によってわずかに開かれる。彼の顔が覗いた。暗くてよく見えないが、どうやら恐怖に引き攣った表情のままらしかった。彼の背後に野盗がいるのが気配でわかった。

「さあて、久々のお宝は一体なにかなあ？」

男の野太い声とともに、幌が大きく開かれた。声からして、馬の乗り手たちとは違う男だ。待ちきれなくなったのだろうし、そもそもオリスンひとりに運び出させる理由はない。野盗たちが力を合わせて運び出すほうが、引越しの御者ひとりに任せるよりも時間がかからないだろう。

「どれどれ」

セツナたちが潜む馬車の内部を覗き見た男は、こちらを認識することさえもできなかった。

真つ先に外へと飛び出したランカインが、足の爪先で男の頭頂部を踏み付け、どういう力加減か、その男の首を折ることなく夕闇の空へと飛翔したのだ。男は踏み付けられた衝撃で馬車の板敷きに顔面から激突し、そのまま声さえ上げなかった。気を失ったのだろう。声が響く。

「武装召喚」

召喚の光とともにどよめきが起きた。まさか武装召喚師が中に乗っているとは、思っても見なかったに違いない。《大陸召喚師協会

《などという組織が成立している以上、相当な数の武装召喚師が存在すると思われるが、かといってそれらの武装召喚師が、夜道を行く馬車の中に潜んでいるとは考えないだろう。

続いて、ラクサスが飛び出し、セツナも後に続いた。ランカインに踏み付けられた男の頭上を飛び越えるようにして、外へと跳躍する。

視界が広がった。閉塞した暗闇から、広大な夕闇へ。もはや陽は落ちていた。闇が天上の支配権を主張し、光は遙か地平の彼方へ追いつかれていた。星々が、わずかばかりの権力のほどを明らかにしようとしているが、闇の勢力の前には霞まざるを得ない。

その暗い闇の中に煌々たる明かりが灯されていた。魔晶灯の光ではない。松明だろうか。闇を焦がすいくつもの炎は、さながら群れを成す鬼火のようであり、その周囲に浮かぶ野盗たちの顔は生者を求めさまよう幽鬼のように見えなくもなかった。武装召喚師の登場に驚愕する彼らの表情は、間抜け以外のなにものでもなかったが。「おまえは馬の様子を見てやれ。彼らの気持ちができるのはおまえだけだ」

「はい」

オリスンに向けられたラクサスの優しげな言葉を、セツナは上空で聞いていた。彼の眼前には、三十人近くの男たちがいるのだ。それらと一戦交えるのだ。彼も剣を抜かなければならなかった。剣を振るい、敵を斬り倒さなければならぬ。

それは、いい。

この世界ではそうやって生きてきたのだ。敵と戦い、敵を倒し、敵を屠り、ここまでできたのだ。今更それを否定するつもりもない。だが、物事には得手不得手というものがある。

黒き矛ならば。

「て、てめえらは一体なんなんだ？」

上擦った男の大声が、泥流に飲まれかけたセツナの思考を一瞬にして浮上させた。ここは戦場。迷っている場合ではない。セツナは、

手を剣の柄に触れさせた。慣れない柄の感触は、彼の意識をいつも以上に引き締めてくれた。

「それはこちらが伺いたいな。おまえたちはただの野盗か？ それとも、だれかに雇われて俺たちを襲ったのか？」

ラクサスの怜悯な声が、闇に響いた。彼の問いは、ほとんど意味を成さない。こちらは既に野盗だと決め付けており、その対処も決定済みだった。適当に戦い、制圧する。出来る限り殺さないということだ。それにはランカインが不服の声を上げたが、ラクサスは、彼らが利用できるかもしれないという可能性を示唆し、その上でランカインを宥めた。いずれ本当の戦場で思う存分暴れられる日も来るだろう、と。

そのランカインは、竜の飾りのついた手斧を得物とし、ラクサスの左前方に立っていた。彼の無防備な立ち姿は、それだけで迫力があり、野盗への牽制となっているようだった。

セツナは、ラクサスの右後方に立っている。剣は、まだ抜いていなかった。それはラクサスも同様だった。

ラクサスの後姿は、威厳に満ちた騎士そのものだったが、格好はどこか傭兵染みていた。身に付けている鎧がそう感じさせるのか、ともかく、どこか野暮ったさを感じさせ、それが傭兵的な雰囲気醸し出しているのかも知れなかった。

「はっ！」

野盗のひとりが大声で笑った。ラクサスの問いかけによって冷静さを取り戻したのかもしれない。他の連中の様子を見る限りでは、その男だけが特別だったようではあるが。

「てめえらを襲うのに理由なんていらねえぜ！ 野郎ども、やっちまいな！」

男は、頭目だったのだろう。彼の号令とともに、馬車を包囲していた野盗どもが、一斉に怒鳴り声を上げた。全力でがなりたてられても、セツナは恐怖を微塵も感じなかった。本当の戦場のほうがもっと恐ろしかった。といって、その時感じた恐怖は黒き矛によって

多分に瀟過されたものであるには違いなく、そう考えると、矛を手にしなくとも怖れを感じないのはどういう理由があるのだろう。

野盗どもの雄叫びが、耳を塞ぎたくなるくらいにやかましいだけのものであったから、というのが一番の理由なのかもしれない。

ラクサスが、剣を抜いた。白刃が灯火を反射してきらめく。

「こちらは理性的な対応を求めたのだがな」

「説得力がないなあ？」

「君がそんな物騒なものを持ち出すからだ」

「くくく。殺戮許可を出したのはどこのどなたでしたかな？」

「知らんな」

セツナは、前方で繰り広げられる馬鹿げた茶番よりも、先ほどの頭目の号令とともに動き出した野盗たちの行動に意識を向けていた。二十七人に及ぶ野盗集団のうち、ひとりには馬車で気絶しているとして、残りの大半はラクサスたちの前方に纏まっており、それらはふたりに任せてしまえばいい。無責任かもしれないが、セツナとしてはまともな判断をしたつもりだった。

セツナが担当すべきは、右後方からこちらに向かって殺気をぶつけてくる連中なのだろうが、今のところ常勝無敗の黒き矛を手にしているならいざしらず、強力な召喚武装の助けがない以上、相手に出来たとしても精々ひとりくらいだろう。冷静に判断を下した結果である。

松明の炎に照らされた幽鬼どもは、幽鬼というにはあまりにも体格が良く、健康そのものであり、しかしながら闇に浮かぶ男たちの顔は、幽鬼と形容するに相応しいような気がしないでもなかった。それらは、松明を掲げるものも含めて、それぞれに武装しているようだった。得物はひとそれぞれだが、一番人気はどうやら刃物であり、次いで鈍器の類が多く、長柄の武器は少なかった。

どんな武器を手にしていようが、少なくともセツナよりはその扱いに長けていると見るべきだろう。膂力ももちろん、野盗どもの方が上に違いない。一対多数なら勝ち目はなく、一対一でさえ勝利の

次々と隆起する岩石が、逃げ惑う野盗の群れを速やかに打ちのめしていく。

「……」

セツナは、ランカインの手斧がもたらした惨状によって野盗集団が壊滅していくのを見遣りながら、自分の覚悟が馬鹿らしくなった。最初からそれをやるつもりだったのなら、いちいち煽るようなことは言わなくてもいいだろうとも思ったが、そこで煽るからこそランカインなのだろうとも考える。怒りが込み上げてくることはなかった。大地の揺れが納まっていくのを感じながら、嘆息を浮かべる。不意に。

「なに余所見してんだ？」

凍て付いた刃のような男の囁きが、セツナの耳朵に触れた。声は背後　極至近距離からだった。背筋が凍る。

冷ややかな声と、殺気。

「おまえの相手はここだぜ？」

「っ……！」

セツナは、振り返り様、反射的に剣を抜いていた。目の前に火花が散り、金属音が鼓膜に突き刺さった。重い衝撃が柄を握る手に伝わる。武器がぶつかり合ったのだろう。全身の毛穴という毛穴から大量の汗が噴き出したのを実感する。間一髪だった。反応が少しでも遅れていたら、致命的な一撃を受けていたに違いなかった。そして辛くも反応できたのは、今までの戦闘で培われた経験の賜物だろう。

相手は、眼前にいた。若い男だ。青年と叫ぶといい。野盗の集団の中にあつて、だれよりも生気に溢れたまなざしをしてはいるが、ほかの連中と同様に野盗という言葉がよく似合う格好をしていた。手には刀身の幅が広い剣が握られている。ブロード・ソードという代物だろう。

彼は、自嘲するように言ってきた。

「俺も甘いなあ。おまえが素人みたいに突っ立てるから、ちょっと

躊躇してしまつたよ」

セツナは、彼の台詞が嘘ではないことを理解するとともに、自分の無防備さに愕然とした。彼がその気になれば、セツナが気づかない間に斬りつけてくることも可能だったのだ。セツナが反応できたのは、彼が声をかけてきたからに過ぎない。もし、彼がなにも言わずに斬りかかってきたとすれば、セツナには剣で受け止めることは愚か、避けることさえできなかつただろう。

その場合、致命傷は避けられなかつたに違いない。

セツナは、鼓動が急速に高鳴るのを認めた。心音が聞こえていた。目の前の男のちよつとした躊躇いが、セツナをここに立ち尽くさせている。それでも、告げる。

「素人で悪かつたな」

「素人……なのか？」

男は、怪訝な表情になつた。俄かには信じられないのだろう。しかし、セツナは、言い切つた。

「ああそうだよ！」

「ふうん。ならなんで外に出てきた！ 鎧まで着込んで！ 素人なら素人らしく、馬車の中に隠れて脅えてりゃあいいんだよ！ 俺たちはそんな奴らを殺したりはしねえ！」

「んなもん、わかるもんか！」

「……そりゃあそうだな。うむ。おまえの言う通りだ」

「そこは素直なんだな……」

セツナは、著しく変化する男の言動にどつと気疲れを覚えたが、かといって気を許すことも出来なかつた。構えたままの剣が重い。未だに手が痺れていた。男の一撃がそれほど重かつたという証明だろう。

セツナの心音は、少しずつだが平静を取り戻しつつあつた。

「さて。続きをやるか」

男の纏う空気が、またしても一変する。穏やかなものから、凍て付いたものへと。それは殺気というものに違いない。相手を殺そう

とする意志の奔流。

セツナは、齒噛みした。体のどこかが震えている。恐怖だ。肉体が、先の一撃を思い出しているのだ。存在しない致命傷が脳裏を過ぎる。男の剣を受け止めるか、かわさなければ、その想像の産物が現実のものとなるだろう。剣の柄を両手で握りしめる。手の痺れは、まだわずかに残っていた。それが不安を煽った。問う。

「本気か？」

「いや嘘だ」

平然と言い放つなり、男は、剣をさつさと納めてしまった。

セツナは、茫然とした。きつと間の抜けた表情になったに違いない。

「は？」

「あれ」

「……？」

セツナが、男の指差す方向に目を向けると、岩石が乱立した大地の真ん中にラクサスとランカインが突っ立っていた。そして、ラクサスの足元に平身低頭しているものたちがいるのがわかる。野盗どもだろう。ランカインの圧倒的な暴れっぷりに怖れをなしたとしても、なんら不思議ではなかった。

男が、なんとも形容しようのない声で言ってきた。

「うちの頭が降参しちまったみたいだ。良かったな、少年。俺に殺されずに済んだぞ」

「あ、ああ……」

セツナは、男の言葉には納得しながらも、なにか釈然としないものを抱えたまま、剣を鞘に収めると、ラクサスの元に駆け寄った。

第五十八話 王都発、敵国行 狼煙を上げよと彼女は言った

夜空の大半を覆うのは、分厚い雲の群れだった。それはやがて雨を降らせ、この大地を塗り潰していくに違いない。闇夜においては偉大な光明たる月も星も、強大な勢力を誇る雲の支配下に置かれ、姿を隠してしまっていた。

闇は深く、風は冷たい。

風の勢いこそ弱くなってきたはいるものの、それも一時的なものかもしれない、雨とともに吹き荒ぶ可能性も十分に考えられた。

アザークの都市ワールムから北東へと伸びるワール街道からかなり離れた場所だった。ただっ広い平原を見渡すことはかなわぬが、馬車の周辺の地形が大きく変わっていることは認識できた。

ランカインの手斧の力が、地中から大小様々な岩石を噴出させたからだ。そして、それらのうちいくつかの岩に松明が突き立てられ、まるでなんらかの儀式の最中のような光景が展開されていた。

真ん中の岩に腰掛けているラクサスに向かって、大の男たちが平身低頭の限りを尽くしているのがまた、儀式的な雰囲気と拍車をかけていた。礼拝しているのか、説教でも聞いているのか。

実際は野盗の頭とその二十人以上の手下どもが、ラクサスに全身全霊で謝罪しているに過ぎない。

要するに命乞いである。

「みつともないつたらないなあ。俺はあんな大人にならないとたつたいま心に誓ったぞ」

「ええっ？」

セツナは、突然右隣から沸いてきた声に驚いて、間の抜けた顔になった。見ると、ついさつき殺しにかかってきた男が、平然とした様子で隣に突っ立っていた。

周囲に乱立する松明の炎のおかげで、男の姿がよく見える。やはり若い。もちろんセツナよりも年上だろうが、少なくともほかの野

盗たちよりはかなり若く見えた。見た目だけということはないだろう。声にも張りがあり、なにより言動が軽い。すべての若者が軽いということもないだろうが。黒髪黒目。革の衣服の上から外套を纏い、腰にはブロード・ソードを吊るしている。

「そこまで驚かなくてもいいだろう？ 命のやり取りをした仲じゃないか」

「命をやり取りした仲あ！？ そんな関係聞いたことねえよ！」

「はっはっは。細かいことは気にするな」

「……気にしてくれよ」

男の調子についていけず、セツナは脱力した。言葉を交わすだけで疲れるような相手と出会ったのは、この世界では初めてかもしれない。彼は、そんなことを思いながらラクサスに視線を戻した。岩石と松明の炎が織り成す幻想的な光景の中心。

セツナは、その中心からは離れた場所にいた。一度ラクサスに駆け寄ろうとしたものの、野盗たちがラクサスの前に集まってきたため、やむなく成り行きを見守ることにしたのだ。自分の背よりも高い岩石に背を預けて。

野盗のほとんどが、ラクサスの前に集まっていた。その場にいるのは、最初に馬車を覗き込み、ランカインに踏み台にされた男と、セツナに話しかけてきた男だけである。気絶中の男はともかく、ブロード・ソードの男は、一緒に平伏しなくていいのだろうか。

セツナが一瞥すると、彼は、こちらの意を察したのだろう。言い訳するでもなく、平然と言ってきた。

「俺はいいよ。遠慮しとく。惨めだし、格好悪いし、なにより柄じゃないし」

（そういう問題か？）

セツナは疑問に思ったが、口には出さなかった。野盗の仲間内の問題だ。どうでもいいことに違いなかったし、なにより、男に話しかけたくなかった。

手の痺れが、わずかに残っていた。青年の斬撃を弾き返した際の

衝撃が、痺れとなって疼いているのだ。それは意識的な行動ではなかった。無意識とっていい。だとすれば、これまでの戦闘の経験が彼の命を護ったのかもしれない。

矛を召喚し、その力を振るったのは、たったの五回だけだ。皇魔との戦闘が三度。ランカインと戦い、そして、初陣。それらの戦いの経験が彼を生かしたのだとしたら、それは、経験という糧がセツナの中で血肉となって息づいている証拠ではないのか。

(だと、いいけど……)

彼は、胸中で嘆息するようにつぶやいた。願望に過ぎない。歴戦の勇士からすれば取るに足らないほどの経験だろう。そんなものが、素人と玄人の差を埋める決定的なものにはならないことも承知している。そして、自分に圧倒的に足りないものも理解している。

(心・技・体……全部、足りないんだ)

無論、黒き矛を手によれば、それらの不足分を補って余りあるほどの力を発揮できるのだ。それは、彼のこれまでの戦いの結果が示している。何十という皇魔も、何百という死兵も、敵にはならなかった。

(でも、それじゃあ駄目なんだ)

セツナは、頭を振った。なにをそれだけ考えようと、自分の頭では明確な答えが見出せそうになかった。この場には相談するような相手もない。ラクサスならば話を聞いてくれるかも知らないが、いまは無理だった。

ラクサスは、風に揺れる数多の灯火の真ん中で、野盗の頭の口上に耳を傾けていた。それもかなりの長時間に渡って、だ。野盗がなにを話しているのか、セツナの位置からは少し聞き取り辛い。なにやら身の上話でもしているのか、足に縋りつくようにして言上する男に、ラクサスは、一々うなずいたりしてやっていた。その姿は、聖人君子を絵に書いたようだった。

そんなラクサスの背後では、ランカインがつまらなそうにあくびをしており、それだけがその名画の汚点だった。

「さてさて。どうなるのかねえ」

「殺しはしないさ」

「んなもん、わかるもんか！」

突然声を張り上げてきた男に対して、セツナは冷たいまなざしを向けた。男は、憤懣やるかたないといった表情でこちらを睨んでき
ていた。が、その声音や表情の割りに眼光は柔らかく、心の底から
怒っているわけではないと知れた。当然だろう。

セツナは、冷やかに目を細めた。

「俺の真似かよ」

「似てるだろ」

「似てねーよ」

「嘘だろ!？」

愕然とする男についていけず、セツナは、またしても脱力した。
全身から抜けていく力を押し留めることができない。ここまでする
と脱力させた隙を狙っているのではないかと疑うほどだったが、男
にそんな素振りはなかった。そして、こんな男と命のやり取りをし
てしまった自分に気恥ずかしさすら覚える。こんな適当な男に命の
危機を感じてしまったのだ。その事実が、彼の自尊心をひどく傷つ
けていた。

だからといって、隣に立つ男を無視することも出来ない。なぜか
はわからないが、黙殺は負けを認めるも同然のような気がした。ち
よつとした対抗意識の芽生えに気づきながらも、セツナにはそれを
どうすることもできない。

自分の感情ほどままならないものもなかった。

「あなた、本当に軽いな」

「ふふふ。雲のように軽い男リユージュとは俺のことだ」

「わけがわからん」

「君の名前はなにかね？」

「知りたいのか？」

「こうして宿命の好敵手と知り合えたのだ。名を知らずには居られ

「まい！」

びしつとこちらを指差した姿勢のまま断言してきたリユーグに
対し、セツナはそっぽを向いた。一瞬にして、対抗意識を持つこと
すら馬鹿馬鹿しくなったのだ。彼と張り合うだけ時間の無駄である
う。そんな簡単な事実ですら気づかなかった自分に腹が立つ。

「……なんかもういいや」

「すまん。教えてください。お願いします。一生のお願いなんです」
「……ニーウエ。ニーウエ」ディアブラス」

名乗ったのは、リユーグがラクサスに対する野盗の頭の態度よろ
に足に縋りついてきそうな勢이었다からだ。女性ならともかく、
男に縋りつかれたくはない。

「記憶した。ウエディだな」

「どんな略し方だ」

セツナは、彼の相手にするのも疲れていたが、投げやりながらも
突っ込んでおいた。

そうこうするうちに、ラクサスと野盗の頭の直談判は終わったよ
うだった。ラクサスの手を硬く握り締めた大男が、何度も何度も頭
を下げている姿が印象的だった。それを惨めだとは思わない。心で
すべてを失うよりは、恥を忍んで生きながらえるほうが余程良いと
セツナは思っていた。

死ねば、すべてを失うのだ。

セツナは、自分の手を見下ろした。この手でどれだけ命を奪っ
たのか。ただの一度戦場に立っただけで、数え切れないほどの人間
を手にかけている。この先、ひとの死をどれくらい積み重ねていく
のだろう。

軽い眩暈が、セツナを襲った。

「ニーウエ」

「……」

「ニーウエ！ こっちに来てくれ！」

「は、はい……」

セツナがラクサスに呼ばれて即座に反応できなかったのは、偽名で呼ばれたことだけが原因ではなかった。わずかばかりの思索が、彼の心を重くしていた。結果、反応が鈍くなり、ラクサスの声も耳に届かなかった。やれやれ。だれかが呆れたように首を左右に振った。リユーグだろうか。

セツナは、すぐさまラクサスの元に駆け寄った。平伏から解放された野盗どもが、ラクサスの周囲で口々にしゃべっている。ほっと胸を撫で下ろしているのだろう。こちらとしては最初から殺す気もなかったとはいえ、彼らにしてみれば殺されるかどうかの瀬戸際だったのだ。安堵のあまり泣き出す男がいたとしても不思議ではなかった。

ラクサスの元に辿り着くと、セツナは、野盗の頭を紹介された。

「彼はダグネ。アザーク北部を根城にしている野盗集団《銅の鍵》の頭領だ。そしてこちらはニーウエ＝ディアブラス。俺　わたしの部下だ」

「これはこれは、ニーウエの旦那。どうぞお見知りおきを」
ダグネは、セツナに対してさえ媚びへつらうように手を揉み、愛想笑いを浮かべてきたものの、刃物によるものであるう傷痕がいくつもある敵めしい顔が、そういった態度のすべてを台無しにした。渾身の愛想笑いが、全力の威嚇に感じられるというのは、一種の才能なのかもしれない。もちろん、そんな才能はだれも欲しないだろうが。

年齢は、四十代の半ばくらいだろうか。大男である。ごつい体が着込んだ筋肉という鎧の上から贅肉の衣を纏っており、その上から簡素な鎧を身につけているようだった。その巨体から考えれば、膂力だけならば、セツナは当然としてラクサスやランカインよりもありそうに思えた。野盗の集団を束ねる男だけあって、その眼にはただならぬものが宿っている。

セツナは、どういう表情で反応すればいいのかわからず、曖昧に対応するしかなかった。

「ど、どうも」

「それから、彼ら《銅の鍵》はわたしたちと行動をとにもすることになった」

「え……？」

セツナが驚きつつラクサスを見ると、「冗談を言っている様子もなかった。そもそも、ラクサスが冗談を言うなど想像もつかないことだ。生真面目な、騎士というイメージ通りの人格者というのが、セツナの印象だった。そして、それは今のところ外れてはいない。

つまり、本気なのだ。

セツナには、ただの野盗の集まりの癖に、《銅の鍵》などと恥づかしげもなく名乗る不埒な連中にどのような利用価値があるのかわからなかったが。

「ダグネの話によると、つい最近、ログナー国境付近の軍による検問所が大幅に強化されたらしい。鼠一匹通さないほどの体制だそう。このまま街道を進んでいく以上、検問所を避けることは出来ないうし、いまさら別の道を模索している場合でもない。そこで彼らの力を借りることにした」

「あつしらはここらで手に入れた商品をレコンダールで売りさばくつていうちんけな商売をしているもんで、ログナーの方々とは仲良くさせてもらわなきゃ、この時勢やっていけないでしょ？」

ダグネは妙にへりくだった口調ではあったものの、彼の言っていることはどう考えても犯罪行為そのものであり、それに関してなんの後ろめたさも感じていない口振りは、セツナに強い嫌悪感を抱かせるに至った。どんな理由があれ、街道に行く人々を襲い、荷駄を強奪するなど許されない。生きるためとはいえ、やっていいことと悪いことがあるはずだ。いやそもそも、生きるためというお題目を掲げれば、なにをしたって許されるというのか。

セツナは、心の中で強く頭を振った。

そんなことは断じてありえない。

生きるためだから仕方がなかった、という情けない言い訳してま

で己の為したことを正当化するなど、彼には到底できなかった。そうやって割り切ることが楽なのは知っているつもりだ。むしろ割り切らなければならぬのだらう。割り切れないからこそ、人一倍苦しみ、懊悩するのだ。

それはきつと、出口のない迷宮を堂々巡りしているだけだ。永久に答えなど見つからないのだらう。傷つき、疲れるだけかもしれない。

しかし、いまはそれでいいと想っていた。

いつか割り切れるようになったとしても、そのとき悩んだことは無駄にはならないはずだから。

「運が良かった。彼らのおかげでレコンダールまで直行できるだらう」

ラクサスが、ほっとしたように言った。野盗に襲われたことは不運に違いないが、それが幸運に転じるというのならそれもいいだらう。

セツナは、ダグネのような人間は受け入れられないものの、利用価値があることだけは認めることにした。彼らとこうして出遭わなければ、国境に直行し、検問所で引つかかっていたかもしれない。その場合、ラクサスはどうしたのだらうか。傭兵という言い分だけで通行許可が下りたのか、どうか。

「でも本当に行くんですかい？ そりゃあいま行けば、傭兵の働き口なんていくらでも見つかるとは思いますが、あまり薦められたもんじゃありませんぜ」

「おまえの話聞いて、より行く気になったのだからな」

「ええっ!? あっしの所為ですかい？」

ダグネの大袈裟すぎる驚きっぷりに、セツナは、苛立ちを隠せなかった。弱いものにはふんぞり返るくせに、自分より強い相手には媚びへつらい、常に顔色を窺ってご機嫌取りを欠かさない。そんな人間が大嫌いだ。まるで、昔の自分を見ているようだからに違いない、その事実を認めて、彼は苦い顔になった。もちろん、ふ

たりからは顔を背けている。

「おまえの話がなくても行く予定だったのだ。今更止めるつもりはない。帰る場所もないしな」

「い、いやあ……あれだけの力があるなら、どこにでも働き口は見つかりそうなもんですがね」

口調こそ慇懃で態度も今までと変わらなかつたが、その眼に鈍い光が過ぎつたのをセツナは見逃さなかつた。もつとも、だからどう、ということもないが。

「……そうだな。その気になれば仕官くらい容易いものさ。だが、仕官が目的ではないのではな」

「それじゃあ、なんのために傭兵なんて危ない仕事を？」

「戦うことでしか魂の充足を得られない、そんな人種もいるということだ。それがわかつたら、さつさと人数を纏める。わたしは気が短いんだ。早くしないと」

「へ、へえ！ わかりやした！」

ラクサスのただならぬ口振りに、ダグネは、血相を変えて飛んでいった。直後、怒鳴り散らすような大声が聞こえてきたが、それは彼が手下どもを纏めるために発したものだともて間違いない。

セツナは、野盗たちが慌しく動き回るのを横目で見ながら、ラクサスの耳に届くような声でつぶやいた。

「……めちゃくちゃ気長じゃないですか。あのひとの話、全部聞いてあげていましたし」

「あれはただの情報収集だよ。だが、聞いておいて正解だった」「？」

「ログナーがどういう状況なのかわかつたからな」

そういうと、ラクサスは馬車に向かって歩き出した。

セツナは、彼の後に続きながら周囲を見回した。ランカインを探したのだが、彼の姿はどこにも見当たらなかつた。勝手にこの場から離れ、どこかへ消え去ったということはないような気がした。確信はないが、そう思う。馬車の中にも戻ったのかも知れない。

背後で野盗たちが騒いでいる。岩石に設置した松明や、そこら中に放り出していた武器を回収しているのだろう。まるで祭りの後のようだ、と想わないこともなかった。

セツナは、ラクサスに問いかけた。

「ログナーの状況ですか？」

「移動中に話そう。随分と面倒なことになっている。が、これを好奇と考えることもできる。つまりは、そういうことだ」

なにがつまりなのかよくわからなかったが、セツナは、彼からの説明を待つことにした。

答えを焦っても仕方のないことだ。野盗たちが点呼を取る声を聞きながら、彼はラクサスとともに馬車に向かった。

「事が起こったのは、七月一日というから十日前になる。バルサー平原での戦いから二日後　ちょうど、君が意識を失っている間の出来事だな」

ラクサスが語り始めたのは、馬車が動きだしてからのことだ。

ランカインは案の定、馬車に乗り込んでいた。彼は荷物に寄りかかってより、身動きひとつしないところを見ると、眠りについたのかもしれない。

馬車の速度は、極めて遅い。野盗たちの歩調に合わせているからに他ならない。彼らはこの近くに根城を構えているらしく、全員分の馬を用意しているわけでも、集団で移動するための手段を持っているわけでもないというのだ。彼らの馬は、獲物を狩場まで追い立てるための最低限の数だけしかない。そのため、国境を越え、目的地に辿り着くまでは徒歩で移動するものがほとんどだった。

彼らの体力のことを考えると、馬車の速度を上げることはできなかった。

ラクサスが話を続けるため、口を開いた。

「アスタル＝ラナデイス将軍が、謀叛を起こした」

「……！」
セツナは、驚愕のあまり声すら出なかった。

第五十九話 義の所在

義とは、一体なんなのか。

アスタル「ラナデーイスの魂を揺さぶるのは、いつだってその問題だった。」

「キリル様はどうなされている？」

「陛下は自室に籠もったまま出てこられないそうです。食事もほとんど取られていないようで、このままでは健康を損ねられる怖れがある、ミルヒナ様が心配なされておりました」

「報告ご苦労。だが、キリル様は陛下ではない。この国の王は、エリウス陛下であらせられる。以降気をつけるように」

「し、失礼しました」

部下を下がらせると、彼女は、ひとりになったことを確認するでもなく、頭上を仰いだ。天井一面に、大いなる神とその御使いたちが降臨する様が幻想的な筆遣いで描かれており、この部屋を独特な雰囲気で包むことに成功していた。

神は、ヴァシユタラと呼ばれる。そのヴァシユタラの教えといわれるものこそが、大陸北部を支配するヴァシユタリアの教義である。ヴァシユタラはこの大陸でもっとも有名な神であり、ヴァシユタラ信仰は古くからこの大地に根付いていた。そして、ヴァシユタラの教えを根本とするヴァシユタリアは、大陸最大の宗教団体であり、大陸三大勢力の一角を成した。

ヴァシユタラとは世界の中心たる存在であり、万物は神の偉大な御心から生まれたものだというのが教義のひとつである。そして、万物の根本は愛であり、愛こそがこの世を動かす大いなる力だといふのだが。

アスタルがその教えを信じているわけではない。現在彼女が執務室代わりに使っているこの部屋は、本来、王宮に訪れた王侯貴族が様々な用途で使うための空間だった。天井一面の宗教画は彼女の趣

味ではなく、王宮を建築する際、設計を支持した王家の人間が欲したもののなるう。ヴァシユタラ信仰は大地に根付いたものであり、なにもヴァシユタリア独特の教えではなかった。ヴァシユタラを信仰しているからといって、ヴァシユタリアに属するわけではないのだ。

彼女がこの部屋を使っているのは、王宮の中で指示を下すに当たって都合のいい場所にあったからだ。二階にあり、部屋のすぐ手前には一階に下る階段と三階へ上る階段があるのだ。それだけでも機能的に思われた。

部屋の趣味で言えば、もっと質素で大人しい空間のほうが彼女には合っているのだが、だからといって天井の絵を塗り潰そうなどは想わなかった。

(……当然だな)

彼女が脳裏に浮かべたのは、キリル＝ログナーのことだ。いまや過去の王となった彼は、籠の中の鳥のように大人しくならざるを得まい。いや、飼われている小鳥よりも酷いものかもしれない。彼は、裏切りに遭ったのだ。

忠臣と信じていたであろう將軍に。

アスタル＝ラナディースに。

(義など、わたしのどこにある?)

彼女は、胸を締め付けるものの正体もわからず、その疼くような痛みにも、心の中でうめいた。

主君に反旗を翻すなど、不義の極みであろう。

だが、行動を起こさなければならなかった。いま行動を起こさなければ、座して滅びを待つようなものに違いなかったのだ。

滅びは、北と南から迫ってきていた。ザルワーンという恐るべき大勢力と、ガンディアというログナーと同程度の小さな国が、滅びを引き連れてこの国に押し寄せてくるのは時間の問題だった。

ログナーはかつてザルワーンの強大な武力に圧倒され、平伏し、許しを請うた。結果、ログナーはザルワーンの属国になったが、当

時のログナーの軍事力を考えれば仕方のない決断だった。英断という声も上がるかもしれない。抗すれば、徹底的に蹴散らされたのち、ログナーという国そのものが大陸の歴史から消滅していたかもしれない。

が、だからとってログナーに安穩たる平和が訪れることはなかった。

ザルワーンが、ログナーの国政に口を出すようになったのだ。属国の内政に干渉するなど、ザルワーンにしてみれば当然の権利と考えていたのかもしれない。外敵から庇護してあげるのだから我々の言うことを聞け、というのも無理からぬことだ。

ログナーがザルワーンの色に染まっていくのを、だれも止めることができなかった。

その結果として歪みひずみが生まれ、軍と王家の間に大きな溝が生まれってしまった。これまで多大な戦功を上げてきたはずのアスタル^{II}ラナディースを僻地へと追い遣り、失態続きのジオ^{II}ギルバースを戦線に復帰させたのがその好例であろう。だれもが啞然とするような人事は、ザルワーンから出向いてきていたヒース^{II}レルガという男が王に嘆願した成果だと言うが、その嘆願がザルワーンの代官という権力を背景にしている以上、それは半ば脅迫であり、王には逆らいうががないのも事実であった。

そして、復帰させたばかりのジオ^{II}ギルバースを総大将とし、バルサー要塞の指揮をも任せただ。

アスタルは、王に向かって叫びたかった。ガンディア侵攻軍の指揮がなぜジオ^{II}ギルバースなのか。この際、自分でもなくてもいい。ほかに適任のものがいれば、それでもよかったのだ。例えば、第一王子エリウスを総大将とするならば、多くの将士が全力を上げて王子の戦いを勝利に導こうとしただろう。王子に足りない部分を補おうと、いつになく力を合わせただろう。

しかし、彼女が叫び声をあげることはなかった。むしろ閉口せざるを得ない。

自尊心が、彼女に叫ぶことを許さなかった。

彼女はこれまで、だれよりも強い忠誠心を持ち、だれよりも多くの戦果を積み上げてきた。アスタル・ラナデースこそが、名実ともにログナーを代表する将であるのだれもが認めることだろう。

バルサー要塞を陥落したという自負もある。無論、それにはクオン・カミヤの出現という要素も多分に含まれているのだが、もしジオ・ギルバースが指揮を取っていたならば、要塞を陥落せしめることはできなかったというのが大方の見解であり、彼女も同様の見方をしていた。

それほどまでに、ジオ・ギルバースという男は拙かった。

ジオ・ギルバースは、ログナーでも有数の名門ギルバース家の一員として、鳴り物入りで軍に入ってきた男である。そして彼は、周囲の思惑と期待に応えるような活躍を続け、若くして將軍に抜擢された。それこそログナー国民全員の羨望と期待のまなざしを一身に浴び、栄光と名誉に満ちた燦然たる未来を約束されていたのだ。

だが、ジオ・ギルバースは、それらの期待を裏切り続けることになった。些細な失策から重大な失態まで、幾度とない失敗を繰り返した彼は、いつしか無能將軍などという陰口を叩かれるまでになっていた。將軍の重圧に耐えられなくなったのか、それとも、その姿こそが本来のジオ・ギルバースだったのか。あるいはその両方という可能性も考えられる。

ともかくも、国民や将兵からの信望を失い、陰口を叩かれるまでに落ちたジオ・ギルバースは、前線から外され、王都の防衛責任者などに任じられ、そのまま惨めな末路を辿っていくだろうとだれもが予想していた。

だれもが、彼が將軍として前線に返り咲くなどとは思っても見なかったし、ましてや酒色に溺れていたとはいえ、一国の王として頂点に立つべきものが、ジオのような愚物をガンディア侵攻軍の司令官に任命するとは考えられるはずもなかった。

ログナー国内にいただれもが、王のその判断に唾然とし、同時に

失意を絶望を抱いたことだろう。英断などではない。考えうる限り最悪の決断であり、暴挙であり、愚行の極みであった。

それでも、アスタル・ラナデイスは諦めていなかった。司令官としての権限を奪われようと、バルサー要塞から王都マイラムへの帰還を余儀なくされようと、決して王を恨まなかったし、侮蔑もしなかった。鉄の忠誠心が、彼女に動揺を許さなかった。もちろん、多少は想うこともあったし、部下たちの王への非難や抗議に対して、納得させるだけの答えも用意できなかった。ただ、王の決めたことだ、と繰り返すことしかできなかった。

そんな彼女にも、我慢の限度はある。

アスタル・ラナデイスがその二つ名の示すがままに戦場を飛翔するための両翼が、？ぎ取られてしまったのだ。

ジオ・ギルバースによって。

そのときばかりは、彼女も声を荒げて、王を罵倒したくなった。彼女が手塩にかけて育て上げたふたりの騎士の命が、無能な愚物によって危機に曝される。そう考えるだけで、彼女の胸は強く締め付けられた。

無論、ふたりの騎士以外の将兵がどうなってもいいわけではないが、それでも、自分が手ずから育て上げ、いまや彼女の戦場を彩るに相応しい騎士へと成長し、両翼とまで呼ばれる彼らが、無能將軍の描く無様な戦いの中で果てるなどあってはならないことだった。

そして、バルサー平原での戦いにログナー陣営が敗れ、要塞が奪還されたという報が届いたとき、彼女の心を辛くも抑えつけていた忠誠心という名の縛鎖が音を立てて崩れ去った。

敗報がアスタル・ラナデイスの耳に届いたのは、七月一日の明朝、まだ日も昇るか昇らないかの頃合だった。彼女は、王に謁見し私心を述べるため、その報の届く数日前から手勢五百を連れて王都マイラムに滞在しており、敗報に触れたのはちょうど謁見を予定していた日であった。

アスタル＝ラナディースは、夢の淵でまどろんでいるところを叩き起こされたものの、安眠を妨げられたことよりも、ジオ＝ギルバース率いる軍勢が大方の予想通り敗北しただけではなく、壊滅的な打撃を受け、散り散りになりながら撤退してきたのだという事実には憤りを覚えたのだった。

時が立つに連れて報告も増え、敗北の全容が明らかになっていったが、彼女はウェイン・ベルセイン＝テウロスとグラード＝クライドの生存が確認されるまで生きた心地がしなかった。もっとも、ふたりの生存が確認されたところで、喜ぶこともできなかったが。

六月二十九日、迫り来るガンディア軍を迎え撃つため、バルサー要塞を背後に展開したログナー軍の兵数は六千。総兵力が七千ということを考えると、ほぼ全力であり、総力戦と考えてもいいだろう。対するガンディア軍は凡そ五千であり、しかもルシオンとミオンの旗があつたという報告から、同盟国からの援軍を合わせてその程度ということ、総力ではなかったに違いない。

ベレルやアザーク方面への警戒に兵数を割かざるを得ないのが、ガンディアの弱みといえるだろう。もっとも、ルシオンとミオンの二国と同盟を結んでいる限り、三方のみに集中できるという考え方もあるにはあるが。

ザルワーンの武力を背景に総力戦に打って出ることができるログナーにとつて、ガンディアがこちらのみ注力することができないというのは、圧倒的な有利以外のなにもでもなかった。

兵数の差は、千。

勝てるはずの戦だった。

相手は、ガンディアの？うつけ？レオンガンド・レイ＝ガンディアなのだ。いままで実戦の経験はなく、指揮を取ったこともないという話だ。？白翁將軍？アルガザード＝バルガザールが控えていようと、司令官が無能ならば負けようがなかった。

が、こちらの指揮官が無能ならば、どうだろう。

彼は、野外での決戦に挑んだ。

兵力の差で圧倒しようとしたのか、なにか秘めたる策でもあったのか。どちらにせよ、愚行と断じざるを得ない。難攻不落と名高い事実、ログナーは長年攻めあぐねていた。バルサー要塞が手の中にあるのに、それを利用せずに戦うなど、彼女には考えられないことだった。

結果、千名以上に及ぶ兵士たちが戦場にその命を散らし、残る五千弱の兵士たちも命からがら逃げ帰るといった有様だったという。歴史的な大敗といってもいいだろう。

敗因のひとつはガンディアの用意した武装召喚師の驚異的な火力だったというが、だとしても、その武装召喚師に活躍の場を与えたのはジオ・ギルバースの采配であり、彼の愚かな指揮こそが大敗の最大の要因に違いなかった。そして、彼はその大敗の責任によって断罪されるべきであったが、彼が国境を越えたという報告はなかった。

ジオ・ギルバースの最後の姿を見たものによれば、ほとんど人員の残っていないバルサー要塞に向かって馬を走らせていたということであり、そのことから、彼は一旦要塞に戻り、戦線を立て直そうとしたのかもしれない。しかし、彼の後に続いてバルサー要塞に向かうものはだれひとりおらず、だれもが帰還するために国境を目指したという。

それには理由があった。

ジオ・ギルバースが要塞に向かっていた頃、要塞にはログナーではなくガンディアの旗が翻っていたというのだ。要するに、戦闘中に要塞が奪還されたということだ。そして生還した兵士たちには、要塞に戻ったところで要塞を奪還した部隊と平原に展開する部隊に挟撃され、撃滅されるのが見えていたということに相違ない。

野外での決戦を挑んだが故の大敗。

その決断を下したのはジオ・ギルバースであり、彼を指揮官に任じたのはキリル・レイ・ログナーだった。

七月一日。

その日の正午過ぎ、アスタル＝ラナデイスは、予定通りキリル王に謁見した。

王宮大広間には、キリル・レイ＝ログナーとアスタル＝ラナデイスの他にはだれもいなかった。内密の話がある、と彼女が人払いを望み、王がそれに応じたのだ。

ヴァシユタリア様式とも呼ばれる、繊細な色使いと大胆で巧緻な造りが特徴的な宗教画のような空間の中で、アスタル＝ラナデイスは、まじまじと玉座に座る主君の顔を見ていた。顔色を窺うというものではない。凝視に等しい。

かつて、英気滂刺という言葉がこれほど似合う人間がいるのかと思われるほど涼やかだった男も、いまやその面影を見出せぬほどに変わり果てていた。ザルワーンの圧倒的な力の前に頭を垂れて降伏してからというもの、彼は、酒色に溺れるようになっていた。王としての権限のほとんどをザルワーンの代官に奪われたことが原因だったのだろうし、その代官が酒や女を与えてくるというのものもあるだろう。

日に日に肥大していく王の姿を見るたびに、アスタルの胸は張り裂けそうになった。ザルワーンに隷属せざるを得なかったのは、兵力差を覆す見込みが立たなかったからであり、それは即ち、彼女ら将士の實力の無さの証明でもあった。もつと力があれば。寡兵で大軍を打ち破れるだけの采配を振るうことができたならば。

「話とはなんだ？」

キリルの問いに、アスタルは思索を打ち切ると、静かに口を開こうとした。その刹那に脳裏を渦巻いたのは、いくつもの情景だった。幻想的な光輝に満ちた数多の記憶。彼女の歴史であり、それはログナーにとっても栄光に満ちた日々であったはずだ。

それも今や昔。

「陛下。ギルバース將軍が敗れ、バルサー要塞が取り戻されたと」

「聞き及んでいる」

「ならば、すぐにでも対策をなさるべきです。要塞を奪還し自信をつけたガンディアの軍勢が、いつ攻め寄せてくるとも限りません。我が方は、千人もの兵を失ったのです。座して、情勢を見守っている余裕などありません」

「ザルワーンに援軍を要請するべきか」

「それもいいでしょう。ですが、ザルワーンの内情を鑑みるに、彼の国が援軍として差し向けることのできる兵力もたかが知れております」

「だが、失った兵力を補うには十分であろうか」

アスタルは、熱に浮かされたような王の顔を見据えたまま、その声音になんかの感情も籠もっていない事実には衝撃を受けていた。いや、苦心しているのはわかる。しかしそれは、ザルワーンに対してどのような態度で援軍を求めればいいのかといった苦悩であり、失策により数多の兵士を失ったことへの哀悼や後悔などではなかった。

これでは、ジョーギルバースの指揮の元死んでいったものたちがあまりにも哀れではないか。彼女は叫びたかった。しかし、叫んだところでどうしようもないのだろう。悲痛な魂の叫びを心に届けるには、王の脂肪は分厚くなりすぎている。

彼女は、目を細めた。疼く激情を抑え、冷徹に告げる。

「それならば、そもそもザルワーンの手を煩わせる必要はありません」

「手があるのか？」

「陛下の御決断次第でございます」

「わたしの決断……？」

キリルは、アスタルの考えが理解できないといった顔をしていた。アスタルは、その瞬間の王の表情のなんとも言えない愛嬌に過去の幻影を見出し、我を忘れかけた。キリルは、いつだってそうだった。相手の意見に真意が見えないとき、決まってそのような顔になった。そうすると、相手は、自分の意見をすべて明らかにせざるを得なく

なる。放っておけなくなるのだ。

しかし、今回は、心を動かされている場合ではなかった。冷やかに。極めて冷徹に振舞わなければならない。感情は不要。

アスタルは、キリルの目を見据えた。

「エリウス王子に譲位を。さすれば兵の士気は上がり、数倍の敵にも当たれましょう」

「な……！」

想像だにしなかったであろう言葉に、キリルは、声さえも失っていた。当然の反応。数秒は思考さえままならなかったかもしれない。だれであれ、そうなるだろう。一番に信を置くと公言していた将軍に譲位を迫られたのだ。相当な衝撃を受けたはずだ。キリルの心情は、察するに余りある。

だが、アスタルは、冷徹に続けるだけだった。

「民は貧困と圧政に苦しみ、兵は不満と不信に悶え、我らは苦悩と失意に苛まれております。それもこれも、すべては陛下の存在故」

「乱心したか！ アスタル！！ラナイース！」

蒼白になりながら憤怒に声を荒げるキリルの様子に、アスタルは、王としての威厳や光輝がとくに失われていたのだという事実を再認識しただけだった。同情も、それに類する数多の感情も、告げるべき言葉の前には霧散する。

「陛下が、我らの声に耳を傾けず、ザルワーンの代官如きの甘言に身も心も委ねられた以上、人心が王家より離れるは必定。されど、我らは王家のために命を尽くして戦ってまいりました。国が荒れ、民が嘆き、絶望の聲がログナーの大地に荒れ狂おうとも、我らは王家の剣と盾として戦線に立ち続けてまいりました。しかし、それだけではどうしようもないのです。我々が血を流し、命を散らせるだけでは……！」

「貴様！ 言うに事欠いてわたしが原因だというのか！ わたしがないを間違ったというのだ……！！ これまで、わたしは一度足りとも間違った選択をしたことはない！ ザルワーンに頭を垂れたのも、

この国を、民を護るためだ！　そして、頭を垂れた以上、這い蹲つても関係を維持しなければならぬ。なぜそれがわからんのだ！」
「五年前の降伏。それは問題ではありません。だれもがああ決断に喝采を送るでしょう」

王宮大広間に反響するほどの大声を上げてまで激昂するキリルを冷やかに見つめながら、アスタルは、言葉を続けた。

「ですが、時は流れ、状況は変わったのです」

「なっ……なんだおまえたちは!？」

キリルが喚いたのは、王宮大広間にアスタル配下の兵士が続々と侵入してきたからに他ならない。アスタルの予定とは少し違うが、誤差に過ぎなかった。さきほどのキリルの怒声に、兵士たちがアスタルの危機を感じて突入してきたのだろう。アスタルは部下たちに大広間でなにかあったときには突入せよ、と言い含めてあった。

「だれか！　だれかおらんのか！」

「残るは陛下おひとりでございます」

「……！」

アスタルの言葉は、死の宣告にも似ていた。既に王宮はアスタル側が制圧しているということであり、彼女が王に言つて人払いさせたことにより、キリルは完全な孤立に陥つたのだ。外からの助けを求めるのは不可能であり、また、キリルは己の力でこの状況を切り抜けられるような個人的武芸に優れた人間ではなかった。そもそも、戦うには肥大しすぎている。

「アスタル……アスタル!!　ラナデイスよ」

事態を把握したのだろう　キリルは、放心したように彼女の名を口にした。その巨体からは力が抜け、今にも崩れ落ちそうな危うさがあった。その目は、どこを見ているのか。

「おまえの本当の望みはなんだ……?　エリウスが即位したのち、実権を握ることか？」

「……！」

アスタルは、予想だにしない問いに全身から血の気が引くのを認

めた。それは彼女に対する侮辱以外のなにものでもなかった。私心などなかった。私利私欲があれば、ザルワーンの代官にでも取り入り、自分の立場をより強固にしていっただけだ。そうして、いつの日かこの国をも見限ってザルワーンの元へ走っただろう。だが、彼女をこの大地に存在させている根本がログナーへの忠誠心である以上、ザルワーンの代官如きに媚び諂うなどありえなかった。そして、己のために謀叛を起こすのならば、もっと地盤を固めてから行っただろう。

この謀叛は、衝動といっても過言ではなかった。

急激に冷えていく心が、キリルへのあらゆる感情から熱を奪い去っていく。手が震える。怒りではない。激情ではない。もっと暗く重くおぞましいなにかが、彼女の心の奥底で声を上げている。

不意に、ひとりの兵がアスタルの前に出た。エレニア・ディフォン。ログナーの騎士であり、アスタルの配下の中で頭角を現しつつある逸材だった。

「陛下はなにもわかっておられません！ アスタル様は権力など望んでいないのです！ 我々と同じように、この国のために想って……！」

「面白い冗談だ。国のため？ 民のため？ 兵のため？ すべては自分のためであろう？ 綺麗事ばかり言いよって……！ 貴様らは謀叛を起こしたのだぞ！ 大逆を！ 正義もなにもあったものではないわ！」

最後の力を振り絞って発したかのような叫び声は、アスタルの耳にはもはや雑音にしか聞こえなかった。もはや熱は奪い去られた。栄光に満ちた日々は幻想の彼方へと追い遣られ、目の前には取るに足らぬ愚物と成り果てたひとりの王がいるだけだった。

アスタルは、告げた。

「それが、どうしたのです」

「貴様……！」

「陛下はただ、王位をエリウス王子に譲ってくださいただそれだけで

良いのです。後のことは、新たな王と我々にお任せください」

その言葉が決め手となったわけでもないのだろうが、これ以降キリル・レイ＝ログナーが抵抗することはなかった。抗ったところでどうしようもないことがわかったのもあるだろう。そのころにはキリルは憔悴しきっていたが、多少の理性は残っていたはずであり、その理性が彼に教えたはずだった。

アスタルが王都に連れてきた五百人の手勢だけでは、王宮を制圧するのは難しい、と。それはつまり、アスタル側の王宮制圧に協力した人間がいるということに他ならない。そして、アスタルの人望の凄まじさを考えれば、王宮に勤める人間のほとんどが彼女に協力的であったとしてもなら不思議ではないという事実が、キリルに諦めを突きつけたのかもしれない。

果たして、アスタル＝ラナディースの謀叛は成功した。

キリルを退位させ、第一王子エリウスがログナーの新たな王となったのだ。

この報は、即座に国内各地に飛んだ。

新王エリウス・レイ＝ログナーの名は、多くの国民に吉報として受け取られた。これで国政が安定し、民が苦しまなくなるのではないか、という期待が民衆の間に生まれていた。ザルワーンに尻尾を振るのは仕方がないと諦めてはいたが、それでも、その負担が国民に重く押し掛かってくるのでは話が違うのだ。

国民を蔑ろにしてザルワーンに骨抜きにされたキリル王よりは、ザルワーンとの関わりが薄い王子の方が希望を持たた。

そして、アスタル＝ラナディース將軍ほどの人物が、みずから動かなければならなかったという事実にも多くの国民は衝撃を受け、アスタルに対して同情的だった。いや、彼女に対して同情的だったのは、以前からのことである。彼女ほどログナーのために働いている

ものはいないというのが世間一般の評価であつたにも拘らず、ジオ
＝ギルバースの台頭によつて中央から遠ざけられているという事実
と、その無能將軍にガンディア侵攻軍司令官の座を奪われたとい
うことが、国民が彼女を応援する動機になつていた。

無論、それはアスタル＝ラナディースの長年に渡る功績による
ところが大きく、彼女が大した結果も残していなければ、ここまで
同情を得られることはなかつただろう。

もちろん、反発もあつた。

いくら国民的人気のある將軍だからといって、すべての兵士、す
べての国民を掌握できるはずがなかつた。

アスタル＝ラナディースに反発したのは、ザルワーンとの繋がり
の深いものたちであり、それらの多くがジオ＝ギルバースの側近と
して振舞い、彼とともに栄光の将来を手にしようとした連中であつ
た。彼らが、ザルワーンを良く思わないアスタル＝ラナディースに
反発するのは当然だつた。

そして、反ラナディース派とでも言うべき彼らが、アスタル＝ラ
ナディースを討伐するために推戴したのが、第二王子アーレス・レ
ウス＝ログナーである。

アーレスは、ザルワーンにいた。第二王子である彼は、エリウス
が健在である以上は王位を継ぐことはできず、故に勉強に励みたい
とログナーを離れたのだ。ザルワーン的首都・龍府には、大国に相
応しく大きな学校があり、ログナーがザルワーンの属国になつたの
を期にその学校に通うようになっていた。

国政にはまったく関与していないアーレスではあつたが、無論、
ログナーのことを考えない日はなかつた。父が心労で倒れたりはし
ないか、母が寂しがつてはいないか、兄は今日もここにこしている
のだろうかと毎日のように考え、ログナー王家に仕えるオゼオン＝
ダナーに王宮の毎日の出来事を手紙にして寄越すよう頼んでいた。

アーレスが行動を起こしたのは、七月三日オゼオン＝ダナーから
届いた手紙にアスタル＝ラナディースが謀叛を起こしたという衝撃

的な情報と、それにより敬愛する父が退位を迫られたという事実が書き記されていたからだ。それだけではない。圧倒的な武力を背景に退位を迫ったアスタルⅡラナデイス將軍は、愛すべき兄エリウスを即位させると、エリウスを担ぎ上げて国政を支配したのだという。

彼の行動は迅速だった。龍府の中心たる五龍殿にてミレルバスⅡライバーンに面会、ログナーの現状を伝え、謀叛人アスタルⅡラナデイスとその一派を討伐するための軍を貸し与えて欲しいと直訴した。

ミレルバスは承諾すると、即刻グレイⅡバルゼルグ將軍と三千人の兵士を用意した。こうしてアーレスを総大将とする大軍がザルワンの首都・龍府を発つたのは七月四日のことである。翌五日にはログナー国境に至っているのだから、凄まじい行軍速度だといわざるを得ない。

アーレス軍がレコンダールに入ったのは、七月六日。

その朝には、アーレス率いるザルワンの大部隊がログナー国内に侵入してきたという情報は、アスタルⅡラナデイスの元に届いていた。

(やはりか……)

アスタルがその報告を聞いたとき、最初につぶやいたのがそれだった。予想できたことだ。家族への情が深く、王族としての誇りを片時も忘れないアーレスが、將軍の謀叛という事態になにも行動を起こさないということはありえない。

ザルワンの軍勢を引き連れてくるのも想定の内だ。ザルワンの猛将グレイⅡバルゼルグが出てきたのは計算外ではあったが、それも大きな問題にはならない。

報告によれば、総数三千の軍勢だという。相手にできない数では

ない。彼らは大義を掲げてくるのだろうが、こちらにも正義はある。もつとも、その正義の始まりが不義である以上、アーレスの掲げる大義に比べて暗い印象は拭えないが。

懸念すべきは、ザルワーン軍と戦っている最中他国の横槍が入らないかということだ。どれだけ戦局を有利に進めていようと、他の軍勢に攻め込まればすべてが水泡に帰す。国境を徹底的に封鎖し、情報の漏洩を防いでいる以上、ログナーの内情を察することはできないだろうが、安堵はできなかった。

ふと気配を感じて、アスタル・ラナデイスは、目を開いた。いつの間にか瞼を閉じていたらしい。深く考えるときの癖なのだ。子供の頃からよく注意されたものだが、直そうとして直るものでもなかった。

彼女の目の前には、ひとりの青年が立っていた。エリウス・レイ「ログナー」。近習のひとりも連れず、いかにもふらつと立ち寄ったという様子だった。

目元の涼やかな青年だった。気品がありながらそれを窮屈に感じさせない立ち居振る舞いは、彼独特のものかもしれない。常に微笑を湛えており、臣民の声によく耳を傾け、その意見が正しければ即座に採用するだけの度量があった。それは人々の意見の正否を判断できるだけの能力があるということに他ならないのだが、彼はそのことを誇るでもなく、むしろ謙遜していた。

それはかつてのキリルも同じであり、ログナー王家の伝統なのかもしれない。

「陛下。弟君と戦われる決意は持たれましたか？」

アスタルは、エリウスの穏やかな瞳を見つめながら問いかけた。アーレスもログナー王家の人間である以上、本来ならば戦う必要はない。彼の目的は恐らくアスタル一派の討伐であり、エリウスとの決戦ではないとみて間違いない。とはいえ、アスタルは戦わざるを得ない。彼らの目標が彼女自身である以上、剣を取って迎え撃たなければならぬ。

それに相手はザルワーンの軍勢である。ザルワーンの軍勢と戦い、打ち勝つということは内外にザルワーンの支配から脱却したという証明にもなるのだ。そしてそれをより強調するには、新王エリウスの意向であるほうが良かった。

「勝てますか？」

エリウスの質問は、いつも簡潔だった。そして柔らかで涼やかな物腰と丁寧な言葉遣いが、人々に意見を具申しやすいと感じさせる要因なのだろう。一方、ザルワーンの代官の言葉のみに耳を向けるようになったキリルからは人心が離れていた。人々がエリウスの王位継承に一縷の望みを見出だすのは、当然の帰結だった。

アスタル＝ラナデイスの謀叛が民衆にも受け入れられたのは、そういう背景もあった。

そして、アスタルは、実の弟と戦うことになるにも関わらず顔色ひとつ変えないエリウスに驚きを禁じ得なかった。エリウスを侮ったことなど一度もなかったが、かといってこれほど度胸が据わっているとは思っても見なかったのだ。アーレスが前線にでて来るとは到底考えられないが、その可能性も皆無ではない。場合によっては、アーレスが戦死するかもしれない。

だが、エリウスの表情はいつも通りの微笑があり、懊悩や苦心の影すら見当たらなかった。

「必ず勝ちます」

「そうですね。それならば構いません。あとはあなたに一任します」

「……お任せください」

アスタルの言葉を待ってか待たずか、エリウスがこちらに背を向けた。質素な出で立ちなのは、王子であったところからの慣習なのだろう。それに、王族だからといって豪華な衣服を身につける必要はないというのは、先王の頃から何度となく言われてきたことである。もっとも、昨今はザルワーンの代官の影響からか、美々しく着飾ることこそが正しいという風潮があったが。

エリウスは、子供の頃から質素で動きやすい服装を好んでおり、

それはいまも変わっていないようだった。

部屋を出る直前、彼はこちらを振り返り様にこう言ってきた。

「ところで、あなたはなにか迷っているのではありませんか？」

「え……？」

アスタルは、エリウスにそんな風に尋ねられて半ば茫然とした。予期せぬ問いかけに、多少の混乱が生じる。迷い。迷っているのか。迷っているのだとしたら、なにに迷っているのか。唐突な問いに、彼女の頭の中は空転した。なぜだろう。混乱を収束させる理屈が見当たらない。

こちらを見遣るエリウスのまなざしは、いつになく穏やかだった。

「この謀叛を起こしたこと、後悔しているのではありませんか？」

父キリルのことを想い、みずからの犯した罪に苛まれているのでは。あなたがそれではいけませんよ。あなたが旗を振ったのです。そのあなたが悩んでは、あなたを信じて付き従ってきたものたちが可哀想です。あなたは胸を張って先頭に立たなければなりません。己が正義を天に掲げ、前に進みなさい」

エリウスの柔らかかですべてを包み込むような声音は、アスタルの頭の中の混乱を少しづつ収束させていくようだった。その安堵は、まるで幼き日に父と戯れていたときのような、そんな感覚だった。

混乱が収まり、心の平衡を取り戻したアスタルは、自分よりも遙かに年下の若者であるはずのエリウスが、その精神性において自分よりも遙かな高みにあるのではないかと想うと同時に、己の不甲斐なさを恥じた。事を起こしたのは自分の意志だ。この国の行く末を憂う己が魂の命ずるままに行動したが故の結果なのだ。

義は、ここにある。

アスタルは、決然とエリウスを見つめた。もはや心は揺るがない。揺るぎようがない。王家への忠誠心を新たにしたのだ。この忠誠心がある限り、彼女はどのような状況でも戦い抜くことができるだろう。

すると、エリウスは、涼やかに笑って告げてきた。

「なに心配は要りませんよ。例えどのような結果になるうとも、最後に捧げられるべきはわたしの首なのですから」

第六十話 国境を越えて

アザークからログナーに至る道は、なにもひとつではない。しかし、ワールラムからログナーへと向かうのなら、ワール街道に沿って進むのがもつとも近く、比較的安全な旅路が約束された。

ワール街道のような人々の往来が激しい街道は、街道沿いの街や村が雇った傭兵や自警団が旅人を狙う野盗が出ないか、街道の様子を監視しているからだ。それだけではない。傭兵や自警団は、街道の周辺に皇魔わじまの巢が有るのか調査し、発見次第その巢を潰したり、あるいは手に負えなければ国に報告することも仕事のひとつであり、それにより旅の安全は飛躍的に向上した。

大きな街道ほど、人々は安心して旅を満喫することができるのだ。ワール街道も、安全を約束された街道だった。

「……そうか？」

セツナは、だれとはなしにつぶやいて首を傾げた。街道に刻まれた空疎な約束など、出立の日の夜から破られ続けている。一日目の夜は皇魔の群れに襲われ、二日目の夜は野盗の集団に襲われた。安全で快適な旅路なんて絵空事に過ぎないのではないかと想いながら、彼は、ゆっくりと伸びをした。

王都を発って三日目の朝。

空を覆う膨大な量の雲が、朝の始まりを告げるべき日の光さえこの大地から遠ざけていた。陽光の暖かさの代わりに降り注ぐのは痛いほどの冷気であり、セツナは、その寒さの中で肩を寄せ合って朝食にがついている野盗集団を一瞥すると、頭を振った。なにかがおかしい。なにかが間違っている。そんな気がしてならなかった。

セツナたちがいるのは、ワールラムより北へ走るワール街道の先、国境に聳えるクラムとアレムというふたつの山のうち、クラム山の麓だった。昨夜の間にここまで辿り着けたのは、野盗たちが懸命に走り抜いたからに他ならない。わずか三頭あまりの馬を二十八人の

野盜たちが入れ替わり立ち代わり使い回さざるを得ないのは、むしろ馬たちが可哀想に見えた。そんな中、ただひとりリユーグと名乗った青年だけが、顔色ひとつ変えず　汗は大量に流していたが仲間たちにくだらないう冗談を飛ばしては鬻蹙を買っていた。

山麓に到着したのは、ちょうど《銅の鍵》の連中が疲れ果てた頃合だった。セツナたち三人と御者だけを乗せた馬車が立ち止まると、野盜たちは不平不満を口にする元気もないといった有様でその場へたり込むと、そのまま寝入ってしまったのだ。それはやはりリユーグも同じだった。涼しい顔をしていても疲れは蓄積するものなだろう。

馬車を止めた場所は、街道から少し離れた地点である。さすがに街道のと真ん中で一夜を過ごすというわけにはいかない。天高く聳えるクラム山の麓には鬱蒼たる樹海が広がっており、セツナたちはその樹海の入りに口とでも言うべき場所で数時間ばかりの休息を取った。

セツナが目覚めたのは、つい三十分ほど前のことだ。なにやら空腹を刺激する匂いに鼻腔をくすぐられたからだ。匂いに釣られるように馬車から出ると、視界に飛び込んできたのは、御者のオリスン、バナックが大きな鍋でスープを煮込んでいる様子であり、カップとスプーンを手にした野盜たちが文句ひとつ言わず行儀よく並びという不思議な光景だった。

その列の中にラクサスとランカインの姿を発見したとき、セツナは思わず嘔き出しかけたが、それは自分も並ばなくてはならないという厳然たる現実の証明であり、その事実気づいたとき、彼は肩を落とすしかなかった。そしてセツナは、朝食を待つ列の最後尾に並び、なぜか給仕の真似事をしていたリユーグからスプーンとスープ皿を渡されたのだ。

「どうしたんだい？　ウエディ。なにやら浮かない顔をしているね」
「……これだけの量の食器、だれが用意したんだ？」

セツナは、御者特製スープの完成を今か今かと待ち構える野盜た

ちの顔に愛嬌を見出してしまったことに戸惑いながら、リユーグに問いかけた。鍋は、いい。バルガザール家の屋敷を出る前に積んだものだ。最初から、旅の合間にスープでも作る予定だったのだろう。しかし、そのとき用意した食器は、人数分となんらかの理由で紛失したときのための予備を含めた数だけだった。

「国家機密に関わる質問には答えられません！」

「なにが国家機密なんだよ」

「わたしはくしに関することすべしだが」

「あんたのことじゃねえよ。この食器とかの話」

「ああ。それなら、ほとんどが我々の私物なんですわねえ」

「マジで？」

「大マジ。野盗なんていう因果な商売をやっていますと、ほら、どこでなにが起きるかわからないでしょう？　そういうときのために、食器の類はいつも持ち歩いているんですわ。不信に感じなかったかね？　お馬様に括りつけた荷袋の大きさ。異常だろう？」

彼はどうにも芝居がかった口調でしゃべらないと気がすまないらしい上、身振り手振りも馬鹿馬鹿しいほどに大袈裟だったが、それはともかく、話してくれた内容は納得できる範囲のものではあった。もつとも、食器を優先的に持ち運ぶような野盗の話など聞いたこともないが。

（それをいったら、野盗なんて見たのは初めてだけどさ）

常識など通用しない世界だ。この世界の野盗は、食器と行動をとりにしているものなのかもしれない。食器とともに生き、食器とともに死ぬ。それもまたひとつの生き方なのかもしれない。そこまで考えて、彼は、リユーグに眼を向けた。

「いやそれはないだろ」

「うちらにはうちらのやり方があるってことですが、なにか？」

「いや……いいや」

「ふふん。うちの崇高な使命がわかったんなら、オリスン先生の特製スープの完成を心待ちにしているんだな！」

「使命つてなんだよ？ それになんであんたが偉そうなんだ……？」
セツナがリユーグを相手にしていても徒労を覚えるだけだという
真理を覚えた頃、オリスンの手作りスープが完成し、列に並んだ男
たちは待つてましたとばかりに喝采を上げたのだった。朝食はその
スープとパンの切れ端だけである。昨日のうちに買い込んだ食糧を
今朝の段階ですべて消費するなどということにならないために、小
さなパンをさらに小さく切り分けざるを得なかったが、樹海で取れ
たきのこなどの具がたくさん入ったスープは予想以上に量が多く、
パンが一切れでも十分に満足できるだけの朝食にはなっていた。

ラクサスがオリスン「バナツクにその手際とスープの出来を褒め
称えると、彼は感謝の言葉を述べたのみだった。みずからの腕を誇
るでもなく、恥じ入るでもなく。いつものように彼が愛してやまな
い馬の元へと戻っていったのだった。

朝食を済ませ、しばらくの休憩の後、一行は予定通り国境を目指
しての移動を再開した。

ワール街道は、ガンディア、アザーク、ログナーという三つの国
の領土を跨ぐように聳え立つクラム山と、その対を成すアレム山の
間を通っている。道幅は平原よりも極端に狭くなっているが、それ
は仕方のないことだ。ふたつの山の麓に広がる樹海を切り拓くだけ
でも相当な労力が必要だったのだろうし、道幅を広げるために山を
削ることまではできなかつたのかもしれない。

そして、その狭い道の途中で国境を越えることになる。

盗賊の話によると、ログナー軍の検問所はログナー領に入るなり
待ち構えているわけではなく、山間の道を通り抜けた先、街道を塞
ぐような形で存在しているという。かつては街道を遮ってはいても
通行人への検問も簡単なものであり、出入国は半ば自由に誓ったの
だが、アスタル「ラナディースによる謀叛が起きる直前から検問が
強化され、それに伴い人数も大幅に増員されらしい。

アスタル「ラナディースが事を起こす前に手配したのだろう。内
乱の情報が流出することを防ぎ、隣国の介入を阻止するためだ。そ

う考えると、現在検問所に詰めている兵士の多くがアスタル＝ラナ
デイスの息がかかっていると見るべきであり、《銅の鍵》頭領ダ
グネの手引きでも無事に通過できるのかわからなかった。

「連中、信用できるんですか？」

「できない」

「ええっ？」

ラクサスのにべもない一言にセツナが素っ頓狂な声をあげると、
ラクサスこそ驚いたような顔でこちらを見てきた。当然だとも言
いたげなまなざしには、普段のラクサスからは考えられないような
冷酷な一面が覗いた気がした。

「できるわけがないだろう。彼らはただの野盗だ。悪党外道以外の
なものでもない。己の命のためならなんだってするという類の連
中さ。そういったものたちの生存本能の前では、信用などという言
葉ほど虚しいものはない。しかし逆を言えば、こちらが上に立つて
さえいれば、懸命になって働くということでもある」

「まあ、そこには反論しませんが。検問を越えた後はどうされるの
です？」

「予定通りレコンダールに向かう」

「レコンダールは、グレイ＝バルゼルグ率いる三千の大部隊によつ
て占拠されているようですが？」

レコンダールは、ログナーの東部に位置する大都市である。ザル
ワーンとの国境からも近く、ランカインの言うようにザルワーンか
ら派遣された総数三千に及ぶ大軍が駐屯しているという。ダグネの
情報を信じるならばの話だが、こんなところに虚偽の情報を混ぜる
ことはないだろう。そんなことをすれば後にその事実が露呈したと
きどういふ報復をされるのかわかったものではない、ということく
らいは考えるだろう。昨夜の記憶はまだまだ新鮮に違いないのだ。

「だからこそ行くのさ。恐らく、我々の探し出すべき諜報員はレコ
ンダールにはいないだろう。だが、ザルワーンの部隊の真意は探っ
ておかなくてはならない。これはガンディアにとっても看過できな

「事態だ」

「真意つて……なんです？ 昨日の話じゃ、ザルワーンの目的はラナデイス一派の撲滅じゃなかったんですか？」

「騎士殿は、それを確かめる必要があると知っているのだよ。ザルワーンがラナデイスとエリウスを叩き潰し、アーレスに王位を継がせるつもりなのか。それとも、アーレスに嘆願されたため、仕方なく兵を派遣したのか。あるいはガンディア攻略さえ視界に捉えた上での派兵なのか。それによって我々の取るべき行動も変わってくる」

「……例えば？」

セツナは、いつにも増してしたり顔で講釈を垂れてくるランカインには冷ややかな半眼を浮かべるのみだった。考えの足らない自分のことを棚に上げているわけではない。セツンは自分の頭の弱さを十分に認識していたが、だからといってランカインのような男に敬意を払えるわけがなかった。もちろん、その頑なな考え方が良くないことも理解してはいる。理性と感情は別物なのだ。

もっとも、ランカインはこちらの感情など気に留めてもいないのだろうが。

「君が悪鬼の如く活躍する場面が出てくるかもしれないということだよ。矛がなければなにもできないニーウエ君」

「ぐぐぐ……」

どれだけ嫌味つたらしい言い方であろうとも、厳然たる事実の前では沈黙せざるを得ない。睨みつけるなど以ての外であり、セツナは、己が無力さを噛み締めながら頭上を仰いだのだった。馬車の天井を見上げたところで、そこに救いの神など見出せるはずもない。

セツナは、ランカインには口では勝てないことを認識するとともに自分の浅はかさに泣きたくなった。だからといって、ランカインに対する感情をどうすることもできない。カランを焼き尽くした猛火の記憶は、彼の頭の中で色褪せずには渦巻いている。

「さて、おしゃべりはここまでだ。後は彼らに任せよう」

ラクサスの一言で、作戦会議　　というほどのものではないが
は一先ず終了の運びとなった。

やがて、一台の幌馬車と三頭の馬、二十人以上の男からなる集団は、山間を通り抜けると街道を塞ぐ検問所に到達したが、その少し前から一行の様相は変化していた。先頭がセツナたちを乗せた幌馬車から馬上のダグネになり、その後ろを馬車とそれを取り囲む一団が続き、二頭の馬が殿を勤めている。言うなれば、幌馬車そのものが野盗集団《銅の鍵》の戦利品であり、ログナーで売り捌くための移送中という体であった。

当然、検問所ではログナーの兵士たちによる厳重な荷物検査が待ち構えていたが、しかし検査が実行に移されることはなかった。ダグネと検査に当たった兵士が、検問とは名ばかりの雑談を交わしただけである。

「どこの連中かと思ったら、おまえたちか」

馬車の中から聞いている限り、兵士は随分と気さくに話しかけていた。ダグネとは顔馴染みなのだろう。でなければ、ダグネも意気揚々と検問所を通過しようなどとはしないだろうが。

対するダグネも気楽なものである。

「へへ。いつものように頼みますぜ」

「いまはやめておいた方がいいと思うぞ？　　なんせ荒れてるからなあ」

「そうはいつでも、商品を入荷した以上、とつとと売り捌きたくなるのが人情というもんでございましょう？」

「商品……ねえ。今回はいつにも増して大物じゃないか」

そう言ったのは、別の兵士のようなだった。どうやらダグネたちが昵懇にしているのは、検問所の兵士のひとりやふたりではないらしい。

「特に馬がいいでしょう？　　高値で売れましようなあ」

「景気のいい話じゃないか」

「で、いくらだ？」

「売り上げの一割つてので、どうでしょう？」

「一割か……まあいいだろう。おまえたちのおかげでこっちも助かっている。だが、気をつけておけよ？　ログナーはいま、いつ戦争が始まってもおかしくない状況だからな。おまえたちが戦争に巻き込まれて命を落としてもしたら、こっちの商売も上がったんだ」

兵士のひとりが口にした商売という言葉が、セツナの心に引つかかった。兵士たちは、自分たちがなにをしているのか自覚しているのだろうか。自分たちの懐を潤すために職務を放棄し、外道に身を落としているという事実気づいているのだろうか。セツナは、彼らを軽蔑したが、かといって彼らのような人間がいなければこの方法は取れなかったのも事実であり、その事実がセツナの心を多少なりとも苦しめていた。

潔癖、というわけではない。しかし、野盗どもと通じているような輩よりは、己の職務に真摯に向き合う人間のほうがセツナの好みであった。そして、自分はそうありたいと想っている。

「へへっ、心に留めておきやす」

「ほら、さっさと行け。マイラムから来た連中が起きないうちにな」
「へい！」

そうして、セツナたちはログナーの検問所を通過することに成功した。拍子抜けするぐらいあっさり突破できたことに、馬車の中のだれもが口を閉ざしていた。問題はなにひとつ起きなかった。それは喜ぶべきことだろう。ダグネの言うとおり、馬車の中でじっとしているだけでよかったのだ。

これ以上にはないくらいに完璧な結果といえるのではないか。

馬車の中に満ちた沈黙は、その事実へのなんともいえない感情が原因だったのかもしれない。

「どうです？　旦那方。うちのやり方も捨てたもんじゃありませんよっ？」

ダグネが馬車の中に声をかけてきたのは、検問所を通過してしばらくした後のことだった。検問突破に成功した後、すぐにでも話し

かけたくてたまらなかつたに違いないのが、その声の調子でわかった。しかし、検問所の近くで声をかけるのは憚られたのだろう。

ラクサスが、外からの大声に嘆息したのがセツナにもわかった。

しかし、彼の返事は、そのうんざりしたような反応とはまったく別のものである。

優しいな声音だった。

「そうだな。ここまで上手くいったのも、すべておまえたちのおかげだ。ありがとう」

「そんな感謝されるようなことはしてませんよ！」

「そうそう、お頭に感謝したってなんの特にもならないですよ。感謝するなら俺にしてくださいな」

「リユージュ！ てめえはなんでいつだってそうなんだ！ す、すみません。こいつ、馬鹿なんで」

「お頭に言われたかないやい」

「てめえ、本気で殴るぞ」

「お頭の拳に当たるのは本物の馬鹿だけですわ」

「こ、こいつ……！」

「お、お頭、やめましよう。リユージュの相手をするだけ無駄ですよ」
「わかつてる。こんな奴に構ったって仕方がねえってことくらいわかつてるんだ！ だが、それでも俺は……！」

怒り心頭という言葉以外見当たらない様子のダグネには、セツナも心の底から同情せざるを得なかった。ダグネという男は嫌いなタイプではあるが、リユージュという存在感の前ではその印象も霞むだけだ。そして、ダグネの言いたいことも十分に理解できるのだ。リユージュに構ったところで意味がないことはわかつてはいても、なにかやり返さないと気が済まないのだ。

それは、リユージュという男が持つ天性の才能の為せる業なのかもしれない。

「騒々しい連中だ」

「あんたが言うなよ、あんたが」

「俺のどこが騒々しいというのかね？」

「いんや、別に」

セツナはランカインから目を逸らしながら、昨夜の戦いの最中に彼が発した哄笑を思い出していた。寒気がするほどの狂気を帯びた高笑い。ランカインこそ、ラクサスが言っていた「戦うことでしか魂の充足を得られない人種」という奴なのかもしれない。

だからといって、彼のことが理解できるわけでもない。

セツナは、その場に仰向けに転がると、馬車の揺れるままに身を任せた。馬の足音と車輪の奏でる旋律は、いつの間にか彼にとって心地の良い音色になっていた。

国境を越え、検問所を通過したとはいえ、レコンダールまでにはかなりの距離があった。到着までに一眠りくらいしても構わないだろう。セツナには、他にすることもないことも見当たらなかった。剣を握ったところで振り回せるわけもなく、ただ闇雲に振り回したところで剣術の腕が向上するはずもない。土台、無理な話なのだ。素人同然のセツナが剣を握ること自体が間違っている。

もちろん、ラクサスだってわかっていたはずだ。セツナがレオンガンドたちに言った話は聞いているのだ。それは、セツナが戦いとは無縁の世界から召喚された一般人であり、武装召喚師としての技術も不完全なら、戦闘技術に関してはまったくの素人に等しいというものである。セツナの武装召喚術など、ただ「武装召喚」と叫んでいるに過ぎない。呪文の詠唱もなければ、術式の構築もない。歪な力だ。

その力を使わなければ、セツナの実力など普通の学生に毛が生えた程度のもといわざるを得ない。

（無茶苦茶なんだよなあ……）

それは剣を渡される前からわかっていたことだ。

最初からなのだ。

レオンガンドに力を貸してほしいと頼まれたときから、無茶苦茶だったのだ。バルサー要塞を奪還するための大事な戦いである。負

けられない戦いだつたはずなのだ。そこにどこの馬の骨とも知れない、ましてやただの子供にしか見えないセツナを加えようなどと、普通の感覚では考えられないことだろう。ランカインを倒したとはいえ。

そして、この度の任務である。

ログナーに在るであろう諜報員に接触を図り、できればガンディアにともに帰還を果たす。漠然としたものだ。諜報員の名前さえも教えてもらえないのはどうということなだろう。あの場で明言することが憚られたのか、それとも、教えなくてもいいと判断されたのか。

どちらにせよ、そんな少ない情報の中からどうやって探し出して連絡を取れと言っただろうか。

（無茶苦茶なんだよ、結局）

結論が出た頃、緩やかな眠気がセツナの意識を包み込んでいった。

第六十一話 義と偽

「派手好きよね、ガンディアの国民って」

呆れたようできて感心したようなりノンクレアの言葉に、フアリアは、微笑を浮かべながらそちらを見た。ゆったりとした座席に腰掛けたリノンクレア・レーヴェルシオンは、馬車の外を流れる景色をどこか名残惜しそうに眺めていた。

生憎、空は曇っている。今にも雨が降り出しそうな気配が漂っているが、かといって王都に留まって出発を先延ばしにすることはできなかった。リノンクレアには、再三に渡ってルシオンへの帰国を促されており、それを宥め空かして今日まで引き伸ばしてきたのだ。さすがに限界だろう、というのがリノンクレアの感想であり、それにはフアリアも呆れながら同意せざるを得なかった。

リノンクレアがガンディオンの逗留を延長させたいという気持ちもわからないではない。自分の生まれ育った国、生まれ育った街なのだ。それも三年振りに訪れることができたという。郷愁に誘われるまま、帰国したくなくなるのもわからなくはなかった。もつとも、いまやルシオンの王子夫人として振舞うべきリノンクレアにそのような我侭が許されるわけもない。

「そうですね。でも、いいんじゃないですか？」

フアリアは、レオンガンドが用意した豪華な天蓋付きの馬車の乗り心地にうっとりとしながら、つい先ほどの光景を瞼の裏に浮かべた。獅子王宮前から王都南門まで続いた市民による見送りは、祝勝のお祭り騒ぎと同様かそれ以上に騒がしく、リノンクレアの人気の高さを伺わせた。彼女は王女であった時代から国民的に人気があったが、それは彼女自身が勇敢で、幾度となく戦場に立ち、国土防衛に従事してきたことと無関係ではないだろう。レオンガンドの不人気は、彼女の人気と比例するかのようでもあった。

かつてガンディアで一、二を争う人気者であった彼女がルシオン

の王子ハルベルク・レウス＝ルシオンに嫁いでから既に三年の月日が流れている。それでも、王都に住む市民たちにとって彼女はアイドルで在り続けていた。彼女の帰国を見送るために集まった市民の数でも理解できるというものだ。実に多くの市民が、リノンクレアとの別れを惜しんでいた。

「だれも悪いとはいってないわよ」

ふたりを乗せた馬車は、カール街道を南下している。王都ガンデイオンからクレブルルへと至るその街道の中ほどにカランの街があった。ランカインによって焼き尽くされた街は、未だに復興の目処は立っていないという。

もちろん、街道を進むのは馬車だけではない。リノンクレア配下の白聖騎士隊に所属する百名に及ぶ女性騎士と、彼女らの馬百頭、それにガンデイオンのお土産や様々な荷物とそれらを運ぶための人員を含め、ざっと二百名以上の大所帯になっており、リノンクレアが乗るために用意された豪華な馬車は、列のちょうど真ん中を進んでいた。

見るからに王侯貴族が乗っついていそうな馬車だ。白くも派手な外見はよく目立ち、敵に襲われたら真っ先に狙われそうではあった。もっとも、遠距離から狙撃でもされない限り、リノンクレアの身の安全はフェアリアが守り抜くのだが。

馬車を引いているのは彼女の愛馬エバーホワイトではなく、ガンディア側が用意した二頭の馬だった。エバーホワイトは、馬車のすぐ後ろに並んでいるはずである。

馬車の前方と後方を固める白聖騎士隊は、女性のみで構成される騎士隊であり、騎士団と呼ばないのは、ログナーの主力である白天騎士団に遠慮していることらしいのだが、フェアリアには詳しい話はないからなかった。女性騎士のみ、というのはリノンクレアの趣味であり、同時にハルベルク王子の趣味でもあるらしい。そして白聖騎士隊のおかげか、ログナーには軍に志願する女性が多く、続々と女の騎士が誕生しているという。

そうしてファリアの耳に飛び込んでくるのは。馬車の前方で隊伍を組む若い女性騎士たちの嬌声だった。

「少し、お話を伺ってもよろしいですか？」

「は、はあ、構いませんが……」

「セツナさんはどうして武装召喚師を志されたんですか？」

「好きな食べ物？」

「セツナさんはどういう女性が好みなんですか？」

「え？ い、いや、その……」

見目麗しい女性騎士たちに迫られてしどろもどろになったのは、黒髪の若者。ルウファであった。彼は、セツナ「カミヤ」として振舞う一方、リノンクレアの身辺警護のため、馬車の目の前を進んでいた。当然馬上であり、白聖騎士たちも同様である。

「あの連中、任務中だということを忘れてるわね」

「そうみたいです」

ファリアは、半眼で前方の女性騎士たちを一瞥したリノンクレアに同意した。賑やかな旅になりそうなのは最初からわかっていたことではあったが、想像以上の賑やかさがこの行列を包んでいた。

平和なものだ。

ファリアは、その穏やかな賑わいの中にあつて、セツナに申し訳ないと想わなくても良かった。彼はいま、異国の地で過酷な任務についていた。消息不明の諜報員と連絡を取るなど、前線に立つ武装召喚師がこなすべき任務ではないはずなのだが、王の命令は絶対である。セツナがレオンガンドに忠誠を誓った以上、従うしかないのだ。そして、それを外野がどうこういうのはお門違いに違いなかった。

「ファリアさんとはどのような御関係なんですか？」

「ぶっちゃけ恋人とかあ？」

「こ、こら、直球過ぎよ！」

「じゃあ、ファリアさんのどこが好きなんですかあ？」

「え、えーと……ファリアさ〜ん！」

麗しの女性騎士たちに囲まれて、まるで玩具のように扱われている現状に対して、ルウファは悲鳴を上げるしかなかったのだろう。彼とてバルガザール家の人間。幼少より女性と接する機会も多く、女性への免疫がないというわけでもないはずである。単純に、セツナとしての振舞い方がわからなかったただけなのか、それとも白聖騎士たちの迫力に気圧されただけなのか、馬車に揺られていたファリアには見当もつかないことだった。

「助けを求めてるわよ、彼」

「知りませんよ」

「あら、薄情ね」

多少驚いたような、それでいて予想通りとでも言いたげな表情を浮かべるリノンクレアに、ファリアは、憮然とした顔で告げた。

「わたしって以外とそういう女なんですよ」

「またまた。？彼？じゃないからでしょ？」

「はあ!？」

「？彼？に御執心だものね、ファリア」

殊更に？彼？という部分を強調してくるリノンクレアに、彼女は、そっぽを向いて態度で示すしかなかった。

「そんなことありません。すべてはわたしの使命のためです」

それは、本心であるはずだった。セツナに近づいたのは、ファリア＝ベルファリアという存在に課せられた使命を果たすための手段に過ぎないはずだった。彼が、アズマリシア＝アルテマックスの名を口にしたことで、彼女の運命は再び動き始めたのだ。しかし。

「使命のためね。だったら、こんなことまでする必要はないでしょう？ セツナ＝カミヤを監視下に置いておけばいいのだから、なにもこの国に協力する必要はないわ。《協会》の局員を辞めてまで彼の傍についてあげているのは、どういう理由からなのかしら？」

「それは……」

リノンクレアの悪戯っぽくも優しげな問いかけに、ファリアの思考は停止した。いや、むしろ加速したのかもしれない。頭の中

に混乱が生じ、そのわずかな暴走を食い止めるために意識が錯綜し、彼女の脳内の被害は甚大となった。

なぜだろう？

そう考えると、自分でも納得の行く答えが見つからなかったのだ。二百人以上の大行列は、一路、カランの街へと向かっていた。

グレイ＝バルゼルグ。

ザルワーンの近隣において、その名を知らぬものはいないというほどの猛将であるらしい。元は小国メリスオールの将であり、メリスオールがザルワーンとの戦いに敗れ併呑された後、敗戦の責任を取って自刃しようとしたところをザルワーンの将エイオン＝ヴリディアに説得され、ザルワーンに降ったという。

バルゼルグ將軍旗下の部隊は、ザルワーン最大の突破力を持った精鋭軍として有名であり、ザルワーンの陣容にバルゼルグ將軍部隊が確認されただけで、対峙する軍勢は戦意を喪失したという逸話すらあった。

そんな猛将が、前方に聳える城壁の向こう側にいるという事実には、セツナも不安を禁じ得なかった。歴戦の猛者という言葉すら生温いほどの人物だというランカインの言葉が、セツナの耳にこびりついている。

グレイ＝バルゼルグのことを語るときランカインのまなざしは、狂気と正気の狭間に憐れみとも嘲りともつかない色彩を浮かべていた。その不愉快な揺らめきがバルゼルグ將軍へのものなのか、それとも、彼の領域へと飛び込もうとする自分自身に対するものなのか。どちらにせよ、愉快なものでないことは間違いなかった。

暗澹たる想いを胸に、セツナは、頭上を仰いだ。曇天。少し前か

ら、小粒の雨が降り出していた。雨脚は遅いものの、止みそうな気配はない。彼は、ともかくも早く建物の中に入りたいとは思ったが、そのためにはレコンダールの門前を固める厳重な警備をなんとかしてやり過ぎさなくてはならない事実にはうんざりとしていた。

一行は、既にレコンダールを目視できる距離にいた。国境を越えてからも駆けつけてきたが、道中でもう一夜を過ぎさなければならなかった。国境からレコンダールまでの距離が遠すぎたのだ。途中サラミアという街があったが、その街を遠目に眺めながら通り過ぎていった。一部の連中による休憩の訴えはラクサスによって黙殺されている。

そして、結局途中で休むことになったのだから、街に寄ってもよかったのではないか？ というセツナの疑問は、先を急ぐという簡単な言葉で片付けられた。

レコンダールの城壁が見えた頃、野盗たちの顔からは血の気が失せ、疲労困憊といった有様であり、いつも軽口を叩いているリユーグすらたまにしか冗談を言わなくなっていた。それでもジョークを飛ばすのは、リユーグのリユーグたる所以としか考えられない。

セツナたちは、馬車を降りて、レコンダールの南門に向かっていく。都市を囲う堅固な城壁は、レコンダールが軍の拠点としても十分に機能することを証明しているかのようだった。そして、南門を警備する兵士たちの物々しさは、レコンダールという都市が城塞として半ば機能していることを示しているのかもしれない。

「で、どうするんです？」

「こういうときは正面突破するに限る」

雨に濡れながらそう言い放ってきたラクサスに、セツナは目を丸くして素っ頓狂な声を上げた。

「はあっ？」

ラクサスの判断に真っ先に反対しそうな野盗たちは、走りに行った疲労故か終始沈黙していた。リユーグだけが口を挟んできたが、それも他愛のない冗談に過ぎなかった。そうして、一行はレコンダ

ールの門前に向かった。

南門を警備しているのは、屈強な兵士たちであり、まるで今すぐにも出陣するかのような重装備だった。門前を固めるのは十人程度だったが、どうやら門の奥にも何人が控えているらしかった。どのような事態にも即座に対応できるように、ということかもしれない。

前方。兵士たちは、こちらに対して強く警戒している様子だった。約三十人の大所帯である。曇り空とはいえ、見晴らしのいい街道を進んできたのだ。遠方からゆっくりと近づいてくる集団を怪しまないはずがなかった。

「止まられいっ！」

声を張り上げてきたのは、仰々しく鎧を着込んだ警備兵の中にあつて、ひとりだけやたらと古めかしい甲冑に身を包んだ男だった。

年代ものを取り揃えましたと言わんがばかりのその姿は、自慢の鎧を身に付けているような兵士たちの中で、とにかく浮いていた。そしてその男の場合、甲冑を身に纏っているからといって決して強そうに見えないのが困りものだった。

声には張りがあるものの、若くはなかった。

とりあえず、セツナたちは、警告に従って足を止めた。レコンダールの大きな門の前だった。警備兵たちは、それぞれに得物を構え、いつでも攻撃に移れるような態勢を取っている。

大声を上げた男は、セツナたちとの距離を詰めると、またしても声を張り上げてきた。

「ここを何処と心得られる！ このレコンダールは、アーレス王子に接收された！ 何人たりとも通してはならぬとの仰せである！

押し通ろうとなさるのならば、このクレイグ・クラシオンがお相手仕りますぞ！」

「そつだそつだ！」

「さすがですぞ！ クレイグ殿！」

「さすがはクレイグ殿！」

男の大音声に励まされてか、警備兵たちがつぎつぎと声を上げてきた。しかし、その掛け声の内容はというと、クレイグとかいう男を称えるものであったり、ただの相槌であったり、適当にも程があるといいたくなるようなお粗末なものだったが。

もつとも、背後からの声援を受けた男は、まんざらでもないといった様子だった。彼は、声から見当をつけた通り、若い男ではなかった。五十代前半くらいだろうか。口元に蓄えた白い髭と、精悍なまなざしが特徴的だった。

セツナは、男の叫び声のうるささに思わず耳を押さえなくなったが、ぐつと堪えた。失礼という以前に、この状況では下手な反応は許されなかった。セツナのちょっとした失敗で、これまでのすべてが水泡と化すなど耐えられないことだった。それだけならばまだいいかもしれない。しかし、状況によってはそれだけでは済まなくなるのだ。

ここは敵国。

そして、命を賭けた任務の真つ只中である。
と。

「我々《銅の槌》は、逆賊アスタル＝ラナデイスを討伐するため、義を以て立たれたアーレス王子の国や民を想う心に胸を打たれ、少しでも力になりたいと参上した次第です。望むものはなにもありません。ただ、我らを戦線に加えていただきたいのです！」

(えっ!?)

ラクサスの台詞に、セツナは耳を疑った。あまりにもさらつと並べ立てられた嘘偽と欺瞞の呪文の如き言葉の羅列に、混乱さえしそうだった。ラクサスの迫真の演技は、隣で聞いているセツナでさえもはっとするほどのものだったのだ。どのような表情なのかは窺い知れないが、少なくとも声音に相応しい顔つきだったのだろう。ラクサスの声は、途中から震えていた。

セツナは、ラクサスがどこでそんな演技力を身に付けたのか気になったが、そんな些細な疑問は即座に吹き飛んでしまった。

「な、なんと……！」

クレイグが、雷にでも打たれたように声を震わせたのだ。セツナは、男が全身を震わせるのを見ていた。ラクサスのでたらめに感銘でも受けたのだろうか。目的を知っているセツナすら驚くほどの演技力である。なにも知らない相手ならば、ころつと騙せるものなのかもしれない。

「まさか、アーレス王子の義の志を受けて立ち上がるものが、我々以外にもいるとは……！ このクレイグ、クラシオン、感動いたしましたぞ！」

ラクサスが、感極まって涙さえ浮かべるクレイグの手を取って声を励ますように告げた。

「正義は常にひとつ。当然のことです……！」

「おお！ わかっておられますな。謀反を起こし、あまつさえ主君に譲位を迫るなど、人の道にももとる行為！ 悪逆非道とは正にこのこと！ ラナディースの家名に泥を塗るだけでは飽き足らず、ログナーの歴史に傷をつけるに等しい振る舞い！ これは許されざる所業ですぞ！」

クレイグは、バルゼルグ将軍がザルワーンから引き連れてきた兵士ではなく、ログナーの人間だったのだらう。その声音に秘められたアスタル、ラナディースへの怒りは、他国のものにとっては共有しがたいものに違いない。

「おお！ こうしてはおれん！ しばらくここでお待ちください。上に掛け合つて参ります！」

言うが早いか街の中に向かって駆け出したクレイグの背中を見遣りながら、セツナは、彼が門番を務めていてくれてよかったと心の底から想った。彼でなければ、こんなに簡単に行かなかつたのではないか。それは確信に近い。この国のことを愛して止まない彼だからこそ、ラクサスの言い分が通つたのだ。ザルワーンの間人相手には通用しないかもしれない。

「上手くいきましたな」

ランカインの呆れ果てたような声は、だれに対してのものであったのか。

第六十二話 欺と疑

「なにっ、真かつ！」

クレイグはクラシオンの報告を聞くなり、耳を覆いたくなるほどの大声で喜びを表したアーレス・レウスはログナーの感情の起伏の激しさに辟易したものの、グレイバルゼルグは、その些末な感情を表に出すことはなかった。きっとアーレスは目を輝かせているのだろう。確信にも似た予想とともに、ログナーの王子を振り返る。

アーレスは、二十歳そこそこの若者である。金髪碧眼。絵に描いたような貴公子だった。神経質そうな顔つきをしていた。もともとそれはアーレス生来のものでは無さそうだったが。

アスタル・ラナデイスが謀叛を起こし、エリウスが王位を継いだという衝撃的な報告以来、アーレスは変わったのだという。勉強にうつつを抜かし、ログナーを顧みようとしなかった己を恥じ、そして怒り狂った。もちろん、彼はいつだって祖国のことを案じていたし、臣下になにかあれば手紙を寄越すようにと申し付けてもいたらしい。だが、国外においては、なにもできないのも同じである。

彼は、余程堪えたのだろう。

ザルワーン国主ミレルバスはライバーンへの直訴など、普通では考えられないことだ。暴挙とも言える。それは、彼の精神状態が尋常ではなかったことの証明だった。

属国の政変とはいえ、通常ならばミレルバスがアーレスの相手をするとはなかったかもしれない。

アーレスが幸運だったのは、ミレルバスの手元の兵力に余裕があったことだ。

その兵力というのが、グレイバルゼルグであり、彼が手塩にかけて造り上げた最強部隊だった。直前まで相次ぐ内乱の鎮圧のため国内を飛び回っていたのだが、それらの戦いも終息し始めており、グレイは、みずからの部隊を首都・龍府にて休ませることを許され

ていた。

最強の部隊を遊ばせておく理由はない。グレイの部隊がログナーに派遣されることが決まったのは、ある意味当然の結果だった。そして、彼も不平ひとつもささない。メリスオールの民のためならば、どのような過酷な任務であろうとも完遂するしかなかった。

もつとも、今回の派兵に関する命令を聞く限りでは、そんな覚悟とは無縁のようだったが。

グレイは、アーレスのきらきらと輝く瞳からすぐさま目を逸らすと、アーレスの前で跪く男へと視線を移した。兜を脱いだクレイグの姿は、どことなく滑稽だった。その古びた鎧ではまともに戦うことなど夢のまた夢に違いない。

「はっ、はい！ 王子のお心に打たれ、馳せ参じるものが我々以外にも居たのでござりまする！」

「おおっ！ おおっ！」

アーレスが、クレイグの手を取って感激の意を示す様は、総大将の行動としては軽率に見えたが、グレイはなにも言わなかった。ザルワーンで対面して以来、彼の意見が聞き入れられた試しはない。そしてログナー入りの直後、一族郎党引き連れて馳せ参じたクレイグ、クラシオンの愛国心に感動したのだろう。アーレスは、クレイグを旧来の直参さながらに接していた。

「さっそく、逢おう！」

アーレスが、声を励まして言った。

グレイは、その重い口を開かなければならなかった。あまりにも軽すぎる。クレイグの報告だけでは、相手の素性もわかっていないのだ。クレイグ本人が舞い上がっているだけに過ぎない。そしてその熱は、瞬く間にアーレスに感染してしまったが、いまならばまだ重傷に至る前に治すこともできるだろう。熱に浮かされては冷静に判断することもままならない。

「殿下」

「なんだ？ 將軍」

アーレスが殊更に不機嫌そうな声を出したのは、これからというときに水を差されたからだろう。こちらに目を向けもしない。グレイは、しかし、顔色ひとつ変えずに告げた。

「軽拳は慎まれたほうがよろしいかと」

「軽拳？ なにが軽拳なものか！ わたしのために駆けつけてくれたというのだぞ？ 何年もこの国を離れていたわたしのために！」

「なにぶん素性もわからぬ相手。刺客という可能性も考えられましよう」

「ラナディースが刺客を放つものか」

「でしょうな」

忌々しそうに言い放ったアーレスに対して、グレイは一応同意を示したが、内心では別の考えも抱いていた。先王に忠の限りを尽くしてきたアスタル＝ラナディースほどの人物が謀叛を起こしたのだ。彼女の覚悟は、想像を絶するものであるはずだ。主君に反逆し、讓位を迫ったのだ。もはや手は汚れた。業を背負ったのだ。敵として立ち上がったアーレスに刺客を放つくらいは平然とできるのではないか。

もつとも、ラナディース側の動きを見る限りでは、こちらとの決戦に向けて戦備を整えている様子だったが。

それも信用できるものかどうか。

「しかし、ラナディースのみがこの状況を見ているわけではありませぬ。アザーク、ガンディア、ベレル、メレド 近隣の国々が、この情勢を座して見ているとは考えられませぬ」

「ラナディースの手のものが国境を封鎖しているという情報があるが？」

「それもどこまで効果があるのかわかったものではありません」

街道を封鎖するだけで情報の漏洩を防ぐことができれば、それほど楽なことはないだろう。実際には、そんなもので情報の拡散が防げるはずがなかった。事実、ラナディース謀叛の報は、ログナーの情報封鎖を飛び越えてザルワーンにいたアーレスの元に届いている。

完全に封鎖されていれば、アーレスがその事実を知ることにはなかったはずであり、グレイたちがこの地に来ることもなかっただろう。

近隣諸国がログナーの現状を知れば、どう出るか。

ログナーはいま、真つ二つに割れているようなものだ。

ひとつは、先王を排斥し、エリウスを新王として擁する一派である。アスタルⅡラナディース将軍の名声と人望は、反逆者としての暗ささえも掻き消してしまうほどのものであり、むしろこの謀叛によってログナーが新生すると信じさせるだけの迫力があつた。故に、彼女の下には何千という兵士が集い、国内が混乱することはなかったのだ。

もちろん、彼女に反発し、逆賊と断じるものたちもいる。その先頭に立つのがアーレス・レウスⅡログナーであり、彼はいまもログナーの第二王子であると言い放ち、父キリル・レイⅡログナーこそがこの国土の統治者であるのだと主張していた。そして逆臣アスタルⅡラナディースを誅伐するための軍を起こしたのだ。

かくしてログナーにはふたつの勢力が存在し、火花を散らして睨み合っていた。

そんな事態だ。いくらでも付け入る隙はあるだろうし、周辺諸国は、その好機を窺っていると考えておいて間違いはないだろう。

「だが……！」

こちらを振り返ってきたアーレスのまなざしには、さきほど垣間見たときとは違って多少の理性が認められた。熱は冷めていないようだったが、少なくとも冷静さを取り戻しかけているのはわかつた。「わたしが逢わねば、話になるまい。相手が刺客ならばなおさらだ。わたしはログナーの第二王子だぞ？ 逃げるわけにはいかないのだ」
「わかりました。そこまで言うのでしたら、わたしも同行させて頂きます」

グレイⅡバルゼルグは、そう告げると、アーレスの眼を見据えた。

セツナたちが、クレイグ「クラシオン」の案内でレコンダールの城門を潜り抜けることができたのは、あれから一時間ほど後のことだった。

その間、セツナたちは激しくなった雨に打たれ続けていたため、衣服はずぶ濡れになり、体も冷え切っていた。馬車は狭い。無理やり詰め込んだとしても十人前後しか乗り込めないのだ。そして、自分たちだけ馬車の中で雨露を凌ぐという選択肢はなかった。たとえば彼らがこちらに信服しておらず、いつ裏切られるのかわかったものではないにしても、わざわざ悪感情を煽る必要はない。

もつとも、

「いまさらそんなことをしたところで、どうなるものでもないでしょうに」

ランカインの呆れたようなつぶやきには、セツナとて同意せざるを得なかったが。

レコンダール市内には、城門の警備の嚴重さに見られるような緊張感はなく、むしろ緩慢な倦怠感さえ漂っていた。だらけきっているのだ。市内に無数に張り巡らされた路地には、ザルワーンの兵卒の姿が散見されたのだが、彼らはクレイグ「クラシオン」の姿を見つけると軽く会釈した程度で、そろそろと連れ立って歩くセツナたちに目もくれなかった。

クレイグが先頭に立っているとはいえ、見るからに怪しげな一団なのだ。気にも留めないというのはやる気がないという証拠なのかもしれない。しかし、それが兵士たちの本心なのかはわからない。降りしきる雨の所為かもしれないし、そう装っているだけかもしれない。

(なにせ敵陣だからな。用心しないと……)

セツナは、気を引き締めると、ログナー第二の都市レコンダール

の複雑な街並みを一応頭の中に叩き込んでいった。ここが戦場になるかもしれない。ラクサスが城門前でつぶやいた一言が、セツナの意識に緊迫感をもたらしていた。

やがてセツナたちは、クレイグ・クラシオンに先導されるがまま、レコンダールの北側に聳え立つ豪華な屋敷に辿り着いた。まるで宮殿のような屋敷には、レコンダールの城門よりも遥かに厳重な警備が敷かれており、警備に当たる兵士たちの意識も市内で見かけた兵士たちとは大きく異なっているようだった。その屋敷の中にいる人物が原因なのか、それとも、常に緊張感を持っていられるような兵士たちだけがこの屋敷の警備に当てられたのか。恐らくは前者だろうが。

セツナたちは、クレイグ・クラシオンに案内されるがままに邸内へと進んでいく間、警備兵たちの刃のように鋭い視線に曝され続けなければならなかった。武装した兵士たちの視線は鋭く、いかなる異変も見逃さまいとする意志が感じられた。中には剣の柄に手をかけているものもいたが、それも仕方のないことだろう。いくらクレイグ・クラシオンを落とすことに成功したとはいえ、傭兵気取りと野盗の集団であり、一目見れば胡散臭いと思わざるを得ないのだ。

ひとは見た目で判断してはいけない、というのは綺麗事に過ぎない。屋敷に入ることを許されたのは、全員ではなかった。ラクサスともうひとりだけ、というのが向こうの条件だった。当然の話かもしれない。約三十人の大所帯である。数が多すぎるのだ。それだけではない。相手がこちらを全面的に信用しているはずがなかった。当たり前だ。クレイグがラクサスの話に感動して、取り次いだだけなのだ。三十人もの見知らぬ相手と面会するのは、あまりにも危険だった。

「レックス殿、どなたを連れていかれますかな？」

「そうですね……」

クレイグに尋ねられると、ラクサスは、ひとりひとりの顔を覗き見るようにした。レックス・バルガス。それがラクサスの偽名であ

る。セツナは、レックスもバルガスも彼の本当の名前（ラクサス＝バルガザール）に似ているような気がしたが、ラクサスは別段気にもしていないようだった。そうそうばれるものでもないだろう、というラクサスの自信はどこから湧いてくるのだろうか。確かに、名前が少々似ているからといって露見するようなものでもないのだろうが。

セツナは、ファリアくらいには凝って欲しいものだと思わないでもなかった。

「ニーウエ、君にしよう」

「俺ですか？」

「ああ」

セツナは、ラクサスに見つめられて、きょとんとした。素直な反応だった。こういうときラクサスならば、しくじりそうもないランカインを選ぶと想ったのだ。セツナは、自分でいうのも変だが、まだまだ危なっかしいところも多く、こういう場面での選択肢としてはありえないような気がしてならないのだ。

「では、参りましょうか？」

「頼みます」

「こちらへ。殿下と将軍が首を長くしてお待ちになっておられます」
クレイグ＝クラシオンのその台詞に、セツナはラクサスと顔を合わせた。驚きが、ふたりに沈黙を強いた。これから面会する相手は、クレイグの上司どころではなかったのだ。アーレス＝ログナーとグレイ＝バルゼルグ。それは、このレコンダールを実質的に支配するふたりの人物だった。

さすがに予想外の事態であり、セツナは、緊張感が急速に高まるのを認めた。

「殿下と将軍がですか！？」

尋ねるラクサスの声の上擦っていたのは演技もあつたのだろうが、多少は本当の反応でもあつたのかもしれない。それくらいに驚くべき状況だった。たかが門番をしていた男なのだ。そんな男が、アー

レス、グレイと接点があり、彼らに掛け合うことができるなどと、だれが想像できるだろう。

「いかにも！ それが生が殿下に直訴致したところ、是非とも逢われないと申されたのです！」

クレイグが常にどこか誇らしげなのは、アーレスに直接進言できる立場にあるということが彼の心理に大きく影響しているのかもしれない。

「クレイグ「クラシオン！ 《銅の槌》のレックス「バルガス、ニールウエ」ディアブラスの両名とともに参りました！」

クレイグが大声を発したのは、屋敷の奥まったところにある応接室の扉の前だった。長い廊下を渡り、ようやく辿り着いたその部屋の扉はいかにも高級品といった風情があり、屋敷全体に漂う気品をまったく損なわない一品だった。

室内からの返答は、すぐにあった。

「入れ」

「失礼します」

クレイグ「クラシオンの骨ばった手が、扉を開く。

広い部屋の中には、ふたりの男が立っていた。ひとりには二十代の若者であり、前もって聞いていた話の限りでは彼がアーレス「ログナー」に違いない。王子というだけあって貴公子然とした青年だった。

もうひとりの男は、武人然とした巨漢だった。筋骨隆々。絵に書いたような大男であり、彼こそが将軍グレイ「バルゼルグ」に違いない。鬼のような、という形容詞がこれほど相応しい男もいないだろう。鍛え上げられた肉体も、形相も、セツナが出会っただれよりも恐ろしく研ぎ澄まされていた。

そして、その男の発するただならぬ気配は、セツナが寒気を覚え

るほどのものだった。威圧しているというわけでもあるまい。そんなことをするような小物が猛将などと恐れられるはずがなかった。

空気が、緊張している。

「待っていたぞ、レックス・バルガス。話はクレイグから聞いている。よく来てくれた。わたしは君たちのような義士の到来を待ち侘びていたのだ」

アーレスの鷹揚な態度は、王族として生まれ育ったもののみが持つ気品によって装飾されており、上に立つものとしての最低限の威厳が感じられた。もっとも、レオンガンドとは比べるべくもないというのが、率直なセツナの感想だったが。

若さが問題ではない。

レオンガンドも若い王ではあるのだ。しかし、アーレスとは違うなにかがレオンガンドにはあった。それがなんであるのか、セツナには、言葉で説明することはできなかったが、少なくともそのなにかが大きな魅力であることは間違いなかった。

「逆賊を討つために率先して立たれた殿下こそ、義士の中の義士であられましょう！ 我々は、殿下の御旗の下に集ったまで」

「君たちは行動を起こし、わたしの下に参集してくれたのであろう？ それを義拳と呼ばずになんとする？ わたしは感動しているのだ！ こんなに喜ばしいことはない！ そうであろう」

アーレスの力強い台詞は、セツナにある種の確信を抱かせるものだった。彼はラクサスを信じきっている。疑ってなどいないのだ。ラクサスの迫真の演技の為せる業なのか、それともアーレスの置かれている状況がこちらにとって有利に働いたのか、それはわからない。が、どちらにしても、いまのところは上手くいっているのだ。

セツナは、安堵したものの、表情には出さなかった。グレイ・バルゼルグの鋭いまなざしは、微妙な顔色の変化さえも見逃さまいとしている証明だった。

(ふむ)

ランカインは、人気の少ない通りを悠然と歩いていった。

いまのところ、ラクサスの策は上手くいっているといってもいいのだろう。クレイグ・クラシオンという老兵とアーレス・ログナーを騙せている以上、しばらくは持つはずだった。グレイ・バルゼルグ將軍の動向だけが気になったが、内に入り込んだ以上、露見を恐れるよりは行動しなければならなかった。

情報収集である。

なによりもザルワーンの真意を見抜かなければならなかった。彼らの目的がラナディース一派の討伐だけならばまだしも、ガンディア侵攻をも目論んでいるのならば、こちらも迅速に行動しなければならなくなる。

場合によっては諜報員に構っている場合ではなくなる可能性もあった。

そして、

(意気軒昂……というほどではないな)

市内を散策する間に把握したのは、それだった。

レコンダールを占拠してまだ十日も立っていないはずなのにも関わらず、兵士たちの士気は極めて低かった。天候の所為などではないだろう。雨が戦意を奪うのなら、それほど容易いことはない。単純に、彼らにやる気がないのだ。

城門や屋敷の警備をしていた連中と、市内をうろつく兵士たちの違いはなんなのか。クレイグ・クラシオンを筆頭とする警備兵たちの士気は高く、目にもうるさいほどだったが。

嗤う。

(哀れなバルゼルグ將軍の哀れな兵隊たちと、ログナーの人間の違い……か?)

ランカインは、目を細めた。哀れなグレイ「バルゼルグ。彼は、事の真相を知らぬまま、生涯を終えるに違いない。そして、そのほうが彼にとつては幸福なのだろう。故にこそ哀れだった。だからといって、グレイに真実を告げる必要性は感じられなかった。哀れな人形は、哀れにも踊り続けるのが相応しい。

天を仰ぐ。鉛色の空からは、絶え間なく雨が降り注いでいた。ランカインは、全身を濡らしていく雨の色彩に笑みを浮かべた。体は冷え切っている。しかし、心の奥底では、炎が渦巻いていた。紅蓮と燃える闘争本能。死地を求め、彷徨する魂の情動。

それは、劣情に似ていた。

ランカインは、ふと呪文を口ずさんでいる自分に気づいたものの、それを決して止めようとはしなかった。監視はとくに振り切っている。遠慮する必要はなかった。歌うように言葉を並べる。古き言葉。魔法の言葉。もつとも、結尾は口にしない。それは状況を最悪にしかねないのだ。

彼は、狂気と正気の狭間で、古代言語を歌い続けた。

やがて、夜が訪れた。

セツナたちは、アーレスたちが司令部とする屋敷に近い場所にある建物を宿舎として与えられていた。約三十人を押し込めるには少々狭かったが、文句を言っていない立場ではない。目的を達成することが肝要なのだ。

冷え切っていた身体を風呂で温め、それなりに豪勢な食事で空腹を満たした一行は、泥のように眠った。長旅による疲れもあったのだろうが、なにより、馬車の中や野外ではなく、建物の中という安心感が皆の眠気を刺激したに違いなかった。

馬車の中で睡眠を取ることのできたセツナでさえ、そうである。野宿するしかなかった野盗たちにとって見れば、この宿舎は樂園や天国のようなものだったのかもしれない。

「起きろ」

「ふえ？」

激しく揺り起こされて、セツナは、生返事を浮かべながら瞼を開いた。穏やかで懐かしい日々の夢から呼び戻されて、一瞬、怒りが生まれたがそれも即座に霧散する。淡い闇が視界を覆っていた。なにも見えない。静寂が世界を包んでいた。

判然としない意識の中、夢の国からの甘い誘惑を振り払うことは難しく、彼は再び目を閉じようとした。

もつとも、ラクサスの声がそれを許さなかったが。

「寝ている場合じゃない」

「ふぁい？」

「どうやら、包囲されたらしい」

「はあ？」

セツナは、ラクサスの言っていることの意味がわからず、寝惚け眼を擦りながら身体を起こした。視界は闇に閉ざされたままだったが、気配と物音でラクサスの居場所を探る。彼は、セツナが寝ているベッドの傍らに立ち、窓の外を眺めている様子だった。

窓の向こう側には、夜の闇が広がっているようにしか見えない。

ラクサスが皮肉げに笑った。

「ダグネたちが裏切ったということさ」

第六十三話 雷火、激しく

「カインの調べでは、ここの連中に長期戦の構えはないらしい。後続の部隊があるかまではわからなかったが、少なくともラナディーア將軍の討伐を目的とした軍勢ではあるようだ」

セツナは、ラクサスの話を聞きながら窓の外を覗いていた。セツナたちの部屋があるのは建物の三階であり、暗闇に慣れた眼は、ある程度の距離までなら見渡すことができた。夜空は厚い雲によって閉ざされ、月明かりも星々の輝きも地上を照らすことはかなわなかった。

月光の代わりに天より降り注ぐのは、大雨である。

朝方から降り続けていた雨は、時とともにその勢いを増し、いまや豪雨といっても過言ではないくらいになっていた。時折、雲の狭間に閃光が走り、雷鳴が天地を揺るがせるほどに響いた。雷雨。雨脚は、未だに強くなり続けている。

一瞬の雷光が夜の闇に浮かべるのは、眼下の道路という道路を埋め尽くす甲冑の群れであり、それらの鎧が稲光を反射して輝く恐ろしい光景だった。何十人、何百人では済まない数の武装した兵士が、セツナたちの宿舎を十重二十重に包囲している。

「……うわお」

おどけたようにいつてみたものの、セツナは、驚きのあまり半ば思考停止に陥ろうとしていた。なんとという数なのだろう。恐怖が、セツナの表情から血の気を奪う。初陣において六千という軍勢と対峙した記憶は、色褪せることなくセツナの脳裏に焼きついていたが、しかし状況が違った。晴れ渡った空の下で正面からぶつかり合った軍勢と、夜の闇に紛れるようにして蠢く無数の敵とでは、感じる怖さがまったく異なっていた。

静かに、ゆっくりと、その包囲陣を完成へと近づけていく敵軍の様子は、得体の知れぬ恐怖となつてセツナの意識を締め上げていく。

「未だに攻め寄せてこないところを見ると、我々を捕縛するつもり
のようだな。あちらにしてみれば、我々の正体が気になるのだろう」
「で、どうすんです？」

「当然、逃げるさ。捕まるわけにはいかない」

「でも、どうやって……？」

「なんとしても」

ラクサスの要領を得ない言葉に、セツナは半眼で彼を見た。闇に
慣れた眼は、影に浮かぶラクサスの輪郭を捉えている。鎧を着込み、
剣を携えた騎士の輪郭。勇ましく堂々としたものだった。その輪郭
さえも頼もしいのだ。

セツナは、不安が多少なりとも薄れたことを認めたものの、皮肉
を口にせざるを得なかった。

「行き当たりばったりってことですか？」

もつとも、ラクサスは取り合ってもくれなかったが。

「カインには、オリスンとともに馬車の確保に向かってもらった。

逃げ切るには足が必要だからな」

「ふたりだけで、だいじょうぶなんですか？」

「心配すべきはこちらのほうだろう？ 彼は自由だ」

「ああ……」

セツナは、ラクサスの台詞に納得した。ランカインの顔が脳裏を
過ぎる。鎖を外されて、己が本能の赴くままに暴れ回る狂気の殺戮
者を幻視する。闘争と破壊の権化たるあの男を自由にさせるなどあ
ってはならないことのように思えるのだが、かといってセツナに彼
の代わりが務まるはずもなければ、ラクサスに行かれるとセツナが
困るのだ。

ランカインとふたりで行動するのは、考えるだけでも嫌だった。

「当面は、君とわたしのふたりだけさ。心許ないな」

「ははは……」

ラクサスの嘆息するような言葉には、セツナも同意せざるを得な
い。例え鎧を着込み、剣を帯びても、それだけで心強く感じられる

はずがなかった。

敵の数は圧倒的であり、セツナは、黒き矛に頼ってはならないという条件がある。黒き矛の使い手がログナー国内に潜入していることが露見すれば、ガンディアがどういう目に遭うかわかったものではないのだ。無論、ガンディア軍もそう簡単に敗れはしないだろう。ログナーも手を出せる状況にはない。

しかし、万が一ということもある。

黒き矛の不在を伝え聞いたどこかの国が、ガンディアに攻め寄せないとも限らないのだ。わずかな可能性すらも排除しなければならぬ。

セツナは、そのために剣を握るのだ。体調は万全。右足の怪我もほとんど治りかけている。戦闘に支障がないほどには。

「だが、この程度、窮地ですらない。我々の真の目的地は王都マイラム。兵力も警戒も、こここの比ではないと考えるべきだ」

「こんなことくらいで弱音を吐いてちゃ駄目ってことですね」

「その通り」

ラクサスが、窓の外を覗いた。雷光とともに物凄まじい轟音が鳴り響き、宿舎が激しく揺れた。どこか近くに雷でも落ちたのかもしれない。

「さて。そろそろだな」

「はい？」

「ふたりが行動しやすいよう、目立たなくてはならない。ニーウエ、君の矛の力を借りよう」

「へ？」

ラクサスの予期せぬ言葉に、セツナは我ながら間の抜けた顔になったことを自覚した。

「君に聞いた話が本当なら、炎を吐き出せるのだろうか？ あの夜吸い込んだ炎のすべてを」

「エメリオンとロクサリアは無事でしょうか」

「あの二頭はだれが見ても欲しがらるほど優秀な馬だ。危害を加えるどころか、丁重に扱っていると見ていい。俺たちへの殺害許可は出ているかもしれないがな」

ランカインは、笑みをこぼした。血が滾っている。昂揚する意識が、全身のあらゆる感覚を肥大させ、さらに尖鋭化していく。重苦しい夜の闇も、凍てつくような風雨も、まばゆいばかりの雷光さえも、彼にとっては歓迎すべき事象だった。

ランカインとオリスンのふたりは、宿舎の外にいた。宿舎の北側の塀に隠れるようにしていた。数多に降り注ぐ大雨の中、傘もレインコートも身に付けず、寒さに体を震わせながら時が来るのを待っている。

息を潜めていると、塀の外を埋め尽くす兵士たちの靴音や、鎧が立てる金属音が、雨音の狭間に聞こえることがあった。兵士たちは愚痴ひとつこぼさず、粛々と、この宿舎の包囲を完全なものへと近づけようとしていた。宿舎近辺の通りという通りを兵士で埋め尽くし、どこにも逃げ出せないようにするつもりなのだろう。

「はあ……」

「ふふ。こういうときは笑うものだ。楽しかるう？ 生きるか死ぬかの瀬戸際。己の命の価値が試されているのだからな」

バルガザール家所有の二頭の馬は、一行が宿舎として与えられた建物の北にある馬小屋に繋ぎ止められているはずだった。幌馬車もそこで保管されているというのだが、実際はどうなのかわからない。馬のほうは、オリスンが日没まで面倒を見ていたこともあって、ほぼ確実にそこにいるだろうということだった。

最悪、馬車は放置せざるを得ないかもしれない。そうなった場合、二頭の馬に四人で分乗することになるのだが、エメリオンとロクサ

リアならば、大人ふたりくらい背に乗せることは容易いだろう。オリスは反対するかもしれないが。

ランカインは、手にした得物を見下ろした。斧頭に竜の頭部を模した装飾のある派手な手斧である。地竜父ちりゅうふといった。火竜娘かりゅうじょうと同じく彼の召喚武装であり、地竜父は大地を司る力を秘めていた。地震を起こし、地中の岩石を隆起させるといった小規模な災害にも等しいことができた。

これを使えば、宿舎を包囲する何百人というザルワーンの兵士と戦うこともできるだろう。しかし、それでは意味がない。無駄に命を散らすだけだ。多勢に無勢。相手は統率の取れた軍隊だ。しかも音に聞く猛将グレイバルゼルグ率いる精鋭部隊なのだ。野盗や皇魔とはわけが違う。

最初こそ、ランカインが優勢になるかもしれない。地竜父による地震攻撃は、奇襲に最適だろう。だが、その状況がいつまでも続くわけがなかった。

いずれ、押される。

(さあ、どうする?)

そんなことは決まりきっていた。こんなところで大軍相手に喧嘩を売る必要はないのだ。逃げてしまえばいい。投降など以外の外であり、そして闘争もまた愚の骨頂だった。逃げることこそが、いまのランカインたちにとって最良の選択なのだ。

そのためには足が必要だった。レコンダールの都市を駆け抜け、追撃部隊を振り切るだけの速度を持った足 馬が。

不意に、ランカインたちの背後で大きな音がした。天を割く雷鳴よりは小さく、兵士たちの足音より遙かに巨大な破壊音。なにが破壊されたのかはわからないが、それが宿舎に残ったふたりからの合図であることは間違いないかった。

熱風が、宿舎を振り返ろうとするランカインの頬を撫でた。堀の向こう側から兵士たちのどよめきが聞こえてきた。直後、彼の視界を紅蓮の炎が覆った。宿舎の中から噴き出した深紅の猛火は、三階

建ての建築物を瞬く間に飲み込んでいった。一瞬にして巨大な火柱が聳え立ち、宿舎の周囲は騒然となった。包囲陣が乱れたのか、怒号や罵声が響く。

激しい雨の中、炎の勢いは増すばかりだ。

「これは……」

「行くぞ」

ランカインは、炎と燃える宿舎に笑みを投げかけると、即座にオリソンを促した。宿舎の四方を囲う塀の外で兵士たちが慌しく動くのが想像できる。彼らは相当焦つたのだらう。宿舎の南側にある正門に人員を集め、強引に門を突破することにしたようだった。

その慌てっぷりを見る限り、彼らの目的がラクサスたちの確保だという予想はあながち間違っていないかつたようだ。

ランカインは口の端に笑みを浮かべると、塀の傍の木を攀じ登ると、太目の枝を伝うようにして塀に取り付いた。外を見遣ると、案の定、兵士たちの注意は紅蓮の宿舎へと集中している上、北側の兵士は少なくなっていた。

ランカインは用意していたロープの端をオリソンに投げて寄越すと、彼がロープを伝って登ってくるのを待った。北側の監視が弱まっている今が好機だった。馬小屋へと駆け込み、馬を奪取するのだ。馬車に関しては、そのときの状況によるとしか考えられなかったが。「で……ここからどうするんですか？」

なんとか塀の上まで辿り着いたといった様子のオリソンに対して、ランカインは、ただ微笑を浮かべた。狂つたような鮮烈な微笑み。「飛ぶのさ」

ランカインは、左腕をオリソンの腰に回すと、彼が驚くのも構わずに跳躍した。背後からの熱波が彼の飛躍を軽やかなものにする。それは気の所為ではない。燃え盛る紅蓮の炎が、ランカインの肉体を活性化させていた。視野は広がり、闇に蠢くすべてが見えた。路上の兵士たちのうち数名がこちらに気づいた。ランカインは喜んだ。精鋭中の精鋭ならば、そうでなくては。

ランカインは、着地と同時にオリスンを手離すと、即座に手斧を地面に叩きつけた。兵士たちが殺到してくるより遙かに速く。

アリスハウリング
「玄層息吹」

地竜父の秘められた力が解放され、周囲十数メートルの大地が震え出す。激しく、切なく、強烈に。

さすがの精兵たちも、突然の地震には為す術もなかったのだろう。転倒するものは多く、元より不完全極まりなかった陣形は無残なほどに崩壊した。そしてその陣形の綻びの中に逃走経路を見出して、ランカインは、背後を一瞥した。地震によって転倒したのは敵だけではない。オリスンもまた、ずぶ濡れの地面に這い蹲っていた。

「な、なんだ!？」

「なにが起きたんだ!」

「武装召喚師だ! 武装召喚師に違いない!」

「確保しろ! その男たちも奴らの仲間だ!」

口々に喚く兵士たちを尻目に、ランカインはオリスンを立ち上げさせた。地竜父の力による地震は、既に微弱なものへとなりつつあった。ザルワーンの兵士たちが驚き慄く様を眺めている暇はなかった。急がなければならぬ。陣形を立て直されれば、それこそすべてが無駄となる。ラクサスたちの陽動も、ランカインたちの行動も、水泡と化するのだ。

「行くぞ」

「は、はい」

ランカインは、オリスンの返事を待たずに駆け出していた。揺れは収まり、周囲の兵士たちが立ち直ろうとしている。が、それらには一瞥もくれないことなく、ランカインは己の網膜に焼きついた逃走経路のみを見ていた。オリスンの速度は気になるもの、速度を落として道を失うわけにもいかない。

「待てええええいつ!」

雨音さえ掻き消すほどの叫び声とともに、ひとりの兵士がランカインの視界に飛び込んできた。骨董品のような甲冑を身に付け、大

身の槍を携えた男。声からして若くはない。

ランカインはその甲冑には見覚えがあったが、特に気にも留めなかった。すぐに思い出せないということは、ランカインにとって重要な人物ではないということに違いなかった。

「よくも謀りおつたな！ アーレス殿下の御志を汚した罪、万死に値するっ！」

「言葉だけでは狗も殺せんよ」

ランカインは冷笑した。男の存在をまったく気にせず前進を続けていた。宿舎の近辺。調査の間に地形の把握は済ませている。宿舎の北に面した大きな通りの向こう側に目的の馬小屋がある。距離というほどのものもない。

「貴様！」

男の怒気を孕んだ大声は、耳障り以外のなにものでもなかった。まるで子犬がきゃんきゃんと泣き喚いているようで不愉快極まりなかった。

ランカインは、兜に隠れがちの男の眼を覗き見た。怒り狂う老人の瞳はあまりにも透明であり、そこに一切の不純物は見当たらない。主君への忠誠のみで立っているような男なのだろう。それ自体は素晴らしいことかもしれない。しかし、ランカインには理解のできない生き方には違いなかった。

彼は、男の眼を見据えた。問う。

「死ぬか？」

「ひっ……！」

ランカインの眼になにを見たのか。男が腰を抜かして動きを止めた瞬間、ランカインは、その男の目の前を擦り抜けるように通過した。後続のオリスンにしながら、速度を上げる。地鳴りは収まり、周囲の兵士が次々と体勢を立て直す。

が、時既に遅く、ランカインは馬小屋の手前に到達していた。雷光が、闇の中に馬小屋群を浮かび上がらせる。ザルワーン軍によって接收されたその施設は、バルゼルグ將軍旗下の部隊が用いる軍馬

によって占領されているといっても過言ではない。バルガザール家
所有の二頭の馬 エメリオンとロクサリアもその中に紛れている
のだろうか。

ランカインは、オリスンの無事を気配と足音で把握すると、後方
から迫り来る兵士たちの数に口を歪めた。心音が高鳴る。打ち付け
る豪雨と雷鳴と軍靴の旋律が、彼の心を昂ぶらせていく。足を止め
た。背後へと向き直る。眼前に物凄い形相のオリスン、その後方か
ら十数人の兵士たちが追ってくるのが見えた。

彼は、地竜父を軽く構えると、オリスンに聞こえるように告げた。
「先に行け」

「は、はい！」

ランカインは、オリスンの返事を待たずして手斧を振り被った。
オリスンが驚きながらもランカインの横を通り抜けていく。ザルワ
ーンの精兵たちが、吹き荒ぶ雨風の中を突き進んでくる。精鋭中の
精鋭。猛将グレイ＝バルゼルグによって鍛え上げられたザルワーン
最強の部隊。

心が躍った。

彼は、己の運命に感謝したい気分だった。ザルワーンに所属して
いたところは、バルゼルグ將軍の部隊と交戦するなど考えられないこ
とだった。

とはいえ、闘争を楽しむことは許されない。優先すべきは任務の
遂行であり、そのためにはこの包囲網から脱出しなければならぬ
のだ。

王命こそが、今の彼のすべてだった。

ランカインは、地竜父を足元の地面に叩きつけた。道路を砕く必
要はない。ただ、地竜父の力を大地に伝えればよかった。地竜父に
秘められたもうひとつの力。

彼は、告げた。
ブラックロック
「黒色岩舞」

地竜父が吼えた。手斧の刃から生じた力が、波紋となって水浸し

の地面を走る。大地が揺れ、水飛沫が上がった。敵兵の雄叫びが聞こえた。わずかな震動では、もはや兵士たちは動じないのかもしれない。ランカインは、嬉々とした。

さすがはバルゼルグ將軍が手塩にかけて育て上げた兵士たち。どのような事態にも即座に対応し、打開するよう訓練されているのだろう。

(いいな。素晴らしい。素敵だ)

バルゼルグ將軍の仕事振りとそれに応えている兵士たちを賛美しながら、ランカインは立ち上がった。敵兵の群れに背を向ける。

「虚仮威こけおどしだ！ かかれえっ！」

「おおおおっ！」

兵士たちの威勢の良さが、彼には眩しく感じられた。背後から殺到してくる無数の敵意も、いつになく心地良い。しかしそれもすぐに終わる。夢のような一時。堪能することは叶わない。

再び、地震が起きたのだ。さつきよるも激しい揺れと轟音は、地中より無数の岩石が隆起してくるとい証だった。それが、ランカインが《黒色岩舞ブラックロック》と名づけた地竜父の力である。

悲鳴が上がった。次々と噴出する大小無数の岩石が敵兵の群れを瞬く間に打ちのめし、無力化していったのだろう。振り返って確認するまでもない。ただの人間では、広範囲に渡って作用する力を避けきることなどできない。万が一、岩石を避けたものがいたとしても、岩石群に阻まれて接近もままならないはずだ。

周辺の街並みが大きく変わってしまっただろうが、気にする必要はない。

ランカインは、馬小屋に向かったオリソンを追いかけた。

直後。

「なんといいいますか、武装召喚師って敵に回したくないですなあ」「おまえか」

前方に佇む男を一瞥しても、ランカインは足を止めなかった。ブロード・ソードを構える男は、こちらの反応に対して冷ややかに目

を細めたようだったが。

男の名は、リユーグ。野盗集団《銅の鍵》の一員であり、くだらない冗談やつまらないことばかり口にする男。

彼は、剣の切っ先をこちらに突きつけてきた。鋭い剣気がランカインの頬を撫でる。ランカインは笑った。強い相手だ。刃を交えるに足る。

「行くぜ！」

リユーグの掛け声が、彼の耳朵に心地良いほどだった。

第六十四話 手を取るべきは

「武装召喚！」

セツナは、一般の武装召喚師にとっては呪文の結尾となるその言葉だけを口にした。ランカインのように複雑で長たらしい詠唱を必要としない原理はわからない。最初からだ。アズマリアールテーマックスに召喚されたときからそうだった。促された通り叫んだだけで、セツナの全身は光に包まれた。

体の表面に浮かび上がった光の模様は、さながら小さな魔方陣のようであり、その幾重もの線と円で描かれた紋様から発散した光は、闇に慣れた眼には痛いほどだった。一階中央に位置する部屋には窓がなく、召喚時の光が外に漏れることはないだろう。

もつとも、召喚時に気づかれなくとも、宿舎を焼き尽くすほどの炎を放ってしまったえば、結局はこちらに武装召喚師がいるという事実を相手方に知らしめるだけだと思わなくもなかったが、セツナはあえてなにも言わなかった。ランカインが武装召喚師だという情報は、ダグネたちによって伝えられているはずだ。その情報に武装召喚師がもうひとり加わるだけだ。

黒き矛の使い手がここにいるという事実さえ露見しなければいいのだ。

そして、セツナの全身から放散した光が、彼の掌の中で収斂し、黒き矛へとその姿を変えていく。漆黒の矛。悪魔的な禍々しさを誇る異形の矛は、いつものようにセツナの手によく馴染んでいた。

手に触れた瞬間だった。

黒き矛に秘められた膨大な力が奔流となって掌から腕を伝い、瞬間にセツナの全身へと行き渡った。破壊的な衝動が肉体を突き抜け、感覚が歪んだ。肥大し、尖鋭化した意識が、周囲の情報を明確に把握する。視野は広がり、この部屋の中のことは手に取るようになった。かすかな空気の動きも、ラクサスのわずかな息吹さえも、

拡張されたセツナの意識は捉えていた。

闇が闇ではなくなり、なにものも障害ではなくなる。宿舎の薄い壁も、降りしきる大雨も、天を閉ざす暗雲も、ただの情報に過ぎなくなる。閃光が瞼の裏に煌き、雷鳴が耳の奥で響いた。雨に濡れた道路を叩く軍靴の音が、戦場を彩るに相応しい旋律へと変動していくような錯覚。宿舎の外、壁の影に隠れる男たちの姿を幻視する。ランカインとオリスン。彼らの行動を援護するのが、セツナの役目だった。

セツナは、ゆっくりと息を吐いた。

「ふー……」

黒き矛を手にした瞬間に流れ込んでくるのは、きつと矛の力のすべてなどではないのだろう。確信にも似た恐ろしい考えを抱きながら、セツナは、そのわずかな力さえ扱いきれない自分の未熟さに腹が立った。

肥大した感覚は手に負えず、不要な情報さえも頭の中に叩き込んでくるのだ。それら無数の情報が、脳裏にこの戦場の風景を描き出してくれるのは非常にありがたいのだが、しかしあまりにも多い情報は、時として判断を鈍らせる材料になりかねないのではないか。とはいえ、矛を手にしている限りそんなことはありえないとも思う。

「ニーウエ、行けるか？」

ラクサスが心配そうな顔をしていたのは、セツナが黒き矛の力に飲まれかけたからに違いなかった。外から見てもわかるほどの変調だったのだろう。セツナは、ラクサスに心配をかけまいと、にこやかに笑って見せた。

「いつでもどうぞ」

「そうか。ならば、手筈通りに頼む」

「了解！」

セツナは威勢よくうなずくと、漆黒の矛を頭上に掲げた。切っ先を天井に向けながらラクサスの退避を待つ。陽動のためとはいえ、

ラクサスを巻き込むなど以ての外だった。セツナ自身は逃げる必要はない。黒き矛を握り締めている限り、矛から放たれた力がセツナに逆流してくるようなことはないはずだった。

ラクサスが窓際に到達したのを感覚だけで把握する。

セツナは、矛の柄を強く握った。念じる。力の解放。あの夜の光景が脳裏を巡った。皇魔ブリークの群れを相手に演じた大立ち回り。ブリークの放った雷球を跳ね返したがために草原は炎上したのだが、そのおかげで黒き矛は炎を蓄積することができた。そして、蓄積した炎を使う機会が訪れたのだ。

「矛よ！」

セツナの呼び声に応じるように矛が唸りを上げた。石突の宝玉が光を放ち、漆黒の矛の切っ先から炎が迸った。熱気がセツナの顔を撫で、汗が一気に噴き出す。矛から放出される真紅の猛火は、沈黙していた夜の闇を容易く焼き払い、静寂の世界の勢力圏を一瞬にして塗り替えていく。物凄まじい勢いで天井を突き破ると、そのさらに上の階の天井にまで到達し、周囲を瞬く間に紅く染めた。あっという間だった。破壊の奔流。紅蓮の業火が、セツナの想像を遙かに上回る速度と威力を以て、宿舎を焼き尽くしていく。

セツナは、我が目を疑うほどだった。凄まじい熱気の渦の中、全身から大量の汗が流れ落ちていく。しかし、宿舎の内側で燃え盛る炎がセツナに降りかかることはなかった。まるでセツナと黒き矛を恐れるように、彼の周囲だけは避けていた。

炎が、なにもかもを真っ赤に燃え上がらせていく。

蹂躪していく。

圧倒的な力の奔流の源で、セツナは、ただ怖れを抱いていた。

「セツナ！」

不意にラクサスの叫び声が聞こえた。余程慌てていたのか、偽名で呼ぶのを忘れていた。

セツナは、穂先からの炎の噴出が収まったのを認めると、即座にその場から離れようとした。だが、周囲は火の海だった。動きよう

がない。宿舎を焼き尽くす紅蓮の炎は、酸素をも急速に奪っていく。視界が、陽炎のように揺らめいていた。

セツナは、汗まみれの手で柄を握り締めると、覚悟を決めて炎の中に飛び込んでいった。黒き矛の力を信じた。過信ではない。信じることができなかったのだ。黒き矛の畏怖すべき強大な力を信じることで、セツナにできる唯一の行動だった。

肉体は、躍動する。

燃え盛る炎の渦の中を突き進み、ラクサスの気配へと直進する。壁もベッドも家具や調度品の類もすべて、黒き矛が放出した炎に飲まれ、赤々と燃え上がっていた。窓は開け放たれており、その向こうには大雨が降っていた。しかし、さすがの大雨も、この宿舎を包む業火をすぐさま制圧することはできないようだった。

セツナは、窓の外へと飛び出しながら一先ずの安堵を浮かべた。これだけの騒ぎを起こしたのだ。外の注意を引き付けるといふ役目は十二分に果たせただろう。降りしきる大雨が、熱を帯びた全身に優しくかった。着地する。

セツナは顔を上げると、視界の片隅にラクサスを確認し、ついで宿舎を包囲する兵士たちの間でどよめきが起きていることを把握した。無数の靴音が、一方に向かって移動を始めている。南側へ。この宿舎の正門を押さえようというのか。

「無事だったか」

「当然ですよ！ それに俺はニーウエーディアプラスです」

「あ、ああ。そうだったな」

面食らったようなラクサスの表情に、セツナは、笑顔を浮かべた。立ち上がり、手の内の得物を見下ろす。蓄積した炎を吐き出し尽くした黒き矛は、いつになく穏やかな表情をしているような気がする。きつと錯覚だ。

セツナは頭を振ると、黒き矛を頭上に放り投げた。矛は、無数の光の粒子となって散った。役目を終えた召喚武装は、本来在るべき世界へと帰還する。

名残惜しかったが、いまは黒き矛の力に頼ってばかりはいられなかった。腰に帯びた剣の柄に触れる。柄には、わずかばかりだが熱気が残っていた。

「あとは時間稼ぎっすね」

「ああ。やれるか？」

「やりますよ」

やらなくては始まらないのだ。

ともかくも、ランカインとオリソンのふたりが馬を取り戻し、合流するまでは時間を稼がなくてはならない。そのためには派手に暴れ回るのが一番だとラクサスは言っていたが、それだけの力量が自分にあるのか、セツナにはまったく自信が持てなかった。むしろ、無事に生き残ることだけを考えるべきではないのか。

宿舎を炎上させたことで注目を集めることには成功したのだ。その証拠に包囲網に変化が起きている。ならば、後はランカインたちが上手くやってくれることを願いながら、敵の攻撃を受けないように振舞えばいいのではないのか。

相手が、こちらを生かしたまま拘束するという大前提で行動しているのならば、なおさらだ。

もつとも、そんな考えに囚われていては失敗するだろうことは目に見えてはいたが。

セツナは、ラクサスの後に続いた。紅蓮の炎に包まれた宿舎は、まるで巨大な火柱であり、夜の闇を明るく照らし出していた。その光明を頼りに正門へと向かう。

激しい雨の中、それでも宿舎が鎮火する気配はない。

地面が揺れた。ただの地震などではないことは、そのわずかな震動の中に不愉快な力の波を見出したことで理解する。ランカインの気配。闘争の権化たる狂気の男だけが持つ、類を見ないほどに研ぎ澄まされた殺意の片鱗。

セツナは、寒気を覚えるのと同時に顔を歪ませた。しかし、ランカインの影に囚われている場合ではないと思いつくと、彼は、腰に

帯びた剣を抜いた。歴戦の戦士のようにすらりと抜くことはできなかったが。

違和感を覚える。

(なんだ?)

セツナは、右手にずっしりとした重みを感じながら、違和感の正体を探ろうとした。だが、それは叶わない。前方に宿舎の正門が見えてきていた。宿舎を包み込んだまま燃え盛る炎の輝きは、正門周辺を赤々と照らし出している。いや、それはもはや門などとは呼べないだろう。

激しく揺らめく火影の中、宿舎の南側に位置する正門は、なんらかの方法によつて破壊されていたのだ。原因は外部からの圧力以外に考えられず、事実無理やり開放された正門からは、無数の兵士たちが雪崩れ込んできていた。

ザルワーンの猛将グレイバルゼルグ旗下の屈強な兵士たちは、宿舎を焼き尽くす猛火の勢いには驚いている様子だったが、だれひとりとして怖気づいているようには見えなかった。冷雨の中、長時間待機し続けていたのだ。並大抵の精神力ではない。屋敷がひとつ燃え尽きたところで、恐怖など感じはしないのだろう。

すぐ目の前でラクサスが立ち止まった。

セツナもそれに倣つて足を止めると、剣を構えるため、柄を両手で握った。いつもと異なる感覚が、セツナの視界を広げている。それはまるで黒き矛を振り回しているときと同じ感覚だった。気力が充溢し、あらゆる感覚が冴え渡っている。乱舞する雨音と渦を巻く炎の旋律、閃光が脳裏を焼き、雷鳴が耳朶に突き刺さる。兵士たちの靴音が止まず、鎧同士の擦れる金属音が耳元で踊った。囁きが聞こえた。

「あのものどもを確保せよ。殿下の御命令である」

兵士がうなずき、包囲中の部隊に緊張が走るのが見取れた。宿舎の敷地内になだれ込んできた兵士たちが、それぞれに得物を構えた。多くが剣であり、近接戦闘に特化した部隊が突入してきたよう

だった。近距離での戦いならまだなんとかなるかもしれない。そんな淡い期待が、セツナの胸中に生じて消えた。そんな心境とは裏腹に、セツナの五感には兵士たちの動きを捕捉して離さない。

敷地内に突入してきた兵士の数はざっと三十人。しかし、その後方には数え切れないほどの兵士たちが控えており、さらに言えばここは敵地であった。兵士の補充など容易に違いはない。眼前の敵をいくら倒したところでできりが無いのだ。

だが、セツナは、兵士たちの拳動を見ていた。こちらに向かって進軍を始めた兵士たちの一挙手一投足が、セツナの瞼の裏を席卷していた。息吹が聞こえる。兵士ひとりひとりの鼓動が、セツナの意識に入り込んでくる。肥大しながらも尖鋭化した五感が、この場のあらゆる変化を見逃さない。

(行ける……！)

セツナは、双眸を見開いた。視野一杯に広がるのは戦場の景色。恐ろしくも狂おしいほどの昂揚感が、彼の意識を塗り潰していく。今なら行ける。彼は、確信とともに濡れた地面を蹴った。ラクサスが驚いたのを視界の端に捉え、密やかに笑う。驚くのも無理はない。セツナ自身が驚いていた。

しかし、驚愕が彼の行動を鈍らせることはなかった。肉体は地を離れている。飛躍。低空を滑るように飛んでいく。敵の元へ。距離は瞬く間に無へと帰し、兵士たちの姿が眼前に迫り来る。いや、近づいていつているのはセツナのほうだったが、セツナの視点からすれば敵陣が迫ってくるように感じられたのだ。

「来たぞ！ かかれ！」

部隊長と思しき男の号令が轟いたとき、セツナの肉体は既に敵陣の目の前にまで到達していた。兜の影に隠れた兵士たちの瞳が驚愕に見開かれたものの、それも一瞬にして消え失せた。代わりに現れたのは戦士の色彩。覚悟の音色。兵士たちの陣形が動き出す。が、こちらの速度に対応するには遅すぎた。

セツナは剣を振り被った。着地の寸前。敵陣の目前。接触の直前。

最前列の兵士のひとりに向かって、全力で振り下ろす。気合とともに。

「はあっ！」

セツナが振り下ろしたショート・ソードは兵士の兜に激突したが、兜を叩き切るという結果にはならなかった。跳ね返される。セツナの両手に衝撃が走ったが、大したことではない。剣が跳ね返された勢いに乗って、背後に飛び退きわずかに距離を開く。それは悪手。

セツナの頭も理解していた。だが、最初の一撃が阻まれた以上、その威勢に任せることはできない。兵士が崩れ落ちたのが視界に映った。脳震盪でも起こしたのかもしれない。兜は斬撃こそ防ぎきつたものの、剣の衝撃を殺すことはできなかったのだ。

右から伸びてきた剣は体を捌いてかわし、左上方から落ちてきた斬撃はショート・ソードの切っ先で受け流す。転倒した兵士を飛び越え、その勢いのまま襲い掛かってきた敵の力任せの一撃も軽く回避した。即座にカウンターの斬撃を叩き込むが、またしても鎧の厚い装甲に阻まれ、致命傷には至らない。

しかし。

(見える……！)

セツナは、視界の外に蠢く無数の敵の動きを把握していた。攻撃を避けられて驚くもの、次の攻撃に備えるもの、遠距離から援護できないかと思案するもの、後詰めのために集まるものども。それらの一挙手一投足が、セツナの脳裏の戦場を彩っていた。黒き矛を手にしているときと同様の感覚。つい先ほど黒き矛を召喚したことによる影響としか考えられない、

(だから、なんだよ?)

セツナは不敵に笑った。

だったら、それでいいじゃないか。

セツナは、黒き矛の力に頼れるものならば頼ろうと想った。なんとしてでも生き残らなければならぬ。敵は多勢、こちらは寡兵というのもおこがましいほどの戦力差だ。召喚武装の力に頼ってなに

が悪いというのだろう。もちろん、召喚はしない。が、それもいざとなればわかったものではない。理性の箍たがが外れれば、召喚してしまいかもしれない。

こんなところで死にたくなどないのだ。

剣を振るい、目の前の敵の剣を叩き落す。そして、即座に相手の側頭部にシヨート・ソードを叩きつけ、すぐさまその場を飛び退る。直後、寸前までセツナが立っていた場所に槍が突き刺さった。兵士の舌打ちが聞こえた。

セツナは鼻で笑った。同時に考えを改める。

(斬れないなら、無理に斬らなくていい)

殺せなくとも、無力化さえできればいいのだ。兜に強烈な衝撃を叩き込めば、気絶させることくらいはできるのだ。先の兵士のように、脳震盪を起こしてしまえば使い物にならなくなる。少なくともこの戦場に於いては。

「うるちよろしやがって！」

攻撃をかわされ続けて頭に来たのか、兵士のひとりが叫んできた。もちろん、セツナは知らぬ顔をした。こちらだって命がけなのだ。掠りたくもなかった。

数多に襲い来る斬撃を回避し、反撃に強力な一撃を叩き込んでいく。セツナの剣が閃くたびに、兵士がひとりまたひとりと崩れ落ちていった。

敵の攻勢が、わずかに止む。セツナの戦い振りに怖れをなしたというわけでもないのだろうか。

「なんだこいつ……！」

「気をつけるよ。普通じゃない」

「ただのガキかと思ったが、どうやら違うらしいな……」

「武装召喚師……！」

「まさか」

セツナは、口々に囁き合う兵士たちを一瞥しながら、状況がなにひとつ変わっていないことを確認した。彼の一撃によって昏倒した

兵士たちは、優に十人を超えている。だが、それだけだ。兵士がひとり戦闘から脱落するたびに新たな戦力が補充されており、敷地内の敵の数は減少するどころか、むしろ増加しているようだった。もっとも、いまのセツナにとって数は問題ではない。

気になるのは、ラクサスだった。セツナが敵の群れと格闘している最中、ラクサスもまた、別の場所で剣を振るっていたようだった。周囲を見回してわかったのは、ラクサスの足元に三人の兵士が倒れていたという事実だ。

やはり、強い。

セツナは、無用な心配をするのをやめると、地を蹴った。後方へと飛び退る。兵士たちの掛け声が響いた。閃光と雷鳴が落ちてくる。前方の鎧の群れが、雷光を反射して輝いたように見えた。敵兵は、セツナとの間に生まれかわずかな空白を埋めるために勢いよく飛び出してきた。彼は、足の爪先が地に着いた瞬間、再び跳躍した。前方へ。

「！？」

啞然とする兵士たちの頭上を飛び越え、その背後 敵陣の真っ只中に着地する。周囲四方の敵兵は、セツナの大胆というよりは無謀極まりない行動に驚きすぎたのか、反応が遅れた。その隙を見逃すセツナではなかった。眼前の兵士の兜を剣で殴りつけると、返す刃で左右の兵士にも打撃を叩き込み、飛び越えた兵士たちの背後を突くべく踵を返そうとした。が。

（あれ……？）

眩暈が、セツナの意識を揺らした。全身から急速に力が抜けていくのが、他人事のように理解できた。全身を躍動させていた圧倒的な活力が失われていく。残るのは、急激な運動で疲弊しきった未熟な男の体に過ぎない。両手の間から剣が滑り落ちた。雨に濡れた地面に剣が落ちて、小さな音を立てた。

セツナは、愕然とした。もはや兵士たちの囁きも聞こえなければ、戦場の景色が脳裏を彩ることもない。感覚が元に戻ったのだ。狭い

視野では、兵士ひとりひとりの動きを把握することなどできるはずがなかった。全身が悲鳴を上げている。それはそうだろう。あんな人間離れした運動についていけるほど鍛えてはいないのだ。自嘲する。調子に乗りすぎたのだ。

（俺はいつもこうだ）

力に振り回されている。

黒き矛の持つ圧倒的な力に触れば、だれでもそうならざるを得ないのかもしれないが、だとしても許されていいようなことではない。力を制御できていないのだ。力を使う己の意思を。

降り注ぐ雨の冷ややかさが、セツナを嘲笑うでもなく包み込んでいく。

周囲の兵士たちが、即座に手を出してこなかったのは不幸中の幸いだった。突然動かなくなったことに不審を抱いたのかもしれない。セツナは、いまはその兵士たちの慎重さに感謝したい気分だった、呼吸が荒い。手が震えている。動けやしない。

靴音が聞こえた。至近距離。兵士たちによる包囲が狭められている。元々、この兵士の群れの中に飛び込んだのはセツナ自身である。自分で自分の首を締め上げてしまったのだ。笑うに笑えない。

セツナは、やっとのことで剣を拾い上げることができた。しかし、いまの体力では手に持つだけで精一杯だった。振り回すことは愚か、相手に叩きつけるなどできるわけがなかった。呼吸を整えることさえできない。それだけ、さっきまでの運動が尋常なものではなかったのだが。

「ニーウエー！」

ラクサスの呼び声が遠い。兵士の群れが壁となって、近づくこともままならないのだろう。

セツナは、ラクサスには悪いことをしてしまったと反省していた。ラクサスの近くで戦っていれば、こんな事態には陥らなかつたはずなのだ。力に酔い、調子に乗ってしまったがために招いた窮地。自業自得に他ならない。

(全部、俺のせいだよ)

セツナは、自嘲するしかなかった。

周囲を取り囲んだ兵士たちは、一斉に剣の切っ先を突きつけてきた。武器を捨て、無駄な抵抗はやめるとでも言いたいのかもしれない。彼らは無言であり、沈黙こそが最大の武器だともいいたげだったが。

彼らの目的がセツナたちの確保であるならば、即刻殺されるといふことはないのだろうが、投降したところで身の安全が保障されるわけでもない。むしろ、情報を聞き出せるだけ聞き出した後に用済みと処分されるのが落ちだ。

かといって、暴れることはできない。押し潰されるように殺されるだろう。相手にしてみれば、セツナとラクサスのうち、どちらかひとりでも確保できればいいのだから。

(そうだな……)

セツナは、剣を鞘に収めた。ラクサスから頂いた代物をこんなところに捨てることはできない。

第一、諦めてはいないのだ。

戦うだけの体力はない。立ち向かうほどの気力もない。精も根も尽き果て、残っているのは生きたいという本能と、任務を遂行しなければならぬという使命感だけかもしれない。

それでも、セツナは諦めなかった。

ランカインたちに期待を寄せているというわけではない。

切り札がある。

ひとつだけ、この状況を打破し、逆転しうる切り札が残っていた。それを使うことは禁じられている。それはあまりにも有名になりすぎた。黒き矛。バルサー平原で千もの命を吸った魔性の矛。ガンデアの切り札。

聲が、聞こえた。

『我を呼べ。我が手を取れ。我が力を振るえ。我は無限の』

それがなんであるか、セツナは理解できなかった。ただ、心の奥底から響いてきた音色は、とてつもなく恐ろしげで圧倒的であり、破壊と殺戮の権化であるかのような響きを持ちながらも、どこか儂げだった。それに懐かしさがある。

そして、セツナは手を掲げた。

目の前の兵士が、びくりとした。

「う、動くな！」

「武装」

セツナは、呪文の末尾を紡ごうとしたが、それはできなかった。

雷鳴のような轟音とともに地面が激しく揺れ、セツナは、舌を噛んだのだ。口の中に広がる痛みに悶えるよりも、その場に踏ん張ることのほうが先決だった。しかし、あまりに苛烈な震動の前には、体力の残っていないセツナは無力に他ならなかった。転倒し、全身を強打する。だが、それは周囲の兵士たちも同じらしかった。

「な、なんだ!？」

「地震だと！」

「これはいつたい？」

口々に喚く兵士たちの様子から、彼らの混乱ぶりが窺える。立ち上がることさえままならないほどの地震だった。状況を把握することもできない。

なにかが崩れ落ちる音が響いた。宿舎だった。元より黒き矛の炎で焼き尽くされていたのだ。そこへ強烈な衝撃が加われれば、倒壊するのは当然といえた。火は、大雨によってほぼ消されていた。

宿舎の敷地内には、闇が帰還を果たそうとしていた。

セツナは、大地の揺れが中々収まらないことに違和感を覚えた。

無論、この地震が自然災害などではないことくらい百も承知である。ランカインの手斧の力だろう。これほど激しい地震が起こせるのは知らなかったが、他人の召喚武装の能力など知らなくて当たり前なのだ。

再び、地響きとともに轟音が鳴り響いた。大地が激しく震え、なにかが地中から迫りあがってくるような感覚がセツナを襲った。それは、宿舎の北側から迫ってきていた。

セツナが地に伏せたままそちらを見遣ると、地中からいくつもの巨大な岩盤が迫り上がっていくという神秘的な光景が展開されていた。

間違いなくランカインの仕業だった。

まるで岩盤で作り上げられた橋のようにも見えるその上を、ふたつの影が疾駆してくるのがセツナの眼に映った。地震は収まらない。正門目の地中からも岩盤が隆起し、巻き込まれた数人の兵士は、迫り上がる勢いで地面に振り落とされた。悲鳴が上がった。

セツナは視線を巡らせて、ラクサスの居場所を確認しようとしたが、だれもかれもが地に伏せているため見分けがつかなかった。

声が、頭上から降ってきた。

「ニーウエ！」

(え……?)

セツナが顔を上げると、頭上高く聳え立った岩盤からふたつの影が飛び降りてくるところだった。二頭の馬。そのうち一頭の馬上には、ランカインの姿があった。

馬がセツナの眼前に降り立つと、周囲の兵士が愕然とするのも尻目にこちらに駆け寄ってきた。馬の足が、地に這い蹲る兵士たちを踏み潰していく。

そして馬上のランカインが、セツナに向かって手を差し出してきた。

「掴まれ」

男の眼が、笑っているように見えた。なにを笑っているのだろう。この状況を楽しんでいるのだろうか。いや、楽しんでいるのだろうか。自由に力を振るえるこの状況を心の底から楽しんでいるのだろうか。闘争と殺戮と狂気の混在するこの戦場こそが、彼の呼吸する世界なのだ。

(俺は……)

セツナは、一瞬の躊躇いの後、残る力を振り絞ってランカインの手を掴んだ。

第六十五話 狗か鬼か

激しい雨の中を二頭の馬が疾駆していた。エメリオンとロクサリア。バルガザール家の所有する二頭の馬は、その雄々しい外見から想像できる通り鍛え抜かれており、雨に濡れた道路も問題なく疾駆した。ただの馬車馬ではなく、訓練された軍馬なのだ。しかも、二頭の馬が受けたのは並大抵の調教ではないようだった。

道という道を埋め尽くすザルワーンの兵士の群れの中を、まったく怖じることなく翔ぶように駆け抜けていく。武器を構え、敵意の籠もった切っ先を突きつけてくる集団をむしろ圧倒しながら前進する。無論、ランカインもただ手綱を握っているだけではない。手にした片手斧を振り回して敵の攻撃を弾き返し、時には馬上から身を乗り出し地面に叩きつけることで小規模な地震を起こした。地震に足を取られた兵士の群れの間隙を、二頭の馬は縫うように走り抜けていく。

もちろん、ザルワーンの精兵たちが油断したわけもなければ、ただ一行が通り過ぎるのを見守っていたわけではない。進路を阻もうと動いてたのだが、こちらの勢いがそれを凌駕していた。

だれにも止めることはできない。

「で、これからどうすんだ？」

「さあな」

ランカインは、背中越しの問いかけに対してぶっきらぼうに答えた。怒声と罵声が飛び交い、悲鳴と雷鳴が交錯する狂乱の戦場を駆け抜ける最中、少年の声は、その甘美な音色を掻き乱す不協和音にしかならなかった。

鳴り止まぬ拍手と歓声に水を差された気分になったものの、彼は、そういった一時の感情に囚われるつもりもなかった。常に全周囲を警戒し、敵陣に不穏な動きがないかどうか確認しておかなければならない。ザルワーン兵の多くが近接戦闘に特化した装備であったと

しても、弓兵がいはいはがなかつた。

無論、この風雨だ。そして闇夜でもある。

敵陣の中を突っ切つて疾駆する二頭の馬だけを狙撃するには相当な腕が必要だつた。間違つて味方に当てるわけにはいかないのだ。ならばと現在の嚴重極まりない包圍網を解いて、弓兵の狙撃だけに期待していいものかどうか。

ランカインならば包圍をより嚴重かつ強固なものにしつても進路上に狙撃地点でも用意するのだが、この混乱の中でその目論見が上手くいくかは彼にもわからなかつた。

「さあな、つておい！」

「騒ぐな。すべて、合流してからだ」

「合流……つて？」

「移動に馬車は必要だろう？」

ランカインは当然のように告げると、右手の地竜父ちりゅうふを軽く振り下ろした。右前方から伸びてきた槍を叩き落し、ついでに斧頭で手近の兵士を殴打する。激しい金属音とともに十分な手応えが、彼の掌から腕を伝わつて全身を震わせた。それは愉悦だつた。

「そりゃあそうだけど。でも、どうやつて？」

「レコンダールの北門で待っている」

「馬車が？」

「馬車が」

ランカインは、セツナの言葉を反芻すると、吹き荒ぶ冷雨の遙か先に目を向けた。ふたりを乗せた馬は、既に宿舎周辺からレコンダールの南北を貫く大通りに足を踏み入れていた。並み居る敵兵の群れを飛び越え、蹴散らし、突き進んできた結果、状況は彼が予想した以上に順調に推移していた。このまま事が上手く運べば、無事にレコンダールから脱出できるだろう。

猛将グレイバルゼルグが見逃してくれるならば、の話ではあるが。

(どうかな……?)

普通なら見逃すような真似はしないはずだ。捕縛できなければ殺害しても構わないという命令を下すだろう。ダグネたちからアザークで出会ったという話くらいは聞いているかもしれないが、だれの差し金ともわからない侵入者なのだ。災いの種に過ぎない。それをザルワーン一の将と目される人物が、見す見す逃してしまはずがなかった。

もっとも、それもバルゼルグ將軍の意見が尊重されることが前提である。ただの名目とはいえ、アーレスⅡログナーを総大将に頂いている以上、アーレスⅡログナーの考えが優先される可能性も高い。だからといって、安心などできるはずもないが。

ランカインは口の端に歪な笑みを浮かべた。心安らかな戦場などこの世の何処に在るといふのか。いや、在ってたまるものか。彼は、冷笑した。そんなものがあってたまるものか。戦場とは、地獄こそが相応しい。狂気と正気が渦巻き、鮮血と剣戟が繚乱する甘美にして絢爛たる世界。それこそが戦場の在るべき姿だろう。

そして、彼のような血生臭い狗いぬの住処なのだ。

彼は、不意にあの男のことを思い出した。馬小屋を目前に立ち塞がった野盗のひとり。

その男は、リユージュといった。

暗闇の空より降り注ぐのは豪雨であり、その大量の雨水とともに落ちてきたブロード・ソードの一撃をランカインは手斧の刃で受け止めた。空中からの落下速度を加えた斬撃。重い一撃。金属同士の衝突音とともに散った火花の向こうで、リユージュの顔が笑っていた。彼もまた、口の端を歪めた。地竜父を振るい、剣もろともにリユージュを押し退ける。リユージュは、圧力に逆らうことなく飛び退き、軽やかに体勢を立て直す。そこに一分の隙もない。リユージュが構えた剣の切っ先が、こちらの攻撃を誘うように揺らめいていた。

「あんだ強いな。ウエデイとは大違いだ」

「あれと比べられても困る」

「そりゃそうだ」

「もつとも、あれの力を知ればおまえも考えを変えるさ」

ランカインの脳裏には、紅蓮の炎をもともせず突っ込んできた少年の姿が浮かんでいた。みずからの命を顧みない無謀な行動は、確かに召喚武装の性能に頼りきったものではあったが、彼の力の一端には違いない。そして、バルサー平原での活躍が事実であれば、黒き矛の力はランカインの想像を凌駕していた。

たつたひとりで戦局を塗り替えるなど、ランカインにはできないことだ。火竜娘も地竜父も、強力な召喚武装ではある。火竜娘はひとつの街を焼き尽くしたし、地竜父は敵集団を沈黙させるには有用だった。しかし、それは局地的な戦況こそ左右するが、大局を動かすには至らないのだ。カランを焼き尽くせたのだから、カランが無防備だったというのが大きく、実際の戦場で同様の結果が出せるとは限らないのだ。

だが、セツナは戦局そのものを動かした。千もの敵を屠り、ガンディアの新たな門出を勝利で飾った。彼と黒き矛は、一躍有名になった。いずれガンディアという国の象徴になるかもしれない。それほどに喧伝された。

黒き矛のセツナ。

彼は、その真価を發揮してすらいないだろう。

「力？ ウエツデイに？」

リユーグが疑いのまなざしを向けてくる。そして、地を蹴った。わずかに開いた間合いが、一瞬にしてゼロになる。リユーグの速度に感心しながらも、ランカインは無造作に手斧を振るった。目の前に火花が咲く。豪雨を切り裂く金属音は、彼の耳朵には心地良かった。だが。

「おまえには関係のない話だ」

「そんな〜。旦那と俺の仲じゃないっすか〜。いけずしないで教え

てくださいよ」

得物をぶつけあつたまま猫撫で声を発してきたリユーグに対して、ランカインは、冷やかに嘆息を浮かべた。もはや興味は消え失せた。夢から醒めたともいうべきなのか。それは、リユーグの気味の悪い声音が原因ではない。

問題なのは、リユーグに殺意がないという事実だった。殺す意志もなく刃を突きつけられたところで、ランカインの心が昂揚するはずもなかった。むしろ萎えるばかりである。当初こそリユーグの剣気の鋭さに狂喜すらしたランカインだったが、いまや彼の興味は別の対象へと移っていた。

後方から迫り来る敵集団へ。

「ならば、こんな茶番とつとやめたらどうだ」

告げるなり、ランカインは力技でリユーグの剣を振り払った。リユーグが態勢を立て直す隙さえ与えず、手斧の刃を彼の首筋に突きつける。刃が肌に触れるか触れないかの距離感。リユーグが少しでも動けば、地竜父の獰猛な刃が彼の首に食い込むだろう。

しかし、リユーグは顔色ひとつ変えない。

「なんのことですか？」

「おまえに敵意がないとわかった以上、すべて時間の無駄になった」とはいえ、敵意があればそれでよかったというわけでもないのだが。

ランカインは、地竜父をリユーグの首筋から離すと、彼の横を通り抜けようとした。オリスン「バナツクが無事馬小屋に辿り着けたのか、多少の不安を覚えないでもなかった。もつとも、リユーグが彼を無視してランカインに襲い掛かってきたということを思えば、オリスンは無事だと考えてもいいのかもしれない。確信は持てないが。

「ちよ、ちよつと！」

呼び止めるリユーグの声に、ランカインは極めて冷ややかなまなざしを投げた。

「剣を振り回したいのなら、あの連中を相手にしたらどうだ？ 殲滅すれば伝説になれるぞ」

「いやいや、別に伝説になんてなりたくないし。勝手に話を進めないでくださいな」

ランカインの視線の先には、ザルワーンが誇る精鋭中の精鋭とでもいうべき、バルゼルグ將軍旗下の数十名の兵士の姿があった。整然と揃えられた足並みからはそうと知れないが、ランカインの見たところ彼らの士気は低かった。当然だろう。豪雨に打たれ続けているだけで、戦意など挫けてしまいかねない。しかも敵の数は少なく、捕らえたところで得られる恩賞などたかが知れている。意気が上がるはずがなかった。

距離にして十メートルもない。部隊長の号令とともに怒涛の勢いで攻め寄せてきそうなものだが、彼らは、距離を詰めながらもこちらの様子を伺っているようだった。リユージュの動向が気になっているのか、それとも、ランカインの地竜父を恐れ、慎重になっているのか。

どちらにせよ、ランカインにとってはありがたかった。

彼は、リユージュの目を見た。怖れを知らぬ青年の瞳には、好奇と興味が渦巻いており、恐怖や緊張といったものはまったく見当たらなかった。それこそ、彼が本気ではないという証だったが、たとしてもこちらが本気を出さないという確信がなければ、ここまで樂觀的にはなれない。その点を考慮すれば、彼が実力者であることは明白だった。少なくとも、剣を手にしただけのセツナよりは余程使えるだろう。

口早に、問う。

「では聞くが、おまえはなんだ？ なぜここにいる？ 愚劣なお仲間はどうした？ 放って置いていいのか？ ザルワーンの連中がおまえの単独行動を許したのか？」

「むう。そこを突っ込まれると、その……困る」

「目的は？ 俺と殺し合うことか？ そうではないのだろうか？」

「……予期せぬ質問攻めに閉口するって奴ですにや」

こんなときにまでとぼけてみせるリユージュに呆れるよりもむしろ感心しかけて、ランカインは頭を振った。殺気が、咲き乱れているザルワーンの兵士たちだ。部隊長が攻撃命令でも下したのかもしれない。そうなれば士気の高低は関係ない。彼らは兵士なのだ。上官の命令には全身全霊で応えなければならぬ。

「ま、所詮狗は狗ということっすよん。御主人様はひとりでもいい」
リユージュは、自嘲するでもなく告げてくると、ブロード・ソードを軽く振るった。剣を濡らしていた雨水が飛び散ったのかもしれないが、降りしきる大雨に紛れて見えなかった。そもそも、絶大な闇の支配下では、そんなものが見えるはずもない。

ランカインは、こちらに背を向け、ザルワーンの兵士たちに向かって剣を構えたリユージュの全身から立ち上りだした狂おしいまでの殺気に目を細めた。彼のブロード・ソードの切っ先がこちらに向かつていないことが残念でならないのだ。いま、その殺意をぶつけてくれれば、ランカインもまた実力の大半を惜しみなく発揮することができるだろう。

「……おまえも狗か」

狗。飼い主の命令のみを受諾し、実行する忠実な僕。飼い主のためならばあらゆる犠牲を厭わず、どのような手段を用いても命令を遂行する獣。そこに一切の感情が入り込む隙はない。有ってはならない。でなければ、狗は狗でいられなくなる。人に戻ることもできず、ましてや鬼になることなどできるはずもない。半端な存在に成り下がるのだ。

だから、ではないだろう。

彼がダグネたちを見限り、こちらに組しようというのは、半端な存在になりたくないというくだらない理由からではないはずだ。それが信念であれ打算であれ、リユージュにとっては大変な選択だったに違いないのだ。

何千という兵士が駐留する敵陣のど真ん中である。一步間違えな

くとも、命を落とす可能性が高い。運よく一命を取り留めたとしても、ザルワーンの連中に捕まれば同じことだ。いや、この豪雨の中で落命したほうが余程ましだといえる。どちらにせよ、リユーグは尋常ならざる道を選んだのだ。

リユーグが、囁くようにいつてきた。

「馬車は、街の北門に移動させています。ダグネが旦那方を売るのは目に見えていましたからね。馬は無理でしたけど」

「上出来だ」

何気に凄いことを告げてきた彼に、ランカインは口の端に笑みを湛えるに留めた。敵の群れが、直線にして五メートルの距離にまで接近してきていた。意気軒昂とはいえないが、最低限の戦意が認められた。豪雨の中、少しずつ迫り来る甲冑の集団は、亡霊や化け物の群れにも勝るとも劣らない迫力がある。

リユーグが、馬小屋を一瞥した。ランカインがそちらを見遣ると、馬小屋から二頭の馬を引き連れて、オリスンが飛び出してきたところだった。

「カイン！」

セツナの叫び声が、ランカインの意識を現実に引き戻した。背後から強く引つ張られているのを認めるが、少年の意図はわからなかった。降りしきる大雨の中、エメリオンは俊足を飛ばしている。稀に見る駿馬といってもいいのかもしれない。それは、併走するロクサリアも同様であり、そこにオリスン、バナツクの実力を垣間見ることができらるだろう。

エメリオンとロクサリアの能力を引き出し、伸ばすような調教をしてあればこそ、このような状況にあっても全力で駆け抜けることができるに違いなかった。

「ん？」

「ん？」じゃねーよ！ 前、前、っ！」

セツナの悲鳴染みた大声に、ランカインは、改めて前方を注視した。闇を切り裂くでもなく降り注ぐ豪雨の向こうにうつすらとだが、レコンダールの北門が確認できた。当然、門は閉ざされているに違いない。突破するにはぶち破るしかないのだが、地竜父だけで可能なのかどうか。

それに、問題は嚴重に閉ざされた門だけではない。門前には、甲冑を着込み、武器を携えたザルワーンの精兵たちがランカインたちの到着を待ち構えていた。ざっと百人以上。宿舎付近の連中とは異なり、近接戦闘に特化した装備ではなかった。長弓や短弓を構えた兵士の姿も多く、一斉に射掛けられればさすがのランカインとてたまったものではない。

二頭の馬は、既に長弓の射程距離に入っていた。しかし、未だに狙撃のひとつもないのは、この悪天候のおかげなのかもしれない。正に天の恵みといってもいい。晴れ渡った星空の下ならば、一、二もなく射抜かれていただろう。無明に等しい闇と豪雨が、正確な狙いを付け難くさせている。結果、射撃に関しては消極的にならざるを得ない。

もつとも、それは射撃に関する場合の話だ。

槍や矛、あるいは剣を手にした兵士たちが、みずから奮い立たせるように声を張り上げると、一気呵成に突撃してきたのだ。頭上、閃光が瞬いた。雷鳴が落ちてくる。大気が震えた。激しく、狂おしく。

ランカインは、前方の通りを埋め尽くす精兵たちの鬼気迫る勢いに愉悦を覚えざるを得なかった。このような状況にあっても、全身全霊を駆けて任務を全うしようとする戦士の生き様は、決して悪くはない。悪くはないが、相手が悪すぎたのだ。

無論、同情はしない。

「ニーウェーディアブラス」

ランカインは、背後の少年に声をかけると、左手を後ろに回した。

振り落とされまいと必死にしがみついている少年の首元を無造作に掴む。戦士のものとは思えないほど華奢な首。彼の非難の聲が、ランカインの耳朵を掠めた。

「なっ、なんだよ！」

「バルガス殿の許可は得た。存分に暴れたまえ」

ランカインは、セツナの首根っこを力任せに引つ張り、彼の両手が腰から離れたのを確認すると、前方に向かって思い切り放り投げた。少年とはいえ、がっちり武装した戦士である。その重量は、ランカインといえど片手で持ち上げるだけでも困難のだが、地竜父から溢れ出る力が、彼の膂力を尋常ではないものにしていった。

「な、なんで〜!？」

闇の中、悲鳴を上げる少年の体は、放物線を描きながら、迫り来る敵軍の真ん中に飛び込んでいった。精兵たちが愕然としたのは言うまでもない。まさか、ランカイン味方を投げつけてくるとは思いもよらなかつたに違いなかつた。それも当たり前といえば当たり前だ。敵陣に単騎で突っ込むなど、自殺行為に他ならない。もっともこの場合、単騎による突撃などとは呼べないだろうが。

閃光が、前方を見遣るランカインの視界を焼いた。武装召喚術の光。爆発的な光の奔流。一瞬にして収斂し、一振りの得物を形成したはずだ。少年の手の内に。強大で獰猛な力のうねりを感じる。それは大地を根底から揺さぶる巨獣の咆哮のようだった。

ランカインは、笑みを浮かべた。敵陣で、どよめきとともに怒号が飛び交った。血飛沫が上がった。豪雨の中でもそれとわかるほどの血の量だった。一瞬で何人の兵士が命を散らせたのか。

「カイン！」

左から飛んできたラクサス「バルガザールの叫び声に非難の色を認めたものの、ランカインは一笑に付した。そう、ランカインがセツナに告げたラクサスの許可を取ったという話は真っ赤な嘘だった。しかし、もはや脱出は間近。

恐れるものなどない。

「ニーウエが殲滅すれば、情報など残りませんよ」

そして、彼はそれをやり遂げるのだ。ひとり残さず殺戮し、北門周辺を深紅に染め上げるに違いない。豪雨で以てしても流しきれないほどの血の花を咲かせるのは間違いないかった。

それが彼だからだ。

セツナ「カミヤに与えられた使命だからだ。

黒き矛を振るい、敵を殲滅することこそが彼のすべてなのだ。

それ以外の事物は不要といってもいい。戦場に投入し、戦果を上げるだけの存在であればいいのだ。闘争の権化となつて、戦場に死と恐怖を振り撒いていればいい。

それこそが、レオンガンドが彼に望む役割であるはずだった。

此度の任務は、そのためのお膳立てに過ぎない。彼が戦場で猛威を振るうために、その舞台に上がるための儀式のようなものだった。

いま、雷雨の中で血煙を上げながら倒れ伏していく数多の兵士は、まさに祭壇に捧げられる贄にえであり、漆黒の矛を振り回して殺戮を続ける少年は、狂気の儀式を執り行う呪われた祭司そのものなのかもしれない。

ランカインたちは、その呪われた儀式が終了するまで、道の端で待機しているしかなかった。援護の必要性が感じられなかったからでもあるし、セツナの邪魔にもなりかねないからだ。時折、ランカインやラクサス目掛けて矢を射掛けてきたものもいるにはいたが、ほとんどの場合セツナの超絶的な反応によつて無力化され、射手もまた即座に絶命していった。

「これはいつたい……なんなんですかねえ？」

どこからともなく現れたりユークが茫然と問いかけてきたのは、すべてが終わわり、辺り一面に死体の山が築かれてからだだった。北門周辺で待ち構えていた兵士のことごとくが、セツナと黒き矛によつて命を散らせ、物言わぬ肉の塊に成り果てていた。かの矛の前に鎧も兜も意味を為さず、紙切れのように切り裂かれ鮮血とともに地面を埋めた。死屍累々。凄惨という言葉すら生温い。

むせ返るような血の臭いの中心に立ち尽くす少年は、今なにを想っているのだろう。

ランカインは、ふとそんなことが気になった。

第六十六話 狂う

「まあまあ、そんなことはどうでもいいじゃないですか。あの窮地を脱せたくんです。それだけで良しとしましょうよ」

リユーグは、レックスの目を見つめ返しながら静かに答えた。幌馬車の中、冷やかな闇が場の空気そのものを凍て付かせるかのように漂っている。明かりをつけないのは、ザルワーンの追っ手を恐れていることだ。レコンダールからの脱出に成功したとはいえ、ザルワーンの連中がこちらをただ見逃すということは考え難かった。少なくとも、ある程度の人数を追っ手に回すくらいの手は打つだろう。雨は、止もうとしているらしい。ログナーの天地を騒がせた雷鳴も聞こえなくなり、大地を激しく打ち付け、苛烈な旋律を刻んでいた雨音も、いまや穏やかな音色に変わっていた。風も緩やかだ。豪雨の中を走り抜けるよりは随分とましな状況だといえた。

馬車は、街道を逸れて進んでいる。レコンダールの北門から延びていた街道に沿って進むほど、愚かなことはない。追っ手に後ろから襲ってくださいともいつているようなものだ。もちろん、街道を逸れたからといって安全というわけでもないが、幸い、月明かりさえ見当たらない無明の闇が世界を支配している。エメリオンと口クサリアが走り続ける限り、追っ手に捕まるという可能性は限りなく低いだろう。

馬車の中には、重い沈黙が横たわっていた。

リユーグは、自分の返答がなにか間違っていたのかとも考えたが、思い過ぎだろうと決め付けることで思考を切り替えた。きつと、レックスが黙しているからだ。黙殺されているわけではないのだから。

幌馬車の中は決して狭くはないのだが、大の大人が四人と育ち盛りの青少年がひとりの計五人の寝床を確保するだけでほとんどの面積を使用せざるを得ず、その上、食料や武器防具などの荷物を置く

ための空間も必要であるため、必要以上に窮屈に感じられるのも仕方のないところだった。もつとも、大人のひとりであるオリスン^{II}バナックが御者としてこの場を離れているため、その分広くはなっているのだが。

それでも彼が狭苦しく感じたのは、この逃げ場のない沈黙のせいなのかもしれない。黙しているのはレックスひとりではない。カインは荷物に背を預けたまま眠ったように目を閉じているし、ニーウエは馬車の片隅で座り込み、剣の柄を握り締めたまま虚空を凝視していた。その様子は尋常ではなく、眼は未だに獲物を求める猛獣のように爛々と輝き、近寄ることは愚か目を合わせることにすら拒絶しているかのようだった。

それもそうだろう。

リユーグは、他人事のように理解していた。

あれだけのことを仕出かしたのだ。尋常ではいられまい。正気と狂気の狭間にありながら、なんとか理性を保っているという状況と見て間違いないだろう。

数多の敵兵を塵のように蹴散らし、殺戮したのだ。圧倒的な力で暴圧。思い出すのも億劫になるほどの暴虐。その前ではだれも彼もが為す術もなく命を散らせた。数の上では明らかにザルワーンの連中のほうが上であり、グレイ^{II}バルゼルグ旗下の精鋭である彼らの迅速かつ的確な連携攻撃は、並大抵の戦士なら瞬く間に討ち取られていたはずだ。しかし、蓋を開けてみれば、討ち取られたのはザルワーンの兵士たちであり、ニーウエといえは掠り傷ひとつ負っていないかったのだ。体力気力の消耗は激しかったようだが、それにしても非常識極まりない話である。

無数の死体の真ん中に佇むニーウエという少年の鬼気迫る姿を見たとき、リユーグは、恐怖とも感動とも付かぬ激情を覚える自分に気づき、同時にカインの言葉を思い出したものだ。

『もつとも、あれの力を知ればおまえも考えを変えるさ』

実際、リユーグは、ニーウエに対する考えを改めなければならな

くなつた。彼は、戦いの素人などではなかつたのだ。あの時、リユーグの奇襲を受け止めたのも偶然ではなく、素人を装つたのはこちらの実力を測るためと見ていいのだろう。そう考えれば、あの直後ダグネがレックスに降伏したのは、リユーグにとつて幸運だったといえた。あのまま戦い続けていれば、ニーウエが実力を発揮していたかもしれない。そうなれば、リユーグの首が飛んでいたのは間違いないのだ。

考えるだけで寒気がする。あのときのダグネの判断はこれ以上ないくらいの正解だった。あのとき、ダグネが咄嗟に土下座交渉を展開しなければ、《銅の鍵》は全滅していたかもしれないのだ。荒れ狂う暴風の如きニーウエの苛烈な攻撃によつて。

彼は頭を振ると、改めてレックスの目を見た。レックス「バルガス」の理知的なまなざしは、こちらの考えなどお見通しだともいわんがばかりだったが、しかし彼は黙して語らない。リユーグの言葉を待つているのだろう。

彼は胸中で嘆息した。

理由を言葉にするのは、彼の趣味ではなかつた。

街道を外れて進む馬車は時に大きく揺れ、決して快適なものとはいえなかつたが、そんなことで文句を言える立場でもなければそんな状況でもない。そして、ふざけていられる雰囲気でもなかつた。

重いのだ。馬車の中に漂う空気そのものが。

リユーグは、仕方なしに口を開いた。

「……簡単に言いますと、俺はあなたたちに降つた以上、生殺与奪の権利さえ明け渡したつもりでいたんですよ。ダグネの親父が降伏し、俺もあなたの支配下に入った。このとき、俺はダグネの親父と等価になつた。狗いぬの主はひとりですからね。しかし、親父は考え違いをしていたんです。あのひとは、降伏した後も俺の飼い主のつもりでいたんですよ。だから、ザルワーンの連中にあなたたちを売るなんていうとんでもない話を俺の耳にも入れてきたんでしょうね。俺の活躍に期待していたみたいですよ。俺があなたたちのうちのひ

とりでも捕らえれば、自分たちの手柄になりますからね」

リューグはひとしきり喋った後、険しかったレックスのまなざしが多少なりとも和らいでいることに気づき、わずかながらも安心した。もちろん、レックスがすべての疑念を捨て去ったということもないのだろうが。少なくとも、こちらの話に耳を傾けてくれるだけの余裕はあるのだ。いまはそれだけで十分といえた。

時間さえかければ、相手の信頼を勝ち取るくらいの自信はリューグにもあった。それくらいの実力を持っているという自負もある。ニーウエには敵わないかもしれないが、そこらの雑兵に後れを取ることはない。

「だが、君は彼らには同調しなかった。」

「当然でしょう。俺の主はレックス。バルガスただひとり。飼い主に刃を突きつける狗がどこにいますか？」

それがリューグの信条だった。人には人の、狗には狗の生き方がある。彼は、生まれながらに狗であった。狗として生きるしかなかったのだ。他に選択肢はなかった。とって、そのことでこの世を恨んだこともなければ、我が身を哀れんだこともない。飼い主に尻尾を振って生きてきたというわけでもないのだ。もちろん、飼い主の命に背くような真似はしたこともないが。

「狗か」

レックスは、こちらの言葉に納得したようなしていないような微妙な表情を浮かべていた。狗だなんだといわれても、即座には理解できないのかもしれない。

リューグは、当然の反応だろうと思いつつ、彼の言葉に静かにうなずいた。

「ええ。俺はあなたの狗ですよ。信じられないのなら、三回廻ってワンとでも鳴きましようか？」

「そんなことをしても、信じられないものは信じられまい。それに、いまこうして移動できているのは、君が予め馬車を確保しておいてくれたおかげだ。その事実を疑う必要はない」

「では、俺を信用してくださると？」

「ああ」

レックスの反応は、リユーグに久方ぶりの安堵を与えた。同時に、全身に力が入る。飼い主と定めた相手が信用してくれるといったのだ。今まで以上に力を振るわなければならない。レックスの望み通りの結果をもたらさなければならない。レックスが求めるならば、剣を振るい、敵の命を奪うことも考えなければならない。ニーウエと同程度の活躍を求められても困惑するしかないが。

リユーグは、気を取り直すように口を開いた。

「ではでは、御主人様。わたくしめに新たな命令をお与えくださいませ」

「とりあえず体を休ませ、次に備えて欲しい」

「次とは？」

問い返しながら、リユーグの脳裏に嫌な予感が過ぎらなかったわけではない。だが、それを口にすることはできなかった。彼は狗。御主人様の命令を忠実に実行する狗に過ぎないのだ。

レックスが、囁くようにいつてきた。

「ログナーの王都マイラムに潜入する」

「馬鹿げている」

グレイ・バルゼルグは、だれとはなしに吐き捨てた。

「馬鹿げている」

雨は、上がった。

大地を叩く激しい雨音も、天空を揺るがす苛烈な雷鳴も、もはや耳朶を賑わせることはなかった。夜空は未だに分厚い雨雲に覆われてはいたが、雨が降り出すような気配は認められなかった。雲の群

れも、やがて風に流されて消えてしまっただろう。

それはいい。

いま、レコンダールは、大きな混乱と喧騒に包まれていた。それも当然の結果だろう。千人以上の兵士を動員したのだ。たかが四人の侵入者を確保するためだけに、だ。

グレイ＝バルゼルグが憤るのも無理はなかった。

「馬鹿げている」

何度目かの言葉を発したあと、彼は、窓の外に目を向けた。魔晶灯の冷ややかな光を反射する窓ガラスには、グレイの苦渋に歪んだ顔がはつきりと映し出された。窓の外は、夜の闇がその圧倒的な支配力を顕示してはいるものの、無数の家々の窓から漏れる魔晶灯の光が、闇の権力に抵抗しようとしているかのようにだった。そして夜空を包む静寂も、地上の喧騒の前では無力にならざるを得ない。

街中で騒いでいるのは、市民である。

市街には、先の戦闘によって想定外の被害が出ていた。レコンダールの街並みがためらめに破壊され、いくつもの家屋が倒壊していた。道路や建物の崩壊に巻き込まれたのは、戦闘に参加していた兵士だけではない。市民の中にも多数の負傷者が出ており、まさに寝耳に水のこの事態に混乱するものや、市内で戦闘を行ったザルワーン軍を非難するもの、野次馬たちが夜中の市街に溢れ返っていた。

そもそも、当初の予定では、レコンダールに被害が出るような戦闘など起きるはずがなかったのだ。侵入者たちに宛がった宿舎を包囲し、寝込みを襲うだけでよかったのだ。動員したのは彼の率いる部隊の半数となる千五百名に及び、そのうち三百を宿舎の包囲に割り、残りを退路の封鎖に使っていた。通りという通りを遮断し、どこからも脱出できないようにしたはずだった。鼠一匹通さないくらいには厳重な布陣であるはずだった。

だれが指揮を振るおとと、大きな犠牲もなく完遂される程度の作戦だったのだ。例えば戦闘のいろはも知らないアーレス・レウス＝ログナーが陣頭に立つと、グレイ配下の兵士たちがアーレスを上手

く補助するだろうと考えられていた。それにアーレスとて無能ではない。

しかし、堤は穿たれ、瞬く間に決壊した。

猛将グレイ＝バルゼルグ旗下の精鋭部隊に多数の死傷者が出たのだ。死者だけで百二十二名に及び、重軽傷者を含めると五百名以上の兵士が、たった四人の侵入者によって負傷するというだれにも想像できない事態に、グレイは、ただ天運を呪うしかなかった。

こんなところで大切な部下を数多く失ってしまったのだ。こんなところで、だ。ミレルバスから与えられた任務は、簡単なものだった。上手くいけば、彼は配下のひとりさえ失わずにザルワーンに帰還することができるはずだったのだ。だからこそ、アーレス・レウス＝ログナーという若者を担ぎ上げて、この国にやってきたのだ。

端から、アスタル＝ラナディース率いるログナー軍と正面からぶつかり合うつもりなどはなかった。そのつもりならば、もっと陣容は整えていただろう。そもそも、アスタル＝ラナディース一派と決戦するつもりならば、ミレルバスとてグレイとその配下だけを派遣するような真似はしまい。

ザルワーンが動員しうる限りの兵力を以て決戦を行い、圧倒的な数の力で絶対的な勝利をもぎ取るうとするだろう。あるいは、ナーレス＝ラグナホルンや武装召喚師たちを使い、完全無欠の勝利を飾ろうとするはずだった。

しかし、ミレルバスはそれをしなかった。

アーレスの手前、ミレルバスが本音を口にするとはなかったが、グレイには自分に与えられた兵力だけで彼の思惑を察した。

属国の内紛を放っておけないのは、当然である。故に、例えアーレスにその気がなかったとしても、彼を担いでログナーに軍を差し向けるということくらいはしただろう。しかし、決戦には至らない義理程度の兵力をログナー国内に滞在させ、頃合を見計らって帰還するということになっていただろう。

なぜなら、ザルワーンに動員できる兵力がない。総兵力ではログ

ナーを遙かに上回り、全兵力を動員できれば、？飛翔將軍？アスタル＝ラナディース率いる軍であろうと、粉微塵に打ち砕くことができるのだが、現状はそれもまた夢物語に過ぎなかった。

「馬鹿げている……」

グレイ＝バルゼルグは、静かに嘆息した。脳裏にいくつもの光景が浮かんで消えた。故郷の風景、濡れたような空の青さ、眼に眩しいほどの森の緑、彼が手塩にかけて育て上げた兵士たちの顔、顔、顔。

無数の名前が、彼の意識を席卷した。

馬鹿げているのは、内部抗争で兵力を疲弊させるザルワーンという愚かな国家なのか、そんな国に付き従うことしかできない己の有様なのか。

体が重い。

全身の筋肉という筋肉が悲鳴を上げている。

肉体を限界以上に酷使したからだ。

セツナは、馬車の暗闇をぼんやりと見つめていた。時折、ラクサスとリユーグの話し声が聞こえてくるのだが、疲労の所為か、頭に入ってこなかった。どうでもいい話だからかもしれない。リユーグなのだ。またくだらない冗談やつまらないことを話しているのかもしれない。それを聞いてるのである。ラクサスには同情を覚えるが、彼を助けようとは微塵も想わなかった。

セツナはいま、そんな場合ではなかった。

先の戦闘で暴れ回った結果、尋常ではない疲労と苦痛が彼の肉体を駆け巡っていた。苦痛とは筋肉の痛みであり、疲労とは体力を使い切ったからに違いない。

(あの野郎……)

セツナは、ランカインを睨みたくなくなったが、そんな気力は生まれなかった。

あのとき、黒き矛を手にした瞬間、セツナの中でなにかが弾けた。いつも以上に鋭敏化した意識は、レコンダール北門近辺の情景を彼の脳裏に投影し、百人以上の敵兵ひとりひとりの一挙手一投足を捕捉した。それは正確極まりない行動予測へと繋がり、激しくも無駄のない攻撃を可能にした。

殺到する敵の殺気が、彼の肉体を加速させる。限界以上に引き出された運動能力が、セツナの攻撃をより凶暴なものにした。一閃で何人も敵兵を絶命させ、地に叩き付ける一撃が、道路諸共敵の群れを粉碎した。

愉悦があった。

血の花が狂い咲き、死の音が響き渡るその狭間で、セツナは、笑っていた。

(俺は、笑っていた……)

セツナは、愕然とその事実を認めた。

矛を振るうたびに命が散っていく。断末魔の悲鳴を上げながら、ひとり、またひとりと死んでいく。

黒き矛の圧倒的な力が、彼の感覚を常軌を逸したものにしていた。尋常ではなかった。愉快痛快といってもいい。今にして思えば反吐の出るような感情が、戦闘中のセツナの意識を染め上げていた。

故に、躊躇なく矛を振り回した。

(なんで笑えるんだよ?)

ひとりが死んでいく。

敵とはいえ、人間なのだ。

人間の死を笑えっていられるのか。

笑って人間を殺すなど、正気の沙汰ではない。いや、それは人間に限った話ではない。笑いながら命を奪うなど、あつてはならない。狂っている。

(俺は、狂っている?)

セツナは、その自問を否定したかった。しかし、網膜に焼きついた凄惨な笑みがそれを許さない。

殺戮を楽しむ少年の顔は、死にゆく敵兵の瞳に映っていたのだ。

セツナは、それを見ていた。黒き矛によってもたらされる感覚の肥大がそれを可能にしていた。そして、その上で彼はさらに笑っていた。

セツナは、叫び声を上げたくなった。

第六十七話 白の鼓動

「……話には聞いていたけど、これは想像以上ね」

リノンクレア・レーヴェルシオンの第一声は、それこそ予想通りと違ってよかったのかもしれない。猛火によって焼き尽くされた小さな街の有様を目の当たりにしたのだ。至極全うな反応であり、そんな予想が的中したところで喜ぶようなこともない。

曇天の下、まさに廃墟のような街並みが広がっている。いや、街並みなどは到底いえない光景だった。ランカイン「ビューネル」がもたらした災禍の炎は、この小さなカランという街を紅蓮の猛火で焼き尽くし、原型を留めぬほどの破壊を振り撒いたのだ。街の大門も、道路も、立ち並んでいたはずの家々も、様々な建築物も、武装召喚師の狂気の炎に飲まれ、その本来の姿を失っていた。

ファリア「ベルファリア」は、復興の兆しすら見当たらない街の様子に軽い眩暈を覚えた。カラン滞在中、何度となく見た光景である。網膜に焼き付いているといっても過言ではないくらいに見慣れた景色だ。しかし、それでもやり場のない怒りが込み上げてくるのをどうすることもできない。

多くのものが失われた。無数の人命がこの世から消え去り、カランは街としての機能のほとんどを失った。残された人々の眠る場所の確保さえも難しかったものの、ファリアたちの活躍によって、食料とテントだけは掻き集めることに成功した。もっとも、それらを十分とはいかないまでも整えることができたのは、夜明け前のことである。

カランから最も近いメレルから物資を取り寄せ、王都やクレブールへ応援を要請する一方で、被災した住民の心も安んじなければならなかった。

ファリアは、二日ほど一睡もできなかった。それは、彼女の同僚やサリス「エリオン」ら警備隊の隊員たちも同様であり、彼女らが多

少の安堵とともに眠りにつけたのは、クレブルからの応援が到着してからだつた。

「許せないわね」

「はい」

リノンクレアのつぶやきに同調しながら、ファリアは、カランに訪れようといってくれた彼女に心の底から感謝していた。同時に、彼女への敬慕をより深いものにする。リノンクレア・レーヴェールシオン。王女として生まれながら、？うつけ？ことレオンガンドに代わって戦場に立ち、幾多の戦いを切り抜けてきた人物であり、その経験、技量、人格、すべてにおいて尊敬すべきところを見出すことができた。

彼女のような在り方は、ファリアにとって理想かもしれない。

ファリアは、ふと気になって後方を振り返った。見目麗しき白聖騎士隊の女性騎士たちは、隊列ひとつ乱すどころか私語さえも交わしていない。だれもが、カランの有様に驚き、愕然としている風に見受けられた。

それは、ルウファールバルガザールも同じだった。いや、彼のほうが動揺は大きかっただろう。彼は、ガンディアの国民である。ルシオンの騎士よりも強く衝撃を受けていたとしてもなんら不思議ではなかった。

ちなみに、皆馬車や馬から降りていた。歩いて見て回りたいたいというリノンクレアの方針に従ったのだ。だれひとり不満を漏らさないのは、彼女の人徳によるものが大きいのだろうか。

七月十三日。

一行が王都ガンディオンを出発して一日が経過していた。相変わらずの空模様ではあったが、一向に雨が降り始める気配はなかった。とはいえ、鉛色の雲に覆われた空と湿った空気は、リノンクレアの帰国を華やかに彩るはずもなかったが。

そして、カランである。

一行の足取りは、いよいよ重くなっていた。

不意に、リノンクレアが口を開いた。

「でも、この怒りはどこにぶつければいいのかしら？ もはや、ランカイン＝ビューネル本人にぶつけるわけにもいかないでしょうし」「どういうことですか？」

ファリアは、怪訝な表情を浮かべた。突然そんなことを言い出したリノンクレアの真意がわからなかった。ランカインは、セツナの活躍もあって確保され、王都ガンディオンに移送されたのだ。怒りをぶつけるものにも、後のことは国に任せるしかない。だからこそ、この怒りをどうすることもできず、途方に暮れるのだ。

「兄上は、彼を手駒に加えたそうよ。セツナと行動をとみにしているんじゃないかしら」

リノンクレアの声は、耳元で囁くほどに小さく、間近にいるファリアでさえ聞き逃しかねないほどだった。それも当然だろう。

ファリアは、彼女の言葉を耳にした瞬間、とてつもない衝撃を受けた。有り得ない、有ってはならないことだという感情的な反応と、レオンガンドならやりかねない、いや、やるだろうという理性的な判断が、彼女の頭の中を狂おしく駆け巡った。

ランカイン＝ビューネル。ザルワーンの五竜氏族に連なるものにして、武装召喚師。この小さな街を廃墟に変えた大量殺人者。そんな男を手駒にするなど、どうかしている。しかし、どうかしてなければ、セツナを即座に戦場に連れて行き、戦わせたりなどしないだろう。

狂気。

理性とはひどくかけ離れたなにかが、レオンガンドを突き動かしている。

(いや)

彼女は心の中で頭を振った。むしろ理性的なのかもしれない。国民を殺戮されたことへの怒りや憎しみといった激情を支配しうる圧倒的な理性。それが狂気に等しいにせよ、正気だからこそなせる業にせよ、レオンガンドは、ランカインを刑殺するより戦力として利

用するほうがガンディアにとって有益だと考えたのだ。

それは理解できる。頭では納得する。それでも。

「そんな！」

「あまり大声を出さないでね。だれかに聞かれたら拙いでしよう？」
リノンクレアの声音は悪戯っぽかったが、しかし、そのまなざしはいたって冷ややかだった。こちらの反応は予想していたはずだが、だからこそ冷ややかにならざるを得ないのかもしれない。もっとも、だからといって即座に冷静になれるフアリアでもなかった。

割り切れるような話ではない。

カランは、彼女にとって大切な街だった。《大陸召喚師教会》カラン支部の立ち上げに携わったことがきっかけとなって、彼女はこの街への転属を希望したのだ。王都ガンディオンに留まっていたほうが情報を集めるのには都合がいいのはわかっていたが、それでもフアリアは新しく生まれただけの支部をカランに根付かせ、発展させることに興味が湧いていた。

無論、使命を疎かにしたわけではない。

カランは、ガンディオンから遠く離れた場所にあるわけではないのだ。ガンディオン支部に勤めていた当時の同僚や部下、上司にも、なにか有力な情報があればすぐにでも知らせるよう協力を仰いでいたし、彼らもそれを快く承してくれていた。

だれもが、彼女の名前の意味を知っていたから、というのもあるだろう。

そうして、フアリアはカランに住み着くと、まるで故郷にいるかのような感覚とともに日々を過ごしてきた。サリスⅡエリオンら警備隊員と知り合い、また、カランの街の人々と触れ合う中で、エリナと彼女の家族とも顔見知りになった。

カランで過ごした日々が頭の中を駆け巡る。無数の顔と名前が、浮かんでは消えた。数多の想い出が一夜にして焼き尽くされたのだ。その直後こそ冷静に振舞っていた。冷酷なほど、理性的に。そうならざるを得なかった。焼け出された住民の安全の確保や、ガンデ

イオン、クレブルなどへの連絡、応援要請など、やらなければならにことばかりがあった。忙殺されたのだ。

そして、事後処理から解放された彼女を待っていたのは、セツナ「カミヤという少年だった。彼への事情聴取を警備隊に任せなかったのは、セツナが武装召喚師という話があったからではあるが。

休む暇もなかった。

セツナがレオンガンドの口車に乗せられたがために戦場に出向くことになり、王都では意識を失っていた彼の面倒を見なければならなかった。だれかがそう命じたわけではない。が、彼女以外のだれがセツナの傍にいてあげることができるのだろう。ともかく、ファリアは、四六時中セツナのことを考えなければならなかった。カランのことで感情をぶちまける暇など、あるはずがなかったのだ。が、いまは違う。

ファリアの意識の大半を占めていたセツナは、敵国に向かっていった。任務である。心配はすれど、彼のことはラクサス「バルガザールに任せておけば安心できた。

心にゆとりが生まれた。

理性が、剥がれ落ちた。

「だったら！」

ファリアは、我知らず大声を上げていた。自分の耳にはなにも聞こえていなかった。別の声が響いていたからだ。泣き叫ぶ少女の声。炎に巻かれ、死に瀕した人々の絶叫、あるいは怨嗟の声。慟哭。廃墟と化したカランに反響する無数の叫びが、いま、彼女の鼓膜を激しく揺さぶっていた。

リノンクレアの瞳は、凍てついた宝石のようだったが。

「あなただから教えてあげたのよ、ファリア。セツナが帰ってきたとき、あなたが彼をちゃんと迎えて上げられるように」

「どういうことです!？」

冷静極まりないリノンクレアの物言いは、ファリアの感情をさらに昂ぶらせるだけだった。冷静にならなければならぬ。頭を冷や

すべきだ　そんなことはわかっていた。しかし、一度箍が外れれば、どうしようもなくなくなるものだ。枷が外れたのだ。抑圧されていた激情が奔流となって渦を巻いた。

故に、リノクレアの言葉の意味も理解できない。

「落ち着きなさい。皆が見てるわ」

「そんなの関係ありません！　一体、どういうことなんです？　わたしには納得できません！」

「本当に納得できないの？」

「……」

リノクレアの問いに、ファリアは沈黙を以て返答とした。頭では理解しているのだ。この国を強くし、平穏と安寧、そして繁栄をみちびくためと考えれば、レオンガンドの選択も強ち間違いではない。ランカインは、たったひとりで街を滅ぼすだけの力を持った人間である。彼を戦力に取り込むことができれば、ガンディアの戦力は大幅に増強することができるのだ。それは、ガンディアに住まうものにとって喜ばしいことなのかもしれない。

ランカインが、カランの街を焼き払い、住民を殺戮したという事実さえなければ。

だが、ランカインの炎が小さな街を焼き尽くしたのは厳然たる事実であり、その否定しようのない現実は、ファリアから理性を奪い去っていくのだ。それは、なにもできなかった無力な己への怒りでもあった。仕事で離れていたから仕方がない、などとは考えられなかった。

あのとき、ファリアがカランに残っていれば、街が焼き尽くされる前にランカインを倒すこともできたはずだ。彼がどれほど強かろうとも、素人同然のセツナに敗れたという事実がある以上、ファリアでも打倒できないわけがなかった。だからこそ、後悔するのだ。

もつとも、彼女とて過去を変えることはできないということもわかっている。現実を見つめなければならぬことも理解している。その現実のひとつがランカインの存在であり、それを受け入れなけ

ればならないということもわかつてはいたのだ。

感情的な問題でしかない。

「わたしがガンディアの王女のままだったら、全力で反対したんでしようけれどね。いまやわたしは隣国の王子の妻。内政に干渉することは許されないし、そんな力もないわ」

リノンクレアが、彼女に向かって笑いかけるように言ってきた。

その瞳は既に氷解しており、いつものように温和な微笑を湛えている。ファリアの様子に苦笑するわけでも、呆れ果てて愛想を尽かしている様子でもなかった。むしろ、自嘲しているかのようですらあった。

なにを自嘲することがあるというのだろう。

ファリアが見る限りでは、彼女に自嘲すべき点など見当たらないのだが。

ファリアは、ルシオンの王子夫人のまなざしを受け止めながら、次第に冷静さを取り戻していく自分を認めた。いや、未だに内面では激情は嵐となって吹き荒れている。しかし、表層を理性の仮面で覆うことができるくらいには意識が回復してきていた。狭くなりすぎていた視界が、少しずつ広がっていく。

周囲の状況が頭に飛び込んでくるたびに、ファリアは、己の曝した醜態に気づかねばならなかった。激情のあまり、大声を上げてしまったのだ。背中に突き刺さる無数の視線の痛さといったら、どう形容すればいいのか。

失態以外のなにものでもなかった。ファリア＝ベルファリアといえば、常に冷静沈着で物事に動じることのない人物として通っており、彼女もその印象を崩さぬよう振舞ってきたつもりだった。それがファリア＝ベルファリアという《大陸召喚師協会》に所属する武装召喚師のあるべき姿なのだ。伶俐で知的な女性召喚師　そのイメージが脆くも崩れ去るほどの有様だった。

人前でこれほど取り乱したのは、アズマリア＝アルテマックスを視認したときくらいではないのか。

ファリアは、己の迂闊さを全力で呪いたい気持ちに駆られたが、いまはそんな状況ではないこともまた理解していた。顔面が急速に高潮していくのは抑えられそうもないが。

「だから帰るのよ」

リノンクレアは、もはやファリアを見つめてはいなかった。囁くように続けた言葉は、ファリアにしか聞こえなかったのかもしれない。

「ここはわたしの故郷。いまでも愛しているし、大切に想っているわ。でも、ここにわたしの居場所はないのよ」

（居場所……）

ファリアは、リノンクレアの心中を察しながらも、別の人物の顔を思い浮かべずにはいられなかった。異世界からの来訪者。居場所などあるうはずもない少年のことを。

彼は、一先ずの居場所としてこの国を選んだ。それが正しい選択だったのかは、彼女にはわからない。彼自身にもわからないことだろう。しかし、悪い判断でもなかったはずだ。少なくともこの国は彼を必要としており、彼がその期待に応え続ける限り、居場所として機能し続けるはずだった。

そしてもうひとり、サリス＝エリオンの声がファリアの脳裏を過ぎった。

「俺はあの男を許さない。絶対に、どんなことがあっても、あの男だけは……！」

低く震える男の声は、胸中で暴れ狂う怒りを抑えきれないといったものであり、ファリアには彼の想いが痛いほどわかった。同じ気持ちだった。ランカイン＝ビューネルを許すことなど、あの惨状を目の当たりにしたものであれもが抱く感情だろう。至極当然の反応だった。

彼が、怒りに駆られながらもなお我を見失っていないのは、職務に忠実な人間だからに他ならなかった。セツナとランカインの戦いが終わって一番最初に駆けつけたのがサリス＝エリオンたちで

あり、彼にその気があれば、気絶していたランカインに報復することだってできたのだ。

しかし、彼は、復讐を果たそうとはしなかった。

彼はそのとき、その瞬間は、個人的な復讐を果たすよりも他にやるべきこと、やらなければならぬことがあると判断したのだろう。カランに帰り着いた直後のファリアと同様に、職務の遂行を最優先にすることで、いまにも壊れそうな心を辛くも繋ぎとめていたのかもしれない。

だが、事が終われば意識も変わる。彼も変わったのだ。温厚で気さくな好青年から、憎悪と怨嗟を撒き散らす復讐者に。といって、彼に復讐する手立てはなかった。ランカインは王都ガンディオンに移送された。彼は、ランカインが法の裁きが下されるのを待つしかなかった。そんなもので心が晴れるはずもなかったが、多少なりとも激情を鎮めることはできただろう。

が。

(サリス……あなたは、どう想うの?)

ランカインは裁きを受けるどころか、のうのうと生きている。ガンディア国王レオンガンドの手駒として、セツナたちと行動をともにしているのだという。

この事実がサリス「エリオンの耳に入れば、彼は、どうなってしまふのだらう。冷静ではいられまい。彼の場合、ファリアよりもっと切実なのだ。彼は、ランカインの炎によって、家族を失っている。

ファリアは、リノンクレアが歩き出していることに気づいて、慌てて後を追った。リノンクレアが移動を再開すれば、長い長い行列もまた、停滞から解放されて動き出すのだ。黙って突っ立っていれば、後ろからの列に飲まれてしまっただらう。だからどう、というわけではないが。

「少しは冷静になれたようね」

「リノン様のおかげです」

「そうかしら？」

リノンクレアのすぐ後ろにつき従い、他愛のない言葉を交わしながらも、ファリアは、サリスのことを考えていた。いや、サリスひとりの問題ではない。ランカイン「ビューネルの生存が明らかになれば、ガンディア国民は怒り狂うに違いない。レオンガンドの決断を？うつけ？の愚行と罵るかもしれないし、国民感情を考えない王のやり方に嘆き悲しむかもしれない。

無論、ガンディアがランカインの生存を明らかにするはずもない。国民感情を考えれば、隠し通す以外の選択肢はなかった。秘匿にされるだろう。しかし、万が一ということもある。ログナーに帰ったリノンクレアが、ハルベルクや近習に口を滑らさないとも限らない。そのとき、レオンガンドはどうするのだろうか。

サリスは、なにを想うのだろう。

ファリアは、嫌な予感がしてならなかった。サリスが大それた行動を取るような人物だとはい底考えられなかったが、彼女が最後に見た彼の様子が、不安を助長して余りあるものだった。

彼は慟哭していたのだ。

正気と狂気の狭間で。

「どういってもりです？」

クオンは、自分を取り巻く状況を理解しながらも極めて穏やかに振舞った。余裕を以て対処することで皆が安堵するということを彼は本能的に理解していた。本能としかいいようがない。

場数は踏んでいる。この半年で、普通の人間ならば嫌になるくらいに戦闘を経験していた。人間であれ、皇魔おんまであれ、敵意を持つ相手と対峙したこと数え切れなかった。しかし、数多の経験が彼に教

えてくれたのは、基本的な戦い方であり武装召喚術の使い方であり戦闘の恐ろしさであって、場の空気を読み、操る方法は生まれつき身についていた。

温和な表情を浮かべたまま、クオンは前方を見ていた。

長大なテールを挟んで、男が座っている。白髪混じりの黒髪はそれなりの年輪を感じさせ、切れ長の目の眼光は鋭く、引き結んだ唇からは意志の強さを認めざるを得ない。身に付けているのは、無論、甲冑などではない。華麗な衣装である。もちろん、この会食のためだけに用意された、というわけでもないだろう。突然の申し出に急遽用意せざるを得なかったこちらとは事情が違う。

グラハム・ザンノードイス。ベレル王国騎士団長であり、小国ベレルをザルワーンの魔の手から守り続けてきた？銀の盾？である。「あなたがた《白き盾》が、我がベレルの軍門に降らないというのなら、こうするより他に選択肢はありませんまい」

「それがベレルの意志というのなら、致し方ありませんね」
クオンは、グラハムの返答に微笑を浮かべた。周囲を一瞥する。今夜の会食の会場となったのは、グラハムの私邸であり、彼の現在の地位と持ちうる権力を象徴するかのような豪邸の一室に、クオンたち《白き盾》の幹部は揃っていた。クオン以外には、スウィール・ラナガウディ、マナ・エリクシア、ウォルド・マスティア、イリスといった顔触れであり、皆いつもの黒装束ではなく、この会食のためだけに急遽調達したドレスやスーツを身に纏っていた。

長大なテールを囲む彼らの背後には男女の給仕が立ち並んでいるのだが、給仕たちの手には、いつの間にか様々な得物が握られていた。その目には殺気が宿り、グラハムの号令ひとつで飛びかかってくるだろうことは明白だった。

クオンは、グラハムの周囲の騎士たちが静かに立ち上がるのを認めながらも、こちらの仲間がだれひとりとして反応しないことに満足感を覚えていた。ウォルドはテールに並ぶ豪華な料理を次々と手にとって口に運び、マナはスウィールの講釈を上手に聞き流し

ながら食事をしていた。イリスに至っては、周囲からの殺意よりも自分の格好が気になって気になって仕方がないという有様だった。《白き盾》のだれもが、騎士団長の愚行を気にも留めてなかった。

それは偏にクオン「カミヤがその場にいるからだろう。

クオンは、こちらの態度にイラつき始めたグラハムの目を見据えた。ベレル王家に忠誠を誓う騎士の長は、冷静さを失っているわけでもなければ、状況を理解していないわけでもない様子だった。こちらの余裕綽々といった態度が彼の思惑からかけ離れていたことで、多少のシヨックは受けたかもしれない。

「ですけど、これではばくちを脅すことは愚か、殺すこともできませんよ」

脅すつもりならばもっと凶悪な罠でも仕掛けるべきであり、殺すつもりならば即座に片をつけるべきである。

クオンは、グラハムたちの失策を自分のことのように想い、残念がった。クオンが彼の立場ならば、脅迫などという手段は取らなかつただろう。そんなことで首を縦に振る《白き盾》ではなかつたし、その事実はいくらまでの活動や態度で示してきたはずだった。

もちろん、《白き盾》を戦力にしたいグラハム側としては、なんとしてでもクオンたちを掌中に収めたいと考えたのだろう。通常ならば到底逃げ出せない状況さえ作り上げた上で命を脅かせば、たとえどれほど強固な信念も折らざるを得ないと考えたのかもしれない。その上で尚反対するのであれば、殺害も已む無しとしたのだろう。《白き盾》を失うのは大きな痛手だが、敵に回る可能性を残すよりは余程良い。

彼らの出した結論もわからなくはない。

だが、それは傭兵という存在を根本から否定する考え方であり、ましてや《白き盾》の理念に真つ向から対峙するものだった。

クオンは、いつものように微笑した。穏やかで清らかな心持ちのまま、グラハム・ザン「ノー」ディスを見やる。彼は、怪訝な表情をしていた。こちらの意図がわからないはずはないのだが、クオンの

表情を見て、気でも狂ったのか、とでも想ったのかもしれない。

静かに口を開く。舌に乗せるは呪文の末尾。術式を完成させる一つの言葉。魔法を結実させる神秘の言葉。

「武装召喚」

魂の奥底より呼び起こされた力が、激しくもたおやかな光の奔流となつてクオンの全身を、意識を包み込んでいく。扉が開くイメージ。こことは異なる世界から、なにかとてつもなく強大な力が召喚されようとしている。

声が聞こえた。

「やれえ！」

どこか上擦つたような騎士団長の叫びは、彼の本質としての軽さの表れのようにもあつたが、クオンはその軽さこそが人間的な弱さであり、だからこそひとは皆愛しいのではないかという考えに至つた。

なにもグラハムだけが特別愛しいのではない。彼に付き従う騎士団の幹部たちも、武器を手にした騎士団員たちも、《白き盾》の仲間たちも、皆一様に愛しいのだ。

だからこそ、だれひとりとして失いたくない。傷つけたくないのだ。

綺麗事であろう。

しかし、彼は自嘲しない。綺麗事という言い分を否定もしないが、かといって己の信念を曲げるつもりもなかった。無論、戦うということは敵も見方も傷つけるということに他ならないということもわかつていたし、それを承知で傭兵集団を率いている。戦争を食い扶持とする傭兵稼業など、彼の理想からは程遠い存在に違いない。

だが、それでも彼は《白き盾》を掲げた。血と死の臭いが蔓延する戦場にみずから飛び込んだ。他に方法がなかったわけではないはずだ。他に手段がなかったわけではないはずだ。もっと冴えたやり方があつたかもしれない。

(でもぼくはこの道を選んだ)

クオンは、己の全身から拡散した膨大な量の光が、彼の理想を体現する武装を構築していくのを認めた。
そして、《白き盾》が顕現した。

第六十八話 シールド・オブ・メサイア

「武装召喚」

クオンがつぶやくように口にしたその一言とともに全身から迸ったのは、莫大な光だ。この世のものとは思えないほどに神秘的で鮮烈な閃光。一瞬にして室内を純白に塗り潰し、目を開けていたものたちの視覚を狂わせた。これでは騎士団長が号令を発したところで行動に移りようがなかっただろう。どれだけ研ぎ澄まされた殺気が閃こうと、目標の位置が把握できなければ攻撃することもままならない。

膨大な光は瞬く間にクオンの右手に収束し、傭兵集団《白き盾》の象徴にして、その名前の由来たる純白の盾が顕現する。数多あるというイルス・ヴァレとは異なる時空、異なる次元よりの召喚である。

純白の盾。

それは見事なまでの真円を描いていた。半径三十センチほど。決して大きな盾ではなく、敵の攻撃を受け止めるには多少心許ないように見えた。しかし、召喚武装なのだ。見た目ではその性能を推し量ることはできない。もつとも、使い慣れたクオンにしてみれば、その頼りない形状にこそ安心を覚えた。

召喚の成功によって、敗北は無くなった。

盾の表面には、複雑な紋様が刻まれている。無数の言葉によって構築された魔方阵のような紋様。それがなにを意味するのかクオンですらわからなかったが、少なくともこの世界のものではないようだった。ましてや、武装召喚術を行使するために必要な古代言語ですらないらしい。この盾の在るべき世界の言葉なのかも知れない。

ともかくも、その至ってシンプルな盾を手にした瞬間、クオンの感覚は冴え渡った。意識が急激に肥大し、視野が急速に広がった。意識は肥大するだけではない。膨大化しながらも尖鋭化していくと

いう矛盾を孕みながら、体の隅々にまで力を漲らせていく。

研ぎ澄まされた感覚が脳裏に投影するのはこの空間の現状であり、凶器を携えた騎士団員たちが閃光に戸惑う様であり、平然とした態度を崩さない彼の仲間たちの姿だ。声を裏返らせて号令を発したグラハムの表情は、しかし騎士団長としての威厳を微塵も失ってはいなかった。居並ぶ騎士団の幹部連中は、騎士団員たちと同様、召喚の光に視界を奪われているらしいが、かといって油断のできる相手でもない。

そして、複数の息吹がクオンの耳朵に届いた。給仕に扮した騎士団員たちが、一斉に動き出したのだ。肉体の躍動。得物の切っ先から迸るのは鋭い殺気。正常に視覚が働かずとも、動かない獲物ならば狙うのも容易いということだろう。

殺意は、クオンの背後からも迫ってきている。

「盾よ」

クオンは、密やかに命令するのとともに後方を振り返った。給仕の格好をした女の双眸が、驚愕に見開かれている。彼女は、手にした短剣をクオンの脇腹に突き立てることに成功していた。しかし、短剣の切っ先がクオンの身に纏う衣装を突き破り、あまつさえ皮膚を貫き内蔵を傷つけるようなことはなかった。だからこそ給仕の女は愕然としているのだが。

もつとも、驚愕したのは彼女ひとりではない。クオン以外の目標に襲い掛かった連中も、必殺の一撃を無力化されて驚きの声を上げていた。無力化。そう無力化である。研ぎ澄まされた短剣の一突きも、鋭利極まりない剣の一閃も、《白き盾》の一員に傷ひとつ負わせることもできなかつた。刀身が皮膚に触れているにも関わらずだ。クオンは、なにが起きているのかわからないといった様子の刺客に憐憫の情を覚えないでもなかつた。相手にしてみれば、冗談ではないといったところかもしれない。剣は、目標に届いている。致命的な一撃になるはずだったのだ。それが掠り傷さえ負わせることもできないという結果になれば、少なからず混乱してもおかしくはな

いだろつ。

「なぜだ……!?」

女の疑問ももつともだ。クオンは彼女の問いに答えてあげたくなつたが、敵に己の能力を丁寧に解説してやるほど愚かな行為はないと思ひ直した。もつとも、この盾の力を説明したところで彼の有利は覆らないし、そのような心配をする必要もない。盾が顕現し、力が発動した以上、恐れるものなど何一つなかった。

彼は、自分の脇腹に突き立てられたままの短剣を左手で軽く退けると、悠然と騎士団長に向き直りつつ周囲の状況を確認した。

ウオルドたちもさすがにくつろいでいる場合ではないと悟つたのか、皆一様に立ち上がり、かといって威嚇するでもなく敵の攻撃を受け止めたり、交わしたりしていた。戦場に同行することの少ない（そもそも戦闘が本分ではない）スウィール・ラナガウデイの顔は、この上ないほどに青ざめていたが。

ウオルド・マスティアは、給仕たちに突きつけられた剣をどうしたらいいものかと持て余していた。先に手を出されたとは言え、おもむろに反撃することも躊躇われるというこちらの立場を彼も理解しているのだ。ここはベレル王国にて権勢を誇る騎士団長の私邸である。正当防衛であろうとも、騎士団長側の見解こそが正義であり、クオンたちがどれだけ正論を並べ立てても国家権力の前では無力だ。盾を掲げるクオンたちに対する彼らのように。

そして、彼らがクオンたちにとって脅威ではなくなった以上、無闇に手を出すべきではなかった。彼らを傷つける意味もない。既に無力化しているのだ。彼らがどのような手段を取ろうとも、盾を掲げたクオンに危害を加えることはできない。

マナ・エリクシアとイリスのふたりも、殺到してきた給仕たちに手を出していないところを見ると、こちらの意を汲んでくれているようだった。一方、奇襲の一撃を完全に受け止められた給仕たちは、一瞬なにが起きたのかわからなかったに違いない。クオンが召喚した盾の力に防がれたとは思ひもよらないだろう。

「なにをしている！ やれ、やるんだ！」

グラハムの威厳に満ちた怒声は、むしろ彼の軽さを際立たせるもののようにクオンには感じられたが、給仕に扮した騎士団員たちを思考停止から立ち直らせるには十分すぎるほどの迫力を持っていた。給仕たちが一斉に動いた。

「はあっ！」

「でやっ！」

「どりゃあっ！」

轟く気合。

閃く剣光。

いくつもの斬撃、数多の刺突しつぷがクオンたちに襲いかかってきたが、彼らの肉体が傷つけられるようなことはなかった。またしても、盾の力が敵の攻撃を阻んだのだ。全身を覆うように展開する見えざる壁が数多の刀剣による連続攻撃を受け止め、けたたましい激突音を室内に散乱させた。

クオンは目を細めた。破れるはずもない障壁に向かって武器を叩きつけるしかない給仕姿の騎士団員には、同情せざるを得なかった。盾は、無敵。

そして、盾の力が及ぶ範囲にいる限り、クオンも彼の仲間たちも傷つけられることはない。むしろ、盾が作り出す防壁に叩きつけられた刃物こそ損傷し、その切れ味を失っていくだろう。

それが白き盾の能力であり、傭兵集団《白き盾》の強さの根源だった。クオンが白き盾を召喚したとき、《白き盾》は不敗の存在、無敵の集団となるのだ。かつて、ログナーの軍勢がバルサー要塞を陥落させることができたのは、この白き盾の力が、ログナー全軍に作用し、ガンディア軍の攻撃を無力化したからに他ならない。

（そう。これがシールド・オブ・メサイアの力）

クオンは、騎士団長に命じられるままに、がむしゃらに武器を叩きつけてくる騎士団員たちを一瞥すると、グラハム・ザンノードイスを探した。つい先ほどまで対面の席に腰を落ち着けていたはず

の騎士団長は、幹部連中とともに室外に退去でもしたのか、影さえも見当たらなかった。しかし、クオンの拡張された聴覚が、無数の靴音がこの部屋に向かってくるのを捉えていた。グラハムがこうな
ることを見越して、私邸の内外に伏せていた人数に違いない。

その数は優に百を超えており、たかが傭兵集団の幹部たちを暗殺するには大仰な戦力だと思われたが、同時にクオンたちをある程度は評価していることの表れでもあったのかもしれない。

彼は苦笑した。

(それでも足りない)

クオンは、純白の盾を見下ろした。盾が発散する淡くも神々しい光は、それがこの世のものではないということを実に表しているようでもあった。穢れなき光。魂を守護し、昂揚させる大いなる輝き。勝利を約束するもの。

給仕姿の騎士団員たちが、一斉に攻撃の手を止めた。まったく通用しないことを悟ったのだろう。その表情には疲れが見えた。武器を振り回すだけで体力が奪われたに違いない。そして諦観が覗く。それは絶望にも似ていた。どれだけ武器を叩きつけても、見えない壁に阻まれ、傷ひとつ付けられないのだ。その上、クオンたちが反撃に出る様子もない。この状況で相手がなにを考えているのかわからないのは、不気味に他ならない。

不意に、スウィールが囁くように問いかけてきた。

「どうなされるおつもりですか？」

「そうだね。とにかくこの状況を終息させたいかな。ベレルと事を構えるのは本意じゃない」

「もう手遅れじゃないですか？」

ウォルドの心底呆れたような声にクオンは首を振った。

「いや……」

「クオン様のお考えもわからなくはないですが、ベレルが総力を以て我々を潰しにかかってきた以上、交渉の余地はないのではないのですか？」

「これが王の意志ならば、ね」

クオンはマナの端整な横顔を見遣りながら、ベレル国王イストリア・レイ「ベレルの意志の薄弱そうな顔を思い浮かべていた。かつては英気滂刺としていたというのだが、年を取るとともに病気がちになり、床に伏せることが多くなってからというもの、すっかり弱気になってしまったというのがもっぱらの評判であり、事実、クオンがイストリア王と会見したときも、王の視線が一点に定まることはなかった。

かの王の眼は、猜疑心に満ち、身内は愚か己さえも信用に値しないとも言いたげなものであり、対峙するだけで息が詰まりそうだったのをクオンは記憶していた。そして、その瞳の奥底に揺らめく魂の儚さも覚えている。

「王の意志ではないと？」

「イストリア王がぼくらを王都に招いたのは、何故だと思う？」

「単純に戦力が欲しいからじゃないですか？ 噂じゃあ、ジベルがザルワーンと同盟を結ぼうとしているって話ですし」

ジベルはベレルの東にある国であり、ザルワーンの隣国でもあった。もし両国が同盟関係となれば、西をログナー、北をザルワーン、東をジベルに押さえられることになり、ベレルからしてみれば溜まったものではなかった。

ザルワーンとログナーの二国を相手にするのでさえ大変なのに、そこにジベルが参加してくるなど考えたくもないだろう。存亡の危機といっても過言ではない。

しかし、そうなるたたかが一傭兵団を引き入れたところで如何ともしがたいのではないだろうか。《白き盾》が如何に無敵とはいえ、局部的勝利だけでは大勢を覆すことはできない。無論、王都ルーンベレルだけを守護するというのならばできなくもないが、それもいつまで持つものか。

それに、ジベルとザルワーンの同盟の話は噂の域を出ないのだ。イストリア王の様子を見れば、その噂を疑いながらも同盟成立によ

る圧倒的兵力の流入という恐怖に駆られ、正常な判断ができなくなったとしても、必ずしも不思議ではないが。

クオンは、無数の足音と殺気が室外に殺到しているのを感覚で把握しながら、室内を一瞥した。給仕たちは、武器を構えながらも仕掛けてくる気配はなく、仲間との合流を待ち侘びているようだった。どれだけ数が増えようと、盾を砕けない以上、状況に変化は訪れないのだが、それはわからないのだろう。

彼は、いつの間にか周囲に集まっていた仲間たちを見た。スウィール、ウォルド、マナ、イリス。当然、だれひとり負傷していない。「もちろん、それもあるんだろうけれどね。でも、それだけじゃない気がするんだ」

クオンは、顔色の悪い王の面差しを思い浮かべていた。疲れ果て、疑心暗鬼に陥っていた老王の生気のない瞳の奥底で、彼の小さな魂が救いを求めるかのように揺らめいていた。安息を求めていた。魂の安らぎ。だれかを疑う必要なく、なにかに脅える必要もない、そんな日々を求めている。

だからこそ、《白き盾》などというしがたない傭兵団にすら縋りついてきたのだろう。いや、むしろ《白き盾》に縋りつくだけの価値を見出したからこそ、直接ルーンベレルに招いたのかもしれない。だとすれば、ここひと月ほどの活躍が認められたのだろうが。

確かに、ベレルと契約してからというものの、クオンたちの活動は目を見張るものがあったはずだ。自画自賛するわけではなく、冷静に見て、そう判断する。ベレル国内の皇魔の巢おうちまという巢を滅却し、国内に蔓延る皇魔を限りなく駆逐したのだ。完全無欠とはいかないが、それでも、人里が皇魔の群れに襲われるような事例が起こることとはなくなっただけである。

後顧の憂いを断ったといってもいいのかもしれない。

それにより、ベレルは皇魔という人外異形の化け物の脅威を考慮する必要はなくなり、戦力を対皇魔のために割くことも不要となったのだ。これは、小国において重大な変化に違いない。

そして、クオンたち《白き盾》も戦線に加わることになるはずだった。

国土防衛にせよ、敵国への侵攻にせよ、《白き盾》の参戦は、この国に数多の勝利を約束するに違いなかったのだ。

クオンが純白の盾を掲げる限り、敗北はありえないのだから。

(どうしてこんなことに?)

クオンが首を傾げるのも当然だった。

クオンたちがベレル王国騎士団と対立する理由などなかったのだ。片や有名とはいえしがない傭兵集団であり、方やベレルの主力にして最高戦力たる騎士団である。協調こそすれ、敵対することなどあってはならないのだ。傭兵が雇い主に背くなどみずから職を手離すようなものだ。そしてその事実が流布されれば、《白き盾》の今後の活動に支障をきたしかねない。

どれだけ実力をもっていようと、自国の軍と衝突し、問題を起こすような連中など雇いたくもないだろう。

だからこそ、クオンは雇い主側である騎士団との間に摩擦が起きるような行動は取らなかつたし、これからも取るつもりはない。しかし、現状はどうだろう。

摩擦が生じ、衝突が起きた。

望まざる事態。打開する方法も見当たらない。

そもそも、クオンたち《白き盾》が、ベレル王国騎士団長グラハム・ザン＝ノーデイスと会食することになったのは、グラハム側からの申し出によるものであった。

《白き盾》は、ベレルの首都ルーンベレルに拠点を移したばかりで色々忙しい時期ではあったが、騎士団長直々の申し出を断るわけにもいかず、クオンが選んだメンバーとともに招きに応じることになったのだ。

グラハム・ザン＝ノーデイスが騎士団長という地位にあるだけでなく、ベレルの国政に口出しできるほどの権威を持っているという情報は、この国に来てすぐに得た情報だった。

それもそのはず。現在の王妃ミスレ・レアは、ノーデイス家の出身であり、グラハムの叔母に当たる人物なのだ。グラハム・ザン・ノーデイスは、彼女の後援を受けて現在の地位と権威を得たという。とって、悪い噂があるわけでもない。彼個人は、ベレル王家に忠誠を誓う騎士の中の騎士として、国中から信望を集めている。

ベレルを代表する人物といってもいい。

そんな彼の誘いを無碍に断ることは、ベレル国内での《白き盾》の立場を危うくするということと同意であり、この国で無用な摩擦や問題を起こしたくはないというクオンたちの考え方からすれば、会食の招きに応じるのは当然の道理であった。また、ベレル国内で活動する上で騎士団との繋がりを強くするということは、必ずしも無駄にはならない。

しかしながらクオンたちは、騎士団長を始めとする騎士団幹部との会食のためにそれなりの衣装を用意するところから始めなければならなかった。前線で戦うことを生業とする傭兵らしく、パーティーなどとは無縁の生活を送ってきたのだ。もちろん、いままでにそういった誘いがなかったわけではなく、クオンは幾度か祝勝パーティーや舞踏会に顔を出したこともあった。しかし、そういったパーティーに参加するのは大抵クオンだけであり、ほかのメンバーが招待されたことはほとんどなかった。あっても副団長のスウィールがマナくらいのものである。

故に、衣装を用意しなければならず、そのためだけにルーンベレルを駆け回らなければならなかった。

「痛い出費ですな」

スウィールはラナガウデイのふとした一言が、クオンの耳に痛かった。しかも、これからこの《白き盾》という組織を大きくしていくのならば、こういった付き合いによる出費も増えていくことにならざるを得ない。そしてそれは、《白き盾》の活動方針に重大な影響を与えかねないかもしれないのだ。

資金力不足が原因で本来の目的を見失うなど、あつてはならないのだ。

(それだけはできない。決して)

そう強く決意してはいるものの、いまも似たようなものではないかと自嘲しないこともない。目的を見失いかけているといつても過言ではないのか。傭兵という立場に囚われて、なにもできていないのではないのか。

頭を振ろうにも、否定する要素も見当たらない。

目的に向かって前進しているのか、クオン本人にすらわからなかった。

騎士団長との会食は、現状から半歩でも前に進むことになるのだろうか。

会食は、グラハム・ザン^{II}ノーデイスの私邸で行われた。その豪華な屋敷は首都ルーンベルを見渡すことのできる丘の上であり、いかにも権力者が住んでいますといわんがばかりの立地条件だった。権力を握ったものは、高所を好むという。

《白き盾》から参加したのは、団長クオン^{II}カミヤを始め、副長スウィール^{II}ラナガウデイ、マナ^{II}エリクシア、ウオールド^{II}マステイア、イリスの五名である。皆、借り物の衣装に袖を通していた。

クオンはどこぞの貴公子のようだと皆に絶賛されたものの、本人にはまったく実感できない評価だった。そもそも堅苦しい格好は嫌いなのだ。普段着でいるほうが、気楽でいい。無論、時と場合を弁えるのは当然の話だ。

スウィールは、前途眩しい若者たちの引き立て役にでもなるうかなどと一見すると地味な衣装を身に付けていた。彼らしいといえれば彼らしい判断であり、クオンたちに口を挟む余地はなかった。筋骨隆々のウオールドには少々窮屈な思いをしてもらわなければならなかったが、それも致し方ないことだ。彼に合うサイズの衣装が見つからなかったのだ。だったら自分は拠点で留守番するといっ

てきたのだが、ワールドもまた、向こう側から名指しで招待されている以上、連れて行かないわけにはいかなかった。

マナのドレス姿にはただならぬ気品があり、彼女が一般家庭で育ったわけではないということを実に現していた。もっとも、それは普段の立ち居振る舞いを見ていればわかることだ。彼女が上流階級の出であることは、周知の事実だった。家名からしてそうである。武装召喚師を志すものならば知らぬものはないというほど高名な一族の出身なのだ。

そしてイリスは、マナがルーンベレル中を駆けずり回り、その上で厳選に厳選を重ねたという衣装を身に纏っていた。当初、イリス自身は、『白き盾』特製の服装で十分だと思っていたが、マナの説得と懇願によって着替えることを承諾したのだった。

マナがイリスに似合うとあって太鼓判を押した服装とは、黒を基調としたドレスであり、その大胆かつ繊細なデザインは、背德的、退廃的な雰囲気を漂わせていた。ゴシック・アンド・ロリータ風の衣装とでもいうべきか。イリスが着るのを嫌がっていた理由の多くは、その見た目にあったのかもしれない。気恥ずかしそうに頬を紅潮させるしかないといった彼女の様子が、それを物語っていた。

相手側は、主催者のグラハム・ザン・ノーデイス以下王国騎士団関係者ばかりだった。副団長アッシュ・ウィンベールを始め、各部隊の隊長たちである。ミラン・クラス、ワイズ・マッドレイ、シックス・ライム。誰も彼も、屈強な戦士というよりは純粹培養の貴公子といった風情を漂わせているのは気のせいではないだろう。ベレル王国騎士団で隊長以上になるには、貴族でなければならないという。

故に騎士団長を含め、クオンたちと対面したものは全員貴族の出身であり、身に付けている衣装も見るからに高級品だった。クオンたちが身に纏う借り物の衣装と比べるべくもない。その上、普段から着慣れているのか、上流階級特有の教育の賜物なのか、だれもが衣装を着こなせていた。豪華な衣装に負けておらず、その上立ち居

振る舞いも優雅だった。

形式に則った挨拶を終えた一同は、多少の緊張感に包まれながらも会食を始めたのだった。

最初は、当たり障りのない話だった。退屈極まりない社交辞令的なやり取り。《白き盾》のベレル国内における活躍に対するありふれた称賛であり、クオンたちにとっては聞き慣れた賛辞の羅列に他ならなかった。

次に話題となったのは、《白き盾》の今までの活動についてだった。傭兵団としての戦いの記録。クオンは、半年前のバルサー要塞での戦いに関する言及についてこそ返答を濁したものの、《白き盾》設立以降の質問については出来る限りの範囲で答えたつもりだった。

そして話題が《白き盾》の未来へと移ったのは、(グラハムたちの目的がそれであつたにせよ)ある意味当然の結果だったのかもしれない。クオンにしても予想だにしなかつたわけではない。話題としてはありふれたものだ。だが、騎士団長グラハムの求めるものが《白き盾》から自由を奪い去り、大いなる目的への道を閉ざすものだとなつたとき、クオンは、拒絶した。

拒絶せざるを得なかつたのだ。

グラハムの望みは、《白き盾》がベレルの軍門に下ることであり、騎士団の支配の下、制御・運用されることだったのだ。

《白き盾》は、傭兵集団である。国家という枠組みに囚われず、自由を謳い、自在に飛翔する組織である。なにものにも支配されざる独立機構。だれにも支配されず、だれにも操られず、だれの思惑も関係なく、あるがままに大陸を駆け巡る一個の集団。それこそが《白き盾》であり、クオンの夢の形だった。

国家とは契約こそすれ、権力に支配されるつもりはなかつた。それでは、彼の望みも適わない。大陸を駆け回ることでもできなければ、すべての弱者を救うこともままならない。

だからこそ、彼は拒絶した。にべもなく跳ね除けた。騎士団長が顔色を変えようと構いはしなかった。これだけは譲れない。

《白き盾》は、なにものにも支配されてはならないのだ。

上天に輝く白き太陽の如くすべてを遍く照らすには、だれかのものであつてはならない。

故にクオンは、グラハムの要請を一蹴した。結果、騎士団との関係が悪化しようとも仕方がなかった。騎士団や雇い主との関係性を考えるあまり、《白き盾》の理念を失うなど本末転倒以外のなにものでもない。

が、その交渉決裂がこのような事態を招くとは思つてもいなかった。

グラハムが、それほどまでに短慮な人物だとは考えてもいなかったのだ。

「……様！ クオン様！」

図らずも遊離した彼の意識が過去への飛翔から帰還を果たすことができたのは、偏にマナ・エリクシアのいつもと異なる大声のおかげだったのかもしれない。常に穏やかな微笑みを湛える彼女が叫んだからこそ、即座に非常事態なのだと認識し、幻想の海から躊躇なく帰ってくることもできたのだ。

現実への帰還とともに把握したのは、視界の端を焼く紅蓮の色彩であり、なにかが爆ぜる音であり、色々なものが焼ける臭いであり、周囲を取り巻く騎士団員たちの愕然とした表情だった。まるで、青天の霹靂にでもあつたかのような表情を浮かべるものもいれば、蒼白な顔に悲壮な決意を漲らせるものもいた。

マナやイリスたちは騎士団員たちほど絶望してはいないが、盾の力に守られているという絶対的な事実からくる余裕を失いつつあつた。

グラハムたちが、屋敷に火を放つたのだ。

第六十九話 差し伸べる手

「やってくれるね」

クオンは、瞬時に理解した。

グラハムたちが屋敷に火を放ったのだ。騎士団長グラハム・ザン
|| ノーデイスの私邸は、今や紅蓮の猛火に包まれつつあった。凄ま
じい炎の勢いは、この豪壮な邸宅を一夜にして灰燼に帰しかねない。
盾の力によって肥大したクオンの感覚が、その絶望的ともいえる状
況を冷ややかに把握していく。

騎士団員たちを邸内に大量に投入したのは、この策　などと呼
べるものでもないが　があつたからだろう。広いとはいえ、屋敷
の中に所狭しと配置された人員は、その戦果を期待してのものでは
なかつたのだ。

言うなれば、邸内に投入した騎士団員のひとりひとりが、クオン
たちの脱出を阻む障害物なのだ。逃げ場のない空間である。交戦は
避けられない。そして、その戦闘のすべてを一瞬で終わらせること
ができたとしても、それでいいという話ではない。そもそも、すべ
ての敵を一刀の元に切り捨てられるはずもない。

クオンもスウィールも、敵を倒すような戦闘では役に立たない。
邸内に投入された戦力を撃破しながら脱出するには、マナ、ウォル
ド、イリスの三人だけでは少々心許なかつた。

(いや)

クオンは、胸中で頭を振った。相手がただの騎士団員ならば、勝
算は十分にある。なんとといっても、こちらは《白き盾》である。無
敵の軍団、不敗の軍勢などと呼ばれる傭兵集団である。マナがスタ
ーダストを振るい、ウォルドがブラックファントムを叩きつければ、
それだけでこの状況から抜け出せるに違いない。

哀れな騎士団員たちの屍を越えて、だ。

クオンは、またしても頭を振った。それではいけない。魂が叫び

声を上げている。それでは駄目だ。

炎は、まだこの部屋に侵入してはいない。しかし、室外から流れ込んでくる熱気と煙が、世界を塗り替えようとしている。地獄のよ
うな光景、というのも言い過ぎではないだろう。紅蓮の猛火に包ま
れた屋敷の中、逃げ場はなく、いるのは敵対者だけ。しかし、だれ
も騒いではいない。悲鳴を上げるものも、悲嘆に暮れるものもいな
い。といって、予定通りという顔をしたものもない。

騎士団員たちは、捨てられたのだ。

グラハムの冷酷な決断は、彼らの命をクオンたちもろとも焼き尽
くすつもりなのだ。

それでも彼らが騎士団長への非難ひとつ口にしないのは、グラハ
ムという男の本質を知っているからなのか、どうか。単純に、いま
こんなところで文句をいっても仕方がないということかも知れず、
グラハムの意見に同調しているからかもしれない。即ち、ここでク
オンたちを始末しなければ、いずれベレルにとって大きな災いにな
るだろうという強迫観念にも等しい考えである。

その考えは必ずしも間違いとは言い切れない。だが、それは最初
からわかっていたはずなのだ。傭兵など、契約期間中のみの関係だ
というのは、当然理解してしかるべき話だ。でなければ、傭兵とい
う職業そのものが成り立たなくなる。傭兵とは、この戦火の絶えな
い大陸において一般的な職業とっていいのだ。

グラハムの考えは、その傭兵の在り方を否定するということに他
ならない。もちろん、彼がクオンたちを抹殺するという結論を出し
たのは、《白き盾》の実力が他と比べて突出しているからというの
もあるのだろう。

クオンは、静かに嘆息を浮かべた。無敵すぎるのも考え物かもし
れない。

「クオン様？」

「だいじょうぶだよ」

クオンは、マナに向かって軽く笑いかけた。濛々と立ちこめる煙

と灼熱の渦が、彼女の顔から冷静さを失わせているように見えた。確かに冷静ではいられないだろう。団長であるクオンが命令を下していない以上、なんらかの行動を取ることもできないのだ。無論、盾の力が働いている以上、熱気は感じこそすれ、炎に焼かれるようなことはない。しかし、空気を奪われればどうしようもない。

騎士団員たちも恐るべきものではない。どれだけ悲壮な覚悟を決めようが、盾を掲げるクオンたちの敵ではなかった。

この空間に満ちた空気が焼き尽くされたときこそ、クオンたちの命数が尽きるのだ。

騎士団員たちを見遣る。室内には給仕姿の騎士団員が十数名と、室外から突入してきたのであろう甲冑姿の連中が無数にいた。彼らは、この轟然たる熱気の中で武器を構え、しかし攻撃することも適わず、こちらの様子を見守っていることしかできないという有様に絶望しているのかもしれない。

攻撃が無駄だというのはわかりきっているのだ。どれだけ力を込めて武器を叩きつけても、クオンたちには傷ひとつつかない。それどころか、突きつけた武器こそ刃こぼれし、使い物にならなくなっていくのだ。これではやりようがない。

クオンは、盾を頭上に掲げた。真円を描く純白の盾。《白き盾》の象徴にして、力の根源。彼がここに在る理由。彼のすべて。

「盾よ、謳え」

敵や仲間の視線が集中する中、彼は、盾の力を解き放った。純白の盾が鮮烈な輝きを発する。紅蓮の炎に曝された空間にあっても鮮やかで強烈な光は、瞬く間に世界を白く染め上げた。それは一瞬。鮮やかでありながらも柔らかなさを失わない閃光が、邸内を照らしたのは一瞬の出来事に過ぎない。しかし、それだけで十分だった。

クオンは、なにが起こったのかわからず啞然とする一同の様子を認めて、満足げにうなずいた。彼らが理解できないのも当然だろう。盾の力でなにをしたのかなど、クオンにしかわからないことだ。いや、武装召喚術に精通しているものならば、正解に辿り着くことも

あるかもしれない。が、少なくとも、マナモワールドも感づいていない様子だった。視線で説明を求めてきている。

クオンが口を開こうとしたそのとき、騎士団員たちが突然気配を乱した。殺気がクオンたちに向かって飛来してくる。痺れを切らしたのかもしれない。

燃え盛る邸内。逃げ場はない。いや、彼らとしては逃げることも許されない。彼らは捨て駒である。捨て駒であり、《白き盾》の幹部たちを抹殺するために用いられた計略の一端を担っている。命を賭してでも、クオンたちの脱出を阻み、屋敷とともに焼き尽くされなければならぬ。それが嫌ならば、可及的速やかにクオンたちを殺害するしかなかった。

クオンたちを放置してここから脱出するという選択肢は、ない。彼らは騎士団の一員であろう。騎士団の支配者たるグラハムの目論見に背くということは、騎士団への背信行為であり、反逆であるともいえる。どのような仕打ちが待っているのかわかったものではない。

炎の中で焼け死ぬよりも惨たらしい結末が待っていないとも限らない。

ならば、いつそ と、覚悟を決めたのだとしても何の不思議もなかった。無論、クオンにはその論理はわからなかったし、理解したいとも想わなかった。ただ、哀れだと想った。できるならば、彼らも救いたいと想っている、

「うおおおおおおお！」

獰猛な咆哮とともにクオンに向かって殺到してきたのは、甲冑を纏った騎士団員だった。熱気の中、甲冑の中は正に燃えるようになってきているに違いない。野太い声。男だろう。手にした大振りの剣を振り被り、クオンに叩きつけようとしていた。相手は、盾の力を知らないのかもしれない。

クオンは、気合とともに振り下ろされた剣の太刀筋に見とれながらも、その一閃が自分を切り裂くことはないという事実を知ってい

るため、なんら反応を示さなかった。敵の刃が右肩に触れるのを見届けようとしなない。むしろ、彼の行動が停滞していた室内の状況を一変させたことを喜んでいた。

騎士団員たちが、一斉に動きだしたのだ。給仕姿の連中も、武装した騎士団員たちも、クオンたちを包囲殲滅するための布陣を取ろうとする。広い空間。そのほぼ真ん中に集まったクオンたちを包囲するのは、必ずしも難しいことではない。

渦巻く猛火が、視界の端を赤々と彩っていた。あまり時間は無い。重い金属音が、クオンの鼓膜を震わせた。騎士団員の剣が、クオンの肩に触れようとした瞬間、盾の力によって弾かれたのだ。兜の影に隠れているはずの騎士団員の目が、驚愕に見開かれたのが、なんとはなしにわかった。

他にもいくつか剣戟の音色が響いた。マナやウォルドたちが攻撃されたのだろうが、無傷に間違いなかった。

「やめましょう」

クオンは、目の前の男に向かって話しかけた。騎士団員はぎょっとしたようだったが、構わずに続ける。

「ご覧の通り、あなたがたの武器では、ぼくらを殺すことは愚か、傷つけることもできません。それは、理解できるでしょう？」

クオンは、騎士団員たちを見回した。給仕姿の騎士団員たちの素肌からは大量の汗が流れ落ちていた。発汗は体力を奪うものだが、その点に関してはもはや心配する必要はないだろう。盾の力に守られたクオンたちは、吹き荒れる熱風の中でも汗ひとつかいていなかった。

眼前の騎士団員は、盾の力に弾かれた剣を構えなおしている。聞く耳も持たないというつもりなのか、どうか。その剣先がわずかに震えているのは、この絶望的な状況が原因なのかもしれない。

「グラハム・ザン＝ノーデイスの目論見がぼくらの抹殺であるのだとしても、あなたたちではそれを果たすことができない。盾の加護がある限り、ぼくらは無敵なのだから」

「し、しかし、ここで足止めしておけば……！」

眼前の男の台詞に、クオンは、ただ微笑を浮かべた。

「確かに、それならばくらを殺せるでしょうね。空気がなければ、人間は生きていくことができない。ですが、それはあなたがたの死をも意味します。命を捨てる覚悟はありますか？」

「覚悟なら、とづくにできている！」

「そうか。だが、そっちがその気なら俺たちだって黙ってはいられないんだぜ？」

そういったのは、ウォルドである。彼の獰猛なまなざしは、騎士団員を射竦めるには十分すぎたのかもしれない。ただの男の持つ眼ではない。百戦錬磨の戦士のみには許される眼光だった。

「そうですね。こんなところで焼け死ぬなんて、考えたくもありませんわ」

「クオンは、護る……！」

マナとイリスが、クオンの左右を守るように並んだ。ふたりの放つ殺気だけで、騎士団員たちの接近を防げそうなほどだった。彼女らも歴戦の猛者である。クオンなどより余程修羅場を潜り抜けてきたに違いなかった。

クオンは、スウィールがウォルドの背後で汗を拭っている様子を見遣ってから、目の前の男に視線を戻した。彼は、こちらの気配の変化にこそ驚いていた。ついさっきまで戦う素振りさえ見せなかった連中である、その変化はあまりにも大きく、ひとによっては腰を抜かしかねないものがあつた。

「皆さんが命を賭してでもぼくたちの脱出を阻止するというのは、それでも構いません。皆さんの屍を越えて脱出するだけです。ぼくたちは《白き盾》。不敗にして無敵の傭兵集団。この程度の状況、どうとでもなるんですよ」

クオンは、冷やかに告げた。事実を通告したに過ぎない。盾の保護下にある以上、戦闘においてクオンたちが負けることはありえないのだ。そして、マナとウォルドが武装召喚術を行使し、イリス

がその戦闘技能を発揮すれば、状況は一瞬で変化するだろう。辺りは瞬く間に血の海と化し、地獄というに相応しい光景へと激変するのだ。

その未来は、彼の本意ではないのだが。

騎士団員は、クオンの言動に気圧されたかのように黙り込んだ。渾身の一撃がまったく効果がなかったという事実が、クオンの言葉に重みを与えていた。さらに言えば、クオンたち《白き盾》が今日までに積み重ねてきた実績がそれを助長するのだ。そして、目の前で起きた現実を否定することは何者にもできない。

抗おうにも抗えないのだ。

グラハムの騙し討ちのような計略の中、彼らは覚悟を決めざるを得なかった。この火の海を脱したところで救いはなく、かといってクオンたちを殺すには決定的に火力が足りなかった。そして、グラハムはそうなることもわかつているに違いなかった。

彼らは、クオンたちが炎に焼かれ、死ぬまでの時間稼ぎとして消費される捨て駒に他ならなかった。死ぬことが求められている。彼らはその冷酷な事実を理解しながらも、グラハムの思惑を拒絶することはできなかった。

どのみち、ここで死ぬしかない。数の力で圧倒しようともクオンたちに傷ひとつ負わせることができないのだ。障害物となって、クオンたちが燃え盛る紅蓮の中で息絶えるのを待つしかなかった。

引くも地獄、進むも地獄。ならば進むしかない。といって、突き進んだところで刃が届くわけでもない。敵の脱出をわずかに邪魔することで精一杯なのだ。

どうしようもない。

救いなど見当たるはずもなかった。

だが、だからこそ、クオンは彼らに慈しみに満ちた視線を投げ掛けるのだ。猛然と渦巻く熱気の中、視界はゆらゆらと揺らめいている。が、炎が痛みを伴って全身を包み込むようなことはない。盾の力が、クオンたちへの炎の侵攻を妨げていた。つまるところ、屋敷

を覆う猛火そのものは恐ろしくもなんともないのだ。

酸素を奪われることだけが恐ろしい。

クオンは、目の前の男の眼を見つめた。沈黙する男の瞳には、この状況でも余裕の表情を崩さないクオンたちの姿が映りこんでいるのだろう。

「一緒に、ここから逃げ出しませんか？」

「……！」

クオンの眼前の男が、啞然としたように口をぱくぱくとさせた。

クオンの予想だにしない申し出に頭の中が真っ白にでもなったのかもしれない。確かに想像もつかない言葉だったかもしれない。実際の通りだろう。

「な、なにを言っている？」

「一緒に逃げ出す、だと！」

「笑わせるな！ 一緒に逃げ出したところで、救われるのは貴様らだけではないか！」

「我々は誇り高きベルル王国騎士団の一員だぞ！ ここで貴様らを見逃すなど、万死に値する！」

騎士団員たちが、口々に叫び声を上げてきた。しかし、その叫びの裏側に揺らめく感情は、怒りとも戸惑いともつかないものであり、クオンの申し出が必ずしも即座に拒絶されたわけではないことを告げているかのようにだった。無論、本当に怒声を張り上げたものもいるのだろうが、大多数がそうではなかった。

この地獄のような惨状からいまますぐでも逃げ出したい、というのは人間、いや、生命としての本能に近いのかもしれない。

「……騎士としての誇りを持っているようなお方なら、こんな姑息な手段は取らないとは思いますけれど」

そう独り言のように言ったのは、マナだ。騎士としての在り方になにかしら想うところでもあるのかもしれない。彼女は、かつて一国の方針を左右するほどの権勢を誇った名家の生まれであり、騎士の称号を持つようなものたちとの関わりも深かったのだ。その家も

いまは没落し、彼女は、みずからの身を守るためだけに武装召喚術を学ばねばならなかったのだが。

マナの目は、冷やかに輝いている。騎士団員たちに対して、いささかの同情も抱いていないようだった。むしろ交渉を失敗したのためにクオンたちを殺害しようとし、あまつさえ屋敷に火を放ち、部下をも巻き添えにしようとしているあの騎士団長への侮蔑をあらわにしていた。

そして、それに付き従わざるを得ないものたちも軽侮している。彼女だって、彼らが反論さえ許されない立場だということはわかっているはずだ。しかし、彼女にしてみれば、美しくない、ということだろう。

運命を享受し、未来を諦めるようなものを認めないのだ。

彼女自身がそうであるように。

「貴様、団長を愚弄するか！」

「あんたは、なにも感じないのか？」

激昂する男を一瞥したのは、ウォルド。彼の巨躯は、火影の中でより一層大きく見えた。まるで巨人のようだった。

「！」

「たかが一個の傭兵集団を支配できなかったからといって、安易に抹殺しようという男のやり方になんの疑問も抱かないのか？」

ウォルドは声を荒げた騎士団員に問いかけたものの、端から返答を期待してなどいないのは彼の態度から明白だった。彼にしてみれば、この猛火の中で騎士団員たちが何人死のうとも生き残ろうとも、どうでもいいことなのだろう。興味がないのだ。

彼は、己に与えられた使命を果たすことに全身全霊をかけている。それは例えば《白き盾》団長クオンの護衛であったり、一部隊の指揮であったりと状況によって様々に変化するが、ともかく彼は自分の任務を最優先に考える人物であり、そこに感傷の入り込む余地はなさそうだった。

先ほどの問いは、彼が主と仰ぐクオンの意を汲んでのものに違い

なかった。

クオンは、騎士団員の激昂が収まったのを見計らって、口を開いた。炎の勢いは衰えていない。あまり時間的余裕はなかった。

「そもそもぼくらとの交渉や、それが不調に終わった場合の後始末に関して、イストリア国王陛下はご存知なのですか？」

「それは……」

騎士団員たちが、顔を見合わせたのが、そこからクオンの求める答えが生まれるようなことはなかった。ただ時間を浪費している。命を消耗している、

これでは駄目だ、とクオンは結論を急いだ。とにかく、彼らの命も救いたいのだ。しかし、強引な手段を取ることはできない。盾を展開している以上、騎士団員による包囲網を突破するということができないのだ。かといって、盾の力を解除することは、彼らを見放すと同意である。それもできない。

救える命は全部救う。

それがクオンの信条だった。

「だれもわからない、と。それなら、騎士団長殿に直接問い質しませんか？」

「なにを馬鹿な……！」

騎士団員が血相を変えるのは当然だっただろう。相手は騎士団長にして、ベレルの権力者なのだ。逆らうことさえできないというのに、問い質すなど、恐れ多いにもほどがある。数の力を頼みに問い質すことができたとして、その後が恐ろしい。どのような手段を以て報復してくるのかわかったものではない。

もっとも、長年騎士団長を務めているほどの男がそこまで器量の小さい人物だとは思えないし、その程度の人物ならばむしろ恐るるに足らないだろう。

「団長殿が恐ろしいというのなら、陛下に直接お伺いすればいい」
クオンは、極めて穏やかな調子で提案したのだが、その態度が彼らの逆鱗にでも触れてしまったようだった。

給仕姿の女が、手にした剣を閃かせた。

「それこそ馬鹿げている！ 陛下が、一介の騎士団員如きに会ってくださるものか！」

「貴様は、我らを言葉で籠絡するつもりなのだろうが、そうはいかんぞ」

「そうだ……。貴様の口車に乗って一緒に脱出したときこそ、我らの終わりなのだ。屋敷を出た直後、切り捨てるのだろうか？ あの男のように！」

屋敷を焼く猛火の如き様相を帯びてきた騎士団員たちの怒声はもつともだと思いがらも、クオンは、軽く徒労感を覚えなくもなかった。意味のない問答を繰り返しているような気にさえなってくる。それはきつと、彼らが置かれた状況に大きな原因があるのだろうか。正気では居られないのだ。

指揮官の姿はいつの間にか消え失せ、気づけば当たりは火の海だ。逃げ出そうにも、目の前には抹殺すべき対象がいて、それらは無敵の盾に守られている。それを放置し、ここから抜け出すなど、団長命令を放棄するのと同じであり、騎士団の一員である以上それだけは許されない。かといって、《白き盾》の鉄壁の防御を突破する方法もない。炎は、屋敷を包み込んでいく。

死が、忍び寄っている。

狂わざるを得ない。

クオンたちと炎の中で心中するだけが彼らに許された最後の手段だった。

だからこそ、クオンは、彼らに慈愛に満ちた視線を注ぐのだ。救われない未来しか用意されず、絶望に抗う方法すら見出せない哀れな魂たち。

手を差し伸べよう。

「そんなことはありえない。そんな手間をかけるくらいなら、いま

すぐ斬り捨てても脱出しますよ。少し考えれば、わかることでしょうか？」

クオンは、優しげに微笑した。常軌を逸したこの状況にあって、彼らは冷静さを保ってなどいられないのだ。感情だけが、彼らの行動原理となっている。激情が、彼らの心理を支配している。

クオンが彼らの立場でもそうなっていたかもしれない。理不尽にも突きつけられた死という現実的な終わりを前に、理性など保っていられるものだろうか。

「……確かに」

クオンの言い分にうなずいたのは、たったひとりだ。百人以上はいるであろう騎士団員の中で、たったひとりだけだったのだ。しかしクオンは、その事実には落胆するよりも、ひとりでも冷静さを見失っていない人物がいたことに喜びとともに驚きを禁じ得なかった。

一同の視線が、声を発した人物に集中する。

男というのは、声でわかった。低くもよく通る声音だった。若いとはいっても、クオンよりは年上に違いない。この場合、クオンが若過ぎるといべきなのだが。甲冑を着込んでいることから、後から投入されたのだと知れる。長身。どういう体格なのかまではわからないが、兜のバイザーを上げていることから、彼の顔つきはよくわかった。

秀麗、という言葉がよく似合う顔立ちをしていた。その瞳は、炎を反射してきらきらと輝きながら、まっすぐにクオンを見据えている。まるでこちらの真意を見抜こうとでもしているかのようだった。

(良いな……)

クオンは、その眼に強く見据えられながらも、不快に感じることはなかった。むしろ、ほかの騎士団員たちとは異なるまなざしに好印象を覚える。素晴らしいと想うのだ。この絶望的な状況下にあつてなお己を見失わず、為すべきことを見極めようとしている。ただ上の命令に従っているだけではない。

無論、それも状況による。常ならば、兵士は上の命令に唯々諾々

と従うほうが良い。

しかし今回、彼は死ねと命じられたようなものなのだ。傲然と、地獄に投げ入れられたのだ。異を唱えたくなくなる気持ちもわかるし、なんとかして生き残りたいと想うのも当然といえる。その方法を探すのは、生き物として正しいのだ。法に支配された騎士団の一員としてどうかはともかく。

彼は、クオンの眼を凝視したまま続けてきた。

「あなたの言う通りだ。現状を打ち破れる力を持っている以上、我々を騙す必然性がない」

「だ、騙されるな！ 相手は敵だぞ。敵の言葉に惑わされてはいけない！」

「いや、彼らを信じてもいいと想う」

男は、彼を押し留めようとした騎士団員を一瞥した。その声音は怜悯そのものであり、この地獄のような光景の中にあつて寒気を感じるほどの冷やややかさを伴っていた。クオンは、ますます彼に興味を持った。彼の涼やかな立ち居振る舞いは、ただの騎士団員として埋もれさせておくのは惜しいと思わせるほどのものがあつた。もっとも、ベレル王国騎士団以上に華々しい舞台をクオン如きに用意できるはずもない。それに用意されたからといってどうなるものでもないだろう。

彼は、ベレル王国騎士団の一員であり、同時にベレル国民であるのだ。クオンたちとは違ふ。

そして、彼は同僚たちを見回した。騎士団員の多くは、怪訝な表情を浮かべている。彼の言動が理解できないのだ。当然だろう。彼らの意識は、狂乱の渦の中にある。理性的に考えることを放棄しているといつてもいい。もちろん、彼らがみずからの意志でそうしたわけではない。追い詰められただけだ。

紅蓮の猛火によって。

男が、だれとはなしに言った。

「気づかないのか？」

「なに？」

「……この炎の中で、俺たちはなぜ無事でいられる？ どうして、彼らのように突っ立っていられるんだ？」

「あ」

「それは……」

「え、ええ？ どういうことだ？」

彼の問いかけに、動揺とも驚愕ともつかない反応が騎士団員たちの間に生まれた。確かに彼の言う通りだった。屋敷全体を包み込む猛火の中、渦巻く熱気は物凄まじい。なにもかもが燃え尽きようとしている。そんな中で平然と立っているのは、普通では考えられないことだ。

クオンは、こちらを直視する彼の理知的なまなざしに頬を緩めた。

「あなたがその盾の力で守ってくれているのでしょうか？ クオン」
カミヤ

「ぼくは、皆さんの命も救いたいんです。それはいけないことですか？」

それは、クオンの素直な気持ちだった。本心。救えるものはすべて救わなければならないという想いは、どこか強迫観念にも似ていたが、明らかに違うものだ。彼は想っていた。

これはそう、使命なのだ。

救いを求めるものに愛の手を。

絶望には希望を。

闇には光を。

そのためにこの世に生を受けたのだと、彼は本気で信じていた。

第七十話 見出すもの

屋敷が燃えている。

轟然と、燃えている。

真紅の猛火が、夜の闇を引き裂き、星々の煌く天上をも焦がすほどの勢いで立ち上っている。屋敷の全焼は免れない。敷地内にあるものはすべて灰燼と帰すだろう。それは当初からわかっていたことだし、後悔もない。

王都ルーンベルルを見渡す丘の上に聳える壮麗な屋敷は、王国騎士団長グラハム・ザンノードイスの私邸にして、彼の権威の象徴とでもいうべき建物だった。父祖伝来の土地などではない。彼がこの地位に上り詰めてから、みずからの意志で手に入れたものだった。思い入れがないはずがない。だが、背に腹は変えられないのも事実だ。

それに屋敷ならばまた建てればいい。丘を失ったわけではないのだし、別邸も持っている。王都で生活する上での問題は、まったくといっていいほどなかった。むしろ、王宮に程近い別邸のほうが利便性では格段に上だった。

痛みは、ある。

魂が震えている。

慟哭。

部下を巻き添えにしてしまった。将来有望な騎士団員たち。名と顔が脳裏に浮かんでは霧散する。彼らのことを想うだけで心が折れそうになる。

しかし、必要な犠牲だったのだ。

その上、無敵にして不敗の傭兵集団《白き盾》を討つために払った犠牲としては少なすぎるといっていい。

たった百人で《白き盾》団長クオンノカミヤを討ち取るなど、笑い話にもならない。もしそのような作戦を立案したとして、失笑を

買うことすらできないだろう。黙殺されるのが精々だ。あるいは、その頭の弱さに絶望されるかもしれない、《白き盾》とは、それほど強敵なのだ。

半年前、突如としてガンディア軍とログナー軍が対峙する戦場に現れ、ログナーに難攻不落のバルサー要塞を陥落せしめ、奇跡的にも言える大勝利をもたらした神秘の少年クオン・カミヤが結成した傭兵集団。

ウォルド・マスティア、マナ・エリクシアというふたりの武装召喚師を始め、凄腕の剣士にして？懐刀？と呼ばれるイリスや、《白き盾》の知を司るスウィール・ラナガウディなど、有能な人材を多数抱えており、その戦力は王国騎士団にも匹敵するという。

結成当初は本当に小さな組織だったらしい。クオン・カミヤとスウィール・ラナガウディのほかには数えるほどしか団員はおらず、およそ傭兵集団などは口にすることも憚られるようなものであったという。だが、彼らは傭兵として国々を渡り歩くうちに実績に実績を重ねていった。

言うなれば不敗。

言うなれば無敵。

それが《白き盾》の評価であり、すべてであった。

参加する戦闘のすべてにおいて、彼らは負けなかった。団員ひとり欠けることもなかった。重傷を負うものもいなかった。味方が全滅状態にあるうとも、《白き盾》だけは無傷のまま戦場から離脱したという。

だからこそ、無敵であり不敗なのだ。

だからこそ、彼らと対決するには全力で挑まなければならない。

だが、グラハムは、投入する人数を百人程度に止めた。《白き盾》の戦力は、団長を含めた幹部五名だけであり、普通に考えればそれでも多すぎるくらいだが、今回の場合は、これでは少なすぎるくらいだった。百人程度、彼らの前では容易く蹴散らされる。無駄死になりにかねない。

それでも、払う犠牲は少なければ少ないほどいい。できるなら贄など捧げたくはないのだが、この国の将来が懸かっている。

仕方がなかった。

そして、その犠牲をできる限り少なくするために用意したのが、今夜の会食だった。いくら《白き盾》の幹部たちといえど、武器も持たない丸裸同然の状態ならば、こちらが有利になれるはずだった。彼らは、ベレル王国と契約を結んだ傭兵である。そうである以上、騎士団長直々の会食の誘いを断ろうはずもない。そして、ただの食事会ならば、無防備ならざるを得ない。衣装に凝るのならともかく、武装するなどもつての他だ。元より、騎士団長主催の食事会だ。武装する必然性もあるまい。

しかし、だ。相手はあの《白き盾》である。無敵の軍勢。不敗の集団。武器さえ手にしていなければどうにかなるといふ相手なのかどうか。

相手はたった五人とはいえ、百人程度で押し潰せるのか。無敵とは、その程度の異名なのか。不敗とは、そんな簡単に終わる伝説なのか。

グラハムは、熟考に熟考を重ねた上で決断した。投入する百人を贄として捧げよう。その代わりに《白き盾》の団長ら五名を地上から消し去り、ベレル王国に安寧をもたらそう。

この策ならば、騎士団員には時間稼ぎをしてもらうだけでいい。《白き盾》の幹部たちと殺し合う必要はなく、故に敗北を恐れることもない。命を無駄にせず済むのだ。

犠牲はやむを得ないとしても、だ。その数が少ないに越したことはない。そして犠牲を払う価値のある相手だった。なにしろ、国の存亡が懸かっている。

「これで良かったのですか？」

「ああ……」

グラハムは、副団長アッシュ・ウィンベールの問いかけに小さくうなずくと、燃え盛る丘から目を背けるようにして進路へと向き直

った。痛みがある。しかし、この心を焼くような痛みを飲み下すことができないければ、騎士団長などやってはいられないのだ。

彼には、騎士団長としての責務がある。ベル王国の平和と安寧を守護し、外敵を打ち払わなければならない。軍を指揮し、戦いに勝利しなければならぬ。敗北は許されない。その重圧たるや物凄まじいものであり、並大抵の精神力では耐えられないだろう。重圧に負けて判断を誤るなど、言い訳にもならない。

そう、この判断は正しかったのだ。

百人に及ぶ部下を犠牲にするだけの価値はあつたはずだ。

最悪の敵を滅ぼしたのだ。これ以上ないくらいの成果。イストリア王も納得してくれるはずだ。王がどれだけ《白き盾》に入れ込んでいようと、理由を知れば、グラハムの行動を認めざるを得ない。

それほどの理由がなければ、彼が行動を起こすわけがない。

「？魔？は滅んだ」

彼は、独り言のように告げた。同行する騎士団幹部のだけれども、彼の言葉の意味を理解していなかっただろう。アッシュウィンベールにせよ、ミランクラス、ワイズマッドレイにせよ、シックスライムにせよ、理解力が足りないわけではない。むしろ察しが多すぎるくらいに気の利く部下たちだった。騎士団が彼の想う通りに機能しているのは、彼らがグラハムの意を汲んで活動してくれるおかげだった。

それでも理解できない。当然のことだ。説明されていないことをだれがわかるというのか。

しかしグラハムの言葉は、彼にとって真実だった。それだけがすべてで、それ以上の事実是要らなかった。現実に百人の騎士団員が犠牲になったのだとしても、その真実の前には霞んでしまう。

グラハム・ザンノーデイスは、王宮を目指した。ノーデイス邸が燃えている報が既に王宮を騒がせているかもしれない。実際、ルーンベルルの市街は、街を見下ろす丘の上に炎の塔が出現したことで大騒ぎになっていた。

まだ寝静まるには早すぎる時間帯。王都はいつものように賑やかで、故に、騎士団長の私邸が爆炎に包まれ、火柱が夜空に突き刺さる様を目撃したものは多かつただろう。目撃者が騒ぎ、丘の周辺に市民が集った。なにが起きたのだろう。不安と好奇と憶測が、人々の耳を賑わせた。

グラハムたちは、野次馬根性で集まった群衆の中を突っ切らなければならなかった。しかも、背後　丘の上で燃え盛る炎は、頭上から降りしきる夜の闇を幾分押し退け、丘から降りていく彼らの存在を際立たせていた。

群衆の中のだれもが、グラハムらの登場に驚きつつも、騎士団長及び幹部の生還を喜んでいた。突如炎に包まれたグラハムの私邸の方角から現れたのだ。グラハムたちが、なにものかによる放火（というにはあまりにも火力が大きすぎたが）から逃れ得たのだと推測するのが当然というものだろう。

なにしろ、グラハムたちの格好からして首謀者には見えなかった。豪奢な衣装に身を包んだ彼らは、どこからどう見てもパーティーの最中に脱出して難を逃れたようにしか考えられなかった。

グラハムは、群衆の畏敬と好奇に満ちた視線を浴びながらも表情ひとつ崩さなかった。彼らはすぐに視線を落とすだろう。貴族ではない一般市民が、騎士団長を直視していいはずもない。といって、この場で群衆に注意するほど愚かなことはない。王宮に急がなければならぬ。

グラハムが無言のまま群衆に近づくと、市民はあわてふためきながら彼らの為の道を開いた。何百人という野次馬たちが、騒然と左右に別れていく。

人波がふたつに割れ、一本の道が生まれた。

その道は市街へと至り、王宮へと通じているだろう。王宮内部はいまや大騒動になっていくかもしれない。騎士団長の私邸が燃やされたのだ。しかも、傭兵集団《白き盾》との親睦を深めるためのパーティーを開催している頃合いである。騒ぎにならないはずはない。

グラハムは急がなければならなかった。彼が直接面会し、王の不安を取り除くための説明をしなければならぬ。傭兵集団《白き盾》との会食、その顛末を。この国の将来を脅かしたであろう？魔？が、たったいま滅び去ったという事実を。

（これで良かったのだ。？魔？は滅んだ。これ以上、望むものはない。この国は安泰だ……）

群衆の間に生まれた道を進みながら、グラハムは、胸を焦がす痛みを飲み下そうとしていた。祖国の将来のための礎となれたのだ。犠牲となったものたちとて本望だったろう。そう、思い込もうとする。だが、その考えに無理があることもわかつている。極秘で進めていた計画であるが故、あるとき投入した騎士団員たちにはなんの説明もしていなかったのだ。ただ、《白き盾》の幹部たちを斃せという命令しか下していない。そうである以上、国のために死ぬのだという覚悟も持てなかっただろう。その死が決して無駄ではないのだということすら知らずに炎と消えた。彼の考えは、自分の心を慰めるための欺瞞にもならなかった。

そのとき、黒い風が吹いた。漆黒の突風。その風がグラハムの横を通り過ぎる瞬間、彼は、強烈な敵意に満ちた視線を感じた。ただの敵意ではない。研ぎ澄まされた殺意は、時として鋭利な刃物の切れ味を想起させるものだ。

グラハムは、その風が自然現象などではないという確信を抱いたものの、だからといって前進を止めるわけにもいかなかった。王宮に急いでいる。そんなことに気を取られている場合ではないのだ。と。

「何処へ行く気だ。グラハム・ザンノードイス」

目の前から聞こえてきたのは、刺すような声だった。女の声。怒りを押し殺しながらも、溢れ出る敵意を隠そうともしない。いや、隠しきれないのかもしれない。純化した敵意は、刃物の如き殺意となってグラハムに襲いかかってくる。

グラハムは、聞き覚えのない女の声に目を細めた。前方の路上、

闇が舞い降りたかのようになにかが揺らめいている。その闇の中に蠢く殺意の凄まじさに戦慄を覚えなくてはなかったが、それがなんであれ、彼が遅れを取ることはないように思えた。

こちらは、戦いなれた騎士団の団長と幹部である。屋敷を出る際には、武器も携帯している。なにより相手はひとりだ。

まなざしはひとつ。殺意もひとつ。ただ、その正体が判然としない。女の姿が闇に溶けているのだ。

「何者か？」

厳しい声音で問いかけたのは、副団長アツシユである。彼は、腰に帯びた剣の柄に手をかけ、抜き打ちで切り捨てられるように構えていた。

しかし、女はアツシユの問いには答えなかった。むしろ予想だにしない言葉を紡いできた。

「我が主は、おまえと直接話がしたいそうだ」

「なに？」

グラハムは怪訝な顔になった。脈絡もない言葉だ。主とはだれで、彼女はいつたいなにもものなのか。想像もつかない。

そしてグラハムが彼女の台詞の意味を理解したのは、揺らめく闇の正体を見極めてからだった。

闇の中で揺らめくのは漆黒のドレスだった。その独特なゴシック調の衣装には、見覚えがあった。少し前に目撃し、その衣装からくる退廃的かつ背德的な印象が記憶に残らないわけがなかった。黒髪に灰色の瞳の女。小柄で、まるで着飾った人形のように見えるのは、身に纏うドレスだけが原因ではない。無機的で生命の温かさを感じない眼。起伏のない表情。透けるように蒼白い肌。およそ生身の人間に抱きうるものとはかけ離れた気配。生きているのに死んでいるような。

「イリスか！」

彼は、我を忘れて叫んでいた。イリス。《白き盾》に所属する女剣士にして、クオン・カミヤの懐刀！

彼女は、クオンとともに炎に焼かれて地上から消滅したはずだったが。

背筋が凍るような感覚。悪い予感。いや、それは予感などではない。目の前の現実から生まれる、予測。

イリスは、我が主といったのだ。

「まさか……！」

グラハムは、愕然と背後を振り返った。彼の視線は、イリスの強襲に備えてグラハムの前方に展開する幹部たちを視界の隅に捉えると、突然騒ぎだした群衆を通りすぎ、後方　丘へと続く道に至る。瞬間、彼は、啞然とした。

グラハムの視線の先には、亡者の群れと見紛う一団があった。亡者と思わざるをえない。重い体を引き摺るようにゆっくりと、しかし確実にこちらに向かって歩いてくる。甲冑の一団。その足取りはあまりにも不確かで、まるで地獄から這い出た死者の群れが、殺すべき生者を探し求めているかのようだ。

死者の群れを先導するのは、それよりも足取りは軽いものの、やはりどこか重苦しい空気を纏うものたち。しかしながら身に付けたパーティー用の衣装は、甲冑の亡者どもとの間に埋めようのない溝を作っている。もつとも、地獄の道先案内人とは存外そのようなものかもしれない。

どよめいたのは群衆であろう。燃え盛る丘の上から甲冑の一団が現れ、静かに、密やかに行進しているのだ。それはどう鼻屑目に見ても敗残兵の行列であり、死に損ないの無惨な姿だった。

（無惨……？）

グラハムは胸中で頭を振った。亡者の如き一団を先導する賑やかな獄卒どもは、明らかに状況を楽しんでいた。足取りは次第に軽やかにになり、表情は明るい。視線はこちらを見据えるでもなく、群衆の反応を伺っている。

先頭に立つのは、クオン「カミヤ。純白の盾を手にしている以上、彼を傷つけることはできやしないのだらう。そのまなざしは慈しみ

に満ち、亡者どもを先導するにはあまりにも不釣り合いだった。

クオンの左右を固めるのは、ウォルドⅡマスティアとマナⅡエリクシアのふたりだ。ウォルドはスーツ姿には不似合い極まりない漆黒の手甲を装着しており、それが話に聞くブラックファントムなのだろう。

マナもまた、豪華なドレスにはまったく似合わない棍棒を手にしている。それが彼女の召喚武装スターダストなのだろうか。

スウィールⅡラナガウデイは、クオンの背後に控えている。彼が非戦闘員なのは、年齢が原因というわけではあるまい。スウィールは《白き盾》の頭脳だという。戦いに参加するだけが組織への貢献ではないのだ。

そして、《白き盾》の背後に控えるのは、グラハムが贄として差し出した騎士団員たちだった。カレルⅡファリウス、ガツシュⅡベイル、ザナンⅡサトライン等々、兜を取ったものたちの顔は悄然としている。視線は定まらず、悪夢にでも囚われているかのように動作は鈍い。

「なぜだ……なぜ！」

グラハムが絞り出すように発した声は掠れ、虚空に散逸した。騎士団員たちの生存は、グラハムの心を焼く紅蓮の業火の如き痛みを多少和らげてはくれたものの、クオンたち《白き盾》の存在は、彼に別種の痛みをもたらしていた。

それは恐怖。

一步、また一步と近づいてくる存在への恐怖。

なればこそ、彼は、屋敷に火を放ち、部下もろともすべてを焼き払ったつもりだった。

それは畏怖。

静かに、悠然と近づいてくるものへの畏怖。

だからこそ、彼は、如何なる犠牲を払ってでも、それをこの地上から消滅させようとしたのだ。

クオンⅡカミヤ。

魔。

「なぜ？ それはこちらの質問ですよ。なぜこんな真似を？」

クオンの声は、よく聞こえた。敵意や殺意は見当たらず、むしろ哀れみや慈しみといった感情が声音に込められている。そのまなざしも柔らかいものだ。敵対者に向けるような視線ではなかった。

双方の距離は、既に十メートルほどにまで縮まっている。

「なぜ、だと……！」

グラハムは、目を見開いていた。クオンのみを凝視する。雑音は聞こえず、雑念が脳裏を埋めることもない。意識が震える。

「そんなこと、決まっている！」

ただ叫ぶ彼の頭の中で、あざやかな光が閃いていた。純然たる白の光。清らかな閃光。すべてが白く塗り潰されていく。

「決まって……いる」

頭上を仰ぐ。

真っ白な世界。星々の散りばめられた夜空ではなく、純白が視界を染め上げている。一切の穢れなき白。その純白の中をなにかが泳いでいるのが見えた。

影。

雑じり気のない白の世界を渡っていくなにかの影。

それもひとつだけではない。ふたつ、みつつと増えていく。

やがて、影が四つに増えたとき、彼はその影の背中に当たる部分に一对の翼があることを発見する。大きな翼だった。その影の形状から鳥などではないこともわかった。

では、なんだというのか。

彼は、なぜか空気を求めて喘ぎながらも、影から目を離すことができなかった。四つの影は、彼の遙か頭上で旋回していた。眼を凝らす。

「ああ……！」

彼は、頭上で弧を描く四つの影の正体を悟った。それはただの影ではなかった。光を背負っているのだ。背後から差す光は、それら

の姿を逆光の中に隠していたが、むしろその事実こそ、影の正体が神聖な存在であるということを証明していた。後光を背負う存在など、それ以外には考えられない。

彼は、叫びだしたい衝動に駆られた。体が歓喜に震えるのを止められない。涙さえ流れ落ちる。止まらない。心の奥底より激情が奔流となって溢れ出す。

喜び。

慶び。

歡び。

悦び。

「天使よ！」

上天の影は、彼の叫び声に応じるかのようにその旋回を止めた。

グラハムの頭上四方に滞空しながら、静かにそのままなざしを投げかけてきていた。後光に隠れた視線は、四つ。威厳と慈愛に満ちたまなざし。その視線を認めたとき、彼は、魂の奥底から溢れ出る喜びに全身を震わせながら、崩れ落ちるようにして地に跪いた。

グラハム・ザンノーデイスは、敬虔なヴァシユタラ教徒であった。ベレルという国自体がそうなのだ。つまりは国教であり、国王から末端の市民に至るまで、ヴァシユタラ教会に帰依している。が、彼の信仰心の篤さは、ベレルで並ぶものがないほどであった。

彼の行動の規範は教会の教えそのものであり、神の使いたる天使の降臨を目撃したとき、彼の運命は決まった。

天使の降臨などあり得ない現象なのだとは考えなかった。

それは彼が勁烈なヴァシユタラ教徒というのも大きいが、この大陸に皇魔という人知を越えた異形の化け物が実在していることも無関係ではなかった。悪魔のようなものが存在するのだ。神が天にましまし、天使たちが主の使いとして地上に降りてきたとしてなら不思議ではない。むしろ必然であるとさえ想えた。

神は、地上の人々を救う存在だと信じられている。

グラハムが疑うはずもない。天使は厳然と存在し、彼に語りかけ

てきたのだ。感極まって咽び泣いたとしてもおかしくはないし、笑い話でもなかった。

『マージアに？魔？は興れり』

マージアとは、ベレル南部の街である。そこは、一見するとなんの変哲もない小さな街だったが、傭兵集団《白き盾》が活動拠点として選んだことで一躍注目を集めるようになっていた。無敵の傭兵集団《白き盾》の雷名は、ベレル国民の関心を集めるには十分すぎるほどの効果を発揮し、彼らの姿を拝むためだけに国内各地からマージアを訪れるひとも多かつたという。

そのマージアに？魔？が興るといふ。

「？魔？とはいつたい……？」

彼は、恐る恐る問いかけた。天使に声をかけるなど、恐れ多いにもほどがあつたが、その意味を理解しなければ行動に移すこともできない。神の使いが、直々になにかを伝えてくれようとしている。ならば、全身全霊を以てその期待に応えなければならぬのだが、言葉の意味を理解できなければそれさえも叶わない。

『？魔？……其は悪しきもの。邪なるもの。天意に背きしもの。呪われしもの。我らが主に弓引くもの。夜を謳うもの。地獄の化身。破滅の指先。彼の者はかねてより大陸の滅ぶを望み、混沌の氾濫を望む。我らが敵。汝らが敵。倒すべき敵。討つべき敵。滅ぼすべき敵なり』

揺るぎなき威厳に満ちた天使の声は、やはりグラハムの魂を激しく揺さぶり、彼の思考を一定の方向に純化させた。

つまりは、天使の言う？魔？を問う滅私、このベレルの地に平穏と安寧をもたらすためにのみ、意識を傾けた。

？魔？がどんな姿をし、どのような形でこのルーンベレルに到来するかは、天使は語らなかつた。

グラハムは、マージアを拠点とする《白き盾》こそが“魔”であると解釈した。イストリア王が彼らを王都ルーンベレルに招き、そのまま王都こそ《白き盾》の拠点にしてもらおうと計画しているの

を知ったとき、グラハムは、今こそ行動を起こさねばならないと判断した。？魔？が馬脚を現してからでは遅いのだ。

その上で、彼が、ルーンベレルに設けられた《白き盾》の新拠点に夜襲をかけるなどといった手段を取らなかつたのは、犠牲を最小限に済ませるためだ。《白き盾》の主力たる幹部たちを消し去ることさえできれば、後は楽なものだ。数で圧倒すればいい。

そして、グラハムはクオンたちを屋敷に招き、食事会の席上で彼らの理念に反することを提案した。それは《白き盾》のベレルへの帰属であり、その提案に飛びつくような連中ならば、？魔？とは呼べないだろうというグラハムなりの思惑もあつた。

結果、交渉は決裂し、グラハムは命令を下した。多少の呵責とともに。天使の勅命であろうとも、彼もまた、ひとりの人間である。心が痛むのは当然といえた。

また彼は、《白き盾》が？魔？であろうとなかろうと、長期的に見れば、ここで潰しておくのも悪くないとも考えてはいた。彼らがいつか敵に回つたときのことを考えても見よ。無敵の傭兵集団など、相手のしようがない。武器が届かないのだ。研ぎ澄まされた刃も、鍛え抜かれた肉体も、かの見えざる盾の前では無力だった。

噂に聞いていたその現象を目の当たりにしたとき、グラハムは己の決断が間違いではなかつたと確信したのだが。

(……?)

彼は、ふと視線を感じて顔を上げた。天使ではない。天使は頭上を羽ばたいていたはずで、前方に降り立つた記憶はなかつた。いや、そもそも、天使は再び降臨したのか。彼の窮地を憐れんで、手を差し伸べようとしてくれたのか。

グラハムがそう考えたとき、純白の幻想は消え失せた。天使たちの影も、錯綜する記憶の深淵に沈んでいく。目の前に広がるのは現実。丘の上の炎に照らされた淡い闇が、漠然と周囲を包み込んでいた。

(これはいったい……?)

彼は愕然とした。天使の再臨は、ただの幻だったのか。絶体絶命の窮地に陥った心が現実から逃げ出すために生み出した幻想だったというのか。だが、心は歓喜に震えている。涙が溢れ、頬を伝ったのは事実だった。

どうして？

不意に、光が差しした。

(……！？)

グラハムは、我が目を疑った。

薄暗い闇を切り裂く光芒。清浄なる輝き。天使たちの後光と同じだった。その光を浴びるだけで、心が洗われるようだった。感情が激しく揺さぶられ、喜びが激流となって全身を駆け巡る。

光源は、すぐ目の前にあった。

「いったい、どうしたんです？」

光は、クオン「カミヤの後背から差し込み、跪くグラハムのみならず、陣形を整えた騎士団幹部たちや固唾を呑んで成り行きを見守る群集をも飲み込んでいく。だが、グラハムを除くだれひとりとしてその現象に気づいていないようだった。当の本人すら、なにが起きているのかわかっていないらしい。もっとも、クオンの表情は逆光に隠れて見えはしなかったが。

グラハムは、肩を震わせた。跪いたまま、彼の足音に耳を澄ます。舗装された道路に刻まれる軽い靴音。怒りはない。激しい感情の揺らぎが、クオンの足を速めることもなければ、緩めているわけでもない様子だった。ただ、こちらの態度に驚いているのは、彼の気配からわかった。

「わ、わたしは……」

グラハムは、逆光に隠されたクオンの顔を凝視したまま、伝えるべき言葉を探した。彼は、胸中でみずからの過ちを認めた。天使の言葉を勝手に解釈し、納得し、暴走してしまったのだ。結果、彼は多くの命を無駄にしまった。いま、目の前のクオン「カミヤに率いられた騎士団員たちこそ生き残ったのだとしても、全員が全

員、助かっているはずがなかった。すべてを焼き尽くすだけの火薬を用意し、火を放ったのだ。

無為に命を散らせてしまった。

痛みが、再び彼の心を締め付ける。彼らになんといいて謝ればいいのか。

当初こそ、天使の勅命に従ったの正義の行いだと思いついており、それはある種の免罪符として機能していたのだが、その考えがグラハムの一人合点だと判明した以上、免罪符は剥がれ落ち、後悔と罪悪感が洪水のように押し寄せてくる。詫びる言葉も思いつかない。いや、詫びるだけでは済まされない。

彼らは、死ぬ必要もなかったのだ。

「間違っていた……」

「え？」

拍子抜けしたようなクオンの反応は、わからなくはない。火を放って部下もろとも抹殺しようとした男が、突然しおらしくなったのだ。奇妙に感じるのは当然だった。だが、グラハムは強気になどなれなかった。一方的な思い込みで、クオンたちを殺してしまうところだったのだ。

天使と同じ光を放つ存在を！

（そうか……そういうことか）

グラハムは、すぐ目の前で足を止めた少年を仰ぎ見た。それはまるで王に対して臣下の礼を取る騎士そのものであったし、彼もそのつもりだった。

彼は、すべてを理解したのだ。理解せざるを得なかった。いつか降臨した天使たちの目的も、そのときグラハム・ザンノードイスに与えられた役割も、すべて。今度こそ間違いないといえる。目の前にその実証があった。クオンカミヤが生きていた。

天使たちは、？魔？の到来を予言した。マジアからこの王都に来るのだといった。それを勝手に解釈したグラハムは、マジアに拠点を構える《白き盾》こそが？魔？であると断定し、行動を起こ

した。いかな犠牲を払ってでも、クオンⅡカミヤとその仲間たちをこの地上から抹殺しなければならぬと想った。だが、結果はご覧の通りである。クオンたち《白き盾》の幹部は見るからに無傷であり、それどころか、グラハムが捨て駒として投入した騎士団員たちの命をも救っていた。

クオンⅡカミヤは、？魔？などではない。

むしろ彼は、天使の側に属する存在なのだ。

「わたしは間違っていた……が、間違いではなかった……！」

そう、グラハムは、煉獄の如き炎の中からクオンⅡカミヤという人間を見出すことこそ、自分の役割なのだと悟ったのだ。この広い大陸のどこにいるともわからない、人間の姿をした救い主を。そのため天使は降臨し、彼の耳元で囁いたのだ。

いまならばはつきりとわかる。天使たちが本当に伝えたかったことが、理解できる。それが彼の生まれ持った使命であり、この世に生れ落ちた理由なのだ。冷静ではいられない。自分に課せられた使命の大きさと重要性を把握したことで、より一層強烈な感動がグラハムの胸の内を席卷していた。

後光が、まばゆい。

「クオンⅡカミヤ 主よ。我が大いなる主よ。今更許しは請いません。わたしの罪を問うのなら、甘んじてその罰を受けましょう。ただ、どうかこのルーンベレルをお守りください。災厄が迫りつつあります。どうか、この王都を、そして我らの王と臣民の命をお守りください！」

グラハムは、泣き叫ぶように声を張り上げていた。すべて、本心だった。みずからの使命を成し遂げたのだ。もはや後悔はない。自分の身にどのような報いが降りかかろうとも構いはしない。天使に与えられた役割を果たすことができた。それで十分だろう。あとは、この王都に迫りくる？魔？を打ち払うことさえできればなにもいうことはない。クオンが生きている限り、救い主が実在する限り、ヴァシユタラの教えに説かれるとおり、この大陸に安寧と平穏が訪れ

ることは間違いないのだ。

もつとも。

「えーと……言っている意味がわからないんですけど」

逆光の中のクオン「カミヤの顔は、困ったような表情をしているに違いなかった。」

第七十一話 逢魔ヶ刻

クオンは、ただ困惑していた。

足元で跪き、こちらを眩しそうに仰ぎ見るグラハム・ザン＝ノードイスの声音は真に迫っていたし、嘘や偽りといった不純物が微塵も混じっていないように感じられたものの、だからといって「はい、そうですか」と納得できるようなものでもなかった。

グラハムがクオンたちに行った仕打ちを振り返れば、当然のことだ。会食中の雑談めいた交渉に応じなつたがばかりに兵をけしかけ、なおかつ屋敷に火を放つたのだ。クオンがごく普通の常識的な能力しか持っていない人間ならば、命を落としていたかもしれない。

百人に及ぶ騎士団員たちの包囲を打ち破り、屋敷から脱出できたとして無傷ではいらなかったに違いない。こうした五体満足でいられるのは、すべて、盾の能力のおかげだった。見えざる防壁を形成する純白の盾があつたればこそ、クオンたちは、この夜空を再び拝むことができたのだ。

大きな月と無数の星々が鏤められた夜空は、丘の上で未だに咆哮を上げる紅蓮の猛火にその領域を侵され、わずかに赤らんでいる。風は緩やかで、どこか余所余所しい。それは夜空に君臨する月も同様で、そ知らぬ顔で冷ややかな光を降り注がせていた。

しかし、静寂はない。

丘の上に聳えていた騎士団長の私邸が炎に包まれたことで、王都ルーンベレルは、大騒ぎになっているようだった。クオンたちの周囲に集まっている野次馬の数だけでも相当なもののだが、異変に気づいた市民が各地から集まってきたらしく、群集の膨張は止められそうにもなかった。

群集たちは、先ほどの騎士団長の叫び声の意味が理解できないらしく、口々に囁きあつて憶測や推測を飛ばしていた。グラハムの罪とはなんなのか、なぜ騎士団長が傭兵如きに跪き、許しを請わなけ

ればならないのか。迫りつつある災厄とはなにか。グラハムの私邸が燃えていることと関係があるのか。

盾の力によつて拡張されたクオンの感覚は、群集の視線や囁きを不要なほど捉え、彼の頭の中を掻き乱そうとした。

背後では、ウォルドとマナが胡乱臭げなまなざしをグラハムに投げかけていたし、スウィールも疑念に満ちた視線を注いでいるのがわかる。

ともに火宅を脱出した騎士団員たちは、グラハムの台詞に愕然としている様子だったが。彼らの気持ちもわからないではない。突然、命を捨てる覚悟を強いられた彼らにとつて、グラハムの反応は、無念という言葉では言い表せられないのではないか。もし、ひとりでも命を落としていれば、それこそ無駄死に以外のなにものではなかったということになるのだ。幸い、盾の力のおかげでだれひとり欠けることなく脱出できたのだが。だからといって許せるようなものでもないだろう。

前方に展開する騎士団幹部たちは、それぞれに武器を構えながらも、指揮官の突然の言動にどう対処するべきか困っているようだった。自分たちも騎士団長と同調するべきなのか、成り行きを見守るべきなのか。なににせよ、騎士団の幹部たちは、グラハムから肝心なことをなにも聞かされていないのが見て取れた。幹部である。団長の命令には従わざるを得ない。騎士団員たちがそうであったように。

その向こう、闇に溶けるようにイリスが佇んでいる。彼女は、グラハムたちの居場所を突き止めるために先行させていたのだ。グラハムたちがまだ屋敷の近くにいるとは想っても見なかったが、イリスが足止めしてくれたおかげで追いつけたのは明白だった。クオンがイリスに視線を送ると、彼女は照れたように顔を背けた。

「非を認めるといつているのです。わたしが間違っていたと。すべて、わたしの過ちであったと」

「間違っていた？ 過ち？ それがどういう意味なのか、どうして

そう想ったのか教えていただけませんか？」

クオンは、グラハムに視線を戻すと、静かに問いかけた。群衆が一斉に静まり返る。クオンとグラハムのやり取りを一言たりとも聞き漏らさまいとしているのかもしれない。それは騎士団員たちも同様であるらしい。

ざわめきが消えた。

グラハムは、クオンの眼を見つめていた。相変わらずなぜか眩しそうにはしているものの、視線は逸らさなかった。彼が、口を開いた。

「……わたしは、天使様の降臨に立ち会ったのです」

「天使の……降臨」

クオンは、その突拍子もない言葉を反芻しながら、いつか幻視した光景を脳裏に描き出していた。晴れ渡る空。雲ひとつない快晴。青く澄んだ空は、涙が出るほどに美しく愛おしかった。その澄み切った蒼空を一对の翼を持つ影が泳いでいく。鳥にしては大きな影だった。そして、その影はクオンを見ているようだった。

(天使……)

ここは異世界。クオンが生まれ育った世界とは多くの点で異なるのだ。ひとが生き、魔物が呼吸し、幻想が謳っている。武装召喚術という魔法が行使され、竜や巨人の伝説が息づいている。天使が実在しているのだとしても、なんら不思議ではない。いや、不思議は不思議なのだが。

「天使様は、マージアに？魔？が興るとお告げになりました。其は倒すべき敵であると、討つべき敵であると、滅ぼすべきであると」「俺たちがマージアを拠点にしていたから？魔？と断定したのか。冗談じゃない」

「納得しかねます。元々、わたくしたちの拠点をマージアに定めたのは、あなたがたではないのですか？」

ウォルドとマナが、口々に意見した。ふたりの言い分ももつともだったが、クオンは、口を挟まなかった。脳裏に浮かべた青空の光

景が、彼の思考を多少鈍化させていた。空を横切る影はただひとつ。翼を広げ、気持ち良さそうに泳いでいる。その光景は神秘的でありながらどこか懐かしく、クオンは、珍しく郷愁を覚えたものだった。「そうだ。わたしはどうかしていたのだと想う。天使様の御言葉を聞き、舞い上がっていたのかもしれない。陛下が、『白き盾』の拠点をマージアからルーンベレルに移すつもりだと知ったとき、わたしは、ついに？魔？が到来するのだと思った。だが、それは逆に好機だとも考えた。？魔？を討ち滅ぼせば、きっと天使様はこの国を祝福してくださるだろう。ベレルに安寧と平穏が訪れるはずだ、と」

グラハムの言葉を聞き終えた頃には、さすがのクオンも幻想から解き放たれていた。頭の中が目まぐるしく回転する。天使様と彼はいった。彼は、ヴァシユタラの信仰者なのだろう。それもかなり熱烈な信者であることは、彼の台詞を聞いているうちにわかった。だからこそ、彼は怪訝な顔をした。

「そこまで思い込んでいて、どうして過ちを認めるんです？」

「それは、クオン様に光を見たからです」

グラハムが、顔色ひとつ変えずに告げてきた。どこか眩しそうにこちらを仰ぎ見ているのは相変わらずだったが、神妙な面持ちそのものだった。その言葉の意味するところは判らない。

光とはなんなのか。

クオンは、反芻するように尋ねた。

「光？」

「それは天使様と似て非なる光でした。ヴァシユタラの教えに説かれる、人間の姿をした救い主が持つとされる光をあなた様に見出したのです。そして、それこそがわたしという人間の存在意義。わたしが生まれ、今日まで生きてきた理由であるのだとわかりました」

「なにをいって」

「クオン様こそが、この混沌の大陸に平穏と安寧ともたらすため、神に遣わされたひとの姿をした救い主であると確信したのです」

グラハムの前例の言葉は、場に静寂を満たした。聴衆は、グラハ

ムの発した言葉に対してどう反応していいのかわからなかったのかもしれない、あるいは敬虔なヴァシユタラ教徒である彼の発した言葉だからこそ、沈黙せざるを得なかったのかもしれない。ベレルの国教である以上、この場を集った野次馬のほとんどがヴァシユタラ信徒なのだ。騎士団長の言葉と振る舞いを無視できるはずもない。静寂の中に波紋が広がり、小さなどよめきが起きる。

騎士団幹部たちも同様だった。グラハムの真に迫る言い様は、幹部たちが取るべき行動を明示しているともいえる。彼らは、次々に得物を納めると、グラハムよろしく跪き、クオンを仰いだ。そうしながらも、彼らは納得しがたいといった表情を隠せずにいた。当然だろう。クオンは彼らにとって抹殺すべき対象だったのだ。それが一瞬にして仰ぎ見るような存在へと変わるなど、到底考えられるものではない。

「神に遣わされた……？ ぼくが？」

反芻とともに、心音が高鳴る。

クオンは、茫然とした。グラハムの言葉に込められた力に、ひとびとの反応に、そしてそれを不快と感せず、むしろ当たり前のように受け入れようとする自分自身の心境に。頭を振る気にもならない。グラハムの語った言葉の意味を理解してなおかつ、否定しようとも想わなかった。

元より自分が他人の意見を強情に突っぱねるような人間ではないことはわかっているが、それとこれとは別問題だろう。ついさっきまで全力で殺しにかかってきた相手が、突如として神の遣い、救世主などのたまってきたのだ。常軌を逸している。狂気といっても差し支えないのではないか。普通ならば警戒するべきところだ。裏を疑い、真意を探るべきだ。慎重になるべきなのだ。

しかし、クオンは、疑念を差し挟もうともしなかった。相手は、信仰心が強すぎるあまり、部下を犠牲にしてもクオンたちを抹殺しようとした男だ。彼が態度を百八十度改めただけで、ある程度の説得力を伴うのではないか。その上、彼は全生命を賭して言葉を発

しているようだった。純粹に信じている。

クオンは、グラハムのその純粹さを好ましく想った。さきほどの凶行も、彼の信仰心が純粹すぎる故に引き起こされた悲劇だったのかも知れない。そう考えれば許せなくもない。なにより、ひとりとして犠牲者が出ていない以上、クオンが彼に罪を問う理由はほとんど消滅していた。無論、傭兵団長としてすべてを水に流すことはできない。が、彼の個人的な感情としてのわだかまりはなくなりかけていた。

自分の命を奪おうとした相手ではあるが、一度許してしまえば全力で手助けしたくなるのがクオンである。クオンは、グラハムを救いたくなっていた。しかし彼の場合、なにを持ってすれば救いといえるのだろうか。ただ力を貸せばいいのならば、それほど単純なことはないが。

「まあ、わからなくはないんですがね」

不意に、ウォルドが口を開いてきた。彼は、周囲を見回しながらどこか気恥ずかしそうに目を細めていた。ふと気づくと、クオンたちとともに火宅から脱出してきた騎士団員たちも、団長や幹部に習ったかのように跪いていた。彼らのまなざしは、幹部たちのそれとは違い、熱が籠もっていた。あの地獄から生還できたことへの感謝もあるだろうが、中には騎士団長の言葉を信じたものもいるように見受けられた。視線に込められる熱量が違うのだ。

「そうですね。わたくしにもわかりますわ。それはイリスもきつと同じ」

やはりどこか恥ずかしそうでありながら嬉しそうなマナの言葉に、クオンは、騎士団幹部たちの後方に佇むイリスに視線を向けた。

漆黒のドレスを身に纏う彼女は闇よりも暗い影のようであり、暗殺者としての本性がわずかに覗いている。だが、敵を前に殺気を曝け出すのは暗殺者としては二流三流であるという。どれだけ上手く忍び寄ることができても、殺気を感じられてしまえば失敗なのだ。もっとも彼女ならば、忍び寄りさえできれば殺気を感じられたとこ

るで、有無を言わず斬り殺してしまえる気がしてならなかったが。「イリスも？ いったい、なんの話なんだ？」

「御本人にはわかりかねますかな？」

「スウィールさん」

「わたしは、クオン様をはじめてお見かけしたとき、ついに天からお迎えが来たのかと覚悟を決めたものですよ」

「俺、言いませんでしたっけ。クオン様に最初に会ったとき、あなたに光を見たって」

「わたくしも、クオン様に光を見ましたわ。だから、ついていこうと決めたのです」

「……なんかずるいな。ぼくにはなにがなんだかわからないのに、みんな勝手に納得しちゃうんだもの」

ぼやくように言いながらも、クオンは微笑を隠せなかった。大切な仲間たちとの出逢いを思い出してしまったのだ。スウィールとの出逢いから始まり、ウォルドを紹介され、マナと知り合った。イリスには出遭って早々殺されかけたものの、なんとか思いとどまらせることができたのは彼にしても上出来だったろう。

運が良かった。

恵まれていたのだ。

この世界に来てからというもの数多くの出逢いがあり、別れがあったが、その多くがクオンにとって良い方向に働いているような気がする。

今回のこともそうだ。途中こそ最悪の事態に陥りかけたが、いまのこの状況は、彼にとっても《白き盾》にとっても決して悪いものではなかった。敵対者だと思っていた人物が、一方的に頭を垂れ、尻尾を振ってきているのだ。悪くはない。だが、必ずしも心地よくはない。彼が求めているものとは多少形の違う対応だからかもしれない。

救いはしたいが、救い主とやらになりたいわけではないのだ。勝手な言い分だろうが、それが本心だった。もちろん救い主などとい

っているのは、目の前の騎士団長くらいのものだが。

「皆、クオン様に光を見出したということではないのですか？」

グラハムは、ワールドたちの反応がまるで当然のこのようにいつてきたが、クオンには納得できかねなかった。が、彼のいいたいこともわからないではない。

理屈ではないのだろう。

それだけはクオンにも理解できる。彼の個人的な親友への想いや人々を救いたいという気持ちも、理屈などではなかった。どれだけの理屈を並べ立てても説明できないものだって、この世には存在するのだ。

クオンは、そう結論付けると、グラハムの眼を見た。眩しそうに目を細める彼の網膜には、本当に光とやらが投影されているのかもしれない。そんなことを考えて、彼は胸中で苦笑した。

「納得しがたいけど、理解はしました。みんながぼくに光を見たっていうのなら、それはその通りなんでしょうね」

否定はしない。受け入れた上で、考えるのだ。

こんな自分に光を見たというのなら、その期待には応えないといけない。

クオンは、速やかに思考を切り替えると、グラハムのいつていたことに思いを巡らせた。天使の降臨と、彼を駆り立てた予言について考える。天使が実在すると仮定した場合、その予言は信じるに値するのだろうか。だとしても、なぜそれも曖昧な予言なのか。そもそも、？魔？とはいったいなんなのか。

クオンは、マージアでの出来事を思い返した。あの小さな街を出るまでになにがあったのか、そのすべてを。

戦いがあったのだ。拠点として借りていた屋敷が半壊するほどの規模の戦闘。ベレル国内が騒ぎになるどころか、王都に報告さえされていなかった様子を見ると、屋敷の持ち主であり街の名士でもあったカーウェル老人が手を回してくれたのかもしれない。

それは国家に対する裏切り等に等しかったが、カーウェル「カリオ

ンにしてみれば、国民に安寧と平穩を約束できない国家こそ大いなる裏切りものだとも言いたいのかもしれない。彼はベレル王家と騎士団に対して辛辣な考え方の持ち主だった。そんな彼がたかが傭兵集団に過ぎない《白き盾》のために色々と尽力してくれたのは、どういふ風の吹き回しだったのか。

ともかくも、名士が手を尽くせば揉み消せるくらいの戦闘ではあったということだ。

しかし、その戦いの原因を考えれば過ぎ去ったことと笑い飛ばせるわけもない。

「天使様はマジアに？ 魔？ が興ると告げられたのですね？」

クオンは、グラハムに向かって尋ねながら、その脳裏にひとりの女の姿を浮かび上がらせていた。煉獄の炎の如き緋色の髪を靡かせ、すべてを見透かすような黄金の瞳を持つ女。数多くの伝説を持ち、無数の異名で呼ばれる紅き魔人。武装召喚術の基礎を築き上げながら、《大陸召喚師協会》から追放されたと噂される人物。魔性そのもの。

女は、アズマリア「アルテマックス」といった。

クオンをこの世界に召喚し、あまつさえセツナをも召喚した女だ。

「はい。確かにわたしはそう聞きましたが……」

グラハムが顔を俯けたのは、その予言を聞いたがために暴走してしまったことを恥じたからかもしれない。

クオンは、そんな彼を見つめながら、やはりアズマリアこそが？ 魔？ ではないのかと考えていた。

彼女は、召喚武装たるゲート・オブ・ヴァーミリオンの力を用いて皇魔を召喚、クオンにけしかけてきたのだ。クオンは無論、抗戦した。当然のことだ。皇魔などという制御のできない化け物を相手には、力以外で対処することはできなかった。それは己が無力だからだと想うのがクオンであり、彼は、その戦いの中で無残に散り逝く化け物たちの魂が天に昇るのを幻視した。

だが、クオンは敗れ去った。完全な敗北。後先考えずに力を行使

した結果である。だが、それは仕方のないことだったのかもしれない。

シールド・オブ・メサイアでは、相手の攻撃を防ぐことはできても、相手を倒すことはできない。しかも敵は皇魔である。戦うには、力ある武器が必要だった。そのために彼は仲間を招集するよりも、盾とは異なる武装を召喚するという選択をした。ウォルドたちは出払っていたのだし、その選択も間違いではない。だが、結果として彼は破れ、イリスたちが駆けつけてくれなければ命を落としていたかもしれないのだ。

激情に支配されて暴走した上、皇魔相手に敗北するという失態を犯した己の迂闊さを戒めながらも、彼は、それも自分らしいと想わないでもなかった。だからといって許容できる過ちでもないが。

あのとき、アズマリアは、地に倒れ伏したクオンに対して失望の言葉を投げ、消えて失せた。《門》を使い、文字通り消失したのだ。その後の消息はわかるはずもない。神出鬼没はアズマリアの代名詞でもあった。ゲート・オブ・ヴァーミリオンの力を行使すれば、大陸の北端から南端へと一瞬で移動することさえ容易いという。クオンたちを召喚したように、異世界に転移することさえ可能なのかもしれない。

かの魔女の居場所もわからなければ目的もわからない以上、このルーンベレルに突如として表れ、夜の王都を混乱と恐怖のどん底に陥れる可能性だってあるのだ。

そこまで考えて、彼は、小さく首を振った。

(いや……)

紅き魔人の目的は多少わかっている。ひとつは、クオンを武装召喚師として鍛え上げようとしているらしい。彼女の言葉の端々からそれとわかったのだが、それだけならばまだいい。しかし彼女の傍若無人なやり方は、クオンのみならず周囲の人間を巻き込みかねないのだ。実際、アズマリアがマジアで召喚した皇魔は、クオンへの試練などと嘯いておりながら、彼の仲間だけでなく街の人々へも

危害を加えようとしていた。人間を敵とする皇魔にとってはごく当然の行動だったが、そんなものを街中で召喚するアズマリアが彼には許せなかった。そして、そうである以上、彼女がここに現れないという道理もなかった。

むしろ、ここに現れるに違いないという確信すら抱く。

なぜかはわからない。

アズマリア「アルテマックスという人物を理解しているはずもないのに、だ。」

そして、その確信は天使の予言が後押ししているのだ。

？魔？はマジアに興り、ルーンベレルに襲来する。

クオン、は盾を掲げた。真円を描く純白の盾。シールド・オブ・メサイア大いなる守護と名づけた彼の召喚武装。《白き盾》の名前の由来にして、《白き盾》が無敵の傭兵集団たる所以。その能力は、対象を見えざる力場の障壁で包み込み、打撃や斬撃など様々な外圧から身を護るというものだ。その防御力たるや素晴らしいものであり、クオンが盾を召喚し、その力を行使しただけで勝敗が決するといっても過言ではなかった。だが。

「クオン様？」

グラハムの問いには応えず、彼は、周囲を一瞥した。見回さずとも群衆の数はある程度把握できていた。盾の召喚による身体能力の拡張がそれを可能にするのだ。それでも、この眼でもう一度確認しておかなければならないと思った。感覚だけを頼りにするのはなく、精確に把握しておくべきだろう。ひとりの漏れも許されない。野次馬に集まった市民のうち、だれひとりとして怪我ひとつ負わせるわけにはいかない。自業自得、などといったっている場合でもない。力があるものには力なき弱者を護る義務がある。少なくともクオンはそう信じていた。

故に彼は力を行使することを躊躇わない。

クオンを中心に周囲に集まった市民の数は優に五百人を超えており、想像を上回る野次馬の多さに彼は少なからず驚きを覚えた。無

論、王都を見下ろす丘の上に聳える騎士団長の私邸が、突然火に包まれたのだ。すわ事件かと飛び出すものがないわけもないのだが、それにしても多すぎた。

クオンの盾とて絶対無敵というわけではない。

例えばクオンひとりを守るためだけに力行使するならば、それこそ無敵となりえる。あらゆる衝撃を跳ね除け、どのような攻撃からもクオンを護ってくれるだろう。しかし、防衛対象を増やせば増やすほど、盾の防御精度は下がっていった。それでも百人程度ならば無敵に相応しい力を発揮するのだが、五百人の群集と百人の騎士団員、グラハムたちにウォルドラを含めるとなると、どれくらいの防御力を堅持できるものか。

バルサー要塞での戦いにおいても、それほどの人数に対して盾の力を行使したわけではない。アスタル・ラナデイス將軍率いるわずか五十人の精鋭部隊に対して使用したのみであり、その人数で難攻不落といわれていたらしい城塞を落としたからこそクオンは評価され、その名を広く流布されたのだろう。

ともかく、クオンは、盾の力を解き放った。純白の盾がまばゆい光を発する。白き閃光は、瞬く間に周囲一帯を包み込み、彼の望むとおりの結果をもたらした。輝きは一瞬。余韻も残さずに消え失せ、クオン以外には盾の力が働いている事実すら認識させない。群衆の中のだれひとりとして、なにが起こったのかわからなかっただろう。盾が発光したとしか理解できなかったはずである。彼の盾の力はそれほどまでに密やかに発揮される。目に見えてわかるようなものではない。

それでいいのだ。召喚者当人でさえ、その力に気づくのに時間がかかった。無敵の防壁を構築する盾など、想像できるはずもない。その上、盾の力場は眼に映りもしなければ、触って実感できるようなものでもない。なんらかの外圧を受けてようやくその守護を実感できるのだから、クオンの盾を見たこともない人々が一目見て理解できるわけがなかった。

この場を集ったすべての人間を盾の保護下に置けたことに安堵を覚えながらも、クオンは、決して油断することはなかった。むしろより強い警戒感を以て事に当たろうとしていた。必ず来る。

確信は、クオンの意識を冴え渡らせていく。

「グラハム殿、いますぐ騎士団を纏め上げ、王都防衛に全力を尽くしてください。市民の皆さんを安全な場所に誘導するのも忘れずをお願いします。ぼくも全力を上げて王都を護りますが、ぼくらだけで守り抜にはこの都市は広すぎます」

「ということは、？魔？が到来するということですか？」

「間違いなく」

クオンは、ふと感じるものがあつて頭上を仰いだ。わずかに赤みを帯びた夜空は、いつもとは違う表情を浮かべているように見えた。銀の月も数多の星々もなにかを忌避するかのように余所余所しく、白々しい光を落としてきている。それは錯覚。幻視に等しい。しかし、彼の眼には虚空に生じる小さな歪ひずみを捉えていた。薄明るい闇に刻まれた微かな亀裂のようなそれは、まるでクオンの発見を待っていたかのように唐突かつ急速にその範囲を拡大させていく。

「ほら」

クオンがだれとはなしにつぶやく間も、彼の視線の遙か先の虚空では変化が起きていた。歪は波紋の如く広がり、地上と星々の間に奇妙な紋様を描き出す。円と直線を多用した複雑極まりない紋様は、見よよによつては武装召喚術の術式に見えなくもない。いや、間違いなく術式を視覚化したものに違いないのだが、規模があまりにも大きすぎた。とても人間が扱う武装を召喚するための魔方陣には見えなかった。

魔人と呼ばれる存在が構築したのならば理解できる。

「ほら、とは？」

グラハムの問いを黙殺する形で、クオンは、背後のふたりに声を投げた。

「ウオールド、マナ、準備はいいかい？」

「俺はいつでも構いませんよ」

「わたくしも準備万端整っておりますわ」

頼もしいふたりの返答に満足げな笑みを浮かべながらも、クオンは、夜空に構成された召喚術式を凝視していた。彼の網膜には魔方陣として映りこむそれは、グラハムをはじめ、武装召喚術を学んだことのないひとの眼には捉えられないものなのだ。古代言語の呪文とともに体外に放出された命の力であるそれを認識するには、みずからもまた、命を燃やし、魂の根底に流れる神秘の力を解き放たなければならぬという。

クオンは、武装召喚術を学んだわけではなかったが、なぜか目視することができた。それは武装召喚術の行使に関してもいえることだ。武装召喚とたった一言口にするだけで、彼の力は解き放たれ、異世界から武装の召喚は為された。そして、術式を目視できるようになっていた。

アズマリアがクオンを召喚した意味がここに隠されているのかもしれない。

やがて、頭上の魔方陣が完成した。

爆発的な光が魔方陣から拡散し、夜空を純白に塗り潰した。力の奔流を感じる。莫大な力が渦巻き、巨大ななにかが形作られていく。遙か上空。ここからではどれだけ手を伸ばしても届くはずもなく、召喚武装の顕現をとめさせることはできない。術式が完成した時点でわかっていたことではあったが。

どよめきが起こったのは当然だろう。闇夜を引き裂く閃光は、一瞬ではあったが、ひとびとの網膜さえも真っ白に染め上げたに違いない。それは、クオンの盾の光よりも強烈で獰猛な光の奔流。目にただけで悲鳴を上げたくなるような極光。圧倒的で暴力的な力の波動。

驚くのは当たり前だった。

「アズマリア!! アルテマックス!」

クオンは我を忘れて大声を上げていた。

光が消え去ったあと、彼の視線の先にあつたのはとてつもなく巨大な門であり、さながら王都ルーンベルを覆う天蓋のようなそれは、いつになく享樂的かつ退廢的な形状をしていた。

ゲート：オウ・ヴァーミリオン
百万世界の門。

クオンは、複雑な形状をした門扉がゆっくりと開いていくのを見つめていた。門扉がわずかに開き、その向こう側から瘴気が漏れてくるのを目撃する。さらに瘴気たゆたう門の向こう側に無数の紅い光点が蠢いているのを確認したとき、彼は、眼を見開いていた。肥大した感覚が、それらの殺意を敏感に感じ取る。鋭利な刃のように研ぎ澄まされた殺気の群れ。

そして、門が完全に開く。

どす黒い瘴気とともに皇魔の雨が降り注いできた。

第七十二話 皇魔ケ刻

ファリアが異変に気づいたのは、オーロラストームを召喚していたからに違いなかった。怪鳥が一对の大きな翼を広げたかのような威容を誇るその召喚武装は、召喚主たるファリアの身体能力を向上させるのみならず、五感をも大幅に強化し、些細な空気の変化さえも見逃させなかった。

静寂に支配された夜の世界で、虫や動物の鳴き声さえ聞こえない。それはおかしなことだった。あるべき自然の姿ではない。上天に月はひとつ。星々は数多あり、どれも同じようできてまったく異なる光を発しているように思えた。そして星明りとともに降り注ぐ冷やかな夜気は、ひとを眠りに誘うよりもむしろ意識の覚醒を促す。冴え渡る感覚は、彼女の精神を戦場へと導いていった。

カランの街からクレブルへと至るシスクウ街道の脇に、ファリアは佇んでいた。道の両端に奇妙な形状の石柱が立ち並ぶその街道は、ガンディア国内でも特に奇異な光景だということでも有名であり、石柱に刻まれた古代言語を冠してシスクウ街道と呼ばれるようになったという。その石柱の由来はわかっておらず、ガンディアが国家として成立する以前から存在していたとも、建国の王サグナスと銀の獅子レイオンが邂逅したとき、地の底より隆起してきたともいわれている。なににせよ、この街道が奇妙なことに変わりはないが、ファリアがシスクウ街道の近くに立っているのは、リノンクレアの考えによるものだった。彼女は、復興も儘ならないカランで一夜を過ごすのは街の人々に迷惑がかかるだろうと、街の外で夜営することを決定したのだ。反対はしなかった。むしろ彼女の気遣いに感謝したほどだった。ファリアにとってカランは第二の故郷といつてもいいくらいに慣れ親しんだ街なのだ。気を使われて嬉しくないはずがない。

白聖騎士隊百名と荷駄隊百名以上の人間と、荷駄を引くための馬

もいれば、騎士隊の愛馬もおり、その大所帯を纏めて夜営をしようというのだ。

これほどの規模での夜営を彼女自身、あまり経験したことがなかった。武装召喚師としての修行時代を含めても極めて稀である。リヨハンでの大規模演習はこの比ではないにせよ、今回の夜営と同列に語るものではないだろう。

ともかく、夜営の準備だけで手間がかかった。人数が人数である全員、馬車の中で眠れるわけもなく、寝床を用意しなければならなかった。無論、カランの人々の手を煩わせるわけにはいかない。騎士隊と荷駄隊、ファリア、ルウファが力を合わせて夜営準備をした。リノンクレアも手伝いたがっていたが、白聖騎士隊副長の王子妃がやるべき仕事ではないという頑なな主張の前では、彼女も黙り込むしかなかったようだった。

そうしてシスクウ街道の外れに急造された夜営地は、常に火が焚かれ、ちよつとした喧騒に包まれていた。まるでキャンプでもしているかのような賑わいは、リノンクレアの人柄によるものも大きいのだろうが、白聖騎士隊が女性のみで構成されているというのも理由にあげられるかもしれない。彼女たちは、夜営の準備すら楽しんでいた。

ファリアはひとり、そんな喧騒の中心から離れている。騒がしいのが苦手なわけではない。むしろそういった騒ぎを人一倍楽しむ質だ。しかし、今夜はなぜかそんな気になれなかった。

この夜空が繋ぐ大地のどこかで、セツナが戦っている。そう想うと、居ても立ってもいられなかった。胸騒ぎがしていた。嫌な予感がする。それがどういったものなのかわからないからこそ、余計不安に駆り立てられた。

だから彼女は、周囲を警戒するといつて夜営地を離れたのだ。そして、オーロラストーム荒ぶる極光を召喚した。

「こんなところに居たんですか」

突然背後から声をかけられて、ファリアは、ぎよつとした。まっ

たく気配を感じなかったのだ。遠方に蠢く気配を知覚するほど警戒していたにも関わらず、だ。

「なにか用？」

ファリアは、後ろを振り返りもせずに行った。相手に驚いた表情を見せたくなかったというのもあるが、前方から目を離せないのも事実だった。たゆたう闇の中に、紅い光が明滅しているように見えた。

「特に用事はないんですけど、ね」

歯切れの悪い返事を浮かべてきたのは、ルウファである。彼は、夜営地で絶賛開催中の宴会に参加し、それなりに乗り気だったはずだが。

「皆さん、ちょっとはしゃぎ過ぎていて……」

「ついていけなかった？」

「まあ、そんな感じですよ」

「そう」

彼の声音からは、精神的な疲労が滲み出ている。きっと白聖騎士隊の女性陣に玩具のように扱われていたからに違いない。道中からずっとそうだったように。

白聖騎士隊が女性ばかりの集団であるとはいえ、決して男に飢えているというわけではあるまい。恋愛が禁止されているということもないのだ。が、道中はわりと暇である。暇潰しの対象にいま話題の武装召喚師を選んだとしてもおかしくはない。ルウファがセツナ「カミヤを名乗っている以上、仕方のないことだ。

もっとも、ファリアはファリアでたびたびリノクレアにからかわれていた。リノクレアといるときは、大体いつもそんな感じだった。たまにうんざりしないこともなかったが、ガンディア王家の一員にしてルシオンの王妃という高貴な女性と対等な友人として振舞ってもらえるのだ。この程度なんということもない。

「ところで、なにかありましたか？」

「ありよ。大あり」

ファリアは、背後に向かって囁くように言葉を投げると、オーロラストームを静かに掲げた。それは全長百六十センチほどの長弓なのだが、弓というにはあまりにも凶悪な形状をしていた。怪鳥が翼を広げたような、というのは大袈裟な表現ではない。一目見ただけでは弓に見えないのは、その異形の猛禽を思わせる姿のせいに違いない。弓の中心には獰猛な鳥類の頭部を模した装飾があり、大きく開かれた嘴の内側に握りがあった。そこから上下に伸びるのは鋭角的な翼であり、無数の鋭利な結晶体が羽毛のようにについている。それらを一言で表現すれば怪鳥となるだろう。

体を半身にして構え、水平に掲げた弓の嘴の内側に右手を差し入れる。握りを掴む左手に右手を添えるようにしながら意識を集中すると、羽のような結晶体が一齐に震え出し、燐光を放ち始めた。オーロラストームがファリアの要請に応え、力を発揮し始めたのだ。

彼女の視線は、前方二十メートル先に蠢く悪意の塊を捉えている。「へ？」

ルウファの間の抜けた反応は、彼の状態を考えれば致し方のないことだ。彼は、武装召喚術を行使しているわけではない。身体能力も五感も鍛え上げられているとはいえ、召喚中のファリアと比べると常人とさほど変わらないといっても差し支えの無いくらいだった。遙か前方の闇に蠢く気配など、感じ取りようがなかった。彼の落ち度ではない。

オーロラストームの結晶体が発する淡い光は、握りに添えた右手の内へと収束していく。強烈な力が、ファリアの掌から全身に伝わってきた。痺れるような力の胎動。嘴の中に集まった光が、周囲の闇をわずかに退けた。

「皇魔よ」

ファリアは、告げると同時に矢を引き絞る要領で、右手を引いた。彼女の右手は光の束を掴んでおり、それはさながら雷光によって形成された一条の矢であった。そう、オーロラストームに矢を番える必要はなく、オーロラストーム自体の魔力を矢として射出出すのだ。

目標を定め、矢を解き放つ。

闇を切り裂く雷光は、激しく蛇行しながらも瞬く間に目標へと到達した。苛烈な閃光に曝され、人外異形の化け物の姿が闇の中に浮かび上がったのも束の間、殺到した雷光に打ちのめされ、奇怪極まりない悲鳴を上げた。断末魔。強烈な雷撃は、皇魔を一撃の下に葬り去ったのだ。

仲間を殺されたからか、皇魔たちが一斉に叫び声を発してきた。敵意に満ちた獰猛な叫び声は、人間の耳にはあまりにも不愉快で、神経を逆撫でにした。

ファリアは、仕留めた皇魔の周囲に浮かんだ無数の紅い光点に目を細めた。先ほどの叫び声は、宴会中の連中にも聞こえただろう。騎士隊に素早く命令を飛ばすリノンクレアの勇姿が思い浮かべられて、彼女は口の端に微笑を浮かべた。

こういう唐突な事態に対応できるのがリノンクレアである。十代前半からいくつもの戦場を経験し、ルシオンのハルベルク王子の元に嫁いでからも白聖騎士隊長として前線に立ち続ける彼女には、皇魔との戦いも慣れたものだろう。

後方を案じる必要はない。むしろ後方からの援護に期待するところだ。

「結構な数ですね」

ルウファが、呆れたようにいつてきた。夜空に響き渡る皇魔の雄叫びは、その数量を明示し、こちらを怯えさせようとするものに違いなかった。

新たな雷光の矢が形成されていくのを見守るファリアの脳裏に、ふと閃くものがあった。

「そうよ。すっかり忘れていたわ。シスクウ街道の近くだったのよ」
「はあ」

青年召喚師は生返事を浮かべてきたが、ファリアは、彼の反応など気にも留めずに思考を回転させる。確か前方に横たわる街道の先に広がっているはずだった。小さな、しかし有名な森。ガンディア

に生まれ育ったものなら一度は耳にしたことがあるだろう。フェアリアはこの国の出自ではないが、それでもカランで働いているうちに自然と覚えたものだ。

「使者の森の在処が、よ」

「使者の森がどうかしたんですか？」

ルウファが疑問に思うのもわからなくはない。ガンディアの伝説に謳われるその森も、いまや名ばかりの遺跡に等しい。

使者の森。カランの街の南西、シスクウ街道沿いに広がる小さな森である。かつて、何百年も昔、この地を覆っていた戦乱を納めるため、天からの使者たる銀獅子が降臨した場所だと伝えられており、ひとりの青年が力を与えられた地であった。その青年こそガンディアを建国した人物であり、名をサグナスといった。

シスクウ街道は、銀獅子の降臨に際して贈られた大地よりの祝福だといわれることもある。

「セツナから聞いていたのよ。使者の森で皇魔に襲われ、撃退したって話をね」

カラン滞在中の話だ。满身創痕で包帯だらけの少年を相手によくそこまで話を聞いたものだと、いまさらのように想う。もう少し気を使ってあげれば良かったかもしれない。

「使者の森に？巢？があったと？」

「そこまではわからないわ。一応、カランの警備隊が調査はしたみたいだけど、森の半分が消し飛んでいてそれどころじゃなかったらしいし」

「森の半分が消し飛んでた……って」

「セツナ、でしょうね」

フェアリアが嘆息するように応えると、背後でルウファが息を飲んだ。当然の反応だ。何の面白味もない。フェアリアも始めてその話を聞いたときは驚いたものだった。しかし、当初はセツナが森を半壊させたなど考えもしなかった。彼の實力こそある程度は認識していたものの、それとてランカインを打ち倒せるくらいのものであり、

地形を変えてしまうほどのものだと、まったくもって考えても見なかった。

しかし、彼女は、あの黒く禍々しい矛の力を現実にも目に当たりにしたときから考え方を改めている。

晴れ渡る空の下、だだっ広い平原に満ち満ちた軍勢が、黒き矛の吐き出した紅蓮の猛火に飲まれていく光景。王都の市街地に現れた皇魔の群れを一掃する光芒。圧倒的な力。破壊的で獰猛極まりない力の奔流。感じただけで気が狂れそうなの。

「ま、彼に悪意はないわよ。自分の身を守るために力を振るっただけでしょうし」

自己防衛のための力がひとより大きすぎた、ただそれだけのことだ。赤子と大人の力に差があるように、ただの武装召喚師とセツナ。カミヤの間には歴然たる力の差があるのだ。大河のように広く、埋めようのないものが横たわっている。

ただ、それでも付け入る隙はあるだろう。黒き矛の絶大な力は、敵の命を刈り尽くすだけでなく、振るうものの体力をも際限なく奪う。意識を失えば、最強の矛を手にしていようと赤子以下だ。

無論、矛を手にしたセツナがそこまで追い込まれる状況などそう起きるものではないが。

「はは……」

ルウファは、セツナが市街地に大穴を開けたときのことでも思い出したのかもしれない。皇魔の群れを倒すためとはいえ、やりすぎだった。それは彼が矛の力を制御できていないからに違いなく、セツナの欠点のひとつといえた。

彼は生粋の武装召喚師ではない。血の滲むような修練の末に技術を身に付けたフェアリアたちとは違い、イルス・ヴァレに召喚されてから突如として行使できるようになっただけなのだ。どういう原理かはわからない。ともかく彼は力行使する技術を学ぶ暇もなく戦場に駆り出され、いまや敵国の空の下だ。彼が任務を終え帰国した暁には、折を見て特訓でもするべきだとフェアリアは考えていた。

そして、第二射を放つ。

動き出した皇魔の群れの最前列に向けて撃ち放たれたのは、三条の光芒。紫電を帯びた光線は、闇夜にでたらめな光跡を描きながら化け物へと飛翔する。皇魔が咆哮した。が、反応が遅すぎた。三つの光線は、それぞれ異なる目標の頭部や胴体を貫き、閃光とともに爆裂した。爆音は大きく、衝撃波が大気を激しく震わせた。街道沿いの奇岩は微動だにしない。

「さて。そろそろ君の出番じゃないかしら？」

「そうなるだろうと思ってはいましたけどね」

どこか達観したようなルウファの声は、決してなにかを諦めたからというわけでもないのだろう。ただ流れを理解していただけだ。

皇魔と戦わなければならない。白聖騎士隊だけを当てにするわけにはいかない。それだったら、彼女たちがリノンクレアの護衛にいた意味がない。黒き矛のセツナに成りすました意味がない。ここで活躍し、セツナの現在地に関する情報を拡散するのモまた、ひとつのやり方だろう。一戦にしてガンディアの主力と目されるまでの活躍を果たした人物がガンディア南部に居るといふ情報は、ガンディアの北方に位置する国々の警戒を少しでも緩めることに繋がっているのだ。

「ラブレターは読んでくれたんでしょ？」

「ええ。おかげで眠れない日々が続いていますよ」

ラブレターとは、数日前にフアリアがルウファに手渡した手紙のことである。あの手紙にびっしりと書き込んだ古代言語の羅列に等しい呪文を一言一句間違えないよう記憶するのは、必ずしも難しいことではないにせよ、いとも容易く行えることでもない。それをわずかな日数で暗記できたとすれば、日々の鍛錬と弛まぬ努力の賜物だといえるだろう。

もちろん、その術式をたった半日で紡ぎ上げたフアリアの手腕も並大抵のものではない。セツナ「カミヤ」の代名詞に相応しい召喚武装を呼び出すための呪文である。かの禍々しき黒き矛に相似した武

装を召喚するには、古代言語に精通しているだけでなく、呪文の構成原理にも詳しくなければならぬ。ただ呪文を唱えればいいというものではないのだ。

「ふふ。じゃあよろしく。黒き矛のセツナ君」

ファリアは、ルウファを振り返ると、悪戯っぽく笑ってみせた。

夢と現の狭間で呼び声を聞いた気がした。それはきつと気のせいに違いない。見知らぬ空の下、大地の上で、だれが彼の名を呼ぶというのか。

寄る辺なき異世界。

それが現実。

だれも知らない。

だれも彼を知ろうともしなければ、彼がだれかを知ろうともしない。

だれもが好奇の目を向けては素知らぬ顔で通り過ぎていく。視線の先にあるのは黒き矛であって、彼自身はおまけに過ぎない。

必要とされるのは黒き矛の力。

彼は黒き矛の召喚装置であり、制御機構でありさえすればいい。

人格は要らない。どのような性格で、なにを考え、なにを夢見ていようと関係ない。彼でなくとも構わないのだ。

黒き矛さえあればいい。

(それが……いまの俺の価値だ)

いつの間にか明瞭になりつつある意識の中で、冷ややかに認める。否定はしない。レオンガンドが彼に求めたのは、黒き矛の使い手としての力である。セツナも、それをわかった上で君臣の契りを結ん

だのだ。

そして望まれるまま力を振るうつもりだった。それしかなかった。ガンディアそこが居場所だと想った。居場所を護るためには、レオンガンドの望むように黒き矛を振り回すしかないと思った。

それだけが、彼の価値だからだ。

(いまは……)

いつかその評価を覆せるときがきたとしても、いまはどうしようもない。体力もなければ技術もなく、経験も少なく、頭がいいわけでもない。それでもこうして使ってもらえるのは、偏に黒き矛のおかげだった。

セツナは、馬車の天蓋を見やりながら、耳を澄ませて夜風の音を聞いていた。夢から覚めたばかりだということにも関わらず、彼の意識は冴えていた。

耳染を染めるのは風の音色とだれかの寝息だけで、虫の鳴き声が夜の世界を彩ることはない。闇が深いのは、馬車の荷台に外光が入る余地がないからだ、ほぼ完全に密閉された空間。男臭いのは仕方がないだろう。

「気づいたか？」

「！」

セツナは、突然投げ掛けられた言葉に少なからず驚きを覚えた。不意をつかれたのだ。あの逃走劇の直後だ。みんな寝入っていると思っ込んでいた。

「なにを驚くことがある？」

ランカインの冷笑は、セツナの耳には不愉快極まりなかった。馬鹿にしている。セツナは、声のしたほうに目を向けると、闇の中の相手を睨み付けた。そんなことをしても意味がないことはわかっていたし、なにより、視線の先に彼の眼があるとも限らない。

セツナは、ランカインがみずからの領土と主張してやまない荷物の上に視線を注いだまま、つぶやくように告げた。

「……心臓に悪いんだよ」

「それは失礼」

とはいってきたものの、決して彼の本心ではないだろう。慇懃無礼という言葉ほど、常時のランカインを示す言葉もないだろう。戦闘時となれば話は別だが。

セツナは、いきり立つても仕方がないと思い返すと、声を潜めて問いかけた。寝息を立てる三人の男たちを起こすのは可哀想だと思っただ。

「で、なんだって？」

「その様子だと、気づいていなかったようだな」

「？」

「皇魔だよ」

「またかよ」

セツナは、うんざりしたようにいった。街の外で夜を過ごすたびに皇魔と遭遇しているような気がする。実際はそんなことはなく（王都から出発した直後に襲われたくらいだ）、数度の皇魔との戦闘が記憶に焼きついていいるからに違いない。皇魔との戦いは、どれも印象深いのだ。

この世界に召喚されて最初の戦闘が皇魔ブリークとの戦いであり、つぎが王都での戦闘。そして、ランカインと力を合わせざるを得なかった戦い。すべて、セツナの頭の中に鮮明な映像として思い浮かべることができた。

ランカインが、あきれたようにいつてくる。

「夜は皇魔の世界。教わらなかつたか？ 夜に街の外を移動するのは死地を求めさ迷うのと同じだと」

「聞いたことねーよ」

セツナは即座に言い返した。事実、その通りである。セツナは、この世界の在り様について詳しくはなかつた。学ぶ暇がなかつたのもそうだが、教えてくれるようなひとがいなかつたのもある。そもそも、彼は当初みずからの素性を隠していた。情勢がわからないのだ。異世界から召喚されたなどと、簡単に口に出せるはずもない。

別段思慮深いわけでもないセツナではあったが、それくらいは考えていたし、言動にも気をつけていた。

異世界の人間だという事実を隠している以上、この世界の常識であるう皇魔の存在や生態について尋ねることなどできるはずもなかった。

「ならば覚えておきたまえ。ワーグラーンが皇魔という病巣を抱えて五百年あまり、夜に人里を離れるのは禁忌とされている。無論、腕に覚えがあるのならば話は別だ。軍隊のように戦力を持った団体行動も例外だな。しかし、力なき弱者たちが出歩くのは自殺行為に他ならない。皇魔は人間を襲う。なぜかは知らないが、あれらは人間を敵視し憎悪しているようなのでな」

セツナは、ランカインの丁寧な説明を聞きながら、密やかに上体を起こした。手元に置いていたはずの剣を手探りだけで見つけ出し、柄を握りしめる。彼の脳裏には化け物どもが蠢いていた。神経を切り裂くような奇声をあげ、敵意と殺意を振り撒く人外異形。

ランカインのいうようにこの馬車に皇魔が接近しつつあるのなら、戦う準備をしなければならない。エメリオンとロクサリアを傷つけられるわけにはいかないし、なによりラクサスを護らなければならぬ。このなんとも形容のしがたい一行の中で、ラクサスと御者のオリスンだけが常識人だった。

ランカインは狂気そのものがひとの形をしているといってもいい有り様だし、リユーグの軽さは信用に値しないし、その正体は掴めない。ランカインは彼を信用しているようなのだが、その理由は納得しがたいものだった。

『狗は裏切らない』

だから信頼しても構わないというのだが。

セツナには理解できない論理だったが、かといってリユーグのすべてを否定するわけではない。彼が、こちらについてくれたおかげでレコンダールからの脱出が速やかに行われたのだ。リユーグが馬車を移動しておいてくれたことには感謝するだけだ。

もつとも、それだけだ。

それだけでは信を置くことなどできない。

(それは俺も同じじゃないのか?)

冷ややかに自嘲する。

バルサー平原での戦闘でこそ活躍したものの、それ以外では王都に被害をもたらしたただけだ。アズマリアを呼び寄せ、彼女の召喚した皇魔との戦いが市街地に爪痕を残してしまった。それだけではない。アズマリアの置き土産が、ガンディアに置けるセツナの立場を危ういものにしていった。

皇魔と同じく、異世界から召喚された存在だと暴露されたのだ。イルス・ヴァレの人々と同じ姿をしていても、その正体が異界の存在だと告げられた以上、ガンディアにセツナの居場所はなくなっただとしてもおかしくはなかった。

レオンガンドが手を差し伸べてくれなければ、セツナは、どのような目に遭っていたのかわかったものではない。

(陛下は俺を必要としてくれている)

黒き矛の力を欲しているだけかもしれない。

ガンディアという小さな国を強くするための一要素でしかないのかもしれない。

ただ利用できるものは利用しようというだけかもしれない。

それでも構わなかった。

必要としてくれたのだ。そこに居場所がある。安らぎがある。孤独よりはいい。比べるまでもなかった。

少なくとも、レオンガンドはセツナのことを皇魔と同質の存在とは見ていないようだった。セツナの話に最後まで耳を澄ませ、優しい表情を浮かべていた。

そして、セツナを掬い上げてくれた。

(そうだ)

セツナは、剣の柄を握る手に力を込めた。陛下の期待に応えなければならぬ。信頼されるように。居場所を失わなくて済むように。

「で、どうするんだ？」

「無論、蹴散らす。でなければ目的を果たせない」

闇の中、ランカインの双眸に鈍い光が走ったような気がした。同時にセツナの頭の中に浮かぶのは、ランカインの笑みである。狂ったようできて決して正気を失ってははいない、そんな笑み。

セツナは、脳裏に描いた男の笑みに恐れとも怒りともつかない感情を抱く己を自覚して、強く歯噛みした。許せないという想いは未だに心の奥底で燻っていて、ちよつとしたことで火が着きかねなかった。一度火が着いてしまえば、一瞬にして猛火となり、燃えて尽きるまで荒れ狂うだろう。そして、すべてを失うのだ。

(……馬鹿馬鹿しい)

セツナは、頭を振った。いまは私情よりも優先すべきことがある。このまま状況が変化するのを見届けるという選択肢はない。

彼は立ち上がると、ランカインの気配を振り返った。

「俺とあんただけで？」

「そうだ。皆様方にはこのまま熟睡してもらうつもりだ」

ランカインのこの返答は、さすがにセツナも予想していなかった。それはつまり、派手な戦い方をしてはいけないということであり、皇魔に叫び声を上げさせてもいけないということに他ならない。戦闘の難易度が急激に高くなったのだ。

「睡眠不足で任務に支障が出ても困るだろう」

というのが彼の言い分だったが。

セツナは、半ば茫然としながら、ランカインが馬車から出て行くのを気配と物音で感じ取っていた。

「どうしろってんだよ……」

セツナは、剣の柄を握り締めたが、これで皇魔と戦えるはずもない。鍛え上げられた鋼の肉体を持っているわけでもなければ、飛び抜けて運動神経がいいわけでもない。まともに剣を振り回したこともないし、通常の状態では皇魔と対峙したこともなかった。その上、この有様である。

レコンダールの包囲網からの脱出時に黒き矛を召喚したがために、全身の筋肉という筋肉が悲鳴を上げていた。いわゆる筋肉痛なのだが、それは矛の力の反動であった。

黒き矛を手にしたとき、セツナは尋常ならざる力を得る。しかしそれは一時的なものに過ぎず、矛を帰還させた途端、超絶的な力は消えて失せ、酷使した肉体は激しい疲労を訴えてくるのだ。

最初からそうだった。

カランでの戦いのあと、数日ほど寝て過ごさなければならなかったのもそうだし、バルサー平原での戦闘の直後から意識を失っていたのも同じような原理だろう。体力だけでなく、精神的な力まで消耗しているのかもしれない。

召喚武装は強力極まりない。なんの代償もなしに行使できるはずもなかった。そもそも、異世界から武器を召喚するということが自体大それている。

そして、力を使うということは、力を消耗するということに他ならないのだ。

もっとも、黒き矛ほど絶大な力を持つ武器を行使する代償が、体力や精神力だけならば安いものだともいえるのだが。

(行くしかない、か)

考えていたところでどうしようもない。答えは出ないのだから、前に進むしかない。ランカインひとりに任せても大丈夫そうな気はするものの、後のことを思えば、手伝わないわけにはいかなかった。したり顔で説教などされたくもない。

セツナは、ラクサスやリューグの体を踏み付けないように気をつけながら、馬車の中を歩いていった。鎧を身に纏う暇はない。ランカインはとっくに飛び出しているのだ。すぐに追いかけることができなければ、どんな嫌味をいわれるのかわかったものではない。

幌馬車から飛び出すと、凍てつくような夜気が全身に絡み付いてきた。着地と同時に視線を巡らせる。ランカインは、すぐ近くに立っていた。彼は前方を指し示している。

セツナは、促されるままに視線を前方に戻した。森の中。乱立する木々の重なり合う枝葉のおかげで星々の光さえも届かず、漆黒の闇が悠然とその権力を誇示していた。夜行性の生物の鳴き声が聞こえることもなければ、気配さえ感じ取れない。植物さえも萎縮しているような感じがした。必ずしも気のせいとはいえなかった。暗澹たる闇の中を、青白い炎が揺らめいているのが見えた。

その数は多く、ゆっくりとこちらに近づいてきているように見えた。

「あれが皇魔？」

「ブフマツツだ。この森に？巣？を作っていたようだな」

ランカインの嬉しそうな声は、しかし、森の闇の静寂を掻き乱すことはなかった。前方の皇魔が反応を示すこともなかった。小さな声だ。セツナにしか聞こえなかったのかもしれない。

そして、あらゆる生物が沈黙した森の中で、ランカインの囁きがセツナの耳朵を震わせた。

「さあ、深く静かに戦いたまえ。ニーウェーディアブラス君」

第七十二話 皇魔ヶ刻（後書き）

次回予告

皇魔と対峙する武装召喚師たち。

ウォルドのブラックファントムがうなり、マナのスターダストが炸裂する。

ファリアのオーロラストームが雷を放てば、ルウファは新たな武装を披露する。

そして、セツナは黒き矛を召喚するのだった。

第七十三話 武装繚乱

御期待ください。

第七十三話 武装繚乱（前）

王都ルーンベレルの上空に開かれた門より現れ、雨のように降り注いできたのは、人外異形の化け物 皇魔であった。人間への敵意と殺意を隠しもせず、威圧的な咆哮を上げながら落ちてくる化け物の数はあまりに多く、騎士団だけでは迎撃することさえ難しかっただろう。騎士団の全戦力を動員することができれば撃退することもできるだろうが、ある程度の犠牲は覚悟しなければならぬ。

しかし、《白き盾》の主力がここに集まっている以上、そんな心配をする必要はなかった。

群衆の中でだれかが悲鳴を上げた。当然の反応。頭上から化け物が降ってきたのだ。この大陸に生きる人々にとって、皇魔ほど恐ろしいものはない。

それは、死。

儼然と存在する死。

力なき弱者は、その圧倒的な暴力に抵抗することもできず、屍となるだけなのだ。

クオンは、野次馬根性で集まった人々の愚かさを認めながら、それでも見放したりはしなかった。愚かなのはだれも同じだ。クオンだって賢しく生きてこられたと言い切れない。それに、だれもこんなことになるとは想像もできなかった。

皇魔が、クオンたちの周辺につきつきと着地していく。高高度からの落下にも関わらず、化け物たちが体勢を崩したり、着地に失敗したりはしなかった。数多の化け物の落下によって局地的な地震が起きたかのように地面が揺れた。

それらは、人間と同じように四肢を持ち、二本の脚で立っていた。筋骨隆々といって差し支えなく、その肉体から繰り出される打撃こそが最大の武器であることはだれの目にも明らかだった。肌は青く、双眸からは紅い光が漏れていた。頭部には角が生えており、日本の

伝承などに出てくる鬼を想起させた。

識別名ベスベル。

「お、皇魔が降ってきたぞー！」

「逃げる、逃げるんだ！」

「ひ、た、助けて！」

恐慌が起きた。

市民が悲鳴を上げながら逃げ惑い、場に混乱をもたらず。騎士団員たちは、そんな人々を誘導しようと懸命に声を張り上げていた。騎士団員の中には剣を抜き、ベスベルに飛びかかるものもいたが、皇魔の意識を市民から逸らすことくらいしかできないようだった。斬撃が通らないわけもあるまい。厳しい訓練を乗り越えてきた騎士団の一員である。その剣の一撃が、クオンたち傭兵に劣るはずもない。

騎士団員たちの身には、疲労が蓄積しているのだ。グラハム邸を包んだ炎の中で体力を奪われすぎた。ここまで歩いてくるだけで、少なくなった体力をさらに消耗しているのだ。まともに戦えるわけがなかった。

元より期待してもいないのだが。

盾の力が作用している以上、命の安全は確保されているとはいえず、過信はできない。これほどの人数を同時に守護したのは今回が初めてなのだ。無敵の盾の力が、完全には機能しないかもしれない。その場合、どのような事態が起こるのかもわからなかった。被害の出ていないいまのうちに市民だけでもこの場から退避させておくべきだろう。そうすれば、盾の力を分散させずに済む。

クオンは、グラハムに声をかけた。

「グラハム殿、早急に市民を退避させ、路地という路地を封鎖してください。皇魔をこの場に留め置き、被害の拡大を防ぎましょう」「はっ！」

騎士団長は、威勢よくうなずくと、群集と騎士団員、皇魔が入り乱れる中へと突っ込んでいった。グラハムの大音声に幹部たちの怒

声が続く。市民と騎士団員の扱いは、彼に任せておけばいい。

クオンたちは、鬼退治に精を出さなければならぬ。

地に降り立った皇魔の数は優に百を越え、視界を埋め尽くすほどだった。化け物たちは、耳障りな叫び声をあげながら市民や騎士団員に襲いかかっていたが、見えざる盾によって阻まれ、だれひとり傷を負わせることもできていなかった。そしてその理不尽な事実が、ベスベルを怒らせるのだ。

「そろそろ行きますかね」

「そう致しましょう」

ウォルドとマナは互いに視線を投げ合うと、同時にクオンの前に出た。普段はぶつかることも多いふたりだが、戦闘となれば呼吸を合わせるところが非常に頼もしい。

とはいえ、戦闘は既に始まっていた。皇魔と騎士団員と逃げ惑う市民が入り乱れながらも地獄絵図になり得ないのは、単純に大いなる守護による防壁が機能しているからに他ならない。

もしクオンが盾の守護対象を市民にまで広げていなければ、今頃大変な事態になっていただろう。大変などというものではない。阿鼻叫喚の有り様になっていたに違いなかった。

「一夜の幻想、奏でようか！」

ウォルドが、勢いよく地面を蹴った。前方に向かって跳ぶ。筋肉の塊のような大男の巨躯が、一瞬にしてクオンの視界から掻き消えた。速度が原因ではない。クオンの視覚では認識できなくなったのだ。

それがブラックファントムの能力。

前方で市民に襲いかかっていたベスベルの巨体が、突然、なんの前触れもなく吹き飛んだ。直後、その場にウォルドの姿が現れ、一呼吸の後消失した。ウォルドが殴り飛ばしたのだ。

「ああいった台詞は様になっているとでも想っているのでしょうか？」

マナがこちらを振り返ってきた。心底あきれている。

「どつだろっ?」

「クオン様から注意してあげてください。壊滅的に似合っていない」と

「辛辣だな」

クオンは苦笑を浮かべるしかなかった。

「では、わたくしも参戦して参ります。どうかご無理だけはなさらずに」

「わかっているよ」

心配性なマナの言葉には、心の底から同意しておく。無理をしてひとりで戦った結果、無惨に破れ、命を落としかけたのだ。やはり自分ひとりでは戦えない。

ひとはひとりでは生きていけない。支え合わなければ、前に進むこともままならない。

だからこそ、彼は、皆を護るための力があると信じていた。

皆を護り、皆に護られ、ここにいます。

それでいい。それで十分だ。

と、クオンの思考を中断させたのは、ベスベルたちの獯猛な雄叫びだった。数多の光が連続的に瞬き、クオンの視界を青白く染めた。ベスベルたちが体内で生成した光を、一斉に吐き出したのだろう。

閃光の息吹き。地面や建物、盾の障壁にぶつかり、爆音と白煙を撒き散らす。

群衆の中から悲鳴が上がり、騎士団員たちが皇魔に負けじと気合を発した。もうもうと立ち込める爆煙が状況の把握を困難にするのだが、クオンの拡張された五感は、周囲の有り様を鮮明な映像のように脳裏に投影する。

闊歩する青鬼の群れの中を一陣の風が通り抜けた。漆黒の突風。その風が通り抜けた直後、複数のベスベルが同時に崩れ落ちた。どす黒い鮮血とともに地に沈んだ皇魔たちは、自分の身になが起きたのか理解しないまま絶命したのだ。断末魔の叫び声さえ上げなかった。

死体の群れの中で血飛沫も浴びずに佇むのは、ゴスロリ風の衣装を身に纏う暗殺者の女。イリス。手に刃物などは握られておらず、彼女がどのような手段で化け物を倒したのか、クオンにはわからなかった。

「……これでは混乱が大きくなる一方ですわ」

マナ「エリクシアは、密やかに眉根を寄せた。戦場への足取りは軽いものの、心中穏やかではなかった。爆煙が風に流れる中で、ベスベルの吐き出した光線が道路を破壊し、周囲の建物にも大きな被害をもたらしていたことがわかったからだ。立ち並ぶ家屋の壁や天井に穴が開き、粉塵が立ち込めている。建物の中に居たであろう人々は無事だったのだろうか。

クオンの盾の保護対象に被害は出ていないのだが、この事態がルーンベレル全体に波及しないとも限らない。クオンはそうならないように騎士団を動かしたのだが、この混乱した状況で目論見通りに動いてくれるかどうか。

マナは、左前方に渦巻く白煙の中から殺気を感じ取ると、スターダストを構えた。彼女の召喚武装。全長八十センチ程度の槌といふべきか。柄頭には無数の棘があり、棘は青白く輝いているようにも見える。柄にはなぜか水色のリボンが可愛らしく巻きつけられており、武骨な打撃兵器のイメージを破壊するかのようだった。

一見非力な女性にしか見えないマナには、不釣り合いな得物である。身に付けたドレスがその違和感に拍車をかけている。が、スターダストは彼女にとって使い慣れた武器だった。それ以前に召喚武装なのだ。異世界から召喚した彼女のためだけの武装。使いこなせ

ないものを態々召喚するわけもない。そして厳しい鍛錬を潜り抜けてきた武装召喚師である以上、彼女の華奢に見える肢体も鍛え上げられた戦士の肉体と同じだった。メイスを振り回すことくらい造作もない。

爆煙を散らしながら、青き鬼がマナの視界に飛び込んできた。ベスベルの紅い眼光がこちらを捉えている。殺気は鋭く、肌突き刺さるようだった。

ベスベルが咆哮を上げた。飛びかかってくる。

マナは、皇魔が上体をひねって繰り出してきた右拳を体を捌いてひらりとかわすと、その瞬間に生まれた隙を逃さず、ベスベルの頭部にスターダストの先端を叩きつけた。威圧的な顔面に無数の棘が突き刺さり、そのまま頭蓋を粉碎する。抜群の手応え。血や脳漿が飛び散り、化け物が絶叫したものの、その巨躯が崩れ落ちることはなかった。致命的な一撃には違いなかったが、皇魔の執念は瀕死の肉体を突き動かしたのだろう。マナに掴みかかろうと、両手を伸ばしてきた。

が、マナとて会心の一撃に酔いしれ、隙を曝け出すような愚行を犯したりはしない。彼女の肉体は、ベスベルが反撃に出るより早く後方へと飛び退いており、皇魔の太い腕が空を切るのを見届けていた。

(なんとまあ……)

頭部を破壊されてもなお人間への殺意を失わないその様子に化け物の化け物たる所以を見た気がして、マナは、スターダストを握る両手にわずかに力を込めた。気を抜くことはできない。それは戦場において当然の心構えであり、彼女とて、戦闘中に気を抜いたことなどはないし、抜くつもりもない、ただの再確認である。

ベスベルの無惨に破壊された頭部には、スターダストの棘がいくつも刺さっていた。スターダストの青白く輝く刺は、対象に突き刺さった瞬間、抜け落ちるようになっていたのだ。

マナは、ベスベルに刺さった刺の数を数えると、その後方から皇

魔たちが接近してきつつあるのを視認した。仲間を心配しての行動なのか、それとも仲間には致命傷を負わせたマナを倒しておこうという判断からの行動なのか。どちらにせよ、一網打尽にするにはもってこいの状況が生まれつつあった。

さらに視線を走らせる。

周囲には市民や騎士団の姿はない。既にこの戦場から遠く離れようとしている。混乱はまだ続いているが、騎士団の懸命の呼びかけと行動により、市民の中には落ち着きを取り戻したのもいるようだった。だからどう、ということもないが。

クオンはスウィールと行動をともししており、イリスが彼の元に駆けつけようとしているのが見えた。一足飛び。それはまるで一陣の風のように。彼女の運動力は常人には理解できない類のものだった。化け物染みているというのは言い過ぎにしても、およそ通常の鍛錬などで得られる能力の範疇を超えているように感じられてならなかった。

ブラックフロントムを振るうワールドの姿は認識できないものの、彼の熱を帯びた気配はマナの周囲には存在しておらず、横から飛び込んでくる心配もないだろう。

マナがスターダストを振り回しているところに近づかないというのは、《白き盾》の暗黙の了解に等しい。だれも仲間の攻撃に巻き込まれたくはないのだ。例え無敵の盾に護られていたとしても、巻き添えを食いたくないのが人情というもの。マナ自身、味方を攻撃対象に含めるような真似はしたくない。

「打撃程度では満ち足りないようですね」

マナは、瀕死にも関わらずこちらに向かって迫ってくるベスベルを一瞥した。頭蓋を破壊され、脳髄が露になっていた。血や体液が流れ落ち、青い顔を暗い赤で染め上げている。双眸から放たれる紅い光に衰えはなく、むしろいままで以上に強烈な殺意を発している。どす黒い殺気は奔流となって、滅ぼすべき敵へと殺到する。

彼女は、涼しい顔で敵意の視線を受け流すと、スターダストを頭

上に掲げた。棘の抜けた部分がどこか不恰好だった。

瀕死の皇魔の周囲に仲間の青鬼どもが辿り着く。十体。普通の人間ならば、たったひとりで相手にするような数ではない。皇魔の群れに単身立ち向かうのは勇気ではなく、無謀である。一対一で戦うことすら危険極まりないという。しかし、彼女ら武装召喚師は違っていた。一対多の戦力差を覆し、多勢に無勢の常識をも凌駕するのが召喚武装という存在だった。

彼女のスターダストもまた、常識外れの武器といっても過言ではない。

「では、少しばかり派手に参りますわ」

マナは、スターダストを振り下ろした。足元の地面に叩き付け、スターダストの力を解き放つ。見えざる力の拡散。力の波動は皇魔の元に到達すると、その無残な頭部に突き刺さったままの棘に最初で最後の命令を送る。命令を伝達されたすべての棘が同時に強烈な光を発し、闇の世界を青白く塗り潰した。爆光の連鎖。皇魔の悲鳴は盛大な爆音に飲み込まれる。マナの視覚や聴覚さえも狂わされかねない。

ベスベルに刺さっていた十数本の棘が、一斉に爆発したのだ。その威力たるや凄まじいもので、あの棘のどこにそんな火力が秘められていたのかと首を傾げなくなるほどだったが、そんなことマナにわかるはずもない。彼女はただ召喚した異世界の武器を利用しているに過ぎない。そして、その力が制御できるものであるのならば、原理まで解明する必要はない。

爆風とともに吹き飛ぶのは四散した皇魔の肉体であり、もはや肉片や肉塊としか呼べなくなったそれらが体液を撒き散らしながら飛散する様は、凄惨というほかなかった。限界を留めていないものがほとんどだった。それほどの爆発だった。しかし、その範囲は決して広くはなく、マナの前方に集まっていた十体の皇魔のうち、五体を絶命させ、三体には重傷を負わせられたものの、残る二体には軽傷さえ与えられなかった。殲滅するつもりだったのだが。

「少なかったようですわね」

マナは、激昂の咆哮をあげる化け物を見据えながら、スターダストを構え直した。爆心地の地面には大きな穴が開いているものの、火力が足りなかったと判断せざるを得ない。爆発の火力を上げるには、同時に起爆する棘の数を増やす以外にない。しかし、スターダストの棘の数には限りがある。無駄にはできない。

前方から、無傷だった二体の皇魔が飛び掛かってきた。重傷のベスベルは、憎悪と怨嗟の叫びを発してはいるものの、戦闘に参加できそうにはない。その様子を見る限り、閃光の息吹を吐くことすらも困難なのかもしれない。

「とはいえ」

彼女は、迫り来るベスベルたちに向かってスターダストを振るった。鉄槌が空を切り、柄頭の棘が飛び散った。棘が抜けるのは、なにも対象物に突き刺さったときだけではない。マナの意志により、矢のように飛ばすことも出来た。

「この数ならば出し惜しみする必要もなさそうですわね」

皇魔が百体以上とはいえ、こちらには無敵の盾があり、ウォルドとイリスがいる。騎士団は、当てにならないとはいえ、盾によって不敗の軍勢と化しているのだ。彼らも皇魔殲滅に貢献してくれるに違いない。

数では同等以上。

固体の質はどうやらベスベルのほうが上のようだが、こちらには図抜けた能力の持ち主が何人もいる。その筆頭がイリスであろう。

彼女の人並みはずれた身体能力は、人並み以上の鍛錬によって肉体を強化してきたマナを以てしても嫉妬を覚えるほどのものだった。

だが、だからこそ、安心してクオンの護衛を任せていられるのだ。スターダストから飛んだいくつもの棘は、マナに向かってまっしぐらに突き進んでくる二体のベスベルの顔面や胴体につきつぎと突き刺さった。といって全弾命中というわけにもいかず、外れた棘の向かう先に味方がいないことを祈るより他なかった。確認している

暇はない。敵はもはや眼前にまで迫ってきていた。

「これは手向けです」

マナは、スターダストを構えると、ベスベルに向かって一歩踏み込んだ。距離は限りなく零に近づいていく。皇魔は引き下がらない。怖れを知らない赤子のようだった。獰猛な本能を剥き出しにしたまま、突っ込んでくる。前方二方向からの同時攻撃。

「ふっ！」

マナは、息吹きとともに鉄槌を振り回した。皇魔の攻撃を恐れず怯まず、こちらの一撃の速さにすべてを賭ける。全身全霊の一撃。

二体のベスベルは前方左右から拳を繰り出してきたが、大きなふたつの拳がマナに届くよりもわずかに速く、スターダストの先端が右の皇魔の脇腹を捉えた。手応えは十分。相手の拳は空を切っていた。

マナは、その勢いのままスターダストを左に向かって振り抜いた。鬼の巨体をもう一体のベスベルに叩きつける。仲間を叩きつけられた皇魔が吼えた。口汚く罵ったように感じられたが、化け物の言葉を理解できるはずもなく、彼女は、仲良く転倒した二体のベスベルを一瞥すると、即座に後方に飛び退いた。力を込め、スターダストを地面に振り下ろす。

スターダストが地に触れた瞬間拡散したのは起爆信号。波紋のように拡がり、スターダストの棘を一斉に爆裂させる。マナの前方で盛大な爆発が起こった。夜空さえも染め上げる閃光の乱舞。鼓膜を痛めつけかねない爆音の饗宴。衝撃波。皇魔の断末魔など聞こえるはずもなかった。

「相変わらず派手にやるもんだ」

ワールドが目を細めたのは、夜空を塗り潰す閃光が眩しいからだ
けではなかった。マナの召喚武装スタイダストの火力が以前にも増して凄まじい
からだ。夜の王都に反響する爆音は、きつと夢見る市民を叩き起こ
し、この騒動に拍車をかけるに違いない。が、彼女を責めることは
できない。王都が混乱に陥ろうとも、皇魔の殲滅こそ最優先にすべ
きなのだ。混乱の拡大を恐れて力を出し惜しみしている間に被害が
増大することこそ避けなければならない。

ワールドは、足元を見下ろすと、頭部を破壊したベスベルが絶命
していることを確認した。ブラックファントムによる打撃ならば、
頭蓋骨程度軽く粉碎できる。頭部を粉々に破壊してしまえば絶命す
るのは皇魔とて同じである。壊しきれなかった場合はわからないが、
少なくとも拳による殴打が直撃さえすれば、そのような失敗は犯さ
ないだろう。以上のように例え人外の化け物が相手であろうと引け
を取ることはないのだ。

(五体目、と)

周囲に視線を巡らせる。戦場に蠢く化け物の数は、一行に減る様
子がなかった。実際には減少しているはずである。しかし、ベスベ
ルの数が多すぎて減っているようには感じられなかった。

口笛を吹く。と、周辺の皇魔の視線が一斉に彼に注がれた。が、
ベスベルたちは首を傾げるような素振りを見せる。彼らの紅い瞳に
は、口笛を吹いた人間の姿など映らないのだ。しかし、気配は確か
に存在する。耳を澄ませば呼吸する音さえ聞こえたかもしれない。
だが見えない。目に映らないものをどうしろというのか。

ワールドは、化け物たちの反応を見やりながら、ゆっくりと拳を
構えた。ブラックファントムから流れ出る力を拳に集め、次の一撃
の威力を飛躍的に向上させる。

ブラックファントム。彼の召喚武装である。両の前腕から手の甲
まで覆う漆黒の籠手であり、武器というよりは防具に近い武装だっ
た。鋭角的な形状をしており、両方の手首付近に碧玉が飾られてい
た。

彼は、一步踏み出した。ベスベルの亡骸を跨ぎ、皇魔の集団への接近を試みる。気配を消そうとはしない。できないのではなく、しないのだ。この混乱した戦場で殺気を隠す必要はなかった。数多の殺気が飛び交う中、彼の気配だけが特別浮いているわけもない。

二歩。

ベスベルはまだこちらに気づかない。こちらへの興味を失ったからかもしれない。爆音が次々と轟き、まばゆいばかりの閃光と強烈な衝撃波が化け物どもの注意を引いたのだ。マナの大暴れがウォルドの攻撃を援護してくれていた。

ウォルドは、スターダストの爆発に注意を逸らした化け物に向かって飛び掛った。その間抜けな横っ面に右拳を叩きつけようとする瞬間、ベスベルがこちらの気配を察知し、顔を向けてきた。が、その紅く輝く双眸でウォルドの姿を捉えられたとしても、迎撃することとは出来なかっただろう。こちらを振り向いたときには、ウォルドの手甲を纏った拳が直撃する寸前だったのだ。拳は、皇魔の顔を抉った。皮膚を突き破り、頭蓋骨を破壊し、脳髄をも粉碎する。悲鳴さえ上げさせない絶対の死。

正に一撃必殺。

ウォルドは、飛散する血や体液を浴びながら着地すると、敵の死を確認するまでもなく別の皇魔へと跳躍していた。皇魔の数は多い。状況を終息させるには、一体一体確実に殺していくしかないのだが、死を確認している時間さえも惜しい。とにかく迅速に敵を倒していかなければならない。

見ると、皇魔がこの場に留めておくために構築された騎士団員による防衛線は上手く機能しているらしかった。騎士団の壁を突破しようとして、ベスベルの群れが強烈な攻勢を仕掛けているのだが、無敵の盾の加護により、騎士団員はだれひとりとして傷を追うこともなく、鉄壁の防衛網を維持することに成功していた。

「後は俺たちが活躍するだけってな」

だれとはなしにつぶやいて、彼は、背後への振り向き様に左腕を

振り抜き、真後ろにいた皇魔の側頭部に裏拳を叩き込んだ。抜群の手応えとともに憎悪に満ちた叫び声が響いた。意識を集中させていなかったためか、ベスベルの頭を粉碎するには至らなかったようだ。すぐさま体を捻って足払いを仕掛け、転倒した皇魔が反応するより速く、ひしゃげた頭部に必殺の一撃を叩き込む。ウォルドの拳が鬼の顔面を貫いたのは、化け物の口腔から光が吐き出される寸前だった。もつとも、閃光の息吹きが吐き出されたところで、痛くも痒くもなかったが。

(この緊張感の無さはどうだ?)

クオンのシールド・オブ・メサイアによる絶対の守護がもたらす弊害なのかもしれない。本来ならば死と隣り合わせの戦場でありながら、なんの緊迫感も抱けないのだ。それは戦士の感覚を鈍らせ、いままで培ってきた経験さえ無駄にしかねない。無論、安全を約束されるのはいいことでもある。安心して死地に飛び込めるのだ。どのような状況にあっても焦らず冷静に対処できるのも、盾の守護の利点であった。

そして、盾の庇護下にあつてこそ、《白き盾》はここまでこれたのだ。いまさら盾を使わないなんていう選択肢はありえない。

(なら、俺たち自身がその戦いの感性を鈍らせないようにしておけばいいのさ)

これほど簡単な答えはないだろう。

ウォルドは、口の端に小さく笑みを浮かべた。やるべきことが増えた。どんな戦いでも手を抜くことは許されない。緊張感を抱き、技を磨くのだ。それこそが《白き盾》を更なる高みへと押し上げる力になるはずだ。

ウォルドは、再び地を蹴った。

召喚に時間がかかるのは仕方のないことだ。

術式を構築するためには長つたらしい呪文を唱えなければならぬ。古代言語の羅列。複雑怪奇な言葉の組み合わせは、しかし、一定の法則に従って構成されたものである。呪文を詠唱することで、生命の根源の力を引き出すのだという。魂の力。霊力。あるいは魔力ともいう。生きとし生けるものだれしもが持つ力であり、人間のみならず、動植物にも宿っているのだとか。

ルウファが呪文を詠唱する間、ファリアは、皇魔の群れを相手に大立ち回りを演じていた。といつても、大したことをしていたわけではない。オーロラストームを掲げ、矢を形成し、撃ち放つ。命中の如何に関わらず、新たな矢を生成、二射三射と連射し、皇魔の接近を牽制、あるいは撃破していただけのことだ。リノンクレア率いる白聖騎士団の応援を期待してはいけない。彼女らは夜営地を防衛することを最優先に考えて行動してもらわなければならないし、その通りにするだろう。ファリアたちの姿が見えないこともわかつているだろうし、ふたりが皇魔撃退に動いていることも承知しているだろう。

ならば、ファリアたちのやるべきことはひとつである。

眼前の敵の殲滅。

それだけだ。

「武装召喚！」

ルウファが召喚術を完成させる頃には、ファリアの皇魔撃破数は二十を軽く超えており、皇魔ブリークの群れは前方十数メートルのところにも到達していた。

夜の闇を一掃するほどの閃光とともにルウファの手の内に顕現したのは、漆黒の槍である。セツナの矛とは比べるべくもないが、禍々しい形状をしていた。奇妙に抜れた穂先は悪魔の角のようだ、と

でもいうべきか。柄は当然長く、全長はルウファの身長よりも長かった。二メートル以上はあるだろう。石突からは悪魔の尾のような帯状のものが伸びており、それがどんな役割を果たすのか、術式を組み上げた本人にもわからなかった。

「ランス・オブ・デザイアとでも呼びましょうか」

漆黒の槍を構えたルウファが、そんなことをいつてきた。

第七十三話 武装繚乱（前）（後書き）

次回予告

ランス・オブ・デザイアを手にしたルウファだったが、その漆黒の槍の根底に流れる力に恐怖した。ただすべてを憎悪し、絶望へと誘おうとする力の奔流。それは、黒き矛と似て非なるものだった。

一方、セツナは、皇魔ブフマッツを相手に苦戦を強いられていた。ランカインが唾う闇の中で。

第七十四話 武装繚乱（後）

御期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8313/>

武装召喚師 黒き矛と異世界の勇者

2011年10月21日00時34分発行